

Title	真珠と16世紀ヨーロッパの対外拡張—真珠のコモディティ・チェーンからの考察—
Author(s)	山田, 篤美
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85253
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

2020 年度
大阪大学大学院文学研究科
文化形態論 西洋史学
博士学位申請論文

真珠と 16 世紀ヨーロッパの対外拡張
——真珠のコモディティ・チェーンからの考察——

学位申請者
山田篤美

目次

凡例

序章

第1節 研究対象と時代区分

第2節 先行研究

第3節 研究方法

第4節 本研究の課題と構成

第1章 アコヤ真珠貝の生態系

はじめに

第1節：アコヤ系真珠の生態系

第2節；クロチョウ真珠の生態系

小括

第2章 *aljofar* とは何か？

はじめに

第1節：*aljofar* 以前の真珠の語——ラテン語の *margarita* と *unio*

第2節：*aljofar* の語源——アラビア語の *jawhar*

第3節：16世紀の真珠の語彙

第4節：なぜ *aljofar* は *seed pearls* と解釈されたのか？

小括

第3章 南米カリブ海真珠生産圏

——スペインの先住民奴隷制水産業と黒人奴隷制水産業

はじめに

第1節：16世紀初期の「南米カリブ海真珠生産圏」

第2節：16世紀初期のヨーロッパ人と南米カリブ海の真珠

第3節：「南米カリブ海真珠生産圏」における真珠採取業の形成と発展

第4節：真珠採取業の生産者

第5節：潜水労働者

第6節：真珠の希求地、希求者

第7節：真珠の流通

小括

第4章 ペルシア湾真珠生産圏——真珠の産地の地政学的重要性

はじめに

- 第1節： 16世紀初期の「ペルシア湾真珠生産圏」
 - 第2節： ポルトガルの「ペルシア湾真珠生産圏」への進出
 - 第3節： 「ペルシア湾真珠生産圏」支配の意味
 - 第4節： 「ペルシア湾真珠生産圏」の真珠採取
 - 第5節： 真珠の希求地、希求者
 - 第6節： 真珠の流通
 - 第7節 先行研究の通説の再考
- 小括

第5章 マンナール湾真珠生産圏 ——ポルトガルの官・軍・宗教共同体による水産業

- はじめに
- 第1節： 16世紀初期の「マンナール湾真珠生産圏」
 - 第2節： ポルトガルの「マンナール湾真珠生産圏」への進出
 - 第3節： 「マンナール湾真珠生産圏」の真珠の生産
 - 第4節： 真珠の希求地、希求者
 - 第5節： 真珠の流通
- 小括

第6章 16世紀のゴア——真珠の「グローバル市場」

- はじめに
- 第1節： 世界の真珠を集める「グローバル市場」
 - 第2節： 真珠の「グローバル市場」の成立要因
 - 第3節： ゴアの真珠商たち
 - 第4節： ゴア起点の真珠の流通
- 小括

補論 16世紀末の真珠の価格

- はじめに
- 第1節 16世紀末の真珠の価格
 - 第2節 真珠の価格維持の要因

終章 比較史的考察、16世紀における真珠の意義

- はじめに
- 第1節 比較史的考察
 - 第2節 16世紀における真珠の意義

参考文献

凡例

1. 人名、地名、その他の語彙などの表記に関しては、次のとおりである。
 - (1) 人名は、原則として、その人物の母国語の読みにしたがっているが、研究分野の慣例に従った場合もある。
 - (2) ヨーロッパ、中南米、アジアの地名については、原則として『スペイン・ポルトガルを知る事典』（平凡社、以下同じ）、『ラテン・アメリカを知る事典』、『南アジアを知る事典』、『岩波イスラーム辞典』（岩波書店）及び『新詳高等地図』（帝国書院）に拠っている。ただ、内容によっては準じていないものもある。上記の事典などに記載のない地名については、一次史料の表記にとらわれず、現在日本の学術書などで用いられている表記に従った。本論文が初出と思われる地名については、統一した表記法は採用せず、慣用にしたがって表記した。
 - (3) 一次史料に見られる古い語彙の単語や言語表現は、現代の綴りに直したが、内容によっては原綴りをそのまま記した場合もある。
 - (4) *aljofar*（真珠）は、現代スペイン語では *aljófar*、現代ポルトガル語では *aljófar* である。一次史料の *aljofar* の語を示す場合は、参照したテキストの原綴りを使用した。本論文中ではすべて *aljofar* と表記した。また、*perla*（スペイン語）や *pérola*（ポルトガル語）など、ヨーロッパ諸語の一次史料で「真珠」を指す語については、原綴りをそのまま記した場合もある。
 - (5) アラビア語の転写については、『岩波イスラーム辞典』の「転写法」を参照した。インド諸語の転写については、学術書や翻訳書で用いられている表記に従った。
 - (6) ギリシア語及びラテン語は単数主格で示している。
2. 引用、挿入句の扱いは次のとおりである。
 - (1) 一次史料の直接引用で、筆者が翻訳したものについては、その旨、明示していない。
 - (2) 邦訳書から直接引用した場合は、引用文の後に翻訳者名を示している。その際、一次史料に照らして筆者が補ったり、修正した箇所は（）で示している。
 - (3) スペイン語、ポルトガル語、英語などの一次史料を直接引用または間接引用した場合、校訂者が補った箇所は、ヨーロッパ諸語の場合は[]で示している。論文の本文中で筆者が補った箇所は（）で示している。
3. 真珠の重量、大きさについては、次のとおりである。
 - (1) 日本の養殖真珠が普及する以前、真珠は個々の重量で表わされた。本論文は、天然真珠の重量と直径の換算表に基づき、真珠の重量だけでなく、その直径も記載した。換算表については、George F. Kunz and Charles H. Stevenson, *The Book of the Pearl* (1908; New York: Dover Publications, 2001), p. 328 を参照。
 - (2) 真珠の重量単位であるカラットやグレーンは、19世紀末までは国により相違があったが、今日では1カラット=0.2グラム、1グレーン=0.05グラムに統一されている。本論文はこの値を使用する。
4. 本論文の地図と図は基本的にすべて筆者が作成した。報告書などの地図を使った場合は、その旨、記載している。

序章

今日、真珠は地球上のさまざまな海域や湖沼、河川で養殖生産されている。しかし、日本人が真珠養殖に成功する以前の天然真珠時代においては、真珠が採れる海域は限られていた。とりわけ、丸く光沢のある真珠を大量に生み出すアコヤ真珠貝 (*Pinctada fucata/martensii/radiata/imbricata* sp.) の大生息地は、数えるほどしか存在しなかった。ペルシア湾、インドとスリランカの間のマナーール湾、中国南部からベトナム北部のトンキン湾、日本の大村湾などの西日本海域、それにベネズエラからコロンビアにいたる南米カリブ海である。アコヤ真珠貝の中規模の生息地としては、紅海やアフリカ東海岸沖があった¹。

1492年、クリストバル・コロンのカリブ海島嶼地方に到着し、大航海時代が幕を開けた。スペイン勢力は、新世界の多くの地域を征服していくが、16世紀初頭からスペイン勢力が次々と寄港し、征服・入植の舞台になった地域が、南米カリブ海沿岸部である。一方、インド洋海域世界では、ポルトガル勢力がインド亜大陸沿岸部やペルシア湾世界に進出していく。そうした中、ポルトガルが、早くから征服を試み、支配下に置いたのが、ホルムズやバハレーンなどのペルシア湾島嶼部であった。さらに、インド世界では、西海岸ばかりでなく、コモリン岬以東のタミルナドゥ南海岸やマナーール島にも進出した。

従来の歴史研究は、海域のもつ水産資源やその経済性について、関心を示してこなかった。とりわけ、16世紀においてその傾向が顕著である。それゆえ、16世紀を専門にする歴史研究では、どこの海域にどのような真珠貝が生息し、どのような真珠が採れたのかということは議論の対象になってこなかった。しかし、真珠の生態系の観点から、16世紀の歴史を見ると、スペイン勢力が進出した南米カリブ海、ポルトガル勢力が進出したペルシア湾、マナーール湾は、アコヤ真珠貝の生息する海域であったという共通性が確認できる。アコヤ真珠貝の大生息地、すなわちアコヤ系真珠が大量に採取できる海域は、世界に五つほどしかないが、その内、三つの海域を16世紀のヨーロッパ勢力は支配下に置くことに成功したのである。

本論文は、これら三つのアコヤ系真珠の採れる海域とその沿岸部に焦点を当てることで、なぜヨーロッパ勢力は真珠の大産地に進出していったのか、なぜこれらの産地やその真珠は彼らにとって重要であったのか、彼らはそうした海域世界からどのように富を引き出したのかという問いに答えるものである。さらに、真珠は、16世紀世界に何をもちたらし、何をどう変えたのかという究極の問いも検討する。真珠という物品はこれまで歴史学で看過されてきたので、真珠を通して16世紀史を見ることで、新世界における先住民絶滅や奴隷制問題、ポルトガルのアジア交易における役割、イエズス会のインド進出などに関するさ

¹ 地球上には日本のアコヤガイと似ている真珠貝が存在する。本論文では、そうした真珠貝を「アコヤ真珠貝」と呼ぶ。日本のアコヤガイは「アコヤガイ」と呼ぶ。これらの真珠貝をめぐる学名と名称の混乱及びその定義については、後述する。

さまざまな歴史的事象の解釈が、従来とは異なってくる可能性がある。

16世紀の真珠史を考察するために、本論文は、ふたつの手法を採る。第一に、真珠の採れる海域・沿岸部へのヨーロッパの進出経緯を明らかにすることである。第二に、コモディティ・チェーン分析による真珠の生産、流通、希求の解明である。本論文は商品の受容を「消費」ではなく「希求」と表現するが、その理由は、真珠は消費財というより威信財、退蔵財として人々によって大切に利用されてきたからである。

真珠の産地へのヨーロッパの進出経緯の考察は、従来の一国史研究への挑戦である。ひとつの海域が生み出す水産資源は、国境に関係なく、その沿岸部に暮らす住民によって享受されてきた。たとえば、マンナール湾では、インド側の住民も、スリランカ側の住民も、この海が生み出す真珠を早くから採取し、享受してきた歴史がある。しかし、一国史研究では、インドとスリランカのそれぞれの歴史に焦点が当てられてきたため、海——水産資源を生み出す海——が育んだ環マンナール湾岸世界の共通性や継続性は議論されてこなかった。本論文では、こうした問題点を認識し、湾岸世界の一カ所や一地域の真珠採取地に焦点を当てるだけでなく、湾岸世界の各地で真珠採取が実施されるという普遍性も認識し、広域に俯瞰するために、「真珠生産圏」という概念を提唱する。それは、一国史を超えた海域史の考察に必要な概念である。まず、南米カリブ海、ペルシア湾、マンナール湾という海域と沿岸部が「真珠生産圏」と呼べる生産圏を形成していたかを検討し、その上で、それぞれの「真珠生産圏」へのヨーロッパの進出経緯や動機を考察する。この考察によって、ヨーロッパ勢力は、なぜアコヤ真珠貝の大生息地に進出していったのかという問いを解明することができる。

本論文が取り入れるもうひとつの手法が、コモディティ・チェーン分析である。コモディティ・チェーン分析は、グローバルヒストリーの研究手法のひとつであり、特定のモノの生産、流通、消費面の全過程の分析から、それに関与する人々や社会・経済の全体像を解明するものである²。アコヤ真珠貝が多く生息する海域の沿岸部では、真珠採取業という水産業が成立することが多い。本論文は、コモディティ・チェーン分析の対象としてこの真珠採取業を取り上げ、16世紀の南米カリブ海、ペルシア湾、マンナール湾を主体にする「真珠生産圏」に進出したスペイン勢力やポルトガル勢力が、それぞれの真珠採取業とどう係わり、生産された真珠がどう流通し、どのように最終希求者（エンドユーザー）に渡ったのかを、生産、流通、希求面から考察する。

生産面では、真珠採取業の生産者と労働者、および海域支配に焦点を当てる。「真珠生産

² Steven Topik et al., *From Silver to Cocaine: Latin American Commodity Chains and the Building of the World Economy, 1500-2000* (Durham: Duke University Press, 2006); 秋田茂編『アジアからみたグローバルヒストリー——「長期の18世紀」から「東アジアの経済的再興」へ』（ミネルヴァ書房、2013年）、9頁；George Bryan Souza, “Hinterlands, Commodity Chains, and Circuits in Early Modern Asian History: Sugar in Qing China and Tokugawa Japan,” in *Hinterlands and Commodities: Place, Space, Time and the Political Economic Development of Asia over the Long Eighteenth Century*, ed. Tsukasa Mizushima et al. (Leiden: Brill, 2015), pp. 18-20.

圏」に進出したスペイン人やポルトガル人は、彼ら自身が真珠採取業に乗り出し、その事業者になったのだろうか。もしそうであるなら、16世紀の歴史にヨーロッパ人による水産業の実施という新たなテーマを加えることになる。

労働者に関しては、真珠採取業は潜水という特殊な技能を有する労働者を必要としたことを、まず認識する必要がある。アコヤ真珠貝は、アサリやハマグリのように砂浜に生息する貝ではなく、深い海の底で生息している貝である。したがって、真珠採りの潜水とは、数メートルから十数メートルの海底まで急降下し、岩礁に張り付いている真珠貝をはがして、集めていくという海の中での作業である。こうした潜水は死と隣り合わせの仕事であり、訓練された人のみが行うことができた。本論文は、この特殊技能の潜水労働者を、スペイン人やポルトガル人がどのように徴発したのかを考察する。潜水労働者の徴発の問題は、先住民絶滅、奴隷制の発展、イエズス会のアジア進出に関する従来の通説に修正を迫ると考えられる。

生産面では真珠の採れる海域の漁業権の在り方の検討も重要である。南米カリブ海、ペルシア湾、マンナール湾の海底にはアコヤ真珠貝が生息しているが、その分布は均質ではない。真珠貝が集中している海底もあれば、貝がほとんど見当たらない海底もある。沿岸部の人々は豊饒な真珠漁場で採取したいため、その漁場は支配権争いの対象になった。真珠の豊饒な漁場を誰がどう支配したかという問題は、真珠の生産面に関する重要なテーマであり、海上交通ばかりで語られてきた従来の海域史に、水産業のための海域支配という視点を加えることになる。

真珠のコモディティ・チェーン分析でもっとも考察が難しいのが、流通である。真珠は高価で小さな物品のため、密輸、隠匿が当たり前であった。公式のルートだけを見ても全体像は解明できない。一方、真珠の希求については、把握はそれほど難しくない。一次史料の記事や絵画などから真珠の受容は明らかになる。16世紀の真珠ジュエリーが実際に残っている場合もある。一次史料などを手掛かりに希求者や希求地を特定していけば、流通の方向が明らかになる。それゆえ、本論文では、希求、流通の順序で考察する。

真珠の希求に関しては、ヨーロッパ人が16世紀の重要な希求者として登場するが、アジア世界における真珠の旺盛な需要も忘れてはならない。実際、アジア世界では、宗教や人種に係わりなく、さまざまな諸国家、諸都市の人々が真珠を欲していた。そうした希求者を検討していくことで、真珠という商品の想像以上の国際性及びグローバルな流通を明らかにすることができる。さらに、本論文は、ヨーロッパが、アジアで多くの需要のある真珠を得たことの歴史的意味を考える。16世紀史の研究には、「ポルトガルは、南米の銀を使うまで、アジア交易に参加できなかった」という名高い言説がある³。アジア交易に真珠を加えると、こうした言説の妥当性は維持されるかどうかを検討する。

³ I. ウォーラーステイン (川北稔訳) 『近代世界システム 1——農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立』(名古屋大学出版会、2013年、原著1974年)、371~378頁; M. N. Pearson, *The Portuguese in India* (Cambridge: Cambridge University Press, 1987), pp. 40-9.

流通面の考察では、本論文は「ハブ・アンド・スポーク交易」という概念を提唱する。この概念の特徴は、ひとつの真珠採取地をハブとするのではなく、「真珠生産圏」という環湾岸世界をハブとして、真珠の希求者、希求地に届く方向やその関係性を検討することである。この考察で見えてくるのは、真珠の流通ネットワークであり、その流通を担う国際色豊かな商人たちの存在である。さらに、本論文では、ゴアというポルトガル領インドの真珠市場に着目することで、16世紀には、アジアとヨーロッパだけでなく、新世界と接続するようなグローバル市場が形成されていたかどうかを考察する。

このように、真珠のコモディティ・チェーン分析は、生産面、希求面、流通面の考察で扱う内容が変わるため、その考察対象は、生産者、労働者、海域支配、希求者、希求地、商人など、多岐にわたる。それゆえ、コモディティ・チェーン分析から、真珠が16世紀史に与えた多様な影響を解明することが可能となる。以上のことをまとめると、本論文は、これまで看過されてきた真珠が、16世紀世界にどのような政治的・経済的・社会的影響を与え、それがどのようにグローバル化と係わったのかを解明するものである。

第1節 研究対象と時代区分

本節では、本論文の考察対象となる「真珠」について定義し、真珠と歴史学との係わりを概観する。その後、16世紀のアコヤ真珠貝の大産地を考察対象とする理由を説明する。

1.1 真珠の定義

本論文では、「真珠」は、生きた「真珠貝」(*pearl oyster*)の体内で生成される生体物で、かつその概観の構成物質が「真珠層」(*nacre*)と等質のものと定義する。「真珠層」とは、炭酸カルシウムの結晶であるアラゴナイト(*aragonite*)とタンパク質の一種であるコンキオリン(*conchiolin*)が交互に重なった層状構造を成しているもので、真珠光沢を持つ。つまり、「真珠貝」は貝殻内面に「真珠層」を持つ貝のことであり、本論文でいう「真珠」とは真珠貝から出た生体物のことである⁴。ハマグリやアサリなどは、貝殻内面に真珠層をもたないため、真珠貝ではなく、これらの貝が生み出す生体物は「真珠」とは見なさない。

真珠の生成を司っているのが、真珠貝の外套膜外側上皮細胞である。この細胞は、真珠質を分泌して貝殻内面の真珠層を形成する機能をもっている。外套膜外側上皮細胞の一部が何らかの理由で外套膜の結合組織内や貝の体内に入りこむと、その場所で細胞分裂して、袋状になることがある。外套膜外側上皮細胞がその袋状の状態中で中に向かって真珠質を分泌し続けると、真珠質の塊は球形となる。これが専門的には、「袋真珠」(*cyst pearl*)と呼ばれる典型的かつ理想的な真珠であり、色、光沢がよい丸い真珠である⁵。以上が、真珠の生成過程であるが、今日においても、十分に認識されていないのが現状である。

⁴ 和田浩爾『真珠の科学——真珠のできる仕組みと見分け方』(真珠新聞社、1999年)、13~25頁。

⁵ 和田、29~32頁。

実際、一般の新聞記事や雑誌記事ばかりでなく、真珠史研究においても、真珠は寄生虫などの刺激や防御反応で形成されるという誤った解説が少なくない。たまたま寄生虫が真珠貝に侵入すると、その際に外套膜上皮細胞を破り、寄生虫がその細胞の一部分を貝の体内に持ち込むことによって真珠ができることになる。防御反応で真珠ができる訳ではない。

真珠貝の体内では、「袋真珠」だけでなく、微細な真珠も形成される。そうした真珠は、外套膜外側上皮細胞が袋状にならないまま生み出したもので、日本では「ケシ真珠」、西洋では *seed pearl* と呼ばれている。この場合、形や質、どの場所にできたかはさほど問題にはならない。ケシ真珠は、文字通り、ケシ粒ほどの真珠であり、*seed pearl* は植物の種ほどの真珠である。これより小さい真珠としては、日本では「砂ゲシ真珠」、西洋では *dust pearl* と呼ばれる真珠がある。砂や埃のように小さな真珠である。

真珠貝は地球上に広く分布している。海産真珠貝もあれば、湖沼や河川に生息する淡水産真珠貝もある。二枚貝の真珠貝もあれば、巻貝の真珠貝もある。生息地も熱帯から寒帯にまで及んでいる。その数はあまりに多いため、今日でもその全体数は把握されていない。このように、真珠貝は多種多様の種類が存在するが、多くの真珠貝は、真珠を生み出す確率が低い上、できた真珠が鑑賞に堪えないものだったり、商品価値のないものが多く、ほとんど利用されてこなかった⁶。

こうした中、歴史的に見て、光沢のある球形真珠や大粒真珠など、人類が珍重する真珠を、生み出してきた真珠貝が幾つか存在する。海産真珠貝では、ウグイスガイ科 (*Family pteriidae*) ピンクターダ属 (*Genus pinctada*) に属する貝が、代表的な真珠貝である。アコヤ真珠貝の他、クロチョウガイ (*Pinctada margaritifera*)、パナマクロチョウガイ (*Pinctada mazatlanica*)、シロチョウガイ (*Pinctada maxima*) などがある。ピンクターダ属の真珠貝は、今日の真珠養殖業を支えている貝であり、真珠貝を代表する貝である。本論文が扱うのは、このピンクターダ属のアコヤ真珠貝の真珠である。淡水産真珠貝としては、カワシンジュガイ科 (*Family margaritiferidae*) の真珠貝及びイシガイ科 (*Family unionidae*) の真珠貝がある。

次に真珠を文化史的な側面から考えてみたい。真珠は、貝の中で見つかった時から、光を反射して強く輝いている物品である。ダイヤモンドなどの鉱物系の宝石は、カットや研磨など、人の手を加えてようやく輝きを増し始めるが、真珠は自然のままで輝いている。それゆえ、真珠はすでに 7000 年前からジュエリーや宝石として使用されてきた⁷。

実際、古代オリエント世界では真珠は金と交換可能な高価な商品であり、そのことを古代ギリシア人が報告している。アレクサンドロスの東征に参加したアンドロステネスは、ペルシアなどでは真珠 (*margaritis*) はその重さの黄金と交換できると述べ、チャンドラダ

⁶ 白井祥平『真珠・真珠貝世界図鑑』(海洋企画、1994年)、7頁。

⁷ ペルシア湾のクウェートでは7000年前の遺跡から穿孔された直径5ミリほどの真珠が発見されている。Robert Carter, *Sea of Pearls: Seven Thousand Years of the Industry that Shaped the Gulf*(London: Arabian, 2012), p. 3. 古代・中世の真珠の珍重については、山田篤美『真珠の世界史—富と野望の五千年』(中央公論新社、2013年)、47~71頁を参照。

プタの宮廷に滞在したギリシア人使節のメガステネスは、インドでは真珠 (*margaritēs*) は純金にしてその重さの三倍の値打ちがあると語っている⁸。『エリュトラ海案内記』も、インド洋海域世界における商品としての真珠 (*margaritēs*) に言及している⁹。

古代ローマ時代の人物では、プリニウスが真珠を絶賛したことで知られている。彼は「あらゆる高価な物の中で、第一の地位、最上の位が、真珠 (*margarita*) によって保持されている」と述べ、真珠は主としてインド洋世界からもたらされることも伝えている¹⁰。

このように、オリエント世界では、真珠は金で購う物品であった。古代ギリシア人・ローマ人は、オリエント世界と係わりをもった時からそのことを理解し、高価なオリエント世界の真珠に憧れることになったのである。

1.2 看過されてきた物品

真珠は貴重な換金商品であったにもかかわらず、歴史学のほとんどの分野で看過されることになった。近年、真珠に対する関心が高まってきているが、一般的に言って、考古学、東洋史、西洋史、南アジア史、インド洋海域史、ラテンアメリカ史、古代日本史、日本産業史など、多くの歴史学の領域で真珠は顧みられてこなかった。近代世界システム論、グローバルヒストリーの研究領域でも同様である。真珠は、海人や潜水夫などを論じる民俗学の分野でも欠落しているテーマである。

真珠の看過の事例は余りに多いため、個々に言及することはできない。ここでは、16世紀の歴史学における傾向を指摘しておく。E. ウィリアムズ、N. ステーンスガード、I. ウォーラスティン、K. N. チョードリー、A. ダス・グプタ、P. D. カーティン、P. ピアソン、J. ダイヤモンド、A. G. フランクなど、カリブ海域史、インド洋海域史、16世紀のアジア・ヨーロッパ交易、近代世界システム論やグローバルヒストリー、グローバル経済史など、今日の広域俯瞰の歴史学を牽引してきた著名な研究者たちに、真珠看過の顕著な傾向が見られる¹¹。ウィリアムズは、16世紀以降のカリブ海域史を論じているが、カリブ海

⁸ アンドロステネスの記述は、アテナイオスの *Deipnosophists* で引用されている。Athenaeus, *The Deipnosophists, with an English Translation*, trans. Charles Burton Gulick (1927-41; Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1957-67), vol. 1, pp. 400-1; アテナイオス (柳沼重剛訳) 『食卓の賢人たち (1)』 (京都大学学術出版会、1997年)、322頁。メガステネスの記述は、アッリアノスの『インド誌』で引用されている。フラウィオス・アッリアノス (大牟田章訳注) 『アレクサンドロス東征記およびインド誌 (本文篇)』 (東海大学出版会、1996年)、944~945頁。*margaritis* は *margaritēs* の別形。本論文では、ギリシア語及びラテン語 (後述) は単数主格で示している。

⁹ 薮勇造訳『エリュトラ海案内記 (2)』 (平凡社、2016年)、28頁 (第56節)、146頁 (注16)。『エリュトラ海案内記』における交易品としての真珠の考察は、R. A. Donkin, *Beyond Price: Pearls and Pearl-Fishing* (Philadelphia: American Philosophical Society, 1998), pp. 88-9 を参照。

¹⁰ Plinius [Pliny], *Natural History, with an English Translation*, trans. H. Rackham et al. (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1950-63), vol. 3, pp. 234-5 (9. 54).

¹¹ E. ウィリアムズ (川北稔訳) 『コロンブスからカストロまで——カリブ海域史、1492-1969』全2巻 (岩波書店、2000年、原著1970年); Niels Steensgaard, *Carracks*,

がヨーロッパにもたらした富として、金と砂糖しか見ていない。ウォーラーステインの近代世界システム論では、その主要な関心のひとつは、奢侈品ではなく、ステイプルを生み出す農業生産であり、必然的に真珠は看過されている。チョードリー、ダス・グプタ、カーティンらは、16世紀のインド洋海域世界へのポルトガルの参入を扱いながら、コショウや他のスパイスだけで議論している¹²。これまでのインド洋海域史研究を総括した最新のJ. ゴマンズの論考でも、真珠に関する叙述は見られない¹³。

日本でも同様に、真珠は、多くの研究分野で抜け落ちてきた。16世紀のポルトガル人トメ・ピレスのインド洋世界の地誌 *Suma Oriental* 『オリエント概要』（邦訳名：『東方諸国記』）の翻訳者である生田滋は、その「解説」で15世紀末のアジアの広大な貿易圏について説明し、「この貿易圏のもっとも重要な商品は、マラバル、およびスマトラ産の胡椒、香料諸島産の丁子、肉荳蔻、荳蔻花などの香料、インドの各地で生産される各種の綿織物、中国産の陶器などであった」と述べている¹⁴。ピレスの地誌は、真珠に関する記述が多く、16世紀初期のアジア世界の真珠の動きを知る上で重要な一次史料であるが、生田の解説では、真珠への言及がなく、真珠が看過されているのがわかる。その後の16世紀のインド洋海域史研究でも、多くの場合、生田と同じスタンスである。長島弘の論文「インド洋とインド商人」は、ホルムズやセイロン島なども含めた環インド洋世界の諸地域の貿易と交流を概観しているが、真珠は論述されていない¹⁵。日本の民俗学の分野では、海人の研究が盛んであるが、こうした研究においても海人の潜水漁撈と真珠の関係は等閑視されている¹⁶。

Caravans and Companies: The Structural Crisis in the European-Asian Trade in the Early 17th Century (Lund: Studentlitteratur, 1973); ウォーラーステイン（川北訳）『近代世界システム I』; K. N. Chaudhuri, “European Trade with India,” in *The Cambridge Economic History of India*, ed. T. Raychaudhuri and Irfan Habib (Cambridge: Cambridge University Press, 1982), vol. 1, pp. 382-407; Ashin Das Gupta, “Indian Merchants and the Trade in the Indian Ocean,” in *The Cambridge Economic History of India*, vol. 1, pp. 407-33; フィリップ・D・カーティン（田村愛理他訳）『異文化間交易の世界史』（NTT 出版、2002年、原著1984年）; Pearson, *The Portuguese in India*; ジャレド・ダイヤモンド（倉骨彰訳）『銃・病原菌・鉄』全2巻（草思社、2012年（初版2000年）、原著1997年）; A. G. フランク（山下範久訳）『リオリエント』（藤原書店、2000年、原著1998年）。

¹² ウィリアムズ（川北訳）『コロンブスからカストロまで（1）』、14~22頁；ウォーラーステイン（川北訳）『近代世界システム I』、32頁；Chaudhuri, “European Trade with India,” pp. 382-6; Das Gupta, “Indian Merchants and the Trade in the Indian Ocean,” pp. 407-33; カーティン（田村他訳）『異文化間交易の世界史』、195~213頁。

¹³ Jos Gommans, “Continuity and Change in the Indian Ocean Basin,” in *The Cambridge World History: The Construction of a Global World, 1400-1800 CE*, ed. Jerry H. Bentley et al. (Cambridge: Cambridge University Press, 2015), vol. 4, pp. 182-209.

¹⁴ トメ・ピレス（生田滋他訳）『東方諸国記』（岩波書店、1966年）「解説」、11頁。

¹⁵ 長島弘「インド洋とインド商人」『世界歴史14 イスラーム・環インド洋世界』（岩波書店、2000年）、141~165頁。交易品としての真珠に言及している研究としては、深見純生「宋元代の海域東南アジア」桃木至朗編『海域アジア史研究入門』（岩波書店、2008年）、31頁を参照。

¹⁶ 田辺悟『日本蜃人伝説の研究』（法政大学出版会、1990年）や秋道智彌編『海人の世界』

このように歴史の分野で真珠が看過されてきたのは、主に三つの理由がある。

第一に、真珠という商品の特殊性である。真珠は、高価で小さな物品であり、需要に比べて圧倒的に供給量が少ない商品である。密輸、隠匿、過少申告が流通形態の主流を成し、真珠の売買では、供給者が常に優位で、委託取引や相対取引となる場合も少なくない。オリエント世界における真珠や宝石の相対取引では、取引税や関税を避けるため、売り手も買い手も一言も発せず、特定の指を押すことで値段の交渉を行う「サイレント・バーゲニング」という取引が普通であった。こうした秘密裏の取引の決済は、金、銀による現金決済である。真珠の取引は、売り手も買い手も黙したまま、莫大な金銀が密かに動くインフォーマルな取引であった¹⁷。こうした取引では、領収書は残らない。つまり、真珠取引は、アーカイヴに残された史料研究だけではその実態をつかむことが難しく、アーカイヴ・リサーチを重視する歴史学では、真珠は抜け落ちることになった。

第二に、ウィリアムズやウォーラステイン、カーティンの事例に見られるように、16世紀の研究者の関心は、農業や鉱業、コショウなどの取引に置かれていて、水産業及び水産業の場としての海域という視点がなかったからである。

第三の理由としては、20世紀初めに日本人が確立した真珠養殖業の成功により、真珠の価値、大きさ、色、形、生産方法、産地などが大きく変わったため、今日の研究者は、天然真珠時代の真珠の貴重さや、真珠の大きさ、産地などの真珠の生態系にもはや目を向けなくなったことが挙げられる¹⁸。実際、養殖真珠の大量生産は、天然真珠の価値と価格を暴落させた。そのため、真珠は高価で希少な交易品だったことが忘れられてしまった。また、真珠養殖業は、真珠のサイズを大きくした。今日では真珠は直径で記されるが、天然真珠時代、真珠は小さかったので、カラットやグレーン、分や匁などの重量で、しかも、しばしば合算されて示された。重量1カラット(0.2グラム)の真珠は直径5.23ミリであり、重量1グレーン(0.05グラム)の真珠は直径3.32ミリである¹⁹。真珠をカラットやグレーン単位の重量で聞き、その真珠の大きさや価値を理解できる歴史研究者はどれくらいいる

(同文館、1998年)などの民俗学の分野でも、真珠の看過が顕著である。

¹⁷ 「サイレント・バーゲニング」は、インド洋海域世界ではさまざまな商品の取引で実施されていたが、真珠や宝石の取引でも顕著な取引形態である。日本では「袋競り」と呼ばれる。ピラールをはじめ、16世紀、17世紀の多くのヨーロッパ人が「サイレント・バーゲニング」について語っている。20世紀初めのバハレーン国の顧問官だったC. D. ベルグレイヴも真珠取引の「サイレント・バーゲニング」に言及している。François Pyrard, *The Voyage of Francois Pyrard of Laval, to the East Indies, the Maldives, the Moluccas and Brazil*, trans. Albert Gray (1888; New York: Cambridge University Press, 2010), vol. 2, pp. 178-9, note 1; チャールズ D. ベルグレイヴ(二海志摩訳)『ペルシア湾の真珠—近代バレーンの人と文化』(雄山閣、2006年、原著1960年)、64頁。

¹⁸ 真珠養殖業の成功が、真珠の大きさや形状、その価値をどのように変えたかは、山田『真珠の世界史』151~241頁を参照。

¹⁹ 真珠の重量と大きさの換算については、George Frederick Kunz and Charles Hugh Stevenson, *The Book of the Pearl: Its History, Art, Science and Industry* (1908; New York: Dover Publications, 1993), p. 328を参照。

だろうか。

真珠養殖業は、垂下式養殖の発明により、真珠生産の海域を広げることにも成功した。真珠貝が生息していなかったり、海が深すぎて真珠貝が採取されてこなかった海域でも真珠が採れるようになったのである。その結果、真珠はどここの海でも採れると見なされるようになり、真珠が特定の限られた海域が生み出す希少な水産物であり、重要な商品であったことを、多くの研究は見過ごすことになった。歴史学研究における真珠の看過の理由のひとつは、今日の真珠養殖業の技術の進展にあるといえる。

したがって、本研究では、今日の養殖真珠の世界から離れ、16世紀の天然真珠世界に目を向ける。海域に関しては、どの海域にどのような真珠貝が生息し、どのような真珠が採れたのかという視点を持つことによって、真珠や真珠の産地が16世紀の政治、経済、社会に与えた影響を明確にできると考える。

1.3 グローバルヒストリーの求める課題

本論文の主要な関心は、16世紀というヒト、モノの移動がグローバルに展開した時期に、真珠という物品の歴史的意義を解明することである。グローバルヒストリー研究の課題とは、秋田茂や水島司などによると、(1) 扱う時間軸が長く、歴史的動向が議論されること、(2) 従来の一国史の枠組みを越えて、大陸規模や「海域アジア世界」のような広域世界を考察対象とすること、(3) ヨーロッパ世界の歴史を相対化し、ヨーロッパ中心史観に代わる見方を提示すること、(4) 世界の異なる諸地域の相互の関係性や影響を重視し、「関係史的」視点をもたらすこと、(5) 奴隷貿易、移民、商人の通用ネットワークなどの地域横断的な問題、あるいは、疾病・植生・生態系・自然環境の変化など、これまで軽視されるか、欠落してきた多様なテーマを扱うことが挙げられる。これらの研究のキイとなる概念は「比較」と「関係性」である²⁰。

こうしたことを念頭に真珠という物品の特徴を考えると、真珠——とりわけ海産真珠——の研究は、グローバルヒストリーが求めている研究課題と合致する。真珠は、海底で採取されるため、海の状態や貝の生育、漁場の分布など、海域や生態系、自然環境と密接に係わっている。真珠採取業は、その海を囲む沿岸部で広く実施されるため、一国史を超える広域俯瞰及び海域俯瞰が必要である。潜水労働力の徴発の検討は、移民や奴隷貿易とも係わりが深い。本論文は、南米カリブ海、ペルシア湾、マンナール湾という三つのアコヤ系真珠の産地に焦点を当て、それらの産地のそれぞれの真珠のコモディティ・チェーンの生産、希求、流通の側面を解明し、比較と関係性の議論も行うが、まさにグローバルヒストリーの研究課題に応えるものである。

²⁰ 秋田茂「グローバルヒストリーの挑戦と西洋史研究」『パブリックヒストリー』第5号(2008年)、35頁；秋田茂『アジアからみたグローバルヒストリー』1~2頁；秋田茂・桃木至朗編『グローバルヒストリーと帝国』(大阪大学出版会、2013年)、10~11頁；水島司『グローバル・ヒストリー入門』(山川出版社、2010年)、2~4頁。

1.4 16世紀のアコヤ系真珠の大産地

では、さまざまな真珠がある中で、なぜアコヤ真珠貝の大産地を取り上げるのか、なぜ16世紀なのかを述べておきたい。まず、アコヤ真珠貝の生態的特徴と学名問題について解説し、その後、本論文が16世紀のアコヤ真珠貝の産地を研究対象にする理由を説明する。

これから見ていくように、アコヤ真珠貝は真珠採取業を成立させてきた真珠貝であるが、その大生息地は、世界に数えるほどしか存在しなかった。先述したように、大生息地は、ペルシア湾、マンナール湾、トンキン湾の海南島や合浦の海域、大村湾などの西日本海域、それにベネズエラやコロンビアの南米カリブ海沖である²¹。これらの大生息地では、歴史的に見て、数百万、数千万の真珠貝が生息していたことが知られている。アコヤ真珠貝は生育条件が複雑なため、大繁殖できる条件を満たす海域は限られていたのである。このため、別の海域へのアコヤ真珠貝の移植は成功しなかった。明治維新後の日本では英虞湾のアコヤガイを広島の海域に移す試みがなされたが、奏功せずに終わっている²²。グローバルヒストリーでは、16世紀に旧世界と新世界の間で植物や動物、病原菌までも激しく移動した事象を「コロンブスの交換」という言葉で表現している²³。しかし、生物によっては近海の海域への移植もままならない生物も存在するのである。こうしたアコヤ真珠貝の特性によって、ペルシア湾やマンナール湾、南米カリブ海沖などの、アコヤ真珠貝が大量に生息する海域は、世界的に稀な海域となってきたのである²⁴。

それぞれの海域に生息するアコヤ真珠貝は、かつては固有種と見なされ、それぞれ別個の学名や名称が与えられていた。ただ、貝の形状が似ていることから、早くから混乱が生じており、学名の変遷は激しかった。現在でも学者によって主張が異なり、明確には統一されていない。各海域のアコヤ真珠貝について、今日使われている主要な学名は次のとおりである²⁵。

²¹ ベトナムのハロンに面したトンキン湾海域もアコヤ系真珠の産地であったと見なされているが、本論文はトンキン湾の真珠の採れる海域としては、海南島と合浦を考える。

²² 山本由方「真珠介移植試験報告第一回試験」及び鏑木余三男「真珠介移植試験報告第二回試験」『水産調査報告』第1巻（農商務省農務局、1893年）、53~76頁、77~80頁。

²³ Alfred W. Crosby, *The Columbian Exchange: Biological and Cultural Consequences of 1492* (Westport: Greenwood Press, 1972).

²⁴ アコヤ真珠貝の稚貝は浮遊性のため、20万程度やそれ以下の数のアコヤ真珠貝が生息する小規模の海域は、インド洋海域世界の各地に存在する。ただ、こうした海域では真珠貝が少なかったため、真珠採取業は発展してこなかった。アコヤ真珠貝の分布については、白井『真珠・真珠貝世界図鑑』28~29頁を参照。

²⁵ アコヤガイの学名については、次の文献を参照。正岡哲治・小林敬典「アコヤガイ属の系統および適応放散過程の推定」猿渡敏郎編『泳ぐDNA』（東海大学出版会、2007年）；Katsuhiko T. Wada and Ilya Tëmkin, “Taxonomy and Phylogeny,” in *The Pearl Oyster*, ed. Paul C. Southgate and John S. Lucas (Amsterdam, 2008), pp. 37-75；奥谷喬司・和田克彦「アコヤガイの学名——現状と論評」『ちりぼたん』（日本貝類学会研究連絡誌）第40巻2号（2010年3月）、90~92頁。*Pinctada vulgaris* (Shumacher 1817) という学名は、かつてはインド洋種のアコヤ真珠貝に使われたが、今日ではその使用は推奨されていない（奥谷・和田「アコヤガイの学名」、91~92頁）。しかし、インド洋海域史などの研究書で

- | | | |
|---|---------|---|
| 1 | ペルシア湾 | <i>Pinctada radiata</i> (Leach 1814) |
| 2 | マンナール湾 | <i>Pinctada radiata</i> または <i>Pinctada fucata</i> (Gould 1850) |
| 3 | トンキン湾 | <i>Pinctada fucata</i> |
| 4 | 西日本沖 | <i>Pinctada martensii</i> (Dunker 1872) から <i>Pinctada fucata</i> へ |
| 5 | 南米カリブ海沖 | <i>Pinctada imbricata</i> (Röding 1798) |

このように、異なる学名が使われてきたが、近年の DNA 解析による分子系統分類学の進歩によって、多くの水産学者が、これらの真珠貝はほぼ同種ではないかと考えるようになってきた。ワダ・T・カツヒコ（和田克彦）とイリヤ・テムキンは、アコヤガイに似た真珠貝が普遍種であるとの認識に基づき、アコヤガイ及びその類似の真珠貝の学名を *Pinctada fucata/martensii/radiata/imbricata species complex* として提唱した²⁶。研究者によっては、個々の真珠貝の差異を重視する人たちもいるが、本論文では和田とテムキンに基づき、アコヤガイとその類似の真珠貝をほぼ同種であると仮定して議論を進めることにする。

なお、*Pinctada fucata/martensii/radiata/imbricata sp.* の英語の名称や和名に関しても、学名同様、正式には定まっていない。ペルシア湾やマンナール湾の真珠貝は英語では *Ceylon Pearl Oyster* と呼ばれるが、この名称をペルシア湾の真珠貝に当てはめるのは不適切である。トンキン湾の *Pinctada fucata* は「ベニコチョウガイ」と呼ばれてきたが、日本のアコヤガイも *Pinctada fucata* であり、和名が異なることになる。こうした状況に鑑み、和田とテムキンは、*Pinctada fucata/martensii/radiata/imbricata sp.* に *Akoya Pearl Oyster* の名称を使うことを提唱している²⁷。世界の真珠養殖にアコヤガイが多大な貢献をしたこと、これらの真珠貝の養殖真珠は、世界の真珠市場で *Akoya pearl* と呼ばれていることなどを根拠とした提唱である。本論文はこうした提唱に基づき、*Pinctada fucata/martensii/radiata/imbricata sp.* を「アコヤ真珠貝」と呼ぶことを、ここで確認しておきたい。「アコヤ真珠貝」の養殖真珠は一般に「アコヤパール」と呼ばれているが、本論文では、天然の「アコヤ真珠貝」の真珠を「アコヤ系真珠」と呼ぶ。なお、日本の「アコヤ真珠貝」は「アコヤガイ」、その真珠は「アコヤ真珠」と呼ぶ。

アコヤ真珠貝は、天然真珠の世界において、真珠を生み出す割合の高さと真珠の質の高さで、真珠貝を代表する貝であった。アコヤ系真珠の大きさは、だいたい直径 3 ミリから 6 ミリ前後が標準である。真珠の出現率と大きさについては、第 1 章で詳しく検討する。アコヤ系真珠の色には、白色系と黄色系がある。球形の真珠が多く、その光沢の強さは他の真珠の追随を許さなかった。光の干渉という光学的現象が出やすい真珠であり、その表面にはピンク色、緑色、黄緑色など、虹色の色彩が浮かび上がる。つまり、虹色に輝く光沢

はいまだに使用されている場合があり、注意が必要である。

²⁶ Wada and Tëmkin, “Taxonomy and Phylogeny,” pp. 37-75.

²⁷ Wada and Tëmkin, p. 66.

のある球形の真珠を、もっとも高い割合で生み出してきたのが、アコヤ真珠貝であった²⁸。

20世紀初め、日本で完璧に丸い真珠を生み出す養殖技術が発明された要因のひとつは、西日本の海域が真珠の出現率の高いアコヤ真珠貝（アコヤガイ）に恵まれていたためであった。天然真珠時代においても、真珠の出現率の高さによってアコヤ真珠貝が数多く生息している海域では早くから真珠採取業が発展し、その真珠は交易品、輸出品となってきた。つまり、多種多様の真珠がある中、アコヤ真珠貝の真珠は、もっとも広く流通した「商品」だったのである。それゆえ、コモディティ・チェーンで分析するのに適した真珠である。

天然真珠時代、アコヤ系真珠とともに人々に珍重され、アコヤ系真珠の特徴と対照的な特徴を持つ真珠が、クロチョウガイが生み出すクロチョウ真珠とパナマクロチョウガイが生み出すパナマクロチョウ真珠だった。どちらの真珠貝もピンクターダ属に属し、殻高10センチから20センチ前後の大型の貝である。クロチョウ真珠とパナマクロチョウ真珠は、その特徴が似ていることから、本論文は、ふたつをまとめて「クロチョウ真珠」と呼ぶこともある。こうしたクロチョウ真珠は、黒色、鉛色、白色などがあり、小粒の真珠もあれば、大粒の円形真珠、ドロップ型真珠、形のゆがんだバロック真珠などもある。一般に真珠が球形であるのは、直径15.5ミリぐらいまでであり、それを超えると球形は崩れ、ゆがみが生じる傾向がある²⁹。したがって、クロチョウガイのドロップ型真珠やバロック真珠などは、かなりの大粒真珠となる。事実、数センチもあるような歴史的に名高い真珠は、クロチョウ真珠であることが少なくない。そうした大粒真珠は滅多に採れないが、たまに採れると、天文学的価格となり、土地の支配者や中央集権国家の支配者への献上品となった。ただ、価値あるクロチョウ真珠の出現率は低いため、産業的には貝殻の方に商品価値が見出され、真珠採取よりも真珠貝採取が行われた。

大粒の海産真珠には、クロチョウ真珠以外にシロチョウガイの真珠がある。シロチョウガイは殻高30センチに達する世界最大の真珠貝である。その真珠も大きくなる傾向があるが、真珠は滅多に採れなかった。仮に採れたとしても、真珠が大きくなりすぎて、貝殻内面に付着した貝付真珠となる場合が多い³⁰。天然真珠時代、シロチョウ真珠は採れる量の少なさにより、アコヤ系真珠やクロチョウ真珠ほど利用されてこなかった。シロチョウガイは真珠よりもその貝殻が利用されてきた真珠貝であった。

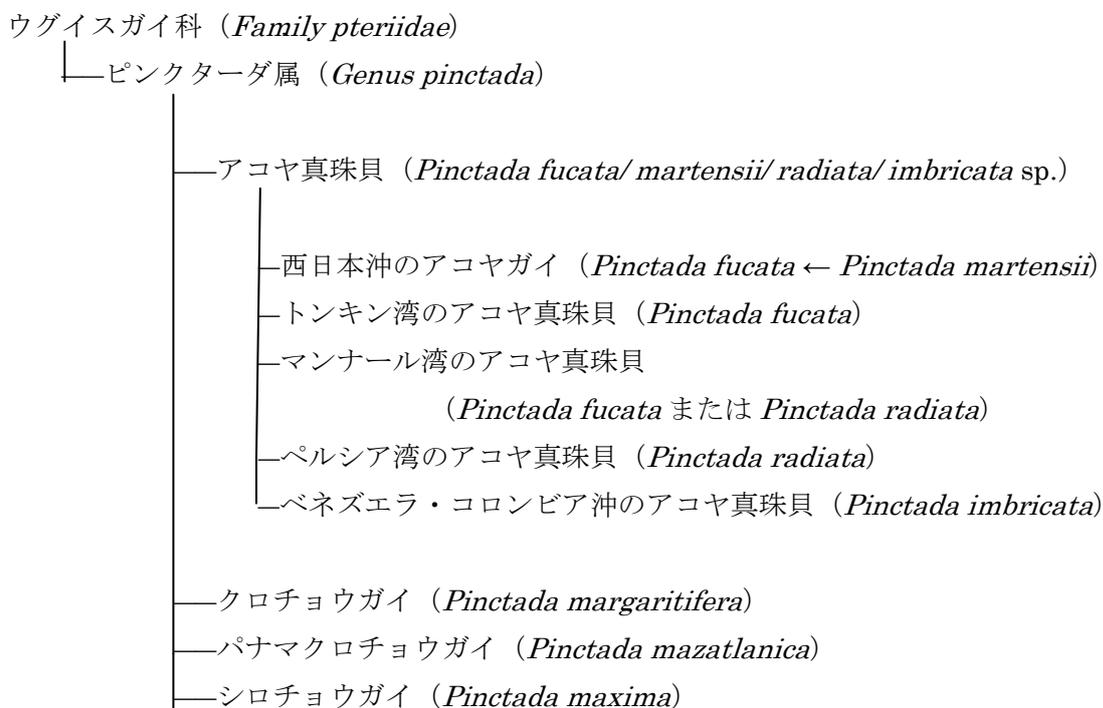
つまり、天然真珠時代、それほど大粒ではないが、かなりの量が採取され、「商品」、「交易品」として流通するアコヤ系真珠と、真珠の産出は稀であるが、一旦大粒の真珠が見つかり、直接、土地の支配者や国王に献上されるクロチョウ真珠が存在したのである。アコヤ系真珠とクロチョウ真珠は、生産量も利用法も対照的な真珠であった。

²⁸ 天然真珠の特徴については、和田『真珠の科学』、26~28頁を参照。真珠の反射干渉色と透過干渉色の光学的現象については、小松博監修『真珠事典——真珠、その知られざる小宇宙』（織研新聞社、2015年）50~62頁を参照。天然真珠時代のアコヤ系真珠の大きさ、真珠が生み出される割合については、第1章で検討する。

²⁹ Kunz and Stevenson, *The Book of the Pearl*, p. 56.

³⁰ 白井『真珠・真珠貝世界図鑑』、25頁。

表1 ピンクターダ属の真珠貝分類表



本論文で、アコヤ系真珠を考察対象にするのは、この真珠の高い出現率によって「商品」となり、商人の流通網に乗る真珠だからである。また、鉞物は掘り尽くすと枯渇するが、真珠採取は、不漁の年もあるが、長期的に見ると持続可能な漁業である。ただ、その真珠を生み出す海域は、数えるほどしか存在しなかった。近年の水産学的知見から明らかになったように、ペルシア湾、マンナール湾、トンキン湾、西日本沖、南米カリブ海沖などの海域に、同じアコヤ真珠貝がいるという事実は、興味深い事象である。これらの海域世界では潜水漁撈文化の発展と真珠採取業の形成など、共通性が見られるため、個々の海域を比較し、その関係性を考察する上で適している。

ではなぜ、16世紀の南米カリブ海域、ペルシア湾、マンナール湾を取り上げるのか。本章の最初に述べたように、これらの三つの海域の沿岸部や島嶼部が、16世紀において、ヨーロッパ勢力の植民地体制に組み入れられたという歴史を共有しているからである。16世紀は、世界に五つしかないアコヤ系真珠の大産地の三つをヨーロッパ勢力が支配下に置いた時代であった。しかも、16世紀は、コロンによるベネズエラの真珠の発見によって、これまでアコヤ系真珠の産地としてはオリエント世界のペルシアやインドしか知られていなかった時代に、新世界という新たな産地が加わった時代であった。16世紀は、真珠の生産、希求、流通に大きな変化があったことが予想される。なお、本論文は南米カリブ海域、ペルシア湾、マンナール湾の三つの海域を、便宜上、アコヤ系真珠の「三大産地」、「三大生息地」と呼ぶ。

本研究は、コロンが西回り航海に乗り出した 1492 年からおよそ 100 年間となる 16 世紀を考察の対象とする。1492 年を起点とするため、正しくは、15 世紀末からであるが、本論文はそうした時代も含め「16 世紀」として議論する。真珠の探索はすでに 1492 年から始まっていたが、真珠史においては、1498 年という年が、特に重要な意味をもつ。この年、コロンが第 3 回航海でベネズエラ沿岸部に到着し、そこで新世界の真珠を発見する一方、バスコ・ダ・ガマが、インドのカリカットに到達し、ついにアコヤ系真珠の産地であるオリエント世界に到達したからである。

1600 年にはイギリス東インド会社、1602 年にはオランダ東インド会社が設立され、17 世紀に入ると、イギリスとオランダという新たなプレーヤーが登場する。本論文は、スペインとポルトガルが主要なプレーヤーであった 16 世紀を考察の対象とする。真珠世界の実態は、前後の時代の状況からわかることが少なくないので、本論文では、16 世紀前後の時代の状況についても言及することがある。

以上、本論文で 16 世紀のアコヤ系真珠とその大産地を考察対象とする理由を説明した。本論文は、そうした真珠と大産地の存在がどのように 16 世紀の歴史展開の動因となったのかを検討し、従来の 16 世紀像の見直しを試みる。

第 2 節 先行研究

本論文は、南米カリブ海、ペルシア湾、マンナール湾の三つの海域・湾岸世界の真珠史研究である。これらの海域に関する個々の真珠史の先行研究の詳細については、それぞれの章の初めに詳述する。ここでは全体的・総合的な真珠史研究の傾向及び三つの海域に関する代表的または最新の真珠史研究の動向とその問題点を指摘しておきたい。

2.1 真珠研究の一般的傾向

真珠は、歴史学では長らく研究対象になつてこなかった。真珠史を含めた真珠に関する総合的な文献の多くは、真珠・宝石業関係者や真珠養殖業関係者、養殖技術を研究する水産学者や水産技術者、真珠貝の標本や真珠ジュエリーを所蔵する博物館関係者などによって書かれてきた。こうした書物は、今日の歴史学における真珠史研究でも参照されている。それらの多くは、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、太平洋、オーストラリア、アメリカなど、各地域で採れる海産真珠貝や淡水産真珠貝を分類し、それらの真珠貝の産地とその真珠の特徴を地球規模で網羅するグローバルな射程の広さを持っている。これは、真珠産業が世界各地のさまざまな真珠を集め、利用してきたからに他ならない。真珠産業関係者の最大の関心事は、どの海域・水域にどのような真珠貝が生息し、どのような真珠が採れるのかという生態系的かつ水産学的テーマである。真珠の種類への関心と網羅的でグローバルな俯瞰は、真珠に係わる研究者や真珠業者が、本来持っている視野である。

1908 年刊行の G. F. クンツと C. H. スティーヴンソンの *The Book of the Pearl* は、真

珠研究文献の古典的名著である³¹。共著者のひとりのクンツは、ティファニー社で宝石専門家のポストももっていた米国の鉱物学者である。*The Book of the Pearl* は、世界各地の海産真珠貝や淡水産真珠貝、それらの真珠の特徴や受容の歴史をはじめ、20世紀初頭の真珠や真珠貝ビジネスの状況、真珠ジュエリーの様相などについて詳述している。この書物が書かれた頃、日本人が真珠養殖に成功し、以後、欧米社会では真珠の価値の暴落と共に真珠への関心が急激に薄れることになった。その意味で、*The Book of the Pearl* は、天然真珠時代最後の状況を伝える貴重な書物である。ただ、この本が記す真珠貝の学名はいまでは使用されていない。しかし、今日の真珠史研究の書物や学術論文でも、その学名が使用されている場合があり、注意が必要である。

The Book of the Pearl は、注釈も充実していてレファレンスとしての価値をもっているが、その他の真珠・宝石業関係者によって書かれた文献は、注釈が不十分なものが少なくない。そうした事例として、ドイツのジュエリー業関係者の E. ストラックによる *Perlen* (英訳本 *Pearls*) がある³²。この書物も、世界各地の真珠貝と真珠の特徴、その地における今日の真珠産業などを列挙しており、網羅的でグローバルな視野を示している。問題点は、参考文献は掲載されているものの、本文には注がないことである。つまり、彼女の記述の典拠が明らかではなく、情報の信憑性が確認できない内容となっている。レファレンスとするには問題が多いが、こうした書物も今日の真珠史研究で参照されている。

博物館関連の文献としては、アメリカ自然史博物館及びフィールド博物館が企画した *Pearls* 展がベースになった 2001 年の書物 *Pearls* がある。この展覧会は、2005 年から 2006 年にかけて東京の国立科学博物館でも「パール」展として開催され、その図録が作成されている。また、カタール博物館が 2010 年に開催した *Pearls* 展は、2012 年に兵庫県立美術館、2013 年にヴィクトリア・アンド・アルバート博物館でも開催され、それぞれ書物やカタログが出版されている³³。真珠の展覧会は、世界各地の真珠貝と真珠、古代から現在にいたるさまざまな実物の真珠製品や真珠ジュエリー、真珠で装う人物の肖像画などを展示する。真珠とスパイスなどの他の商品との違いは、真珠は、最終希求者にいった後、数百年間、あるいは千年以上が過ぎても、真珠製品がそのままの状態に残っていることがあることである。博物館関連の書物や図録は、何百年、何千年にわたる人類の真珠や真珠貝の受容を知るには格好の文献であり、歴史史料としての価値もある。それゆえ、真珠の受容や希求の考察はそれほど難しい作業ではない。ただ、真珠の受容形態は、こうした博物館

³¹ Kunz and Stevenson, *The Book of the Pearl*.

³² Elisabeth Strack, *Perlen* (Stuttgart: Rühle-Diebener-Verlag, 2001); *Pearls* (Stuttgart: Rühle-Diebener-Verlag, 2006).

³³ Neil H. Landman et al., *Pearls: A Natural History* (New York: Harry N. Abrams, 2001); アメリカ自然史博物館・フィールド博物館企画『「パール」展』図録 (国立科学博物館、2005~2006 年); Hubert Bari and David Lam, *Pearls* (Milano: Skira, 2009); ユベール・バリ (赤松蔚日本語版監修) 『パール——海の宝石』(兵庫県立美術館図録) (ブックエンド、2012 年); Beatriz Chadour-Sampson and Hubert Bari, *Pearls* (London: V&A Publishing, 2013).

が所蔵するヨーロッパの豪華な大粒の真珠製品や真珠ジュエリーだけがすべてではないことにも、注意する必要がある。

20世紀初め、日本人が真珠養殖に成功して以来、真珠の生態学的・水産学的研究は日本人研究者の独壇場となり、重要な研究が蓄積されてきた。したがって、歴史学での真珠史研究は、日本における真珠の水産学的研究を参照し、正しい真珠の生態学的知識を得る必要がある。しかし、日本の真珠研究の大きな問題は、研究の成果は、専門的に特化した論文や書物などで断片的に発表されてきたため、これまでの研究の粋を集めた概説書が少ないことである。そうした中、水産学者の松井佳一による1965年の『真珠の事典』は、真珠の生態学的・水産学的研究から真珠に関する一次史料まで詳述している総合的な書物となっている。ただ、水産学研究の成果の記述は、発行年の1965年までである。白井祥平は、世界各地の真珠貝と真珠を早い時期から分類してきた水産学者で、その成果は『真珠・真珠貝世界図鑑』で見ることができる。和田浩爾『真珠の科学』や小松博監修『真珠事典』は、真珠の組成や光学現象を科学的に分析した書物である。正岡哲治・小林敬典「アコヤガイ属の系統および適応放散過程の推定」は、近年の遺伝子解析によるアコヤ真珠貝の究明や学名問題、真珠貝におけるアコヤ真珠貝の重要性などを議論している。英語文献では、真珠及び真珠貝の生態学的・水産学的研究を紹介し、世界各地の真珠養殖業の状況を述べたものとして、P. C. サウスゲートとJ. S. ルーカス編集の *The Pearl Oyster* がある³⁴。

このように、真珠に関する書物といえば、各地の真珠貝を網羅する総合的な書物か水産学的・科学的研究に関する書物であった。その一方で、今日までの真珠の通史は書かれてこなかった。2013年の拙著『真珠の世界史』は、真珠業者ではない著者が、人類の5000年にわたる真珠史を叙述したものであり、養殖真珠史100年の経緯を書いた世界初の書物である³⁵。この書物は、引用している一次史料の出典は書いているが、一般読者向けのため頁数までは記していない。また、先行研究については十分議論していない。『真珠の世界史』は、一部の欧米やオーストラリアの研究者に早くから知られており、2019年発行の真珠史の学術論文集 *Pearls, People, and Power* に掲載のW. G. クラレンス・スミスの論考“The Pearl Commodity Chain, Early Nineteenth Century to the End of the Second World War: Trade, Processing, and Consumption”でも参照されている³⁶。

真珠はこれまで驚くほど看過されてきたが、近年、真珠史研究は、南米真珠史やインド洋海域世界の真珠史を中心に、にわかには活発化している。先述の *Pearls, People, and Power* は、最新の真珠史研究のひとつであり、主に19世紀と20世紀のオーストラリア海域、マ

³⁴ 松井佳一『真珠の事典』（北隆館、1965年）；白井『真珠・真珠貝世界図鑑』；和田『真珠の科学』；小松監修『真珠事典』；正岡・小林「アコヤガイ属の系統」；Paul C. Southgate and John S. Lucas eds., *The Pearl Oyster* (Amsterdam: Elsevier, 2008).

³⁵ 山田『真珠の世界史』。

³⁶ William G. Clarence-Smith, “The Pearl Commodity Chain, Early Nineteenth Century to the End of the Second World War: Trade, Processing, and Consumption,” in *Pearls, People, and Power: Pearl and Indian Ocean Worlds*, ed. Pedro Machado et al. (Athens: Ohio University Press, 2019), p. 44, note 1.

ンナール湾、ペルシア湾、スールー海などのインド洋海域の真珠と真珠貝採取を対象にした個々の研究論文集である³⁷。彼らの関心は、近代における真珠と真珠貝の生産と商品化、真珠と真珠貝の採取業による移民の促進やアフリカ人の奴隷化、グローバル経済化などに置かれており、近代における真珠と真珠貝の採取業の発展の歴史的意義が強調されている。本論文は、彼らが議論しているこうした事象が、すでに16世紀に起こっていたことを示すことになる。また、この論文集では19世紀以降に商品化されたシロチョウガイの貝殻とその真珠に関心が置かれている一方、アコヤ系真珠は重要視されておらず、真珠の生態系的関心についても本論文と異なるスタンスとなっている。

2.2 16世紀の南米カリブ海、ペルシア湾、マンナール湾の真珠史研究

アコヤ真珠貝の三大生息地である南米カリブ海、ペルシア湾、マンナール湾の真珠史は、地域史研究の重要なテーマであり、幾つかの優れた研究が存在する。

南米ベネズエラでは、E. オッテの *Las Perlas del Caribe* がある³⁸。これは、インディアス総合古文書館の史料などを分析し、ベネズエラ沖のクバグア島における真珠採取業の実態やその収益、行政機構、住民構成などを調べた緻密なアーカイヴ・リサーチである。南米真珠史研究の金字塔といえる。ただ、この研究が対象とする時期は、大航海時代の始まりから、クバグア島の真珠採取業が真珠貝の枯渇とハリケーンで壊滅した1540年代初めまでとなっており、扱っている地域も時期も比較的狭い。南米カリブ海の真珠採取はクバグア島以外にも、ベネズエラのマルガリータ島やコロンビアのグアヒラ半島沿岸部などで実施されてきたことを勘案すると、オッテの研究だけで16世紀の南米カリブ海の真珠採取の全容をつかむことはできない。まさに典型的な地域史研究である。オッテ以後のアーカイヴ・リサーチとしては、E. L. サンスの研究が存在し、16世紀後半の真珠の輸出について知ることができる³⁹。

マンナール湾では、S. アルナチャラムの *The History of the Pearl Fishery of the Tamil Coast* がある。この研究は、古代から19世紀までのマンナール湾のインド側沿岸部の真珠採取の諸様相を叙述したもので、さまざまな一次史料の使用が特色である⁴⁰。ただ、マンナ

³⁷ Pedro Machado et al. eds., *Pearls, People, and Power*. この学術論文集におけるマンナール湾とペルシア湾の真珠に関する論考は、次を参照。Samuel M. Ostroff, “An Uncertain Venture: Pearl Labor and Imperial Political Economy in South India and Sri Lanka, ca. 1790-1840,” pp. 85-117; Robert Carter, “Pearl Fishing, Migration, and Globalization in the Persian Gulf, Eighteenth to Twentieth Centuries,” pp. 232-62; Matthew S. Hopper, “Enslaved Africans and the Globalization of Arabian Gulf Pearl,” pp. 263-80.

³⁸ Enrique Otte, *Las perlas del Caribe: Nueva Cádiz de Cubagua* (Caracas: Fundación John Boulton, 1977).

³⁹ Eufemio Lorenzo Sanz, *Comercio de España con América en la época de Felipe II: La navegación, los tesoros y las perlas* (Valladolid: Servicio de Publicaciones de la Diputación Provincial de Valladolid, 1980), vol. 2.

⁴⁰ S. Arunachalam, *The History of the Pearl Fishery of the Tamil Coast* (Annamalai

ール湾の真珠は、スリランカ側でも採取されており、インド側沿岸部だけの考察では、16世紀の真珠採取の全容やポルトガルの対外拡張の動きを把握することはできない。その意味でアルナチャラムの研究も、典型的な一国史の地域史研究となっている。

その他、マンナール湾については、C. R. デ・シルヴァ（以下、シルヴァと表記）の“The Portuguese and Pearl Fishing off South India and Sri Lanka”やS. スブラフマニヤムの“Noble Harvest From the Sea: Managing the Pearl Fishery of Mannar, 1500-1925”の論考が、ポルトガル統治時代の真珠の生産や真珠採取の状況を考察している。S. J. スティーヴンは *Portuguese in the Tamil Coast* の中で、ポルトガル時代の真珠採取地の政治情勢など、ポルトガル人と真珠の係わりを論じている⁴¹。これらの研究も、シルヴァを除くと、インド側沿岸部の真珠史研究である。

16世紀のペルシア湾の真珠史に焦点を当てた研究としては、筆者の知る限り、A. P. フェルナンデスの簡単な論考がある程度である⁴²。ペルシア湾の7000年の真珠の歴史を扱った最近の研究としては、R. カーターの論考“The History and Prehistory of Pearling in the Persian Gulf”及び彼の著作 *Sea of Pearls* がある⁴³。カーターの論考は16世紀のポルトガル時代をほとんど考察していないが、その著書では、ポルトガルによる海域支配を論じている。ペルシア湾は世界最大のアコヤ系真珠の産地であり、19世紀には数多くの報告書があり、研究もなされているが、16世紀のペルシア湾の真珠史はまだ手薄な状態である。

網羅的かつグローバルな俯瞰での真珠研究としては、R. A. ドンキンの *Beyond Price: Pearl and Pearl-Fishing: Origins to the Age of Discoveries* がある⁴⁴。彼の研究の対象は、古代から16世紀までのペルシア湾、インド、ヨーロッパ、中国などの真珠史についてであり、16世紀の新世界の真珠も議論されている。ヨーロッパ文献、イスラーム文献、一部の漢籍などの一次史料や考古学的成果を利用し、そこに記された真珠採取地、集散地、真珠の受容に関する真珠情報を、地域ごとに列挙したもので、16世紀までの真珠史研究の集大成である。真珠に関する記事を生産、流通、消費で分類していくドンキンの手法は、コモディティ・チェーン論の先がけともいえる体系的な研究である。ただ、彼の研究では真珠

Nagar: Annamalai University, 1952).

⁴¹ C. R. de Silva, “The Portuguese and Pearl Fishing off South India and Sri Lanka,” *South Asia*, new series, (March 1978), vol.1, no. 1, pp. 14-28; Sanjay Subrahmanyam, “Noble Harvest From the Sea: Managing the Pearl Fishery of Mannar, 1500-1925.” in *Institutions and Economic Change in South Asia*, ed. Burton Stein and Sanjay Subrahmanyam (Oxford: Oxford University Press, 1996), pp. 134-172; S. Jeyaseela Stephen, “Commercial Activities of the Portuguese in the Pearl Fishery Coast,” in *Portuguese in the Tamil Coast* (Poncidherry: Navajothi, 1998), pp. 60-91.

⁴² Agnelo Paulo Fernandes, “The Portuguese Cartazes System and the ‘Magumbayas’ on Pearl Fishing in the Gulf,” *Liwa*, vol. 1, no. 1 (June 2009), pp. 12-24.
<https://www.na.ae/en/Images/LIWA01.pdf> (2019年4月27日閲覧)

⁴³ Robert Carter, “The History and Prehistory of Pearling in the Persian Gulf,” *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, vol. 48, part 2 (2005), pp. 139-209; Carter, *Sea of Pearls*.

⁴⁴ Donkin, *Beyond Price*.

に関する断片的な情報が、膨大かつ均質的に列挙されているため、個々の真珠記事から一定の傾向を読み解き、真珠の歴史的動態を把握することは、逆に難しくなっている。ドンキン自身も、生産、流通、希求のパターンを分析し、各地域を相互比較し、そこから普遍的・一般的な歴史的事象を引き出す作業は行っていない。彼が参照する一次史料は英訳が多く、16世紀のマンナール湾やペルシア湾の真珠史については、ほとんど議論していない。

近年の16世紀の真珠史研究では、南米真珠史研究が盛んである。その中にM. A. ウォルシュの一連の研究がある。彼女は、2010年以降、ベネズエラの真珠採取の労働力に焦点を当てた“Enslaved Pearl Divers in the Sixteenth Century Caribbean”や“A Political Ecology in the Early Spanish Caribbean”を発表してきており、2018年にはベネズエラの真珠生産やアメリカのバロック真珠のシンボリズムなどを扱った*American Baroque* という書物を上梓した⁴⁵。その他、E. B. モンロイのコロンビアの真珠史研究やM. ドミンゲス＝トーレスの16世紀の絵画から見た真珠のシンボリズム論などがある。K. ドウソンの研究は真珠採取に投入されたアフリカ人奴隷に言及している⁴⁶。16世紀の南米カリブ海の真珠採取業を、真珠貝枯渇というエコロジーの側面からとらえる学問的動向もあり、A. ロメロらによる一連の研究がある⁴⁷。南米真珠史研究の傾向としては、真珠採取に投入されたアフリカ人奴隷やその奴隷貿易、ヨーロッパにおける真珠のシンボリズム、真珠貝の枯渇などに対して関心が高い。

2.3 先行研究の問題点

16世紀の南米カリブ海、ペルシア湾、マンナール湾の真珠史に関する主だった先行研究とその動向を概観したが、こうした先行研究に見られる全体的な問題点として、次の六つ

⁴⁵ Molly A. Warsh, “Enslaved Pearl Divers in the Sixteenth Century Caribbean,” *Slavery and Abolition*, vol. 31, no. 3 (September 2010), pp. 345-362; Molly A. Warsh, “A Political Ecology in the Early Spanish Caribbean,” *William and Mary Quarterly*, 3rd series, vol. 71 (2014), pp. 517-48; Molly A. Warsh, *American Baroque: Pearls and the Nature of Empire, 1492-1700* (Chapel Hill, University of North Carolina Press, 2018).

⁴⁶ Eduardo Barrera Monroy, “Los esclavos de las perlas: Voces y rostros indígenas en la Granjería de Perlas del Cabo de la Vela (1540-1570),” *Boletín cultural y bibliográfico*, vol. 34, no. 61 (2002), pp. 3-33. https://publicaciones.banrepcultural.org/index.php/boletin_cultural/article/view/1098 (2019年4月27日閲覧) ; Mónica Domínguez-Torres, “Pearl Fishing in the Caribbean: Early Images of Slavery and Forced Migration in the Americas,” in *African Diaspora in the Cultures of Latin America, the Caribbean, and the United States*, ed. Persephone Braham (Newark: University of Delaware, 2015), pp. 73-82; Kevin Dawson, “Enslaved Swimmers and Divers in the Atlantic World,” *The Journal of American History*, vol. 92 (2006), pp. 1327-55.

⁴⁷ Aldemaro Romero et al., “Cubagua’s Pearl-Oyster Beds: The First Depletion of a Natural Resource Caused by Europeans in the American Continent,” *Journal of Political Ecology*, vol. 6 (1999), pp. 57-78; Aldemaro Romero, “Death and Taxes: The Case of the Depletion of Pearl Oyster Beds in Sixteenth-Century Venezuela,” *Conservation Biology*, vol. 17, no. 4 (August 2003), pp. 1013-23.

を指摘しておきたい。

第一に、真珠の生成過程や、真珠貝の学名、真珠の種類など、真珠の生態系に対する無関心と事実誤認が顕著なことである。歴史学における真珠史研究は、どの海域にどのような真珠貝が生息し、どのような真珠が採れるのかということ把握することからスタートする。しかし、先行研究では、真珠貝の種類やその特徴への関心がきわめて低く、生態系的誤りが少なくない。真珠及び真珠貝の生態系の研究は、20世紀に日本人研究者が大きく進歩させ、旧説を変えてきた。しかし、欧米の真珠史先行研究は日本人がリードしてきた水産学的研究成果を取り入れておらず、一昔前の情報を使っている。

たとえば、スブラフマニヤムのような泰斗でも、真珠の生成として刺激説を唱え、今日では使用されていない真珠貝の学名を使っている⁴⁸。一方、ウォルシュの研究では、真珠の生態系の無視や事実の歪曲を見ることができる。新世界では、南米カリブ海沖のアコヤ真珠貝が直径3ミリから6ミリ程度のアコヤ系真珠を大量に生み出す一方、太平洋のパナマクロチョウガイが、黒味がかった大粒真珠やバロック真珠を生み出しており、異なる種類の真珠が存在した。ウォルシュの書物のタイトルは *American Baroque* なので、当然、パナマクロチョウガイとそのゆがんだ真珠を解説し、パナマクロチョウガイ採取によるバロック真珠生産の実態を分析する必要がある。しかし、彼女の著作では、真珠の生産については、オッテの研究に基づいたベネズエラのアコヤ系真珠の生産面が議論されている。パナマクロチョウガイについての解説はなく、索引によると地名のパナマへの言及は2回である⁴⁹。なぜバロック真珠の生産場所としてパナマ湾を考察しないのだろうか。ウォルシュの研究は、最近の歴史学の潮流であるモノの世界史としての叙述を意図しているが、真珠の生産と受容の議論では異なる真珠を扱っているため、モノの世界史の歴史叙述としては成立しない。

ウォルシュの研究における真珠の生態系の無視や事実の歪曲は、真珠が採れる割合の記述についても見ることができる。ウォルシュは、アメリカ自然史博物館のランドマンらによる *Pearls* に依拠して、「ベネズエラの真珠業を研究してきた水産生物学者の推定は、剥いた貝の10個から平均でひとつの真珠が見つかったことを示唆している」と述べている⁵⁰。しかし、*Pearls* を見ると、その割合は、話の流れによる仮の例として根拠なく述べられていることがわかる。むしろ、この本が言及しているのは、クウェートの例を取り、4200個の貝から直径3ミリ以上の真珠がひとつ出たという事実である⁵¹。つまり、ウォルシュは、*Pearls* の著者が「仮に」と述べた数字を、調査による既成事実として記述しており、その引用の仕方には問題がある。本論文では第1章で、アコヤ真珠貝からの真珠の出現率を検

⁴⁸ Subrahmanyam, "Noble Harvest From the Sea," pp. 136-7.

⁴⁹ Warsh, *American Baroque*, pp. 55, 186.

⁵⁰ Warsh, p. 62. 真珠は10個に1個の割合で採れるという言説は、彼女のふたつの論考でも述べられており、彼女の主張となっている。Warsh, "Enslaved Pearl Divers," p.346; Warsh, "A Political Ecology," p. 530.

⁵¹ Landman et al., *Pearls*, p. 21.

討するが、それからわかるように、真珠の出現率 10 パーセントは、明らかに高い値である。ウォルシュの研究では生態系への無理解の他、文献引用の不適切さ、恣意的な主張も見る事ができる。近年の歴史学では真珠史研究が増えてきているが、ウォルシュに限らず、真珠の生態系を十分に理解していないか、あるいは、それを無視した研究は少なくない。

第二に、*aljofar* という語の解釈である。*aljofar* は、16 世紀のポルトガル語とスペイン語の一次史料で使用されている語で、真珠を意味する。16 世紀のポルトガル語一次史料には頻繁に登場し、16 世紀のスペイン語一次史料でも *aljofar* の語が見られるが、ポルトガル語文献ほどは多くはない。真珠史の先行研究の問題点は、この *aljofar* がどのような真珠を指すのか、真剣に考えてこなかったことである。一般的に言って、*aljofar* は、多くの場合、*seed pearls* と解釈される。また、*irregular pearls* などと説明されることもある⁵²。真珠を指す別のスペイン語に *perla* があるが、オッテは、*perla* と *aljofar* との違いは明らかでないと述べている⁵³。

16 世紀や 17 世紀のポルトガル語文献を英訳してきた研究者の中には、*aljofar* を *seed pearls* とすると、文脈に合わないことに気づき、*aljofar* は普通の真珠ではないかと示唆した人たちも存在する⁵⁴。つまり、一次史料を正しく読んでいくと、*aljofar* は、種のような真珠ではなく、普通に「真珠」を指していることに気づくのであるが、欧米の真珠史の先行研究では、そうした発想が見られず、多くの場合、無条件で *seed pearls* と見なされてきた。あるいは、*aljofar* に関する記事や記録は無視して、議論されることも少なくない。

たとえば、16 世紀前半のスペイン王室への五分の一税の真珠は八つの品質に分類され、*aljofar común*、*aljofar redondo* と呼ばれる品質があったが、こうした真珠の存在について、ドンキンやウォルシュは言及していない⁵⁵。さらに、ウォルシュは、*American Baroque* の中で、17 世紀のジョアン・リベイロによるポルトガル語文献の真珠記事を解説しているが、「ふるい分けしたもの（真珠）の中で、一番で最良のものが、『ふるい第一の *aljofar*』（*aljôfar da primeira joeira*）と呼ばれる」という *aljofar* が出る一文は省いている。また、ウォルシュは、「細かいもの（真珠）は、ふるいからこぼれ落ちて砂に混じり、貧乏人が砂から拾う」というリベイロの一文について、「細かいもの」が *aljofar* を指すと読者に思わせるような議論展開を行っている⁵⁶。ウォルシュの研究では、*aljofar* に関する記事の無視と誤った解釈

⁵² Donkin, *Beyond Price*, p. 110, p. 343, (note 269); Sanz, *Commercio de España*, vol. 2, p. 24. 日本では、*aljofar* は「真珠母」と訳される場合が多い。これについては、第 2 章で解説する。

⁵³ Otte, *Las perlas del Caribe*, p. 37.

⁵⁴ Pedro Teixeira, *The Travels of Pedro Teixeira: With his "Kings of Harmuz," and Extracts from his "Kings of Persia,"* trans. and ed. William F. Sinclair, with further notes by Donald Ferguson (1902; Nendeln: Kraus Reprint, 1967), p. 179 (note 6); Armando Cortesão ed., *The Suma Oriental of Tomé Pires: An Account of the East, from the Red Sea to Japan* (1944; Nendeln: Kraus Reprint, 1967), vol. 2, p. 517.

⁵⁵ Donkin, *Beyond Price*, p. 324; Warsh, *American Baroque*, pp. 57, 98. スペイン王室の真珠の五分の一税については、Otte, *Las perlas del Caribe*, pp. 400-2 を参照。

⁵⁶ Warsh, *American Baroque*, p. 157; João Ribeiro, *Fatalidade histórica da ilha de*

が見られる。

筆者自身は、*aljofar* がアコヤ系真珠を指すと考えており、本論文第2章で文献面から考察する。この *aljofar* の解釈が、本論文と先行研究との大きな違いのひとつである。

第三に、一次史料の誤読及び英訳されていない一次史料の未使用や不十分な利用である。真珠史研究には、一次史料に現れる真珠記事の分析が欠かせない。16世紀のポルトガル語やスペイン語の一次史料は、19世紀末から20世紀初めにかけて英訳されたものが少なくない。百年以上前の翻訳のため、不正確な訳も散見される。筆者が特に問題と考えるのは、16世紀のポルトガル人ドゥアルテ・バルボザとガルシア・ダ・オルタの著作の英訳、1542年の「インディアス新法」の英訳などである。これらの英訳の問題点については、本論中で引用する際に随時指摘するが、オルタの著作の英訳の問題点は、この後、本章で言及する。ドンキンなどの研究者は、主に英訳された一次史料に依拠しているが、その英訳には誤訳が含まれているものもある。誤訳の使用は論文にとっては致命的な瑕疵となりうる。

真珠史の先行研究には、英訳されていない一次史料の未使用または不十分な利用という問題もある。その一例が16世紀のスペイン人聖職者ラス・カサスの *Historia de las Indias* 『インディアス史』である⁵⁷。筆者は、16世紀前半の南米真珠史を理解する最良の一次史料のひとつが、『インディアス史』であると考えている。それにもかかわらず、この一次史料は、英訳がないこともあり、英語圏の研究者には十分利用されてこなかった。ラス・カサスは、『インディアス史』の中で、真珠採取の過酷な潜水作業がバハマ諸島の先住民を絶滅させたことを繰り返し語っているが、この言説はいまだに看過されているのが、現状である。英語圏の研究者が参照してきたのは、*Brevísima relación de la destrucción de las Indias* 『インディアスの破壊に関する簡潔な報告』というラス・カサスの報告書である。これは、ラス・カサスがスペイン領アメリカの先住民の窮状をスペイン王室に訴えるために書いた報告書が基になったもので、これについては、英訳がある⁵⁸。ラス・カサスはここでも、真珠採取の潜水によるバハマ諸島の先住民絶滅について述べている。S. A. モスクやドンキンなどの研究者は、『インディアス史』を十分に参照せず、『インディアスの破壊に関する簡潔な報告』の言説だけを取り上げ、それをプロパガンダとして一蹴してきた⁵⁹。『インディアス史』の未使用または不十分な利用だけで、ラス・カサスの言説を否定することはできないし、そうした研究手法は彼らの結論の妥当性をゆるがすことになる。一方、ウォルシュは、『インディアス史』のスペイン語原文を参照しているが、バハマ諸島の住民の

Ceilão (Lisbon: Publicações Alfa, 1989), p. 56.

⁵⁷ Bartolomé de Las Casas, *Historia de las Indias*, 3 vols. (*Obras Completas*, vols. 3-5), ed. Paulino Castañeda et al. (Madrid: Alianza, 1994).

⁵⁸ Bartolomé de Las Casas, “Brevísima relación de la destrucción de las Indias,” in *Obras Completas 10: Tratados de 1552* (Madrid: Alianza, 1992). この報告書の英訳については、Donkin, *Beyond Price*, p. 377 を参照。

⁵⁹ S. A. Mosk, “Spanish Pearl-Fishing Operations on the Pearl Coast in the Sixteenth Century,” *Hispanic American Historical Review*, vol. 18 (1938), p. 395; Donkin *Beyond Price*, p. 321.

絶滅の言説については触れていない⁶⁰。このように、真珠史の先行研究は、ラス・カサスの『インディアス史』に真摯に向き合っていない。はたして、真珠採取によるバハマ諸島の先住民絶滅という彼の記述は、否定されたり、看過されるべきものだろうか。これについては、第3章で検討する。

つまり、真珠史研究では、『インディアス史』に限らず、英訳されていない一次史料の未使用や不十分な利用の例は少なくない。ひとりの著者が、すべての一次史料を原文で読むことはできないが、重要な箇所は原文で確認する努力は必要である。

第四の問題点は、真珠史研究が地域史研究や一国史研究として行われたため、それらは地域史研究の中で埋没してしまったことである。これまでの真珠史研究には、オッテやサンス、アルナチャラムなどのすぐれた業績があるが、アジア史やインド洋海域史、世界史の大きな文脈の中で十分活用されてこなかった。これらの研究自体が、真珠史の様相の叙述に留まり、そこから普遍的・一般的な概念を導かなかったことも一因にある。これらの地域史研究は、一国内という狭い地域を対象にしているため、海域の視点は十分ではなく、本論文が主張する「真珠生産圏」の認識もない。

第五に、コモディティ・チェーン分析の視点の欠落である。真珠史の研究は、生産面、希求面、流通面からのアプローチが可能である。ドンキンは、質の高いコモディティ・チェーン分析を行ったが、扱っている時代が主に16世紀以前になる。また、彼の研究は情報が網羅的であり、真珠史のダイナミズムを見るのは難しく、「真珠生産圏」や「ハブ・アンド・スポーク取引」の概念は見られない。16世紀真珠史の先行研究では、真珠の生産量や税収などの生産面の分析や、絵画から見た真珠のシンボリズムによる希求の考察に関心が集まっており、流通面、特に真珠のアジア域内取引などの解明は十分ではない。

第六の問題点は、16世紀真珠史の先行研究では、結論として真珠の意義は過小評価されることである。シルヴァやスブラフマニヤムなどのマンナール湾の真珠史研究は、真珠採取に課せられた税収の多寡などを論拠とし、ポルトガル時代は真珠採取に何の変化ももたらさなかったと結論づけている。シルヴァは、マンナール湾の真珠史研究は、ヨーロッパの影響を否定的にとらえる近年のアジア研究の潮流を支持するものであると語っている⁶¹。彼らの研究は、アジア世界における真珠の意義とその需要、流通形態を見ていない。一方、ウォルシュは、16世紀・17世紀の南米真珠史は、帝国の富の形成過程に関する我々の歴史認識を変えないと述べ、変化の時代における真珠の(採取や希求の)継続性を語っている⁶²。彼女の研究においても、真珠による歴史的動態は過小評価されている。

真珠史以外の16世紀の歴史研究では、真珠が看過されて議論されてきたことはすでに指摘した。はたして、真珠は16世紀に何の変化ももたらさず、歴史における真珠の意義は小さいのだろうか。本論文では、先行研究のこうした問題点を認識し、真珠のコモディティ・

⁶⁰ Warsh, *American Baroque*, p. 43.

⁶¹ Silva, "The Portuguese and Pearl Fishing off South India and Sri Lanka," p. 28; Subrahmanyam, "Noble Harvest From the Sea," p. 171.

⁶² Warsh, *American Baroque*, p. 249.

チェーンの生産、希求、流通を総合的に分析することで、先行研究とは異なる 16 世紀の真珠世界を叙述する。

第 3 節 研究手法

本論文は、(1) 真珠の生態系の理解と最新の水産学的知見の導入、(2) *aljofar* の正確な解釈、(3) 一次史料の原文による解釈、(4) 一国史を超えた広域俯瞰、(5) コモディティ・チェーン分析の採用という五つの研究手法を採り入れる。以下、それぞれ解説する。

3.1 真珠の生態系的知見と最新の水産学的知見の導入

天然真珠時代のアコヤ系真珠の大きさや真珠の出る割合、真珠の生成過程、真珠貝の生育条件などの研究は、明治期以来、多くの日本人研究者が実施してきた。日本には真珠の生態系に関する研究の蓄積があるが、日本語での研究ということもあり、欧米の研究者にはほとんど利用されていない。本論文はそうした日本の研究成果を取り入れる。

さらに、本論文は、真珠貝の遺伝子解析の進展によって明らかになった水産学的知見も取り入れる。先述してきたように、南米カリブ海、ペルシア湾、マンナール湾には同じアコヤ真珠貝 (*Pinctada fucata/martensii/radiata/imbricata* sp.) が生息していたという事実である。アコヤ真珠貝は本質的に移植が難しい貝であり、特定の海域がアコヤ系真珠の大産地であり続けた。こうした水産学的知見を取り入れた真珠史の先行研究は存在しない。本論文は、この点において、これまでの真珠史研究とは際立って異なるものである。

3.2 *aljofar* の正確な解釈

本論文は、ポルトガル語やスペイン語の一次史料に出てくる *aljofar* は、いわゆる普通の「真珠」であり、特にアコヤ系真珠を指すとして、議論を進める。

真珠史の先行研究は、*aljofar* を無条件に *seed pearls* と見なしたり、あるいは *aljofar* に言及する記事や記録を省いたりして、真珠世界を叙述してきた。こうしたことを鑑み、本論文は、先行研究が使用している一次史料であっても改めて参照し、彼らが省いた *aljofar* の記事や記録から新たな真珠情報を引き出し、*aljofar* を含めた 16 世紀の真珠世界を構築する。*aljofar* の解釈も、本論文と先行研究を区別する大きな特徴のひとつである。

3.3 一次史料の原文での解釈

地誌、旅行記、歴史書、報告書などの一次史料の渉猟は、真珠史研究において、もっとも基本的で、重要な研究手法のひとつである。密輸や隠匿が横行し、サイレント・バーゲニングや相対取引が一般的な真珠の輸送や取引では、出荷記録や領収書などはほとんど残らない。こうしたことから、真珠の動きを知るには、さまざまな人たちが書き残した多くの一次史料を広範に渉猟し、断片的に残る真珠記事を集め、それらの記事から全体像を構築していく必要がある。

本論文が参照する一次史料としては、16世紀のスペイン人、ポルトガル人による地誌、旅行記、歴史書をはじめ、書簡、法令集、スペイン人やポルトガル人官吏による公式報告書、イエズス会報告書、他のヨーロッパ人による旅行記などである。16世紀以前・以後のヨーロッパの一次史料、漢籍やイスラーム文献なども利用する。前後の史料によって、16世紀の実態が見えてくることがある。事実、真珠の生産や流通の状況は、後の時代になって明かされることが少なくない。16世紀の一次史料は広範に見ることを心がけたが、すべてが見れた訳ではない。具体的な一次史料については、各章の「はじめに」で言及する。

歴史学において、アーカイヴ・リサーチは重要である。しかし、真珠という特殊な商品は、アーカイヴ・リサーチだけではその全体像をつかめない。しかも、16世紀のポルトガル領インドでは、第4章と第6章で検討するように、真珠は免税品となっていた。ポルトガル領インドの公文書は、1755年のリスボン地震によるインド文書館 (*Casa da Índia*) 壊滅でその多くが失われたが、真珠に関しては、他に残された初期ポルトガルの公文書にも統計数字はほとんど出てこないことが知られている⁶³。先述したように、真珠が歴史学で看過されてきたのは、公文書に記されることが少なく、アーカイヴ・リサーチから抜け落ちたことが理由のひとつである。南米真珠史の研究では、オッテやサンスなどが、アーカイヴ・リサーチによって、五分の一税の真珠の量や輸出記録などを明らかにしてきた。ただ、当時の真珠の五分の一税には、先住民との物々交換で得た真珠や略奪した真珠も換算されていたため、税収から明らかになる数字が、真珠の生産量を反映しているわけではない。オッテによると、アーカイヴに残されたさまざまな史料は、真珠の潜水労働力についてほとんど語っていないという⁶⁴。

このように、真珠史の研究ではアーカイヴ・リサーチには限界がある。とりわけ、真珠のコモディティ・チェーン分析における生産面や、流通面においては、十分ではない。アーカイヴ・リサーチのそうした限界を補い、新たな情報をもたらすのが、一次史料の分析である。

歴史学における16世紀研究では、膨大な研究が蓄積されている。インド洋海域史研究も例外ではない。したがって、研究者はそうした研究を追っていくことも求められる。ただ、一次史料を精緻に読んでいくと、近年、インド洋海域史研究で主流となっている通説とは異なる事象が現れる場合が少なくない。これから本論文で検討していく16世紀のアジアにおけるポルトガルの役割の過小評価論もそのひとつである。それゆえ、通説や先行研究の主張ばかりに依拠するのではなく、それらを客観的・批判的に判断する上でも、一次史料を論拠とした議論を展開していく必要がある。

それゆえ、本論文は一次史料の渉獵を重要視する。本論文が使用する一次史料の中には、真珠史で初めて参照されるものもあれば、先行研究がすでに使用してきたものもある。ただ、質の悪い英訳や *aljofar* の無理解などにより、一次史料の内容が正しく把握されてきた訳で

⁶³ Stephen, *Portuguese in the Tamil Coast*, p. 90, note 161.

⁶⁴ Otte, *Las perlas del Caribe*, p. 360.

はない。一次史料を正確に解釈した上で、どの内容に着目し、どう解釈し、どのような 16 世紀の真珠世界を構築するかは、研究者の個別の問題意識と具体的検討課題に左右される。

実際、*aljofar* の解釈は難しい。16 世紀のポルトガル語の一次史料では、真珠を指す語として *aljofar* の他に、*perola* がある。16 世紀の著述者は、これらの語を使い分けている場合もあれば、どちらか一方だけを「真珠」を指す語として使っている場合もある。たとえば、16 世紀半ばのガルシア・ダ・オルタの *Colóquios dos simples e drogas da Índia* 『インドの薬草と薬物に関する対話』は、*aljofar* と *perola* の語を区別して使っている⁶⁵。翻訳者の C. マーカムは、*aljofar* の英訳として、“*pearls*”、“*seed pearls*”、“*aljofar*” という三つの語を使っている⁶⁶。彼は、*perola* も “*pearl*” と訳しており、*aljofar* と *perola* の違いが英訳本では反映されていない。それゆえ、どのような真珠が *aljofar* で *perola* なのか、読者が理解できず、文脈が通じなくなっている箇所がある。真珠記事は、原文で語彙を確認して、初めて理解できるところがある。

こうしたことを勘案し、本論文では、スペイン語とポルトガル語の一次史料の真珠記事に関する箇所はできる限り原文で確認する。ただ、原文が入手できずに、英訳本や邦訳本を使用する場合もある。本論文が重要視するのが、先述のオルタの文献、ピレスの *Suma Oriental*、及びバルボザの *Livro do que viu e ouviu no oriente* 『オリエント見聞記』である⁶⁷。これらの一次史料の英訳は、真珠史の先行研究でも使用されているが、本論文では、原文で確認することで、新たな知見が得られるものとする。イタリア語などの一次史料についても、真珠記事や真珠の語はできる限り原文で確認するが、英訳本や邦訳本を参照する場合もある。16 世紀末のオランダ人、ヤン・ハイヘン・フォン・リンズホーテンの *Itinerario* 『旅行記』については邦訳本を参照するが、真珠に関する語彙については、オランダ語原文で確認する⁶⁸。

3.4 一国史を超えた広域俯瞰

本論文は、一国史を超えた広域俯瞰で、南米カリブ海、ペルシア湾、マンナール湾のアコヤ系真珠の大産地を考察する。広域俯瞰には、ふたつの視点がある。第一に、真珠の採れる海では、国境に係わりなく、どの湾岸部からでも沖に向かって真珠採取に行くことができるという湾岸部の共通性の理解である。第二に、真珠の漁場、採取地、集散地の政治

⁶⁵ Garcia da Orta, *Colóquios dos simples e drogas da Índia* (1895; Lisbon: Imprensa Nacional-Casa da Moeda, 1987), vol. 2, pp. 119-121.

⁶⁶ Garcia da Orta, *Colloquies on the Simples and Drugs of India*, ed. and trans. Clements Markham (London: Henry Sotheran, 1913), pp. 296-300.

⁶⁷ Tomé Pires, *A suma oriental de Tomé Pires* (Coimbra: Imprensa de Coimbra, 1978); ピレス (生田他訳) 『東方諸国記』; Duarte Barbosa, *Livro do que viu e ouviu no oriente* (Lisbon: Publicações Alfa, 1989).

⁶⁸ Jan Huygen van Linschoten, *Itinerario: Voyage ofte schipvaert van Jan Huygen van Linschoten naer Oost ofte Portugaels Indien 1579-1592*, ed. H. Kern, 3 vols. (The Hague: Martinus Nijhoff, 1955-7); リンズホーテン (岩生成一他訳) 『東方案内記』 (岩波書店、1968 年)。

的・経済的関連性である。これらのふたつの視点は、本論文が「真珠生産圏」として提唱する概念の基礎となっている。

3.5 コモディティ・チェーン分析

本研究の議論の中心となる手法が、コモディティ・チェーン分析である。この分析手法は、S. トピックたちがラテンアメリカ経済を議論するために使用したが、彼らが対象としたのは、鉱業や農業である⁶⁹。一方、本論文が扱うのは真珠採取業という水産業である。また、真珠はカカオやコーヒーのような消費財ではなく、16世紀の真珠製品が今日まで残っているという保存性・資産性のある商品である。それゆえ、トピックたちが使用したコモディティ・チェーン・モデルをそのまま使うことはできない。よって、水産業及び真珠という特殊な商品に適合するように、修正し、新たな概念を加える必要がある。以下は、真珠のコモディティ・チェーンを行うために本論文が提唱する概念である。これらの概念については、本章の最初の箇所で簡単に言及したが、ここでは詳しく説明する。

(1) 生産——「真珠生産圏」

本論文は、湾岸世界の共通性を認識し、海域と湾岸世界を一帯として「真珠生産圏」という広域俯瞰の概念を提唱する。

本論文では、その「真珠生産圏」において真珠採取の基地となる港や湾岸部各地を「真珠採取地」と呼ぶ。この「真珠採取地」は、湾岸に沿って等間隔に広がっている訳ではない。海域では魚介類は同じ密度では存在しない。潮の流れやプランクトンの有無などによって豊饒な漁場や不毛の漁場ができる。豊饒な漁場に近い沿岸部などが、優良な漁港や採取地となる。アコヤ真珠貝の採取の場合、裸潜水によって海底の貝が集められたため、漁場への近さばかりでなく、人が潜れる程度の浅い海域であることも、優良な「真珠採取地」になる重要な要素であった。

「真珠生産圏」には、真珠の「集散地」が形成されることがある。優良な「真珠採取地」は、浅い海や辺鄙な島嶼部であることが多い。海上交通の観点から見れば、航行の難所や座礁の名所であり、その海域は主要な海上ルートにはならなかった。それゆえ、「真珠採取地」とは別に、採取された真珠を集め、各地に輸出する「真珠集散地」が形成されることがある。「真珠集散地」は同じ海域にあることが多かったが、そうでない場合もある。「真珠採取地」と「真珠集散地」は、真珠の生産と集荷で密接に結びついた関係性をもつ⁷⁰。すなわち、本論文では、「真珠生産圏」は、海域における真珠の漁場、「真珠採取地」、「真珠集散地」が、真珠の生産と集荷で有機的に結びつくことで、形成されたひとつの生産圏で

⁶⁹ Topik et al., *From Silver to Cocaine*, pp. 16-7.

⁷⁰ 「真珠生産圏」、「真珠採取地」、「真珠集散地」の概念は、筆者が、真珠の通史である『真珠の世界史』を書いたことで、認識するようになった概念である。

あると考える⁷¹。この概念の特徴は、海域も射程に入れることである。

一般的に言って、海域アジア史やインド洋海域史では、海は交易、通商、運輸の舞台と考える傾向が強い。しかし、「真珠生産圏」という概念は、そうした研究動向に、海は、真珠という高価な水産物を生み出す生産地であったという新たな視点を加えることができる⁷²。富を生み出す海域とその湾岸部の関係性を忘れてはならない。

ところで、本論文ではこれまで漠然と「産地」という言葉を使ってきた。「産地」を文字通りにとれば、物品が産出される場所のことである。真珠の場合だと真珠貝が生息する海域や水域が「産地」となる。しかし、古今東西の文献では「真珠の産地」という場合、海域を指すよりも、「真珠採取地」や「集散地」、あるいは真珠の採取を行っている湾岸部などが「産地」と見なされる。本論文で「真珠の産地」という場合は、真珠が採取できる海域や水域に適用するだけでなく、その海域や水域に面した真珠採取地や集散地、湾岸部などにも適用する。すなわち、「真珠生産圏」を含意するものである。

本論文では、南米カリブ海、ペルシア湾、マンナール湾を対象とするため、これらの海域・沿岸部を「南米カリブ海真珠生産圏」、「ペルシア湾真珠生産圏」、「マンナール湾真珠生産圏」として考える。三つをまとめて「三大真珠生産圏」と呼び、ペルシア湾とマンナール湾をインド洋世界の「二大真珠生産圏」と呼ぶ。「真珠生産圏」は、コモディティ・チェーン分析の生産面の考察のための海域的・地域的単位である。本論文では、16世紀のヨーロッパ勢力の対外進出の経緯も検討するが、その際の海域的・地域的単位でもある。

(2) 希求——「伝統的希求地／希求者」、「新興希求地／希求者」、「加工集散地」、「上位集散地」

農業を対象とするコモディティ・チェーン分析では、生産、流通、消費という順番でモノの流れを追っていくが、先述したように、真珠のコモディティ・チェーン分析では、流通より先に「希求」を検討する。希求面の考察にあたり、本論文は、真珠の「伝統的希求地」、「伝統的希求者」、「新興希求地」、「新興希求者」という概念を提唱する。また、真珠の「加工集散地」、「上位集散地」という概念も提唱する。

真珠の「伝統的希求地」とは、時代が変わろうとも、王朝が変遷しようとも、16世紀以

⁷¹ 農産物のコモディティ・チェーンに関しては、G. B. ソウザが、*Production circuit* という概念を提唱しており、筆者の考えと符合する。彼によると、*Production circuit* は、商品が生産される特定の地理的範囲であり、そこでは生産の規則性と地理的に固定された場所があり、最初の市場を含む場合もある。Souza, “Hinterlands, Commodity Chains, and Circuits in Early Modern Asian History,” pp. 18-9.

⁷² 海域を生産地ではなく、交易や通商、運輸の舞台としてしか見ない傾向は、すでにフェルナン・ブローデル（浜名優美訳）『地中海』全5巻（藤原書店、1991~1995年）に見られる。インド洋海域史ではチョードリーがいる。Chaudhuri, *Trade and Civilisation in the Indian Ocean*. 日本では家島彦一が交易、運輸の場としての海域を強調している。家島彦一『海が創る文明』（朝日新聞社、1993年）；家島彦一『海域から見た歴史』（名古屋大学出版会、2006年）。

前から真珠を伝統的に希求し続けた地域のことであり、「伝統的希求者」とは、そこで暮らす人々やその王朝のことである。オリエント世界では、アコヤ真珠貝が生息する「真珠生産圏」で少なくとも四千年前以上から真珠採取が行われていた可能性がある⁷³。したがって、その真珠を強く希求する一定の地域も早くから存在した。「真珠生産圏」とそうした希求地は、数千年あるいは数百年にわたって伝統的に結びついてきた。本論文は、こうした地域やその人々を「伝統的希求地」、「伝統的希求者」と呼ぶ⁷⁴。その一方で、本論文は、真珠の「新興希求地」、「新興希求者」という概念も提唱する。これらの概念を使うことで、16世紀の真珠の希求の伝統性や変化を見ることができる。

さらに、本論文は、真珠の「加工集散地」、「上位集散地」という概念も提唱する。「加工集散地」とは、真珠の加工業が盛んな地域のことで、「真珠生産圏」から真珠を大量に調達する一方、加工した真珠を各地に輸出する場所のことである。希求と流通の中間体としての特徴があり、真珠は双方向に動くことになる。「加工集散地」は、消費財ではない真珠という商品の複雑な動きを明らかにする概念でもある。「加工集散地」を希求の中で議論するのは、真珠の加工業者は、真珠が製品になるまでの間、あるいは他の真珠商や希求者などに売却するまでの間、膨大な真珠の在庫を何年も保有しているのが普通だからである⁷⁵。天然真珠は大きさや形状、色がさまざまのため、同質の真珠を一定量集めるのに長い年月を必要とした。本論文は「加工集散地」の真珠の保有の機能を重視し、希求の中で議論する。

「上位集散地」とは、「真珠生産圏」の各「集散地」から真珠を集める、文字通り「上位」の集散地である。「上位集散地」は、幾つかの「真珠生産圏」と結びついているのが特徴である⁷⁶。本論文の問題意識のひとつは、16世紀にこうした真珠の「上位集散地」が形成されたのかどうかということである。

(3) 流通——「ハブ・アンド・スポーク交易」

真珠は代表的な密輸品のため、コモディティ・チェーン分析でもっとも難しいのが流通面の検討である。それゆえ、本論文では「真珠生産圏」と「伝統的希求地／希求者」、「新興希求地／希求者」を結ぶ流通に着目する。真珠は多くの地域で希求されたため、その流通は産地から希求地へと続いていたはずである。こうしたことから、本論文は、真珠の流通では、「真珠生産圏」をハブとして、幾つかの「伝統的希求地／希求者」及び「新興希求地／希求者」に流通網が放射状に伸びている状況があったと仮定し、こうした真珠の流通ネットワークを「ハブ・アンド・スポーク交易」と呼ぶ。

「ハブ・アンド・スポーク」とは、今日の物流や航空路線で使われるロジスティクス・

⁷³ Donkin, *Beyond Price*, pp. 45-6.

⁷⁴ 「伝統的希求地」、「伝統的希求者」の概念も、筆者が『真珠の世界史』の執筆で認識するようになった概念である。ドンキンの著作からも、真珠の希求の伝統性は明らかになるが、彼自身は「伝統的希求地」、「伝統的希求者」という概念は用いていない。

⁷⁵ 松井『真珠の事典』、674頁。

⁷⁶ この概念も、筆者が『真珠の世界史』の執筆で、認識したものである。

ネットワークの概念である。車輪の中心部がハブであり、そこから車輪に向かって出ている棒がスポークである。各目的地をそれぞれ結ぶのではなく、ハブを作ることで、各目的地へのヒトやモノの動きを集約しようとするものである⁷⁷。

コモディティ・チェーン分析の真珠の流通の検討は、この経済用語の概念の使用が有効と考える。本論文の特徴は、「真珠生産圏」のどこか一地点の真珠採取地や集散地をハブとするのではなく、海域と沿岸部を含めた「真珠生産圏」そのものを、ハブとすることである。また、真珠の取引は、各交易地の面と面との取引ではなく、一筋の糸のように希求地にたどりつくものであり、スポークという形容がその状態を示している。「ハブ・アンド・スポーク取引」という概念によって、アジア域内取引における真珠取引の複雑な動きも把握できると考えられる。

第4節 本研究の課題と構成

本論文は、16世紀の南米カリブ海、ペルシア湾、マンナール湾の海域と湾岸部を考察対象にして、ヨーロッパ勢力の対外拡張及び真珠のコモディティ・チェーンの実態を解明するものである。本論文の検討課題及び本論文の構成は、次のとおりである。

4.1 本研究の課題

本論文は五つの検討課題を設定する。

(1) 第一の課題は、南米カリブ海沖、ペルシア湾、マンナール湾というアコヤ系真珠の採れる海域における「真珠生産圏」の具体的な特定及び「真珠生産圏」とヨーロッパの対外拡張の関係性の検討である。本論文は、まず、どこが「真珠採取地」であり、どこが「集散地」なのかを特定し、「真珠生産圏」がどのような形で形成されていたのかを把握する。その上で、なぜヨーロッパ勢力は「真珠生産圏」に進出していったのかを考察する。

この検討課題は、「真珠生産圏」の地政学的・経済的重要性に関する問いであり、真珠のための対外拡張や征服活動はあったのかという問いでもある。こうした問題意識は、これまで歴史学では看過されてきた⁷⁸。しかし、この検討課題は、海上交通や輸送の観点で議論されてきた海域に、水産資源とその利用の海域があること、その経済的特徴と対外拡張の関係性を明らかにする。筆者は、海域、採取地、集散地を個々でとらえるのではなく、「真珠生産圏」の有機的つながりを認識することで、ヨーロッパ勢力の対外拡張の意図や本質が解明できると考える。

(2) 第二は、コモディティ・チェーン分析における生産面の考察である。アコヤ系真珠の「真珠生産圏」では、16世紀にどのような真珠採取業が発展したのかを、事業者、潜水労

⁷⁷ 森隆行『現代物流の基礎（第3版）』（同文館出版、2018年）28~29頁、164頁。

⁷⁸ ドンキンの真珠史研究では、真珠の産地とヨーロッパの対外拡張の関連性が指摘されているが、実証までにはいたっていない。また「真珠生産圏」という認識も見られない。Donkin, *Beyond Price*, pp. 184, note 100, pp. 280-1.

働者、海域支配の側面から解明する。また、国家がどのように真珠採取業に介入したのかも考察する。

生産面の検討は、農業や鉱業の実施、商業の発展ばかりで議論されてきた16世紀史にヨーロッパ人による水産業の実施という事実を加えることができる。潜水労働者の徴発の検討は、南米史における先住民絶滅問題や水産業のための奴隷貿易、インド史におけるイエズス会の水産業への関与など、新たな事実を明らかにし、従来の通説に修正を迫ると考えられる。さらに、海域利用の考察は、ヨーロッパ勢力は陸地だけでなく、海域支配も目指したことを解明できると思われる。

(3) 第三の課題は、コモディティ・チェーン分析における希求面の考察である。それぞれの「真珠生産圏」と係わりの深い「伝統的希求地／希求者」、「新興希求地／希求者」、「加工集散地」を具体的に検討することで、真珠の希求の多様性を考察し、真珠は大きな需要に裏打ちされた国際商品であり、さらにアメリカとアジアを接続させる「グローバル商品」であったことを明らかにすることができる。

(4) 第四の課題は、コモディティ・チェーン分析における流通面の考察である。この概念を使うことで、真珠の流通の地域的拡がりを示すことができる。さらに個々の流通を担った商人層を明らかにする。「ハブ・アンド・スポーク交易」の概念は、真珠を通じ、世界をどう接続させたのかを解明できる。

(5) 最後に、本論文では、ポルトガル総督府が置かれたゴアが真珠の「上位集散地」になり、さらに新世界やヨーロッパ、アジア世界から真珠を集める「グローバル市場」となったのかどうかを検討する。グローバルヒストリーの領域では、ひとつの商品がどのように世界を接続させたのかという拡散の動きに関心が集まっているが、ここでの検討は、世界各地からひとつの商品を集約する「グローバル市場」の誕生を解明するものである。また、その「グローバル市場」の発展にはどのような商人層が寄与したのかも考察する。

4.2 本研究の構成

上記の研究課題を追求するために、本論文はまず第1章と第2章において、議論の前提となる次の二点のテーマを検討する。すなわち、第1章は真珠の生態系であり、第2章は *aljofar* の解釈である。真珠の生態系とは、具体的には、天然真珠時代のアコヤ系真珠の大きさとその出現割合の検討である。先述したように、欧米の研究では真珠の生態系について無理解や誤解が少なくない。本論文は、彼らが使用していない日本人研究者の研究成果や一次史料を参照することで、天然真珠時代のアコヤ系真珠の生態系的特徴とこの真珠の意義を明らかにする。これは真珠史研究の基本となる事実を解明する作業である。

第2章では、16世紀のポルトガル語文献とスペイン語文献に登場する *aljofar* という語がどのような真珠を指したのかを、一次史料の分析及び真珠の生態系的理解から解明する。これは16世紀の一次史料を解読していく上で欠かせない考察である。

第3章から第5章までは、「南米カリブ海真珠生産圏」、「ペルシア湾真珠生産圏」、「マン

ナール湾真珠生産圏」について、それぞれの「真珠生産圏」の具体的把握、ヨーロッパ勢力の対外拡張の経緯及び各「真珠生産圏」の生産、希求、流通の実態を解明する。

第6章は、真珠市場ゴアの検討である。ここでは、ゴアが真珠の「上位集散地」となり、どのような「グローバル市場」となったかを検討し、その要因及び「グローバル市場」の形成に寄与した商人層の役割を考察する。

補論では、16世紀末の真珠の価格を検討する。

終章では、これまでの議論を比較史的に総括し、真珠が16世紀に与えた意義を検討する。

以上の論文構成を通じて、本論文は16世紀における真珠と真珠の産地の重要性を明らかにし、「南米カリブ海真珠生産圏」、「ペルシア湾真珠生産圏」、「マンナール湾真珠生産圏」へのヨーロッパの対外拡張が、これらの海域と湾岸世界をはじめ、他の地域にも及ぼした16世紀の政治的、経済的、社会的影響を解明する。

第1章 アコヤ系真珠の生態系

はじめに

真珠のコモディティ・チェーンを研究するにあたり、もっとも適した海産真珠が、アコヤ真珠貝 (*Pinctada fucata/martensii/radiata/imbricata* sp.) が生み出すアコヤ系真珠である。天然真珠時代のインド洋海域世界において人類に珍重されてきた海産真珠は、このアコヤ系真珠及びクロチョウガイ (*Pinctada margaritifera*) の真珠であった。本章は、これらの二大海産真珠を取り上げ、真珠が出る割合とその大きさをそれぞれ検討する。先行研究に見られる生態系に関する事実誤認を正し、真珠史研究の基本となる事実を明らかにするためである。また、アコヤ系真珠がクロチョウ真珠よりも商品として利用されやすく、コモディティ・チェーン分析に適した真珠であることを科学的根拠に基づき確認する。

0.1 真珠の出現率に関する先行研究の見解

真珠はどれくらいの割合で真珠貝から出現するのかという問題は、養殖真珠業関係者、水産学研究者、博物館関係者、ジュエリー関係者などのきわめて高い関心事項である。近年、真珠史を扱う歴史研究者も関心を示すようになった。こうしたことから、さまざまな研究者が数値を出しているが、その多くは、計測数字を示さずに結論だけを述べており、情報が曖昧で、論拠が薄弱なのが特徴である、真珠の出る割合は、真珠貝によって異なり、真珠の大きさによっても異なるが、そうしたことは勘案されていない場合が多い。

たとえばアメリカ自然史博物館の N. H. ランドマンらは「球形真珠は天然では大変稀で、1000 個に 1~2 個の割合だった」と記している¹。この叙述の問題点は、真珠の種類や大きさには言及がなく、なぜそう言えるのか論拠を示していないことである。その一方で、ランドマンらは、序章でも述べたが、別の箇所では、4200 個の真珠貝から 1 個の割合で直径 3 ミリ以上の真珠が出たと述べている。これは、クウェートの真珠採り潜水夫による報告である²。こちらの内容は、真珠の大きさと数値、さらに典拠も示されていて、信頼できる数字である。真珠の種類に言及はないが、クウェートという場所及び真珠の大きさから、アコヤ系真珠と推定できる。

一方、E. シュトラックは、ペルシア湾の *Pinctada radiata* は 500 個に約 1 個の割合で使用に耐える真珠が現れ、マンナール湾の *Pinctada radiata* は 100 万個に 1 個の割合で真珠が出ると述べている³。彼女は、論拠も統計の数値も記さないまま、この数字を述べており、その主張は論証できていない。どれくらいの大きさの真珠の出現率かも述べておらず、記述方法にも問題がある。さらに、彼女の記すペルシア湾とマンナール湾の *Pinctada*

¹ Neil H. Landman et al., *Pearls: A Natural History* (New York: Harry N. Abrams, 2001), p. 58. 序章でも述べたが、この書物には、真珠貝 10 個から 1 個の真珠が出ると仮定した記述もある (p. 21)。

² Landman et al., p. 21.

³ Elisabeth Strack, *Pearls* (Stuttgart: Rühle-Diebener-Verlag, 2006), p. 115.

*radiata*には真珠の出る割合に大きな差があるが、それについて何のコメントもない。こうした瑕疵のある記述にかかわらず、歴史学の分野ではシュトラックの述べる数字が引用される場合もある⁴。

歴史学の真珠史研究では、M. A. ウォルシュも、真珠の出現率に言及している。序章でも述べたが、彼女はベネズエラの *Pinctada radiata* からは、10個に1個の割合で真珠が出たと解説している。彼女が典拠としたランドマンらの記述は、仮定の話であり、実測の数字ではない。しかし、ウォルシュは、実測の数字のように述べており、引用方法には問題がある。この件に関するもうひとつの問題点は、ウォルシュが2010年の論文、2014年の論文、さらに2018年の書物でも同じ内容を繰り返していることである⁵。2010年から今日に到るまで、10個に1個の割合で真珠が出たという彼女の記述に対して、誰もその誤謬を指摘してこなかった。歴史学の研究では、真珠の生態系についていかに無関心だったかを示している。

以上、先行研究における真珠の出現率に関する叙述の問題点を指摘した。彼らの問題は、以下に述べるように、日本の水産学的研究を利用していないことによるものである。

0.2 本章の研究手法と史料

真珠の出現率を知るのが難しいのは、天然真珠時代、真珠は個数ではなく、個々の重量や総重量で記録されたため、その割合を明らかにできない側面があるからである。また、今日では、バハレーンなどを除くと、真珠の多くは養殖事業で生産されるため、天然真珠時代の真珠の出現率を測定するのは不可能になっている。

しかし、日本には天然のアコヤ真珠の出現率に関して詳しい調査結果が残っている。それが20世紀初めの三重県水産試験場によるアコヤ真珠の出現率の調査報告である。この調査報告は、1965年の松井佳一の『真珠の事典』に掲載されているが、その後、忘れられた状態となった⁶。この調査報告は、真珠の大きさによって出現率が異なることを示しており、アコヤ系真珠の出現率を知る上で貴重な記録である。松井は、この記録を紹介しているだけで、真珠の出現率について詳細な分析は行っていない。欧米の研究者はこうした日本の研究成果は利用できない。したがって、本章では、その調査結果を分析することで、アコヤ系真珠の出現率に関して新たな事実を明らかにする。

⁴ K. Schörle のローマ時代の真珠の研究は、シュトラックの数字を問題視せずに参照している。Katia Schörle, “Pearls, Power, and Profit: Mercantile Networks and Economic Considerations of the Pearl Trade in the Roman Empire,” in *Across the Ocean: Nine Essays on Indo-Mediterranean Trade*, ed. Federico de Romanis and Marco Maiuro (Leiden: Brill, 2015), p. 49 (note 32).

⁵ Molly A. Warsh, “Enslaved Pearl Divers in the Sixteenth Century Caribbean,” *Slavery and Abolition*, vol. 31, no. 3 (September 2010), p.346; Molly A. Warsh, “A Political Ecology in the Early Spanish Caribbean,” *William and Mary Quarterly*, 3rd series, vol. 71 (2014), p. 530; Molly A. Warsh, *American Baroque: Pearls and the Nature of Empire, 1492-1700* (Chapel Hill, University of North Carolina Press, 2018), p. 62.

⁶ 松井佳一『真珠の事典』（北隆館、1965年）、433頁。

三重県水産試験場の調査報告以外には、水産養殖の専門家だった池ノ上宏の記述、19世紀のアレクサンダー・フォン・フンボルトの記述、同じく19世紀のイギリス人、ジェームズ・コーディネアの記述も参照する⁷。また20世紀初めのセイロン島の真珠採取に関するイギリス植民地政府の報告書も使用する⁸。

クロチョウ真珠の出現率については、十分な水産学的研究が行われてこなかったと考えられる⁹。クロチョウガイは、アコヤ真珠貝と違って、海域における生息数が少なく、真珠の出現率もきわめて低いためである。調査・分析できるほどの真珠貝を集めることができなかったのである。それゆえ、本章では、10世紀後半のアラビア語文献『インドの驚異譚』に収録されているオマーン沖の真珠採取の逸話を分析することによって、クロチョウ真珠の出現率を検討する¹⁰。『インドの驚異譚』は、10世紀のペルシア系の船主ブズルク・イブン・シャフリヤールが当時のインド洋海域世界で活躍する船乗りたちが語っていたさまざまな話を収録し、母語でないアラビア語を使って書いた逸話集である。奇想天外な話もあるが、事実と思われる話も少なくなく、10世紀やそれ以前のインド洋海域世界の船乗りたちの実態や海上交通の状況を示す貴重な一次史料と見なされている。R. A. ドンキンも『インドの驚異譚』を参照しているが、この真珠採取の逸話には言及していない。したがって、オマーン沖の真珠採取の逸話を真珠史の観点で分析するのは、本論文が初めてである。それによって、アコヤ系真珠と対照的なクロチョウ真珠の生態系的特質を明らかにすることができる。

0.3 本章の構成

第1節：アコヤ系真珠の生態系

第2節；クロチョウ真珠の生態系

第1節 アコヤ真珠貝の生態系

1.1 アコヤ系真珠の採取量

本節では、アコヤ真珠貝の採取量、その真珠の出現率と大きさについて考察するが、その前にアコヤ真珠貝の収穫量について概観しておく。アコヤ真珠貝は、海底の岩礁に足糸

⁷ 池ノ上宏『アラビアの真珠採り』（イケテック、1987年）、99頁；アレクサンダー・フォン・フンボルト（大野英二郎・荒木善太訳）『新大陸赤道地方紀行（上）』（岩波書店、2001年）；James Cordiner, *A Description of Ceylon*, vol. 2 (London: Longman, 1807)；山田篤美『真珠の世界史——富と野望の五千年』（中央公論新社、2013年）、5~8頁。

⁸ W. A. Herdman, *Report to the Government of Ceylon on the Pearl Oyster Fisheries of the Gulf of Mannar*, 5 vols. (London: The Royal Society, 1903).

⁹ 筆者は、クロチョウ真珠の出現率について『真珠の世界史』で言及したが、典拠が不十分なことが判明し、本論文では使用しない。

¹⁰ ブズルク・イブン・シャフリヤール（藤本勝次他訳注）『インドの不思議』（関西大学出版・広報部、1978年）；ブズルク・ブン・シャフリヤール（家島彦一訳注）『インドの驚異譚』全2巻（平凡社、2011年）。

を出して付着し、群生する傾向がある。そのためにアコヤ真珠貝は、一度の潜水で多くの貝が採取できた。

では、天然真珠時代、どれくらいの量が採取されていたのだろうか。これについては、20世紀初めのイギリス植民地政府のマンナール湾真珠採取の報告書が詳細な数量を記録している¹¹。マンナール湾はアコヤ真珠貝を優占種とする海域である。報告書によれば、同湾では潜水夫は1回の潜水で平均25から35個の真珠貝を集め、一日40回から50回潜水した。一人一日1,000個の採取が平均であった。1隻の船には10人程の潜水夫が乗っていたため、1隻の真珠採取船の水揚げ量は1日平均約1万個と見積もられていた。豊漁時には平均2万個を超えることがあった。300隻の船が出航していれば、1日で300万個の真珠貝が採取されたことになる。

このように1回の潜水で採れる貝の量が多かったため、マンナール湾では一シーズンに数百万個から数千万個の真珠貝が採取されてきた。1905年は豊漁の年として知られ、8千万個以上が採取された。これは例外的な豊漁の年であり、だいたい多い時で3千万~4千万台であり、1,000万個に届かない年もあった。休漁の年も少なくなかった¹²。このように採取量には幅があるが、アコヤ真珠貝は、数百万個、数千万個の採取が可能な貝であった。この採取量の多さこそが、アコヤ真珠貝の真珠採取が産業として成立してきた大きな要因のひとつであった。

1.2 三重県水産試験場の調査結果

では、天然のアコヤ真珠貝から、どれくらいの割合で真珠が出現したのだろうか。これについては、20世紀初めの三重県水産試験場の天然アコヤガイの真珠の産出量の調査報告がある。この調査では、45,337個の天然のアコヤガイが採取され、これらの貝から出る真珠の数や大きさが調べられた。その結果、3008個のアコヤガイから12,141個の真珠を得た。天然のアコヤガイは、必ずしも1個の貝につき1個の真珠を含んでいるのではなく、数個、数十個の真珠を含んでいることも少なくなかった。ただ、ひとつの貝に数十個入っている真珠は極めて微細な真珠である。この調査では、3008個のアコヤガイから、12,141個の真珠が出ているので、真珠が採れた貝は平均で4個の真珠を含んでいたことになる。その真珠の大きさと数量は表1のとおりである¹³。表1の「ドロダマ」とは、真珠貝の稜柱層からできた黒っぽい生体物のことである¹⁴。

¹¹ Herdman, *Report to the Government of Ceylon on the Pearl Oyster Fisheries of the Gulf of Mannar*, vol. 1. pp. 4, 96-7, vol. 3, pp. 13-4; 山田『真珠の世界史』、108~111頁。

¹² Herdman, *Report to the Government of Ceylon*, vol. 1. p. 4; George Frederick Kunz and Charles Hugh Stevenson, *The Book of the Pearl: Its History, Art, Science and Industry* (1908; New York: Dover Publications, 1993), pp. 104-5.

¹³ 松井佳一『真珠の事典』、433頁。

¹⁴ 稜柱層は真珠貝の貝殻内面の外殻層のことである。ドロダマは、稜柱層真珠 (*prismatic pearl*) と呼ばれることもある。ただ、本論文は、真珠層真珠を「真珠」とするため、ドロダマを「真珠」と見なさない。稜柱層とその生体物については、和田『真珠の科学』、29~30

表1 45,337個のアコヤガイから得た真珠の重量と数 (3,008個が真珠とドロダマを含有)

真珠の 大きさ	1個0.14g 以上	100個あたりの重量				ドロダ マ(稜柱 層真珠)	合計
		5g 以上	2g 以上	0.5g 以上	0.1g 以上		
真珠の数	7	35	263	1,204	10,562	70	12,141

表1の100個単位の重量を真珠1個の重量に直し、さらにその重量から真珠の直径を導くと、表2のとおりである。

表2 45,337個のアコヤガイから得た真珠の大きさと数 (3,008個が真珠とドロダマを含有)

真珠1個 の重量	1個0.14g 以上	0.05g 以上	0.02g 以上	0.005g 以上	0.001g 以上	ドロダ マ	合計
真珠の 直径	4.7mm 以上	3.2mm 以上	2mm 台 以上	1mm 台 後半以上	1mm 前後 ¹⁵		
真珠の数	7	35	263	1,204	10,562	70	12,141

この調査報告から、真珠の大きさ、重量、出現率などについて、次のことが読み取れる。まず、大きさによる真珠の分類についてであるが、この調査報告は、直径4.7ミリ以上の真珠を最大の真珠に分類している。そのことは、この大きさが最大の真珠の範疇となり、1個単位で扱われる真珠となることを示している。その一方で、4.7ミリ未満の真珠だと、100個単位でまとめて扱われる真珠となることも示している。この調査報告で興味深いことは、重量がわずか0.001グラム、直径1ミリ前後の真珠も、「真珠」と見なされ、その数量が数えられていることである。天然真珠時代、直径1ミリ前後の真珠も、「真珠」だったことがわかる。

調査報告によると、直径4.7ミリ以上の真珠は、採取された45,337個のアコヤガイからわずか7個しか出ていない。真珠の出現率は約0.015パーセントで、1万個の換算では約1.5個の割合となる。ただ、3.2ミリ以上の真珠を入れて考察すると、真珠の総数は42個、出現率は約0.09パーセントとなり、出現率は増加する。1万個では約9個出たことになる。2ミリ台以上の真珠について考えると、真珠の総数は305個である。出現率は約0.67パーセントとなり、1万個では67個出たことになる。

ここで注意しなければならないのは、重量0.001グラムから0.005グラム未満の真珠の

頁を参照。

¹⁵ G. F. クンツらによると、約0.003グラムの真珠は、直径1.3ミリである。彼らの重量と直径の換算表はそれ以下の値を記していないが、0.001グラムの真珠は、直径1ミリ前後と推測できる。Kunz and Stevenson, *The Book of the Pearl*, p. 328.

量の多さである。これらは直径 1 ミリ前後の真珠となる。三重県水産試験場の調査では、45,337 個のアコヤガイから 10,562 個の真珠が出ている。ドロダマを除いた真珠の総数は 12,701 個であり、個数で見ると全体の 83 パーセントを占めている。

重量から考察すると、ドロダマを除いた真珠の総数 12,071 個の総重量は、それぞれ最低値で計算したとしても、24.572 グラムとなる。直径 1 ミリ前後の真珠 10,562 個の総重量は、最低値でも 10.562 グラムとなる。重量では、直径 1 ミリ前後の真珠は、採取された真珠全体の約 43 パーセントを占めることになる。アコヤ真珠貝から直径 1 ミリ前後の真珠が採れる割合は、きわめて高いことがわかる。

以上、三重県水産試験場の調査報告を分析した。アコヤ真珠の出現率は、真珠の大きさによって異なり、直径 4.7 ミリ以上の真珠の出現率は、0.015 パーセントであり、3.2 ミリ以上のアコヤ真珠の出現率は、0.09 パーセントになることが判明した。その他に、真珠がさらに小さくなれば、その出現率は高くなること、特に 1 ミリ前後の微細な真珠の出現率は極めて高く、採取された真珠の重量を増やす傾向があることも解明された。真珠史の先行研究では、真珠の種類や大きさを示さずに、真珠の出現率を述べているものが少なくないが、そうした叙述は、三重県水産試験場の調査報告を分析すると、意味をなさないことが明らかになる。

1.3 ベネズエラ、ペルシア湾、マンナール湾の真珠の出現率

三重県水産試験場の調査報告から判明した日本のアコヤ真珠の出現率の数字を、ベネズエラ沖、ペルシア湾、マンナール湾のアコヤ系真珠の出現率と比べておきたい。まずペルシア湾に関する日本人研究者の記述を考察し、その後、マンナール湾、ベネズエラ沖を考察する。

ペルシア湾のアコヤ系真珠の出る割合については、1970 年代にクウェートなどに滞在した水産養殖の専門家だった池ノ上宏が、次のように述べている。

真珠貝のなかに天然真珠が入っている確率というのは非常に低いもので、一万個の貝のなかから僅か一五～二〇グラムの真珠しか採れず、しかもこのうち直径が四ミリ以上あるまともな真珠は二～三個あれば良い方であった。

ペルシャ湾での調査によると、或る時一隻の真珠漁船が一週間に三万五千個の貝を採集したが、出てきた真珠は僅か二一個で、このうち商品価値のあるものはたったの三個だったそうだ¹⁶。

この記述から、ペルシア湾では直径 4 ミリ以上のアコヤ系真珠が、商業的価値のある理想的な真珠であることがわかる。真珠の出現率は 1 万個を基準としており、4 ミリ以上の真珠の出現率は、0.02 パーセントから 0.03 パーセントであることもわかる。ただ、実測の事

¹⁶ 池ノ上『アラビアの真珠採り』、99 頁。

例では、35,000 個の貝から出た商品価値のあるものは 3 個しか出ておらず、その出現率は 0.0086 パーセントとなっている。1 万個から 1 個採れるか、採れないかが、現実の数字であり、2~3 個採れば上々であったことが分かる。

ランドマンらは、クウェートでは 4,200 個の真珠貝から直径 3 ミリ以上の真珠が 1 個の割合で出たと述べていた。出現率は、約 0.024 パーセントであり、1 万個換算だと、2.4 個である。

ベネズエラの真珠の出現率については、19 世紀初め、南米諸地域の歴訪中にベネズエラに立ち寄ったドイツ人探検家、アレクサンダー・フォン・フンボルトの記述がある。彼はクバグア島の真珠について語っており、一万の貝を採っても、「値打ちのある真珠」がひとつも見つからないことも珍しくない述べている¹⁷。クバグアの真珠は、アコヤ系真珠である。フンボルトの語る「値打ちのある真珠」の大きさは定かでないが、1 万個の貝から 1 個出るか、出ないかという出現率は、ペルシア湾の実測の数字と同じである。

マンナール湾の真珠については、19 世紀初めのイギリス人、ジェイムズ・コーディナーによるセイロン島の真珠採取の記録がある。彼は、1 万 7000 個の貝から 2 個の完璧な真珠、20 個から 30 個のややゆがんだ真珠が得られると述べ、さらに小さなサイズが数多くあるが、それらは「丸くて完璧」であると続けている¹⁸。コーディナーの言う 2 個の「完璧な真珠」の大きさは不明であるが、出現率は 0.012 パーセントである。20 個から 30 個の「ややゆがんだ真珠」の出現率は、0.12 パーセントから 0.18 パーセントとなる。一方、コーディナーが語る「丸くて完璧」な小さなサイズの真珠は、おそらく直径 2 ミリ、3 ミリぐらいだろう。直径 1 ミリ前後の真珠も含まれていたかもしれないが、「丸くて完璧」という印象を強く与えるのは、直径 2 ミリ、3 ミリの真珠である。コーディナーが語る小さなサイズの真珠は、こうした真珠と推測できる。

このように天然真珠時代の真珠の出現率の記述は、漠然としているが、共通の傾向がある。池ノ上やフンボルト、コーディナーは、真珠貝 1 万個あるいは数万個から真珠が数個出るか出ないかということ語っており、真珠貝から真珠が出る割合は、万単位で数えて、幾つ出るかというのが、当時の真珠の出現率の指標であったことがわかる。

池ノ上によると、直径 4 ミリ以上の真珠の出現率は、0.02 パーセントから 0.03 パーセントになる。ランドマンらの報告では、直径 3 ミリ以上の真珠の出現率は、約 0.024 パーセントである。コーディナーの「完璧な真珠」の大きさは定かではないが、これらの真珠の出現率は、0.012 パーセントである。一方、三重県水産試験場の調査報告では、4.7 ミリ以上のアコヤ真珠の出現率は、0.015 パーセントであった。真珠の出現率は、真珠漁の状況、真珠の取り出し方や真珠選別の違い、海域や海底の状態などにも影響されるのも事実である。しかし、ペルシア湾でも、マンナール湾でも、三重県の海域でも、最大の真珠、または良質の真珠と見なされるアコヤ系真珠の出現率は、0.01 パーセントから 0.03 パーセン

¹⁷ フンボルト（大野・荒木訳）『新大陸赤道地方紀行（上）』、164 頁。

¹⁸ Cordiner, *A Description of Ceylon*, vol. 2, p. 63.

トぐらいであり、アコヤ系真珠は海域が違っても、真珠の出現率にそれほど差がないことがわかる。とくに、三重県水産試験場の 0.015 パーセントは、池ノ上やコーディナーの語る数字の間であり、妥当な数字であると考えられる。こうしたことを勘案し、本論文は、直径 4.7 ミリ以上のアコヤ真珠及びアコヤ系真珠の出現率は、0.015 パーセントとする。ただ、それより小さい真珠や品質の悪い真珠はかなりの量が出ていたことを忘れてはならない。三重県水産試験場の調査報告によると、3.2 ミリ以上の真珠の出現率は約 0.09 パーセントであり、真珠は小さくなると出現率は高くなる。

1.4 アコヤ系真珠の大きさとその利用法

次にアコヤ系真珠の大きさについて考察しておきたい。

日本には江戸時代に大村湾で採れた 9 ミリ台、10 ミリ台のアコヤ真珠が残っているが、これらはきわめて例外的なことである¹⁹。水産研究者の白井祥平は、アコヤ真珠の標準の大きさを直径 3 ミリから 7 ミリと考えている。カタール博物館庁の学芸員、H. バリは、アラビア湾で採取される真珠の平均的な大きさは、3 ミリから 6 ミリであったと記している。ランドマンらは、アコヤ系真珠は、直径 8 ミリ以上は稀であったが、3 ミリ以下の真珠は少なくなく、クウェートでは、今でも 3 ミリ以上の真珠が商業的に価値があると述べている。G. F. クンツらによると、マンナール湾では、2 グレーン (0.1 グラム) 以下の真珠 (直径 4.18 ミリ) が主流であり、10 グレーン (0.5 グラム) 以上の真珠 (直径 7.15 ミリ) も採れることもあったが、きわめて稀であった。クンツらは、ベネズエラの真珠も概して小さかったが、ごく稀に 9 ミリ台に達することがあったと述べている²⁰。

これから本論文で見ていくように、16 世紀のヨーロッパでは、真珠の単位のひとつとしてカラットが使われてきた。グレーンも使われるが、真珠の価格を示す際には、1 カラット (0.2 グラム) の真珠が価格の基準となっている²¹。1 カラットの真珠は、直径 5.23 ミリの真珠である。三重県水産試験場の調査報告は、4.7 ミリ以上の真珠を最大の真珠に分類していたが、4.7 ミリと 5.23 ミリは値も近く、1 カラットの真珠はアコヤ系真珠の最大の大きさの範疇に入ることがわかる。

以上、水産学者たちによるアコヤ系真珠の大きさについての見解、価格の基準としての 1 カラットの真珠、それに三重県水産試験場の調査報告の分類方法などを勘案し、本論文は

¹⁹ 松月清郎「特別企画 日本の真珠」アメリカ自然史博物館およびフィールド博物館企画『「パール」展』図録 (国立科学博物館、2005~2006 年)、157 頁参照。

²⁰ 白井『真珠・真珠貝世界図鑑』(海洋企画、1994 年)、31 頁；白井祥平『真珠——海の宝石の神秘を探る』(講談社、1967 年)、19 頁；ユベール・バリ (木下哲夫訳)『パール 海の宝石』(2012 年、ブックエンド)、55 頁；Landman et al., *Pearls*, pp. 56-7; Kunz and Stevenson, *The Book of the Pearl*, pp. 124, 232. 1 グレーンは、0.05 グラム。

²¹ Jan Huygen van Linschoten, *Itinerario: Voyage ofte schipvaert van Jan Huygen van Linschoten naer Oost ofte Portugaels Indien 1579-1592*, ed. H. Kern (The Hague: Martinus Nijhoff, 1955-7), vol. 2, p. 183 (chap. 91); リンスホーテン (岩生成一他訳)『東方案内記』(岩波書店、1968 年)、565 頁。

アコヤ系真珠の大きさについて次のように考える。

(1) アコヤ系真珠は、直径 1 ミリ前後から最大 9 ミリ台、10 ミリ台に達するが、商業的に利用されてきたアコヤ系真珠の標準的な大きさは、直径 3 ミリから 6 ミリ台であった、

(2) 7 ミリ台は採れない大きさではなかったが、たまにしか出現せず、8 ミリ台以上は、きわめて稀であり、例外的に採れる真珠であった、

(3) 直径 5～6 ミリ台のアコヤ系真珠が一級品の真珠であったが、特に 1 カラット、すなわち直径 5.23 ミリの真珠が、一級品のアコヤ系真珠の標準的な大きさとなってきた。

直径 3 ミリから 6 ミリ台の真珠は、今日の養殖真珠の基準から見れば、決して大きな真珠ではない。ただ 3 ミリから 6 ミリ台の真珠は、大きさにそれほど差がなく、それがまとまってあれば、粒がそろった真珠となり、連珠やネックレスに使用するのに最適となる。また、この大きさのアコヤ系真珠は、光の干渉効果が強く出るため、丸く、光沢の強い美しい真珠となる。真珠は小さくなるについて、出現率が高くなるので、天然真珠時代、アコヤ系真珠は、もっとも多くの量が確保できる海産真珠であった。つまり、アコヤ系真珠は良質な真珠であり、その量の多さによって、商品、交易品として利用できる物品であり、商人が扱うに値する真珠だったのである。

3 ミリ以下のアコヤ系真珠についても見ておきたい。序章でも述べたように、日本や欧米の真珠業界には、「ケシ真珠」、「砂ゲシ真珠」、*seed pearl*、*dust pearl* と呼ばれる真珠がある。文字通り、ケシ粒や砂粒、種やほこりほどの大きさの真珠である。*seed pearl* は、20 世紀初めの定義によると、0.5 グレーン（直径 2.65 ミリ）以下の真珠を指す。今日の真珠業界は、直径 2 ミリ以下の真珠を *seed pearl* とする²²。

seed pearl は糸でつなぐと、ビーズのような風合いとなり、19 世紀のヨーロッパでは宝飾品の素材として大いに利用されてきた。現存する 19 世紀のシード・パール・ジュエリーには、直径 1 ミリ前後の真珠が使われているものも少なくない²³。当時、宝飾品に加工された *seed pearl* はもっと小さかったことがうかがえる。砂ゲシ真珠もネックレスに加工されるが、それは輝く一条の糸となる。真珠は微細になればなるほど、逆に穿孔が難しくなり、値段も高くなる。今日、砂ゲシ真珠の穿孔はインド人だけが可能な独占的技術となっている。小さい真珠が不良品の真珠ではない。

しかし、真珠史の先行研究では、*seed pearl* は、二流の真珠であり、すなわち薬用であるという認識が強い²⁴。確かに真珠によっては、大きさや品質などで分類されて、一定量が集められ、薬の材料として、粉末にされることもあった。ただ、微細な真珠だから、すべてが二流の真珠でもなく、粉末にされるものでもないことを理解しておく必要がある。

微細な真珠は、ひとつの真珠貝につき 1 個含まれているのではなく、数十個、あるいは

²² Kunz and Stevenson, *The Book of the Pearl*, p. 56; Landman et al., *Pearls*, p. 57.

²³ 山田『真珠の世界史』、113～114 頁。シード・パール・ジュエリーあるいは砂ゲシ真珠のジュエリーは、インドのアジャンターの壁画でも見ることができる。

²⁴ S. Jeyaseela Stephen, “Commercial Activities of the Portuguese in the Pearl Fishery Coast,” in *Portuguese in the Tamil Coast* (Ponicherry: Navajothi, 1998), p. 82.

100 個以上入っている場合も少なくない。1 個のアコヤガイから 508 個の真珠が見つかったという報告もある²⁵。そうした真珠の多くは、直径 1 ミリ前後の真珠である。16 世紀のスペイン人フランシスコ・ロペス・デ・ゴマラは、彼の著作 *Historia general de las Indias* 『インディアス総合史』の中で、新世界の真珠貝について語り、真珠貝は、10 個、20 個、30 個の真珠 (*perlas*)、中には 100 個以上を含んでいる、と記している²⁶。ゴマラの翻訳者や歴史学者は、こうした記述について、ゴマラの手記は、自然に関する誤謬が多いと見なしてきた²⁷。しかし、真珠貝がアコヤ真珠貝で、微細な真珠だとありえる話である。生態系の理解が必要なのは、今日の研究者である。真珠の生態系を理解していないと、一次史料を読み間違える恐れがある。

第 2 節 クロチョウ真珠の生態系

本節では、アコヤ系真珠とともに人類に珍重されてきたクロチョウ真珠の出現率についても検討する。インド洋海域世界のクロチョウガイは、波の荒い外洋の岩礁や珊瑚礁地帯に単独で生息することが多く、アコヤ真珠貝よりも深い海に生息する²⁸。したがって、クロチョウガイは採取そのものが難しく、貝の採取量が少ないことから、真珠の出現率に関しては、その詳細が明らかになっていない。アコヤ真珠貝のように、大量採取して数値を出せるような貝ではなかったのである。

そうした中、クロチョウ真珠の出現率について示唆を与えてくれるのが、『インドの驚異譚』に収録されているオマーン沖の真珠採取の逸話である。本節では、この逸話集に収録された真珠採取の話をも参照して、クロチョウ真珠の出現率を検討する。

2.1 クロチョウ真珠の出現率

『インドの驚異譚』のオマーン沖の真珠採取の逸話は、「みなしご」(*yatīma*) という名の大型真珠 (*durr*) の話である。舞台がクロチョウ真珠の生息地として名高いオマーン沖であり、大型真珠の逸話であるため、その真珠はクロチョウ真珠と推定できる。逸話にはアッバース朝 5 代カリフのハールーン・ラシードが登場するので、8 世紀末から 9 世紀初めに成立したと考えられている。おそらく実話であり、次のような内容である²⁹。

オマーンに敬虔な真珠採取業者がいたが、真珠が採れない時期が続き、破産に直面

²⁵ 松井『真珠の事典』、433 頁。

²⁶ Francisco López de Gómara, *Historia general de las Indias*, (Madrid: Espasa-Calpe, 1941), vol. 2, p.206; ゴマラ (清水憲男訳)『拡がりゆく視圏』(岩波書店、1995 年)、259 頁。

²⁷ ゴマラ (清水訳)『拡がりゆく視圏』「解説」、308 頁。

²⁸ Kunz and Stevenson, *The Book of the Pearl*, p. 140; 白井『真珠』、182 頁。

²⁹ ブズルク・イブン・シャフリヤール (藤本訳注)『インドの不思議』、96~98 頁 (第 87 話); (家島訳注)『インドの驚異譚 (2)』、53~58 頁 (第 93 話)。

した。そこで彼は、妻が所有する最後の高価な腕輪を換金して、資金を作った。潜水夫たちを雇用して、2ヶ月間、オマーン沖で真珠採取を実施した。当時、潜水夫たちは2ヶ月間のみ真珠採取に従事できるという決まりであった。潜水夫たちは59日間、潜水し、真珠貝を採取したが、真珠は出てこなかった。60日目、やけになった潜水夫が悪魔の名を唱えて海に潜り、ひとつの大粒真珠を得たが、敬虔な真珠採取業者は、悪魔を称えて採取された真珠を嫌い、受け取らなかった。その後、潜水夫たちが神の名を唱えて潜水すると、2個の大粒真珠を得た。その内、ひとつは「みなしご」と名付けられた特大の真珠で、もうひとつはそれよりやや小さな真珠だった。真珠採取業者はカリフ・ラシードの下に行き、それらの真珠をそれぞれ7万ディルハム、3万ディルハムという高値で売却することができた。オマーンに帰ると、手に入れた10万ディルハムで豪邸を建て、土地や不動産を購入したので、彼の家はオマーンで評判となったという。

以上が「みなしご」真珠の逸話の要約である。この逸話では、潜水夫たちが60日間潜って、得た真珠はわずか3つであった。逸話は、潜水夫の人数や潜る回数は伝えていないが、クロチョウ真珠が採れる割合は極めて低いことがわかる。ただ、採れた真珠は「みなしご」という名がつけられるほどの無二の大きさの真珠であった。序章で述べたように、クロチョウ真珠は、15.5ミリを超えると、球形が崩れ、ドロップ型やバロック真珠となり、さらに20ミリ、30ミリの大きな真珠となっていく。「みなしご」真珠は、こうした特大の真珠だったことが推定できる。真珠採取業者は、それらの真珠を時のカリフに献上し、対価を得ているので、大粒真珠は流通に乗る真珠ではなく、献上される真珠であったこともわかる。クロチョウ真珠の生産量はわずかであるが、大粒真珠を数個得れば、それだけで財が成せることを伝えている。この逸話により、クロチョウ真珠の採取は、一獲千金型の真珠採取業であり、市場に流通させるための真珠採取ではなかったことが明らかになる。

また、この話は、真珠採取の雇用形態についても興味深い情報を伝えている。潜水夫は真珠採取業者に雇用される労働者の存在であり、獲得した真珠は潜水夫ではなく、雇用主の所有になった。すでに8世紀末から9世紀初めに、真珠採取業では資本と労働の分離が始まっていたことを示している。潜水夫の雇用期間は60日と定められており、オマーン湾岸では真珠採取の労働条件の取り決めがあったことも明らかになる。

このように、「みなしご」真珠の逸話から、クロチョウ真珠が出る割合はきわめて低いことがわかる。ただ、この逸話は人口に膾炙されて、ブズルク・イブン・シャフリヤールが『インドの驚異譚』に収録した話であったので、実際はこうしたことすら滅多に起こらない話であったことがわかる。クロチョウ真珠を得ることは、きわめて難しかったのである。

小括

本章では、アコヤ系真珠とクロチョウ真珠を取り上げ、天然真珠時代における真珠の出

現率、大きさなどを検討した。アコヤ系真珠については、20世紀初めの三重県水産試験場の調査報告を参照することで、直径4.7ミリ以上の真珠の出現率は、0.015パーセントであり、3.2ミリ以上のアコヤ真珠の出現率は0.09パーセントであることを解明した。さらに、真珠が小さくなるほど出現率が高くなることも明らかにし、真珠の大きさに言及しないで、出現率を語れないことを指摘した。三重県水産試験場の調査報告から導いた数字は、ペルシア湾やマンナール湾など、他の海域のアコヤ真珠にも適用できることも明らかにした。

また、本章は水産研究者などの見解を分析することで、アコヤ系真珠は、直径1ミリ前後から最大9ミリ台、10ミリ台に達するが、商業的に利用されてきたアコヤ系真珠の標準的な大きさは、直径3ミリから6ミリ台であることを確認し、直径5～6ミリ台のアコヤ系真珠が一級品の真珠であったが、特に1カラット、すなわち直径5.23ミリの真珠が、一級品のアコヤ系真珠の標準的な大きさと見なすことができると判断した。

一方、クロチョウ真珠については、10世紀後半のアラビア語文献『インドの驚異譚』の逸話を分析することで、本章は、潜水夫たちが60日間潜っても、3個しか真珠は得られない場合があるが、いったん大粒真珠を獲得すれば、時の支配者に献上し、莫大な対価を得られることを明らかにした。

以上のことをまとめると、人類に珍重されてきた海産真珠には、小さいながらも、粒がそろい、高品質で、大量に採取できるアコヤ系真珠と、真珠は滅多に採れないが、一度採れると献上用となる大粒のクロチョウ真珠があることがわかる。アコヤ系真珠とクロチョウ真珠は、その出現率も用途も対照的である。商人の流通網に乗るのは、クロチョウ真珠ではなく、小さいながらも、粒のそろった大きさ、高い品質と量の多さが特徴のアコヤ系真珠である。よって、本論文が採用したコモディティ・チェーン分析の対象としてアコヤ系真珠を取り上げることの妥当性が、真珠の生態系の考察から確認できるのである。

第2章 *aljofar* とは何か？

はじめに

16世紀のポルトガル語文献やスペイン語文献には、真珠を意味する *aljofar* という語が登場する¹。真珠史に関する先行研究では、*aljofar* は多くの場合、*seed pearls* と訳されてきた。第1章で検討したように、20世紀初めの定義によると、*seed pearl* は、直径2.65ミリ以下の真珠を指すが、実際はさらに小さく、2ミリ以下、1ミリ前後の真珠が *seed pearl* として使われていた。*aljofar* を *seed pearls* と訳すと、この語が指す真珠はきわめて小さな真珠となる。はたして *aljofar* を *seed pearls* と訳するのは適切なのだろうか。

本章では、真珠の生態学的視点を取り入れ、一次史料の真珠の語彙を分析することで、16世紀に使用された *aljofar* がどのような真珠を指したのかを考察し、この語が普通に「真珠」として使われる語であり、特にアコヤ系真珠に適用されたことを明らかにする。*aljofar* の考察は、これまで真珠史研究でも、歴史学でもなされてこなかった。本章で初めて議論される。

0.1 辞書及び翻訳書における *aljofar* の解釈

aljofar は、辞書や翻訳書などでは、どのように解釈されてきたのだろうか。

ポルトガル語の一次史料研究に欠かせない辞書が、S. R. ダルガドの *Glossário Lusó-Asiático* 『ポルトガル語とアジア言語の用語解説』である。ここでは、*aljófár* は「細かい真珠」(*pérolas miúdas*) と解説されている。今日のポルトガル語辞書 *Grande dicionário da língua portuguesa* は、*aljófár* を「上等でなく、細かく、不揃いの真珠」(*pérolas menos finas, miúdas, desiguais*) と説明している²。一方、スペイン語辞書 *Diccionario ideológico de la lengua española* は *aljófár* を「不揃いの小粒真珠」(*perla irregular y pequeña*) としている³。

英語の辞書では、*A Portuguese-English Dictionary* が、*aljófere* を *seed pearls*、*Oxford Spanish Dictionary* が *aljófár* を *seed pearl* としている。ただ、*Oxford Portuguese Dictionary* のように、辞書によっては、*aljófár* または *aljófere* という語そのものを取り上げていないものもある⁴。

¹ 今日、*aljofar* は、ポルトガル語では *aljófár* (アルジョーフアル)、スペイン語では *aljófár* (アルフォーファル) と表記される。ポルトガル語には *aljófere* という表記もある。本論文でこの語を論じる時は、辞書の解説及び一次史料からの引用などを除き、基本的に *aljofar* と表記する。*aljofar* は男性形集合名詞である。

² Sebastião Rodolfo Dalgado, *Glossário Lusó-Asiático* (1919-21; New Delhi: Asian Educational Services, 1988), s. v. “aljófár, aljófere”; *Grande dicionário da língua portuguesa*, 10th and rev. ed. (1949), s. v. “aljófár.”

³ *Diccionario ideológico de la lengua española*, 2nd ed. (2007), s. v. “aljófár.”

⁴ James L. Taylor, *A Portuguese-English Dictionary*, rev. ed. (1958; Stanford: Stanford University press, 1970), s. v. “aljófres”; *Oxford Spanish Dictionary*:

日本の辞書では、『現代ポルトガル語辞典』が *aljofar* を「小粒真珠」とし、『西和中辞典』は「小粒でふぞろいな真珠」、「くず真珠」と解説している⁵。

このように、ポルトガル、スペイン、日本の辞書は、*aljofar* を「細かい真珠」、「不揃いの真珠」、「小粒真珠」、「くず真珠」などと説明し、英語の辞書は *seed pearl(s)* と解説してきた。

ポルトガル語やスペイン語の16世紀・17世紀の一次史料を英訳してきた西洋の翻訳者たちのほとんどは、*aljofar* を *seed pearls* と訳してきた。ただ、中にはそのことに疑問を呈す翻訳者も存在した。17世紀初めのユダヤ系ポルトガル人、ペドロ・テイシェイラの紀行文を翻訳した W. F. シンクレアは、「テイシェイラは繰り返し *aljofar* をフルサイズの真珠を意味するものとして使っており、私は文脈に従って翻訳しなければならなかった」と述べている⁶。16世紀初めのポルトガル人トメ・ピレスの *Suma Oriental* 『オリエント概要』を英訳した A. コルテザンも、*aljofar* は普通の真珠の意味で使われていると述べている⁷。ただ、こうした例は多くはなく、多くの一次史料の *aljofar* が無条件で *seed pearls* と英訳されることになった。

日本の動向を述べておくと、スペイン語一次史料の翻訳では、*aljofar* は「小粒真珠」、「くず真珠」などと訳されてきたが、ポルトガル語一次史料の翻訳では、「真珠母」という訳が使われることが多い。「真珠母」は、生田滋が中心的な翻訳者となったピレスの *Suma Oriental* の邦訳書『東方諸国記』やジョアン・デ・バロスの *Decada da Asia de João de Barros* の邦訳書『アジア史』など、16世紀の重要なポルトガル語一次史料で使用されてきた⁸。『東方諸国記』の翻訳者自身が、注において「*aljofar* は小粒の真珠の意味で、真珠母と訳した」と述べている⁹。

しかし、*aljofar* を「真珠母」と訳すのは適切ではない。なぜなら「真珠母」は真珠ではなく、真珠貝に使われる言葉だからである。ポルトガル語には *madrepérola* という言葉がある。文字どおり、「真珠の母」であるが、これは真珠貝や真珠層を意味する。真珠を生み出す真珠貝は、英語では *Mother of Pearl* あるいは *MOP* と呼ばれ、日本では「母貝」と呼

Spanish-English/English-Spanish, 3rd ed. (2003), s. v. “aljófar.” *Oxford Portuguese Dictionary: Portuguese-English, English-Portuguese*, 1st ed. (2015) には *aljófar* やそれに類する語は掲載されていない。

⁵ 『現代ポルトガル語辞典 (3訂版)』(白水社、2014年)「aljófar」；『西和中辞典』(小学館、1990年)「aljófar」。

⁶ Pedro Teixeira, *The Travels of Pedro Teixeira; With his "Kings of Harmuz," and Extracts from his "Kings of Persia,"* trans. and ed. William F. Sinclair, with further notes by Donald Ferguson (1902; Nendeln: Kraus Reprint, 1967), p. 179 (note 6).

⁷ Tomé Pires, *The Suma Oriental of Tomé Pires: An Account of the East, from the Red Sea to Japan*, ed. Armando Cortesão (1944; Nendeln: Kraus Reprint, 1967), vol. 2, p. 517.

⁸ トメ・ピレス (生田滋他訳)『東方諸国記』(岩波書店、1966年)；バロス (生田滋他訳)『アジア史』全2巻 (岩波書店、1980~81年)。

⁹ ピレス (生田他訳)『東方諸国記』63頁 (注24)。

ばれる。生田らが使用する「真珠母」という言葉は、*madrepérola* や「母貝」と混同されるおそれがある。そのために *aljófar* が本来持っていた「真珠」という意味が見えなくなり、ポルトガル語の一次史料における真珠の情報は、日本人研究者に看過されることになった。生田らの邦訳書は、*aljófar* の正しい解釈で、読み直す必要がある。

0.2 真珠史研究における *aljófar* の解釈

序章で指摘したように、真珠史の先行研究でも、*aljófar* がどのような真珠を指すのか、十分考察されてこなかった。R. A. ドンキンの体系的な真珠史研究は、各言語における真珠の用語法について分析を行っているが、*aljófar* に関しては、*seed pearls*、*baroque pearls* あるいは *irregular pearls* であると述べているだけで、ほとんど議論していない¹⁰。M. A. ウォルシュの研究では、1492年の「ラテン語・スペイン語辞書」が *margarita* をスペイン語の *aljófar* と *perla* の同義語と解説していることに言及しているが、彼女の研究そのものは、*aljófar* を *seed pearls* とする解釈で議論を展開している¹¹。また、彼女の研究をはじめ、真珠史の研究では、一次史料に現れる *aljófar* の記事を無視したり、考察しないまま、真珠史の叙述が行われることがしばしばある。その問題点については、すでに序章で指摘した。真珠史研究によっては、16世紀の一次史料に *aljófar* という語があることには言及しないものも少なくない。このように、欧米の真珠史研究では、*aljófar* は問題認識されてこなかったのである。

0.3 本章の研究手法と史料

本章では、*aljófar* という語を理解するための手順として、まず人類がどのような真珠をどのように受容してきたのかを考える。具体的には、ラテン語の *margarita* と *unio* を取り上げ、プリニウスの『博物誌』を参照することで、これらの語がどのような真珠を指すのかを考察する¹²。

次に、*aljófar* の語源をアラビア語の *jawhar* から考える。ここでは13世紀のアラブ人宝石学者ティーファーシーの宝石学の書を取り上げ、*jawhar* に関する記事を分析することで、イスラーム世界で使用された真珠の語について検討する¹³。

その後、16世紀のポルトガル語一次史料に記された真珠の語彙に関する記述を分析する。本章が利用するのは、ゴア在住のユダヤ系ポルトガル人ガルシア・ダ・オルタの1563年の

¹⁰ R. A. Donkin, *Beyond Price: Pearls and Pearl-Fishing* (Philadelphia: American Philosophical Society, 1998), pp. 110, 262, 343 (note 269).

¹¹ Molly A. Warsh, *American Baroque: Pearls and the Nature of Empire, 1492-1700* (Chapel Hill, University of North Carolina Press, 2018), p. 22.

¹² Plinius [Pliny], *Natural History, with an English Translation*, trans. H. Rackham et al. (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1950-63).

¹³ Aḥmad ibn Yūsuf al-Tifāshī, *Arab Roots of Gemology: Ahmad ibn Yusuf Al Tifaschi's Best Thoughts on the Best of Stones*, ed. and trans. Samar Najm Abul Huda (Lanham: Scarecrow Press, 1998).

著作 *Colóquios dos simples e drogas da Índia* 『インドの薬草と薬物についての対話』である¹⁴。この書物には真珠に関する章があり、ヨーロッパやアジアの各言語の真珠の語彙が記されている。オルタは 1534 年にポルトガル領インドに渡って以来、30 年以上医師としてゴアに暮らした人物である。その一方で、彼は医薬や宝石を扱う貿易商であり、船舶所有者でもあった。彼はインド各地を広く旅行して、さまざまな情報や植物、薬物を集める博物学者でもあった¹⁵。したがって、オルタが語る各言語における真珠の語彙は、彼がゴアで宝石や真珠を扱う貿易商かつ博物学者としての実体験から得られたものである。オルタの記述を分析することで、16 世紀の *aljofar* がどのような真珠を指したのかを解明する。

本章の目的は、ラテン語、アラビア語、ポルトガル語の一次史料を参照することで、*aljofar* が指す真珠を明確にし、この語を無条件で *seed pearls* と訳すことが妥当でないことを指摘する。その上で、この語が普通の「真珠」、特にアコヤ系真珠に使われたことを解明する。

0.4 本章の構成

第 1 節： *aljofar* 以前の真珠の語——ラテン語の *margarita* と *unio*

第 2 節： *aljofar* の語源——アラビア語の *jawhar*

第 3 節： 16 世紀の真珠の語彙

第 4 節： なぜ *aljofar* は *seed pearls* と解釈されたのか？

第 1 節 *aljofar* 以前の真珠の語——ラテン語の *margarita* と *unio*

aljofar は、ポルトガル語では 13 世紀に使用され始めたことが知られている¹⁶。*aljofar* が登場する以前、ポルトガルやスペインなどで真珠の意味で使われていたのは、ラテン語の *margarita* と *unio* であった。まず、本節は *margarita* と *unio* にはどのような違いがあり、どのような真珠に使われたのかを考察する。

Oxford Latin Dictionary は、*margarita* を「真珠」、*unio* を「ひとつの大きな真珠」と解説している¹⁷。プリニウスは『博物誌』の中で、ローマの贅沢は、ふたつとない大きさの真珠に *unio* という名前を与えたと述べ、*unio* がローマ起源であることを説明している。彼は、クレオパトラが史上最大のふたつの真珠のイヤリングを所有しており、そのひとつを酢に入れて飲んだという故事を紹介しているが、そこで使われている真珠の語は、*unio* である¹⁸。*unio* はまさに世界に類のない特大の真珠を指していた。

¹⁴ Garcia da Orta, *Colóquios dos simples e drogas da Índia* (1895; Lisbon: Imprensa Nacional-Casa da Moeda, 1987), vol. 2.

¹⁵ 岩生成一他「解説」『東方案内記』（岩波書店、1968 年）、36 頁。

¹⁶ Dalgado, *Glossário Luso-Asiático*, s. v. “aljôfar, aljofre”; José Pedro Machado, *Dicionário etimológico da língua portuguesa*, 3rd ed. (Lisbon: Livros Horizonte, 1977), s. v. “aljôfar, aljofre,;” Donkin, *Beyond Price*, p. 262.

¹⁷ *Oxford Latin Dictionary*, second ed. (2012), s. vv. “margarīta,” “ūniō.”

¹⁸ Plinius [Pliny], *Natural History*, vol. 3, pp. 238-9, 242-5 (9. 56, 58). 本論文では、ラテン語の名詞は単数主格で表記している。

一方、*margarita* は、普通に「真珠」を指す言葉であり、ギリシア語の *margaritēs* を語源とする。プリニウスは、特大の真珠以外の真珠については、インド洋世界から来る真珠にも、ブリタニア産の色の悪い小さな真珠にも、*margarita* の語を使っている¹⁹。つまり、古代ローマの人々は、大小のさまざまな真珠がある中、普通に真珠と呼ぶものと、際立った大きさの真珠を区別して、それぞれ *margarita* と *unio* という名前を与えてきたのである。

では、*unio* と呼ばれた特大真珠は、どの貝の真珠を指したのだろうか。クレオパトラが所有していた史上最大のふたつの真珠 (*unio*) で考えてみたい。すでに第 1 章で検討してきたように、人類に珍重されてきた二大海産真珠のひとつがクロチョウ真珠である。クロチョウ真珠は、直径 20 ミリ、30 ミリ、あるいはそれ以上の大きさのドロップ型真珠や洋ナシ型真珠、バロック真珠となることがある。プトレマイオス朝はその版図が紅海に面する王朝である。この王朝の位置を勘案すれば、クレオパトラが所有していた世界にふたつとない特大真珠は、紅海に生息するクロチョウ真珠貝のドロップ型真珠や洋ナシ型真珠だった可能性が高い。特大真珠は、ヨーロッパに生息するカワシンジュガイなどの淡水産真珠貝やシロチョウガイからも出ることもあるが、プトレマイオス朝の位置を勘案すると、紅海のクロチョウ真珠と考えるのが適切である²⁰。

margarita に関しては、プリニウスが述べていたように、インド洋世界から来る真珠やブリタニア産の真珠など、特大真珠以外の真珠に使用された言葉であった。アコヤ系真珠の平均的な大きさは、直径 3 ミリから 6 ミリ台で、最大でも直径 9 ミリ、10 ミリだったので、特大の真珠にはならなかった。それゆえ、アコヤ系真珠には、*unio* ではなく、*margarita* という真珠を指す語が使われてきたことがわかる。

16 世紀のスペイン人聖職者のバルトロメ・デ・ラス・カサスは、その著書 *Historia de las Indias* 『インディアス史』の中で、彼がベネズエラのクバグア島に滞在した時に真珠貝と真珠を見たが、真珠は *unio* ではなく、普通の *margarita* であったと述べている²¹。ベネズエラのクバグア島の海域は、カリブ海のアコヤ真珠貝が優占種である。アコヤ系真珠には *margarita* という語が使用されたことが確認できる。

第 2 節 *aljófar* の語源——アラビア語の *jawhar*

先述したように、*aljófar* という語は、13 世紀にポルトガル語で使用されるようになった。ポルトガル語辞書やポルトガル語語源辞書は、*aljófar* の語源を、アラビア語の *al-jawhar* (アル=ジャウハル) としている²²。では、*jawhar* はどのような意味の言葉だろうか。

¹⁹ Plinius [Pliny], *Natural History*, vol. 3, pp. 234-5, 242-3 (9. 54, 57).

²⁰ 博物館関係者や真珠業者などは、特大の真珠の種類として、クロチョウ真珠や淡水産真珠、さらにシロチョウ真珠などの可能性を考えるが、アコヤ系真珠とは考えない。Landman et al., *Pearls*, p. 112 参照。

²¹ Bartolomé de Las Casas, *Historia de las Indias* (Madrid: Alianza Editorial, 1994), vol. 2, p. 1059 (libro 1, cap. 135); ラス・カサス (長南実訳) 『インディアス史 (二)』、388 頁。

²² *Grande dicionário da língua portuguesa*, 10th ed. (1949), s. v. “aljófar”; Machado,

アラビア語では、*jawhar* は、「宝石」や「ジュエル」という意味があり、特に「真珠」を指す。*jawhar* にはもともと「本質」という意味があるが、「宝石」や「ジュエル」という意味を当初から持っていたかどうかは定かではない。ただ、9世紀には「宝石」という意味で使われたことが文献的に知られている²³。

jawhar と真珠の関係について詳しく述べているのが、13世紀のアラブ人宝石学者ティーファージーの『最上の石に関する最上の思考』という書物である。真珠史研究ではドンキンがこの書物を引用して、「宝石」という意味の *jawhar* が特に「真珠」に使われるのは、真珠がもっとも貴重だったからだと述べている²⁴。本章では、ドンキンが引用していないティーファージーの記述も見ておきたい。

ティーファージーは、*jawhar* は真珠を指すが、それはすべての花の総称である *ward* (ワルド) という語が、最良の花であるバラを指すとの同じである、と述べている²⁵。日本的に言えば、花が桜を指すのと同じ発想である。イスラーム社会では、宝石を代表するのが真珠であり、まさに最高の宝石と見なされていたことがわかる。

ティーファージーは、この書物の中で、*jawhar*、*durr*、*lu'lu'* の関係性を論じている。

英語	アラビア語
<i>jawhar</i>	جوهر
<i>durr</i>	در
<i>lu'lu'</i>	لؤلؤ

彼によると、大きな真珠は *durr*、小さな真珠は *lu'lu'* と呼ばれるが、*jawhar* はこれら両方に使われる言葉であった。*durr* は穿孔しない真珠を指し、*lu'lu'* は、穿孔用の真珠に使われる特定の語であった²⁶。

ここで、*durr* と *lu'lu'* について解説しておくが、*durr* は、ティーファージーも述べているように、大粒真珠を指す言葉である²⁷。第1章で検討した10世紀後半のアラビア語文献『インドの驚異譚』の逸話では、オマーン沖の真珠採取で得ることができた特大真珠は、

Dicionário etimológico da língua portuguesa, s. v. “aljôfar, aljofre.” これから本節で考察するオルタの *Colóquios dos simples e drogas da Índia* は、*aljofar* の語源を、この真珠が採取されているペルシア湾アラビア側の主要な港 *Jurfar* から由来したとしているが、この見解は、今日では否定されている。Orta, *Colóquios dos simples e drogas da Índia*, vol. 2, pp. 119, 126 (nota 2) を参照。

²³ *Encyclopaedia of Islam, Supplement*, new ed., s. v. “djawhar” by M. Keene and M. Jenkins; Donkin, “*Beyond Price*”, p. 110.

²⁴ Tifāshī, *Arab Roots of Gemology*, pp. 84-91; Donkin, *Beyond Price*, pp. 109-10.

²⁵ Tifāshī, p. 84.

²⁶ Tifāshī, p. 84.

²⁷ *Encyclopaedia of Islam*, new ed., s. v. “al-durr” by J. Ruska; Donkin, “*Beyond Price*”, p. 110.

ふたつとない大きさのため、「みなしご」(*yatīma*) と呼ばれたが、真珠には *durr* という語が使われていた²⁸。*durr* は、ただの大粒真珠というよりも、類がない特大真珠を指すことがわかる。真珠の種類では、オマーン湾や紅海で主に採取されるクロチョウ真珠を指したと推測できる。

一方、真珠を指すもっとも一般的な語が *lu'lu'* である。『コーラン』において、真珠を指す語として使われているのが、*lu'lu'* である。ティーファーシーも述べていたように、この語は、穿孔用の真珠を指す²⁹。穿孔用の真珠は、穿を開け、糸を通し、連珠やブレスレット、ネックレスとして使用されるので、大きさのそろった真珠である。アコヤ系真珠は伝統的に穿孔用の真珠として使われてきたため、*lu'lu'* は、ペルシア湾や紅海で採取されるアコヤ系真珠を指していたことが推定できる。

このようにアラビア語には、特大の真珠を指す *durr* という語と普通に真珠を指す *lu'lu'* という語が存在し、それぞれクロチョウ真珠、アコヤ系真珠などに適用された。*durr* と *lu'lu'* の関係は、*unio* と *margarita* の関係と同じである。アラビア語においても、ラテン語においても、人々は大き粒真珠と普通の真珠を区別してきたのである。

以上、ティーファーシーの言説を中心に、*jawhar*、*durr*、*lu'lu'* について検討した。それによって、*aljofar* の語源の *jawhar* は、「宝石」という意味だけでなく、最高の宝石としての「真珠」という意味も持っており、*durr* と呼ばれるクロチョウ真珠にも、*lu'lu'* と呼ばれるアコヤ系真珠にも使われる言葉であったことが判明した。

この考察は、さらに次の二点を示唆する。

第一は、アラビア語の一次史料で *jawhar* という語が使われていた場合、それは「宝石」と訳されたかもしれないが、「真珠」であった可能性も高いことである。こうしたことから、アラビア語文献の翻訳で「宝石」という語がある場合は、鉱物の宝石だけではなく、真珠も含まれていたことを認識しておく必要がある。

第二は、アラビア語源の *aljofar* という言葉が、すでに 13 世紀のポルトガル語で使われていることから、オリエント世界のクロチョウ真珠やアコヤ系真珠を扱う真珠取引が、アラブ系イスラーム商人とポルトガル商人などによって実施され、13 世紀にはそうした真珠がヨーロッパにもたらされていたことである。

第 3 節 16 世紀の真珠の語彙

第 1 節、第 2 節では、*aljofar* が登場する以前のヨーロッパの真珠の語及び *aljofar* の語源となったアラビア語を検討した。では、16 世紀のポルトガルでは、*aljofar* はどのような真珠を指したのだろうか。

²⁸ ブズルク・イブン・シャフリヤール (藤本勝次他訳注) 『インドの不思議』 (関西大学出版・広報部、1978 年)、96~98 頁 (第 87 話) ; ブズルク・ブン・シャフリヤール (家島彦一訳注) 『インドの驚異譚 (2)』 (平凡社、2011 年)、53~58 頁 (第 93 話)。

²⁹ *Encyclopaedia of Islam*, new ed., s. v. "lu'lu'" by A. Dietrich.

本節では、オルタが『インドの薬草と薬物についての対話』で記している各言語の真珠の語彙を検討し、その中で *aljofar* の意味を考察する。オルタの文献を読み解くには、ポルトガル語の *pérola*、及びスペイン語の *perla* に関しても理解しておく必要がある。*pérola* や *perla* は、英語の *pearl* と同じであり、今日でも真珠を意味する単語である。ただ、その語源については、ラテン語の *pera* (石)、*perna* (イガイなどの二枚貝)、*pirum* (洋ナシ) などの諸説が存在し、いまだに解決されていない³⁰。ドンキンによると、これらの語の変異形は、すでに 12 世紀前半のフランス語文献に見ることができる³¹。

話を『インドの薬草と薬物についての対話』に戻すと、この文献の「対話 35」の章は、「*margarita*、すなわち *aljofar* について、及びチャンク貝について」(*da margarita ou aljofar; e do chanquo*) というタイトルがついている³²。オルタは、この章で各言語における真珠の語彙について説明し、次のように述べている。

スペイン語で *perla*、ポルトガル語で *perola*、ラテン語で *unio* と呼ばれるのは、*aljofar grande* のことである。細かいもの (*o miúdo*) は、ラテン語では *margarita*、アラビア語とペルシア語では *lulu*、インドの別の場所では *moti*、マラバールでは *mutu*、ポルトガル語とスペイン語では *aljofar* と呼ばれる³³。

オルタは *perla*、*perola*、*unio*、*aljofar grande* が同じ種類の真珠を指すとしている。*unio* は世界にふたつとないような特大の真珠を指していたので、*perla*、*perola*、*aljofar grande* も大粒真珠を指すことがわかる。真珠の種類では、クロチョウ真珠に使われる言葉であったと推測できる。

一方、オルタは、*margarita*、*lulu* (i. e. *lu'lu'*)、*moti*、*mutu* (i. e. *muttu*)、*aljofar* を同じ範疇の語として分類している。ラテン語の *margarita* は、普通の「真珠」のことで、アラビア語の *lu'lu'* も同様であった。*margarita* と *lu'lu'* は、主にアコヤ系真珠に使われた。*aljofar* は、これらの語と同じとされているので、普通に「真珠」を指す語であり、アコヤ系真珠に使われたことが推測できる。

aljofar は *moti* や *muttu* など、ウルドゥー語やドラヴィダ語族など、インドの言語で真

³⁰ Machado, *Dicionário etimológico da língua portuguesa*, s. v. “*pérola*”; *The Oxford English Dictionary*, 2nd ed. (1989), s. v. “*pearl*”; Donkin, *Beyond Price*, pp. 258-9. オルタは、*perla* や *perola* の語源として、*prefero* (*sic*) と *preferes* (*sic*) を挙げ、人々が何よりそれらを好むからだとしている。Orta, *Colóquios dos simples e drogas da Índia*, vol. 2, p. 119 を参照。

³¹ Donkin, *Beyond Price*, pp. 258-9.

³² Orta, *Colóquios dos simples e drogas da Índia*, vol. 2, pp. 119-24.

³³ Orta, vol. 2, p. 119. *moti* または *motī* は、ウルドゥー語やヒンディー語などで使われる語である。*muttu* は、タミル語などのドラヴィダ語族で使われる語である。ペルシア語には真珠を意味する *marvārīd* があるが、オルタは言及していない。なお、各言語における「真珠」の語は、Donkin, *Beyond Price*, pp. 154-5 を参照。但し、ドンキンは *aljofar* については考察していない。

珠を表す言葉とも対応している。*moti* や *muttu* には、対応する大粒真珠の語が示されていないため、インド各地では、これらの語が「真珠」を指す言葉であったことが明らかになる。インドを代表する真珠は、マンナール湾のアコヤ系真珠であった。インドの海域にはクロチョウガイはあまり生息しておらず、アコヤ真珠貝が優占種だったので、*aljofar* も *moti* や *muttu* 同様に、主にアコヤ系真珠を指す言葉であったことが確認できる。

ここで注意しておかなければならないことは、オルタは、*margarita*, *lu'lu'*, *moti*, *muttu*, *aljofar* が指していた真珠について、*miúdo* という形容詞を使っていることである。*miúdo* は、「細かい」の他、「微細な」、「微小の」という意味がある。文字通りにとると、「微細な」真珠になるが、*miúdo* という語は、大粒真珠に比べると小さいけれど、粒のそろった多数の真珠というニュアンスを含んでいると解釈すべきである。その意味で、*miúdo* は、アコヤ系真珠の特徴をとらえている。この言葉は、大粒真珠との比較で理解すべきである。

このように、オルタが述べる各言語における真珠の用語法を検討すると、*aljofar* は普通に「真珠」を指す言葉であり、アコヤ系真珠に使われたことが判明する。一方、*aljofar grande* は、文字通り、大きな真珠であり、クロチョウ真珠などに使われた。真珠史の先行研究では、*aljofar* は *seed pearls* と解釈されてきたが、これは妥当でないことがわかる。「真珠」と訳するのが適切である。

16世紀のポルトガル語文献とスペイン語文献では、*aljofar* は *pérola* や *perla* と並列で使われることが少なくない。すなわち、ポルトガル語文献では“*aljofar e pérolas*”、スペイン語文献では“*aljofar y perlas*”という表現である³⁴。英語への翻訳書では、こうした並列の表現も、ほとんどの場合、“*seed pearls and pearls*”と訳されてきた³⁵。しかし、オルタによると、*perla* と *perola* は *aljofar grande* なので、こうした表現は、“*pearls and big pearls*”、「真珠と大粒真珠」と訳するのが適切である。ラテン語の *margarita* と *unio* の例、アラビア語の *lu'lu'* と *durr* の例で見てきたように、人々は、アコヤ系真珠などの普通の真珠に対し、特別に大きな真珠に対して、特定の語を与えてきた。“*aljofar e pérolas*”及び“*aljofar y perlas*”も、こうした分類と同じであり、普通の「真珠」と「大粒真珠」の関係である。

真珠の種類で考えると、“*aljofar e perolas*”及び“*aljofar y perlas*”は、アコヤ系真珠とクロチョウ真珠の並列と考えられる。クロチョウ真珠以外には、大粒の淡水産真珠やシロ

³⁴ 次の文献などに見ることができる。Duarte Barbosa, *Livro do que viu e ouviu no oriente* (Lisbon: Publicações Alfa, 1989), pp. 24, 27; Alessandro Valignano, “Sumario de las cosas que pertenecen a la India Oriental y al gobierno de ella,” in *Documenta Indica*, ed. S. J. Josef Wicki (Rome: Institutum Historicum Societatis Iesu, 1975), vol. 13, p.182.

³⁵ Duarte Barbosa, *The Book of Duarte Barbosa: An Account of the Countries Bordering on the Indian Ocean and their Inhabitants*, trans. and ed. Mansel Longworth Dames, 2 vols. (1918-1921; Nendeln: Kraus Reprint, 1967), pp. 82, 93-4. 序章でも述べたように、南米ベネズエラ史研究者の E. オッテは、*perla* と *aljofar* の違いは明らかではないと記している。Enrique Otte, *Las perlas del Caribe: Nueva Cádiz de Cubagua* (Caracas: Fundación John Boulton, 1977), p. 37.

チョウ真珠などの可能性もある。ただ、16世紀にはヨーロッパ人がアコヤ系真珠の産地に進出し、大量のアコヤ系真珠を獲得した時代である。アコヤ系真珠の大粒真珠にも *perla* や *perola* という語が使われるようになったと考えられる。

オルタの言説と筆者の見解を表にすると次のとおりである。

表1 ガルシア・ダ・オルタが語る真珠の語彙 (*durr* の語を補足)

	大粒真珠 (クロチョウ真珠など)	普通の「真珠」 (アコヤ系真珠など)
	aljofar grande	
スペイン語	perla	aljofar
ポルトガル語	pérola	aljofar
ラテン語	unio	margarita
アラビア語とペルシア語	(durr)	lu'lu'
インドの言語 (i. e. ウルドゥー語、ヒンディー語他)		moti
マラバールの言語 (i.e. ドラヴィダ語族など)		muttu

第4節 なぜ *aljofar* は *seed pearls* と解釈されたのか？

本節では、なぜ *aljofar* が *seed pearls* や「小粒真珠」と呼ばれるようになったのかも、考察しておきたい。

筆者は、その最大の理由は、*aljofar* が *miúdo* という形容詞で表現されてきたからだと考える。この形容詞は、オルタが16世紀半ばに使用したが、今日のポルトガル語辞書などでも使われている。本章では、*aljofar* が指す真珠は、*margarita* や *lu'lu'* と同じ種類の真珠であり、アコヤ系真珠などに適用されてきたことを明らかにした。アコヤ系真珠の平均的な大きさは、直径3ミリから6ミリ台である。一方、*unio* や *durr*、*pérola*、*perla* などと称されたクロチョウ真珠には、10ミリ以上の大粒の球形真珠や直径20ミリ、30ミリに達するようなドロップ型真珠やバロック真珠などがある。こうした大粒真珠と比較すれば、直径3ミリから6ミリ台のアコヤ系真珠は、小さな真珠になるし、それが20個、30個まとまってあれば、*miúdo* という語を使い、「細かい真珠」と表現されるのも理解できる。もともと *miúdo* という表現は、クロチョウ真珠などとの比較で使われていたが、次第にその小ささばかりが強調されて、*seed pearls* となり、ひいては、品質の落ちる真珠と見なされるようになっていった、と推測できる。

16世紀末のオランダ人、ヤン・ハイヘン・フォン・リンスホーテンは、その著書 *Itinerario* (邦訳名『東方案内記』) において、真珠 (*perolen*) と見なされない「小さなもの」は、*alioffar* と呼ばれ、オンス単位で売られ、薬剤師や医者に提供される、その目的で、ポルト

ガルやヴェネツィアに大量に運ばれている、それらは非常に安い、と語っている³⁶。こうした記述なども、*aljofar* は、薬として使われる質の悪い小さな真珠としての認識を広めていったと考えられる。

リンスホーテンの記述は、16世紀末頃には、*aljofar* の本来の意味が変容したことを示しているのかもしれないし、あるいはポルトガル人やヴェネツィア人が、*aljofar* と呼ばれるアコヤ系真珠を小粒真珠や二級の真珠の枠にはめて、関税を避けるために、安く輸送していたのかもしれない。ポルトガル人やヴェネツィア人が、「薬用の」小粒真珠の買い付けのために、わざわざインド洋海域世界に出向き、それらを大量にヨーロッパに送っていたのだろうかという疑問が残る。

いずれにせよ、*aljofar* に用いられる *miúdo* という形容詞やリンスホーテンの言説だけで、*aljofar* を *seed pearls* や「小粒真珠」、あるいは *irregular pearls* や「くず真珠」と訳すべきではないのである。

小括

16世紀のポルトガル語やスペイン語の一次史料の英訳や真珠史の先行研究では、*aljofar* は *seed pearls* と訳されてきた。本章は、はたしてその訳が正しいのかということの問題提起して、*aljofar* がどのような真珠を指すのかを考察した。

その結果、*aljofar* は、*seed pearls* や *irregular pearls* を指すのではなく、普通に「真珠」を指す言葉であり、主にアコヤ系真珠にも使われる語であることを解明した。ポルトガル語やスペイン語の一次史料には“*aljofar e pérolas*”及び“*aljofar y perlas*”という表現が少なくないが、それらは、ラテン語の *margarita* と *unio* の関係、アラビア語の *lu'lu'* と *durr* の関係と同じであり、“*pearls and big pearls*”、「真珠と大粒真珠」と訳すべきである。

語源から見た場合、*aljofar* はアラビア語 *al-jawhar* に由来する。アラビア語では、*jawhar* は「宝石」、特に宝石で最上の「真珠」という意味を持つ。語源の観点からも、*aljofar* を *seed pearls* や *irregular pearls* と訳するのは、適切ではない。

本論文は、*aljofar* という語を、「真珠」とし、とりわけ「アコヤ系真珠」と解釈することで、16世紀のポルトガル語やスペイン語の一次史料を読み進める。それによって、一次史料における *aljofar* 記事を過小評価したり、あるいは無視することで構築されてきた真珠史の先行研究による16世紀像に再考を迫ることができる。

³⁶ Jan Huygen van Linschoten, *Itinerario: Voyage ofte schipvaert van Jan Huygen van Linschoten naer Oost ofte Portugaels Indien 1579-1592*, ed. H. Kern (The Hague: Martinus Nijhoff, 1955-7), vol. 2, p. 162 (chap. 84); *The Voyage of John Huyghen Van Linschoten to the East Indies*, ed. Arthur Coke Burnell and P. A. Tiele (1935; New Delhi: Munshiram Manoharlal, 1997), vol. 2, p. 135; リンスホーテン (岩生成一他訳)『東方案内記』(平凡社、1968年)、542頁。オランダ語テキストでは「小さなもの」は“*cleyne tuych (sic)*” (p. 162) となっている。英訳では“*small stuffe*”と訳され (p. 135)、日本語訳では「こまこました屑物」(ママ)と訳されている (542頁)。

第3章 南米カリブ海真珠生産圏

——スペインの先住民奴隷制水産業と黒人奴隷制水産業

はじめに

クリストバル・コロンは、1492年にカリブ海の島々に達し、1498年に南米ベネズエラのパリア半島に到達した。こうして大航海時代の幕が開くと、ベネズエラとコロンビアのカリブ海沿岸部はスペイン人コンキスタドールたちの主要な目的地となり、その後、スペイン植民地体制に組み入れられた地域となった。彼らが進出した南米北岸のカリブ海は、アコヤ系真珠の大産地であった。

本章の目的は、16世紀のスペイン人勢力は、なぜ南米カリブ海世界に進出していったのか、これらの海域や湾岸部は、彼らにとってなぜ重要であったのか、彼らは南米カリブ海世界からどのように富を引き出したのかを考察することである。さらに真珠は、16世紀の南米カリブ海世界に何をもたらし、何をどう変えたのかも考察する。本章では、コロン来航以前に南米カリブ海沿岸部で「真珠生産圏」が形成されていたかを検討し、さらに、16世紀初期のヨーロッパ人にとっての真珠の意味、彼らの富の引き出し方を考察する。その後、スペイン人による「南米カリブ海真珠生産圏」への進出経緯やスペイン植民地体制下における真珠採取業の発展経緯を、ベネズエラやコロンビアという一国史の枠を超えて考察した後、コモディティ・チェーン分析を使い、真珠採取業の生産、真珠の希求、流通の各側面を解明する。具体的には、南米カリブ海世界におけるスペイン人による水産業の実施、潜水労働力の徴発の在り方、先住民社会に与えた影響、水産業とアフリカ奴隷貿易の係わり、真珠の希求者、流通の拡がりなどを検討する。

これまで大航海時代を促進してきたのは、ヨーロッパ人の黄金とスパイスへの執着であると考えられてきた。スペイン人が実施した事業としては、製糖業と金鉱業、銀鉱業などに関心が集まり、それらを中心に議論されてきた。カリブ海の先住民絶滅問題では、エンコミエンダ制や疫病にその原因が帰されてきた。中南米へのアフリカ人奴隷の輸入も農業プランテーションを中心に考察されてきた。こうした16世紀のラテンアメリカに関する歴史の議論で抜けているのが、カリブ海の真珠の果たした役割である。本章は、アコヤ系真珠が採取できるベネズエラ・コロンビア沿岸部の地域的特性とその後の真珠採取業の進展に着目することで、金、製糖業、エンコミエンダ、疫病、奴隷制プランテーションなどのキーワードで語られてきたラテンアメリカの16世紀像に見直しを迫ることになる。

0.1 先行研究

南米カリブ海の真珠は大航海時代初期の歴史と係わるため、ベネズエラ史やコロンビア史の研究者、真珠史や宝石史研究者、真珠・宝石業者などの関心の対象となり、多くの研究書や論文が書かれてきた。20世紀初めのG. F. クンツとC. H. スティーヴンソンの *The Book of the Pearl* は、16世紀の一次史料を使いながら、ベネズエラの真珠をめぐる歴史を

紹介している¹。その後も多くの研究が蓄積されてきた。20 世紀中葉までの研究としては、S. A. モスクの “Spanish Pearl-Fishing Operations on the Pearl Coast in the Sixteenth Century” や F. ドミンゲス・カンパニーの “Municipal Organization of the Rancherías of Pearls” があり、16 世紀のベネズエラ沿岸部や島嶼部で実施されてきた真珠採取を制度面などから考察している²。M. L. ムニョスの “Noticias sobre la fundación de la ciudad de Nuestra Señora Santa María de los Remedios del Cabo de la Vela” は、コロンビアのベラ岬の真珠採取業を扱ったものである³。

1977 年には、E. オッテによって南米真珠史の代表的研究である *Las perlas del Caribe* が上梓された。この研究はクバグア島の真珠採取業に関する緻密なアーカイヴ・リサーチの成果である⁴。E. L. サンスも *Commercio de España con América en la época de Felipe II* という書物の中で、交易品としての真珠についてアーカイヴ・リサーチを行っている。その他、ベネズエラの真珠史については、F. セルビゴンの *Las perlas en la historia de Venezuela* があり、古代・中世の体系だった真珠史研究である R. A. ドンキンの *Beyond Price* も新世界の真珠を扱っている⁵。

近年の研究としては、M. A. ウォルシュの一連の研究がある。彼女は “Enslaved Pearl Divers in the Sixteenth Century Caribbean” 及び “A Political Ecology in the Early Spanish Caribbean” の論考を発表しており、2018 年には *American Baroque* という書物を上梓した⁶。その他、E. B. モンロイのコロンビアの真珠史研究、“Los esclavos de las

¹ George Frederick Kunz and Charles Hugh Stevenson, *The Book of the Pearl: Its History, Art, Science and Industry* (1908; New York: Dover Publications, 1993), pp. 225-235.

² S. A. Mosk, “Spanish Pearl-Fishing Operations on the Pearl Coast in the Sixteenth Century,” *Hispanic American Historical Review*, vol. 18 (1938), pp. 392-400; Francisco Domínguez Compañy, “Municipal Organization of the Rancherías of Pearls,” *The Americas*, vol. 21, no. 1 (July 1964), pp. 58-68.

³ Manuel Luengo Muñoz, “Noticias sobre la fundación de la ciudad de Nuestra Señora Santa María de los Remedios del Cabo de la Vela,” *Anuario de estudios Americanos*, vol. 6 (1949), pp. 755-97; Manuel Luengo Muñoz, “Inventos para acrecentar la obtención de perlas en America, durante el siglo XVI,” *Anuario de estudios Americanos*, vol. 9 (1952), pp. 51-72.

⁴ Enrique Otte, *Las perlas del Caribe: Nueva Cádiz de Cubagua* (Caracas: Fundación John Boulton, 1977).

⁵ Eufemio Lorenzo Sanz, *Commercio de España con América en la época de Felipe II: La navegación, los tesoros y las perlas*, vol. 2 (Valladolid: Servicio de Publicaciones de la Diputación Provincial de Valladolid, 1980); Fernando Cervigón, *Las perlas en la historia de Venezuela* (Caracas: Fundación Museo del Mar, 1998); R. A. Donkin, *Beyond Price: Pearls and Pearl-Fishing* (Philadelphia: American Philosophical Society, 1998), pp. 292-346.

⁶ Molly A. Warsh, “Enslaved Pearl Divers in the Sixteenth Century Caribbean,” *Slavery and Abolition*, vol. 31, no. 3 (September 2010), pp. 345-362; Molly A. Warsh, “A Political Ecology in the Early Spanish Caribbean,” *William and Mary Quarterly*, 3rd series, vol. 71 (2014), pp. 517-48; Molly A. Warsh, *American Baroque: Pearls and the Nature of Empire, 1492-1700* (Chapel Hill, University of North Carolina Press, 2018).

perlas: Voces y rostros indígenas en la Granjería de Perlas del Cabo de la Vela (1540-1570)”, K. ドウソンの “Enslaved Swimmers and Divers in the Atlantic World”, M. ドミンゲス=トーレスの “Pearl Fishing in the Caribbean: Early Images of Slavery and Forced Migration in the Americas” などがある⁷。

16 世紀のベネズエラの真珠採取は真珠貝を枯渇させたことが知られており、資源管理やエコロジーの観点からも幾つかの論文が書かれてきた。1950 年には、真珠産業の復活を望むベネズエラ政府の委託を受けたアメリカの科学者 P. S. ガルトソフによる報告書 *The Pearl Fishery of Venezuela* が出されている⁸。20 世紀末から真珠貝の枯渇に関心が集まるようになり、A. ロメロらによる “Cubagua’s Pearl-Oyster Beds: The First Depletion of a Natural Resource Caused by Europeans in the American Continent” 及び同著者の “Death and Taxes: The Case of the Depletion of Pearl Oyster Beds in Sixteenth-Century Venezuela”, C. L. マッケンジーらによる “History of the Atlantic Pearl-Oyster, *Pinctata (sic) Imbricata*, Industry in Venezuela and Colombia, with Biological and Ecological Observations” などの研究がなされてきた⁹。

筆者自身も、『黄金郷伝説』及び『真珠の世界史』において、南米の真珠が大航海時代初期の歴史的展開に果たした役割を明らかにしてきた。筆者は、16 世紀初めのベネズエラの歴史を理解するには、ラス・カサスの『インディアス史』が欠かせない一次史料であると考え、この書物を重要視した。この点で欧米の研究と大きく異なる¹⁰。

このように南米真珠史に関しては、多くの先行研究がある。ただ、近年の研究には表層

⁷ Eduardo Barrera Monroy, “Los esclavos de las perlas: Voces y rostros indígenas en la Granjería de Perlas del Cabo de la Vela (1540-1570),” *Boletín cultural y bibliográfico*, vol. 34, no. 61 (2002), pp. 3-33. https://publicaciones.banrepcultural.org/index.php/boletin_cultural/article/view/1098. (2019 年 4 月 27 日閲覧) ; Kevin Dawson, “Enslaved Swimmers and Divers in the Atlantic World,” *The Journal of American History*, vol. 92 (2006), pp. 1327-55; Mónica Domínguez-Torres, “Pearl Fishing in the Caribbean: Early Images of Slavery and Forced Migration in the Americas,” in *African Diaspora in the Cultures of Latin America, the Caribbean, and the United States*, ed. Persephone Braham (Newark: University of Delaware, 2015), pp. 73-82.

⁸ Paul S. Galtsoff, *The Pearl Fishery of Venezuela* (Washington D. C.: United States Department of the Interior, 1950).

⁹ Aldemaro Romero et al., “Cubagua’s Pearl-Oyster Beds: The First Depletion of a Natural Resource Caused by Europeans in the American Continent,” *Journal of Political Ecology*, vol. 6 (1999), pp. 57-78; Aldemaro Romero, “Death and Taxes: The Case of the Depletion of Pearl Oyster Beds in Sixteenth-Century Venezuela,” *Conservation Biology*, vol. 17, no. 4 (August 2003), pp. 1013-23; Mackenzie Jr., et al., “History of the Atlantic Pearl-Oyster, *Pinctata (sic) Imbricata*, Industry in Venezuela and Colombia, with Biological and Ecological Observations,” *Marine Fisheries Review*, vol. 65, no. 1 (January 2003), pp. 1-20. <https://www.researchgate.net/publication/280015683>. (2019 年 4 月 28 日閲覧)

¹⁰ 山田篤美『黄金郷伝説——スペインとイギリスの探検帝国主義』(中央公論新社、2008 年)、25~42 頁；『真珠の世界史——富と野望の五千年』(中央公論新社、2013 年)、73~87 頁。

的なものが多い。序章でも言及したが、先行研究の問題点は、以下の六つである。

第一に、真珠の生態系への無関心と事実誤認が顕著なことである。ウォルシュの研究の問題点はこれまで指摘してきたが、彼女の著書 *American Baroque* では、ベネズエラ海岸で採れた真珠は、イレギュラーパール（バロック真珠）であるとして議論が展開されているのは、看過できない問題である。16 世紀半ばのポルトガル人、ガルシア・ダ・オルタは、*Colóquios dos simples e drogas da Índia* 『インドの薬草と薬物に関する対話』の中で、スペイン領アメリカのバロック真珠について、「バロック、形がゆがみ、丸くなく、死んだ色をしている」(*barrocos mal afeijoados, e não redondos, e com aguas mortas*) と語っている¹¹。この「バロック真珠」は、明らかにパナマ湾のパナマクロチョウ真珠の特徴を示しており、ベネズエラ沖のアコヤ系真珠の特徴ではない。オルタの記述はバロック真珠を具体的に形容した点で重要であるが、ウォルシュの *American Baroque* は、オルタを参照しておらず、また 16 世紀の人がどのような真珠をバロック真珠と見なしたのか、一次史料を論拠として議論していない。彼女の研究は、真珠の生態系の理解においても、一次史料の参照の点でも問題ある内容となっている。

生態系への無関心は、真珠のエコロジーをテーマにしているロメロの論文にも見ることができる。ロメロは 2003 年の論文で、クバグア島海域で採れた *Pinctada imbricata* の真珠は、すべて 5 カラットの重量がある最上の真珠だったと前提し、スペイン国王へ貢納された真珠の総重量から、当時生息していた真珠貝の数を割り出し、真珠貝の過剰採取があったことを論じている。アコヤ真珠貝 (*Pinctada imbricata*) からは 5 カラット（直径 9.01 ミリ）の真珠はごく稀にしか出ないし、真珠はその大きさによって出現率が異なる。クバグアの真珠をすべて 5 カラットの最上の真珠と見なすのは、真珠の生態系を理解していないことになる。さらに、ロメロには初歩的なミスがあり、1 キロを 50 カラットと説明している。それだと 5 カラットの真珠は 100 グラムの真珠となる。ロメロの研究は、その前提が適切でない上、単位の間違ひもあるため、その後の議論は説得力をもたない¹²。

第二に、スペイン語の一次史料に出てくる *aljofar* は *seed pearls* と訳されるか、あるいは *aljofar* に関する記事や記録は、無視されることである。

第三に、ラス・カサスが *Historia de las Indias* 『インディアス史』で述べている過酷な真珠採取による先住民絶滅に関する記述の否定または無視である。本論文は、16 世紀の真珠史を知る最良の書物のひとつが『インディアス史』と考えているが、先行研究は、彼の言説をプロパガンダとして一蹴し、『インディアス史』の記述を十分検討してこなかった。

¹¹ Garcia da Orta, *Colóquios dos simples e drogas da Índia* (1895; Lisbon: Imprensa Nacional-Casa da Moeda, 1987), vol. 2, pp. 119-121.

¹² ロメロは、1999 年の共同研究で、クバグア島の海域では、1515 年から 1542 年にかけて 112 億 3635 万個の真珠貝が採取されたと主張しているが、2003 年の論文では、1 億 1326 万個の真珠貝が採取されたとしている。ふたつの論文の数値はあまりにかけはなれているが、その違いを説明していない。しかも、どちらの算出方法にも誤りが見られる。Romero et al., “Cubagua’s Pearl-Oyster Beds,” p. 68; Romero, “Death and Taxes,” p. 1019.

本章ではこの問題について改めて考察する¹³。

第四に、先行研究の多くが、狭い期間のベネズエラ史またはコロンビア史といった地域史研究になっていることである。時間と地域を限った研究では、16世紀の南米真珠史を見渡すには不十分であり、また、ベネズエラからコロンビアに続く南米カリブ海沿岸部がひとつの「真珠生産圏」を形成してきたという広域俯瞰の視点がない。真珠の地域史研究では、オッテやサンスのような優れた研究が存在する。オッテをはじめ、多くの先行研究が、南米の真珠採取には潜水労働力としてアフリカ人奴隷が投入されたことを実証してきた。しかし、こうした研究がラテンアメリカ史や世界史の他の分野には波及せず、十分生かされてこなかったのは、地域史研究の側面が強く、普遍的な概念を提唱できなかったからだと考えられる。

第五の問題点は、先行研究では、真珠の生産面や南米の真珠採取に投入されたアフリカ人奴隷やその貿易に関心が集中していて、流通や希求面の分析がまだ手薄なことである。真珠の希求面では、ウォルシュやドミンゲス＝トーレスなどが、絵画などから見た真珠のシンボリズムを議論している。しかし、シンボリズムは、解釈によってどのような主張も可能である。

第六の問題点は、16世紀における南米の真珠の意義の過小評価である。序章でも述べたが、ウォルシュは、南米真珠史は、帝国の富の形成過程に関する我々の歴史認識を変えないと述べ、さらに16世紀には真珠の受容の大衆化が進み、真珠はそれほど重要ではなくなったことを主張している¹⁴。はたして、南米カリブ海の真珠が16世紀世界に果たした役割は小さいのだろうか。本章はこれについても考察する。

一方、南米史、カリブ海域史、近代世界システム論、グローバルヒストリーなどの広義の世界史では、序章でも指摘したように、真珠の看過が著しい¹⁵。こうした研究では、金と銀の生産と流通、砂糖栽培などの農業生産、大西洋貿易、先住民絶滅と疫病の関係、奴隷制の発展、商品のグローバリゼーションなどに関心が集まっている。しかし、商品としての真珠、水産業としての真珠採取業、及び真珠採取業における奴隷制といったテーマは考察の対象外となってきた。南米史などで、ベネズエラの真珠の歴史を論じているのは、管

¹³ ラス・カサスの書誌情報は、後述する。

¹⁴ Warsh, *American Baroque*, p. 249.

¹⁵ 真珠を看過した研究は枚挙にいとまがないが、次のような研究文献が存在する。エリック・ウィリアムズ(川北稔訳)『コロンブスからカストロまで——カリブ海域史, 1492-1969』全2巻(岩波書店、2000年、原著1970年)；I. ウォーラーズテイン(川北稔訳)『近代世界システム 1——農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立』(名古屋大学出版会、2013年、原著1974年)；James Lockhart and Stuart B. Schwartz, *Early Latin America: A History of Colonial Spanish America and Brazil* (New York: Cambridge University Press, 1983)；Murdo Macleod J., “Spain and America: The Atlantic Trade, 1492-1720,” in *The Cambridge History of Latin America*, ed. Leslie Bethell (Cambridge: Cambridge University Press, 1984), vol. 1, pp. 341-88；アンドレ・グンダー・フランク(山下範久訳)『リオリエント——アジア時代のグローバル・エコノミー』(藤原書店、2000年、原著1998年)。疫病及び奴隷制に関する研究文献は、後述する。

見によれば、C. O. ソーアーの *The Early Spanish Main* や G. M. モロンの『ベネズエラ史概説』、拙著『黄金郷伝説』などが散見されるに過ぎない¹⁶。

本論文は、先述したようにラス・カサスの『インディアス史』を16世紀の南米真珠史を知る重要な一次史料のひとつと考えている。それゆえ、ラス・カサスに関する先行研究も述べておく。ラス・カサスの全著作は、ラス・カサス協会から全15巻の *Obras Completas* シリーズとして翻刻されている¹⁷。このシリーズには『インディアス史』と *Brevísima relación de la destrucción de las Indias* (邦訳名『インディアスの破壊についての簡潔な報告』、以下、『簡潔な報告』と表記) も収録されている¹⁸。L. ハンケの『スペインの新大陸征服』、M. G. フェルナンデスの *Bartolomé de Las Casas* などのラス・カサス研究は、ラス・カサスと真珠の係わりに言及している¹⁹。

日本においてもラス・カサス研究は盛んであり、染田秀藤や石原保徳、長南実らによって、『簡潔な報告』や『インディアス史』など、彼の主要な著作が翻訳されてきた²⁰。長南による『インディアス史』の他言語への全訳は世界初の試みであった。ラス・カサスの行動や言説に関する重要な研究も蓄積されており、石原の『インディアスの発見』及び「新しい世界記述の誕生」は、ヨーロッパ中心主義に対峙する「人類史」の叙述者としてのラス・カサスの歴史的意義を主張したものである。また、染田の『ラス・カサス伝』も、スペインの征服と植民事業に反対したラス・カサスの現代的意味を明らかにしている²¹。日本の研究者の姿勢は、ラス・カサスの言説をプロパガンダと一蹴する南米真珠史研究者たちと一線を画すものであり、ヨーロッパ中心主義の見方に対する問題提起である。ただし、青野和彦の「ラス・カサスのベネズエラ植民計画の理念」は、ラス・カサスの植民計画が

¹⁶ Carl Ortwin Sauer, *The Early Spanish Main* (1966; New York: Cambridge University Press, 2008), pp. 108-114, 190-2; ギリェルモ・モロン・モンテロ (ラテン・アメリカ協会訳) 『ベネズエラ史概説』 (ラテン・アメリカ協会、1993年)、13~31頁; 山田篤美『黄金郷伝説』、25~42頁。

¹⁷ Bartolomé de Las Casas, *Obras Completas*, ed. Paulino Castaneda Delgado, 14 vols. (Madrid: Alianza Editorial, 1988-98).

¹⁸ Las Casas, *Historia de las Indias (Obras Completas, vols. 3-5)*, 3 vols.; “Brevísima relación de la destrucción de las Indias,” in *Obras Completas 10: Tratados de 1552*.

¹⁹ ルイス・ハンケ (染田秀藤訳) 『スペインの新大陸征服』 (平凡社、1979年、原著1949年); Manuel Giménez Fernández, *Bartolomé de Las Casas*, 2 vols. (Sevilla: Escuela de Estudios Hispanoamericanos, 1953-60).

²⁰ ラス・カサス (染田秀藤訳) 『インディアスの破壊についての簡潔な報告』 (岩波書店、1976年); ラス・カサス (石原保徳訳) 『インディアス破壊を弾劾する簡略なる陳述』 (現代企画室、1987年); ラス・カサス (長南実訳) 『インディアス史』全5巻 (岩波書店、1981~1992年)。

²¹ 石原保徳『インディアスの発見——ラス・カサスを読む』 (田畑書店、1980年); 染田秀藤『ラス・カサス伝——新世界征服の審問者』 (岩波書店、1990年); 石原保徳「新しい世界記述の誕生——一六世紀・大西洋圏からのメッセージ」西川長夫他編『ラテンアメリカからの問いかけ——ラス・カサス、植民地支配からグローバリゼーションまで』 (人文書院、2000年)、42~74頁。ラス・カサス研究の系譜と動向については、染田『ラス・カサス伝』「研究の手引き」1~20頁を参照。

アコヤ系真珠の名高い採取地での入植だったことを認識しておらず、ベネズエラの真珠の意義は言及していない²²。

0.2 本章の研究手法と史料

本章は、先行研究のこうした問題点を補うために、第1章で明らかにした真珠及び真珠貝の生態系的事実を取り入れ、また第2章で明らかにした *aljofar* の解釈に基づき、議論を進める。史料の分析では、スペイン語一次史料を重視する。先行研究にはテーマの偏りが見られるが、本章は、「真珠生産圏」、「伝統的希求地／希求者」、「新興希求地／希求者」、「ハブ・アンド・スポーク交易」という、真珠のコモディティ・チェーン分析のために筆者が提唱する新しい概念を使うことで、先行研究が看過してきた真珠の生産、希求、流通の実態を検討する。具体的には、真珠採取業という水産業の意義、真珠採取業への国家の役割、真珠採取と先住民絶滅の関係性などを考察する。

本章で使用する史料としては、1492年以降のヨーロッパ人による書簡や報告書、地誌、歴史書、インディアス統治の各種法令など、さまざまな一次史料である。こうした一次史料には、先行研究が未使用の一次史料もあれば、先行研究でも言及されてきたが、改めて検討が必要なものも少なくない。本論文では、できる限り、スペイン語原文にあたることで、正確な解釈を心がける。先述してきたように、本論文がとくに重要視する一次史料は、ラス・カサスの『インディアス史』と1542年の「インディアス新法」である²³。また、先行研究が未使用のアメリゴ・ヴェスプッチの私的書簡や1520年のラス・カサスとカルロス1世との協約書なども参照する²⁴。また、16世紀前半のスペイン人、マルティン・フェルナ

²² 青野和彦「ラス・カサスのベネズエラ植民計画の理念——2つの『覚書』における「共同体」(comunidad)の目標の検討を通して」『沖縄キリスト教短期大学紀要』第40号(2012年)、51~64頁；青野和彦「ラス・カサスの平和的布教観の形成——ベネズエラ渡航からドミニコ会修練期までを中心に」『キリスト教史学』第67号(2013年)、52~73頁。

²³ 「インディアス新法」の正式名は次のとおりである。*Leyes y ordenanzas nuevamente hechas por su Majestad para la gobernación de las Indias y buen tratamiento y conservación de los Indios*「インディアスの統治及びインディオのよき処遇と維持のために国王が出した法令と基本法」。この法令は次の文献に収録されている。Joaquin Garcia Icazbalceta ed. *Colección de documentos para la historia de Mexico* (1858-1866; Mexico City: Editorial Porrúa, 1971), vol. 2, pp. 204-27.

²⁴ アメリゴ・ヴェスプッチの私的書簡は四本知られている。それらについては、Amerigo Vespucci, “Cartas de Americo Vespucio,” in *Colección documental del descubrimiento (1470-1506)*, ed. Juan Péres de Tudela et al. (Madrid: Real Academia de la Historia, 1994), vol. 3, pp. 1920-58を参照。ヴェスプッチの私的書簡の翻訳、解説、彼の刊行物の内容との異同については、篠原愛人「史料紹介 アメリゴ・ヴェスプッチの私信(その1~3)」『撰大人文学』第15~17号(2007~2009年)、137~158頁、215~235頁、129~149頁及び「アメリゴ・ヴェスプッチの公刊書簡に関する一考察」『撰大人文学』第18号(2010年)、1~25頁を参照。1520年のラス・カサスとカルロス1世との協約書“*Asiento y capitulación de Bartolomé de Las Casas*”は *Colección de documentos inéditos de América y Oceanía*, ed. Joaquín Francisco Pacheco et al. (Madrid; 1864-84), vol. 7, pp. 65-109に収められている。

ンデス・デ・エンシソが1519年に出版した *Summa de geografía* 『地理概要』や16世紀半ばのスペイン人クロニスタ、ゴンサロ・フェルナンデス・デ・オビエド・イ・バルデスの *Historia general y natural de las Indias* 『インディアス史概説・自然史』及びフランシスコ・ロペス・デ・ゴマラの *Historia general de las Indias* 『インディアス史概説』も参照する²⁵。エンシソの『地理概要』はスペイン領アメリカで最初の地誌として知られている。これらの史料は、先行研究がしばしば利用してきたが、*aljofar* に関する内容は無視されてきた。本章では *aljofar* の記述を分析することで、先行研究が見落としてきた事実を明らかにする。

法令については、*Recopilación de leyes de los reynos de las Indias* 『インディアス法集成』、*Colección de documentos inéditos de América y Oceanía* 『アメリカと大洋に関する未公開文書集』、及び *Colección de documentos inéditos de ultramar* 『海外領土に関する未公開文書集』などに収録されている法令を参照する²⁶。『インディアス法集成』には“De la pesquería, y envío de perlas, y piedras de estimacion”「真珠採取場、真珠と価値ある宝石の送付に関する法令」が、『海外領土に関する未公開文書集』には“De las perlas y piedras preciosas”「真珠と宝石に関する法令」が、それぞれ収録されており、真珠行政を知る上で有用である²⁷。真珠の法令の分析は、真珠採取業という水産業への国家の関与や先住民やアフリカ人奴隷の扱いなどについても情報を与える。

0.3 本章の構成

第1節：16世紀初期の「南米カリブ海真珠生産圏」

第2節：16世紀初期のヨーロッパ人と南米カリブ海の真珠

第3節：「南米カリブ海真珠生産圏」における真珠採取業の形成と発展

第4節：真珠採取業の生産者

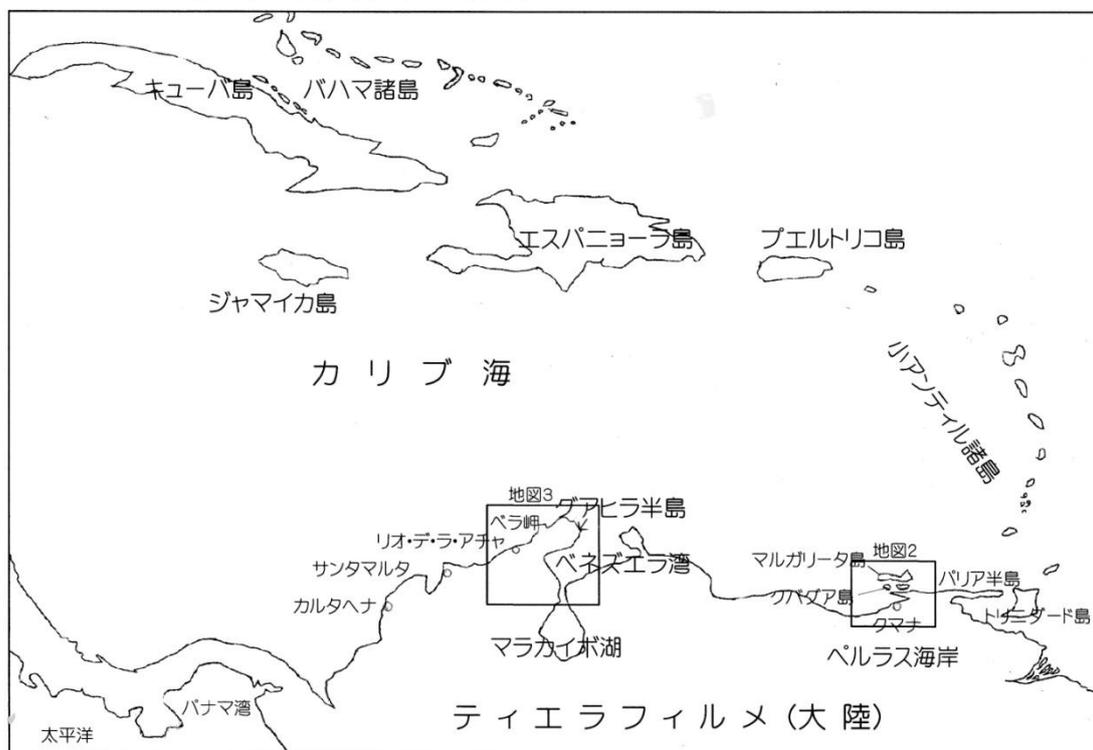
第5節：潜水労働者

²⁵ Martín Fernández de Enciso, *Summa de geografía* (Bogotá: Banco Popular, 1974); Gonzalo Fernández de Oviedo y Valdés, *Historia general y natural de las Indias*, ed. Juan Pérez de Tudela Busco (Madrid: Ediciones Atlas, 1959), vol. 2; Francisco López de Gómara, *Historia general de las Indias* (Madrid: Espasa-Calpe, 1941), 2 vols.

²⁶ *Recopilación de leyes de los reynos de las Indias* (Madrid: 1791), 3 vols. https://books.googleusercontent.com/books/content?req=AKW5QafZ_30Fc-NB8pciDkdp9-ebjHPgmVPn2qhO2BwgJzneAUtrcD8Ei8f58fAC0_VRXjimneG753pppyKRtofVu2Tem6sV_il0WJSi07Y7g0oF9B5ehy8xGZzeVBJoFkpGv7hOmKgpUhTpvW0FfsmEFfmKrUjBwfrZgw4OW36HWcWa5KLBnORNKum4_zYZhJ4oAlpJxoIejwih23lVRrd71TBTfZFsrDVSnc8GDjwc3XXBGL-CL4NcMirQ9FKUsknRIYCOqkFmVPeIAm3rCy-3VSg8yIg__x3QuZjeZmlDISyF-xk5c (2019年4月28日閲覧); *Colección de documentos inéditos de América y Oceanía*, 42 vols.; *Colección de documentos inéditos de ultramar*, ed. La Real Academia de la Historia (Madrid: 1885-1932), 25 vols.

²⁷ “De la pesquería, y envío de perlas, y piedras de estimacion,” in *Recopilación*, vol. 2, pp. 96-106; “De las perlas y piedras preciosas,” in *Colección de documentos inéditos de ultramar*, vol. 22, pp. 298-307.

地図1 環カリブ海沿岸部と島嶼部



第6節：真珠の希求地、希求者

第7節：真珠の流通

第1節 16世紀初期の「南米カリブ海真珠生産圏」

本節では、南米カリブ海におけるアコヤ真珠貝の分布、コロン来航以前の真珠採取地、その取引地について考察し、アコヤ系真珠が採取される沿岸部で16世紀初期に「真珠生産圏」が形成されていたかどうかを検討する（地図1~3）。

1.1 アコヤ真珠貝の分布

南米大陸北岸のカリブ海域には、ピンクターダ属のアコヤ真珠貝（*Pinctada fucata/martensii/radiata/imbricata* sp.）が生息しており、今日でも生息している²⁸。アコヤ系真珠は丸く、光沢が強く、平均的な大きさは、直径3ミリから6ミリ台であるが、こ

²⁸ ベネズエラのアコヤ真珠貝は *Pinctada imbricata* の学名が使用されてきた。白井祥平は1977年から78年にかけてマルガリータ島の天然の真珠貝と真珠について調査し、真珠貝はアコヤガイと同一種であると報告している。白井祥平『貝(III)』（法政大学出版局、1997年）、706~709頁及び白井祥平『真珠・真珠貝世界図鑑』（海洋企画、1994年）、50~51頁を参照。Mackenzie Jr., et al. “History of the Atlantic Pearl-Oyster, *Pinctata (sic) Imbricata*.” pp. 1-20 も参照。

地図2 南米カリブ海真珠生産圏 ベネズエラ



地図3 南米カリブ海真珠生産圏 コロンビア



の海域のアコヤ真珠貝は、波の荒い外洋で群生するため、砂粒などが入る機会が多く、直径1ミリから3ミリの小粒真珠をたくさん生み出す傾向があった。その一方で、7ミリ、8ミリの大粒真珠も生み出したことも知られている²⁹。

アコヤ真珠貝の分布の傾向は、カリブ海の南方海域、すなわち南米大陸北岸の東部沖と

²⁹ 白井『貝 (III)』、708~709頁。

西部沖にそれぞれ豊饒な生息地があることである。東部沖はベネズエラ側であり、西部沖はコロンビア側となる。キューバなどの北方のカリブ海域にもアコヤ真珠貝が生息していたが、主要な生息地にはならなかった³⁰。それゆえ、本論文では、アコヤ真珠貝の生息圏をカリブ海一帯ではなく、南米カリブ海沖と考える。

アコヤガイが生息するベネズエラ側の海域は、大きくふたつに分けられる。ひとつはマルガリータ島、クバグア島、コチェ島を含む島嶼部の海域であり、もうひとつは南米本土のクマナを中心とする沿岸部沖である。1943年には、マルガリータ島、クバグア島、コチェ島の海域におけるアコヤ真珠貝の生息地の調査が行われ、28の生息地が報告されている。真珠貝が広く生息しているのは、マルガリータ島の東岸から南東部沖で、ここには10の生息地があり、北部沖と西部沖にもひとつずつある。クバグア島でも東岸から南岸にかけて、島を囲むように五つの生息地が存在し、コチェ島は島の東部海岸近くに三つ、海岸からかなり離れた東南方向に五つある。南米本土ではアラヤ半島の北西端近くの海に三つの生息地がある³¹。1943年の調査ではクマナ周辺の海岸沖は調査されていないが、クマナ沖にも豊饒な生息地が分布していた。

もうひとつの海域が、コロンビア側のグアヒラ半島沖である。グアヒラ半島はベネズエラとコロンビアにまたがる半島であるが、半島北西部のコロンビア領の海域が、アコヤ真珠貝が豊富に生息する海域だった。この海域は1994年に調査が行われ、ベラ岬からリオアチャ（16世紀のリオデラアチャ）に到る沿岸部沖の水深3メートルから10メートル程度の海域には、数百メートルから数キロに達する *Pinctada imbricata* の生息地が点在していることが報告されている³²。

こうした海域にアコヤ真珠貝が生息しているおかげで、南米北岸の先住民たちは、真珠貝や真珠を採取し、それらを珍重する文化を育んできた³³。ベネズエラからコロンビアに続くカリブ海沿岸部は、16世紀になると、大陸であることが判明して、スペイン人たちからティエラフィルメ (*Tierra firme*) と呼ばれるようになるが、このティエラフィルメこそが、先住民たちが真珠文化を育み、採取した真珠を大量に所有している土地であった。

1.2 真珠採取地、交易地

南米カリブ海沿岸部で、先住民の真珠採取と真珠取引の中心地となってきたのが、ベネズエラ沿岸部のクマナであった。この地域にはカリブ族が暮らしていた。彼らはアコヤ真珠貝と真珠を採取する漁撈文化を早くから形成し、真珠を宝物や装身具として珍重してい

³⁰ 白井はフロリダやキューバでも天然アコヤ真珠貝を採取している。白井『真珠・真珠貝世界図鑑』、50~51頁。

³¹ Paul S. Galtsoff, *The Pearl Fishery of Venezuela*, p. 9. この報告書自体は、真珠貝の調査を行っておらず、1943年時の調査結果を使用している。

³² Mackenzie Jr., et al, "History of the Atlantic Pearl-Oyster, *Pinctata (sic) Imbricata*," p. 3.

³³ プレコロンビアン期の先住民の真珠の利用は、後述するように、16世紀のスペイン人たちが報告するようになる。

た。真珠のイヤリングや鼻輪、ブレスレット、ネックレスなどが作られ、上半身を裸体で暮らす彼らの体を飾っていた³⁴。真珠は交易品としても利用された。一方、真珠貝は農具などにも使われていた³⁵。この海域は水温が高く、貝の成長が早かったため、カリブ族は真珠貝と真珠採取を、季節にかかわらず、実施していた³⁶。クマナはベネズエラ沿岸部を代表する真珠採取地であり、交易地であったが、その付近の沿岸部でも真珠が採取されていた。

ベネズエラ島嶼部ではマルガリータ島が真珠の主要な採取地であり、交易地であった³⁷。この島にはグアイケリー族と呼ばれる先住民が暮らしており、彼らが真珠採取を担っていたと考えられる。ただ、彼らは性格が温厚で、早くからスペイン人植民者との混血が進んだため、彼らの真珠採取に関しての詳細は不明である³⁸。クバグア島は乾燥した不毛の小島であったが、ここにも真珠を採取する先住民が暮らしていて、小規模な真珠取引があった。先住民はおそらくグアイケリー族である。クバグア島の先住民は、採取した真珠を交易品として利用して、クマナなどで飲み水や食料を入手していた³⁹。ベネズエラ沖に浮かぶ他の島々でも、真珠採取が行われていたと考えられる。

16世紀にスペイン人たちが来航するようになると、クマナを中心とする沿岸部は「ペルラス海岸」(*Costa de las Perlas*)、クバグア島は「ペルラス島」(*Isla de las Perlas*)、沿岸部とマルガリータ島との間の海域は「ペルラス湾」(*Golfo de las Perlas*)と呼ばれるようになった⁴⁰。コロンが命名したと言われるマルガリータ島は、名前そのものが「真珠」である。こうした名称は、クマナを中心とするカリブ海沿岸部、マルガリータ島を中心とする島嶼地方において先住民による真珠採取やその取引が広く行われていたことを示している。

一方、コロンビア側ではグアヒラ半島の北西部のベラ岬やリオアチャなどが主要な真珠

³⁴ Las Casas, *Historia de las Indias*, vol. 2, pp. 1052, 1211-4 (Libro 1, caps. 134, 170); ラス・カサス (長南訳) 『インディアス史 (二)』、374~375 頁、『インディアス史 (三)』、158~163 頁。

³⁵ Louis Allaire, "Archaeology of the Caribbean Region," in *The Cambridge History of the Native Peoples of the Americas*, ed. Frank Salomon and Stuart B. Schwartz (New York: Cambridge University Press, 1999), vol. 3, part 1, p. 696.

³⁶ アレクサンダー・フォン・フンボルト (大野英二郎・荒木善太訳) 『新大陸赤道地方紀行 (上)』(岩波書店、2001年)、164 頁。Neil L. Whitehead, "The Crises and Transformations of Invaded Societies: The Caribbean (1492-1580)," in *The Cambridge History of the Native Peoples of the Americas*, vol. 3, part 1, p. 886.

³⁷ Las Casas, *Historia de las Indias*, vol. 2, p. 1189 (Libro 1, cap. 166); ラス・カサス (長南訳) 『インディアス史 (三)』、115 頁。

³⁸ モンテロ (ラテン・アメリカ協会訳) 『ベネズエラ史概説』、39~44 頁; Donkin, *Beyond Price*, p. 321.

³⁹ Antonio de Herrera y Tordesillas, *The General History of the Vast Continent and Islands of America*, trans. John Stevens (1740; New York: AMS Press, 1973), vol. 1, pp. 333-4.

⁴⁰ "Real Cédula, Mayo 3 de 1509," in *Colección de documentos inéditos de América y Oceanía*, vol. 31, pp. 428-9; Las Casas, *Historia de las Indias*, vol. 2, p.1211 (Libro 1, cap. 170); vol. 3, p. 2491 (Libro 3, cap. 165); ラス・カサス (長南訳) 『インディアス史 (三)』、158 頁、『インディアス史 (五)』、752 頁。Otte, *Las perlas del Caribe*, p. 93 も参照。

の採取地で、その西方のサンタマルタでは真珠が取引されていた。この地方にはワユウ族が暮らしており、彼らが真珠採取を行っていた⁴¹。彼らは、マラカイボ湖では水上生活を営む漁撈の民であった。ゴマラは『インディアス史概説』の中で、これらの地域では、真珠 (*aljofar*) は先住民の家の飾りに使われていた、大粒真珠 (*perlas*) は支配者の墓にも副葬されていたと伝えている⁴²。コロンビア側の先住民も真珠受容の文化を育んでいたのである。

ゴマラは、ベラ岬からパリア湾にいたる海岸沿いでは大粒真珠 (*perlas*) が採れるとも述べている⁴³。ベネズエラのクマナ周辺やグアヒラ半島だけでなく、南米カリブ海沿岸部ではアコヤ真珠貝の大生息地ではない他の海域でも真珠が採取されていたことがわかる。つまり、この地域では沿岸部の各地がアコヤ系真珠の採取を行い、クマナやマルガリータ島、グアヒラ半島などの主要な真珠採取地兼真珠交易地も存在し、「真珠生産圏」が形成されていたことがわかる。本章では、こうしたことを鑑み、ベネズエラからコロンビアに続く沿岸部とその海域全体を「南米カリブ海真珠生産圏」と呼ぶことにする⁴⁴。

「南米カリブ海真珠生産圏」のもうひとつの地理的特徴は、この地域では黄金もよく採れたことである。黄金はコロンビアを代表する特産品であるが、ベネズエラ沿岸部の河川からも砂金がよく採れた⁴⁵。そのため、この地域に暮らす先住民は、真珠とともに黄金を使う文化も発展させていた。16世紀初期のスペイン征服者による「南米カリブ海真珠生産圏」への対外進出を考察する場合、真珠とともに、金の存在も忘れてはならない。

また、「南米カリブ海真珠生産圏」のさらに西にはパナマ地峡があり、地峡以南の太平洋の海域にはパナマクロチョウガイが生息していた。パナマの先住民たちはクロチョウ真珠を採取していた⁴⁶。パナマクロチョウ真珠は大粒で、鉛色や黒っぽい色が多く、ゆがんだ真珠が少なくなかった⁴⁷。これらの真珠も交易などで「南米カリブ海真珠生産圏」に入ってきた

⁴¹ Whitehead, “The Crises and Transformations of Invaded Societies,” vol. 3, part 1, p. 885; Harvey F. Kline, *Historical Dictionary of Colombia* (The Scarecrow Press: Lanham, 2012), ss. v. “Guajira Peninsula,” “Wayuu Indigenous Group”; Tomás Straka et al., *Historical Dictionary of Venezuela*, 3rd ed. (Rowman & Littlefield), ss. v. “Guajira Peninsula,” “Wayúu People.”

⁴² Gómara, *Historia general de las Indias*, vol. 1, pp. 169-70, 177 (caps. 71, 73); ゴマラ (清水憲男訳) 『拓がりゆく視圏 (*Historia general de las Indias* の抄訳)』、157~158 頁、166 頁。

⁴³ Gómara, *Historia general*, vol. 1, p. 177 (cap. 74); ゴマラ、166 頁。

⁴⁴ 南米真珠史の先行研究は、本論文が提唱する「真珠生産圏」という概念では議論していない。また、ウォルシュなどの昨今の研究者は、クバグア島やマルガリータ島、さらにベラ岬なども含めて *Pearl Coast* という名称で呼んでいるが、*Pearl Coast* はクマナを中心とするベネズエラ本土に与えられた名称であり、クバグア島やベラ岬などに適用するのは適切ではない。

⁴⁵ アコスタ (増田義郎訳注) 『新大陸自然文化史 (上)』 (岩波書店、1966 年)、324~326 頁 (原著 4 巻 4 章)。

⁴⁶ Gómara, *Historia general de las Indias*, vol. 2, p. 205 (cap.198); ゴマラ (清水訳) 『拓がりゆく視圏』、257 頁。

⁴⁷ パナマ真珠貝の分布や真珠の大きさ、形状については、白井 『真珠・真珠貝世界図鑑』、

ていたと推測できる。

1.3 「南米カリブ海真珠生産圏」における *aljofar*

16世紀のスペイン語一次史料では、真珠を表す語としては *perla* の使用が一般的であるが、中には *aljofar* が使われている文献も存在する。そうした一次史料が、エンシソの『地理概要』及びオビエドの『インディアス史概説・自然史』である。エンシソの『地理概要』はスペイン領アメリカで最初の地誌として知られている。ここではこれらの一次史料を参照することで、「南米カリブ海真珠生産圏」のアコヤ系真珠と *aljofar* の関係についても見ておきたい。

エンシソは『地理概要』の中で、パリア半島からマルガリータ島の間の海域を *el golfo de aljófár* (アルフォーファル湾) と呼び、マルガリータ島の周囲の海域や *el golfo de aljóar* では良質の大粒真珠 (*perlas finas*) が採取されている、と述べている。また、アラヤ半島かクマナあたりと思われるベネズエラ沿岸部の一地点を *el cabo de aljófár* (アルフォーファル岬) と呼び、そこでは「多くの大粒真珠と多くの真珠」(*muchas perlas y mucho aljófár*) が採取されている、と記している⁴⁸。

マルガリータ島とベネズエラ沿岸部の間の海域は、アコヤ真珠貝の大生息地である。その海域・地域の地名にエンシソが *aljofar* を冠した名称をつけているのは、このあたりで採取されていたアコヤ系真珠が、*aljofar* と呼ばれる真珠であったことを示している。第2章で検討したように、この場合の *perlas* は *aljofar grande* であり、大粒のアコヤ系真珠であったと推定できる。

一方、オビエドは『インディアス史概説・自然史』の中で、*aljofar* と *perlas* の違いについて語っている。彼は、クバグア島の *perlas* は、「南の海」(パナマ湾)の真珠ほどの大きさはなく、むしろ小さいと述べ、「2カラット、3カラット、4カラット、5カラットであり、それ以上はほとんどない」と説明している。さらに「完璧な形状で、数えきれないほどの量があるのが、『巻きのよい細かい *aljofar*』(*aljofar grueso y miúdo*) であり、あらゆる大きさがある」と続けている⁴⁹。

クバグア島の真珠に関するオビエドの記述は、真珠史の先行研究でしばしば引用される有名な一節である。しかし、先行研究では、*perlas* の箇所だけが引用され、後半の *aljofar* の箇所は見過ごされてきた⁵⁰。しかし、本当に重要なのは *aljofar* の箇所である。そこで、

46~49 頁及び Kunz and Stevenson, *The Book of the Pearl*, p. 240 を参照。

⁴⁸ Enciso, *Summa de geografía*, pp. 261-2.

⁴⁹ Oviedo y Valdés, *Historia general y natural*, vol. 2, p. 204 (parte 1, libro 19, cap. 8). *grueso* とは「太った」、「厚い」という意味があり、真珠では巻きのよい真珠を指すと考えられる。「巻きのよい」とは、真珠層が厚いことである。

⁵⁰ Donkin, *Beyond Price*, p. 319; Warsh, *American Baroque*, pp. 52. ウォルシュは、ベネズエラの真珠の分類についての記述の中で、7カラット(10ミリ台)から8カラット(10ミリ台)の真珠がもっとも価値があったと述べているが、この大きさは、ごく稀に採れたとしても、ベネズエラのアコヤ系真珠の標準の大きさではない。(Warsh, p. 98)。

改めてオビエドの言説を考えてみたい。

まず、注意しなければならないのは、オビエドが、クバグア島では *perlas* も *aljofar* も採れると言っていることである。クバグア島の優占種の真珠貝はアコヤ真珠貝なので、ここでもアコヤ系真珠は、*perlas* とも *aljofar* とも呼ばれていることがわかる。オビエドは、2カラット（直径 6.64 ミリ）から 5カラット（直径 9.01 ミリ）の真珠を *perlas* と呼んでいる。一方、*aljofar* はこれら以下の真珠になるので、直径 6.64 ミリ以下の真珠が、オビエドのいう *aljofar* となる。本論文は、商業的に利用されてきたアコヤ系真珠の平均的な大きさは、直径 3 ミリから 6 ミリ台であることを明らかにしたが、オビエドが *aljofar* と呼ぶ真珠の大きさとほぼ等しい。*aljofar grueso y miúdo* という表現は、真珠の巻きがよく、粒のそろったアコヤ系真珠の特徴をあらわしている。

オビエドの記述で、次に着目すべきは、*aljofar* は「完璧な形状で、数えきれないほどの量がある」と解説されていることである。アコヤ系真珠は大きさが小さくなるほど、ほぼ球状の真珠となる。また、アコヤ真珠貝は、他の真珠貝に比べて、真珠を生み出す割合がきわめて高い。量が多く、完璧な形状という特徴からも、*aljofar* が標準的なアコヤ系真珠に適用されていることがわかる。*aljofar* の量の多さこそが、「南米カリブ海真珠生産圏」において、真珠採取業という水産業を成功させた要因のひとつになっていくのである。

これから見ていくように、スペインの真珠行政の法令は、3カラット（直径 7.60 ミリ）以上の真珠はすべてスペイン国王の専有になることを定めている。この事実からも、真珠が 3カラット以上あれば、国王用の貴重な大粒真珠になったことがわかる。南米真珠史研究者たちは、オビエドの *aljofar* の記述の箇所は無視し、*perlas* の記述だけを参照して、クバグア島の真珠の標準を 2カラットから 5カラットとしてきた。しかし、この重量の真珠は特別な大きさの真珠だったことを理解しなければならない。クバグア島を含む「南米カリブ海真珠生産圏」を代表し、商品として流通した主要な真珠は、2カラット未満の *aljofar*、及び国王の専有にならない 2カラット以上、3カラット未満の *perla* だったのである。

先述したように、スペイン語一次史料では、*aljofar* という語はあまり使われておらず、*perlas* という語が単独で出てくることが多い。その際の *perlas* は、*aljofar* も含む真珠一般を指す言葉として理解するべきである。以後、本章では、スペイン語一次史料に *aljofar* が出てきた場合に限り、その旨を記し、*perla(s)* が単独で使われている場合は、その旨を記さず、「真珠」として翻訳する。イタリア語の *perla*、*perle*、16世紀のオランダ語文献で使われた *perle*、*perlen* についても同様である。

第2節 16世紀初期のヨーロッパ人と南米カリブ海の真珠

南米カリブ海の真珠をおそらく最初に入手したヨーロッパ人が、1498年の第3回航海時のコロンとその乗組員だった。同年7月末か8月初め、コロン率いる船隊は、ベネズエラのパリア半島に到達した。その地で先住民が真珠の装身具をつけていることに気づき、彼らの真珠を入手した。以来、南米カリブ海沿岸には、スペイン人コンキスタドールたちが

次々と訪れることになる。彼らは、まずパリア半島付近に到着し、そこからマルガリータ島などの島嶼地方やコロンビア方面に向かって航行していった。ブラジル方面に向かうより、圧倒的に西方への航海が多かった。まさに「南米カリブ海真珠生産圏」を目指して、初期の多くの航海が実施されたのである。

「南米カリブ海真珠生産圏」は、なぜスペイン人にとって重要だったのだろうか。真珠のための対外拡張はあったのだろうか。こうしたことを理解するには、まず、16世紀初頭のヨーロッパ人にとって、真珠とは一体どういうものであり、どのような意味があったのかを知る必要がある。

実は16世紀初期のさまざまなエピソードは、航海の動機としての真珠、致富衝動、真珠の価格、隠匿、真珠取引の実態などに関する事例を伝えるものが少なくない。こうしたエピソードは、16世紀のスペイン人とポルトガル人の「真珠生産圏」への進出の動機や特徴について示唆するところが多い。エピソードの中には、南米真珠史研究でよく引用されるものもあるが、その一方で、まだほとんど参照されていないエピソードもある。アメリゴ・ヴェスプッチの私的書簡などは、先行研究が使用してこなかったものであり、ラス・カサスの『インディアス史』も十分に参照されていない。本節では、こうした一次史料も参照しながら、航海の動機としての真珠、致富衝動、真珠の価格、隠匿、真珠取引の実態を明らかにし、16世紀のヨーロッパ人にとって、なぜ「南米カリブ海真珠生産圏」が重要で、どのような意味をもったのかを考察する。

2.1 航海の動機、致富衝動

近代世界システム論のウォーラーステインは、ヨーロッパ人は何を求めて探険に出たのかという問いを發し、「貴金属と香料、というのが教科書的な答えであるし、ある程度まではこれが正解でもある」（川北稔訳）と述べている⁵¹。カリブ海域史や今日のグローバルヒストリーなどの歴史研究の領域においても、16世紀の地理上の発見を推進したのは、ヨーロッパ人の黄金への執着であったということが強調されてきた⁵²。こうした議論で欠落してきたのが、ヨーロッパ人の真珠の希求の情熱である。

真珠の獲得が、ヨーロッパ人の航海の大きな動機であったことは、コロンが航海に赴く前にカトリック両王と締結した1492年の「サンタフェの協約書」で見ることができる。この協約書によると、航海中に購入し、物々交換し（*trocaren*）、主張し、取得し、獲得した「真珠、貴石（*pedras preciosas*）、金、銀、スパイス、その他のいかなる物品と商品」については、必要経費を差し引いた後、全体の10分の1をコロンに与え、残りの10分の9はカトリック両王が取得することになっていた⁵³。協約書は、五つの貴重な物品を列挙して

⁵¹ ウォーラーステイン（川北訳）『近代世界システム I』、31頁。

⁵² ウィリアムズ（川北訳）『コロンブスからカストロまで（1）』、14~17頁；フランク（山下訳）『リオリエント』、137頁。

⁵³ “Capitulaciones entre los Señores Reyes Catolicos y Cristóbal Colon,” in *Colección de documentos inéditos de América y Oceanía*, vol. 17, p. 573；「サンタ・フェの協約書」青

いるが、冒頭に来ているのは真珠であり、真珠はもっとも望まれている物品だったことを示している。乗組員たちは賃金制なので、新たな土地で発見される物品の分け前にはあずかれないことになってはいたが、彼らにとってこうした協約は建前に過ぎなかった。

乗組員にとって真珠の獲得が致富への手段、あるいは致富そのものであったことは、コロンの第2回航海に同行したイタリア人、ミケーレ・デ・クネオの書簡が伝えている。

第2回航海でコロンはキューバ島へ航行するが、クネオによると、その付近の海域で彼らは、長さが1パルモ（約21センチ）から4パルモ、幅が0.5パルモから1.5パルモもある「白い真珠貝」（*bianco nachare*）を数多く発見した。クネオは、これらの真珠貝を見て「豊かになる」と誰もが本気で思ったと述べている。クネオたちは5隻、6隻のボートが真珠貝で埋まるほど貝を採り、すべての貝を開けたが、一個の真珠も出てこなかったという⁵⁴。

長さが80センチ以上あるような真珠貝は知られていない。おそらく、シャコガイのような貝だろう。このクネオの記述は、当時のヨーロッパ人が、彼らが真珠貝と思う貝を発見しただけで、豊かになれると考えることを示しており、真珠の獲得がヨーロッパ人にとって致富であったことを明らかにしている。

2.2 大航海時代黎明期の真珠の価格

コロンをはじめとするヨーロッパ人が求めた真珠は、当時どれくらいの価値があったのだろうか。1500年前後の真珠の価格と航海の収益を伝えるのが、ヴェスプッチの私的書簡である。この史料は先行研究が参照しておらず、真珠の価格の考察も先行研究が扱っていないテーマなので、詳しく見ておきたい。

ヴェスプッチは、1498年のコロンの真珠発見の報告に接してただちに編成されたアロンソ・デ・オヘーダの航海に参加して、1499年から1500年にかけてベネズエラの沿岸部を航行した。その時の航海の様子は、ヴェスプッチのふたつの私的書簡に描かれている。ひとつは、1500年7月18日付の *Carta Primera de Americo Vespucio a Lorenzo di Pier Francisco de Medici*（通称「セビリャ書簡」）であり、もうひとつは、1502年頃の *Carta Fragmentaria relative al tercer viaje*（通称「リドルフィ断片書簡」）である⁵⁵。「セビリャ書簡」は、ヴェスプッチがフィレンツェ時代に仕えていたメディチ家のロレンツォに航海の様子を報告したものである。ヴェスプッチが航海から戻った約一カ月後に執筆された。まだ記憶も感動も新しい時期に書かれたものである。「リドルフィ断片書簡」は、20世紀前半、イタリアの歴史家 R. リドルフィがフィレンツェの旧家から発見したもので、破損部分

木康征編訳『完訳コロンブス航海誌』（平凡社、1993年）、507頁。

⁵⁴ Michele Cuneo, “Relación de Michele Cuneo, a Geronimo Annari,” in *Colección documental del descubrimiento (1470-1506)*, ed. Juan Péres de Tudela et al. (Madrid: Real Academia de la Historia, 1994), vol. 2, p. 865; 「ジェロラモ（ママ）・アナリに宛てたミケーレ・デ・クネオの書簡」青木編訳『完訳コロンブス航海誌』、369頁。

⁵⁵ 「セビリャ書簡」、「リドルフィ断片書簡」は、*Colección documental del descubrimiento*, vol. 3, pp. 1920-34, pp. 1953-8 及び篠原「史料紹介 アメリゴ・ヴェスプッチの私信」（その1）と（その3）を参照。

があり、宛先や日付もついていない。書簡は、誰かの問いに答えたり、反駁する形で書かれている。この書簡をめぐって、かつては真贋論争があったが、今ではヴェスプッチの記述と見なされている⁵⁶。これらの私的書簡は、多少の誇張や伏せた部分などはあるにせよ、彼の刊行物よりも本音や事実が述べられていると考えられる⁵⁷。

「リドルフィ断片書簡」には、ヴェスプッチが 1499 年から 1500 年にかけてベネズエラのカリブ海沿岸部で行ったと考えられる真珠交易についての記述がある。それによると、ヴェスプッチは、鈴 1 個を先住民に渡して、157 個の真珠を得たが、それらは 1000 ドゥカト (*ducati*) の価値があったという。また、彼が参加した船隊全体では、10 ドゥカトの元手で、119 マルコ (1 マルコは 230 グラム、すなわち 27.37 キロ) の真珠を手に入れ、その価値は 1 万 5000 ドゥカトであったという⁵⁸。

ここで示されている価格は、16 世紀に南米の真珠がヨーロッパに大量流入する直前のものであり、15 世紀末のヨーロッパにおける真珠の価格を伝えるものとして重要である。ヴェスプッチのイタリア語の書簡ではイタリアの *ducato* 金貨を単位にして真珠の価値が記されているが、彼がスペインの船隊に加わり、スペインで暮らしていたことを勘案すると、この *ducato* はスペイン金貨のドゥカド (*ducado*) と考えられる。つまり、ヴェスプッチが得た 157 個の真珠は 1000 ドゥカドの価値があり、1 個の平均価格は約 6.37 ドゥカドとなる。一方、119 マルコの真珠は、1 マルコあたり 126 ドゥカドになる。

ヴェスプッチが得た 157 個の真珠や 119 マルコの真珠について、真珠の詳細はわからない。ただ、157 個の真珠については、ベネズエラ沿岸部で採れる真珠は主にアコヤ系真珠であること、ヴェスプッチが 157 個と数を数えていること、当時、アコヤ系真珠は滅多にヨーロッパに入ってこない貴重なオリエントの物産だったことを勘案すると、その真珠は、一級品のアコヤ系真珠の大きさである直径 5~6 ミリ台であったと推測できる。一方、119 マルコの真珠は、230 グラムでまとめられているので、直径 3 ミリから 5 ミリぐらいの真珠だろう。マルコ単位の真珠には、品質の劣る真珠も含まれていたと考えられる。

次に、こうした真珠の価格を当時売買されていた奴隷の価格と比べておきたい。

ヴェスプッチは、「セビリャ書簡」の中で 1499 年から 1500 年にかけての航海における収益について、次のように、語っている。ヴェスプッチたちは、帰国すると、新世界で捕らえた先住民 200 人を奴隷としてカディスで売却した。船の代金を支払うと、500 ドゥカト

⁵⁶ 篠原「アメリカ・ヴェスプッチの私信 (その 3)」、131 頁。

⁵⁷ ヴェスプッチの 1499 年から 1500 年にかけての航海は、1505 年か 1506 年頃に刊行された *Lettera di Amerigo Vespucci delle isole nuovamente trovate in quattro suoi viaggi* にも記されている。これは、ヴェスプッチがコロンよりも先に新世界に到着したと主張する目的で書かれた刊行物であり、年代などには信憑性がなく、内容も誇張がある。ヴェスプッチ (長南実訳)「四回の航海において新たに発見せる陸地に関するアメリカ・ヴェスプッチの書簡」『航海の記録』(岩波書店、1965 年)、261~317 頁を参照。ヴェスプッチの刊行物としては、『四回の航海』以外に『新世界』がある。『航海の記録』、321~338 頁を参照。

⁵⁸ Vespucci, “*Carta Fragmentaria relative al tercer viaje,*” in *Colección documental del descubrimiento*, vol. 3, p. 1957; 篠原「アメリカ・ヴェスプッチの私信 (その 3)」、143 頁。

しか残らなかった。それを乗組員たちで 55 等分したので、取り分はわずかだったが、彼らは無事に帰国できたことに満足し、神に感謝したという⁵⁹。

この記述に基づくと、乗組員 1 人あたりの航海による収益は約 9.1 ドゥカドである。これが彼らの奴隷貿易を含む航海の収入だった。この収益には、ヴェスプッチや他の乗組員たちがそれぞれ得た真珠の儲けは含まれていない。「リドルフィ断片書簡」によると、真珠の取引では、彼ら全員で 1 万 5000 ドゥカド相当の真珠を得ていたので、55 人の乗組員一人当たりの真珠の収入は、272 ドゥカドになる。真珠取引は、奴隷売却を含む新世界への航海に比べて、約 30 倍の利益が出たことがわかる。ヴェスプッチの獲得した 157 個の真珠だと、1 個が平均 6.37 ドゥカドなので、2 個あれば、航海の収益を上回ることになる。

真珠獲得の収益性は、次の数字からも明らかになる。ラス・カサスの『インディアス史』は、コロンが 1496 年時に先住民を奴隷として売ることを前提に航海の収益を計算していたことを伝えている⁶⁰。それによると、コロンはインディアスの先住民奴隷 4000 人の売却で 20 クエントの収益を得ると考えていた。1 クエントは 100 万マラベディなので、先住民奴隷 1 人の値段は 5000 マラベディとなる。

ヴェスプッチが得た 157 個の真珠は、1 個 6.37 ドゥカドなので、マラベディに換算すると、2389 マラベディである⁶¹。先住民奴隷の値段は 5000 マラベディなので、一級品のアコヤ系真珠が 2 個あれば、先住民奴隷 1 人の価格に近くなる。

このようにヴェスプッチが語る真珠の価格を分析すると、大航海時代黎明期において、真珠はきわめて高価な物品であったことが判明する。スペイン人の乗組員やコンキスタドールたちが目の色を変えて追い求める高額商品だったことが、初期の一次史料の分析で明らかになった。

2.3 真珠の隠匿

真珠は高価で小さいため、隠匿、密輸、過少申告の対象となった。したがって、真珠の流通を検討する際には、公式ルートから漏れる大量の真珠の存在も認識する必要がある。実際、古今東西の文献を紐解くと、真珠の隠匿や密輸の事例は、さまざまな形で登場するが、ここでは、大航海時代の真珠の隠匿の事例として、コロンのエピソードを取り上げる。先述の「サンタフェの協約書」とともにこの事例も、真珠史の先行研究で言及されることがあるが、それらはラス・カサスの『インディアス史』の記述は参照していない。本章では、『インディアス史』が記す話も加えておく。

コロンは 1498 年の第 3 回航海時の航海で、ベネズエラのパリア半島に到達し、そこで真

⁵⁹ Vespucci, “*Carta Primera de Americo Vesputio a Lorenzo di Pier Francisco de Medici*,” in *Colección documental del descubrimiento*, vol. 3, p. 1932; 篠原「アメリゴ・ヴェスプッチの私信（その 1）」、154 頁。

⁶⁰ Las Casas, *Historia de las Indias*, vol. 2, p. 1119 (Libro 1, cap. 150); ラス・カサス（長南訳）『インディアス史（二）』、494 頁。

⁶¹ 1 ドゥカドは、375 マラベディである。

珠を入手した。第3回航海は、コロンが初めて「新大陸」に到達したという歴史的意義をもっていたが、同時にこの航海は、オリエント世界以外のアコヤ系真珠の産地発見という意義もあった。

コロンは第3回航海の途中で、「中間報告書」をスペイン王室に送ったが、その報告書では、先住民が真珠の腕輪をつけていたことを簡単に記しただけで、彼ら自身が大量の真珠を入手したことは詳しく報告していない⁶²。『インディアス史』によると、コロンは「中間報告書」を送った際、航海で得た真珠として160個ないし170個の真珠をスペイン国王夫妻に献上した⁶³。コロン以後、他の船隊がベネズエラの海岸を航行し、大量の真珠を持ち帰るようになると、コロンが国王夫妻に献上した真珠はあまりに少ないことが判明し、コロンの真珠の過少申告が強く非難されるようになった。コロン自身も、1500年のフアナ・デ・ラ・トーレへの書簡の中で、自分が獲得した真珠は1ファネガ（約55リットル）あったが、これを国王夫妻に報告しなかったため非難されていると述べ、真珠の隠匿を認めている⁶⁴。55リットルの真珠と比較すると、160個ないし170個の真珠は大変少なく、多くの真珠が非公式に取得されたことがわかる。

先述したように、ベネズエラにおけるコロンの真珠発見は、オリエント世界に代わるヨーロッパ人による真珠の産地の発見であった。しかし、その発見は、大航海時代の劈頭を飾る真珠隠匿の事例でもあった。

一方、ヴェスプッチの私的書簡にも、真珠の収益について伏せた部分が存在した。彼は「リドルフィ断片書簡」では、鈴1個を先住民に渡して、1000ドゥカド相当の157個の真珠を得たと述べている。しかし、ヴェスプッチが彼の主人のロレンツォに宛てた「セビリャ書簡」では、そのことは語っていない。ヴェスプッチは、その後、刊行物にした彼の書簡集の中で、金額は語っていないが、鈴1個と引きかえに、150個の真珠を得た話を掲載している⁶⁵。したがって、この物々交換は、実際にあったと推定できる。ヴェスプッチも、真珠を隠匿していたのである。

2.4 真珠略奪の正当化

コロンによるベネズエラの真珠の発見は、スペイン人の致富衝動を刺激した。コロンの「中間報告書」と真珠の献上品がスペインに届くと、数カ月の内に少なくとも四つ、あるいは五つの個人による私的な航海が実施された。ベネズエラへの航海の先陣を切ったのは、

⁶² コロン「第三回航海について報告するため、コロンブスがカトリック両王に宛てた書簡」青木編訳『完訳コロンブス航海誌』、380~407頁。

⁶³ Las Casas, *Historia de las Indias*, vol. 2, p. 1142 (Libro 1, cap. 156); ラス・カサス『インディアス史(三)』、25頁。

⁶⁴ コロン「フアナ・デ・ラ・トーレへの書簡」青木編訳『完訳コロンブス航海誌』、626~643頁。

⁶⁵ ヴェスプッチ（長南訳）「四回の航海において新たに発見せる陸地に関するアメリゴ・ヴェスプッチの書簡」、293頁。

アロンソ・デ・オヘーダの船隊であったが、帰国がもっとも早かったのは、ペラロンソ・ニーニョとクリストバル・ゲーラの船であった。彼らは、150 リブラ（69 キロ）あるいは150 マルコ（34.5 キロ）以上の真珠をスペインに持ち帰り、人々に新世界の真珠の存在を知らしめる役割を果たした⁶⁶。南米大陸の真珠は、ニーニョらの致富への思いを実現したものである。

ニーニョたちが持ち帰った真珠は、ベネズエラの先住民が装身具として使用していたものであった。真珠の装身具の他に、彼らは金製品の飾りも所持していた。そうした真珠や金は、先住民自身の所有物である。それらを「奪う」という行為には、その正当性を主張する大義名分が必要であった。そのためにスペイン人コンキスタドールたちはふたつの方法を考案した。ひとつは、“*rescate*”（物々交換）またはその動詞の“*rescatar*”（物々交換する）という言葉の使用であり、もうひとつは、「カニバル神話」の創造である。これらについては、真珠史やラテンアメリカ史の先行研究が議論してきたため、簡単に解説しておく。

16 世紀のスペイン人コンキスタドールたちの言う「物々交換」とは、彼らが鈴、留めピン、手鏡、ビー玉などの「安物の品々」を先住民に渡し、代わりに彼らの真珠と金を入手する方法である。「物々交換」は平和裡に行われるものであるが、大航海時代初期には、暴力や脅迫、殺戮が伴う略奪行為であることも少なくなかった。ただ、スペイン人は、「物々交換」という言葉を使い続けることで、暴力行為を隠し、真珠や金を獲得する行為の正当性を装いつけたのである⁶⁷。

第二の大義名分がカニバル神話である。カニバル神話は、ベネズエラ沿岸部のカリブ族に食人種のレッテルを張ることで作り上げた虚構である。1503 年の法令は食人種の奴隷化を認めたため、スペイン人は、彼らが食人種と見なすカリブ族を襲撃・捕獲し、奴隷化することが可能となった⁶⁸。多くの先住民がいる中、カリブ族が対象にされたのは、彼らが真珠と金が豊富なベネズエラ沿岸部に暮らしている上、スペイン人に反抗的な態度を取り続けたからであった。スペイン人は、カリブ族が真珠の「物々交換」を拒否しても、カニバルへの攻撃という大義で、暴力的に彼らの真珠と金を奪うことが正当化されたのである。

⁶⁶ コロンの真珠発見の報告に触発され、実施された四つまたは五つの航海とその経緯、航海の動機としての真珠の獲得については、ラス・カサスが『インディアス史』の中で詳述している。Las Casas, *Historia de las Indias*, vol. 2, pp. 1178-98, 1209-27 (Libro 1, caps. 164-7, 170-3); ラス・カサス『インディアス史 (三)』、94~133 頁、156~195 頁。Sauer, *The Early Spanish Main*, pp. 108-114; 山田『黄金郷伝説』^{エルドラド}25~35 頁も参照。

⁶⁷ ラス・カサスやオビエドは、スペイン人コンキスタドールたちが、鈴、留め針、安物の品と真珠や金製品と交換した話を、繰り返し述べている。Las Casas, *Historia de las Indias*, vol. 2, pp. 1211-4 (Libro 1, cap. 170); ラス・カサス『インディアス史 (三)』、158~163 頁; Oviedo y Valdés, *Historia general y natural de las Indias*, vol. 2, p. 191 (parte 1, libro 19, cap. 1); Otte, *Las perlas del Caribe*, pp. 98-108. ウォルシュは、真珠との「物々交換」には鈴、ワイン、食品などが使われたと主張しているが、ワインの使用はもっと後の時代であり、初期の真珠の「物々交換」を特徴づけるのは、もっと安物の品である。Warsh, *American Baroque*, p. 37.

⁶⁸ カニバル神話については、染田・篠原監修『ラテンアメリカの歴史』、34~35 頁を参照。

カニバル神話は、先住民奴隷化の観点から研究されてきたが、真珠史の観点では、先住民の所持品である真珠を奪う理由づけになったと言える。

コロンの第1回航海と第2回航海及びその植民活動は、国家が許可した彼の独占事業として実施されたが、1495年以降、スペイン王室はインディアスへの渡航を自由化するようになった。ただ、当時のエスピノーラ島では金鉱開発は植民地政府の主導で行われていたため、名乗りを上げる個人航海者はおらず、渡航の自由化は奏功しなかった。しかし、コロンがベネズエラで真珠を発見すると、先述したように、次々と個人航海が実施されることになった。彼らは、エスピノーラ島での金の採掘には興味を示さなかったが、先住民が所有する真珠や金には大いに関心を示したのだった。「南米カリブ海真珠生産圏」は、大航海時代の早い時期にスペイン人の征服活動の舞台になったのである。

この時期のスペイン人コンキスタドールたちは、南米大陸のベネズエラ沿岸部に拠点や商館などを設けなかった。この地に暮らすカリブ族は勇猛で、毒矢を使用したため、スペイン人自身が定住を恐れていた。しかし、彼らは定住しなくても、スペイン本土やサントドミンゴから「南米カリブ海真珠生産圏」に到来し、略奪を繰り返すだけで、潤沢な真珠や金を入手できたのだった。

オビエドは『インディアス史概説・自然史』の中で、「スペイン人の多くがここインディアスの征服や平定の最中に傷つき、命を落としたが、富を手に入れ、救われたものも多数いたのである……これまで同様今後も、莫大な量の金、銀、真珠 (*perlas*) などの財宝や、その他、数多くの富や品物がスペインにもたらされるだろうということである」(染田秀藤・篠原愛人訳)と述べ、別の場所では、インディアスは「大粒真珠や真珠」(*perlas y aljofar*) などの貴重な物品があり、世界中が大いなる恵みを受けているとも語っている⁶⁹。

このように「南米カリブ海真珠生産圏」の真珠は、ヨーロッパ人の致富への思いを実現させたのである⁷⁰。

以上、航海の動機としての真珠、致富衝動、真珠の価格、隠匿、真珠略奪の正当化の観点から、なぜ「南米カリブ海真珠生産圏」がスペイン人にとって重要だったのかを検討した。本節はヴェスプッチの私的書簡をはじめ、16世紀の一次史料を分析したが、それによって、(1) 15世紀末、真珠はきわめて高価な物品であったこと、(2) 航海の動機には真珠による致富への思いがあったこと、(3) 大航海時代の幕開けによって、暴力を使えば、その真珠を先住民から略奪できる土地が、スペイン人の目の前に現れたこと、(4) この真珠の豊富な土地の発見が大航海時代を促進させたことを明らかにした。

⁶⁹ Oviedo y Valdés, *Historia general y natural de las Indias*, vol. 1, pp. 75, 167 (parte 1, libro 3, cap. 9; libro 6, cap. 8); オビエード (染田秀藤・篠原愛人訳) 『カリブ海植民者の眼差し (*Historia general y natural de las Indias* の抄訳)』(岩波書店、1994年)、80頁、204頁。

⁷⁰ 大航海時代初期におけるベネズエラの果たした役割は、モンテロ (ラテン・アメリカ協会訳) 『ベネズエラ史概説』、18~21頁を参照。

真珠の豊富な土地こそが、アコヤ系真珠が採取できる「南米カリブ海真珠生産圏」であった。「南米カリブ海真珠生産圏」は、真珠があるゆえに重要であり、多くのコンキスタドールたちを呼び寄せ、大航海時代を進展させたのである。カリブ海域史や近代世界システム論などの歴史研究の領域では金ばかりに関心が集まってきたが、16世紀初めのヨーロッパ人が求めていたのは、金とスパイスばかりではなかった。真珠ゆえの航海、真珠ゆえの対外拡張が存在したのである。

第3節 「南米カリブ海真珠生産圏」における真珠採取業の形成と発展

スペイン人は真珠採取業にも乗り出していった。真珠採取業は、海から富を引き出す水産業である。南米真珠史の先行研究は、真珠採取業に奴隷化されたアフリカ人が投入されたという事実や真珠産業の生産額や税額などには強い関心を示しているが、真珠採取業が、スペイン人自身が成立させたひとつの産業であったという点は見逃している。

さらに、南米真珠史の先行研究では、オッテのクバグア島研究の成果により、この島での真珠生産ばかりが議論される傾向がある。ただ、クバグア島の繁栄の時期はきわめて短い。また南米の真珠産業は、真珠貝の枯渇や外敵の襲撃などによって、「南米カリブ海真珠生産圏」の中で真珠の採取地を変えていったという特徴を持つ。それゆえに、オッテの研究だけでは、16世紀の南米の真珠採取地の変遷やその継続性を見るには十分でない。ドンキンは中南米におけるさまざまな真珠採取地の考察を行っているが、「南米カリブ海真珠生産圏」という発想がなく、真珠採取地の変遷の経緯もそれほど考察されていない。また、オッテもドンキンも、真珠採取業への国家の関与や法整備という視点では議論していない。

こうしたことを鑑み、本節では「南米カリブ海真珠生産圏」における真珠採取業の成立と発展に着目し、スペイン人がどこで、どのように真珠採取業を発展させ、スペイン植民地政府はそれにどのように介入してきたかを中心に、16世紀の真珠採取地の変遷を俯瞰する。この目的のために、南米真珠史の二次文献にも目を配りながら、彼らが十分参照していない『インディアス法集成』や『海外領土の未公開文書集』に収められた各種法令、ラス・カサスとカルロス1世の1520年の協約書などの一次史料も利用する。

3.1 クバグア島

(1) 真珠採取の自治都市の形成

クバグア島は、スペイン人による真珠採取業が最初に実施された島である。この島は、スペイン人が南米方面で最初に入植した地でもあった⁷¹。

クバグア島は、面積約24平方キロメートルの乾燥した不毛の小島である。飲み水にも事

⁷¹ クバグア島の研究としては *Otte, Las Perlas del Caribe*; モンテロ『ベネズエラ史概説』; Warsh, *American Baroque*, pp. 31-77 を参照。クバグア島の真珠に言及している一次史料は少なくない。本章との関係ではラス・カサスやオビエド、アントニオ・デ・エレラの記述が役に立つ。こうした一次史料については、必要な箇所適宜参照する。

欠く島であったが、その周辺海域には豊饒な真珠の漁場があるため、スペイン人の到来以前から真珠を採取する少数の先住民が暮らしていた。当時、ベネズエラ島嶼部における真珠の主要な産地はマルガリータ島であったが、スペイン人がクバグア島を選んだのは、居住する先住民が少なかったからだと考えられる。

クバグア島へのスペイン人の入植や真珠採取が始まった正確な年代は定かでない。しかし、1508年か1509年ぐらいには、入植が始まっていたと考えられる⁷²。1509年5月3日の勅令は、クバグア島を真珠島 (*la Isla de las perlas*) と呼んだ上で、この島は小さな島なので、2~3人のキリスト教徒を警備にあたらせば、入植者を活気づけ、不安を取り除けると述べており、クバグア島への入植を促す内容となっている⁷³。1512年12月10日の王令は、エスピノーラ島とサンフアン島の市民、居住者、滞在者は、司令官や判事などから許可証を入手すれば、誰でも自由に真珠を採取し、「物々交換する」ことを認める一方、五分の一税を払うことを命じている⁷⁴。これらの法令から、スペイン人入植者は先住民の襲撃もあり、入植には躊躇があったが、スペイン王室は、税としての真珠の獲得のためクバグア島への入植を積極的に進めていたことがわかる。クバグア島におけるスペイン人の集落成立には、スペイン王室の強い意向があったのである。

入植が進み出すと、クバグア島は多大な利益の上がる場所となっていった。オビエドは、クバグア島の真珠の収益はきわめて多く、大粒真珠 (*perlas*) と真珠 (*aljófar*) で国王への五分の一税が払われており、1万5000ドゥカドの価値があったと記している⁷⁵。全体で見ると、クバグア島では7万5000ドゥカド相当の真珠が獲得されていたのである。1512年の法令は、3カラット (直径7.60ミリ) 以上の真珠は国王が得ることを定めている⁷⁶。この法令から、国王自身が真珠を望んでいたこと、3カラット以上の真珠は国王の専有になったこともわかる。

1512年12月10日の王令から明らかになるように、初期の真珠の入手方法は、スペイン人自身の真珠採取と先住民との「物々交換」の二本立てであった。当初は「物々交換」の方が比重が高く、クバグア島は先住民との真珠取引の拠点になっていた。しかし、次第に真珠採取業も進展していった。

1520年、クバグア島のスペイン人入植地は、先住民の反乱と襲撃で壊滅的な被害を受けた。しかし、1521年以降、アルカルデ・マヨール (*alcalde mayor*) の主導によって都市の

⁷² Donkin, *Beyond Price*, p. 320.

⁷³ “Real Cédula, Mayo 3 de 1509,” in *Colección de documentos inéditos de América y Oceanía*, vol. 31, p. 428; Sauer, *The Early Spanish Main*, p. 191.

⁷⁴ “Provision del Rey Católico, Diciembre 10 de 1512,” in *Colección de documentos inéditos de ultramar*, vol. 9, pp. 3-4; Otte, *Las Perlas del Caribe*, p. 108.

⁷⁵ Oviedo y Valdés, *Historia general y natural de las Indias*, vol. 2, p. 194 (parte 1, libro 19, cap. 2).

⁷⁶ “Ley 1, Diciembre 1512, De las perlas y piedras preciosas,” in *Colección de documentos inéditos de ultramar*, vol. 22, p. 298.

復興が進められていった⁷⁷。スペイン人市民には宅地が分配され、石材の住居が建造され、道路は舗装され、格子状に整備された。集落はヌエバカディスと呼ばれるようになり、サントドミンゴのアウディエンシアに直属した。1528年、ヌエバカディスは町から市に昇格し、市参事会による統治組織を持つ自治都市となった。最盛期には、居住登録している223人の「市民」(*vecino*)をはじめ、先住民、黒人、商人など、1000人を超す人々が暮らしていた⁷⁸。

オビエドは『インディアス史概説・自然史』の中で、クバグア島は大変小さく、不毛をきわめた土地で、川にも泉にも一滴の水がない、他にもいろいろ困難があり、農作地も牧草地もないと述べ、次のように続けている。

ここにはヌエバカディスと呼ばれる立派な自治都市 (*república*) があり、その富は莫大であり、それゆえ、キリスト教徒が暮しているインディアスの中でも、これほど豊かで利益を出しているところはない⁷⁹。

オビエドは、さらに、この島では大粒真珠 (*perlas*) と真珠 (*aljofar*) が豊富で大量にあるおかげで、五分の一税を増やし、個人 (*personas particulares*) の儲けは多大なものになった、この儲け仕事の評判とその価値は莫大であり、毎日、実施されていると言われていと述べている⁸⁰。

オビエドによると、クバグア島は、真珠採取業の発展により新世界でもっとも豊かな土地となったのである。また、オビエドは、ヌエバカディスは自治都市であり、真珠採取に係わる個人事業者が利益を得ていることを述べており、クバグア島の真珠採取地は、スペイン人個人事業者による水産業が勃興し、市参事会による自治が行われる先端的で豊かな都市だったことが判明する。この島の真珠生産が軌道に乗り出した1520年代は、アステカ帝国は征服されていたが、インカ帝国の莫大な金銀財宝は、まだ知られていなかった。クバグア島の海域が生み出す真珠は、新世界の重要な富であり、その真珠を生産する真珠採取業は、スペイン帝国の重要な産業であった。

(2) スペイン王室による監視体制

スペイン国王にとっては、クバグア島が生み出す真珠の五分の一税は、重要な富の源泉だった。それゆえ、クバグア島では真珠の採取、保管、売買、輸送にいたる一連の過程が

⁷⁷ アルカルデ・マヨールは、アウディエンシアの管轄区を統轄する最上位の人物である。決まった邦訳は存在しない。

⁷⁸ Otte, *Las Perlas del Caribe*, p. 348; モンテロ (ラテン・アメリカ協会訳) 『ベネズエラ史概説』、26~29頁。

⁷⁹ Oviedo y Valdés, *Historia general y natural de las Indias*, vol. 2, p. 188 (parte 1, libro 19, proemio).

⁸⁰ Oviedo y Valdés, p. 188

王室官吏の厳しい規制と監視下に置かれることになった。こうした規制や監視は、『インディアス法集成』に収録された「真珠採取場、真珠と価値ある宝石の送付に関する法令」や『海外領土の未公開文書集』に収録された「真珠と宝石に関する法令」によって知ることができる。「真珠と宝石に関する法令」には、さらに「物々交換と真珠の五分の一税の正確な徴収のためにクバグア島とベラ岬で施行された基本法 (*ordenanzas*)」や「クバグア島や他の真珠の漁場 (*pesqueria*) に関する基本法」という一連の法令が含まれている⁸¹。基本法のタイトルに「クバグア島」の名前が入っていることから、これらの法令がクバグア島の真珠採取に向けて出されたことがわかる。ベラ岬については、後述する。先行研究は、こうした法令や基本法を詳しく検討してこなかったもので、見ておきた、

真珠に関する法令や基本法によると、クバグア島には、アルカルデ・マヨール、普通判事 (*alcalde ordinario*)、助役 (*teniente*)、監視官 (*veedor*)、司法官 (*justicia*)、商務官 (*factor*)、会計官 (*contador*)、財務官 (*tesorero*)、書記 (*escribano*) などの王室任命の官吏が派遣されていた。真珠採取で得た真珠は、等級、価値、真珠が採取された年月日、真珠を採取した人物とその所有者について記した帳簿を 2 冊作らなければならず、1 冊は普通判事が保管し、もう 1 冊は監視官と会計官が保管した。真珠を五分の一税の課税対象として分ける時は、宝庫担当の書記が立ち会い、個々の真珠の帳簿をつけなければならなかった。司法官と官吏は、一年に 2 回、真珠の五分の一税の支払いの遅延がないかを確認し、違反者を罰し、五分の一税を徴収することになっていた⁸²。徴収された五分の一税の真珠は、三つの鍵付きの宝庫の多くの引き出しの中で保管された。鍵は、財務官、商務官、判事が保管した。宝庫の残りの引き出しには、市民が所有する真珠が保管された。彼らは鍵を持つことができたが、個々の真珠について等級と価値を記録することになっていた。宝庫を開ける時には市民に告知があり、宝庫の前に行ることができた⁸³。

クバグア島の人々は、真珠の売買や島からの移動についても厳しい統制下に置かれた。基本法によると、クバグア島では官吏の前でない限り、真珠の購入や売却が禁止された。また普通司法官と官吏の前で登録しなければ、真珠を島から持ち出すことはできず、彼らから許可証を得なければ、大小の船やカヌーのいずれでも、真珠の漁場を除き、島から出ることはできなかった⁸⁴。

クバグア島の真珠に関する法令を分析すると、その内容は真珠の徴税や保管、輸送に関

⁸¹ “Ordenanzas hechas para la isla de Cubagua y cabo de la Vera para el rescate y buen recaudo del quinto de las perlas” and “Ordenanzas hechas para la isla de Cubagua y pesqueria de las perlas,” in “De las perlas y piedras preciosas,” in *Colección de documentos inéditos de ultramar*, vol. 22, pp. 302-7.

⁸² “Leyes 17, 18, De las perlas y piedras preciosas,” p. 301; “Ley 4, Ordenanzas hechas para la isla de Cubagua y cabo de la Vera” p. 302; “Ordenanzas para la isla de Cubagua y pesquería de las perlas,” p. 306.

⁸³ “Leyes 5, 8, 12, Ordenanzas hechas para la isla de Cubagua y cabo de la Vera,” pp. 303-4.

⁸⁴ “Ordenanzas para la isla de Cubagua y pesquería de las perlas,” pp. 304-6.

するものが多く、クバグア島に大勢派遣された官吏の任務の主な目的は、真珠採取業者の過少申告、隠匿、密輸を阻止し、国王のために五分の一税の真珠を確保し、真珠採取業の統制を図っていたことが明らかになる。一連の法令によって、スペイン国王自身が真珠の入手を強く望んでいたが、同時に、真珠採取業者の間で過少申告、隠匿、密輸が後を絶たなかったことが判明する。クバグア島は、スペイン王室の強い意向で真珠採取業が発展した沿革をもつが、その後も、真珠の採取と流通について徹底的に管理されていた。ヌエバカディスは市参事会によって運営される自治都市であったが、クバグア島は、真珠ゆえに王権の強力な介入があり、国家の監視と統制に置かれた閉鎖社会だったことがわかる。

(3) 真珠の生産量

クバグア島の真珠の生産量については、オッテが、その五分の一税について詳しい研究を行っている。それによると、五分の一税の真珠は、*perlas communes*, *aljofar común*, *topos*, *aljofar redondo*, *avemarías* など八つの品質に分類されて、徴収されていた。*perlas communes* は、大粒ではあるが、並みの品質のアコヤ系真珠、*aljofar común* は、普通の大きさで、並みの品質のアコヤ系真珠、*topos* はおそらく突起のある真珠、*aljofar redondo* は、完璧な球形のアコヤ系真珠だと推定できる。*avemarías* は、ロザリオ用の真珠で、黄色のアコヤ系真珠が使われた。これら以外には、*avalorio* (詳細不明)、*cadencia* (おそらく双子真珠)、*pedreira* (おそらく、ねじれた *perlas*) に分類される真珠があった⁸⁵。

五分の一税は、こうした真珠の徴収であった。オッテによると、1513年から20年までの五分の一税の総量は、年単位で平均113マルコであった。1521年には200マルコを上回り、1522年から26年は年平均700マルコ強となった。1527年は1200マルコを超え、最大の生産量を記録した。その後は減少に転じ、1528年から31年は年平均600マルコとなった。1532年には300マルコ強、1533年から36年にかけては年平均200マルコとなり、1537年から1540年までは100マルコを下回った。その後も減少傾向となった。1513年から1541年までの五分の一税の真珠の総量は、1万328マルコである⁸⁶。理論上は、この五倍の量がクバグア島での真珠の生産量になるが、過少申告や隠匿、密輸が横行していた上、先住民との「物々交換」で得た真珠も計上されていたので、五分の一税の五倍が生産量を正確に反映している訳ではない⁸⁷。また、五分の一税の真珠は、品質によって八つに分類されており、それぞれの品質で価格が異なるため、一律で生産額を出すことはできない。

1531年の法令は、クバグア島の真珠 (*perlas*) を12ペソと定め、この価格で商品や金と交換できると定めている。真珠には単位が記されていないが、おそらく1マルコの真珠で

⁸⁵ Otte, *Las perlas del Caribe*, pp. 399-402. 真珠の分類については、pp. 36-41 を参照。*topos* については、第6章で検討する。ウォルシュは、真珠は品質で分類され、*perla barrueca* などの名称があると述べる一方、*aljofar* という名称で分類された真珠があることは語っていない。Warsh, *American Baroque*, pp. 57-8.

⁸⁶ Otte, *Las Perlas del Caribe*, pp. 51-4.

⁸⁷ Otte, pp. 51-2.

ある。12 ペソは、ドゥカドに直すと 14.4 ドゥカドである⁸⁸。オッテは、真珠の価格は、品質や時代によって変動したが、16 世紀を通じ「並みの真珠」(*perla común*) の真珠 1 マルコは、13 ドゥカド前後で推移したと述べている⁸⁹。クバグア島のアルカルデ・マヨールだったペドロ・オルティス・デ・マティエンソによると、1529 年時、「巻きのよい高品質の真珠」(*aljofar grueso muy bueno*) だと、1 マルコ 80 ペソの価値があった⁹⁰。ドゥカドに換算すると、96 ドゥカドである。ヴェस्पッチの航海では、乗組員全員で得た 119 マルコの真珠は、1 万 5000 ドゥカドの価値があった。1 マルコの価格は 126 ドゥカドである。この価格と比較すると、クバグア島の「並みの真珠」は 1 マルコ 14.4 ドゥカドで、約 89 パーセントの下落であるが、「巻きのよい高品質の真珠 (*aljofar*)」は 96 ドゥカドで、約 24 パーセントの下落である。126 ドゥカドは大航海時代黎明期のヨーロッパの価格であり、14.4 ドゥカド、96 ドゥカドは、真珠採取最盛期の生産地での価格である。これらの価格の違いをどう判断するかは難しいが、良質な真珠はそれほど価格が下がっていなかったと考えられる。個人の儲けは多大なものになったというオビエドの記述や王室官吏による真珠の厳しい徴税システムなどを勘案すると、真珠の高値は維持されており、真珠採取業者も王室も、真珠を扱うことで十分利益が得ていたことが推測できる。

(4) クバグア島の衰退

クバグア島の真珠の生産は、1527 年に頂点に達し、以後、減少傾向となった。1528 年にはクバグア島の東に位置するコチェ島で豊饒な真珠漁場が発見され、真珠生産の増加が期待されたが、長くは続かなかった⁹¹。1530 年代後半になると、クバグア島海域の真珠貝の枯渇が明らかとなり、真珠採取業者の多くはクバグア島を離れる決意をするようになった。ちょうどその頃、グアヒラ半島のベラ岬沖で豊饒な真珠漁場が発見されており、真珠採取業者たちはベラ岬を目指すことになった。一部の真珠業者は、マルガリータ島にも移住した⁹²。

1541 年、クバグア島はハリケーンによって壊滅的な被害を受け、しばらくこの島における真珠採取は途絶えることになる。しかし、16 世紀後半になると、真珠貝が増え、真珠採取業が再開されることになった⁹³。クバグア島の真珠採取業は、資源の枯渇と再生というエコロジカルな事例でもある⁹⁴。

⁸⁸ “Ley 21, Noviembre 1539, De las perlas y piedras preciosas,” in *Colección de documentos inéditos de ultramar*, vol. 22, p. 301. 1 ペソを 450 マラベディとして計算している。

⁸⁹ Otte, *Las Perlas del Caribe*, p. 81.

⁹⁰ Otte, p. 68, note 243.

⁹¹ *Colección de documentos inéditos de América y Oceanía*, vol. 40, pp.435-438; Donkin, *Beyond Price*, pp. 324-5.

⁹² モンテロ (ラテン・アメリカ協会訳) 『ベネズエラ史概説』、29 頁。

⁹³ Donkin, *Beyond Price*, p. 325.

⁹⁴ 真珠史の先行研究の箇所而言及したように、クバグア島の真珠貝の枯渇は、近年、エコ

3.2 ベラ岬、リオデラアチャ⁹⁵

グアヒラ半島のベラ岬は、1530年代後半にクバグア島のスペイン人真珠業者の移住によって成立した真珠採取地である。スペイン植民地政府も、その移住を後押しした。1537年の移住促進の法令はクバグア島の真珠生産低下が顕著になり始めた時期に発布されたもので、ベラ岬に移住しようとする者に対し、財産の差し押さえや妨害を加えてはならないと命じている⁹⁶。1539年の法令も、ベラ岬の真珠の漁場に行きたい人は、誰でも行って、真珠採取ができると定めている⁹⁷。

このように、ベラ岬は、スペイン植民地政府の後押しで成立した真珠採取地だったため、クバグア島の真珠の徴税に関するさまざまな法令は、そのままこの地でも施行されることになった。『海外領土の未公開文書集』収録の「真珠と宝石に関する法令」には「物々交換と真珠の五分の一税の正確な徴収のためにクバグア島とベラ岬で施行された基本法」が収められており、クバグア島とベラ岬の行政の継続性を示している⁹⁸。クバグア島の王室官吏もベラ岬に移住して、厳しい徴税制度を実施したことがわかる。

ベラ岬の真珠採取地は、クバグア島より外洋に面しているため、フランスやイギリス海賊の激しい攻撃にさらされた。真珠採取業者はさらに安全な場所を求め、1545年、ベラ岬より南方のリオデラアチャに再移転した。それ以降、この地が「南米カリブ海真珠生産圏」のコロンビア側の真珠採取地として繁栄することになった⁹⁹。サンスの研究によると、1581年から1590年にかけてリオデラアチャからスペインに送られた真珠の総量は約2870マルコであった¹⁰⁰。

3.3 マルガリータ島

マルガリータ島は、「南米カリブ海真珠生産圏」のベネズエラ側を代表する真珠採取地である。マルガリータ島の海域には多くの真珠の漁場があり、スペイン人来航以前からグアイケリー族たちの真珠採取地、真珠交易の主要地となっていた。ただ、マルガリータ島は、

ロジエの観点から大きな関心を集めている。ロメロなどの研究者は、五分の一税の真珠の生産量から、当時、生息していた真珠貝の数字を出しているが、先述したように、クバグア島の海域が生み出した真珠の大きさや種類の無理解、真珠の出る割合の事実誤認などにより、その数字は信頼に足るものではない。また、彼らの研究は、真珠貝の枯渇だけに焦点を当てている。

⁹⁵ 本章ではこれまでリオアチャという名称を使用してきたが、16世紀はリオデラアチャと呼ばれていた。以後、本章ではこちらを使用する。

⁹⁶ Muñoz, “Noticias sobre la fundación de la ciudad de Nuestra Señora Santa María de los Remedios del Cabo de la Vela,” pp. 755-97.

⁹⁷ “Ley 4, Mazo 1539), De las perlas y piedras preciosas,” in *Colección de documentos inéditos de ultramar*, vol. 22, p. 298.

⁹⁸ “De las perlas y piedras preciosas,” pp. 302-4. ベラ岬の真珠史研究者である M. L. ムニョスは、クバグア島とベラ岬における行政の継続性は議論していない。

⁹⁹ モンテロ（ラテン・アメリカ協会訳）『ベネズエラ史概説』、29～30頁、42頁。Donkin, *Beyond Price*, p. 326.

¹⁰⁰ Sanz, *Commercio de España con América*, vol. 2, pp. 557-8.

1525年から1593年までビリャロボス一族の世襲総督領という特殊なケースとなっていたため、クバグア島やベラ岬のように、王室官吏による真珠行政や監視が十分浸透しなかった。したがって、グアイケリー族のその後の状況も定かではない。ただ、真珠採取は行われており、五分の一税の真珠は支払われていた。1581年にセビリャにもたらされた五分の一税の真珠は、1578年から1581年にかけて採取されたもので、1908マルコであったことが知られている¹⁰¹。

マルガリータ島は、王室官吏の介入が難しい総督領だったため、早い時期から真珠の密貿易、アフリカ奴隷貿易の重要地点となり、海賊の格好の攻撃地点となった¹⁰²。

16世紀後半から17世紀初期にかけて、マルガリータ島は、リオデラアチャとともに、新たな真珠の漁場探索の基地にもなった。1593年の法令は、マルガリータ島やリオデラアチャの海域で、新たな真珠の漁場が発見された場合、三年間にわたって、五分の一税を十分の一税にすると定めている¹⁰³。この法令によって、スペイン植民地政府は、真珠採取業者を税制面で優遇することで、16世紀末においても、さらなる真珠の生産を望んでいたことがわかる。

3.4 クマナ

「南米カリブ海真珠生産圏」において、ベネズエラ本土を代表する真珠採取地がクマナである。クマナは、スペイン人来航以前から漁撈文化が発達していた地域で、先住民のカリブ族たちは漁業や真珠採取を行っていた¹⁰⁴。16世紀前半、クマナを中心とするベネズエラ沿岸部が「ペルラス海岸」と呼ばれるようになったのは、すでに見たとおりである。ただ、次に述べるラス・カサスの植民事業の失敗などの理由で、スペイン人の入植は思うように進まず、16世紀中葉までは政治的空白地帯となっていた。クマナにスペイン人の都市が再建されるのは、1561年のことである。以後、クマナにはスペイン人真珠採取業者たちが暮らすようになり、「南米カリブ海真珠生産圏」を代表する真珠採取地として発展することになった¹⁰⁵。

16世紀初めにおけるクマナの入植は、結果的に失敗に終わったが、ふたつの大きな出来事があった。第一に、1510年代にフランシスコ会とドミニコ会の宗教勢力が進出し、クマナ一帯を彼らの排他的な布教地にしようとしたことである。彼らは修道院を建設し、コンキスタドールたちの立ち入りを禁止し、先住民への布教を進めようとしたが、先住民の襲

¹⁰¹ Sanz, pp. 549-50.

¹⁰² モンテロ（ラテン・アメリカ協会訳）『ベネズエラ史概説』、39~46頁。

¹⁰³ “Ley 16, Octubre 30 de 1593, De la pesquería, y envío de perlas,” in *Recopilación*, vol. 2, p. 99.

¹⁰⁴ クマナの漁業や真珠漁については、Gómara, *Historia general de las Indias*, vol. 1, p.192 (cap. 80); ゴマラ（清水訳）『拡がりゆく視圏』、182頁を参照。

¹⁰⁵ モンテロ（ラテン・アメリカ協会訳）『ベネズエラ史概説』、31頁。

撃を受け、教化活動は奏功しなかった¹⁰⁶。

第二の出来事は、ラス・カサスの1520年の南米大陸入植計画の舞台となったことである。この入植計画は、一般に「クマナ計画」と呼ばれており、多くの研究がある。そうした研究のほとんどは、ラス・カサスによる先住民擁護の立場、平和的な布教や植民計画、共同体設立などに焦点を当てている。真珠との係わりについて言及する場合もあるが、主要なテーマではない。青野和彦の論文「ラス・カサスのベネズエラ植民計画の理念」及び「ラス・カサスの平和的布教観の形成」は、ベネズエラ植民を扱っているが、ラス・カサスが選んだ入植地が南米カリブ海を代表する真珠の産地であったという発想はない。青野の論考は、ラス・カサスがカルロス1世と結んだ1520年の協約書を利用しておらず、一次史料の扱いも不十分である¹⁰⁷。したがって、本節では、1520年の協約書なども参照することで、「クマナ計画」を見ていきたい。

1510年代後半からラス・カサスは、インディアス入植と布教についての覚書や請願書をカルロス1世の側近などに繰り返し提出していた。1519年にティエラフィルメに関する請願を提出すると、その内容が評価された。1520年5月19日、ラス・カサスは、彼の要求の大半が認められた形で、国王と協約を結ぶことに成功した¹⁰⁸。

1520年の協約書によると、ラス・カサスが植民権を得た土地の範囲は、ティエラフィルメと呼ばれるパリア地方からサンタマルタ地方の境界部までの1000レグアの沿岸部、及び1000レグアの沿岸部の東西の境界線から直線を引いて南の海岸(すなわち南米大陸の南端)に達するまでの地域だった¹⁰⁹。つまり、南米大陸西方部分の北端から南端までの広大な地域が彼の入植予定地となったのである。当時、南米大陸内陸部はまだ入植が進んでおらず、その実情は明らかになっていなかった。入植で重要だったのは、南米大陸の北端、つまりカリブ海沿岸部である。ラス・カサスが得た1000レグアの沿岸地帯には、パリア半島、「ペルラス海岸」と称されたクマナ一帯、コロンビア側の真珠採取地のベラ岬やリオデラアチャが含まれていた。どこが真珠の主要な採取地だったかを勘案して、ラス・カサスの協約を見ると、ラス・カサスが権利を得た入植地は、「南米カリブ海真珠生産圏」そのものであ

¹⁰⁶ フランシスコ会とドミニコ会のクマナ布教については、モンテロ(ラテン・アメリカ協会訳)『ベネズエラ史概説』、30~31頁、64~66頁を参照。ラス・カサスも『インディアス史』で言及している。Las Casas, *Historia de las Indias*, vol. 3, pp. 2098-101, 2157-8, 2203-5 Libro 3, caps. 83, 95, 104); ラス・カサス(長南訳)『インディアス史(五)』、41~47頁、149頁、233~238頁。

¹⁰⁷ ラス・カサスのインディアス改善策と「クマナ計画」に関しては、次の研究書と研究論文を参照。ハンケ(染田訳)『スペインの新大陸征服』、83~112頁; 染田『ラス・カサス伝』、49~107頁; 青野「ラス・カサスのベネズエラ植民計画の理念」、51~64頁; 青野「ラス・カサスの平和的布教観の形成」、52~73頁。

¹⁰⁸ “Asiento y capitulación de Bartolomé de Las Casas,” in *Colección de documentos inéditos de América y Oceanía*, vol. 7, pp. 65-109. ラス・カサス自身もその概要について、*Historia de las Indias*, vol. 3, pp. 2332-9 (Libro 3, cap. 132); 『インディアス史(五)』、465~477頁で叙述している。

¹⁰⁹ 1レグアは、約5.6キロメートル。

ったことがわかる。「南米カリブ海真珠生産圏」では、砂金もよく採れた。ラス・カサス自身が 1518 年の覚書で述べているように、ティエラフィルメは「金と真珠が豊富な」(*muy rica de oro y de perlas*) 地域であった¹¹⁰。つまり、ラス・カサスの 1520 年 5 月 19 日の協約とは、真珠も金も豊富で広大な「南米カリブ海真珠生産圏」がラス・カサスひとりに与えられ、ラス・カサスはその地を彼の排他的入植地にできることを意味していた。

協約書の内容から、ラス・カサスが考えていた南米入植地の経営方法も明らかになる。彼は主に三つの収益方法を考えていた。「物々交換」による真珠と金の獲得、真珠採取の実施、及び川からの砂金発見である。

ラス・カサスが植民権を得た 1520 年は、クバグア島ではスペイン人真珠業者の村落が作られていたが、南米本土ではまだスペイン人の入植が進んでいなかった。当時、南米本土における真珠採取や砂金採取は、南米の先住民自身が行っており、彼らは多くの真珠と金を所有していた。先住民が真珠採取を実施している地は、「真珠採取地」(*pesquería de las perlas*) と呼ばれていた。したがって、ラス・カサスの「クマナ計画」の第一の収益方法は、彼と入植者 50 人が先住民の集落や「真珠採取地」に行き、「物々交換」によって、真珠や金を得ることになっていた。これまでスペイン人コンキスタドールたちが行ってきた「物々交換」は暴力行為を伴ったが、ラス・カサスのいう「物々交換」は、平和的に実施されるものであった¹¹¹。

第二の収益方法は、真珠採取による真珠の獲得である。「クマナ計画」では、先住民が真珠採取を実施していないところでは、ラス・カサスと 50 人のスペイン人入植者、インディオ以外の召使たちが、真珠採取を実施できることになっていた。スペイン人自身による真珠獲得も経営計画に入っていたのである。第三の収益方法は、砂金の獲得で、砂金のある河川などの発見することで、黄金を獲得できると考えられていた¹¹²。

「クマナ計画」では、こうして得た真珠や金から、国王への税 (*renta*) が支払われることになっていた。二年目までは税が免除されたが、三年目からは 1 万 5000 ドウカドの納税が定められていた。六年目からは 3 万ドウカドとなり、十年目からは 6 万ドウカドとなった。この額を超えると、超えた分の税率が五分の一から引き下げられたが、もし真珠採取にインディオを使った場合は、その限りではなかった。

つまり、ラス・カサスの入植地における収益の基盤は、「物々交換」にせよ、自分たちで実施するにせよ、「南米カリブ海真珠生産圏」に豊富にある真珠と金を獲得することにあつた。入植地はラス・カサスの排他的地域であったので、ラス・カサスは「南米カリブ海真珠生産圏」の真珠利権を独占したことになる。国王への税を支払った後は、ラス・カサスと彼の入植者は、南米の真珠と金を彼らで独占することができた。青野などの「クマナ計画」に関する先行研究には、ラス・カサスが得た入植地が、名高いアコヤ系真珠の産地で

¹¹⁰ Las Casas, “Memorial de remedios para las Indias (1518),” in *Obras Completas 13: Cartas y Memoriales*, p. 49.

¹¹¹ *Asiento y capitulación de Bartolomé de Las Casas*, pp. 73-4.

¹¹² *Asiento y capitulación de Bartolomé de Las Casas*, pp. 73-4.

あったという発想がない。しかし、どこが真珠の産地なのかを明確に認識して、ラス・カサスの協約を考察すると、「クマナ計画」はラス・カサスたちが独占的・排他的に「南米カリブ海真珠生産圏」の真珠と黄金を獲得できるシステムであったことが明らかになる。また、真珠の獲得が、金同様、ラス・カサスの入植の大きな動機であったことも判明する。

実際、「クマナ計画」時のラス・カサスは、真珠と金の獲得を収益の柱に据えており、他の植民事業者と変わりはない。ただ、ラス・カサス自身は、その後、真珠採取の潜水労働の悲惨さを実感し、それを痛烈に批判するようになる。ラス・カサスが晩年に書いた『インディアス史』では、「クマナ計画」の協約を得たことが誇らしく語られ、その概要が述べられているが、収益方法のひとつだった真珠採取については言及がない¹¹³。ラス・カサスが、「クマナ計画」に真珠採取事業を加えたことを航海するようになっていたことが推測できる。

ラス・カサスは、1520年5月19日に国王と協約を締結した後、入植者とともにクマナに赴いた。しかし、この地域では、彼が1521年に到着する前に、先住民の蜂起があり、その鎮圧を名目に、サントドミンゴのスペイン人たちによる先住民の奴隷狩りや遠征が行われていた。クマナ一帯は騒然としていた。結局、「クマナ計画」は実現されないまま、失敗に終わった。その後、クマナの河口にはスペイン人によって要塞が建造されたりしたが、長続きせず、クマナは長い間、スペイン人に放棄された土地となった。1561年、スペイン人がクマナに都市を建設すると、クマナは、南米本土を代表する真珠採取地となった¹¹⁴。

ここでは1520年の協約書の内容を分析したが、それによって、「クマナ計画」とは、ラス・カサスの「南米カリブ海真珠生産圏」における真珠利権であり、真珠がスペイン人の入植の大きな動機となった事例であったことが判明した。

3.5 ハクルートが語る真珠採取地

以上、見てきたように、16世紀後半には、クマナ、マルガリータ島、リオデラアチャが「南米カリブ海真珠生産圏」の三大真珠採取地となった。真珠という富を生み出すこれらの採取地は、スペイン人以外の人々の関心も集めるようになった。

イギリス人、リチャード・ハクルートは、*Discourse Concerning Western Planting*（邦訳名『西方植民論』）の中で、スペイン国王の支配下にある南米本土の海岸にある豊かな町をひとつずつ列挙して、その特徴を叙述している。ハクルートはまずクマナを挙げ、「ここでは真珠がたくさん採れる。町の人は各種の船をもっているが、それらはすべて真珠を引き上げるだけに使われる」（越智武臣訳）と述べている¹¹⁵。リオデラアチャについても語っており、ここでは真珠と銀が採れ、真珠貯蔵庫があると記している。ハクルートは、スベ

¹¹³ Las Casas, *Historia de las Indias*, vol. 3, pp. 2335 (Libro 3, cap. 132); ラス・カサス『インディアス史（五）』、470頁。

¹¹⁴ モンテロ（ラテン・アメリカ協会訳）『ベネズエラ史概説』、30~31頁、64~66頁。

¹¹⁵ ハクルート（越智武臣訳）『西方植民論』越智武臣他訳『イギリスの航海と植民（二）』（岩波書店、1985年）、98頁。

イン国王の支配下にあるメキシコ湾の島々やその特産物についても言及しているが、彼はまずマルガリータ島を挙げ、そこではたくさんの真珠が採れると記している¹¹⁶。

16世紀後半、「南米カリブ海真珠生産圏」の経済的重要性は、ペルーやメキシコの銀の生産によって低下していた。しかし、ハクルートの記述から、クマナやリオデラアチャ、マルガリータ島は、イギリス人が食指を伸ばす富の町であったことがわかる。イギリスは中南米の銀の産地を知っていたが、太平洋に面したペルーや中米のメキシコはあまりに遠かった。ハクルートの記述を考察すると、イギリス人は、彼らが狙える土地として、南米カリブ海沿岸部などの真珠採取が実施されている都市や真珠や金の集まる都市に食指を伸ばしていたことが明らかになる。「南米カリブ海真珠生産圏」は、スペイン人ばかりでなく、16世紀後半のイギリス人にとっても対外拡張の動機になる土地であった。

以上、本節では、「南米カリブ海真珠生産圏」において、16世紀におけるスペイン人による真珠採取業の成立と発展の経緯を、同時代の真珠に関する法令や歴史書、協約書などを分析することで、考察した。が成立し、その真珠採取地が時代によって変遷したことを考察した。それによって、(1) 真珠採取業の成立は、スペイン王室の強い意向があったこと、(2) 真珠採取業は、多くのスペイン人個人事業者を輩出し、経済的に成功した水産業になったこと、(3) 真珠採取の集落は都市化した、五分の一税の真珠を求める王室の強固な介入があったこと、(4) ラス・カサスの協約やハクルートの記述に見られるように、真珠ゆえの入植活動があり、真珠ゆえの対外進出の気運を醸成したことが明らかになった。「南米カリブ海真珠生産圏」には、高い収益性を誇るスペイン人による水産業が勃興し、それは真珠採取地によっては発展と衰退があったが、16世紀を通じて実施されたことが判明した。本節の考察は、スペイン人の事業として鉱業や農業ばかりで語られてきた16世紀史にスペイン人による水産業の存在を加えることになる。

ここで忘れてはならないのは、スペイン人による真珠採取業が16世紀を通じて産業として成功したのは、南米のカリブ海に質の高い真珠を数多く生み出すアコヤ真珠貝が生息していたからであった。この事業は、一時的な貝の枯渇により真珠採取地は変遷したが、真珠の生産量は多く、個人事業者を潤うことができた。一方、アコヤ系真珠と対照的なパナマクロチョウ真珠については、生産面の研究は進んでいないため、詳細は不明であるが、見事な大粒真珠が出る確率は高くはないため、流通網に乗る真珠は多くはなく、スペイン人の事業としては十分発展しなかったと考えられる¹¹⁷。パナマ湾では真珠や真珠貝採取は、パナマの先住民によってなされ、彼らの貢納によって集められていたと推測できる。

¹¹⁶ ハクルート「西方植民論」、98頁、103頁。ハクルートは真珠が入手できる町として、ノンブレデディオス、プエルトデカバリョスなどの名も挙げているが、それらの町の真珠はおそらくパナマクロチョウ真珠である。フロリダの真珠についても言及している。こちらは淡水産真珠かコンクガイの真珠様物質と考えられるが、アコヤ系真珠の可能性もある。

¹¹⁷ 略奪の対象としてのパナマクロチョウ真珠については、Donkin, *Beyond Price*, pp. 329-30 を参照。

「南米カリブ海真珠生産圏」の真珠採取業が経済的に成功したのは、そこがアコヤ系真珠の採れる海だったからで、パナマ湾でもなく、他の海域でもなかった。南米カリブ海のアコヤ真珠貝は、16世紀のスペイン人による水産業の勃興と成功に寄与したのである。

第4節 真珠採取業の生産者

本節では、真珠のコモディティ・チェーンの生産面を考察する。真珠の生産体制で重要なのは、生産者と潜水労働者の実態分析である。本節では生産者について考察し、次節では潜水労働者について検討する。

「南米カリブ海真珠生産圏」における真珠採取業は、スペイン人による水産業である。南米真珠史の先行研究では、ランチェリア (*ranchería*) と呼ばれた真珠採取基地の状況や真珠採取の様子や取りきめなどについては幾つかの研究がある¹¹⁸。したがって、本節ではそうした先行研究を概観する一方、先行研究が関心を示してこなかった真珠採取業への個人の自由参入の方針に着目する。また、先行研究が行ってこなかった真珠の生産体系と砂糖の生産体系の比較をすることで、真珠採取業の意義を確認する。

4.1 真珠採取業の生産者

真珠採取業に参入したスペイン人生産者たちは、クバグア島を例に取れば、主に三つに分類できる。

第一のタイプは、サントドミンゴやサンフアンなどに住む植民地エリートやエンコメンデロなどの現地の有力者たちとそのマジョルドモ (*mayordomo*、執事) である。クバグア島には早い段階から先住民と真珠の「物々交換」を目的とするスペイン人が来航し、その一部が住みついていった。スペイン王室がこの島への入植を奨励するようになると、サントドミンゴやサンフアンの植民地エリートやエンコメンデロたちは、自分たちのマジョルドモをクバグア島に送り込み、彼らに真珠採取業を担当させるようになった。マジョルドモはカヌーを調達し、4人から7人ぐらいの先住民の潜水作業班を作って、彼らに真珠採取を強要した。中には、50人以上の潜水夫を管理するマジョルドモもいた¹¹⁹。真珠採取の基地は、先述したように、ランチェリアと呼ばれていた。

第二のタイプは、真珠採取を希望するスペイン人個人事業者である。第3節で考察したように、1512年12月10日の王令は、エスパニョーラ島とサンフアン島の市民、居住者、滞在者などが、これらの島の司令官や判事などから許可証を入手すれば、誰でも自由にクバグア島に行き、そこで真珠採取を行えることを認めていた。真珠採取業への個人の自由

¹¹⁸ ランチェリアにおける真珠の生産体系については、Domínguez Compañy, “Municipal Organization of the Rancherías of Pearls,” pp. 58-68; Otte, *Las perlas del Caribe*, pp. 43-51; Donkin, *Beyond Price*, p. 320 を参照。

¹¹⁹ Las Casas, *Historia de las Indias*, vol. 3, p. 2451 (Libro 3, cap. 157); ラス・カサス (長南訳) 『インディアス史 (五)』、679 頁; Oviedo y Valdés, *Historia general y natural de las Indias*, vol. 2, p. 205 (parte 1, libro 19, cap. 10); Donkin, *Beyond Price*, p. 320.

参入の方針である。1533年の法令でも、自由参入の方針は維持されている。ただ、この法令は、官吏の前で登録しなければ、クバグア島での真珠採取は許可されないことになっており、規制が強化されている¹²⁰。無許可や無登録で真珠採取を行う個人事業者たちが少なからずいたことを示唆している。

こうした個人事業者にとって重要なのは、カヌーと何人かの先住民の潜水夫を所有することであった。個人の真珠採取業者はカノエーロ (*canoero*、カヌー所有者) と呼ばれており、カヌーが彼らの生産手段であった。カヌーは先住民との「物々交換」で手に入れることができた。初期のカヌーは 7~8 人乗りだったが、次第に大きくなり、16 世紀後半には 20 人以上が乗れるカヌーもあった。16 世紀末ごろになると、真珠採取業者の資格は 12 人の「黒人潜水夫」(*buceadores negros*) を所有していることであった¹²¹。

第三のタイプは、スペイン本土の実業家である。1530年代になると、クバグア島の真珠の名声はヨーロッパ中に鳴り響くようになり、フアン・デ・ラ・バレイラのような、セビリャの下級貴族で実業家の人物なども関心を示すようになった。1536年、彼は代理人にクバグア島の真珠業者の 4 分の 1 を買取するよう指示を出していたことが知られているが、その後の経緯は定かではない¹²²。

このように、真珠採取業は大アンティール諸島やスペイン本土からの資本流入もあったが、真珠採取地において真珠採取を実施してきたのは、カノエーロたちのような個人事業者とマジョルドモであった。マジョルドモは、不在地主の代理人のような立場であったが、実質的には彼らは主人に代わって真珠採取をすべて牛耳ることができたので、個人事業者と見なすことができる。先述したように、オビエドは、クバグア島では大粒真珠 (*perlas*) と真珠 (*aljofar*) が豊富にあるおかげで、「個人」(*personas particulares*) の儲けは多大なものになったと述べていた。ハクルートは、クマナの町の人は、真珠採取専用の船を持っていると語っていた。1609年の法令は、クマナとマルガリータ島の市民であるマジョルドモやカノエーロたちが無断でコチェ島やクバグア島に行き、真珠採取地を作り、真珠貝を採り過ぎたために、漁場に損傷が出たと説明し、その損傷を回復するために、マジョルドモとカノエーロたちに対してアルカルデ・マヨールの許可なくコチェ島やクバグア島に行くことを禁止し、従わないと 20 ペソの罰金とランチェリアからの 6 年間の追放となることを定めている¹²³。こうした記録により、真珠採取を担っていたのは、マジョルドモやカノエーロなどの個人事業者であったことが明らかになる。また、コチェ島やクバグア島の真珠漁場は、16 世紀半ばに枯渇したが、17 世紀になると、回復していたこともわかる。

¹²⁰ “Ley 16, Diciembre 1533, De las perlas y piedras preciosas,” in *Colección de documentos inéditos de ultramar*, vol. 22, pp. 300-1.

¹²¹ Otte, *Las perlas del Caribe*, pp. 46-50.

¹²² ルイス・パーク (立石博高訳) 「16 世紀におけるセビーリャ貴族と新世界貿易」 関哲行・立石博高編『大航海の時代—スペインと新大陸』(同文館、1998 年)、146~147 頁。

¹²³ “Ley 20, Julio 4 de 1609, De la pesquería, y envio de perlas,” in *Recopilación*, vol. 2, p. 100.

「南米カリブ海真珠生産圏」における真珠採取業は、スペイン人入植者が興した数少ない事業であり、個人事業者を数多く生み出すという歴史的意義をもったことが本節でも確認できる。

4.2 真珠採取業と製糖業の比較

真珠はヨーロッパでは極めて高価な商品である。したがって、真珠採取業は、ヨーロッパ向けの高額商品を生産する輸出産業でもある。この輸出産業の経済的重要性、歴史的意義は、他の産業と比較することでも見えてくる。スペイン領アメリカでスペイン人が実施した輸出産業としては、鉱山業と製糖業があるが、ここでは農作物を主体にする製糖業を取り上げ、簡単に比較しておきたい¹²⁴。

製糖業で欠かせないサトウキビは、コロンの第2回航海でエスパニョーラ島にもたらされ、栽培が行われたが、本格的な製糖業が開始されるのは、1516年頃である。サントドミンゴ南方のニグア河畔にひとつの製糖工場が建設され、その後、30から40近くの製糖工場が稼働するようになった。製糖工場には、馬の力を利用してサトウキビを圧搾するトラピチェ型工場と、水力を利用して強力に圧搾するインヘニオ型工場があった。ラス・カサスやオビエドによると、トラピチェ型工場なら30~40人、インヘニオ型工場は80人から120人の人員を必要とし、大規模な工場の初期投資は1万ドゥカドから1万2000ドゥカドだった。また食料用の牛も数千頭必要とした¹²⁵。製糖業は、労働集約的・資本集約的な産業だったことがわかる。ラス・カサスによると、スペイン王室の国庫から500ペソの資金の貸付を受けることができたが、それだけでは不十分で、大資本を持つ人物だけが参入できた。当時の砂糖の価格は1アローバ（約11.5キロ）1ドゥカドから2ドゥカドだった¹²⁶。

砂糖生産は、エスパニョーラ島をはじめとする大アンティール諸島で期待されていた産業であったが、これらの地域では、その後、急速に衰退した。S. W. ミンツは、スペイン人

¹²⁴ スペイン植民地における砂糖生産については、次の一次史料が述べている。Las Casas, *Historia de las Indias*, vol. 3, pp. 2321-3 (Libro 3, cap. 129); ラス・カサス『インディアス史(五)』、447~453頁; Oviedo y Valdés, *Historia general y natural de las Indias*, vol. 1, pp. 106-11 (parte 1, libro 4, cap. 8); オビエド(染田・篠原訳)『カリブ海植民者の眼差し』、113~119頁; Herrera y Tordesillas, *The General History*, vol. 2, p. 155. 今日の研究としては、M. Ratekin, "The Early Sugar Industry in Espanola," *Hispanic American Historical Review*, vol. 34 (1954), pp. 1-19; Sauer, *The Early Spanish Main*, pp. 209-212; シドニー・W・ミンツ(川北稔・和田光弘訳)『甘さと権力——砂糖が語る近代史』(平凡社、1988年、原著1985年)を参照。川北稔『砂糖の世界史』(岩波書店、1996年)は、スペイン植民地時代の製糖業については詳しく言及していない。

¹²⁵ Las Casas, *Historia de las Indias*, vol. 3, pp. 2322-3 (Libro 3, cap. 129); ラス・カサス『インディアス史(五)』、448頁; Oviedo y Valdés, *Historia general y natural de las Indias*, vol. 1, p. 107 (parte 1, libro 4, cap. 8); オビエド(染田・篠原訳)『カリブ海植民者の眼差し』、115~116頁; ウィリアムズ(川北訳)『コロンブスからカストロまで(I)』、18~20頁。

¹²⁶ Las Casas, *Historia de las Indias*, vol. 3, pp. 2322-3 (Libro 3, cap. 129); ラス・カサス『インディアス史(五)』、448頁。

のメキシコへの移住、スペイン人の貴金属への執着、スペイン王室の民間の生産活動への権威主義的な管理、慢性的資本不足などが考えられるが、十分な説明がつかないとしている¹²⁷。ただ、16世紀後半になると、砂糖の市場が広がり、キューバやメキシコ、ペルーでは安定した砂糖生産が行われ、砂糖はスペインに輸出されるようになった¹²⁸。このように見ると、スペイン領アメリカの製糖業は、初期段階で一時的に成功したとしても、労働集約的・資本集約的な産業であり、市場も必要としたため、国際商品を大量に生産する産業に成長するには一定の期間が必要だったことがわかる。

一方、真珠採取業は、すでに見たように、1510年代、20年代には一次産業として成立していた。その事業を立ち上げるには、カヌー1隻と潜水労働者が10人前後いれば、個人でも参入できる事業であった。真珠の価格は、「並みの真珠」だと1マルコ13ドゥカド前後だったが、「巻きのよい高品質の真珠」だと、1529年時点で1マルコ96ドゥカドの価値があった。砂糖は1アローバ1ドゥカドである。商品の性質が違うので、一概には言えないが、真珠採取業はわずかな量の真珠でも、生産額が大きくなる。

こうした比較史的考察により、真珠採取業は、初期投資が少なくすみ、立ち上げが容易な上、かなりの収入を得られることが明らかになる。初期投資の容易さと真珠の商品単価の高さが、大航海時代の初期においてスペイン人個人事業者を引きつけ、真珠採取業を発展させたのである。16世紀前半及び中葉、ヨーロッパ向けの輸出品を生産する産業として成功していたのは、真珠採取業だった。砂糖の生産の前には真珠の生産があったのである。スペイン領アメリカの主要輸出品として真珠、及び主要産業としての真珠採取業を看過してはならないのである。

第5節 潜水労働者

真珠採取業の生産面の考察で欠かせないのが、潜水労働力の徴発の問題である。

真珠採取は、水深数メートルから十数メートルの海底で真珠貝を集めていく作業である。訓練された人のみが行える特殊技能であった。スペイン人自身は決して海に潜らなかったため、彼らの真珠採取業では常に潜水労働力を必要とした。本節では、スペイン人事業者がどのように潜水労働力を徴発していったのか、それを正当化するためにどのような法整備を進めていったのかを検討する。また、潜水労働力の徴発がもたらした社会的影響も考察する。

潜水労働力に関しては、真珠史の先行研究も関心を示し、潜水作業で使役された先住民やアフリカ人奴隷の実態を明らかにしてきた。しかし、こうした先行研究には、次のふた

¹²⁷ ミンツ（川北・和田訳）『甘さと権力』、89~90頁。ソーアーは、初期の製糖業が衰退したのは、砂糖生産に適した自然条件の欠如ではなく、メキシコの発見及びそれに続くペルーの発見が、黄金の魅力に惹かれた人々を短期間で一掃してしまったからであると述べている。Sauer, *The Early Spanish Main*, p. 211.

¹²⁸ アコスタ（増田訳注）『新大陸自然文化史（上）』416~417頁（原著4巻32章）；ウィリアムズ（川北訳）『コロンブスからカストロまで（I）』、21~22頁。

つの問題点がある。

第一に、序章や本章の「はじめに」で述べたように、真珠採取による先住民絶滅を主張するラス・カサスの言説の否定、または無視である。S. A. モスクやドンキンの研究は『簡潔な報告』の言説をプロパガンダとして一蹴している。しかし、彼らは『インディアス史』の内容は十分検討していない¹²⁹。ウォルシュの研究は、『簡潔な報告』や『インディアス史』の過酷な潜水描写は参照し、真珠採取の暴力性や恐怖について語っているが、ラス・カサスが語る真珠による先住民絶滅の言説には言及していない。他の研究も、ラス・カサスの言説には保留の態度を採っている。ソーアールの初期南米史の研究は、「ラス・カサスは、これ（潜水）がルカーヨ全滅の主な原因であるという意見である」と簡単に述べているだけで、彼自身の見解は示していない¹³⁰。オッテの研究では、ラス・カサスの『インディアス史』が記す真珠採り潜水夫の過酷な潜水描写は引用されているが、先住民絶滅との関連性は議論されていない¹³¹。一方、日本の研究者では、石原保徳が『簡潔な報告』の邦訳本の中で、ラス・カサスの真珠採取労働の告発の信憑性とその意義を解説している¹³²。

第二の問題点は、潜水労働者がどのように奴隷化され、どのような法整備がなされたのかを、十分議論していないことである。これについては、史料的制約も存在する。オッテは、クバグア島関連のアーカイヴ史料は、ヌエバカディアスの重要な人々であった潜水夫 (*buceadores*) についてほとんど、あるいはまったくと言っていいほど語っていないと述べている¹³³。第3節では『インディアス法集成』や『海外領土の未公開文書集』に収められた真珠行政の法令を検討してきたが、法令の多くは真珠の徴税や保管、流通関連で、潜水夫に関する規定はわずかである。それでも、先住民の扱いに関する当時の法令などを検討すると、潜水労働力の徴発方法や当時の状況について知ることができる。筆者は、真珠採取の労働力の徴発を考える上で、1542年の「インディアス新法」の検討は必要だと考えている。この新法については、オッテは参照していないが、ドンキンは、「インディアス新法」の真珠に関する条項の英訳を直接引用している。ただ、その英訳には誤訳がある上、ドンキン自身は、直接引用しているだけで、その内容については分析していない。一方、ウォルシュは、「インディアス新法」は原文を参照し、その内容をかいつまんで説明しているが、英訳と同じ誤訳が見られる¹³⁴。

本節では、ラス・カサスの『インディアス史』の言説をスペイン語原文の参照によって検討し、また「インディアス新法」をスペイン語原文から分析することで、真珠採取業における潜水労働力の徴発の在り方、その影響、真珠採取業における奴隷制の変遷を考察す

¹²⁹ Mosk, “Spanish Pearl-fishing Operations on the Pearl Coast in the Sixteenth Century,” p. 395; Donkin *Beyond Price*, pp. 321-2.

¹³⁰ Sauer, *The Early Spanish Main*, p. 191.

¹³¹ Otte, *Las perlas del Caribe*, pp. 25~26.

¹³² ラス・カサス (石原訳) 『インディアス破壊を弾劾する簡略なる陳述』、121~123 頁。

¹³³ Otte, *Las perlas del Caribe*, p. 360.

¹³⁴ Donkin, *Beyond Price*, pp. 321-2; Warsh, “Enslaved Pearl Divers in the Sixteenth Century Caribbean,” p. 358, note 15; Warsh, *American Baroque*, p. 84.

る。こうした形での分析と考察は、真珠史の先行研究は行ってこなかった。

5.1 潜水労働者としての先住民奴隷

スペイン人による初期の真珠採取業の潜水労働力として徴発されたのが、ルカーヨ人と呼ばれたバハマ諸島のアラワク系先住民であった。マルガリータ島のグアイケリー族も初期の真珠採取で使役されたと思われるが、詳細は不明である。バハマ諸島の先住民が重宝されたのは、彼らがすでにエスパニョーラ島に拉致されてきて、スペイン社会の中で暮らしていたこと、もともと泳ぎが得意な島人であり、潜水作業に高い適性を示したことなどが挙げられる。ラス・カサスは『インディアス史』の中で、真珠を採るには人間の背丈四つの深さの海底まで潜る必要があったが、ルカーヨ人は一般に誰でも泳ぎが上手だったので、スペイン人がクバグア島に送り込んだと語っている¹³⁵。こうして、ルカーヨ人が真珠採りの潜水労働力となったが、これから見るように、彼らは奴隷と見なされていた。

先住民の奴隷化については、ベネズエラ沿岸部のカリブ族が所有する真珠や金の奪取を正当化するために、スペイン人がカニバル神話を作り、彼らを攻撃し、奴隷化していったことはすでに見た。これに加えて、新たに先住民奴隷化の法的根拠となったのが、「役に立たない島々」の先住民の利用であった。これについては、オッテが述べているので、以下、簡単に述べておく。

エスパニョーラ島の近隣に位置するバハマ諸島は主だった資源がないため、スペイン王室から「役に立たない」と見なされていた。1508年の勅令では、その「役に立たない近隣の島々」の住民を、自由民として扱うという条件で、エスパニョーラ島などに連行することが認められた。ただ、彼らが反抗的だとわかった場合、あるいは自分の島や他の島に逃げたりした場合、その先住民は奴隷として扱えることも認められていた¹³⁶。この1508年の法令は、エンコミエンダ制によって激減したエスパニョーラ島の先住民人口を補い、同島の金鉱山の労働や家内労働にバハマ諸島の先住民を投入するために考案されたものであった。彼らが移住に抵抗した場合は奴隷と見なせたので、多くのルカーヨ人が奴隷としてエスパニョーラ島に連行されることになった。ラス・カサスによると、ちょうどそのころ、クバグア島で真珠採取業が勃興したので、潜水が得意なルカーヨ人は重宝され、奴隷化されたルカーヨ人たちが、エスパニョーラ島からクバグア島に送られることになった¹³⁷。ラス・カサスは、真珠産業においてルカーヨ・インディオの需要が高まると、これまでひとり4ペソで売買されていたルカーヨの価格が100ペソ、ないしは150ペソになったと述べ

¹³⁵ Las Casas, *Historia de las Indias*, vol. 2, pp. 1474-5 (Libro 2, cap. 45); ラス・カサス (長南訳) 『インディアス史 (三)』、654 頁。

¹³⁶ “Real Cedula, Abril 30 de 1508,” in *Colección de documentos inéditos de América*, vol. 32, pp. 10-2; Otte, *Las perlas del Caribe*, pp.103-6; Donkin, *Beyond Price*, p. 321.

¹³⁷ Las Casas, *Historia de las Indias*, vol. 3, p. 1918 (Libro 3, cap. 39); ラス・カサス (長南訳) 『インディアス史 (四)』、454 頁。

ている¹³⁸。ルカーヨ人が真珠採取用の奴隷として売買されていたことを伝えている。

オッテの研究やラス・カサスの言説を勘案すると、クバグア島における初期の真珠採取業は、バハマ諸島の先住民を奴隷として使役する「先住民奴隷制水産業」として発達したことが判明する。

5.2 先住民の絶滅とラス・カサスの言説

ルカーヨ人は真珠採取に投入され、その結果、絶滅したと繰り返し主張してきたのが、ラス・カサスである。先述したように、先行研究では、その部分は看過されてきた。ここでは『インディアス史』の記述を読み解くことで、この問題を考える¹³⁹。

『インディアス史』第3巻165章に記された真珠採取の様子は、筆者自身が2008年の『黄金郷伝説』で引用して以来、繰り返し紹介してきた箇所である¹⁴⁰。オッテの研究や2010年以降のウォルシュの研究でも部分的に引用されており、南米真珠史では名高い箇所である。真珠採取の実態を知り、ルカーヨ絶滅に関するラス・カサスの主張を考察する上では必要なので、いま一度見ておきたい。まず、この第3巻165章に描かれたクバグア島での真珠採りの様子を抄訳すると、次のとおりである。

インディオはカヌーに乗せられ、水深3~4エスタード（エスタードは約1.95メートル）の沖に連れていかれる。そこで海に飛び込むよう命じられる。インディオは海底まで潜り、真珠の入った貝を集める。水面に現れて息継ぎなどでぐずぐずしていると、スペイン人の獄吏から早く潜るよう棒で殴られる。インディオはこの間ずっと泳ぎ続け、腕の力で体を支えていなければならない。日の出から日没まで真珠採りの作業は続く。彼らはいったんこの島に連行されてきたら最後、一年中こうした生活が続く。食べ物は満足に与えられず、寝床は地べたに直接木の葉や草を敷いただけである。しかも脱走を防ぐため足には鉄の鎖がかせられる。インディオが水中へ潜ったまま再び姿を現さないこともあるが、それはすっかり疲れ果てて、そのまま溺れてしまったか、海の獣に殺されたり、呑み込まれたりするからだ¹⁴¹。（長南実訳を抄訳）

この後のラス・カサスの記述を直接引用すると、次のとおりである。

わが同胞たちは彼らインディオに対して、地獄のような日々の生活を強制するため

¹³⁸ Las Casas, *Historia de las Indias*, vol. 2, p. 1475 (Libro 2, cap. 45); ラス・カサス（長南訳）『インディアス史（三）』、654頁。

¹³⁹ *Historia de las Indias* からの日本語訳の直接引用や抄訳、部分訳は、長南実訳を使用している。長南訳を筆者が一部補ったり、変更した箇所は（）で示している。

¹⁴⁰ 山田『黄金郷伝説』、36~39頁；山田『真珠の世界史』、82~86頁。

¹⁴¹ Las Casas, *Historia de las Indias*, vol. 3, pp. 2492-2493 (Libro 3, cap. 165); ラス・カサス（長南訳）『インディアス史（五）』、754~755頁。

に、その結果、彼らの大部分の者は短期間のうちに、精根尽き果てて絶命してしまう。なぜならば、日々の生活の大部分を、水の中で息を止めて過ごす人間が、生きてゆくことが一体可能であろうか。生活のほとんど大半を、水の中で呼吸を止めて過ごすために、胸が強く圧迫されるだけでなく、水の冷たさが体をこわしてしまい、彼らは口から血を吐き出し、血の下痢をしながら死んでゆくのが普通である。彼らインディオの髪の毛は、生まれつき黒ぐろとしているのに、まるで海驢の毛みたいに焦げ茶色に変わってしまう。そして彼らの背中は、ちょうど硝石が生じたような状態に似て、まるで別種の間人か、それとも化け物みたいに見えるのである。

こうした命取りの労働と絶望的な生活のために、本書の第二巻で述べてあるごとく、ユカーヨス諸島の原住民は死滅し、彼らのあとで今度は、その他の方面から連れて来られたが、それらのインディオも、やはり無数の者たちが同じ運命に見舞われた¹⁴²。(長南実訳、以下同じ)

以上が『インディアス史』第3巻165章の記述の直接引用である。ユカーヨス諸島はルカーヨス諸島のことで、ラス・カサスの『インディアス史』では、どちらの表現も使用されている。このラス・カサスの真珠採取の描写は、きわめて具体的である。彼自身は1521年11月にクバグア島を訪れているので、実際に目撃した真珠採取の状況を記したものと考えられる¹⁴³。この記述には、「日々の生活の大部分を、水の中で息を止めて過ごす人間が、生きてゆくことが一体可能であろうか」という現場にいた人でなければ語れないようなコメントもある。ラス・カサスは1520年の「クマナ計画」では、真珠の採取を彼の入植地の経営方法のひとつとしていたが、おそらくクバグア滞在を機に真珠採取の悲惨さと暴力性を認識し、「クマナ計画」に真珠採取の収益を加えたことを深く後悔するようになったと思われる。それが契機となって、ラス・カサスは、その後の真珠採取業の進展を注視するようになり、クバグア島の真珠採取の状況も具体的に覚えていたと推測できる。

ラス・カサスの言説をスペイン語で確認すると、第3巻165章の「ユカーヨス諸島の原住民は死滅し」という箇所は、“*acabaron de consumir [a] las gentes de los yucayos*”となっている。“*acabaron de*”は完了や終了を示す成句の直接法点過去であり、“*consumir*”は「衰え滅びさせる」、「衰滅させる」という意味の他動詞である。スペイン語の直接法点過去は、過去の終了した行為に使用する時制である。この一文は、ユカーヨス諸島の住民の衰滅がすでに完了したこと、つまり、死滅したことが語られている。

ラス・カサスは、第3巻165章の直接引用の終わりの箇所で、ルカーヨの絶滅は「本書の第二巻で」も述べたと語っている。実際、第2巻45章では、エスパニョーラ島のルカー

¹⁴² Las Casas, *Historia de las Indias*, vol. 3, p. 2494 (Libro 3, cap. 165); ラス・カサス (長南訳) 『インディアス史 (五)』、756~757 頁。

¹⁴³ ラス・カサス自身がクバグア滞在に言及している。Las Casas, *Historia de las Indias*, vol. 2, p.1059 (Libro 1, cap. 135); (長南訳) 『インディアス史 (二)』、388 頁及び染田『ラス・カサス伝』、105 頁を参照。

ヨ人たちは金の採掘や他の労役で酷使され、大部分が衰滅していったが、スペイン人たちは真珠採取のために彼らをエスパニョーラ島からクバグア島に送りこむことにしたと述べている¹⁴⁴。その後、次のように続けている。

真珠採りというその作業はまさに地獄の仕事であるから、ルカーヨ人たちは非常に危険にさらされ、いのちを失うことになった……エスパーニャ人たちは彼らを全部船に乗せて、その小島へ運んで行ったのである。そして、金鉱で金を採掘するよりもずっと苛酷な、その困難で危険きわまる作業に従事させた結果、そんなに長い年月がたたないうちに（最後には）彼らを殺戮し、絶滅させてしまった……われわれがルカーヨス諸島あるいはユカーヨス諸島と呼んでいる島々に……無数に住んでいたひとびとは、このようにして死に絶えたのである¹⁴⁵。

ここでラス・カサスが語っているのは、エスパニョーラ島のエンコミエンダ制下で酷使され、人口が減っていたルカーヨ人たちが、さらにクバグア島の真珠採取に送られ、結局、絶滅したことである。ラス・カサスによると、真珠採取は「地獄の仕事」であり、「金鉱で金を採掘するよりもずっと苛酷な、その困難で危険きわまる作業」であった。ラス・カサスは、こうした真珠採取の仕事が「(最後には) 彼らを殺戮し、絶滅させてしまった」と述べているが、そのスペイン語は、“*finalmente los mataron y acabaron*”である。ここでは、「殺す」、「殺戮する」という意味の“*matar*”及び「殺し尽くす」という意味の“*acabar*”というふたつの他動詞が直接法点過去で並列されて使われており、ルカーヨ人が殺され、殺し尽くされたことが明確に示されている。さらに、この引用文最後の「このようにして死に絶えたのである」という箇所は、“*así fenecieron*”と記されており、「息絶えて消滅する」、「死ぬ」という意味の自動詞“*fenecer*”の直接法点過去となっている。

『インディアス史』第3巻39章では、ラス・カサスは、真珠採取の利益が増大していたこと、スペイン人はルカーヨス諸島で徹底的に人間狩りを行って、クバグア島に送ったことを語り、真珠採取が行われる先述のクバグアの島ではルカーヨ・インディオは「例外なく消耗し、結局死滅していった」と述べている¹⁴⁶。初期の真珠採取業では、ルカーヨ人はエスパニョーラ島経由でクバグア島に送られていたが、この記述から、バハマ諸島で拉致されたルカーヨ人が直接クバグア島に輸送され、そこで死滅したことがわかる。スペイン語では、“*la dicha isleta de Cubagua . . . donde todos se consumían y donde fue su final acabamiento*”と記されていて、“*todos*”（すべての人）という不定代名詞、“*consumir*”の

¹⁴⁴ Las Casas, *Historia de las Indias*, vol. 2, pp. 1474-5 (Libro 2, cap. 45); ラス・カサス (長南訳) 『インディアス史 (三)』、654 頁。

¹⁴⁵ Las Casas, *Historia de las Indias*, vol. 2, pp. 1474-5 (Libro 2, cap. 45); ラス・カサス (長南訳) 『インディアス史 (三)』、654~655 頁。

¹⁴⁶ Las Casas, *Historia de las Indias*, vol. 3, p. 1917 (Libro 3, cap. 39); ラス・カサス (長南訳) 『インディアス史 (四)』、454~455 頁。

直接法線過去、“*final acabamiento*”（最終的な死滅）という強調された表現で、ルカーヨの絶滅が語られている。直接法線過去は過去の一定期間の状態を指すので、ルカーヨ人が衰え滅びさせられる状態が続き、結局、死滅に到ったことがわかる。

『インディアス史』第3巻157章では、クバグア島のマジョルドモの任務は真珠の採取であり、その労働でユカーヨ人たちを「どんどん死亡させ、結局は絶滅させてしまった」(*los mataban y al cabo los acabaron*)と述べている¹⁴⁷。ここでは、ルカーヨ死滅の具体的な当事者たちに言及している。スペイン語では、“*matar*”と“*acabar*”がそれぞれ直接法線過去、直接法点過去となっており、ここでも彼らが殺され続けて、結局、絶滅したことが表現されている。

ラス・カサスは『簡潔な報告』の中でも、その後、『インディアス史』で述べることになる真珠採取の状況を語っている。すなわち、日の出から日没まで息をしないで何度も海に潜っている過酷な真珠採取の光景である。この後、ラス・カサスは「(スペイン人は)この絶え難い労働で、もっと適切に言えば、地獄の仕事でルカーヨ・インディオすべてを衰滅させてしまった」と述べている。ここでは、“*acabaron de consumir a todos los indios lucayos*”と綴られており、ルカーヨ人すべての人が衰え滅びていき、それが終わってしまったことが示されている¹⁴⁸。ラス・カサスは、ルカーヨ諸島にはかつて50万人以上の人が暮らしていたが、今はひとりもいないと述べている¹⁴⁹。

以上、ラス・カサスの記述を、原文のスペイン語も含め考察した。『インディアス史』の特徴は、真珠採取によるルカーヨ絶滅の話が、第3巻165章の詳細な記事の中だけでなく、第2巻45章、第3巻39章と157章などでも、断片的に繰り返し出てくることである。こうしたきれぎれの彼の記述をまとめると、次のことが主張されている。

もともとルカーヨ人はエスパニョーラ島の金鉱や家事労働に使役されていたが、クバグア島で真珠採取が始まると、潜水ができることが評価されるようになった。彼らはエスパニョーラ島からクバグア島に輸送され、潜水労働者として使役された。真珠採取の潜水労働は危険が多い上、「地獄の仕事」であり、真珠採取の仕事を担うマジョルドモたちに酷使され、ルカーヨ人は次々と死んでいった。クバグア島におけるルカーヨ人の需要は大きく、バハマ諸島における徹底的な奴隷狩りを誘発し、その結果、ルカーヨ人は絶滅した。ルカーヨが絶滅すると、他の地域の先住民がクバグア島に連行されるようになった。

ラス・カサスが主張するルカーヨ絶滅の経緯は、論理的に一貫している。『インディアス史』の中で、ルカーヨ絶滅の話が繰り返し出てくるのは、執筆中にルカーヨやクバグアの話になるたびに、その絶滅を語っておきたいというラス・カサスの強い意志が働いたから

¹⁴⁷ Las Casas, *Historia de las Indias*, vol. 3, p. 2451 (Libro 3, cap. 157); ラス・カサス (長南訳) 『インディアス史 (五)』、679 頁。

¹⁴⁸ Las Casas, “Brevísima relación de la destrucción de las Indias,” in *Obras Completas 10: Tratados de 1552*, pp. 70-1; ラス・カサス (染田訳) 『インディアスの破壊についての簡潔な報告』、118~120 頁。

¹⁴⁹ ラス・カサス (染田訳)、20 頁。

だと考えられる。

スペイン語の分析では、“*consumir*”、“*acabar*”、“*matar*”、“*fenecer*”などの「衰滅させる」、「殺し尽くす」、「殺す」、「息絶えて消滅する」という言葉が使われていることが明らかになったが、それらが、単独で使われるのではなく、“*matar*”、“*acabar*”といったふたつの動詞の並列、“*todos*”という不定代名詞の使用、“*acabar de*”という完了を示す成句の使用によって、ルカーヨ人の絶滅が強調されていることも判明した。ラス・カサスの修辭の特徴を勘案すると、彼が『インディアス史』の中で訴えたかった歴史的事実のひとつは、真珠採取によるルカーヨ絶滅だったことがわかる。

ラス・カサスは、『インディアス史』の「序文」の中で、歴史書を著わそうとする人たちの執筆動機のひとつには、自分が実際に見た事物や出来事が、事実として世に知られていない状態であれば、「事実」(*verdad*)を消滅させまいとする熱情をもって、明示しようとする思いがあると述べ、これが彼自身の『インディアス史』の執筆動機でもあったことを語っている。「序文」の別の箇所では、インディアスの地域に関する「真相の報道」(*verdadera noticia*)と「事実の光明」(*lumber de verdad*)の必要性こそが、執筆動機になったとも語っている。ラス・カサスには、「事実」を伝えたいという強い意志があったことがわかる。さらに、「序文」の内容から、ラス・カサスがインディアスの現場にいて、歴史が展開するのを目撃してきたという自負、その出来事を1527年から書き続けてきたという誇り、事実を書けるのは自分しかいないという矜持、さらに、正しい事実を書くことが神の意志、スペインの国益に叶うという強烈な信念も、見ることができる¹⁵⁰。石原は「新しい世界史記述の誕生」の中で、ラス・カサスの『インディアス史』の「序文」からは、「真相の報道」を心がけ、自分たちスペイン人によるインディアスの破壊のリストを提示しようとしたラス・カサスの思いがあることがわかると述べ、ラス・カサスは歴史の証言者であり、正義の実現者であったと主張している¹⁵¹。

『インディアス史』は、1550年代のスペインの検閲強化の時代において、出版の見込みがないと判断したラス・カサスが、脱稿後は40年間、門外不出にすることを決心して書きあげた書物である¹⁵²。彼は、『インディアス史』を後世に託したのである。『簡潔な報告』は、インディアスの惨状を周知する意図で書かれたスペイン国王への報告書を母体とするが、『インディアス史』は刊行のあてなく書いた書物である。真実を後世に伝えたいという強い意志がなければ、完成しない書物であった。

以上のことを勘案すると、真珠採取によるルカーヨ絶滅の話は、後世に伝えるべき歴史の事実、歴史の証言として書かれたものであることが判明する。真珠採取の過酷な労働が、ルカーヨ人というカリブ海のひとつの民族を絶滅させた歴史が、間違いなく、存在したの

¹⁵⁰ Las Casas, *Historia de las Indias*, vol. 1, pp. 327-49 (Prólogo); ラス・カサス (長南訳) 『インディアス史 (一)』、3~42 頁。

¹⁵¹ 石原「新しい世界史記述の誕生」、55~74 頁。

¹⁵² 石原、61 頁。

である。

南米真珠史研究者の多くは、『簡潔な報告』の短い記述だけを考察の対象にして、ラス・カサスの言説はプロパガンダだと否定してきた。彼らは、『インディアス史』という書物の性格を理解した上で、ここで繰り返し語られる真珠採取によるルカーヨ絶滅の記事を読むべきであり、「序文」を読み、ラス・カサスの事実を消滅させまいという強い思いを知るべきである。

ゴマラは、1552年に出版した『インディアス史概説』の最終章で、スペイン人の栄光ある征服活動をたたえた後に、この征服活動の負の部分は、鉱山、真珠採取 (*pesquería de perlas*)、荷役でインディオに多大な重労働を課してきたことであると述べている。さらにゴマラは、多くのインディオを殺戮してきた人物たちは、ことごとく悲惨な死に方をしているが、私見ではそれは神の罰である、と締めくくっている¹⁵³。ゴマラ自身は、真珠採取で先住民が絶滅したとは語っていないが、スペイン人を賛美する歴史書のほぼ最後に、鉱山や真珠採取で死んでいった先住民に言及しているのは、着目に値する。真珠採取で多くの先住民が死んだことは、当時のスペイン人も確かに認識していたのである。

松森奈津子は『野蛮から秩序へ』の中で、ラス・カサスが彼の著作で提示する先住民減少の数字が、後世の分析結果よりも大きいわけではないと述べている。松森は、今日の研究はラス・カサスより大きな数字を出しており、ラス・カサスはスペインに不利になるよう意図的に数値を水増ししたのではなく、彼の著作の信憑性を否定することはできないと思われると語っている¹⁵⁴。ゴマラのようなラス・カサスと同時代の人物の記録及び今日の研究成果を勘案すると、ラス・カサスの言説をプロパガンダと一蹴することはできないのである。

5.3 ルカーヨ・インディオの絶滅の年代

では、バハマ諸島の先住民は、いつ頃、絶滅したのだろうか。ラス・カサスは、『簡潔な報告』の中ではその時期について明確に述べていない。『インディアス史』でも具体的な年代は述べられていないが、1517年の記述の箇所ではユカーヨス諸島はすでに破壊されていたと述べている¹⁵⁵。この記述によると、1517年頃までには、バハマ諸島の先住民は全滅していたことになるが、これについてはラス・カサスの記憶違いの可能性もあり、慎重に考える必要がある。

初期スペイン領アメリカの研究者ソーアーは、1509年から1512年の間に多くのルカーヨ人の捕獲と移送が起こり、人口が絶滅した新世界で最初の地域となったと述べ、ルカーヨ絶滅の年代を1513年としている。その論拠として1513年のポンセ・デ・レオンのフロ

¹⁵³ Gómara, *Historia general de las Indias*, p. 259 (cap. 224); ゴマラ (清水訳) 『拡がりゆく視圏』、299頁。

¹⁵⁴ 松森奈津子『野蛮から秩序へ』 (名古屋大学出版会、2009年)、320頁。

¹⁵⁵ Las Casas, *Historia de las Indias*, vol. 3, p. 2163 (Libro 3, cap. 96); ラス・カサス (長南訳) 『インディアス史 (五)』 158~159頁。

リダの「発見」を挙げ、レオンの征服活動は、住民がいなくなったバハマ諸島に代わる奴隷狩りであったからだと主張している¹⁵⁶。このソーアの言説は、今日でも N. L. ホワイトヘッドの先住民研究をはじめ、広く受け入れられている。増田義郎などの日本の研究でも同様である¹⁵⁷。

しかし、ラス・カサスが 1516 年に執筆した *Memorial de Remedios para las Indias* 『インディアスの改善のための覚書』には、ルカーヨ人についての言及がある¹⁵⁸。また、同じ 1516 年、アメリカ植民地の実情を視察する予定のヒエロニムス会の 3 人の修道士たちに渡された指令書には、ルカーヨス諸島の島々からのインディオの連行については、その実情が明らかになるまで、当分の間中止すべきと書かれている¹⁵⁹。エンシソは、1519 年に出版した『地理概要』の中で、「ユカーヨス諸島」(*Yucayos*) という項目を立て、島々のすべてに人が住んでいること、インディオは黒くはなく、気立てがよいこと、女性は容姿が整っていることなどを記している¹⁶⁰。

オッテの研究によると、フランシスコ・デ・バリオヌエボという人物は、1519 年に真珠採取をさせるためエスパニョーラ島のルカーヨ・インディオをクバグア島に移す許可を王室から得ている。マルティン・アロンソ・アレマンというクバグア島の真珠業者は、1528 年に死去したが、その時、彼が所有していた 18 人の潜水夫の内 3 人がルカーヨ・インディオだった¹⁶¹。

こうした一次史料などの内容から、1510 年代、20 年代にはルカーヨ人が生きていたことが推察できる。彼らが死滅したのは、1513 年までではない。

一方、ルカーヨ人の代替労働力となったアフリカ人奴隷は、1520 年代にはクバグア島に連行されるようになっていた。しかし、彼らが増えるとカヌーでの逃亡の恐れが高まるため、真珠採取業者は従順な先住民奴隷を好む傾向があった¹⁶²。クバグア島の住民は、1530 年にはクマナ近くのマラカパナに兵士が居住する集落を作り、そこをクバグア島の防衛の地とするとともに、先住民奴隷の獲得拠点としていた¹⁶³。このエピソードは、先住民奴隷の調達の間がバハマ諸島から南米本土に移ったことを示している。こうしたことを考察すると、1530 年までにはルカーヨ人は絶滅していたと考えるのが適切である。

¹⁵⁶ Carl Ortwin Sauer, *The Early Spanish Main*, p. 160.

¹⁵⁷ Whitehead, “The Crises and Transformations of Invaded Societies,” pp. 873-4. 増田義郎の『新世界のユートピア』(中央公論社、1989 年)、125~126 頁やラス・カサス『インディアス史 (三)』のルカーヨ人の解説(増田注)、644~645 頁でも、1513 年までに絶滅したと記されている。

¹⁵⁸ Bartolomé de Las Casas, “Memorial de Remedios para Las Indias,” in *Obras Completas 13 Cartas Memoriales*, pp. 30-1.

¹⁵⁹ 指令書については、Las Casas, *Historia de las Indias*, vol. 3, p. 2132 (Libro 3, cap. 89); ラス・カサス『インディアス史 (五)』、105 頁を参照。

¹⁶⁰ Enciso, *Summa de geografia*, pp. 260-1.

¹⁶¹ Otte, *Las perlas del Caribe*, pp. 48, 50.

¹⁶² Otte, pp. 49, 355

¹⁶³ Herrera y Tordesillas, *The General History*, vol. 4, p. 57.

クバグア島の真珠採取業の発展の観点からも、やはりその頃にルカーヨが絶滅したことがうかがえる。1520年代後半はクバグア島の真珠採取の最盛期であり、近くのコチェ島でも新たな真珠漁場が発見された時期である。真珠採取業の活況の中、致死率の高い潜水労働の従事者は恒常的に不足しており、ルカーヨ人潜水夫への需要は高まる一方であった。こうした中、バハマ諸島ではスペイン人によって、徹底的な人間狩りが行われ、ルカーヨ人はクバグア島に送られて、1530年までにはついに全滅したと推定できる。

5.4 「インディアス新法」と黒人奴隷制水産業の成立

1542年に発布された「インディアス新法」は、クバグア後の真珠採取における潜水労働力の実態を考える上で重要な史料である¹⁶⁴。南米真珠史研究者は「インディアス新法」について言及や紹介はしてきたが、彼らは誤訳のある英訳を使用してきたため、その内容を正しく解釈してこなかったし、この法令が発布された時代背景についても事実誤認がある¹⁶⁵。筆者はこの「インディアス新法」こそが、真珠採取業が「先住民奴隷制水産業」から「黒人奴隷制水産業」への移行を示すものとして、着目している¹⁶⁶。ここでは「インディアス新法」の内容をスペイン語原文に基づき、検討しておきたい。

「インディアス新法」は、先住民の保護を強く訴えてきたラス・カサスの影響の下に成立した40条からなる植民地統治法で、先住民の奴隷化禁止と即時解放、先住民の強制労働の禁止、エンコミエンダの段階的廃止などを主な内容とする¹⁶⁷。

「インディアス新法」の第21条は、いかなる理由であれ、先住民の奴隷化を禁止するという内容である。第23条は、先住民奴隷を即時解放することを命じている。第24条は、強制的または無報酬での先住民の荷物運搬での使役を禁止しており、第25条は真珠採取における労働問題を扱っている。第25条の内容は、次のとおりである。

真珠採取 (*pescuería de las perlas*) が、人々が同意した適切な規律で運営されていないため、多くのインディオと黒人の死亡が続いているという報告がもたらされたので、我々は次のことを命じる。自由民のインディオを誰ひとり、彼の意に反して、先述の真珠採取に送りこんではならない。違反者は死刑である。ベネズエラを視察する司教と判事は、インディオであろうと黒人であろうと、先述の真珠採取で働く奴隷たちにとってもっとも適切と思われる措置を講じ、彼らを保護し、その死をくい止めな

¹⁶⁴ *Colección de documentos para la historia de Mexico*, vol. 2, pp. 204-27. 染田・篠原監修『ラテンアメリカの歴史』93~95頁には「インディアス新法」の抄訳(平田和重訳)が掲載されている。この法令には、個々の条項が箇条書きにされているだけで、番号は付けられていない。平田はその抄訳で番号を振っており、筆者もそれに従う。

¹⁶⁵ Donkin, *Beyond Price*, pp. 321-2.

¹⁶⁶ 法令などの16世紀スペイン語の一次史料には、*negros* という語がしばしば登場する。当時の状況理解のため、本論文では「黒人」または「黒人奴隷」という表現を使用する。

¹⁶⁷ ハンケ(染田訳)『スペインの新大陸征服』、131~168頁; 染田『ラス・カサス伝』、173~205頁。

ければならない。もし、先述のインディオや黒人の死の危険を回避できないと思われる場合は、先述の真珠採取を中止しなければならない。なぜなら我々は、真珠が我々にもたらす利益よりも、彼らの生命の保護をより高く尊重するからである¹⁶⁸

この第 25 条の内容から、次の四点が明らかになる。

第一に、この条項が、真珠採取の場所としてベネズエラという地名を出していることに注意する必要がある。16 世紀のベネズエラという地名は、当時のベネズエラ総督領のことで、今日のベネズエラ・ボリバル共和国と同じ領域でない。ベネズエラ総督領は、グアヒラ半島やマラカイボ湖、ベネズエラ湾などの一帯が主要管轄区であり、今日のコロンビア共和国領も含んでいる¹⁶⁹。この条項は、ベネズエラ総督領の真珠採取を対象にしているので、1542 年時の真珠採取の中心地は、クバグア島からグアヒラ半島のベラ岬などに移っており、そこを対象にしていたことがわかる¹⁷⁰。

第二に、この条項には「インディオであろうと黒人であろうと、先述の真珠採取で働く奴隷たち」という表現があることである。これによって、当時の真珠採取業は先住民奴隷と黒人奴隷が潜水労働力となっており、グアヒラ半島の真珠採取業は、先住民奴隷制・黒人奴隷制に立脚する水産業だったことが明らかになる。

第三に、潜水労働力としての先住民の使役の著しい制限である。「インディアス新法」は、第 21 条で先住民の奴隷化を禁止しており、第 23 条は先住民奴隷の即時解放を命じている。これらの条項によって奴隷身分の先住民は存在しなくなった。したがって、真珠採取に投入できる先住民は、自由身分の先住民になるが、こちらも、彼らの意に反して真珠採取を強要すべきではないと定めている。つまり、自発的に真珠採取を望む先住民を除いては、いかなる先住民も真珠採取業で使役することはできなくなったのである。違反者は死刑という重い法令であり、スペイン王室が、真珠採取における先住民保護を強く打ち出したことがわかる。ただ、自発的な自由身分の先住民の使役は可能であり、抜け道は残っていた¹⁷¹。

第四に、黒人奴隷は真珠採取に投入できることが許されたことである。「インディアス新法」は、黒人奴隷に関しては、彼らの死の危険を回避するよう適切に扱うことを求めている

¹⁶⁸ *Colección de documentos para la historia de Mexico*, vol. 2, p. 215.

¹⁶⁹ ベネズエラ総督領については、モンテロ（ラテン・アメリカ協会訳）『ベネズエラ史概説』、70~83 頁。

¹⁷⁰ ドンキンは、この法令がルカーヨ・インディオを対象にしていたと考え、その有効性に疑問を呈している。この法令の対象はクバグア島ではなく、ベネズエラ総督領の真珠採取である。Donkin, *Beyond Price*, pp, 321-2 を参照。

¹⁷¹ ドンキンが引用している「インディアス新法」の英訳は、*contra su voluntad*（彼の意に反して）を訳していない。また、*pena de muerte*（死刑である）という表現を、真珠採取にかけ、*the said fishery under pain of death* と訳している（Donkin, *Beyond Price*, pp. 321-2）。ウォルシュも *contra su voluntad* を訳さずに、1542 年の法律は、自由民のインディオを誰ひとり潜水夫として働かせてはいけないと命じたと述べ、事実と反する内容を叙述している。Warsh, *American Baroque*, p, 84 を参照。

るが、彼らを真珠採取に従事させることは禁止していない。

このように見ていくと、「インディアス新法」には、先住民奴隷制・黒人奴隷制に立脚する真珠採取業を、「黒人奴隷制水産業」に特化させようとする意図があったことが判明する。

「インディアス新法」の条項からは、当時の産業の状況も明らかになる。この新法で強制労働の事例として具体的に挙げられているのは、真珠採取と荷物の運搬のふたつである。1512年の「ブルゴス法」は、砂金採取や荷担ぎ、鉱山や畑の仕事における先住民虐待の改善を目指す内容であり、当時、それらが主要な産業だったことがわかる¹⁷²。一方、「インディアス新法」では、鉱山業や農業についての言及がなく、砂金採取についても述べられていない。ポトシの銀山の発見は1545年、サカテカス、グアナファトの銀山の発見は1540年代後半であり、1540年代前半にはそれらの銀山の存在はまだ知られていなかった¹⁷³。こうしたことを勘案すると、「インディアス新法」が発布された1542年時において、スペイン人が従事した産業の中で真珠採取業がきわめて重要な産業となっていたことがわかるのである。

「インディアス新法」が発布されると、エンコミエンダ制の段階的廃止に異議を唱えるスペイン人入植者たちの抗議が相次ぎ、この法令は十分施行されなかった。しかし、真珠採取業に関しては、真珠採取の潜水労働力として黒人奴隷の使用を促す大きな転機になった。ただ、黒人奴隷は、真珠採取地という狭い閉鎖空間では反乱を起こす可能性が先住民よりも高かった。実際、1550年代頃のサンタマルタとベネズエラ総督領では、黒人の数が大変多くなり、彼らによる反乱が起こっていた¹⁷⁴。こうしたこともあり、真珠採取業者は黒人よりも先住民の使用を好んでいた。1585年6月2日の法令は、真珠採取に黒人の使役を命じる一方、インディオに関しては、彼らの意志に反した強制労働を禁止しており、違反者は死刑に処すと述べている。この内容は「インディアス新法」の踏襲である。1601年にも同じ内容が発布されている¹⁷⁵。こうした法制の発布は、スペイン国王の禁止にも係わらず、16世紀後半にも多くの先住民が真珠採取に使役されていたことを示唆している。しかし、スペイン王室による真珠行政の基本は「黒人奴隷制水産業」の堅持であった。

「インディアス新法」が発布された時期の主要な真珠採取地はクバグア島ではなく、グアヒラ半島のベラ岬である。当時、グアヒラ半島に大勢暮らしていたワユウ族も、潜水労働力として真珠採取に投入されたはずである。しかし、ワユウ族は絶滅することなく、存続し続け、今日においても南米カリブ海沿岸地帯を代表する先住民社会を維持・形成している。「インディアス新法」などの先住民保護政策の一定の効果があったことが推定できる。

¹⁷² ブルゴス法については、染田・篠原監修『ラテンアメリカの歴史』、36~38頁を参照。

¹⁷³ ポトシ銀山については、青木康征『南米ポトシ銀山』（中央公論新社、2000年）を参照。

¹⁷⁴ Herrera y Tordesillas, *The General History*, vol. 6, pp. 127-9.

¹⁷⁵ “Ley 31, Junio 2 de 1585, 1601, De la pesquería, y envío de perlas,” in *Recopilación*, vol. 2, p. 102. モスクは、この法令を1558年6月25日と誤記しているが、ウォルシュは彼の72年前の誤りをそのまま引用している。Mosk, “Spanish Pearl-fishing Operations,” p. 399; Warsh, “Enslaved Pearl Divers in the Sixteenth Century Caribbean,” p. 350.

5.5 アフリカ人奴隷の輸入

奴隷化されたアフリカ人は「南米カリブ海真珠生産圏」の真珠採取事業の重要な潜水労働力となった。彼らの出身地は主にギニア、アンゴラ、ヴェルデ岬などで、これらの地域に暮らすアフリカ人は潜水能力にたけていた¹⁷⁶。彼らは、ふたつのルートによって南米カリブ海沿岸部の真珠採取地に輸送された¹⁷⁷。

第一のルートは、スペイン王室とアシエント契約を結んだ業者による正規ルートである。第二のルートは、イギリス、フランス、オランダなどの私掠船による奴隷の密貿易である。初期の奴隷の輸出先となったのは、クバグア島であったが、16世紀後半になると、マルガリータ島やクマナ、リオデラアチャなどが重要な輸出先となった。真珠採取地へのアフリカ人奴隷の輸出は、南米真珠史の先行研究がよく取り上げるテーマであるので、その概要を簡単に述べておく。

(1) アシエント契約

アシエント契約によるアフリカ人の奴隷輸出については、具体的な事例が残っている。

1526年、サンチョ・オルティス・デ・ウッルティアというバスク人らがカルロス1世からクバグア島へ黒人奴隷を輸出する許可を得て、彼らの代理人が30人の黒人をクバグア島に連行した。しかし、一部の奴隷しか下ろせなかったという。なぜなら、クバグア島の関係者たちは、黒人が増えると、逃亡のチャンスが高まるために、その輸入に消極的であったからである¹⁷⁸。クバグア島の関係者たちは、黒人の行動傾向を知っているので、このエピソードは、1526年以前に黒人奴隷の輸入が始まっていたことを示唆している。

クバグア島へのアフリカ人奴隷の輸入は、その後も続けられ、他の真珠採取地でも、公式に黒人奴隷が輸入されている。1567年には、エルナンド・デ・ルケという人物が、7年間にわたって真珠の産地へ黒人奴隷を運ぶことができるというアシエント契約を結んでいる。この契約によると、収益の十分の一税以上は支払わなくてもよいことになっていた。1569年には、アシエント契約を得た奴隷輸出業者のガルシア・リバーロスが50人の奴隷をマルガリータ島に輸送し、1582年には、ルイス・デ・レイバという人物が250人の奴隷をマルガリータ島に輸入する許可を得ている¹⁷⁹。16世紀末のマルガリータ島には、約1000人の黒人奴隷が住んでいたと考えられている¹⁸⁰。リオデラアチャについては、1577年に真珠採取業者のペドロ・デ・ベルトラニーヤが、カヌーのこぎ手として200人の黒人奴隷を輸入する許可を得ている¹⁸¹。奴隷のアシエントは、ポルトガル商人にも与えられた¹⁸²。

¹⁷⁶ Dawson, “Enslaved Swimmers and Divers in the Atlantic World,” pp. 1327-55.

¹⁷⁷ Donkin, *Beyond Price*, p. 343, no. 258.

¹⁷⁸ Otte, *Las perlas del Caribe*, p. 355.

¹⁷⁹ モンテロ（ラテン・アメリカ協会訳）『ベネズエラ史概説』、45頁。

¹⁸⁰ モンテロ、45頁。

¹⁸¹ モンテロ、45頁。

¹⁸² Warsh, *American Baroque*, p. 85.

1602年のマルガリータ島では、公式に黒人奴隷の輸入が進められていた。黒人奴隷の値段は1人180ペソで、その代金は真珠で支払われた。スペインで真珠を売ると12パーセント増しの値段になった¹⁸³。

(2) 私掠船による密貿易

16世紀のイギリス、フランス、オランダの私掠船の船長たちも、真珠の採取地へのアフリカ人奴隷の密輸を積極的に行った。1545年に5隻のフランス私掠船が南米本土の真珠採取地（ベラ岬カリオデラアチャ）に現れて、60人の黒人奴隷を売却している¹⁸⁴。ジョン・ホーキンスも、1568年の航海でリオデラアチャに向かい、町を攻撃し、150人の黒人奴隷を売りつけ、その代金を、金、真珠、銀で受け取っている¹⁸⁵。

真珠採取地は海に面しているため、内陸部の農業プランテーションよりも、私掠船が寄港しやすく、アフリカの奴隷を密輸する格好の場となったことは想像に難くない。私掠船の一行はリオデラアチャやマルガリータ島、クマナなどに寄港して、スペイン植民地官吏の目を盗み、真珠採取業者に奴隷を売りつけ、代わりに真珠を得る密貿易を行っていた。これらの町を襲撃して、蓄えられた真珠や金、銀、宝石を奪うことも多かった。マルガリータ島には今日、7つの要塞が残っている。この島が、私掠船による奴隷の密貿易及び真珠などの略奪の主要な舞台となっていたため、スペイン植民地政府が監視と防衛を強化していたことを示している。

1492年のコロンによる新世界到達以降、カリブ海は実質的に「スペイン人の海」となった。真珠採取業者もスペイン植民地政府も、第4章以降で検討するインド洋海域世界とは異なり、真珠漁場を排他的に独占できた。彼らは艦隊で海域を防衛する必要はなく、「彼らの海」で真珠採取を実行できた。しかし、私掠船の登場はスペイン人独占の海が変わりつつあったことを示している。

真珠採取の潜水労働は、特殊技能であると同時に致死率が高い。それゆえ、潜水労働力は常に供給不足で、アフリカ人奴隷は各地の真珠採取地に輸送され続けた。「南米カリブ海真珠生産圏」は、彼らの重要な受け皿となったのである。

以上、真珠のコモディティ・チェーンの生産面における潜水労働力を考察した。真珠採取業は、初期にはバハマ諸島から連行した先住民奴隷を潜水労働力とする「先住民奴隷制水産業」として発展したが、その後、アフリカ人奴隷を使役する「黒人奴隷制水産業」へと移行した。真珠採取業は潜水労働力を激しく消耗させる産業であった。ラス・カサスの『インディアス史』の記述の分析は、真珠採取によってバハマ諸島の先住民が絶滅したことを明らかにする。スペイン人が興した真珠採取業は、ひとつの地域の先住民を絶滅させ

¹⁸³ Mosk, “Spanish Pearl-fishing Operations,” p. 400.

¹⁸⁴ Herrera y Tordesillas, *The General History*, vol. 6, p. 89.

¹⁸⁵ Donkin, *Beyond Price*, pp. 328-9.

るほど激しいものであった。16世紀中期以降は大西洋貿易による西アフリカの 아프리카人 奴隷の輸入が進められた。「南米カリブ海真珠生産圏」の真珠採取業は、労働力の徴発において、バハマ諸島などのカリブ海世界、南米大陸、アフリカ世界と密接に結びついており、その人口動態に大きな影響を及ぼしたのである。

表1 潜水労働力の移動

バハマ諸島の先住民	→ エスパニョーラ島 → クバグア島 (絶滅)
バハマ諸島の先住民	→ クバグア島 (絶滅)
ベネズエラ沿岸部の先住民	→ クバグア島、ベラ岬 (16世紀前半)
ベネズエラ沿岸部の先住民	→ リオデラアチャ、マルガリータ島、クマナ (16世紀後半)
ギニア、アンゴラなどのアフリカ人	→ クバグア島、ベラ岬 (16世紀前半)
ギニア、アンゴラなどのアフリカ人	→ リオデラアチャ、マルガリータ島、クマナ (16世紀後半)

5.6 疫病と黒人奴隷制に関する通説の再考

真珠採取業における労働力の徴発過程の検討は、ラテンアメリカ史の名高いふたつの通説に再考を促すことになる。疫病と黒人奴隷制の発展経緯に関する通説である。

第一に、疫病によって先住民人口の激減または絶滅したという議論である。疫病や病原菌はラテンアメリカ史やグローバルヒストリー、人類史の研究領域で関心を集めているテーマである。大航海時代は、「コロンブスの交換」によって、ヒトとモノばかりでなく、動植物や細菌、ウイルスまでもが新旧世界を激しく移動した¹⁸⁶。とりわけ、スペイン人が新世界に持ち込んだ疫病は、新世界の先住民社会の人口減少に多大な影響をもたらしたとされてきた。W. H. マクニールは、人間の暴力がいかに荒々しくてもインディオ人口が溶け去ってしまう原因ではない、天然痘やマラリアが、カリブ海のインディオ住民を消滅させ、人口の多かった地域を無人化したと主張している¹⁸⁷。フランクは、細菌と遺伝子の「コロンブスの交換」と「生態学的帝国主義」によって、カリブ諸島部では50年も経たないうち

¹⁸⁶ Alfred W. Crosby, *The Columbian Exchange: Biological and Cultural Consequences of 1492* (Westport: Greenwood Press, 1972).

¹⁸⁷ W. H. マクニール (佐々木昭夫訳) 『疫病と世界史』(新潮社、1985年、原著1976年)、187~194頁、注26。Crosby, *The Columbian Exchange*, p. 75; 国本伊代『改訂新版 概説ラテンアメリカ史』(新評論、2001年、初版1992年)、37頁、39頁; A. F. クロスビー (佐々木昭夫訳) 『ヨーロッパ帝国主義の謎—エコロジーから見た10~20世紀』(岩波書店、1998年、原著1986年)、247~248頁; パミラ・カイル・クロスリー (佐藤彰一訳) 「伝染」『グローバル・ヒストリーとは何か』(岩波書店、2012年、原著2008年)、99~122頁も参照。

に土着の部族民はほぼ絶滅したと述べている¹⁸⁸。J. ダイヤモンドも、西インド諸島の人々は、ヨーロッパ人のもたらした疫病等によって、人口が減少したと語っている¹⁸⁹。

マクニールなどの主張の問題点は、病原菌の解説は詳しいが、病原菌と先住民の絶滅を直接、因果関係で結びつけて議論していることである。その実証は可能なのだろうか。また、疫病テーゼでは、先住民人口の「激減」と「絶滅」が同列に扱われている。マクニールは、先住民人口を消滅させたのは、人間の暴力ではなく、疫病であると主張しているが、むしろ事実とは逆であり、生物には耐性があるので、疫病が人口の急激な減少の要因にはなりえても、絶滅はしないと考えられる。

疫病テーゼのもうひとつの問題点は、「先住民奴隷制水産業」として成立した真珠採取業を看過していることである。真珠採取業の発展が、バハマ諸島の先住民絶滅の要因だったことはすでに見たとおりである。先住民の絶滅は、16世紀に勃興したスペイン人による真珠採取業やエンコミエンダなどの先住民支配の制度面からも議論すべきであり、病原菌だけにその原因を帰するのは、問題の本質を見誤ることになる。

再考を要する第二の先行研究が、ラテンアメリカ世界における黒人奴隷についてである¹⁹⁰。奴隷制度史などの研究では、黒人奴隷は、16世紀初期には鉱山労働や砂金の採集、家内労働や荷担ぎなどで必要とされ、その後は砂糖、タバコ、カカオなどのプランテーションでその需要が高まったと解釈されてきた。こうした奴隷制や奴隷貿易の研究では、16世紀のスペイン領アメリカで発展した真珠採取業という水産業が大量の黒人奴隷を吸収したことが、見落とされている¹⁹¹。スペイン王室が真珠採取業における黒人奴隷の使用を推奨し、真珠採取地が公式、非公式に黒人奴隷の重要な売却先になっていたことは、すでに検証したとおりである。奴隷商にとっても、真珠採取業は島や沿岸部で行われているため、内陸部のプランテーションよりも寄港しやすい。しかも売買相手は真珠という高価な換金

¹⁸⁸ フランク『リオリエント』、138~139頁。

¹⁸⁹ ジャレド・ダイヤモンド（倉骨彰訳）『銃・病原菌・鉄——1万3000年にわたる謎（下）』（草思社、2000年、原著1997年）、310頁。

¹⁹⁰ ラテンアメリカにおける奴隷制研究については、次を参照。R・メジャフェ（清水透訳）『ラテンアメリカと奴隷制』（岩波書店、1979年、原著1973年）；池本幸三他『近代世界と奴隷制——大西洋システムの中で』（人文書院、1995年）；William D. Phillips, Jr., “Slavery in the Atlantic Islands and the Early Modern Spanish Atlantic World,” in *The Cambridge World History of Slavery*, ed. David Eltis and Stanley L. Engerman (Cambridge: Cambridge University Press, 2011), vol. 3, pp. 325-49; John Thornton, “The Slave Trade and the African Diaspora,” in *The Cambridge World History: The Construction of a Global World, 1400-1800 CE*, ed. Jerry H. Bentley et al. (Cambridge: Cambridge University Press, 2015), vol. 6, pp. 135-159; Alex Borucki et al., “Atlantic History and the Slave Trade to Spanish America,” *The American Historical Review*, vol. 120, no. 2 (April 2015), pp. 433-61 がある。

¹⁹¹ 近年のアフリカ奴隷史などの研究では、南米の真珠採取における奴隷の存在に言及する論文も登場し始めている。Dawson, “Enslaved Swimmers and Divers in the Atlantic World,” pp. 73-82 及び Domínguez-Torres, “Pearl Fishing in the Caribbean: Early Images of Slavery and Forced Migration in the Americas,” pp. 73-82 を参照。

商品を保有している。黒人奴隷の密貿易も、早くから盛んだったのである。

16 世紀前半のスペイン領アメリカでは、砂糖プランテーションは十分な成功を収めておらず、大アンティール諸島での砂金の採集も生産力が落ちていた。16 世紀前半から始まる黒人奴隷貿易の行き先としての「南米カリブ海真珠生産圏」の真珠採取地を忘れてはならない。

第 6 節 真珠の希求地、希求者

本節では、「南米カリブ海真珠生産圏」で生産された真珠の希求を考察する。本論文は、真珠の希求の考察に際し、「伝統的希求地／希求者」、「新興希求地／希求者」の概念を提唱している¹⁹²。

コロム来航以前の「南米カリブ海真珠生産圏」では、ベネズエラやコロンビア沿岸部の先住民たちが、重要な真珠の希求者であった。真珠は、交易品として中南米各地の先住民社会にもたらされており、そうした先住民社会の人々も真珠の希求者となっていた。16 世紀になると、スペイン人の来航によって、先住民社会は破壊されたり、人口が激減あるいは絶滅するなど、大きな変容を遂げた。したがって、これまでカリブ海のアコヤ系真珠を享受していた先住民社会は「伝統的希求者」にならなかった。代わって「新興希求者」として登場したのが、ヨーロッパ社会やスペイン領アメリカの植民地社会などである。

6.1 新興希求地 1： ヨーロッパ世界

16 世紀に「南米カリブ海真珠生産圏」のアコヤ系真珠の最大の「新興希求地」になったのは、スペインをはじめとするヨーロッパである。ヨーロッパは、もともとオリエント世界のアコヤ系真珠の「伝統的希求地」であった。したがって、南米カリブ海沿岸部におけるアコヤ系真珠の発見は、オリエント世界に代わるもうひとつの真珠の産地の発見を意味しており、スペイン人を歓喜させ、他のヨーロッパの人々を驚かせることになった。その後のスペイン人の「南米カリブ海真珠生産圏」への進出によって、多くの真珠が、スペイン国王への五分の一税や真珠業者や貿易業者の輸出品として、まずセビリヤに輸出され、そこからヨーロッパ各地にもたらされた。

スペイン国王は、クバグア島への入植を奨励し、3 カラット以上の真珠を独占してきた。彼自身が真珠の「新興希求者」であった。1542 年の「インディアス新法」の条文で、「真珠

¹⁹² ウォルシュは、16 世紀の肖像画などの絵画や当時のジュエリー製品などから、真珠の希求のシンボリズムを議論している。すなわち、真珠は、富と権力と暴力の象徴、海上帝国の象徴、エキゾチシズムの象徴、ロマンスの象徴、独立の象徴などといった議論である。「はじめに」でも述べたが、絵画からの真珠のシンボリズムの推論はいくらでも解釈が可能である。また、彼女の研究は、16 世紀の肖像画や絵画に描かれた、明らかにパナマクロチョウ真珠と思われる大粒真珠やバロック真珠のシンボリズムを議論しているが、それらがベネズエラで採れたような論理展開になっているのは問題がある。Warsh, *American Baroque*, pp. 102-117, 129.

が我々にもたらす利益よりも、彼ら（インディオや黒人）の生命の保護をより高く尊重する」と言明したが、裏返すと、それだけ真珠は彼らにとって貴重であり、利益を生む商品であったことを示している。スペイン王室に届けられた真珠は、一部はインディアス商館で売買され、換金されたことが知られている¹⁹³。

ヨーロッパ社会にとって、真珠は換金財であり、威信財、退蔵財であった。大粒真珠は王冠、ティアラ、イヤリングなどで真珠一粒を強調する形で使用されたが、アコヤ系真珠のように、大きさにそれほど差がない真珠はまとめて使用された。王冠やティアラの側面に嵌めこまれたり、髪飾り、ネックレス、ペンダント、イヤリング、ベルト、扇子や靴などの装身具にも使われた。さまざまな衣装やドレスには真珠の刺繍が施され、身の回りの物、調度品などにも使用された。ハプスブルク家、ヴァロア家、チューダー家などをはじめ、ヨーロッパ各地の王や王族、重臣、貴族、メディチ家などの富裕な商人貴族などが、真珠に熱中した。彼らがいかに真珠を好んだかは、16世紀のヨーロッパの肖像画や今に伝わるジュエリーなどを見れば明白である。

6.2 新興希求者 2： スペイン領アメリカの植民地社会

スペイン領アメリカの植民地社会も、南米カリブ海の真珠の「新興希求者」になった。スペイン人入植者たちは、先住民との「物々交換」や真珠採取業や鉱山業への参入によって、新世界が生み出す大量の真珠や金、銀を獲得するようになった。ここで忘れてはならないことは、生産された真珠や金、銀は、スペイン国王への五分の一税が差し引かれた後は、五分の四の量が彼らの手元に残ったことである。オビエドは、国王は、インディアス世界が生み出す財宝の五分の一しか取得されず、地方によっては十分の一もしくはそれ以下しか取得されなかったため、国王に仕える臣下や家来たちに大きな利益をもたらした、と述べている¹⁹⁴。こうして、中南米世界には、豊かなスペイン植民地社会が形成されていた。この植民地社会は、時代が進むにつれて、入植者の白人人口ばかりでなく、クリオリョやメスティソなどの人口も増加し、購買力のある大きな消費社会となった¹⁹⁵。スペイン王室から派遣された高級官吏や一般官吏たちも、この植民地社会の有力者となった。

植民地の人々は、本国の人々の生活様式を模倣する傾向があるため、真珠は、本国同様、希求されていた。ヌエバ・エスパーニャ副王マルティン・エンリケスによるフィリピン総督への1572年の指示書は、中国に関する情報収集を命じている。具体的には、沿岸地方の住民の有無や住民の生活程度、習慣、宗教、統治様式をはじめ、富の種類、土地の珍重品、輸出品の種類などの調査で、貴金属や真珠等の有無も調査項目に入っていた¹⁹⁶。この指示

¹⁹³ Donkin, *Beyond Price*, p. 327.

¹⁹⁴ Oviedo y Valdés, *Historia general y natural de las Indias*, vol. 1, p. 167 (parte 1, libro 6, cap. 8); オビエド (染田・篠原訳) 『カリブ海植民者の眼差し』、204頁。

¹⁹⁵ メジャフェ 『ラテンアメリカと奴隷制』、47頁。

¹⁹⁶ 平山篤子 『スペイン帝国と中華帝国の邂逅——十六・十七世紀のマニラ』 (法政大学出版会、2012年)、77頁。

書は、16世紀後半にスペイン本国から派遣された植民地社会の最高位の人物が、アジアの真珠に関心をもっていたことを示しており、エリート層の真珠の希求は続いていたことを明らかにする。当然、カリブ海の真珠も彼らに大いに希求されていた。

16世紀後半にスペイン領アメリカに滞在したイエズス会聖職者のホセ・デ・アコスタは、植民地社会での真珠の受容について語っている。彼は *Historia natural y moral de las Indias* (邦訳名『新大陸自然文化史』)の中で、かつて真珠は王族にのみ属していたが、いまでは(インディアスに)大変豊富にあるため、黒人女性も数珠つなぎにした真珠をつけていると述べている。さらに、アコスタは、インディアスでは、そのあたりにいる女性でも、帽子やベルト、さらに靴下や靴まで、刺繍された真珠がちりばめられていると語っている¹⁹⁷。

スペイン領アメリカは、大量のアコヤ系真珠を生み出す「南米カリブ海真珠生産圏」を擁していた。生産される真珠の五分の四が、まず現地生産者の手に残った。アコスタの記述から、そうした真珠が、すべてではないにせよ、スペイン領アメリカの植民地にも吸収されて、植民地社会自体が、真珠の「新興希求者」となり、さらにスペイン領アメリカでは真珠の受容が大衆化しつつあったことがわかる。ただ、真珠の生産は増えたが、真珠の需要は飽和状態になったのではなかった。ヌエバ・エスパーニャ副王の指示書から明らかになるように、真珠は希求され続けていたのである。

6.3 新興希求者 3: スペイン領アメリカのキリスト教会

南米カリブ海の真珠のもうひとつの「新興希求者」が、スペイン領アメリカのキリスト教会である。スペイン人コンキスタドールやエンコメンデロたちは、彼らが獲得した真珠や宝石、金、銀などの一部を、信仰の証として、中南米のキリスト教会に寄進したことは十分考えられる。しかし、キリスト教聖職者たちは、それだけではあきたらず、植民者の良心の呵責に訴えることで、新世界の真珠などの財宝を、さらに教会に集めるシステムを構築した。それが「聴罪規定」である。大航海時代の早い時期から、キリスト教聖職者の間には、コンキスタドールやエンコメンデロたちが先住民から奪った真珠や宝石、金、銀などの財宝を盗品と見なし、それを返還しない限り、聴罪行為を行わないという動きが広がっていた¹⁹⁸。

ラス・カサスもそうした動きを推し進めたひとり、1546年には聴聞司祭の採るべき行動を定めた一連の規則を執筆した。この規則は、*Unos Avisos y reglas para los confesores que oyeren confesiones de los españoles que son o han sido en cargo a los indios de las Indias del mar Océano*『大海の先のインディアスのインディオたちに、これまで、またい

¹⁹⁷ José de Acosta, *Historia natural y moral de las Indias*, (Mexico; Fondo de Cultura Económica, 1962), pp. 168-9 (cap. 15); アコスタ (増田訳注)『新大陸自然文化史 (上)』、363~365頁。

¹⁹⁸ フランシスコ・デ・ソラーノ (篠原愛人訳)「スペイン人コンキスタドール——その特徴」『大航海の時代』、260~263頁。

まも罪を負っているスペイン人の告白を聞く聴聞司祭への訓戒と規則』として 1552 年にセビリヤで出版された。ラス・カサスによると、コンキスタドールとエンコメンデロは盗みの罪を犯しているため、懺悔しても、不当に得た物を略奪した相手に返すまでその罪は許されなかった。しかも、その罪は当事者が死んでも消えなかったため、子孫が返還する必要があった。財宝の返還先が分からない場合は、教会への寄進という形で返還できることになっていた¹⁹⁹。他の司教たちも、ラス・カサス同様、『聴聞司祭への覚書』を次々と公にしていた。

こうしたキリスト教聖職者たちの告発は、コンキスタドールとエンコメンデロの征服行為の正当性を問うもので、スペイン領アメリカの人々の道徳的な不安をかきたてた。中には気にしない人もいたが、エンコメンデロ本人やその子孫たち、家臣、兵士、商人、役人たちも、彼らの略奪行為や不正行為を認識していたため、苦悩し、怯え、免罪のために財産を教会に寄進せざるをえなかった²⁰⁰。真珠史の観点で見た場合、キリスト教聖職者たちは聴罪行為を錦の御旗として、先住民が奪われた数多くの真珠や宝石を、教会に還流するシステムを作り上げたのである。教会に集まった真珠は、マリア像などのパネルに嵌め込まれたり、聖遺物や祭祀用具の飾りとして使用された。教会は 16 世紀の真珠の新興希求者となり、真珠の退蔵先のひとつとなったのである²⁰¹。

6.4 新興希求地 4： ペルシア・インド世界

南米カリブ海の真珠は、インド洋海域世界も「新興希求地」にした。

16 世紀半ばのゴアの居住者だったオルタは、『インドの薬草と薬物の対話』の中で、目端の利くスペインの商務員や商人などが、ヨーロッパよりもアジアの方が真珠に高い値がつくことを知り、スペイン領の大地や島々で採れる真珠 (*aljófar*) を頻繁にゴアまで運んで利益を得ていると述べている²⁰²。

17 世紀前半、ペルシア宮廷を訪問したスペイン使節団大使のガルシア・デ・シルバ・イ・フィゲロアも、真珠はアジアの方がヨーロッパよりも高価なため、パリア半島、クバグア、サンタマルタ、マルガリータの海岸で大量に採取されている真珠は、ヨーロッパ人がペルシアやインド全土に盛んに持ち込んでいることを記している²⁰³。

¹⁹⁹ Bartolome de las Casas, *Obras Completas 10: Tratados de 1552* (Madrid: Alianza Editorial, 1992), pp. 367-88; マリアンヌ・マン＝ロト (染田秀藤訳) 『イスパノアメリカの征服』(白水社、1984 年)、153~156 頁; 染田『ラス・カサス伝』、234~237 頁; ソラーノ「スペイン人コンキスタドール」、261~262 頁。

²⁰⁰ ソラーノ、「スペイン人コンキスタドール」、260~263 頁。

²⁰¹ キリスト教聖職者自身が、真珠を欲していたことは、第 5 章で検討する。

²⁰² Orta, *Colóquios dos simples e drogas da Índia*, vol. 2, p. 121. オルタの言説については、第 6 章で詳しく考察する。

²⁰³ García de Silva y Figueroa, *The Commentaries of D. García de Silva y Figueroa on his Embassy to Shah 'Abbās I of Persia on behalf of Philip III, King of Spain*, trans. Jeffrey S. Turley (Leiden: Brill, 2017), p. 626. シルバ・イ・フィゲロアの言説も、第 6 章

本論文の第4章、第5章で検討していくように、ペルシア・インド世界は、ペルシア湾やマナール湾のアコヤ系真珠の「伝統的希求地」であった。これらの地域は、16世紀になると、南米カリブ海の真珠の「新興希求地」にもなったのである。アジア世界における真珠の希求形態は、顕示もあったが、アジアの中央集権国家の宝庫に収められる退蔵型の受容が一般的であった。

以上、「南米カリブ海真珠生産圏」の真珠の希求地、希求者を検討した。南米カリブ海の真珠は16世紀になると、中南米の先住民という従来の希求者を失ったが、代わって、ヨーロッパ社会、スペイン領アメリカの植民地社会、それにキリスト教会という「新興希求者」をもつことになった。さらに、ペルシアやインドのアジア世界も、新たな「新興希求地」となった。16世紀になると、「南米カリブ海真珠生産圏」のアコヤ系真珠の生産量は大きく増えるが、こうした「新興希求者／希求地」の登場により、また、彼らの顕示と退蔵を主とする希求形態によって、真珠は飽和状態にならず、16世紀を通じて希求され続ける物品になったのである。

第7節 真珠の流通

本節では、「南米カリブ海真珠生産圏」の真珠の流通を検討する。本論文は、真珠の流通を検討する際の手法として、「ハブ・アンド・スポーク交易」という概念を提唱している。この概念は、真珠の生産圏をひとつのハブと考え、そこを起点にどの方向に真珠が拡散したかを見るものである。本章では、ベネズエラとコロンビア沿岸部を含む「南米カリブ海真珠生産圏」をハブと考える。ここから南米カリブ海の真珠の向かう先は、前節で見たように、(1) ヨーロッパ社会、(2) スペイン領アメリカの植民地社会、(3) 同じくスペイン領アメリカのキリスト教会、(4) ヨーロッパを超えてのペルシア・インド世界である。スペイン領アメリカ内で留まる真珠も少なくなかったが、主要な目的地はヨーロッパであり、真珠の流通はむしろ直線的な動きをした。したがって、本節では、ヨーロッパ・ルートの考察では、その流通形態も検討する。

7.1 ヨーロッパ・ルート

「南米カリブ海真珠生産圏」からヨーロッパへの真珠の輸送は、主に四つの形態に分けられる。(1) 五分の一税の真珠のスペインへの輸送、(2) 真珠採取業者や商人による正規ルートでの輸出、(3) 密輸、過少申告などの非正規ルートでの輸出、(4) 海賊や奴隷商人による強奪や密輸である。

(1) 五分の一税の真珠の輸送

五分の一税は、スペインへの真珠の輸送としてもっともわかりやすい事例である。16世

で考察する。

紀前半、クバグア島で生産された真珠は、サントドミンゴやサンファンに送られ、そこで国王用の五分の一税の真珠が徴収されて、セビリャに送られた。このように、初期の真珠集散地は、サントドミンゴとサンファンであった。1527年以降は、クバグア島で五分の一税の真珠が徴収されるようになり、生産地から直接、スペインに送られるようになった²⁰⁴。

16世紀後半になると、真珠採取地は、コロンビア側のリオデラアチャとベネズエラ側のマルガリータ島やクマナなどに広がった。これらの採取地で生産された真珠の五分の一税は、現地で保管されており、指定された船隊が、適宜、採取地に寄港し、五分の一税を受け取ることで、セビリャまで運ばれた²⁰⁵。まさに「南米カリブ海真珠生産圏」をハブとする輸送であった。「南米カリブ海真珠生産圏」の流通の特徴は、各地の採取地の真珠を一括で集めるような大集散地が形成されたのではなく、それぞれの真珠採取地がその周辺の真珠を集める集散地となり、そこから真珠がスペインに輸送されたことであった。

たとえばリオデラアチャからの輸出の場合、五分の一税の真珠には、7カラットや8カラットの真珠も含まれていたことが、サンスの研究から明らかになっている²⁰⁶。7～8カラットの真珠は、直径10ミリ以上の真珠であり、アコヤ系真珠では滅多に出ない大きさである。これらはパナマクロチョウ真珠の大きさであり、リオデラアチャには、そうした太平洋の真珠も集められていたことがわかる。リオデラアチャからは、コロンビア・アンデス地方で産出されるエメラルドも輸出されており、この真珠採取地は、カリブ海のアコヤ系真珠ばかりでなく、パナマ・コロンビアの真珠や宝石の集散地でもあったことがわかる。

(2) 正規ルートでの輸出

「南米カリブ海真珠生産圏」の真珠は、採取量の五分の四がカノエーロやマジョルドモ、マジョルドモの主人などの真珠事業者の手元に残った。こうした真珠の多くは、彼ら自身で、あるいはセビリャの商人たちによって、セビリャに輸出された。

正規ルートでは、輸出業者が真珠の量や種類を登録し、スペインへ真珠を輸出した。サンスの研究によると、1550年代、1560年代、商人や個人業者によって数年に一度、真珠はまとめられて、ティエラフィルメからスペインに向けて送られている²⁰⁷。送付年によって、真珠の輸出量は異なっており、883マルコの時もあれば、4464マルコの時もあった。1561年は2009.5マルコであったが、その内、国王用の真珠は698マルコで、残りの1311.5マルコが荷受業者の真珠であった。荷受業者は14人存在し、100マルコ以上の真珠を荷受けする人物は5人存在した²⁰⁸。国王用の真珠698マルコは、全体の送付量の約35パーセントとなっている。

スペイン領アメリカの個人事業者やスペイン本土の商人たちによる真珠の輸出は、個々

²⁰⁴ Otte, *Las Perlas del Caribe*, p. 87.

²⁰⁵ Sanz, *Comercio de España con América*, vol. 2, pp. 37-43.

²⁰⁶ Sanz, p. 24.

²⁰⁷ Sanz, pp. 47-8.

²⁰⁸ Sanz, p. 42.

の採取地に寄港する船隊によって担われ、セビリャへ運ばれた。それゆえ、セビリャは、南米カリブ海のアコヤ系真珠及びパナマクロチョウ真珠のヨーロッパにおける集散地であり、真珠を欲するヨーロッパ商人が蝟集する真珠市場だった。ドイツ人、フランドル人、イタリア人などが活動的であった²⁰⁹。フッガー商会のセビリャ支店の台帳には、真珠の購入の記録がある²¹⁰。こうした商人によって、真珠はヨーロッパ各地にもたらされた。

ヨーロッパに輸送された真珠の一部は、ポルトガル領インドに赴任したり、渡航するヨーロッパ人によっても購入され、彼らによってペルシア・インド世界にまで運ばれた。カリブ海の真珠の流通ルートは、ヨーロッパを経て、アジア世界にまで達していた。

(3) 密輸、過少申告などの非正規ルートでの輸出

「南米カリブ海真珠生産圏」の真珠は、密輸、隠匿、過少申告などによっても、ヨーロッパにもたらされた。クバグア島の五分の一税の真珠の送付の規則の煩雑さは、密輸や隠匿が横行していたことを示している。南米真珠史の先行研究も、幾つかの事例を取り上げ、真珠の輸送の不正の実態を明らかにしてきた²¹¹。16世紀後半の真珠の密輸は、オランダ人、ヤン・ハイヘン・フォン・リンスホーテンが語っている²¹²。このエピソードは真珠史研究で名高いが、先行研究は数行で簡単にしか紹介していないため、ここでは詳しく見ておきたい²¹³。

リンスホーテンは、1583年にゴアの司教の書記としてポルトガル領インドに渡り、五年余りをゴアで暮らし、ゴア滞在の後半にはコショウ仲買人となってインドのコショウ取引を経験した人物である。彼の著作 *Itinerario*（邦訳名『東方案内記』）の中で、新世界からの真珠の密輸のエピソードを語っている。1589年、リンスホーテンはインドからの復路の途中、大西洋のポルトガル領の島、テルセイラ島に滞在していたが、その時、この島にスペイン領アメリカの銀を輸送しているスペイン船隊の旗艦と副旗艦が到着した。船隊の提督はアルバロ・フローレス・デ・キニオーネスという人物で、海上、全船隊、彼が到着するあらゆる場所、島々、陸地において司令官たるべき特権と全権を国王から託されていた。リンスホーテンによると、これらの船は総額5万ドゥカド以上の銀の延棒や銀貨を運んでおり、さらに未登録の真珠や黄金、宝石類も積んでいた。提督は個人の財産として6万ドゥカド相当の真珠を所持していた。彼は真珠をリンスホーテンたちに見せて、真珠を

²⁰⁹ Otte, *Las perlas del Caribe*, pp. 68-80; Sanz, *Commercio de España con América*, vol. 2, pp. 45-6.

²¹⁰ Donkin, *Beyond Price*, p. 327; 諸田實『フッガー家の時代』(有斐閣、1998年)、183~184頁。

²¹¹ Otte, pp. 51-2; Sanz, pp. 27-33.

²¹² Jan Huygen van Linschoten, *Itinerario: Voyage ofte schipvaert van Jan Huygen van Linschoten naer Oost ofte Portugaels Indien 1579-1592*, ed. H. Kern (The Hague: Martinus Nijhoff, 1955-7), vol. 3, pp. 119-20 (chap. 99); リンスホーテン (岩生成一他訳) 『東方案内記』(平凡社、1968年)、704~705頁。

²¹³ Donkin, *Beyond Price*, p. 327; Warsh, *American Baroque*, p. 112 も参照。

売却するか、あるいはスパイスか為替手形と交換したがった²¹⁴。

このエピソードは、スペイン船隊が運ぶ新世界の銀の総額よりも大きな総額の真珠が、密輸の形態で運ばれ、非公式な取引でヨーロッパにもたらされたことを示している。国王の信頼厚く、全権を委任された船隊の提督ですら、未登録で真珠を運んでいた。真珠の密輸、隠匿、過少申告などによるヨーロッパへの流入が一般的であったことを、明確に証明するエピソードである。さらにこの話から、テルセイラ島は、スペイン領アメリカからの船とポルトガル領インドの船が出会う場であったことも明らかになる。

(4) 海賊や奴隷商人による強奪や密輸

「南米カリブ海真珠生産圏」で生産された真珠は、ポルトガル、イギリス、フランス、オランダなどの奴隷商船や私掠船の船長や乗組員、カリブの海賊などによっても、ヨーロッパにもたらされた。南米真珠史の先行研究などは、こうした事例を数多く紹介している。

オッテは、クバグア島では、1541年にポルトガルの海賊が1000マルコの真珠を奪った事例や1549年にイギリスの海賊が「並の大粒真珠」(*perlas comunes*)が入った箱8個とトポ真珠が入った箱1個を奪っていった事例を紹介している²¹⁵。ドンキンは、クバグア島やマルガリータ島、ベラ岬やリオデラアチャなどの真珠採取地が、カリブの海賊や私掠船に狙われ、いかに大量の真珠が奪われたかについて、多くの事例を挙げている²¹⁶。

先述したように、1602年時のマルガリータ島では、黒人奴隷は一人180ペソで売却され、支払いは真珠でなされたが、スペインで真珠を売ると、12パーセント増しになった²¹⁷。スペイン人以外の奴隷商船や私掠船の船長、乗組員、カリブの海賊などにとっては、真珠は換金財であり、彼らによって、ヨーロッパに持ち込まれる真珠も少なくなかった。

7.2 スペイン領アメリカ・ルート

「南米カリブ海真珠生産圏」で生産された真珠が、スペイン領アメリカ内部でどのように流通したかに関しては、まだ十分な研究がなされていない。筆者の見解は、次のとおりである。

先述したように、16世紀初期には、クバグア島で採取された真珠はまずサントドミンゴやサンフアンに送られて、そこで五分の一税が徴収された。これらの植民地行政の中心地は、初期の真珠集散地であり、同時に、真珠の「新興希求地」でもあった。しかし、1520年代後半になると、採取された真珠や五分の一税の真珠は、採取地から直接スペインに送られるようになった。それによって、スペイン領アメリカの主要な都市には、真珠採取地

²¹⁴ リンスホーテンは、船隊は500万あまりの銀を運んでいること、銀100万は1000ドゥカドの10倍の価値があると述べている。これらの数字を計算すると、500万あまりの銀は5万ドゥカド以上となる。

²¹⁵ Otte, *Las perlas del Caribe*, pp. 80-1.

²¹⁶ Donkin, *Beyond Price*, pp. 328-9.

²¹⁷ Mosk, "Spanish Pearl-fishing Operations," p. 400.

から直接、真珠がもたらされたと推測できる。ヌエバ・エスパーニャ副王領の首都メキシコ市、ペルー副王領の首都リマなどの行政の中心地、カルタヘナやポトシなど、交易や鉱山業で栄える南米の主要都市などが「新興希求地」だった。こうした都市の有力者の代理人や仲買人、真珠の卸商などが、真珠採取地の真珠業者と関係を深め、業者から密かに真珠を購入したり、あるいは真珠業者に委任された人物が真珠を主要都市に運んだと考えられる。真珠は、強固な人的ネットワークによって輸送され、市場には出ず、人知れず「新興希求地」に運ばれていった。「南米カリブ海真珠生産圏」ではスペイン領アメリカ向けの真珠集散地は形成されず、商人たちの流通網にも乗らなかったと推測できる。

以上、見てきたように、16世紀のヨーロッパはカリブ海の真珠の「新興希求者」となったため、真珠は五分の一税の輸送、正規ルートや非正規ルートなどでの輸出など、さまざまな形態でヨーロッパにもたらされた。カリブ海のアコヤ系真珠は、大西洋貿易における南米の重要な輸出品であった。しかも、その輸出品は、スペイン領アメリカの個人事業者たちの水産業が生み出した一次産品であった。

こうした重要性にもかかわらず、大西洋貿易の商品としての真珠は、真珠史以外の分野では看過されてきた。ケンブリッジ・ラテンアメリカ史の大西洋貿易の論考で真珠が言及されていないのは、典型的な事例である²¹⁸。フランクは、交易品の動きによって、各リージョンの関係性を議論したが、カリブ海の特産品としては、糖蜜や砂糖などしか見ていない²¹⁹。しかし、最近では、真珠が貴重な商品、輸出品であったと認識している研究も出てきている²²⁰。今後、その認識がさらに進むはずである。

大西洋貿易の商品としての真珠を勘案して、16世紀の世界経済を見ると、カリブ海の真珠と奴隷化されたアフリカ人が交換され、ヨーロッパ、南米、アフリカを結ぶ大西洋三角貿易が真珠を媒介として早期に形成されていたことが明らかになる。アメリカ大陸は、銀を通してだけ、世界経済に組み込まれたのではなかった。真珠は、南米の重要な輸出品であり、ヨーロッパと接続していただけでなく、その一部はアフリカを回り、アジア世界にも到達した。カリブ海の真珠の流通の分析は、16世紀のグローバルな商品の動きも明らかにしたのである。

小括

本章では、アコヤ系真珠の数少ない大産地のひとつである南米カリブ海沖とその湾岸世界に焦点を当て、なぜこの海域・地域がスペイン人の対外拡張にとって重要であったのか、この海域で勃興した真珠採取業の生産、希求、流通はどのようなもので、何が起こったのかを考察した。

²¹⁸ Macleod, “Spain and America,” pp. 341-88.

²¹⁹ フランク（山下訳）『リオリエント』、152~153頁。

²²⁰ 関哲行他「大航海時代のスペイン」『大航海の時代』、25頁。

第1節では、16世紀のベネズエラ及びコロンビア沿岸部では、その海域に生息するアコヤ真珠貝を奇貨として、先住民が真珠を採取する「南米カリブ海真珠生産圏」が形成されていたことを明らかにした。さらに、当時のスペイン人たちが使用する *aljofar* という語が、カリブ海のアコヤ系真珠に該当することも確認した。

第2節では、初期スペイン人と「南米カリブ海真珠生産圏」の係わりを分析した。本章は、まず、真珠はきわめて高値であったことを明らかにした。それによって、16世紀のスペイン人には、真珠ゆえの航海、真珠ゆえの征服活動、真珠による致富への思いがあり、それらが航海時代を促進する大きな要因のひとつになったことも解明した。16世紀の人々が求めたのは、金とスパイスではなかったのである。「南米カリブ海真珠生産圏」は、アコヤ系真珠の採取という先住民の漁撈文化があったがゆえに、経済的重要性、地政学的重要性があったのである。

第3節から第5節では真珠の生産面を考察した。第3節では、「南米カリブ海真珠生産圏」では、スペイン人の真珠採取業という水産業が勃興し、その採取地が変遷したことを概観し、真珠ゆえの入植活動、真珠ゆえの経済活動があったことを解明した。「南米カリブ海真珠生産圏」の真珠採取業は、16世紀前半のスペイン領アメリカの富の源泉であり、スペイン国王の五分の一税の大きな収入源であり、その水産業は国家の強い介入がある水産業であったことを明らかにした。

第4節では、生産者に焦点を当てた。「南米カリブ海真珠生産圏」の真珠採取業は、初期投資が少なくて済み、多くのスペイン人個人事業者を輩出したことを明らかにした。従来のラテンアメリカ史では砂糖栽培などの農業経営に関心が集中しているが、本節及び前節の分析は、16世紀のラテンアメリカ史に、製糖業より早い時期に経済的に成功した水産業があった事実を加えることになった。

第5節では、潜水労働者の徴発問題を考察した。本節の課題は、ラス・カサスの『インディアス史』と「インディアス新法」に着目し、その言説を分析することであった。それによって、本節は、(1)「南米カリブ海真珠生産圏」の真珠採取業は、「先住民奴隷制水産業」から「黒人奴隷制水産業」に変遷したこと、(2)バハマ諸島の先住民が、真珠採取の潜水労働で完全に絶滅したこと、(3)スペイン王室が「黒人奴隷制水産業」を推し進めたことを論証した。本節での研究は、ラス・カサスの言説をプロパガンダとして一蹴する先行研究とは異なるスタンスに立つものである。真珠採取によるバハマ諸島の先住民絶滅の事実は、疫病で先住民が「全滅」したと主張する説に再考を促す。また、アフリカ人奴隷と真珠採取業との係わりは、農業プランテーションばかりで語られるラテンアメリカの奴隷制度史に、水産業の奴隷の使役の事実を加えるものである。

第6節と第7節では、「南米カリブ海真珠生産圏」の真珠の希求と流通を考察した。ヨーロッパは、真珠の「新興希求者」であり、真珠は大西洋貿易の重要な商品であり、一部の真珠はアジア世界まで到達することになった。

このように、南米カリブ海の真珠は、16世紀初期のスペイン人の征服活動や入植活動を

促進し、真珠採取業という利益の多い水産業をスペイン人に与える一方、新世界のひとつの民族を消滅させ、「黒人奴隷制水産業」を発展させて、アメリカ先住民とアフリカ黒人の人口動態に大きな変化をもたらした。真珠史の先行研究は、16世紀の真珠の意義を過少評価してきたが、コモディティ・チェーン分析で生産、希求、流通を見ていくと、真珠が、16世紀の歴史に与えた影響はきわめて大きかったことが明らかになる。こうした歴史の展開は、商業的に価値ある真珠を生み出す割合が最も高いアコヤ真珠貝が生息し、真珠採取業の採算が合う海域だからこそ起こった、激しく、すさまじい歴史であった。「南米カリブ海真珠生産圏」は、なぜヨーロッパ人にとって重要だったのか。それは、アコヤ系真珠の採れる世界で数少ない海域・地域であり、経済的重要性、地政学的重要性があったからであった。南米カリブ海の真珠は、先住民社会に影響を与えながら、大航海時代を進展させることになったのである。

第4章 ペルシア湾真珠生産圏——真珠の産地の地政学的重要性

はじめに

1498年、バスコ・ダ・ガマがインドのカリカットに到達すると、インド洋海域世界における大航海時代の幕が開いた。ポルトガル勢力は、当初はマラバール海岸の港湾都市コーチンを「ポルトガル領インド」(*Estado da Índia*)の首都として、インド洋海域世界における商業活動と軍事活動に乗り出していった。そうした中、ポルトガルが早い時期から支配下に置こうとした海域・地域のひとつが、ペルシア湾岸世界であった。ポルトガル軍人のアフォンソ・デ・アルブケルケは早くも1507年には同湾のホルムズ王国を征服した。一時、その支配を手放すが、1515年に再びホルムズを征服し、その後、バハレーンなどのペルシア湾島嶼部や沿岸部をポルトガル領インドの植民地体制に組み入れていった。ペルシア湾は、古来名高いアコヤ系真珠の大産地である。

本章の目的は、16世紀のポルトガル勢力は、なぜペルシア湾世界に進出していったのか、なぜこれらの海域や島嶼部が彼らにとって重要だったのか、彼らはペルシア湾世界からどのように富を引き出したのかを明らかにすることである。さらに、真珠という商品が、16世紀のペルシア湾世界に何をもたらし、何をどう変えたのかも検討する。本章では、まずポルトガル来航以前にペルシア湾では「真珠生産圏」が形成されていたかを検討し、16世紀初めのポルトガル人にとっての真珠の意味、ポルトガル人による「ペルシア湾真珠生産圏」への進出経緯、彼らの富の引き出し方を考察する。その後、コモディティ・チェーン分析を使い、真珠採取業の生産、希求、流通の実態をそれぞれ解明する。本章では特に、真珠集散地の経済的機能、その地を支配する意味、真珠の希求と流通における国際性などを検討する。

これまでポルトガル対外拡張史の先行研究は、ペルシア湾が真珠が採れる海域であること、そうした海域では採取地と集散地が経済的に密接に結びついて広域経済圏を形成していることを認識してこなかった。筆者は、海域、採取地、集散地を個々でとらえるのではなく、その有機的つながりを認識することで、ポルトガル勢力の対外拡張の意図や海域支配の意味が明らかになると考える。

また、ポルトガル対外拡張史の先行研究は、インド洋海域世界におけるポルトガルの活動の成果をスパイスの入手とその貿易の独占、及び「インド航路」(*carreira da Índia*)による遠距離交易で運んだ物品の量などの観点から考察してきた。その結果、ポルトガルはスパイス貿易では成果を出せず、インド洋海域世界の商取引では活躍できなかったと結論づけてきた。こうした議論で抜けているのは、ポルトガルが獲得した真珠という換金商品の意義である。本章は、ペルシア湾の代表的商品である真珠の意味、及びそのコモディティ・チェーンの各側面を検討することで、従来の見解とは異なる16世紀のインド洋海域世界の歴史像を提示する。

0.1 先行研究

ペルシア湾は、7000年以上に及ぶ真珠採取の歴史がある¹。その長い歴史の中でこれまでほとんど研究されてこなかったのが、16世紀のポルトガル時代である。G. F. クンツとC. H. スティーヴンソンの *The Book of the Pearl* や R. A. ドンキンの *Beyond Price* は、長期にわたるアラブ・ペルシア世界の真珠史を扱っているが、ポルトガル時代は十分論じていない²。ただ、近年、この時代についての研究が行われるようになり、次のふたつが知られている。ひとつは、A. P. フェルナンデスの “The Portuguese Cartazes System and the ‘Magumbayas’ on Pearl Fishing in the Gulf” である³。この論考は、16世紀から17世紀のポルトガルがペルシア湾の船舶に一定の税を課したカルタス制度、及びポルトガルが真珠採取船に課した真珠採取税 (*Magumbayas*) を論じたものである。もうひとつは、R. カーターの *Sea of Pearls* である。これはペルシア湾の7000年以上に及ぶ真珠の通史的研究で、その中でポルトガル時代が検討されている⁴。カーターの研究は、ポルトガル時代の海域支配、海洋帝国としてのホルムズ王国、真珠採取業からのポルトガルの収益、新世界の真珠の存在などに言及しており、本論文の関心と共通する箇所がある。

これらの先行研究には五つの問題点がある。第一に、カルタス制度、通行税、真珠採取税を具体的に定義せず、その関係性を曖昧なまま議論していることである⁵。第二に、ペルシア湾を代表するアコヤ系真珠の生態系の特徴に無関心である上、*aljoфар* を *seed pearls* と解釈し、その内容に着目していないことである。第三に、フェルナンデスやカーターが真珠採取の状況として描く日帰りの真珠漁や真珠貝の天日干しの光景は、ペルシア湾ではなくインド・マナール湾の光景であることである。彼らの真珠採取の情景の記述には地域的混同がある。第四に、フェルナンデスの研究は記述の典拠が少ない上、参照している一次史料も少なく、その考察は表面的であるが、カーターの研究は、そうしたフェルナンデスの論考に依拠して書かれているところが少なくなく、フェルナンデスの研究同様、論拠が不十分なことである。第五に、ペルシア湾の真珠の希求者としてはヨーロッパしか見ておらず、真珠の流通や希求の考察は十分ではないことである。こうしたことから、これらの研究だけで16世紀のペルシア湾の真珠史が解明されたとは言い難く、真珠のコモディテ

¹ Robert Carter, *Sea of Pearls: Seven Thousand Years of the Industry that Shaped the Gulf* (London: Arabian, 2012).

² George Frederick Kunz and Charles Hugh Stevenson, *The Book of the Pearl: Its History, Art, Science and Industry* (1908; New York: Dover Publications, 1993), pp. 85-99, 139-44; R. A. Donkin, *Beyond Price: Pearls and Pearl-Fishing* (Philadelphia: American Philosophical Society, 1998), pp. 105-38.

³ Agnelo Paulo Fernandes, “The Portuguese Cartazes System and the ‘Magumbayas’ on Pearl Fishing in the Gulf,” *Liwa*, vol. 1, no. 1 (June 2009), pp. 12-24.

⁴ Carter, *Sea of Pearls*, pp. 69-89. カーターのもうひとつの論考 “The History and Prehistory of Pearl in the Persian Gulf,” *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, vol. 48, part 2 (2005), pp. 139-209 は、ポルトガル時代をほとんど議論していない。

⁵ カルタス制度については、第3節で考察する。

イ・チェーンの各側面をさらに研究していく必要がある。

16世紀のペルシア湾の真珠史研究は、始まったばかりである。ただ18世紀以降のペルシア湾の真珠と真珠採取に関しては、数多くの研究書や研究論文、政府報告書などが存在する⁶。16世紀の真珠史研究が進まなかった理由のひとつは、ポルトガル領インド研究そのものの史料制約である。1755年のリスボン地震で多くの公文書が喪失したが、16世紀の地誌や旅行記、さらに一部の政府報告書などは残っており、これらの史料は活用できる。二番目の理由は、フェルナンデスやカーターの研究にも見られるが、ポルトガル語の *aljofar* の解釈の難しさによる *aljofar* の記述の無視や看過である。こうしたことによって、16世紀の真珠に関する知見は十分蓄積されてこなかった。

一方、ポルトガル対外拡張史、インド洋海域史、近代世界システム論、グローバル経済史などの研究領域では、海域を交易や運輸など海上交通の場としてしか見ておらず、ペルシア湾が真珠という富を生み出す海域であったという事実を見落としてきた⁷。したがって、こうした研究では、ペルシア湾沿岸部の真珠の採取地と集散地が結びついて、広域経済圏を形成していたのではないかという問題意識は持たれてこなかった⁸。ペルシア湾世界は、ポルトガルの征服活動がなされ、アジアの政治勢力との抗争があった海域・地域であるが、

⁶ 18世紀以降のペルシア湾の真珠と真珠採取に関しては次の文献が存在する。J. G. Lorimer, *Gazetteer of the Persian Gulf, 'Omān, and Central Arabia*, 6 vols. (1915; Farnborough: Gregg, 1970); チャールズ D. ベルグレイヴ (二海志摩訳) 『ペルシア湾の真珠——近代バーレーンの人と文化』(雄山閣、2006年、原著1960年); Willem Floor, “A Report on Pearl Fishing in the Persian Gulf in 1757,” *Persica*, vol. 10 (1982), pp. 209-22; Willem Floor, “The Bahrain Project of 1754,” *Persica*, vol. 11 (1984), pp. 129-48; 池ノ上宏 『アラビアの真珠採り』イケテック、1987年; 保坂修司 「真珠の海 (1・2) ——石油以前のペルシア湾」 『イスラム科学研究』第4号 (2008年)、第6号 (2010年); Robert Carter, “Pearl Fishing, Migration, and Globalization in the Persian Gulf, Eighteenth to Twentieth Centuries,” pp. 232-62; Matthew S. Hopper, “Enslaved Africans and the Globalization of Arabian Gulf Pearling,” pp. 263-80.

⁷ ポルトガルの対外拡張の考察でペルシア湾の真珠の重要性を看過している研究は、次を参照。Niels Steensgaard, *Carracks, Caravans and Companies: The Structural Crisis in the European-Asian Trade in the Early 17th Century* (Lund: Studentlitteratur, 1973), pp. 154-208; I. ウォーラーステイン (川北稔訳) 『近代世界システム 1——農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立』(名古屋大学出版会、2013年、原著1974年)、371~378頁; M. N. Pearson, *The Portuguese in India* (Cambridge: Cambridge University Press, 1987); Sanjay Subrahmanyam, *The Portuguese Empire in Asia, 1500-1700* (London: Longman, 1993); Malyn Newitt, *A History of Portuguese Overseas Expansion, 1400-1668* (London: Routledge, 2005), pp. 88, 113; Willem Floor, *The Persian Gulf: A Political and Economic History of Five Port Cities 1500-1730* (Washington, D.C.: Mage Publishers, 2006); 岡美穂子 「一六世紀『大航海』の時代とアジア」 秋田茂編 『グローバル化の世界史』(ミネルヴァ書房、2019年)、71~119頁。

⁸ Ahmad al-Anani は、ホルムズにはバハレーンの真珠が流入していたことを指摘しているが、そうした認識を持つ研究者は多くはない。Ahmad al-Anani, “The Portuguese in Bahrain and its Environs during the 16th and 17th Centuries,” in *Bahrain through the Ages: The History*, ed. Abdullah bin Khalid al-Khalifa and Michael Rice (London: Kegan Paul International, 1993), p. 48.

その対外拡張の多くの事象が、真珠抜きで議論されてきた。

さらに、先行研究は、ポルトガル海洋帝国のアジアでの商業活動の成果を、スパイス輸入の実績やアメリカ銀のアジアへの輸出、紅海封鎖の失敗、レヴァント貿易の復活などの観点から否定的に評価してきた。先行研究は、ポルトガルがスパイスを十分購入できなかったのは、アジア世界で売れる物がなく、アジア域内交易に参加できなかったからである、アメリカ銀を得て、ようやく交易に参入できたと解釈した⁹。ホルムズからインドへの銀の大量輸出の事実などによって、ホルムズは輸入超過に陥っていたと議論され、ホルムズの役割も重要視されてこなかった¹⁰。16世紀のホルムズの歴史的意味の検討、及びポルトガルの商業活動の考察には換金性のある真珠の存在を加えるべきである。

0.2 本章の研究手法と史料

本章では、ポルトガルの対外拡張の目的はスパイスの獲得だけではなかったことを認識し、商品としての真珠、及び真珠の海域、採取地、集散地が結びついた広域経済圏の機能に焦点を当てることで、なぜポルトガルがこの海域・地域に進出したのかを解明する。第3章同様、真珠の生態系的事実を取り入れ、*aljofar* を正しく解釈することで、議論を進める。真珠のコモディティ・チェーンの生産、希求、流通の実態を検討することで、真珠の採れる海域・沿岸部の歴史的意味、アジア域内交易における真珠取引の実態を明らかにし、16世紀のポルトガルの役割の過小評価の見直しを図る。

以上の目的のために、本章では、16世紀・17世紀を中心とするポルトガル国王による訓令 (*regimento*)、ポルトガル総督、軍人、官吏などによる書簡、公式年代記、公式報告書、当時のインドに滞在したポルトガル人や他のヨーロッパ旅行者や商人による地誌、旅行記、

⁹ コシヨウなどのスパイス交易やアメリカ銀のアジアへの輸出の観点からポルトガルの活動を過小評価している研究は少なくない。次の文献を参照。Steensgaard, *Carracks, Caravans and Companies*, pp. 154-208; A. R. Disney, *Twilight of the Pepper Empire* (1978; Manohar: New Delhi, 2010); C. H. H. Wake, "The Changing Pattern of Europe's Pepper and Spice Imports, ca 1400-1700," *The Journal of European Economic History*, vol. 8 (1979), pp. 361-403; K. N. Chaudhuri, "European Trade with India," in *The Cambridge Economic History of India*, edited by T. Raychaudhuri and Irfan Habib (Cambridge: Cambridge University Press, 1982), vol. 1, pp. 382-407; Ashin Das Gupta, "Indian Merchants and the Trade in the Indian Ocean," in *The Cambridge Economic History of India*, vol. 1, pp. 407-33; Pearson, *The Portuguese in India*, pp. 40-9; M. N. Pearson ed. *Spices in the Indian Ocean World* (Variorum: Aldershot, 1996); アンドレ・グンダー・フランク (山下範久訳) 『リオリエント——アジア時代のグローバル・エコノミー』(藤原書店、2000年、原著1998年)、129頁、161~163頁、246~247頁、313~316頁; Newitt, *A History of Portuguese Overseas Expansion*, pp. 129-30, 157-8, 162-5;

¹⁰ Sanjay Subrahmanyam, "Precious Metal Flows and Prices in Western and Southern Asia, 1500-1750: Some Comparative and Conjunctural Aspects," in *Money and the Market in India 1100-1700*, ed. Sanjay Subrahmanyam (Bombay: Oxford University Press, 1994), pp. 191, 196; Mohammad Bagher Vosoughi, "The Kings of Hormuz: From the Beginning until the Arrival of the Portuguese," in *The Persian Gulf in History*, ed. Lawrence G. Potter (New York: Palgrave Macmillan, 2009), p. 98.

報告書などの一次史料を使用する。

具体的には、ポルトガル領インドの初代総督フランシスコ・デ・アルメイダへの訓令、アフォンソ・デ・アルブケルケの報告書、ポルトガル人クロニスタのジョアン・デ・バロスの年代記 *Da Asia de João de Barros* (邦訳名『アジア史』)、ポルトガルの商務官シモン・ボテリオの公式報告書 *O Tombo do Estado da Índia* 『ポルトガル領インドの公文書』、1582年のポルトガルの行政文書 *Livro das cidades, e fortalezas que a coroa de Portugal tem nas partes da Índia, e das capitánias, e mais cargos que nelas ha, e da importância delles* (『ポルトガル王室がインドの各地に所有している各都市、各要塞、及びそれらの長官職、及びその他の官職、及びそれらの経費に関する報告書』、以下『ポルトガル王室の各都市、各要塞に関する報告書』と表記) などである¹¹。これらの一次史料は、ポルトガル対外拡張史やインド洋海域史研究では知られているが、真珠史研究には活用されていない。

旅行者や商人などによる一次史料としては、ロドヴィコ・デ・ヴァルテマ、トメ・ピレス、ドゥアルテ・バルボザ、ドミンゴス・パイス、フェルナン・ヌーネスなどの16世紀初めのポルトガル人の地誌や旅行記、16世紀半ばのガルシア・ダ・オルタの書物、16世紀後半のオランダ人、ヤン・ハイヘン・フォン・リンスホーテンの地誌、17世紀前半のユダヤ系ポルトガル人ペドロ・テイシェイラとフランス人フランソワ・ピラール、ペルシア使節団のスペイン人大使ガルシア・デ・シルバ・イ・フィゲロア、17世紀半ばのフランス人宝石商ジャン・バプティス・タヴェルニエやジャン・シャルダンなどによる旅行記や地誌を使用する¹²。これらの文献は、その史料価値には定評があり、その多くが早くから英訳さ

¹¹ “Regimento do capitão-mor D. Francisco de Almeida,” in *Documentos sobre os portugueses em Moçambique e na África central, 1497-1840*, ed. National Archives of Rhodesia and Nyasaland, and Centro de Estudos Históricos Ultramarinos (Lisbon: National Archives of Rhodesia and Nyasaland, and Centro de Estudos Históricos Ultramarinos, 1962-1989), vol. 1, pp. 156-261; Afonso de Albuquerque, *Cartas de Afonso de Albuquerque*, ed. Raymundo Antonio de Bulhão Pato, 7 vols. (1884-1935; Nendeln: Kraus Reprint, 1976); João de Barros, *Segunda década da Asia de João de Barros*.

<https://books.google.co.jp/books?id=eP4p3irF76EC&pg=PA229-IA1&dq=barros+segunda+decada&hl=ja&sa=X&ved=0ahUKEwj5M3e3IXqAhXI62EKHfXNDxYQ6AEIKTAA#v=onepage&q=barros%20segunda%20decada&f=false> (2020年6月16日閲覧); ジョアン・デ・バロス (生田滋他訳) 『アジア史』全2巻、(岩波書店、1980~1981年); Simão Botelho, “Tombo do Estado da Índia,” in *Subsidios para a historia da Índia portuguesa*, ed. Rodrigo José de Lima Felner (1868. Nendeln: Kraus Reprint, 1976), pp. 43-259; “Livro das cidades, e fortalezas que a coroa de Portugal tem nas partes da Índia, e das capitánias, e mais cargos que nelas ha, e da importância delles,” ed. Francisco Paulo Mendes da Luz, *Stvdia*, vol. 6 (July, 1960), pp. 1-107.

¹² Lodovico de Varthema, *The Travels of Ludovico di Varthema in Egypt, Syria, Arabia Deserta and Arabia Felix, in Persia, India, and Ethiopia, A.D. 1503 to 1508*, trans. John Winter Jones, and ed. George Percy Badger (London: Hakluyt Society, 1863); Tomé Pires, *A suma oriental de Tomé Pires* (Coimbra: Imprensa de Coimbra, 1978); トメ・ピレス (生田滋他訳) 『東方諸国記』、岩波書店、1966年; Duarte Barbosa, *Livro do que viu e ouviu no oriente* (Lisbon: Publicações Alfa, 1989); Duarte Barbosa, *The Book of Duarte*

れてきた一次史料である。日本語訳も少なくない。真珠史研究では、ドンキンなどがこれらの史料の英訳本を参照してきた。ただ、英訳では *aljofar* が *seed pearl* と訳され、バルボザやオルタなどの英訳本には誤訳が少なくない。邦訳では *aljofar* は「真珠母」と訳されてきた。本章ではポルトガル語原文にあたり、真珠記事を正しく理解することで、16世紀のペルシア湾における真珠世界を構築する。

0.3 本章の構成

- 第1節： 16世紀初期の「ペルシア湾真珠生産圏」
- 第2節： ポルトガルの「ペルシア湾真珠生産圏」への進出
- 第3節： 「ペルシア湾真珠生産圏」支配の意味
- 第4節： 「ペルシア湾真珠生産圏」の真珠採取
- 第5節： 真珠の希求地、希求者
- 第6節： 真珠の流通
- 第7節： 先行研究の通説の再考

第1節 16世紀初期の「ペルシア湾真珠生産圏」

本節では、16世紀初期のペルシア湾岸世界における真珠の漁場、真珠採取地、その集散地の状況について考察する。その際、真珠採取地や集散地を支配した政治勢力やその歴史的経緯なども含め考察し、16世紀初期にこの地域・海域で「真珠生産圏」が形成されていたかどうかを検証する。本章で使用するピレスやバルボザの文献は、ポルトガルのペルシ

Barbosa: An Account of the Countries Bordering on the Indian Ocean and their Inhabitants, trans. and ed. Mansel Longworth Dames, 2 vols. (1918-1921; Nendeln: Kraus Reprint, 1967); ドミンゴス・パイス／フェルナン・ヌーネス (浜口乃二雄訳) 「ヴィジャヤナガル王国誌」『ムガル帝国誌・ヴィジャヤナガル王国誌』(岩波書店、1984年); Garcia da Orta, *Colóquios dos simples e drogas da Índia*, ed. Conde de Ficalho (1891; Lisbon: Imprensa Nacional-Casa da Moeda, 1987); Jan Huygen van Linschoten, *Itinerario: Voyage ofte schipvaert van Jan Huygen van Linschoten naer Oost ofte Portugaels Indien 1579-1592*, ed. H. Kern, 3 vols. (The Hague: Martinus Nijhoff, 1955-7); *The Voyage of John Huyghen Van Linschoten to the East Indies*, ed. Arthur Coke Burnell and P. A. Tiele, 2 vols. (1935; New Delhi: Munshiram Manoharlal, 1997); リンスホーテン (岩成成一他訳) 『東方案内記』(岩波書店、1968年); François Pyrard, *The Voyage of Francois Pyrard of Laval, to the East Indies, the Maldives, the Moluccas and Brazil*, trans. Albert Gray, 4 vols. (1888; New York: Cambridge University Press, 2010); Pedro Teixeira, *The Travels of Pedro Teixeira: With his "Kings of Harmuz," and Extracts from his "Kings of Persia,"* trans. and ed. William F. Sinclair, with further notes by Donald Ferguson (1902; Nendeln: Kraus Reprint, 1967); García de Silva y Figueroa, *The Commentaries of D. García de Silva y Figueroa on his Embassy to Shah 'Abbās I of Persia on behalf of Philip III, King of Spain*, trans. Jeffrey S. Turley and eds. Jeffrey S. Turley and George Bryan Souza (Leiden: Brill, 2017); Jean-Baptiste Tavernier, *Travels in India*, trans. V. Ball, 2 vols. (1676; Lahore: Al-Biruni, 1976); ジャン・シャルダン (岡田直次訳注) 『ペルシア見聞記』(平凡社、1997年); ジャン・シャルダン (佐々木康之他訳) 『ペルシア紀行』(岩波書店、1993年)。

地図1 ペルシア湾島嶼部と沿岸部



ア湾進出後に書かれたものであるが、その内容から、ポルトガル進出以前の真珠の生産や流通の実態も記していると考えられる¹³。

1.1 真珠の漁場

ペルシア湾内の海底には、ピンクターダ属のアコヤ真珠貝（*Pinctada fucata/martensii/radiata/imbricata* sp.）が、古来、優占種として生息しており、今日でも生息している。アコヤ真珠貝の生息域よりもさらに深い海底には、クロチョウガイ（*Pinctada margaritifera*）が、数は多くはないが、生息している¹⁴。これらの海産真珠貝が生息しているおかげで、環ペルシア湾岸では早くから真珠採取が行われてきた¹⁵。アコヤ

¹³ ポルトガル来航前夜の真珠採取地の状況については、Carter, *Sea of Pearls*, pp. 61-69 を参照。カーターの研究には「真珠生産圏」の概念がなく、*aljofar* は *seed pearls* として解釈されている。

¹⁴ ユベール・バリ（木下哲夫訳）『パール——海の宝石展』図録（ブックエンド、2012年）、54~57頁。

¹⁵ 古代からのペルシア湾の真珠史については、次の文献を参照。Donkin, *Beyond Price*, pp. 42-52, 105-38; Carter, “The History and Prehistory of Pearling in the Persian Gulf”;

系真珠は、その量の多さ、質の高さから、ペルシア湾を代表する特産品であった。クロチヨウ真珠は滅多に採れないが、稀に大粒真珠が採れると、献上用の真珠となった。

ペルシア湾における真珠漁場の分布の傾向は、イラン側よりもアラビア側、アラビア側では北部よりも南部の海域に良好な漁場が集中していることである¹⁶。20世紀初めの J. G. ロリマーの地名辞典によると、バハレーン付近からトルシアル海岸にいたるアラビア側南部の海域には、名前がつけられた 217 の漁場があった。アラビア側北部の海域には 55 の漁場、イラン側には 32 の漁場があった。合計すると、304 の漁場があったことになる¹⁷。

12 世紀のシチリアの地理学者イドリースィーは、ペルシア湾のよく知られた真珠漁場として約 300 の数を挙げている¹⁸。漁場の数は 20 世紀初めの 304 とほとんど同じである。真珠の漁場は枯渇や新たな発見により変化があったはずだが、それでも時代を超えてペルシア湾には 300 程度の真珠漁場が存在し続けていたことを示している。

1.2 真珠採取地

(1) バハレーン島

ペルシア湾で、古来、アコヤ系真珠の採取地としてその名を轟かせてきたのは、バハレーン島であった¹⁹。バハレーン島の近海は、豊饒な真珠漁場に恵まれていた。同島では前 3000 年紀または前 2000 年紀と推定される貝塚が幾つも発見されており、出土するほとんどの貝が *Pinctada radiata* 種となっている²⁰。このことは、バハレーン島ではその頃にはアコヤ真珠貝やその真珠が採取されていたことを示している。

真珠採取地は、人が素潜りできる程度に海が浅いこと、豊饒な真珠漁場への近さなどの地理的条件に左右されるため、その場所はほとんど変わることがない。実際、バハレーンは今日においても、天然のアコヤ系真珠の採取を行っている国である。

16 世紀初めのピレスは、バハレーン島では「最良の真珠」(*o melhor aljofar*) が採取され、ホルムズの「重要な商品」(*grande mercadoria*) となっていること、また、それは大量にあって「より白く、丸い」(*mais alvo e redondo*) ことを記している²¹。バルボザも、

Carter, *Sea of Pearls*, p. 3-69; 山田篤美『真珠の世界史——富と野望の五千年』(中央公論新社、2013 年)、47~53 頁、67~68 頁。

¹⁶ 池ノ上宏『アラビアの真珠採り』、65~67 頁。

¹⁷ Lorimer, *Gazetteer of the Persian Gulf*, vol. 3, pp. 2262~80.

¹⁸ Donkin, *Beyond Price*, p. 124. ドンキンはイドリースィーの数字が、真珠漁場か真珠採取地かわからないと述べているが、筆者は 20 世紀初めの数との類似から真珠漁場と考える。

¹⁹ Donkin, *Beyond Price*, pp. 124-5; Carter, “The History and Prehistory of Pearl in the Persian Gulf,” p. 146. バハレーンについては、Abdullah bin Khalid al-Khalifa and Michael Rice eds., *Bahrain through the Ages: The History* (London: Kegan Paul International, 1993); *Encyclopaedia of Islam*, new ed., s. v. “al-Baḥrayn” by G. Rentz and W. E. Mulligan を参照。

²⁰ D. T. Potts, *The Arabian Gulf in Antiquity* (Oxford: Clarendon Press, 1990), vol. 1, pp. 207-8; Donkin, *Beyond Price*, pp. 45-6.

²¹ Pires, *A suma oriental de Tomé Pires*, p. 149; ピレス (生田他訳)『東方諸国記』、71~72

その紀行文において、バハレーン島の海域には「多量の真珠と多量の大粒真珠」(*muito aljófar e muitas pérolas grandes*)があり、同島の住民は真珠採取を行って、多くの利益を得ていると述べ、さらに、ホルムズ王も、その真珠採取から収入を得、バハレーン島にも税を課して、多額の利益を得ていると続けている²²。

バハレーンで採れる主要な真珠はアコヤ系真珠であること、アコヤ系真珠は白くて丸いことを勘案すると、ピレスの述べる *aljofar* はアコヤ系真珠を指していることが確認できる。このピレスの記述から、バハレーンはアコヤ系真珠が大量に採れる採取地であること、ホルムズはその真珠の集散地となっていることが判明し、両者の関連性が明確になる。バルボザも、バハレーンが真珠の採取地で、ホルムズとの係わりを述べている。バルボザの述べる *pérolas grandes* は、主に大粒のアコヤ系真珠で、その中にクロチョウ真珠も混じっていたと推測できる。

バハレーン島は真珠採取地として名高かったため、早くからペルシア湾の島嶼部勢力、イラン本土、メソポタミア、アラビア半島などを基盤とする政治勢力の争奪的となってきた。14世紀前半にホルムズ王国が強大になると、バハレーンはその支配下に置かれるようになった。15世紀後半以降、バハレーンはアラビア半島東岸のハサー王国(別名 *Jabrid*)の支配下に置かれるようになったが、その後、ホルムズ王国が奪回に成功した。ただ、ホルムズ王国はバハレーン沖の真珠採取権はハサー王国に与えており、彼らから金貨5000シェラフィンの貢納金を受け取っていた²³。

(2) カティーフ

カティーフ(*Qatīf*)は、アラビア半島東海岸のハサー地方に位置する真珠採取地である²⁴。真珠採取地としてのカティーフの名前はすでに12世紀に知られていた²⁵。イブン・バットゥータも、真珠採取船に乗り込むカティーフの商人に言及している²⁶。15世紀半ば以降、

頁。

²² Barbosa, *Livro do que viu e ouviu no oriente*, p. 24; Barbosa, *The Book of Duarte Barbosa*, vol. 1, pp. 81-2.

²³ Floor, *The Persian Gulf*, p. 41. シェラフィンは、ホルムズ王国が鑄造していた金貨で、16世紀のインド洋交易の基軸通貨であった。インド洋海域史研究では、シェラフィンは銀貨と見なされることが多いが、16世紀中葉までは金貨である。1568年にコーチンでシェイラフィン銀貨が鑄造され、それ以降、銀のシェラフィンも流通するようになった。G. P. S. H. de Silva, *History of Coins and Currency in Sri Lanka* (Colombo: Central Bank of Sri Lanka, 2000), pp. 71, 80 を参照。シェラフィンは金貨であることは、Barros, *Segunda década da Asia*, livro 2, cap. 4, fols. 33r., 34r.; バロス(生田他訳)『アジア史(一)』、145頁、151頁を参照。

²⁴ Donkin, *Beyond Price*, pp. 124-5; Carter, “The History and Prehistory of Pearling in the Persian Gulf,” p. 146.

²⁵ *Encyclopaedia of Islam*, new ed., s. vv. “al-Qatīf” by G. Rentz, “Djabrid” by G. Rentz; Donkin, *Beyond Price*, pp. 124, 129.

²⁶ イブン・バットゥータ(家島彦一訳)『大旅行記(3)』(平凡社、1998年)、188~189頁。

カティーフは、ハサー王国の支配下に置かれていた²⁷。

(3) ジュルファル

ジュルファル(*Jurfar*)は、ホルムズ海峡に突き出たムサンダム半島西海岸の港町である。ジュルファルも、すでに12世紀には真珠採取地として知られていた²⁸。16世紀初めには、ホルムズ王国の支配下に入っていた。バルボザは、ジュルファルでは「多量の真珠と多量の大粒真珠」(*muito aljôfar e muitas pérolas grandes*)の採取が盛んであること、ホルムズ商人が買付に来ること、この地の真珠の取引は、ホルムズ王の大きな収入になっていることなどを記している²⁹。バロスによると、ホルムズはジュルファルの町から金貨7500シェラフィンの税収を得ていた。また、ジュルファル付近の海域の「真珠採取船」(*barcas de pescaria de aljofre*)にも課税しており、真珠採取船が直接ホルムズに行って支払う税額は金貨1500シェラフィンであった³⁰。こうした記述から、ホルムズは真珠の集散地ジュルファルを支配下に置き、この地の真珠採取や真珠取引から利益を得ていたことがわかる。

1.3 真珠集散地

(1) ホルムズ

16世紀初め、ペルシア湾の真珠集散地として繁栄していたのが、ホルムズである³¹。バルボザは、バハレーンとジュルファルの箇所でも述べた同じ話をホルムズの箇所でも繰り返しており、ホルムズにはバハレーンやジュルファルから「多量の真珠と大粒真珠」(*muito aljôfar e pérolas grandes*)が来ると語っている³²。

ホルムズ王国はもともとイラン本土のミナブ河口を拠点としていたペルシア系王国であった。1296年頃にその拠点を現在のホルムズ島に移動した。その後、ホルムズ王国は強大な海軍力によってペルシア湾島嶼部と沿岸部を支配下におさめ、キーシュ島勢力に代わってペルシア湾の海上覇権を握るようになった³³。16世紀初めにはミナブ河口を中心とする

²⁷ Barbosa, *The Book of Duarte Barbosa*, vol. 1, pp. 76-7 (note 1).

²⁸ 中世のジュルファルとその真珠採取については、佐々木達夫「ペルシア湾と砂漠を結ぶ港町」歴史学研究会編『港町と海域世界』(青木書店、2005年)、269~296頁を参照。Donkin, *Beyond Price*, pp. 126-7; Carter, "The History and Prehistory of Pearling in the Persian Gulf," p. 146も参照。

²⁹ Varthema, *The Travels of Ludovico di Varthema*, p. 93 (note 1); Barbosa, *Livro do que viu e ouviu no oriente*, p. 22; Barbosa, *The Book of Duarte Barbosa*, vol. 1, pp. 73-4.

³⁰ Barros, *Segunda decada da Asia*, livro 10, cap. 4, fol. 234v.; バロス(生田他訳)『アジア史(二)』、413頁。

³¹ ポルトガル来航以前のホルムズについては、次の文献を参照。Jean Aubin, "Le royaume d'Ormuz au début du XVIe siècle, in *Mare Luso-Indicum* (Genève: Librairie Droz, 1973), vol. 2, pp. 77-179; Vosoughi, "The Kings of Hormuz," pp. 89-104; *Encyclopaedia of Islam*, new ed., s. v. "Hurmuz" by L. Lockhart.

³² Barbosa, *Livro do que viu e ouviu no oriente*, p. 27; Barbosa, *The Book of Duarte Barbosa*, vol. 1, pp. 93-4.

³³ 家島彦一『海が創る文明』(朝日新聞社、1993年)、86~173頁; Donkin, *Beyond Price*,

イラン本土、アラビア半島のトルシアル海岸とオマーン湾岸を版図とし、ペルシア湾の島嶼部も支配下に置いていた。つまり、ホルムズ王国は、イラン側とアラビア側に版図を持ち、その間のペルシア湾の海域を内海とする「海洋帝国」であった³⁴。一部の研究者が考えるような、ホルムズ島だけを拠点とする小さな港湾都市ではなかったのである³⁵。但し、本論文では、慣例上、「ホルムズ王国」と呼ぶ。

ホルムズ王国は、14世紀前半にはペルシア湾の真珠を自国に集めていた。イブン・バットゥータは、ホルムズ王が真珠採取地を支配していること、バハレーンの商人などが行っている真珠採取から五分の一の真珠を徴収していることを記している³⁶。16世紀初めにおいても、ホルムズ王国はペルシア湾の真珠を集め、その首都ホルムズを真珠の集散地として発展させていた。

(2) バスラ

ペルシア湾のもうひとつの真珠集散地がバスラである。バスラはイラク南部の内陸部の都市であるが、シャトルアラブ川によってペルシア湾から船で到達できる港湾都市でもあった。つまり、ペルシア湾を航行する船舶とメソポタミアを陸路で移動してきた隊商隊が合流する東西交易の結節点であった³⁷。こうした地理上の特性により、バスラは早くからペルシア湾の真珠の集散地であった。10世紀のアラブ人地理学者のムカダッシーは、バスラは「真珠の鉱山」であるという言葉を残している³⁸。

16世紀初頭のバスラについては不明な点が多いが、1508年から1534年までサファヴィー朝ペルシアに属していた³⁹。1510年代または20年代初めにホルムズの宰相が書いた書簡には、バスラには多くのバハレーン商船が寄港していたことが記されている⁴⁰。バスラは、ホルムズを経由せずに真珠を集める集散地でもあった。

以上、16世紀のペルシア湾における主要な真珠採取地及び真珠集散地を考察した。まず、

pp. 134-5.

³⁴ ホルムズが「海洋帝国」だったことは、バロスの『アジア史』から明らかである。Barros, *Segunda decada da Asia*, livro 2, cap. 2, fol. 24v; バロス (生田他訳) 『アジア史 (一)』、115頁。Floor, *The Persian Gulf*, pp. 30-9; Carter, *Sea of Pearls*, pp. 61-9も参照。

³⁵ João Teles e Cunha, “The Portuguese Presence in the Persian Gulf,” in *The Persian Gulf in History*, ed. Lawrence G. Potter (New York: Palgrave Macmillan, 2009), p. 207.

³⁶ イブン・バットゥータ (家島訳) 『大旅行記 (3)』、181頁、189頁。イブン・バットゥータが語るスルタンは、文脈から考えて、ホルムズのスルタンである。

³⁷ *Encyclopaedia of Islam*, new ed., s. v. “Başra,” by C. H. Pellat and S. H. Longrigg; Floor, *The Persian Gulf*, pp. 139-90. フロアはペルシア湾の交易地としてバスラを考察しているが、この市が真珠集散地であったことには着目していない。

³⁸ Donkin, *Beyond Price*, p. 139.

³⁹ Anani, “The Portuguese in Bahrain and its Environs During the 16th and 17th Centuries,” p. 49.

⁴⁰ Anani, pp. 55-7.

ピレスやバロスなどの記述から、*aljofar* はアコヤ系真珠を指していることが確認できる。そのアコヤ系真珠はペルシア湾の「重要な商品」であり、バハレーンやジュルファルなどの真珠採取地から集散地ホルムズへ大量に輸送されていたことが明らかになった。16世紀初頭、ペルシア湾世界では、アコヤ系真珠の採取地と集散地が密接に結びつく「真珠生産圏」が形成されていたことが判明する。

ホルムズが真珠の集散地だったのは、この王国が強大な軍事力を背景にジュルファルなどの主要な真珠採取地や海域を支配下に置き、バハレーンにも一定の支配力を行使していたからであった。ペルシア湾島嶼部や沿岸部すべてがホルムズ王国に服属しているわけではなかったが、16世紀初めのホルムズは、その軍事力、政治力、経済力によって、ペルシア湾の海上覇権を握り、その首都を真珠集散地として発展させていたのである。

ここで注意すべきは、真珠の漁場が300程度あるペルシア湾では、バハレーンなどの主要な採取地ばかりでなく、他の地域や島嶼部からも漁場に向けて船が出て、真珠採取が実施されていたことである。バスラという別の真珠集散地も存在し、沖買いによる真珠取引も少なくなかった。「ペルシア湾真珠生産圏」とは、バハレーン・ホルムズ・ルートの真珠の流通を主軸としながらも、さらに広い範囲で真珠の採取と取引が行われる一大「真珠生産圏」であった。

第2節 ポルトガルの「ペルシア湾真珠生産圏」への進出

16世紀初期、ポルトガル勢力は「ペルシア湾真珠生産圏」へ進出していった。彼らはなぜこの「真珠生産圏」へ進出していったのだろうか。第3章「南米カリブ海真珠生産圏」の考察では、真珠がスペインの対外進出の動機のひとつであったことを明らかにしたが、ポルトガルの対外拡張ではどうだろうか。本節では、その進出経緯を考察することで、彼らの動機と目的を明らかにする。

ポルトガル対外拡張史などの先行研究は、コショウなどのスパイス獲得に関心を示す一方、真珠という商品に着目せず、また、ペルシア湾が「真珠生産圏」を形成していた事実を見過ごしてきたため、ポルトガルによるホルムズ征服とバハレーン征服を別々の事象として扱ってきた⁴¹。ホルムズ征服は、繁栄している国際交易港の支配、またはオスマン・トルコ進軍の防衛地点の確保という観点からのみ解釈されてきた⁴²。バハレーンの征服は、初期ポルトガルの対外拡張を特徴づける襲撃や略奪が展開された領土支配であったとされた⁴³。こうした先行研究では、ホルムズとバハレーンの政治的・商業的結びつきは看過されており、ペルシア湾という海域は、メソポタミアとインドを結ぶ海上交通の交易ルートとし

⁴¹ W. フロアは、16世紀のホルムズについて詳細な研究を行っているが、彼がホルムズ経由の交易品として挙げているのは、コショウや他のスパイス、絹や綿製品であって、真珠は入っていない。Floor, *The Persian Gulf*, p. 90.

⁴² Subrahmanyam, *The Portuguese Empire in Asia*, p. 76; Newitt, *A History of Portuguese Overseas Expansion*, pp. 88, 113.

⁴³ Newitt, *A History of Portuguese Overseas Expansion*, p. 113.

ての意味しかない⁴⁴。

ドンキンは、16世紀のポルトガル勢力が、インド洋世界の主要な真珠の採取地を支配していったという事実を指摘しているが、真珠が対外拡張の動機になったことを実証していない⁴⁵。こうしたことを鑑み、本節では、真珠史の先行研究では十分利用されていないアルメイダへの訓令やアルブケルケの書簡などを分析することで、ポルトガルの対外拡張の経緯とその動機、目的を実証的に考察する。

2.1 ポルトガルの対外拡張

16世紀初頭、ポルトガルはどのように「ペルシア湾真珠生産圏」へ進出していったのだろうか。16世紀初めのポルトガルの対外進出、とりわけアルブケルケの行動は、バロスによって詳述されている。以下、バロスの記述や他の先行研究を参照に、ポルトガルのホルムズとバハレーンへの対外進出の経緯を示しておく⁴⁶。

ポルトガルの対外拡張で、重要な役割を果たしたのが、後に第2代インド総督となるアルブケルケである。1507年、アルブケルケは、ソコトラ島からペルシア湾方面に向かい、当時、ホルムズ王国に服属していたカルハート、マスカット、ソハールなどのオマーン湾岸の港町を次々征服していった。その後、ホルムズ島に向かい、ホルムズ王国に攻撃を仕掛けて征服した。ホルムズ王セイファディン2世と和平協定を結び、ホルムズ王はポルトガル王の臣下となり、毎年、貢納金を支払うこと、ポルトガル人の要塞建設を許可すること、ポルトガル国王の商務官及びポルトガル商人の商品の売買は税を免除することなどが定められた。この協定に基づき、アルブケルケは要塞の建設に着手し始めたが、部下の反乱のためにホルムズから一時撤退することになった。しかし、1515年にはホルムズを再び征服した。以後、ポルトガルは100年以上にわたってこの王国を支配することになった。

ポルトガルによるホルムズ王国支配は、同国をポルトガルの従属国 (*vassal state*) とする傀儡政権の樹立であった。ホルムズ王国は、イラン本土やアラビア半島沿岸部、島嶼部、海域も支配下に置いていたので、ホルムズ支配によって、バハレーンなど、もともとホル

⁴⁴ Teles e Cunha, “The Portuguese Presence in the Persian Gulf,” p. 213.

⁴⁵ Donkin, *Beyond Price*, pp. 280-1.

⁴⁶ Barros, *Segunda decada da Asia*; バロス (生田他訳) 『アジア史 (一・二)』を参照。ポルトガル時代のバハレーンとホルムズの研究論文については、次を参照。Arnold T. Wilson, *The Persian Gulf: An Historical Sketch from the Earliest Times to the Beginning of the Twentieth Century* (1928; London: George Allen & Unwin, 1954), pp. 110-152; C. D. Belgrave, “The Portuguese in the Bahrain Islands, 1521-1602,” *Journal of the Royal Central Asian Society*, vol. 22, no. 4 (1935), pp. 617-630; Steensgaard, *Carracks, Caravans and Companies*; Anani, “The Portuguese in Bahrain and its Environs during the 16th and 17th Centuries,” pp. 31-61; Ahmed Busharb, “The Contribution of Portuguese Sources and Documents in Recording the History of Bahrain in the First Half of the Sixteenth Century,” in *Bahrain through the Ages: The History*, ed. Abdullah bin Khalid al-Khalifa and Michael Rice (London: Kegan Paul International, 1993), pp. 144-154; Floor, *The Persian Gulf*, pp. 7-138, 191-235; Teles e Cunha, “The Portuguese Presence in the Persian Gulf,” pp. 207-234; Carter, *Sea of Pearls*, pp. 69-83.

ムズ傘下の諸地域や海域がポルトガルに服属することになった。ポルトガルによるホルムズ支配とは、単にホルムズという小島の支配だけではなく、「海洋帝国」ホルムズが掌握していた海域支配であり、そのホルムズを通しての沿岸部、島嶼部支配だったのである。

ただ、そうした被支配地では、ホルムズの征服を奇貨としてホルムズへの蜂起や離反の動きが活発になり、他国からの侵略なども盛んになった。実際、1507年のアルブケルケによるホルムズ王国の征服は、ペルシア湾世界の政治的・軍事的均衡を崩すことになった。特にバハレーンではホルムズからの独立の動きが盛んになった。バハレーンは住民の多くがアラブ系であり、島自体がアラビア半島の大陸島であることから、アラブ人社会との地域的連結や社会的紐帯が存在した。その一方で、ペルシア系のホルムズ支配を忌避する思いも強かった⁴⁷。そうした中、アラビア半島東岸のハサー王国が、1514年にバハレーンを占領した。また、サファヴィー朝ペルシアのイスマーイール1世は、こうした動きに乗じ、1516年、ホルムズの対岸に軍隊を結集させ、彼が自らの版図と考えるバハレーンとカティーフを奪おうとした。ただ、彼らは船を所有していなかったため、軍隊の輸送をポルトガルに要求したが、結局、曖昧なままで終わりとなった⁴⁸。バハレーンとカティーフは、ハサー王国の支配に置かれたままであった。

1521年、第4代インド総督ディエゴ・ロペス・デ・セケイラは、バハレーンを征服するため、ペルシア湾に海軍を派遣し、ホルムズ艦隊に加勢した。ポルトガル・ホルムズ遠征軍は、ハサー王国を敗退させ、バハレーンとカティーフを再びホルムズに服属させることに成功した。しかし、1522年、ホルムズ、バハレーン、オマーン湾岸の港市でポルトガルへの同時蜂起が勃発した。こうした反乱をポルトガルは素早く鎮圧することに成功し、ポルトガルのホルムズ支配及びホルムズを通じたペルシア湾の間接支配が維持されることになった。バハレーンにはホルムズ王国の執政が派遣され、彼が内政を担当した。ポルトガルの要塞も建てられ、駐屯兵が配備された。ポルトガルは、この後、80年間にわたってバハレーン支配を打ち立てることになった⁴⁹。

カティーフでは、1521年にポルトガルの傀儡政権が樹立されたが、1534年、支配者が反旗を翻し、以後、オスマン・トルコに属することになった⁵⁰。一方、ムサンダム半島西海岸の真珠採取地、ジュルファルについては、16世紀初めにポルトガルに征服されて以来、同国の支配下に置かれたままであった。ここにもポルトガル要塞が建てられた⁵¹。

1540年代、50年代は、オスマン・トルコ艦隊が次々とペルシア湾に侵入してくる時代となった。バスラは1546年にオスマン・トルコの支配に入った。バハレーンも二度にわたっ

⁴⁷ Belgrave, “The Portuguese in the Bahrain Islands, 1521-1602,” pp. 621, 624; Floor, *The Persian Gulf*, pp. 106-25.

⁴⁸ 生田滋訳「アフォンソ・デ・アルブケルケがオームスからシェケ・イズマエルのもとに派遣した使節の記録」バロス（生田他訳）『アジア史（二）』、468頁；Teles e Cunha, “The Portuguese Presence in the Persian Gulf,” p. 212.

⁴⁹ Belgrave, “The Portuguese in the Bahrain Islands,” pp. 617-630.

⁵⁰ *Encyclopaedia of Islam*, new ed., s. vv. “al-Qatif,” “Djabrid.”

⁵¹ Varthema, *The Travels of Ludovico di Varthema*, p. 93 (note 1).

てオスマン・トルコ軍に占領されたが、ポルトガルはバハレーンの死守に成功した。1564年、ポルトガルとオスマン・トルコは休戦条約を結び、以後、ペルシア湾の平和が実現されることになった⁵²。

1602年、ポルトガルはバハレーンを失った。ホルムズ王の親戚であるバハレーンの執政が、同島の富裕な真珠商を殺害して、真珠を奪い、島の人々の怒りを買ったのが、きっかけであった。真珠商の弟が執政を暗殺し、バハレーンの支配者として宣言した後、サファヴィー朝ペルシアのアッバース1世に忠誠を誓った。反乱鎮圧のためポルトガルとホルムズ王国の連合軍が派遣されたが、奏功せず、結局、バハレーンはサファヴィー朝ペルシアの支配下に置かれることになった⁵³。当時、ポルトガルはスペインとの同君連合の時代であり、ポルトガル国王を兼ねるスペイン国王は、バハレーンの喪失に危機感を募らせ、植民地政府に奪回を命じるが、成功しなかった⁵⁴。

1622年、アッバース1世は、イギリス東インド会社の援助を得て、ポルトガルからホルムズを奪回した。こうして、100年以上続いたポルトガルのホルムズ支配は終了した。サファヴィー朝ペルシアは、ホルムズに代わる交易港としてバンドル・アッバースを選び、この港の開発に力を入れた。以来、ホルムズは凋落し、二度と繁栄の時期を迎えなかった⁵⁵。

以上、ポルトガルのペルシア湾世界への進出経緯を概観した。どこが真珠の集散地で、真珠の採取地なのかを認識して、ポルトガルのペルシア湾への進出経緯を見ると、その征服活動は、ホルムズ、バハレーン、カティーフというペルシア湾の真珠集散地と採取地が対象となっており、まさしく「ペルシア湾真珠生産圏」の主要部分を支配下に置こうとしていたことがわかる。バハレーンやカティーフなどは、ポルトガル海洋帝国やホルムズ王国だけでなく、ハサー王国、サファヴィー朝ペルシア、オスマン・トルコなど、ペルシア湾岸の政治勢力も食指を伸ばしていたことが明らかになる。彼らは真珠採取地の経済性を知っており、真珠採取地は経済的重要性があった。

このように、他国の進出も相次ぎ、ペルシア湾世界では政情不安の時期もあったが、ポルトガルは、16世紀初期から17世紀初期まで、1世紀にわたりホルムズ支配を実現し、さらにそのホルムズを通してバハレーンの間接支配を実現したのである。

2.2 初期ポルトガル人の対外拡張の動機

ここでは、真珠がポルトガル人にとってどのような意味があったのかを考察する。

ポルトガル人が、コショウをはじめとするスパイスの熱烈な希求者であったことはよく

⁵² オスマン・トルコのペルシア湾進攻については、Belgrave, “The Portuguese in the Bahrain Islands,” pp. 625-8; Teles e Cunha, “The Portuguese Presence in the Persian Gulf,” pp. 211-2; Giancarlo Casale, *The Ottoman Age of Exploration* (Oxford: Oxford University Press, 2010), pp. 95-8, 107, 110-1 を参照。

⁵³ Belgrave, “The Portuguese in the Bahrain Islands,” pp. 628-630.

⁵⁴ *The Travels of Pedro Teixeira*, p. 174, note 2.

⁵⁵ Wilson, *The Persian Gulf*, pp. 143-52.

知られている。しかし、彼らの目的はスパイスだけではなく、真珠の獲得も航海の大きな動機となっていた。主にアコヤ系真珠に使われる *aljófar* というポルトガルの外来語が、宝石、真珠を意味するアラビア語 *jawhar* 起源であることはすでに検討したが、そのことは真珠、とくにアコヤ系真珠がアラブ系ムスリム商人との交易を経てポルトガルに早くからもたらされていたことを示唆している。ポルトガル人は、「インド航路」を発見する以前から、オリエントの丸く光沢のある真珠の存在を知っていたのである。

1497年から1498年のヴァスコ・ダ・ガマの第1回航海の記録によると、ガマは航海に乗り出した時、土地の人々に見せるための「シナモン、クローブ、真珠 (*aljófar*)、金、その他」の見本を持参していた⁵⁶。この事実から、ガマたちは、航海に赴く以前から、スパイスや金とともに、真珠を切望していたことがわかる。

ポルトガルの初代インド副王フランシスコ・デ・アルメイダに国王から与えられた1505年3月5日付けの訓令 (*regimento*) も、初期ポルトガル人が真珠に関心があったことを示している⁵⁷。この訓令は、アルメイダがインドでなすべき行動を記した98カ条の指令書であるが、真珠史の先行研究では参照されていないので、見ておきたい。アルメイダへの訓令第26条は、航海の途中に友好ではない国から戦利品を獲得した場合の行動を、以下のよう明記している。

戦利品はすべてまとめられ、アルメイダの船に乗船する商務官の元に集められ、書記によってその明細が台帳に記される。もし戦利品が宝石 (*pedrarias*)、大粒真珠 (*perólas*)、真珠 (*aljófar*) などであった場合は、より一層の注意をもって扱う。それぞれ重さや数量、寸法を計り、アルメイダが立ちあつて木箱や金庫に入れて施錠し、アルメイダ、商務官、書記たちがそれぞれ鍵を保有する⁵⁸。

この条項によって、乗組員が航海における略奪行為で得ようとしていた物品のひとつは真珠や大粒真珠だったことがわかる。さらに、その戦利品はまず一カ所に集められ、厳重に保管されたこともわかる。こうした戦利品は、その後、乗組員に分配された。訓令第87条によると、国王の五分の一税を差し引いた戦利品の三分の一が、船長や乗組員の役職に応じてそれぞれ分配され、戦利品の三分の二は、船や必需品、大砲の購入や修繕費用にすることになっていた⁵⁹。

⁵⁶ Álvaro Velho, *Roteiro da primeira viagem de Vasco da Gama (1497-1499)*, ed. A. Fontoura da Costa (Lisbon: Agência-Geral do Ultramar, 1969), p. 7; 野々山ミナコ訳「ドン・ヴァスコ・ダ・ガマのインド航海記」『航海の記録』(岩波書店、1965年)、350頁。

⁵⁷ “Regimento do capitão-mor D. Francisco de Almeida,” pp. 156-261; 生田滋「ポルトガルの初代インド副王ドン=フランシスコ=デ=アルメイダの行動について」山本達郎博士古稀記念論叢編集委員会編『東南アジア・インドの社会と文化(上)』(山川出版社、1980年)、85~117頁。

⁵⁸ “Regimento do capitão-mor D. Francisco de Almeida,” pp. 190-5.

⁵⁹ “Regimento do capitão-mor D. Francisco de Almeida,” pp. 248-51.

また、訓令第 48 条と第 49 条は次のように定めていた。

船長や乗組員たちは二十四分の一税を払えば、現地で入手できるあらゆる種類の宝石、大粒真珠、真珠などを自由に購入し、持ち帰ることができる。但し、現地での購入は選任された商務官と書記が代表して実施する。乗組員たちは自分の資金を書記の台帳に登録し、購入したいものを伝え、商務官たちは忠実に購買を実行することを誓った上で、現地に派遣される。そうして購入された物品が、宝石、大粒真珠、真珠、高額の商品である場合は、乗組員の出資額に応じて分配され、四つの鍵のついた金庫か木箱に納められる。鍵は船長、乗組員の中から選ばれた者、商務官と書記がそれぞれ所有する。金庫や木箱に納める前には、宝石や真珠は重さを計り、数を数え、どの品物がどの人に帰属するかを書記の台帳に記入して、船長と商務官、書記がサインする⁶⁰。

これらの条項の内容から、真珠はポルトガル人が購入したい高額商品であること、真珠や宝石の取引は、条件付きであったが、ポルトガル国王も認めた自由取引であったことが明らかになる。真珠は、航海に赴く乗組員たちが、略奪であれ、購入であれ、その獲得を期待する物品だったのである。

実際、アルメイダたちはインドへの赴任の途中で、アフリカ東海岸の港湾都市で真珠を獲得している。アルメイダの艦隊は 1505 年 7 月にキルワに到着したが、キルワの王は友好的ではなかったため、アルメイダたちはキルワを攻撃・略奪し、占領した。アルメイダの航海に関する史料としては、彼の艦隊に属したサン・ラファエル号の航海の記録があり、次のように述べている⁶¹。

彼らがこの地で発見したものは、大量の蒸留水、香水の小瓶、あらゆる種類の大量のガラス製品、あらゆる種類の綿織物、大袋入りの松ヤニと樹脂、大量の金、銀、真珠 (*aljooffar*) であった。アルメイダはすべての略奪品をひとつの建物に集めることを命じ、それぞれの隊員にそのことを誓わせた⁶²。

航海の記録は、モンバサにおけるアルメイダの艦隊の行動も記している。

その後、アルメイダの艦隊はモンバサに向かった。モンバサに到着した当日に同市に放火し、翌日、略奪を行った。アルメイダは、略奪を実施する際に、各々が略奪してきたものを持ち帰ってきた後は、それらを一カ所に集め、その二十分の一を乗組員

⁶⁰ “Regimento do capitão-mor D. Francisco de Almeida,” pp. 220-5.

⁶¹ “Descrição da viagem de D. Francisco de Almeida,” in *Documentos sobre os Portugueses em Moçambique*, vol. 1, pp. 518-41.

⁶² “Descrição da viagem de D. Francisco de Almeida,” pp. 526-7.

たちに与えることを宣言した。また、金、銀、真珠 (*aljofre*) に関しても、発見者にはその二十分の一が与えられることになった。すべての乗組員たちが略奪を始め、斧や破壊用の槌で扉を壊し、家々を搜索した。彼らは、絹製で黄金が使われた豪華な織物、絨毯、馬具用の織物などを発見し、アルメイダはソファアラ交易のためのかなりの物資を集めることができた⁶³。

以上が、サン・ラファエル号の航海の記録の記述である。キルワでは真珠を得たという記述があるが、モンバサで真珠を得たとは具体的に記されていない。しかし、おそらく入手していたと推測できる。アフリカ東海岸の海域には、大産地ではないものの、アコヤ真珠貝や他のピンクターダ属の真珠貝が生息していたことが知られている。その地域では小規模な真珠採取が実施されていたと考えられている⁶⁴。採取された真珠や交易で得た真珠が、キルワやモンバサなどの東アフリカの主要な交易地に集められていたのである。

モンバサの略奪の過程で、アルメイダは、金、銀、真珠を発見した乗組員たちにその二十分の一が与えられると宣言しているが、これは訓令では定められていない。したがって、アルメイダの裁量の可能性が高い。金、銀、真珠のすべてを取り上げては、乗組員の不満が高まり、彼らをまとめきれなかったからだと考えられる。

このようにアルメイダの訓令やサン・ラファエル号の航海記録を分析すると、16世紀初期のポルトガル王室もポルトガル人乗組員たちも、インド洋海域世界の豊かな港町には真珠が貯蔵されていることを明確に認識しており、略奪や購入によって得ようとしていたことがわかる。また、金、銀、真珠は、ポルトガル王室の独占ではなく、略奪の実行者である乗組員たちに一定量が分け与えられる物品であったことも判明する。さらに、真珠はポルトガル国王公認で自由取引が認められている物品であったことも明らかになる。真珠の獲得は、ポルトガルの航海の大きな目的のひとつであり、真珠ゆえの航海、真珠ゆえの略奪行為があったのである。

2.3 アルブケルケとペルシア湾の真珠

初期ポルトガル人が真珠の獲得を航海の動機のひとつにしている中、「ペルシア湾真珠生産圏」に進出していったのが、アルブケルケであった。当時のアルブケルケの行動の記録などから見る限り、彼は、ホルムズはインド洋海域世界の屈指の豊かな交易地という認識はあるが、ホルムズ征服に真珠獲得という目的があったかどうかは明らかではない⁶⁵。

ただ、アルブケルケが1507年にホルムズを占領した時、乗組員たちが、商務官委託ではなく、自分たちで宝石や装飾品を妻や娘のために購入したい、ホルムズはそうした欲しい

⁶³ “Descrição da viagem de D. Francisco de Almeida,” pp. 530-3.

⁶⁴ Kunz and Stevenson, *The Book of the Pearl*, pp. 153-4.

⁶⁵ 1507年のホルムズ征服に関する記録としては、「補注 オルムズにおけるアフォンソ・デ・アルブケルケ」バロス (生田他訳) 『アジア史 (一)』、532~543頁を参照。

物の市場であると言い出し、その主張が認められた⁶⁶。ホルムズが宝石や真珠の市場であることは乗組員も知っており、彼らとその購入に熱心だったことがわかる。

一方、バハレーンについては、アルブケルケは早くからそこが豊かな真珠の島であることを認識していた。バロスは『アジア史』の中で、アルブケルケは1508年にバハレーンから来た船を拿捕したが、船の積荷はすべて「大粒真珠と真珠」(*perlas & aljofre*)であり、アルブケルケ艦隊の大きな収入となったと述べている⁶⁷。少なくとも、この時以来、彼は、バハレーンという真珠採取で豊かな島の存在を知ったと考えられる。

アルブケルケは、1514年10月20日付の書簡で、バハレーンは大変重要で、大変豊かな場所である、そこには「真珠の漁場」(*pescaria do aljofar*)があり、誰にも支配されていない、真珠漁をする人は、そこで1年分の暮らしを手に入れる貧しい労働者である、我々が真珠採取を行えば、利益を倍増することができる、と述べている⁶⁸。この書簡は、アルブケルケが、真珠の収益性の観点、富を生み出す海域の観点から、真珠採取業が行われるバハレーンとその海域の領有を意図していたことを示している。

実際、アルブケルケは甥のペロ・デ・アルブケルケをバハレーンに向かわせたが、風向き関係で到達できなかった⁶⁹。それゆえ、アルブケルケは1515年9月22日付の書簡で、バハレーン、カティーフ、バスラなどはまだ詳しくわかっていないと前置きしながらも、バハレーンは人が考える以上に重要な所であること、多数の船がインドと交易をし、多数の馬と「多数の真珠」(*muito aljofar*)がここからインドに送られていることを伝え、もし神の思し召しがあり、時期が許すならば、支配し、確保できる場所である、と締めくくっている⁷⁰。

1514年10月20日付書簡及び1515年9月22日付のアルブケルケの書簡の内容は、彼が真珠の略奪だけではなく、真珠採取の収益性を期待して、真珠の漁場と真珠採取業の支配を目論んでいたことを示している。こうした書簡を分析すれば、アルブケルケには、真珠のための海域支配という意図があったことが判明する。

2.4 真珠の産地としての紅海支配

真珠ゆえの海域支配というアルブケルケの意図は、彼の紅海戦略においても見ることができる。紅海は、少なくとも古代ローマ時代にはヨーロッパに知られていた真珠の産地で

⁶⁶ Barros, *Segunda decada da Asia*, livro 2, cap. 4, fol. 34r.; バロス (生田他訳) 『アジア史 (一)』、150~151頁。

⁶⁷ Barros, livro 3, cap. 2, fol. 57r.; バロス、238頁。

⁶⁸ “Carta 50 (October 20, 1514),” in *Cartas de Affonso de Albuquerque*, vol. 1, p. 264.

⁶⁹ Barros, *Segunda decada da Asia*, livro 10, cap. 1, fol. 217v.; バロス (生田他訳) 『アジア史 (二)』、343頁。

⁷⁰ “Carta 101 (September 22, 1515),” in *Cartas de Affonso de Albuquerque*, vol. 1, pp. 373-4; 「アフォンソ・デ・アルブケルケの1515年9月22日付国王宛書簡」バロス (生田他訳) 『アジア史 (二)』、482頁。

地図2 ペルシア湾島嶼部と沿岸部、紅海島嶼部



ある⁷¹。この海域には、アコヤ真珠貝とクロチョウ真珠貝が生息していた。紅海南部のマサワ島とダフラク諸島の海域は、ペルシア湾ほどの大産地ではなかったが、20世紀初めまでは、アコヤ真珠貝の採取地として知られていた⁷²。

ポルトガルの紅海戦略については、アルブケルケがアデン攻略に失敗したため、ポルトガルはスパイスが運ばれる紅海ルートの封鎖ができず、彼らの対外拡張は失敗に終わったとする歴史認識が一般的である。しかし、以下のアルブケルケの書簡を分析すると、スパイス・ルート封鎖以外の目的も紅海戦略にあったことがわかる。

1513年、アルブケルケはアデン征服に失敗した後、紅海内部に船を進め、アデン支配下にあったカマラーン島を征服した。その島でマサワとダフラクの前シャイフだった人物を捕らえ、彼から紅海の真珠採取の実態を聞き出すことになった。当時、マサワとダフラクは、アデンのシャイフが派遣した彼の奴隷総督たちに支配されていた。

1513年12月4日付けのアルブケルケの書簡は、元シャイフから聞いた話として、マサ

⁷¹ 古代ローマ時代の紅海の真珠については、Katia Schörle, “Pearls, Power, and Profit: Mercantile Networks and Economic Considerations of the Pearl Trade in the Roman Empire,” in *Across the Ocean: Nine Essays on Indo-Mediterranean Trade*, ed. Federico de Romanis and Marco Maiuro (Brill: Leiden, 2015), pp. 43-54 を参照。

⁷² Kunz and Stevenson, *The Book of the Pearl*, pp. 139-42; *Encyclopaedia of Islam*, new ed., ss. v. “Maşawwa” by E. Van Donzel, “Dahrak” by J. Schacht.

ワとダフラクの領主たちが、すべての「真珠の漁場」(*pescaria do aljofar*)を掌握していること、彼らは、アラビア海岸や他の地域から真珠採取をするために来るジェルバ船から税金(*direitos*)を受け取り、さらに真珠採取の最初の二日間と最後の二日間(の真珠)も手中にしていることを報告している⁷³。バロスの『アジア史』は、アデンの王は、主に「そこ(ダフラクとマサワ)で(真珠)漁が行われている真珠の漁場」(*pescaria de aljofre que se ali faz*)から「大きな収入」(*grande renda*)を得ていると述べている⁷⁴。

アルブケルケとバロスの記述から、アデンのシャイフが派遣した奴隷総督たちが、マサワとダフラクの真珠採取支配で獲得した真珠や金銭をアデンに送っていたことがわかる。紅海においても、マサワとダフラクを真珠採取地とし、アデンを真珠集散地とする「真珠生産圏」が形成されていたのである。アデンは、スパイス・ルートの紅海支配によって、交易で栄えている小さな港湾都市ではなかった。その版図を紅海南部の島々や海域にまで広げ、紅海の真珠採取業からも利益を得ている「海洋帝国」であった。アルブケルケは紅海に侵入することで、この海が、真珠という富を得ることのできる海であり、真珠採取船からも金銭を獲得できる海であることを、まず理解したのである。

実際、アルブケルケは、1514年10月20日付の書簡の中で、「我々が犠牲を払ってでも獲得すべきであり、収益を出せる紅海の主要な島々は、ダフラクとマサワです、なぜなら、それらの島々は近接しており、プレスター・ジョンの王国に隣接しており、『真珠の漁場』(*a pescaria do aljofar*)を支配しており、プレスター・ジョンの王国に来る商品の出荷地になっているからです」と述べた後、マサワにポルトガルの要塞を建設すると、マサワとダフラクの島々ばかりでなく、その周囲の「真珠の漁場」も自分たちの支配下に入ること、「真珠の漁場」は利益を出せる場所であり、広大で、採取は毎年行われていることなどを報告している⁷⁵。アルブケルケは1515年9月22日付の書簡でも同じ主張が繰り返しており、もしマサワに拠点を築くことができれば、マサワとダフラク周辺の「真珠の漁場」(*a pescaria do aljofar*)を手に入れることができると述べている⁷⁶。

⁷³ “Carta 41 (December 4, 1513),” in *Cartas de Affonso de Albuquerque*, vol. 1, p. 224.

⁷⁴ Barros, *Segunda decada da Asia*, livro 8, cap. 2, fol. 191r.; バロス(生田他訳)『アジア史(二)』、242頁。*pescaria de aljofre* または *pescaria de (do) aljofar* は「真珠の漁場」または「真珠採取」と解釈できるため、文脈から判断する必要がある。バロスやアルブケルケのポルトガル語原文では、*se faz* や *se pesca* (漁が行われる) と共に使用されることがあり、「真珠の漁場」と訳すべきである。

⁷⁵ “Carta 49 (October 20, 1514),” in *Cartas de Affonso de Albuquerque*, vol. 1, pp. 281-3; 生田滋訳「アフォンソ・デ・アルブケルケの1514年10月20日付国王宛書簡」バロス(生田他訳)『アジア史(二)』、456~458頁。プレスター・ジョンの王国は、もともとはインドにあるとされていた伝説上のキリスト教徒の王国。15世紀以降、アフリカ大陸のキリスト教国エチオピアが西ヨーロッパに知られると、エチオピアがプレスター・ジョンの王国と見なされるようになった。生田滋「大航海時代の東アジア」榎一雄編『西欧文明と東アジア(平凡社、1971年)、52~53頁を参照。

⁷⁶ “Carta 101 (September 22, 1515),” in *Cartas de Affonso de Albuquerque*, vol. 1, p. 378; 生田訳「アフォンソ・デ・アルブケルケの1515年9月22日付国王宛書簡」バロス(生

これらの書簡を見ると、アルブケルケには、マサワに拠点を築き、そこを手掛かりにダフラクやその周辺の「真珠の漁場」を手中にしたいという思いがあったことがわかる。彼は、バハレーンの海域同様、紅海においても真珠漁場の収益性を理解しており、その海域を支配する構想をもっていた。アルブケルケの書簡を分析すると、アルブケルケにとって紅海は、スパイスが運ばれていく運輸と通商のルートだけではなく、真珠という富が生み出される水産業の場であったこと、初期ポルトガル人は、真珠ゆえの海域支配を構想していたことが明らかになる。

アルブケルケ後のポルトガル勢力も、何度かマサワとダフラクに侵攻したが、それらの島々を占領することはできなかった。しかし、アルブケルケが1513年に占領したカマラーン島は紅海内のポルトガル領となり、1620年までポルトガルの支配下に置かれた⁷⁷。16世紀初頭のカマラーン島はイスラーム教徒の遊牧民が暮らす寒村で、食糧と飲料水補給地としての役割しかなかったが、16世紀半ばになると、この島は紅海の真珠採取地となった。16世紀半ばのオルタは、カマラーンでは真珠 (*aljoфар*) が採取されていると述べている⁷⁸。通説では、ポルトガルはアデンの占領に失敗し、その結果、紅海ルートの封鎖ができず、紅海戦略は失敗に終わったと見なされてきたが、真珠の観点で考察すると、ポルトガルはカマラーン島という紅海の真珠採取地を獲得し、一定の成果を出したことが判明する。

以上、本節では、なぜポルトガル勢力は、「ペルシア湾真珠生産圏」へ進出していったのかを検討した。これらの検討によって明らかになったのは、(1) ポルトガルの航海は、*aljoфар* と呼ばれるアコヤ系真珠の獲得が目的のひとつであったこと、(2) ポルトガルのペルシア湾世界への進出とその支配は、島嶼部の抵抗や湾岸世界の政治勢力との激しい抗争の中で維持された「ペルシア湾真珠生産圏」支配であったこと、(3) アルブケルケのような初期ポルトガル人は、真珠漁場の収益性を理解し、その上での海域支配の構想をもっていたことである。真珠の採れる海域には地政学的重要性があった。16世紀のインド洋海域世界においても、南米カリブ海と同様に、真珠ゆえの対外拡張があり、真珠ゆえの海域支配があったのである。

従来のポルトガル対外拡張史では、ポルトガルによるホルムズ支配とバハレーン支配は別々に議論されてきた。しかし、「真珠生産圏」の観点で見ると、これらの二島は真珠採取地と集散地として経済的に結びついていたこと、ポルトガルによる二島の支配は、ホルムズに真珠を集めるための政治的・軍事的出来事であったことが明らかになる。ポルトガルの進出に伴って湾岸世界の現地政治勢力との激しい抗争があったが、このことは、現地勢

田他訳『アジア史 (二)』、487頁。

⁷⁷ *Encyclopaedia of Islam*, new ed., s. v. “Qamarān” by V. Vacca; Varthema, *The Travels of Ludovico di Varrthema*, p. 57 (note 1). R. B. サージェントは、カマラーンについて考察していない。R. B. Serjeant, *The Portuguese off the South Arabian Coast* (Oxford: The Clarendon Press, 1963).

⁷⁸ Orta, *Colóquios dos simples e drogas da Índia*, vol. 2, p. 119.

力が真珠の漁場、採取地、集散地が結びついた「真珠生産圏」の収益性を知っていたことを示している。真珠の採れる海域は、富を生み出す場所であった。

また、先行研究では、コショウなどのスパイス獲得ばかりに焦点が当てられ、海域は国際交通や海上輸送のルートとしてしか認識されてこなかった。それによって、ポルトガルの紅海戦略は失敗したと考えられてきた。しかし、本節の考察によって、初期ポルトガルの対外拡張には、真珠獲得の動機、真珠漁場支配の構想があったことがわかる。とりわけ、紅海戦略については、ポルトガルには紅海の真珠漁場支配の構想と後に真珠採取地になるカマラーン島の確保があったことが明らかになり、従来の歴史認識に修正を迫ることになる。先行研究は、水産物が採れる海の収益性を見てこなかった。しかし、海から来たポルトガル人が、海の生産性と収益に関心を持つのは当然であった。

第3節 「ペルシア湾真珠生産圏」支配の意味

ポルトガル勢力は、16世紀の早い時期に「ペルシア湾真珠生産圏」の主要な部分を支配した。アルブケルケは、彼らの支配下で真珠採取を実施する意図をもっていたが、その後のポルトガル人は、真珠採取業には資本投資せず、事業主にも、生産者にもならなかった。

では、ポルトガルによる「ペルシア湾真珠生産圏」支配は、なぜ重要だったのだろうか。彼らは、その支配からどのように富を引き出したのだろうか。本節では、16世紀初期までペルシア湾の「海洋帝国」として君臨していたホルムズ王国の実態及び真珠の集散地の機能に焦点を当て、ポルトガルによる「ペルシア湾真珠生産圏」支配が、彼らにとってなぜ重要であったのかを検討する。

3.1 貢納品としての真珠

ポルトガルによる「ペルシア湾真珠生産圏支配」の意義は、真珠の集散地ホルムズと採取地バハレーンを支配下に置くことで、現物の真珠を獲得できるようになったことである。16世紀前半、ホルムズは、ペルシア湾沿岸部や島嶼部各地の真珠を集めていたが、その役割はポルトガル時代においても変化しなかった。16世紀末のリンスホーテンは *Itinerario*（邦訳名『東方案内記』）の中で、大粒真珠 (*peerlen*) と真珠 (*aljoffar*) について、次のように述べている。

正統な東方産のものは、(ホルムズ) 海峡、つまりペルシア湾のホルムズとバスラの間で産出する、バハレーン、カティーフ、ジュールファル、カマラーン及びペルシア湾の他の地域で採取されたものは、すべてホルムズに運ばれる⁷⁹。

この記述により、ホルムズは16世紀末においてもペルシア湾の真珠集散地だったことが

⁷⁹ Linschoten, *Itinerario*, vol. 2, p. 161 (chap. 84); リンスホーテン (岩生他訳) 『東方案内記』、539頁。

わかる。ホルムズが真珠集散地であり続けたのは、三つの要因があった。第一に、もともとホルムズ王国は「ペルシア湾真珠生産圏」の沿岸部や島嶼部を服属させていた「海洋帝国」であり、政治力によってその首都に真珠を集めていたからである。第二に、16世紀初めにホルムズ王国はポルトガルに服属したが、今度はポルトガルが強大な海軍力を背景にペルシア湾での覇権を打ち立て、やはりホルムズに真珠を集約させたからである。第三に、ポルトガルはホルムズ王国の従来統治形態や真珠の流通形態を温存したからであった。

16世紀半ばのホルムズ王国の主要な収入は、ホルムズ市に蝟集する商人たちに課す関税であったが、さらに、この王国が服属させているペルシア湾の島嶼部やアラビア側とペルシア側の服属地からの一定の収入もあった。それらは服属地からの水産物や農産物などの収穫物 (*novidades*)、貢納金 (*tributos*)、税金 (*imposts*) などであった⁸⁰。ホルムズ王国は、支配地から金銭だけでなく、貢納品も受け取る朝貢制度を実施しており、物納として真珠も集めていたのである⁸¹。

1507年、アルブケルケはホルムズ王国を服属させたが、この時、彼がホルムズに課したのは、毎年金貨1万5000シェラフィンの貢納金 (*tributo*) であった⁸²。貢納金の額は、その後、2万5000シェラフィンとなった。1523年には6万シェラフィンに引き上げた。この6万シェラフィンの貢納金 (*pareas e tributo*) は、「銀、金、真珠で」(*em prata, ouro, e aljoffar*) 支払うように定められた⁸³。1523年は、ポルトガルとホルムズ王国の連合艦隊によるバハレーン征服後、ホルムズやバハレーンなどの同時蜂起をポルトガルが鎮圧した翌年にあたる。ホルムズとバハレーンは再征服され、ホルムズの属国化と、ホルムズによるバハレーンの間接支配が維持された。これによって、貢納金の額が引き上げられたばかりでなく、真珠の貢納も強要されることになったのである。

先行研究は1523年時の6万シェラフィンには言及しても、それが「銀、金、真珠で」支払うよう求められたことには着目していない⁸⁴。しかし、6万シェラフィンの一部が真珠で

⁸⁰ Barros, *Segunda decada da Asia*, livro 10, cap. 7, fol. 234v.; バロス (生田他訳) 『アジア史 (二)』、412頁。

⁸¹ 真珠の物納については、Jean Aubin, “Titulo das remdas que remde a Ylha d’Oromuz,” in *Mare Luso-Indicum* (Genève: Librairie Droz, 1973), vol. 2, p. 218 を参照。V. M. ゴデューニョは、ホルムズの収支の研究において、関税だけに着目しており、服属地からの貢納金や貢納品は省いている。その後、彼の研究が独り歩きして、ホルムズの関税の多寡だけでホルムズの盛衰が議論されるようになった。ホルムズの収支を考える際には、服属地からの貢納金や貢納品の存在をはじめ、ホルムズ王国の免税制度、高額品の密輸などにも着目すべきである。Vitorino Magalhães Godinho, *Les finances de L’état Portugais des Indes Orientales (1517-1635)* (Paris: Fundação Calouste Gulbenkian, Centro Cultural Português, 1982), pp. 44-50.

⁸² Barros, *Segunda decada da Asia*, livro 2, cap. 4, fol. 33r.; バロス (生田他訳) 『アジア史 (一)』、145頁。『アジア史』以外の一次史料によるホルムズ降伏時の条件については、『アジア史 (二)』、145~146頁、注3を参照。

⁸³ Botelho, “O Tombo do Estado da India,” pp. 79-84; Godinho, *Les finances de L’état Portugais des Indes Orientales*, pp. 45-6; Floor, *The Persian Gulf*, pp. 74-77.

⁸⁴ Godinho, *Les finances de L’état Portugais*, p. 45; Subrahmanyam, *The Portuguese*

支払われたことにより、ポルトガル植民地政府が真珠を入手していたことが明らかになる。さらに、真珠には貨幣としての価値があること、金、銀同様に、ポルトガル人が希求する物品であったことも示している。ポルトガルは、ホルムズ王国の属国化により、貢納品として真珠を強制的に入手する仕組みを作り上げたのである。

1529年にはホルムズ王国からの貢納金は10万シェラフィンに引き上げられた。この時の内訳は明らかではない。ただ、10万シェラフィンは法外な額であり、その後、ホルムズは貢納金を滞納するようになった⁸⁵。これ以降の貢納金の額は明らかにされていない。

バハレーンについては、ポルトガルは、ホルムズ王国を通しての間接統治を行った。バハレーンには収税を担当するホルムズ王国の執政が置かれた。1521年以降、バハレーンはホルムズに4万シェラフィンの貢納金を収めたが、その多くは真珠採取からの収入だった⁸⁶。一方、ポルトガルは、バハレーン島に要塞を建設し、駐屯兵を配置して島の警護を固めていた。ポルトガル国王が任命した商務官も島に滞在した⁸⁷。こうした商務官の存在で、最良の真珠がポルトガル国王のために集められ、多くの真珠が優先的にポルトガル人の手に渡ったことがわかる。

17世紀初めのポルトガル人テイシェイラは、ポルトガル時代のバハレーン島では、大粒真珠と真珠の取引における公の年間取引は50万ドゥカドであり、さらに10万ドゥカド以上が密輸で消えていたと語っている。バハレーンは、ポルトガルのホルムズ長官に、長官職の報酬を除いて4000ドゥカド以上の収入を与えていたとも述べている⁸⁸。経済的な観点からポルトガルがバハレーンを間接支配する意味は大きかったのである。

1602年、バハレーンはホルムズ支配の桎梏を脱し、サファヴィー朝ペルシアに服属するようになった。17世紀初めのスペイン人大使シルバ・イ・フィゲロアによると、アッパーズ1世はバハレーン支配とその真珠採取から20万ドゥカド以上の収益を得、さらに選りす

Empire in Asia, p. 93. カーターは、ヨーロッパがペルシア湾の真珠を直接入手し、それが経済的に重要になるのは、20世紀初めであると述べているが、すでに16世紀にポルトガルは一定額を入手していた。Carter, “The History and Prehistory of Pearling in the Persian Gulf,” p. 148, note 5.

⁸⁵ Subrahmanyam, *The Portuguese Empire in Asia*, p. 93; Floor, *The Persian Gulf*, pp. 74-75. フロアは、貢納金10万シェラフィンの額は、ホルムズ王国の収益が公式の額よりも大きかった可能性があることを示していると述べている。

⁸⁶ Floor, *The Persian Gulf*, p. 74. バロスは、バハレーンからの収入 (*rendimento*) は莫大であったが、詳しいことはわからないと述べている。Barros, *Segunda decada da Asia*, livro 10, cap. 7, fol. 234v.; バロス (生田他訳) 『アジア史 (二)』、413頁。

⁸⁷ Linschoten, *Itinerario*, vol. 1, p. 34 (chap. 5), vol. 2, p. 161 (chap. 84); リンスホーテン (岩生他訳) 『東方案内記』、117頁、539頁。

⁸⁸ “A Short Narrative of the Origin of the Kingdom of Hormuz,” in *The Travels of Pedro Teixeira*, p. 176. ティシェイラの紀行文には、彼が抄訳し、解説を付加した『ホルムズ王統記』が付録として掲載されている。『ホルムズ王統史』は、14世紀半ば、ホルムズ王国のタムタン王の嗣子トゥラン・シャーの時代に作成された。『ホルムズ王統史』については、Vosoughi, “The Kings of Hormuz,” p. 90, p. 100 (notes, 3, 6) を参照。

ぐりの高価な真珠を最初に獲得していた⁸⁹。16世紀のポルトガル人も、真珠採取地のバハレーンを支配下に置くことで、同様の収益を得ていたことが推定できる。

ポルトガルは、ホルムズ王国の属国化と真珠の主要採取地バハレーンの間接支配によって、公式、非公式に、かつ特権的に大量の真珠を獲得したのである。軍事力と政治力で実現したポルトガルの「ペルシア湾真珠生産圏」支配は、真珠を獲得できる点で重要だった。

3.2 ホルムズという真珠集散地の機能

ポルトガルによる「ペルシア湾真珠生産圏」支配の重要性は、真珠獲得だけではなくた。ヒトを集め、モノを集める「真珠集散地」ホルムズを支配したという意義も大きかった。ポルトガル対外拡張史の先行研究は、ホルムズが真珠集散地であるという事実を看過してきたため、ホルムズの真珠の重要性は言うに及ばず、アジア域内交易における真珠集散地の商業的・経済的役割とその意義についても、考えてこなかった。真珠史研究においても、真珠の集散地の機能を分析した研究は存在しないため、ここで考察しておきたい。

筆者の考察では、真珠集散地は次の三点で重要であった。

第一に、真珠以外の各種宝石を集めたことである。真珠の集散地では、真珠の分類や穿孔、糸通しなどの加工業、さらに真珠や宝石、金、銀を使った装身具、宝飾品、調度品などの加工業も発展する。宝石の集散地に真珠が集まることもあるが、ホルムズに関しては、ペルシア湾の真珠が特産品なので、真珠の集散地が宝石市場として発展したと考えることができる。16世紀のポルトガル傘下のホルムズは、ポルトガル領インドの二大都市である同市とゴアを結ぶアジア域内ルート的发展により、インド産ダイヤモンドやスリランカ産ルビーなど、各種宝石を集めるようになった。ホルムズは、真珠・宝石市場として一層発展したのである。

第二に、国際化が進むことである⁹⁰。真珠と宝石は、宗教や民族、国籍にかかわらず、西アジア、中央アジア、インド、中国をはじめとするアジア各地及びヨーロッパ世界で熱烈に希求され、それらの地域の真珠商、宝石商、仲買人などが目の色を変えて追い求める商品である⁹¹。希少な真珠や宝石は供給者の方が圧倒的に有利であるため、商人が採取地や集散地に足を運ぶことになる。ただ、真珠の採取地は海の浅い辺鄙な場所が多く、座礁の

⁸⁹ Silva y Figueroa, *The Commentaries of D. García de Silva y Figueroa*, p. 625.

⁹⁰ Vosoughi, “The Kings of Hormuz,” pp. 93-7; Teles e Cunha, “The Portuguese Presence in the Persian Gulf,” pp. 220-1. テレス・エ・クーニャは、ホルムズの国際性をスパイス交易と織物交易に帰しているが、真珠・宝石市場であることも考察すべきである。なお、本論文では「国際化」、「国際的」とは、政治、経済、商業分野などにおいて、宗教や言語の違い、民族性、帰属する国家などが認識されて、国民と国民、あるいは国家と国家との交流が進むこと、あるいはその状態を指すとする。特にアジア域内交易で使用する。「国際化」の定義については、羽田正『グローバル化と世界史』（東京大学出版会、2018年）、20頁を参照。

⁹¹ アジア世界で、真珠や宝石に関心を示さなかった数少ない民族のひとつが、日本人である。リンスホーテン（岩生他訳）『東方案内記』、255~256頁を参照。

危険性があった。したがって、真珠採取地よりも真珠の集散地の方がより多くの商人を集める傾向があった。一般に真珠集散地は、世界各地の真珠商、宝石商を招来する国際的な真珠・宝石市場だった。

リンスホーテンは、ホルムズには、ペルシア人、アルメニア人、トルコ人、ヴェネツィア人、その他、あらゆる民族が大勢いて、彼らはスパイスと宝石類を扱っていると述べている⁹²。17世紀初めのホルムズには、ユダヤ人やバニヤンと呼ばれる商人なども存在した⁹³。ホルムズは世界各地の商人が蝟集する国際都市であった。

第三に、こうした国際商人によって大量の金、銀がもたらされたことである。古代ギリシア人が、アジア世界では真珠は金と交換されると述べていたのは、すでに第1章で見たとおりである。真珠や宝石の取引は、バーター取引もあったが、多くの場合、金、銀を介した相対取引で即決される⁹⁴。「サイレント・バーゲニング」も少なくなく、売り手も買い手も一言も発することなく、莫大な金、銀が静かに動いていた。

リンスホーテンが語るイギリス人ラルフ・フィッチの事例は、真珠集散地ホルムズにおける商取引の一端を伝えている。リンスホーテンによると、1583年にラルフ・フィッチという人物を含む四人のイギリス人が、アレppoからホルムズに密入国した。彼らは、毛織物、サフラン、鏡、ガラス製品、小刀、その他こまごました商品を数多く持参していたが、それらは見せかけで、本当の目的は、ダイヤモンド、真珠 (*peerlen*)、ルビーなどの宝石を大量に入手することであった。そのために莫大な金銭 (*geld*) と黄金 (*goud*) を隠し持っていた。結局、彼らはホルムズ長官によって捕まり、ゴアに送られ、そこで投獄されることになる⁹⁵。

このエピソードは、ホルムズに向かう多くの商人が宝石や真珠を買い求めていたこと、彼らは購入用の金貨や金塊を非正規に持ち込んでいること、宝石や真珠の購入には莫大な金貨や金塊が使われたことを示しており、ホルムズには多額の金貨や金塊が流れ込んでいたことを示唆している。

16世紀初めのバルボザは、ホルムズには、「シェラフィン金貨」やマメのサヤのように細長い「ラリン」 (*larin*) と呼ばれる銀貨が大変豊富にあるため、ある商船が商品を運んでき

⁹² Linschoten, *Itinerario*, vol. 1, p. 35 (chap. 6); リンスホーテン (岩生他訳) 『東方案内記』、120頁。

⁹³ Teixeira, *The Travels of Pedro Teixeira*, p. 168. バニヤンについては、第6章で検討する。

⁹⁴ 今日の真珠・宝石の取引でも、現金取引は少なくない。

⁹⁵ Linschoten, *Itinerario*, vol. 3, pp. 1-2 (cap. 92); リンスホーテン (岩生他訳) 『東方案内記』、566~567頁。ラルフ・フィッチ自身による話は次の書物に収録されているが、ホルムズに入国した意図については記されていない。Ralph Fitch, "The Voyage of M. Ralph Fitch merchant of London," in *The Principal Navigations, Voyages, Traffiques & Discoveries of the English Nation*, ed. Richard Hakluyt (New York: AMS Press, 1965), vol. 5, pp. 465-510.

て、必要な物品の購入を終えると、残りは金貨、銀貨に交換して持ち帰ると述べている⁹⁶。ホルムズには、あり余るほどの金貨、銀貨が流入していたのである。

以上、ホルムズを中心に、真珠の集散地の三つの商業的・経済的意義を述べた。真珠の集散地ホルムズは、宝石市場であり、世界各地の商人を集める国際都市であり、彼らによって金貨、銀貨が流入する大交易地だったのである。

3.3 ラリン銀貨の役割

真珠集散地ホルムズに集まった金貨や銀貨の中で、特に着目しなければならないのが、ラリンと呼ばれるペルシア銀貨である⁹⁷。イランは歴史的に名高い銀の産地である。16世紀にはファールス地方のラールが主な銀の採取地であり、銀貨が鑄造されていた。この銀貨は、細長い板状の銀をふたつに折り曲げた独特の形をしているのが特徴で、品質が高いことで知られていた。ポルトガル来航以前からインド洋海域世界で広く流通し、「タンガ」と呼ばれていたが、ヨーロッパ人がラールの地名にちなんで「ラリン」と呼ぶようになった。1515年にアルブケルケがイスマーイール1世の元に派遣した使節の記録では、ララ市（ラール）では、タンガとラリンが作られ、インド全体に流通していると記されている⁹⁸。ラリン銀貨は、ホルムズの真珠同様、ポルトガルの対外拡張史やインド洋海域史では言及はされても、十分な考察対象になってこなかった⁹⁹。

このラリン銀貨を交易によって集めていたのが、ホルムズであった。もともとホルムズはペルシア系の王国であり、ホルムズとイラン本土との交易活動は活発だった。ホルムズ王国はサファヴィー朝ペルシアの王や王族、使節たち、ラールやシーラーズ、マクランなどの地方政権の長たちなどに免税特権を与えていた¹⁰⁰。こうした事実から、ホルムズはサファヴィー朝ペルシアの中央政府だけでなく、地方政権とも関係が深く、イラン各地の政治勢力がホルムズとの交易活動によって、大量のラリン銀貨を持ちこんでいたことがわか

⁹⁶ Barbosa, *Livro do que viu e ouviu no oriente*, p. 30; Barbosa, *The Book of Duarte Barbosa*, vol. 1, pp. 99-100. *larin* は原文では *larim* と表記されているが、英訳では *tangas* となっている。ラリン銀貨については、後述する。

⁹⁷ *Encyclopaedia of Islam*, new ed., s. v. "Larin" by J. Allan; Silva, *History of Coins and Currency in Sri Lanka*, p. 78.

⁹⁸ 「アフォンソ・デ・アルブケルケがオルムスからシェケ・イズマエルのもとに派遣した使節の記録」バロス（生田他訳）『アジア史（二）』、477頁。

⁹⁹ ラリン銀貨については、Boxer, *The Portuguese Seaborne Empire, 1415-1825* (London: Hutchinson, 1969) p. 41; Subrahmanyam, "Precious Metal Flows and Prices in Western and Southern Asia, 1500-1750," pp. 191, 196; Vosoughi, "The Kings of Hormuz," p. 98 を参照。フロアヤテレス・エ・クーニャのホルムズの論考では言及されていない。サファヴィー朝ペルシア史研究者でもある羽田正の『東インド会社とアジアの海』（講談社、2007年）も、ラリン銀については言及していない。同著は真珠も交易品に挙げていない。

¹⁰⁰ Barros, *Segunda decada da Asia*, livro 10, cap. 7, fol. 235v.; バロス（生田他訳）『アジア史（二）』、416頁。

る。先述したように、バルボザは、ホルムズには細長いラリン銀貨が大量にあると述べていた。

イラン各地からホルムズへのラリン銀貨の流入は、16世紀や17世紀前半に顕著だった。リンスホーテンや17世紀初めのピラールは、一本の銀を打ち延ばして折り曲げたような銀貨がペルシアからホルムズに入ってきていると述べている¹⁰¹。17世紀初めのテイシェイラは、ペルシア商人はラリン銀貨の他、金、生糸、絹織物、綿織物、絨毯、馬、ミョウバンなどをホルムズに輸出して、コショウなどの各種スパイス、中国製陶器などとともに、宝石、真珠 (*aljofar*) などを持ち帰っていると述べている¹⁰²。ペルシアは、後述するように、ペルシア湾の真珠の「伝統的希求地」である。ペルシア民族の真珠獲得の熱意は高く、彼らは真珠と引き換えにホルムズにラリン銀貨をもたらしていた。

リンスホーテンやピラール、テイシェイラによると、ラリン銀貨は、インド世界で最上と見なされていた銀貨であり、各地で大きな需要があるため、ホルムズからインドへ大量に輸送されていた。インドでは、ラリン銀貨は他の一般商品と同じように大掛かりに取引され、商人たちに大きな利益を与えていた¹⁰³。つまり、ラリン銀貨は、インド洋海域世界全般で広く流通していた基軸通貨であり、商品としても高い価値があったのである。ピラールは、ホルムズからゴアへ運ばれる物品は、第一が真珠であり、次がラリン銀貨であると述べている¹⁰⁴。

ラリン銀貨は、インド洋海域世界においてコショウをはじめとする物品の買付に欠かせない銀貨でもあった。リンスホーテンは、1583年から88年までのゴア滞在の後半にコショウ仲買人となったが、彼によると、ポルトガル人がコーチンでコショウを買うにはラリン銀貨が必要で、スペイン銀貨はラリン銀貨と交換する必要があった¹⁰⁵。ピラールは、インド洋海域世界では、ラリン銀貨が最上で、これに続くのが日本銀、最悪なのは西インドからの銀であると述べている¹⁰⁶。アジアのコショウ商たちは、品質粗悪なスペイン銀貨の受け取りを拒否していたことがうかがえる。

ここで注意すべきことは、コショウ購入のためスペイン銀貨をラリン銀貨と交換する必要があったのは、喜望峰を回る「インド航路」でインドまで来たポルトガルのコショウ専買商人や官吏たちであったことである。ホルムズ滞在のポルトガル人当局者や民間ポルト

¹⁰¹ Linschoten, *Itinerario*, vol. 1, p. 36 (chap. 6), vol. 1, p. 140 (chap. 29), vol. 2, p. 14 (chap. 35); リンスホーテン (岩生他訳) 『東方案内記』、120~121頁、292頁、341~342頁; Pyrard, *The Voyage of Francois Pyrard of Laval*, vol. 2, p. 174.

¹⁰² Teixeira, *The Travels of Pedro Teixeira*, p. 252.

¹⁰³ Linschoten, *Itinerario*, vol. 1, p. 36 (chap. 6), vol. 1, p. 140 (chap. 29), vol. 2, p. 14 (chap. 35); リンスホーテン (岩生他訳) 『東方案内記』、120頁、292頁、341頁; Pyrard, *The Voyage of Francois Pyrard of Laval*, vol. 2, p. 174; Teixeira, *The Travels of Pedro Teixeira*, p. 241.

¹⁰⁴ Pyrard, *The Voyage of Francois Pyrard of Laval*, vol. 2, pp. 239, 261.

¹⁰⁵ Linschoten, *Itinerario*, vol. 1, p. 140 (chap. 29); リンスホーテン (岩生他訳) 『東方案内記』、292頁。

¹⁰⁶ Pyrard, *The Voyage of Francois Pyrard of Laval*, vol. 2, p. 174.

ガル商人たちは、スパイスの購入に欠かせないラリン銀貨をすでにホルムズで得ている人々だった。

以上の話をまとめると、ホルムズは、16世紀を通じ、イラン本土からのラリン銀貨の流入口として機能し、それをインド洋海域世界に供給する役割を果たしてきたことが明らかになる。本節の考察によって、ポルトガルによる真珠集散地ホルムズ支配とは、ポルトガル人が、真珠のみならず、宝石、金、銀——特にラリン銀貨——を調達できる市場の掌握だったことが判明する。ポルトガル海洋帝国は「ペルシア湾真珠生産圏」を扼することで、すでに16世紀前半に、インド洋海域世界でもっとも重用される真珠とラリン銀貨を得ていたのである。ポルトガルのホルムズ支配の意義は、真珠とともに、コショウ購入に欠かせないラリン銀貨も早くから得たことであった。

3.4 海域支配と真珠採取税

ポルトガル海洋帝国は、「ペルシア湾真珠生産圏」支配によって、海域からもさまざまな税を引き出した。もともとホルムズ王国は、アラビア側とペルシア側に版図を持ち、ペルシア湾を内海とする「海洋帝国」であった。それゆえ、ポルトガルによるホルムズ王国支配は、宗主国ポルトガルがペルシア湾の海上覇権を掌握したことを意味した。この海域支配について記しているのが、1582年のポルトガルの公式報告書『ポルトガル王室の各都市、各要塞に関する報告書』である。この報告書は、1580年にポルトガルがスペインに併合された時、ポルトガル領インドの情勢を説明するために執筆されたものである。著者は不明である¹⁰⁷。

この報告書によると、ポルトガル海洋帝国は、ホルムズ島警備のために2隻のガレー船と数隻のフスタ船から成る艦隊を配備していた。また、その艦隊の司令官一名がホルムズ海峡の警備に当たって、この海域で跋扈する盗賊や海賊を取り締まっていた¹⁰⁸。一定の配備はあったが、ホルムズ島とホルムズ海峡警備の艦隊は意外と小規模であり、それだけで十分だったのかどうかは疑問が残る。17世紀のポルトガル海洋帝国は、単独で随時巡航し

¹⁰⁷ “Livro das cidades, e fortalezas que a coroa de Portugal tem nas partes da Índia,” pp. 1-107. この報告書については、生田滋「インド洋貿易圏におけるポルトガルの活動とその影響」生田滋・岡倉登志編『ヨーロッパ世界の拡張——東西貿易から植民地支配へ』（世界思想社、2001年）、1~50頁；高瀬弘一郎『モンソーン文書と日本——十七世紀ポルトガル公文書集』（八木書店、2006年）、39~65頁を参照。

¹⁰⁸ “Livro das cidades, e fortalezas que a coroa de Portugal tem nas partes da Índia, e das capitánias, e mais cargos que nelas ha, e da importância delles,” ed. Francisco Paulo Mendes da Luz, *Studia* 6 (July, 1960), ff. 36v-37r. この報告書については、生田滋「インド洋貿易圏におけるポルトガルの活動とその影響」生田滋・岡倉登志編『ヨーロッパ世界の拡張——東西貿易から植民地支配へ』（世界思想社、2001年）、1~50頁；高瀬弘一郎『モンソーン文書と日本——十七世紀ポルトガル公文書集』（八木書店、2006年）、39~65頁を参照。本論文では、第5章でも検討する。フスタ船は、16世紀・17世紀のポルトガルの小型帆船で、両舷に櫂をつけている。大砲を備えた軍船であり、南蛮船としても知られている。

て、敵船と戦う機動艦隊 (*Armada dos Aventureiros*) を保有していたので、16 世紀においても、有事の際にはこうした機動艦隊が援軍のためにペルシア湾に出動したと考えられる¹⁰⁹。

平時におけるポルトガルによるペルシア湾支配は、海域全般を恒常的に掌握しているというよりは、次の二点の掌握を重視し、それによって利益を引き出した。第一に、ホルムズ海峡の軍事的支配による通行税である。第二に、真珠採取期に真珠の漁場を支配し、真珠採取権をポルトガルに帰属させ、真珠採取税を徴収することであった。

1582 年の公式報告書は、ホルムズ海峡の艦隊の経費は、商品に課された 1 パーセントの税によってまかなわれていると述べているが、おそらくこの税が通行税と推測できる¹¹⁰。もともとホルムズ王国は、13 世紀末にイラン本土からホルムズ島に拠点を移して以来、同島の地の利を生かし、ホルムズ海峡を航行する船に通行税を課してきた伝統をもっていた¹¹¹。アルブケルケは 1514 年 11 月 27 日の書簡で、「毎年、多数のナウがホルムズに向かうための保証書 (*seguros*) を求めている」と語っており、すでに 1514 年にホルムズ海峡を通る船に一定の通航税を課していたことがわかる¹¹²。17 世紀半ばのタヴェルニエは、ポルトガルのホルムズ長官は、ペルシア湾を出入りする船から通行税を徴収していたと述べている¹¹³。ポルトガル海洋帝国が、インド洋を行き交う船にカルタス (通行許可証) を発行して、通行税を徴収したことはよく知られている¹¹⁴。こうしたことを勘案すると、16 世紀のホルムズ海峡の艦隊は、おそらくカルタスなどを発行することで、船の積荷総額の 1 パーセントを通行税として徴収していたと推測できる。

ポルトガルの海域支配による第二の収益が、真珠採取税である。ペルシア湾には約 300 の真珠の漁場が存在する。沖合で真珠採取を行う夏の季節になると、ペルシア湾岸の各地

¹⁰⁹ 高瀬『モンsoon文書と日本』、50 頁；Teles e Cunha, “The Portuguese Presence in the Persian Gulf,” pp. 215-6.

¹¹⁰ “Livro das cidades, e fortalezas que a coroa de Portugal tem nas partes da Índia,” f. 36v. ペルシア湾史の先行研究は、通行税については言及していない。フロアは、ホルムズ港の停泊税しか述べていない (Floor, *The Persian Gulf*, p. 73)。テレス・エ・クーニャは、ホルムズ海峡とオマーン沖の小艦隊について述べているが、1 パーセント税は考察していない。Teles e Cunha, “The Portuguese Presence in the Persian Gulf,” p. 216.

¹¹¹ Barros, *Segunda decada da Asia*, livro 2, cap.2, fol. 25v.; バロス (生田他訳) 『アジア史 (一)』、119 頁。

¹¹² “Carta 89 (November 27, 1514) and Carta 101 (September 22, 1515),” in *Cartas de Affonso de Albuquerque*, vol. 1, pp. 346, 370. これらの書簡では、ホルムズに向かう船に「保証」を与えたことが記されており、*seguro(s)* の語彙が使われている。「アフォンソ・デ・アルブケルケの 1515 年 9 月 22 日付国王宛書簡」及び「アフォンソ・デ・アルブケルケの 1514 年 11 月 27 日付国王宛書簡」バロス (生田他訳) 『アジア史 (二)』、460 頁、478 頁も参照。

¹¹³ Tavernier, *Travels in India*, vol. 1, p. 191.

¹¹⁴ カルタスについては、M. N. ピアスン (生田滋訳) 『ポルトガルとインド——中世グジャラートの商人と支配者』(岩波書店、1984 年、原著 1976 年)、62~71 頁；岡「一六世紀『大航海』の時代とアジア」、95~96 頁を参照。

各港から多くの真珠採取船が漁場に向かう。こうした真珠採取船に課税するのは、「ペルシア湾真珠生産圏」や「紅海真珠生産圏」における伝統的な方法であり、海上覇権を打ち立てた政治勢力の特権であった。先述したように、14世紀のホルムズ王国は、バハレーン海域などで実施される真珠採取から五分の一の真珠を徴収していた。また、同王国は、16世紀初めには真珠 (*aljofar*) を採取する船に一定の税を課していた。

フェルナンデスは、真珠採取税は *magumbayas* と呼ばれ、その徴収はホルムズ王国が行い、ポルトガルは、そうした徴税が無事実施されるよう海域を管轄した、1622年以降は、ポルトガルが直接、徴収するようになった、と述べている¹¹⁵。はたして、ポルトガルは、ホルムズを失うまで、ホルムズ王国に真珠採取税の徴収を一切任せていたのだろうか。フェルナンデスの論考は、真珠採取税の徴収方法については述べていない。また、カルタス制度と真珠採取税がどう係わったのかも述べていない。

タヴェルニエやシャルダンなどの17世紀半ばのフランス人宝石商たちは、ポルトガルはホルムズ支配期に真珠採取税を徴収していたことを、次のように記している。

ポルトガルがホルムズとマスカットを扼している時は、各々のテラダ船、すなわち真珠採取に行く船に許可証を取得することを義務づけ、その取得に15アッパーシーを払わせた。多くのブリガンティン船が海域を巡航し、許可証を得ようとしない船を沈没させた。しかし、アラブ人がマスカットを奪い返し、ポルトガルがペルシア湾において絶対的な存在ではなくなると、真珠採取をするすべての人は、彼の真珠漁が豊漁であろうとなかろうと、ペルシア王に5アッパーシーだけ払っている。商人も真珠貝1000個ごとに少額を王に払っている¹¹⁶。

シャルダンも、ポルトガルがホルムズとマスカットを失うと、ポルトガルの許可証を取得する真珠採取船はごくわずかとなった、と述べている。彼によると、ペルシア湾における真珠採取船の数は1000隻程度だった¹¹⁷。

タヴェルニエやシャルダンの記述から、ポルトガルはホルムズ支配時から、ペルシア湾における真珠採取権を主張し、真珠採取船に許可証を発行して、その購入代金を真珠採取税として取り立てていたことが判明する。真珠採取船はもともとペルシア湾内にいるので、真珠採取税は、通行税とは異なるカルタス制度下での実施であることも推定できる¹¹⁸。タ

¹¹⁵ Fernandes, “The Portuguese Cartazes System and the ‘Magumbayas,’” pp. 12-3.

¹¹⁶ Tavernier, *Travels in India*, vol. 2, p. 108. アッパーシーはペルシアの銀貨。筆者の計算では1アッパーシーは96レイスになる。Barbosa, *The Book of Duarte Barbosa*, vol.1, p. 99, note 1 を参照。

¹¹⁷ シャルダン (佐々木他訳) 『ペルシア紀行』、510~511頁；シャルダン (岡田訳) 『ペルシア見聞記』、85頁。ピストールはスペイン銀貨。

¹¹⁸ フェルナンデスは、ペルシア湾のカルタス制度に言及しているが、ポルトガルはその制度によって真珠採取税を徴収したのか、通行税を徴収したのか、明確に述べていない。

Fernandes, “The Portuguese Cartazes System and the ‘Magumbayas,’” pp. 12-3.

ヴェルニエやシャルダンの記述やペルシア湾・紅海世界の海上覇権国家による真珠採取税の実施の伝統を勘案すると、ポルトガルが16世紀に真珠採取税を徴収していたと考えるのが妥当である。

17世紀初期にバハレーンとホルムズを奪ったサファヴィー朝ペルシアは、海洋国家ではなかったが、イギリス東インド会社の援助を得て、海上覇権を実現し、真珠採取税を得ることになった。イギリスもサファヴィー朝ペルシアを援助することで、少額の真珠採取税を受け取るようになった¹¹⁹。ペルシア湾岸の政治勢力にとって、海域とは真珠採取業という水産業から収益を得ることのできる場であった。ポルトガル海洋帝国も、「ペルシア湾真珠生産圏」の海域支配を通し、富を引き出したのである。

以上、ポルトガルにとって「ペルシア湾真珠生産圏」の支配が、なぜ重要であり、どのように富を引き出したのかを考察した。ポルトガル植民地政府は、ペルシア湾の真珠（*aljofer*）の採れる海域、真珠採取地、集散地が有機的に結びついた「真珠生産圏」を政治的・軍事的に支配することで、税として大量の真珠の他、真珠採取税も徴収した。さらに真珠集散地ホルムズの機能により、アジアの国際商人からも多大な金、銀を引き出した。とりわけ、ホルムズがイラン本土から引き出したラリン銀は莫大であった。ポルトガルにとって、「ペルシア湾真珠生産圏」支配の歴史的意義は大きかったのである。

第4節 16世紀の「ペルシア湾真珠生産圏」の真珠採取

本節では、真珠のコモディティ・チェーン分析における生産面、すなわち16世紀のペルシア湾での真珠採取の生産現場について検討する。

16世紀のペルシア湾の真珠採取については、フェルナンデスとカーターの研究があるが、「はじめに」で述べたように、ペルシア湾の真珠採取とマンナール湾の真珠採取を混同しており、基本的な点での事実誤認がある。また、本節で述べる潜水夫の債務隷属制についても考察していない。したがって、彼らの論考だけで、真珠採取の生産面が全面的に解明されたとは言い難い。本節では16世紀及びその前後の時代の一次史料、ペルシア湾の真珠採取全般に関する研究文献などを分析し、真珠採取の実態、生産者、潜水労働者などを考察する。

4.1 前金制度と債務隷属制真珠業

16世紀のポルトガル人は、真珠採取地バハレーンの間接支配には腐心してきたが、「南米カリブ海真珠生産圏」のような真珠採取業者にはならなかった。その一因は、ポルトガル領インドでの永住を選んだ民間ポルトガル商人の目的が、真珠や宝石などの入手による致富であり、生産者になることではなかったからである。第二の要因は、真珠採取の長い歴史のある「ペルシア湾真珠生産圏」では、アラブ系、ペルシア系の真珠商たち、とりわけ

¹¹⁹ Tavernier, *Travels in India*, vol. 1, p. 191.

生産現場から直接真珠を入手する現地の卸商たちが排他的に真珠を獲得するシステムを構築しており、新参者の参入は難しい状況になっていたからである。アラブ系・ペルシア系の真珠商たちが構築したシステムは、前金制度とその債務による潜水夫の隷属化であった。

第1章と第2章で参照した10世紀後半のアラビア語文献『インドの驚異譚』の逸話によると、8世紀末から9世紀初めのオマーン沖のクロチョウ真珠の採取では、真珠採取業者が賃金を払って潜水夫を雇用していた¹²⁰。すでにこの時期に賃金の前払い制と資本と労働の分離を見ることができる。14世紀のイブン・バットゥータは、ペルシア湾の真珠採取では商人たちの多くが、潜水夫たちに前貸しし、その返済の形として採取した真珠を潜水夫から取り上げると述べている¹²¹。

前金制度はペルシア湾の真珠採取の伝統であり、真珠採取のない時期の潜水夫の暮らしを支えるためにも前金は必要だった。潜水夫からは感謝されていたが、その実情は、債務を負っている潜水夫たちは借金から抜け出すことができなくなり、資本を提供する商人の隷属的な立場に置かれていたことである¹²²。イスラーム社会では同じムスリムの奴隷化を禁じているため、潜水夫の身分は自由民であった。しかし、債務は子に引き継がれ、彼らは実質的に債務奴隷の立場にあった¹²³。ペルシア湾の真珠商たちは、真珠採取に欠かせない潜水夫を借金漬けにすることで、労働力を確保し、紐付きで真珠を得る手段にしていたのである。本論文ではこうした形態でなされる真珠採取を「債務隷属制真珠採取業」または「債務隷属制水産業」と定義する。

ベネズエラ・クバグア島の真珠採取業者フランシスコ・デ・レルマは1532年の書簡において、バハレーンの自由民（の潜水夫）は借金漬けであると語っている¹²⁴。この書簡の記述からペルシア湾の「債務隷属制真珠採取業」は16世紀においても実施され、しかも広く新世界まで知られていたことがわかる。1513年12月4日付のアルブケルケの書簡は、紅海の「債務隷属制真珠採取業」について語っている。アルブケルケは、カイロ、ジッダ、アデンの商人たちが金銭（*dinheiro*）、商品、食糧をもって真珠採取地のマサワとダフラクに向かい、前貸ししていた潜水夫たちから大量の真珠を得ていると述べている¹²⁵。

こうした記録によって、「債務隷属制真珠採取業」は16世紀のペルシア湾、紅海において共通に見られる伝統的な特徴であったことが明らかになる。こうした排他的システムに

¹²⁰ ブズルク・イブン・シャフリヤール（藤本勝次他訳注）『インドの不思議』（関西大学出版・広報部、1978年）、96~98頁（第87話）；ブズルク・ブン・シャフリヤール（家島彦一訳注）『インドの驚異譚（2）』（平凡社、2011年）、53~58頁（第93話）。

¹²¹ イブン・バットゥータ（家島訳）『大旅行記（3）』、189頁。

¹²² 前金制度による潜水夫の隷属化は20世紀においても維持されていた。20世紀前半のバハレーンの状況については、当時の同国の顧問官だったベルグレイヴの回顧録（二海訳）『ペルシア湾の真珠』、65~69頁を参照。ベルグレイヴは1920年代にこの前金制度を改善しようとしたが、現状維持を求め、改善策に反対したのは、潜水夫たちであった。

¹²³ ベルグレイヴ（二海訳）『ペルシア湾の真珠』、65~69頁。

¹²⁴ Enrique Otte, *Las perlas del Caribe: Nueva Cádiz de Cubagua* (Caracas: Fundación John Boulton, 1977), p. 361.

¹²⁵ “Carta 41 (December 4, 1513),” in *Cartas de Afonso de Albuquerque*, vol. 1, p. 224.

よって、ポルトガルの新規参入は難しく、ポルトガル資本は投下されなかった。ただ、ポルトガル海洋帝国は、政治力・軍事力によって「ペルシア湾真珠生産圏」をおさえていた。真珠採取や流通に係わるアラブ系・ペルシア系の現地商人は、ポルトガルが海上覇権を握っている以上、真珠採取業の遂行のためにはポルトガルの権威を名目上は敬う必要があった。ポルトガルは真珠の生産体系に加わらなくても、「ペルシア湾真珠生産圏」における特権的な立場を得たのである。

4.2 潜水労働者：アラブ系潜水夫とアフリカ人奴隷の輸入

ペルシア湾の真珠採取の潜水労働力となってきたのは、バハレーン島やその周辺の島嶼部の住民、カティーフやジュルファルなどのアラビア半島東岸のアラブ系の住民たちであった。ペルシア人潜水夫も存在していたが、アラブ人と比べると、その数は圧倒的に少なかった¹²⁶。真珠採取の潜水夫は、それを専業あるいはほぼ専業とする人々であった。アルブケルケはバハレーンで真珠採取をする人は、そこで1年分の暮らしを手に入れる貧しい労働者であると述べている¹²⁷。こうした潜水夫にとって、真珠採取の収入だけが生活の手段であった。貧しい潜水夫にとっては、真珠採取船の船長や船主などが支払ってくれる前金は生活資金となるため、前金制度は潜水夫たちによって感謝され浸透したのであった。ただ、潜水夫がすべて貧しいわけではなく、バルボザによると、真珠採取で多くの利益を得ている潜水夫や住民も存在した¹²⁸。

15世紀のイブン・マージドによると、バハレーンには1000隻の真珠採取船が停泊していた¹²⁹。ヴァルテマは、ホルムズから三日の航行で到達できる島には、他国に属する船が300隻も集まると述べている¹³⁰。一方、17世紀のシャルダンは、ペルシア湾で操業する真珠採取船の数は1000隻程度と述べている¹³¹。こうした情報を勘案すれば、16世紀において、バハレーン海域や他のペルシア湾海域で操業する船は、ペルシア湾の船や他国の船を含め、1000隻程度、あるいは1000隻以上存在したと考えられる¹³²。通常、1隻の船に5

¹²⁶ Donkin, *Beyond Price*, p. 127. ペルシア湾の真珠採取は、重石を使って潜水する。その方法は20世紀初めまで続けられた。16世紀初めの真珠採取の様子は、ヴァルテマが報告している。Varthema, *The Travels of Ludovico di Varthema*, p. 95.

¹²⁷ “Carta 50 (October 20, 1514),” in *Cartas de Affonso de Albuquerque*, vol. 1, p. 264.

¹²⁸ Barbosa, *Livro do que viu e ouviu no oriente*, p. 24; Barbosa, *The Book of Duarte Barbosa*, vol. 1, pp. 81-2.

¹²⁹ Ahmad ibn Mājid, *Arab Navigation in the Indian Ocean before the Coming of the Portuguese: Being a Translation of Kitāb al-Fawā'id fī usūl al-baḥr wa'l-qawā'id of Ahmad b. Mājid al-Najdī*, trans. G. R. Tibbetts (1971; London: Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, 1981), pp. 213, 222.

¹³⁰ Varthema, *The Travels of Ludovico di Varthema*, p. 95.

¹³¹ シャルダン (佐々木他訳) 『ペルシア紀行』、511頁。

¹³² テイシェイラの『ホルムズ王統史』の記事によると、沖合で真珠採取を行う大漁期には200隻前後の真珠採取船(テラダ船)がカタール沖の漁場に向かった。“A Short Narrative of the Origin of the Kingdom of Harmuz,” in *The Travels of Pedro Teixeira*, p. 176.

人から 15 人ぐらいの潜水夫が乗船する¹³³。さらに、潜水夫を海から引き上げる補助役の水夫が、潜水夫と同数あるいはやや多めで存在する。このことを勘案すれば、5000 人から 1 万 5000 人ぐらいの間で潜水夫が存在し、それと同数あるいはそれ以上の補助役の水夫たちがいた。

アラブ系、ペルシア系の潜水夫以外に、真珠採取の第二の労働力になったのが、東アフリカ海岸から徴発されたアフリカ人奴隷とその解放奴隷である。ペルシア湾岸とアフリカ東海岸はすでに 9 世紀に奴隷貿易で結びついていた¹³⁴。イスラーム社会では奴隷制は容認されていたが、奴隷として徴用できるのはイスラーム世界の外に住む異教徒か奴隷の子供であった。奴隷を解放することはイスラーム教徒の行う善行のひとつとされており、奴隷が自由民になる社会身分の流動性も高かった。それゆえ、ペルシア湾世界では慢性的な奴隷不足を生じており、東アフリカ海岸は伝統的な奴隷供給の地域であった¹³⁵。

16 世紀のペルシア湾の真珠採取における奴隷化されたアフリカ人の詳細は明らかではない。ただ、16 世紀初めにはエチオピア人がイスラーム教徒によって奴隷として売買され、ペルシア、イエメン、メッカ、カイロ、インドなどに送られていた¹³⁶。16 世紀のポルトガル人も奴隷貿易に従事しており、モザンビークから大量の奴隷をインドに輸出していた¹³⁷。17 世紀半ばのオマーンでは、多くのアフリカ人奴隷が真珠採取で使役されており、19 世紀のペルシア湾の真珠採取にもアフリカ人奴隷が投入されていたことが知られている¹³⁸。

こうした事実を勘案すると、イスラーム商人やポルトガル商人によってもたらされたアフリカ人奴隷や解放奴隷がペルシア湾岸の潜水夫として真珠採取の社会システムに吸収され、さらにアラブ系真珠採りの人々との混血が進み、アラブ・アフリカ系の真珠採り潜水夫の社会を形成していったと推定できる。17 世紀初めのピラールは「ホルムズの住人はほとんどエチオピアのムスリムのように黒い」と述べている¹³⁹。20 世紀の旅行者たちは、ペ

¹³³ Donald Ferguson, "The Bahrein Pearl Fisheries," *Journal of the Society of Arts* (March 1901), pp. 314-5.

¹³⁴ Abdul Sheriff, "The Persian Gulf and the Swahili Coast: A History of Acculturation over the *Longue Durée*," in *The Persian Gulf in History*, ed. Lawrence G. Potter (New York: Palgrave Macmillan, 2009), p. 182.

¹³⁵ Sheriff, p. 182.

¹³⁶ Varthema, *The Travels of Ludovico di Varthema*, p. 86. 家島彦一によると、10 世紀半ば以降、キーシュ島を拠点とするペルシア湾の海上商人たちは奴隷貿易にも従事しており、彼らはエチオピア内陸部や東アフリカ海岸の黒人系奴隷を船に積んで、イエメンやペルシア湾の交易港に運んでいた。黒人系奴隷はおもに軍人や運搬、土木、農業などの肉体労働に投入された（家島彦一『海が創る文明』、171 頁）。

¹³⁷ リンスホーテン（岩成成一他訳）『東方案内記』岩波書店、1968 年、374~375 頁（原本第 41 章）。

¹³⁸ Sheriff, "The Persian Gulf and the Swahili Coast," p. 183; Matthew S. Hopper, "Enslaved Africans and the Globalization of Arabian Gulf Pearlming," in *Pearls, People, and Power: Pearlming and Indian Ocean Worlds*, ed. Pedro Machado et al. (Athens: Ohio University Press, 2019), pp. 263-80.

¹³⁹ Pyrard, *The Voyage of Francois Pyrard of Laval*, vol. 2, p. 243. ベルグレイヴもバハレーンの潜水夫の多くは黒人であると述べている。ベルグレイヴ（二海訳）『ペルシア湾の真

ルシア湾の真珠採りや船長には肌の色の黒い人が多く、アフリカ系の血が明確に見られるにもかかわらず、彼ら自身はアラブだと主張すると伝えている¹⁴⁰。16世紀においてもペルシア湾世界では、現地アジア商人たちによるトランスリージョナルなヒトの輸送があり、真珠採取の労働力としてアフリカ人奴隷や解放アフリカ人奴隷が入っていたと考えられる。

4.3 ポルトガルの海域支配の脅威としての真珠採り集団

ポルトガル海洋帝国が、軍事力によってペルシア湾の海上覇権を握っていたことは、すでに第3節で考察した。アラブ系やアフリカ系の真珠採り潜水夫たちは、ポルトガルの海上支配を一応認めていたが、中にはポルトガルの脅威となる真珠採り集団も存在した。それが、ナヒラス (*Nakhilus*) と呼ばれた集団である。ナヒラスについては、J. テレス・エ・クーニャや W. フロアが考察している¹⁴¹。真珠採りの生態を知る上で興味深い事例なので、彼らの研究を参考にして述べておく。

ナヒラスはもともとペルシア湾のアラビア側沿岸部を拠点に真珠採取を行っていたが、1564年以降、近隣住民との不和やおそらく真珠漁場が衰退したことで、ペルシア側沿岸部に移ってきた。彼らは6月から8月にかけてバハレーンの海域で真珠採取を行い、9月にはオマーン沖でも実施した。同時にホルムズ・バスラ・ルートの船を襲撃した。ポルトガルはナヒラスを征伐するため、1580年代に三つの遠征隊を派遣したが、思うような成果は出せなかった。彼らは抵抗勢力であり続け、ポルトガルのペルシア湾における治安維持活動の弱体化を示すことになった¹⁴²。

この話は真珠採り潜水夫が集団となり、最適な真珠の漁場を求めて行動すると、強力な水軍集団あるいは海賊集団となることを示している。ポルトガルの海上覇権を脅かす存在には、ペルシア湾岸の諸国家や諸都市の政治勢力ばかりではなく、海の状態を知悉している真珠採り潜水夫集団も含まれていた。

4.4 ペルシア湾の真珠の生産について

16世紀のペルシア湾における真珠の生産量や生産額は明らかではない。しかし、17世紀初めの真珠の取引額については、先述したように、テイシェイラが語っている。彼によると、バハレーン島の公式の真珠の取引額 50 万ドゥカドに加え、密輸で消えていく 10 万ドゥカドがあった¹⁴³。バハレーンだけで少なくとも 60 万ドゥカドの取引額があるので、カテイーフやジュルファル、ペルシア湾に数多く存在する島嶼での取引、真珠商たちの沖買い

珠』、56頁、59頁。

¹⁴⁰ Sheriff, “The Persian Gulf and the Swahili Coast,” p. 183.

¹⁴¹ Floor, *The Persian Gulf*, pp. 43-6; Teles e Cunha, “The Portuguese Presence in the Persian Gulf,” p. 216.

¹⁴² ナヒラスについては、テイシェイラも記している。Teixeira, *The Travels of Pedro Teixeira*, pp. 21-2, 176.

¹⁴³ Teixeira, *The Travels of Pedro Teixeira*, p. 176.

なども含めると、60 万ドゥカド以上の大きな額が公式及び非公式に取引されていたと推測できる。

17 世紀の宝石商シャルダンは、バハレーン島付近の海域の真珠採取量は豊富であり、一年に 100 万個以上の真珠が採れたと語っている¹⁴⁴。仮に 100 万個以上の真珠が、4 グレーン（直径 5.23 ミリ）で 1 ドゥカドの真珠とすると、100 万ドゥカド以上の生産額があることになる¹⁴⁵。シャルダンはペルシア湾では 10 グレーン（直径 7.15 ミリ）から 12 グレーン（直径 7.60 ミリ）の真珠が採れたとも語っているので、そうした真珠は 1 ドゥカドよりはるかに高額になる。ただ、1 カラット以下の真珠も多く採れていたはずであり、100 万個以上の真珠の生産額は、一概には言えない。ただ、テイシェイラの数字と比較すると、両者の数字はそれほど離れておらず、テイシェイラの語る真珠の取引量 60 万ドゥカドは、信頼できる数字であることがわかる。ペルシア湾の真珠採取業は、莫大な富を生み出す水産業だったのである。

以上、真珠のコモディティ・チェーン分析の生産の実態を考察した。本節では、(1) 「ペルシア湾真珠生産圏」では、アラブ系・ペルシア系の真珠商たちによる「債務隷属制真珠採取業」が確立していたこと、(2) 潜水労働力となったのは、主に債務を負っているアラブ系住民だったこと、(3) 奴隷化されたアフリカ人も真珠採取に使役されたことを明らかにした。南米カリブ海の真珠採取業は西アフリカから奴隷化した人々を輸入していたが、ペルシア湾の真珠採取業は、東アフリカから潜水労働力を徴発していた。真珠採取業はアフリカ大陸を労働力の供給地とし、大陸を超えたヒトの移動を促進したのである。

第 5 節 真珠の希求地、希求者

本節では、真珠のコモディティ・チェーン分析の希求面の考察を行う。フェルナンデスの研究では真珠の希求や流通は考察されておらず、カーターは、真珠の希求者としてヨーロッパしか見ておらず、アジアでの真珠需要を考察していない。本論文は「伝統的希求地／希求者」、「新興希求地／希求者」という概念を提唱している。「ペルシア湾真珠生産圏」では「伝統的希求地／希求者」の考察は特に重要であり、それによって、多くのアジアの人々の真珠需要を明らかにできると同時に、アジア世界でポルトガル人がこの商品を手にした歴史的意味も解明できる。

5.1 伝統的希求者 1： サファヴィー朝ペルシア

イラン本土は、その西岸がペルシア湾に面している。それゆえ、イランに勃興する諸王

¹⁴⁴ シャルダン（岡田訳）『ペルシア見聞記』、85 頁。

¹⁴⁵ 16 世紀末のリンスホーテンは、丸く光沢のある真珠（*peerle*）は、1 カラット（4 グレーン）、1 ドゥカドの価値があると述べている。Linschoten, *Itinerario*, vol. 2, p. 183 (cap. 91); リンスホーテン（岩生訳）『東方案内記』、565 頁を参照。

朝は、紀元前から真珠を愛好してきた伝統をもつ。アケメネス朝ペルシアの真珠の考古史料としては、パサルガダエから出土した 244 個の穿孔された真珠のコレクションや、スサから出土した三連タイプの真珠のネックレスなどがある。スサの真珠のネックレスは、ネックレスの形態で出土したもっとも早い事例のひとつとされており、女性の遺骨が納められた棺から出土した。発見時にかなりの真珠が粉状になったが、いまでも 200 個以上が残っている。ネックレスには直径 5 ミリのディスク状の黄金製飾も使用されている¹⁴⁶。このネックレスの真珠の大きさは、黄金製ディスクよりもやや小さいため、直径 3 ミリから 5 ミリぐらいと推定できる。真珠の量の多さとその大きさ、穿孔された真珠、スサという場所から考えて、これらの真珠はペルシア湾のアコヤ系真珠の可能性が高い。古代ペルシア王朝が、ペルシア湾の真珠を数百個単位で使用する希求者だったことを示している。

スサの真珠のネックレスは女性用であるが、イランの諸王朝では、真珠は王の威信財としても使用されてきた。真珠は、王冠、玉座、宝剣、武具、調度品など、身分と権威を象徴するさまざまなものに使用された。イラン本土やその影響下の土地は、ペルシア湾の真珠を何百年あるいは千年以上にわたって希求してきた「伝統的希求地」であった。16 世紀のサファヴィー朝ペルシアは、こうしたイランの真珠愛好の文化を引き継いだ「伝統的希求者」だった¹⁴⁷。

バロスは『アジア史』の中で、ペルシア人は由緒正しく、高貴で、洗練されていると述べ、彼らが使用するものは、「金、銀、真珠 (*perlas*)、宝石および絹」であると述べている¹⁴⁸。ピレスも、ペルシア商人がホルムズで買い付けるのは、コショウの他、真珠 (*allJofar*)、米、白布などであると伝えている¹⁴⁹。こうした記述により、16 世紀のイランにおいて真珠が希求されていたことがわかる。

すでに検討してきたように、イスマーイール 1 世がバハレーンとカティーフの領有に意欲を示し、アッバース 1 世がバハレーンとホルムズをポルトガルから奪ったのは、このペルシア王朝が真珠の「伝統的希求者」であったからである。アッバース 1 世は「ペルシア湾真珠生産圏」を支配することで、その真珠を享受するようになったのである。

5.2 伝統的希求地 2： メソポタミア地方及びその中継都市

メソポタミア地方はその南部がペルシア湾に面している。この地方では、最古の文明とされるシュメールの都市遺跡から多くの真珠が出土しており、古来、ペルシア湾の真珠の

¹⁴⁶ イランの諸王朝の真珠の受容については、Kunz and Stevenson, *The Book of the Pearl*, pp. 404-5; Donkin, *Beyond Price*, pp. 46, 50-2, 95-7; Carter, *Sea of Pearls*, pp. 3-69 を参照。

¹⁴⁷ Carter, *Sea of Pearls*, pp. 91-107.

¹⁴⁸ Barros, *Segunda decada da Asia*, livro 2, cap. 4, fol. 32v.; バロス (生田他訳)『アジア史 (一)』、143 頁。

¹⁴⁹ Pires, *A suma oriental de Tomé Pires*, p. 159; ピレス (生田他訳)『東方諸国記』、89 頁。

「伝統的希求地」であった¹⁵⁰。

イスラーム教が広まった7世紀、8世紀以降は、メソポタミアを拠点にするイスラーム王朝が真珠を求め続けた。ある王朝の支配者が真珠を希求すると、その首都において真珠業、宝石業が花開くが、その典型的な例をアッバース朝の首都バグダードに見ることができる。バグダードは政治・経済・文化の中心地として、真珠商や宝石商、真珠・宝石細工師などが蝟集し、真珠や宝石の加工、小売業などによる真珠の取引が活発に行われる都であった¹⁵¹。13世紀末のマルコ・ポーロは、バグダードはアッバース朝滅亡後も真珠の加工地であったと述べている¹⁵²。

16世紀になると、メソポタミア地方は、サファヴィー朝ペルシアやオスマン・トルコの争奪の地となった。メソポタミアの各都市は隊商ルートの中継都市として栄えており、程度の違いはあったものの、それぞれの都市が、真珠の希求地であり、加工地、集散地であった。16世紀の希求地として重要なのが、バスラとアレppoである。

(1) バスラ

バスラは、ペルシア湾から船で到達できるため、早くからペルシア湾の真珠の集散地として、真珠をメソポタミア内陸部に送る役割を果たしてきた。バスラ自体も、真珠の「伝統的希求地」であった。1546年以降はオスマン・トルコの支配を受けるようになり、バスラにはアラブ系の住民とトルコ系の住民が暮らすようになった。バスラは名高い真珠集散地であったが、バルボザやテイシェイラは、バスラの交易品として真珠を挙げていない。商人たちはメソポタミアの各中継都市が課する高い関税を回避して、徹底した密輸で真珠を運んでいたか、あるいは、ホルムズ王国はバスラの支配者に免税特権を認めていたので、真珠はそうしたチャンネルの利用でバスラにもたらされていたと考えられる。

17世紀半ばのタベルニエは、ペルシア湾の真珠は主にインドに運ばれ、バスラにも運ばれたと述べている¹⁵³。19世紀になると、ペルシア湾で採れる真珠の三分の二は北に向かい、ペルシア、トルコ、ロシアに運ばれた¹⁵⁴。真珠の多くはバスラを経由した。今日の真珠業界には「バスラ真珠」という言葉があるが、それはペルシア湾で採れた天然真珠を指し、中東世界で高く評価されている。こうした用語は、バスラが伝統的な真珠の希求地、集散地であったことを示している。

真珠の集散地は、海域を支配する政治勢力の首都であることが多いが、バスラはその地理的条件によって、真珠の伝統的な集散地であり続けた。17世紀以降、ホルムズに代わっ

¹⁵⁰ Donkin, *Beyond Price*, p. 44.

¹⁵¹ Donkin, p. 132.

¹⁵² マルコ・ポーロ他（高田英樹訳）『世界の記——「東方見聞録」対校訳』（名古屋大学出版会、2013年）、49頁。この情報はセラダ手稿本に掲載されている。マルコ・ポーロ紀行文の写本の系統については、高田訳『世界の記』、736~751頁参照。

¹⁵³ Tavernier, *Travels in India*, vol. 2, p. 109.

¹⁵⁴ *Encyclopaedia Iranica*, s. v. "PEARL ii. Islamic Period."

<http://www.iranicaonline.org/articles/pearl-ii-islamic-period>（2019年9月19日閲覧）

て「ペルシア湾真珠生産圏」の真珠の主要な集散地となったのは、バスラであった。

(2) アレッポ

シリア北部に位置するアレッポは、古くから東西貿易で栄えた中継都市である。16世紀初めにはオスマン・トルコの支配下に置かれていた。アラブ系住民とトルコ系住民が暮らすムスリムの町であったが、ユダヤ人やアルメニア人も数多く暮らしていた。また、アレッポはヨーロッパ商人がオリエント世界に築いた橋頭堡でもあり、16世紀半ばには、ヴェネツィアとフランスの商館が置かれていた。その後、イギリスやオランダの商館も設立された¹⁵⁵。

テイシェイラによると、ヴェネツィア人はこの町に毛織物や銀貨を持ち込み、綿織物やスパイス類、真珠、宝石、金貨などを持ち帰る交易を行っていた¹⁵⁶。リンスホーテンは、宝石の取引の経験を積むためにアントワープのダイヤモンド職人の若者が、ヴェネツィアに住む叔父によって、アレッポに送り込まれた逸話を記している¹⁵⁷。こうした記述から、アレッポは真珠や宝石の集散地、加工地であり、ヨーロッパ人とも係わりが深かったことがわかる。

真珠や宝石の加工や取引は、アラブ商人も係わっていたが、この町に暮らすユダヤ人やアルメニア人、トルコ人によっても担われていた。リンスホーテンは、ホルムズにはアルメニア人、トルコ人、ヴェネツィア人などがいて、スパイスと宝石類を扱っていると述べている¹⁵⁸。こうした商人が、真珠をアレッポなどの中継都市に運んでいたと推測できる。

このようにメソポタミア地方はまさに真珠の「伝統的希求地」であった。バスラやアレッポなどの中継都市は、ペルシア湾の真珠の集散地、加工地、通過点の役割を担い、背後に存在するトルコやカフカス地方、ヨーロッパなどに真珠を運んでいた。ただ、それぞれの都市自体が真珠の最終消費地の側面もあった。メソポタミア地方とその隊商都市の受容形態は、真珠の加工、小売、退蔵であった。

5.3 伝統的希求地 3： インド西海岸及びインド内陸部

ペルシア湾の真珠の「伝統的希求者」には、インド西海岸——特にマラバール海岸——の港町及びインド内陸部の諸王朝も存在する。インドはマンナール湾のアコヤ系真珠で名高いが、その大産地と呼べるのは、インド東南部のタミルナドゥ南海岸だけである。他のインドの地域はこの真珠については非生産地である。インド西海岸や内陸部では、二流の真珠と見なされる淡水産真珠や窓貝真珠などは採取されていたが、彼らの需要を満たすほ

¹⁵⁵ *Encyclopaedia of Islam*, new ed., “Ḥalab” by J. Sauvaget; Teixeira, *The Travels of Pedro Teixeira*, pp. 115-6.

¹⁵⁶ Teixeira, *The Travels of Pedro Teixeira*, pp. 118-9.

¹⁵⁷ リンスホーテン(岩生訳)『東方案内記』、611頁(第92章)。

¹⁵⁸ リンスホーテン(岩生訳)『東方案内記』、120頁(第6章); Teixeira, *The Travels of Pedro Teixeira*, pp. 115-6.

どの量は採れていなかった¹⁵⁹。こうしたことから、インド西海岸の港町やインド内陸部は、アコヤ系真珠や他のピンクターダ属の海産真珠の「伝統的希求地」として機能してきた。

インドにおける真珠の受容の大きな特徴は、真珠や宝石を瓔珞^{ようらく}や釧として裸体に飾る宝飾文化があったことである。インドはダイヤモンドをはじめ、各種宝石が豊富に採れる土地柄であり、また、その暑い気候によって、真珠や宝石の装身具が衣服代わりとなってきた。さらに、インドには真珠の連珠を屋敷や玉座、天蓋などに飾る文化もあり、インドの宮殿は、文字通り、珠殿、珠楼であった。こうしたインドの真珠・宝石文化は、アジャンターのさまざまな壁画で見ることができる¹⁶⁰。

インドには前王の財産は減らさないという慣習があり、真珠や宝石は退蔵される傾向があった。マルコ・ポーロは、インドのマアバール地方では先王の財宝には手をつけないという慣習があり、それゆえ、この王国の富は無尽蔵であると述べている¹⁶¹。ムガル帝国初代皇帝のバーブルも、ベンガルでは先代の王の財宝に手をつけるのは不名誉なことであり、財宝を集積することが榮譽であると考えられていると述べている¹⁶²。こうした記述により、先王の財産維持はインドで広く行われる慣習だったことがわかる。インドの真珠の受容は退蔵型でもあった。

デカン地方では、14世紀以降、ヴィジャヤナガル王国が強大となった¹⁶³。16世紀前半のクリシュナデーヴァラーヤ王は、帝国統治の在り方を歌った詩 *Āmukutamālyada* 「アームクタマールヤダ」の作者に擬せられているが、その中に「王は馬、象、宝石、真珠、白檀等の輸入を盛んにして、貿易を増大すべく港を統括すべし」という歌詞がある¹⁶⁴。真珠の輸入はヴィジャヤナガル王国の国是であった。1520年代にヴィジャヤナガル王国に滞在したポルトガル人ドミンゴス・パイスはその記録の中で、王の妃や女官、踊子などが装身具として使う真珠や宝石の量の多さは驚くべきものがあると語っている¹⁶⁵。パイスによると、宮殿や聖堂の銅像も真珠や宝石、黄金で満たされていた。また、王国の首都では多くの商

159 インドの淡水真珠や窓貝真珠については、Kunz and Stevenson, *The Book of the Pearl*, pp. 132-3 を参照。

160 インドの真珠の受容については、次の文献を参照。Donkin, *Beyond Price*, pp. 168-76; 山田『真珠の世界史』、53~58頁。マアバール地方はインド東南部を指す。

161 ポーロ他（高田訳）『世界の記』、446頁、452頁、460頁。この記述は、フランク・イタリア語版、セラダ手稿本、ラムーゾ版に見ることができる。

162 バーブル（ザヒールッ・ディーン・ムハンマド・バーブル）（間野英二訳注）『バーブル・ナーマ——バーブル・ナーマの研究3 訳注』（松香堂、1998年）、439頁。

163 ヴィジャヤナガル王国については、Robert Sewell, *A Forgotten Empire (Vijayanagar)* (1900; Shannon: Irish University Press, 1972); Burton Stein, "Vijayanagara c. 1350-1564," in *The Cambridge Economic History of India*, ed. T. Raychaudhuri and Irfan Habib (Cambridge: Cambridge University Press, 1982), vol. 1, pp. 102-24; 重松伸司「補注 ヴィジャヤナガル時代の職人・商人集団」他（浜口他訳）『ムガル帝国誌・ヴィジャヤナガル王国誌』、411~424頁を参照。

164 重松伸司訳『アームクタマールヤダ』の訳（抜粋）（浜口他訳）『ムガル帝国誌・ヴィジャヤナガル王国誌』、420~424頁。

165 パイス／ヌーネス（浜口訳）『ヴィジャヤナガル王国誌』、248~249頁。

人が店を構える商業地区があり、大小の真珠の他、ルビー、ダイヤモンド、エメラルドなどの宝石の売買が行われていた¹⁶⁶。

この王国への真珠の供給地としてはマンナール湾が存在していたが、それだけでは需要をまかないきれず、ペルシア湾の真珠も積極的に輸入していた。バルボザは、ホルムズ商人が、バハレーンやジュルファルの「多量の真珠と大粒真珠」をホルムズに運んでいることを伝えていたが、ホルムズ商人は、その真珠をさらにインド方面、特にヴィジャヤナガル王国に運び、多大な利益を得ていることを語っている¹⁶⁷。バルボザは、「(ホルムズからインドへ) 馬を運んで行く船は、多くのナツメヤシ、干しブドウ、塩、硫黄、『多くの巻きのよい真珠』(*muito aljófar grosso*) も運んでいくが、それらはナルシンガ(ヴィジャヤナガル)のインド人が大変喜ぶ」と述べている¹⁶⁸。ピレスも、バルボザ同様、ホルムズ商人が、マラバル諸港、ゴア、ヴィジャヤナガル王国、デカン王国などのインドの港市や王国と交易を行い、馬や真珠(*aljófar*)、銀貨などを運び、コショウや他のスパイスを持ち帰ってくることを伝えている¹⁶⁹。

ペルシア湾世界では、13世紀末にキーシュ島のイスラーム勢力がタミルナドゥ南海岸に進出し、マンナール湾の真珠輸入に係わったことが知られている¹⁷⁰。同じく、当時イラン本土に拠点を置いていたホルムズ王国も、この時期、インドから真珠を輸入していた¹⁷¹。しかし、14世紀前半にヴィジャヤナガル王国が成立し、デカン北部でも15世紀からイスラ

¹⁶⁶ パイス/ヌーネス(浜口訳)『ヴィジャヤナガル王国誌』、258頁、270~271頁、276頁、280~281頁、293頁。

¹⁶⁷ Barbosa, *Livro do que viu e ouviu no oriente*, p. 24; Barbosa, *The Book of Duarte Barbosa*, trans. Dames, vol.1, pp. 81-82. ポルトガル語原文では、「ホルムズ商人は、(真珠を)インド方面に輸送や運搬して、売却することで、多額の金銭(*dinheiro*)を得ている、特にナルシンガ王国ではそうである」と記されている。Damesの英訳では *They also go to buy pearls in the kingdom of Narsinga* と訳されているが、この訳だと、ホルムズ商人がヴィジャヤナガル王国で真珠を買ったことになり、意味が反対になる。ポルトガル語原文にも校正者による[Também o vão ali buscar] という挿入文がつけられているが、これも必要ない。バルボザは、ナルシンガ王国の首都 *Bisnagá* の箇所で、ホルムズから来た多くの *aljófar* と *perolas* がこの都市で売られていると述べている(*Livro do que viu e ouviu no oriente*, p. 66)。なお、ヴィジャヤナガル王国はポルトガル語文献では *reino de Narsinga* と呼ばれていた。

¹⁶⁸ Barbosa, *Livro do que viu e ouviu no oriente*, p. 27; Barbosa, *The Book of Duarte Barbosa*, trans. Dames, vol.1, 94-5. Damesの英訳では“*os indios de Narsinga*”が“*the Moors of Narsinga*”と誤訳されている。また、“*aljófar grosso*”が“*coarse seed pearls*”と訳されている。ポルトガル語の *grosso* という形容詞には *coarse* という意味もあるが、スペイン語の *grueso* と同様に、真珠に使用される場合は、「巻きのよい」、すなわち「真珠層が厚い」と考えるのが適切である。“*aljófar grosso*”を「巻きのよい(それゆえ光沢の強い)アコヤ系真珠」とするか、「粗悪なシードパール」とするかで、意味は大きく違ってくる。

¹⁶⁹ Pires, *A suma oriental de Tomé Pires*, p. 149; ピレス(生田他訳)『東方諸国記』、72頁。

¹⁷⁰ 家島彦一『海が創る文明』、147~173頁。

¹⁷¹ ポーロ他(高田訳)『世界の記』、76頁、78~79頁。この記述は、フランク・イタリア語版、セラダ手稿本、ラムージオ版に見ることができる。

ーム系の諸王国が樹立され、これらの諸王国が強大になると、インド内陸部のデカン地方は、ペルシア湾の真珠を輸入する重要な真珠の「伝統的希求地」となったのである。

5.4 伝統的希求地兼加工集散地 4：カンベイ

真珠の希求地、「加工集散地」として大量のペルシア湾の真珠を集めた地域が、インド・グジャラート地方のカンベイである。この地では、ジャイナ教徒やヒンドゥー教徒による真珠や宝石の加工業が早くから発達し、真珠や宝石の取引も活発だったため、ペルシア湾の真珠は大いに求められていた。

15世紀初め、イスラーム征服王朝のグジャラート・スルタン王国（以後、グジャラート王国と表記）が樹立された。この王国の主要港で真珠の「加工集散地」となったのが、カンベイである¹⁷²。この地に暮らすジャイナ教徒やヒンドゥー教徒は、グジャラート王国の成立によって被支配者となったが、グジャラート地方の手工業生産を担い続けていた。質の高い綿織物の他、真珠や真珠貝、グジャラート地方原産のカーネリアンや各種宝石、珊瑚、象牙などを使って、さまざまな真珠・宝石細工、螺鈿細工、珊瑚細工、象牙細工などの小物や調度品、宝飾品が作られていた。とりわけ真珠や各種色石の穿孔や通糸連制作には定評があり、カンベイ製の真珠やカーネリアンの数珠は、インド洋海域世界の人気商品となっていた。ピレスは、ボルネオの人々がマラッカに黄金を携えてやってきて、カンベイ製のガラス玉や「真珠の数珠」(*contas margaritas*)を持ち帰ると述べている¹⁷³。バルボザによると、カンベイには、数多くの宝石職人の他、「本物のように思える偽の宝石やさまざまな種類の偽の真珠を作る模造職人」(*falsificadores de pedraria, e pérolas de muitas sortes, falsas, que parecem naturais*)が存在した¹⁷⁴。真珠の模造品の存在は、グジャラート地方やインド洋海域世界において真珠の供給が需要に追い付かなかったこと及びカンベイが先進的な「真珠加工地」だったことを示唆している。

「真珠加工地」は、まず真珠を大量に集め、それらを加工し、完成品をインド洋各地に輸出する。したがって、カンベイは「真珠生産圏」やその集散地と結びつきを強めていたが、ホルムズもそのひとつであった。ピレスは、ホルムズの人々が、カンベイに馬、銀、金などとともに真珠 (*aljofar, alJofar*) を運んでくると述べている¹⁷⁵。もともとカンベイと

¹⁷² グジャラートやグジャラートの商人については次の文献を参照。M. S. Commissariat, "A Brief History of the Gujarat Saltanat," *The Journal of the Bombay Branch of the Royal Asiatic Society*, vol. 25 (1917-21; Nendeln: Kraus Reprint, 1969), pp. 82-133, 246-321; *Encyclopaedia of Islam*, new ed., s. v. "Gudjarat," by J. Burton-Page; ピアスン (生田訳) 『ポルトガルとインド』。

¹⁷³ Pires, *A suma oriental de Tomé Pires*, p. 375. 原文は *comtas margaridas*。ピレス (生田他訳) 『東方諸国記』、253 頁。

¹⁷⁴ Barbosa, *Livro do que viu e ouviu no oriente*, p. 46; Barbosa, *The Book of Duarte Barbosa*, vol.1, p. 142.

¹⁷⁵ Pires, *A suma oriental de Tomé Pires*, pp.149, 201; ピレス 『東方諸国記』、72 頁、116 頁。

ホルムズの間には活発な交易活動があり、カンベイはペルシア湾の真珠の「加工集散地」であり、「伝統的希求地」であった。

5.5 新興希求者 1: ポルトガル人

16世紀のペルシア湾の真珠の希求面の大きな傾向は、ポルトガル人やヨーロッパ人が「新興希求者」として登場したことである。本章の第2節で、真珠は初期ポルトガル人の対外拡張の主要な動機になったことを明らかにしたが、当然、彼らはペルシア湾の真珠の「新興希求者」となった。

「新興希求者」は、(1) 国王や王族、貴族などをはじめとする本国のポルトガル人、(2) インド副王や総督、ホルムズ長官をはじめとする各地のポルトガル人長官、高級官吏などの植民地エリート、(3) 兵士、船員、一般官吏、商人など、赴任者や滞在者として来た一般身分のポルトガル人、(4) ポルトガル領インドでの永住を決意した民間ポルトガル商人、(5) イエズス会などの宗教関係者、(6) ポルトガル人以外のヨーロッパ人の六つのタイプに分けられる。彼らがどのタイプに属するかで、真珠の希求の仕方は異なっていた。宗教関係者については、16世紀中葉にホルムズでイエズス会による布教が行われたが、失敗に終わっている¹⁷⁶。そのため、ここでは宗教関係者を除き、ポルトガル人や他のヨーロッパ人の真珠の希求の特徴を考察する。

(1) ポルトガル国王をはじめとする本国のポルトガル人

ポルトガル国王は、ポルトガル人船員や兵士たちに真珠と宝石の自由取引を認める一方、彼自身も真珠を希求していた。初代インド総督のフランシスコ・デ・アルメイダは、ポルトガル国王から真珠と大粒真珠の入手を命じられていたが、購入は簡単ではなく、不首尾に終わったという内容の手紙を残している¹⁷⁷。アルブケルケも、彼の書簡で、マヌエル1世から獲得を命じられた真珠 (*aljofar*) については、入手できるよう努力すると述べている¹⁷⁸。まさに国王自身が真珠の希求者であった。国王が真珠を欲している以上、王族や貴族も、当然、真珠を希求した。本国のポルトガル人は、ペルシア湾の真珠の「新興希求者」となったのである。

(2) インド副王や総督、ホルムズ長官

ポルトガル領インドに赴任する副王や総督、ホルムズ長官なども、16世紀に登場したペ

¹⁷⁶ ホルムズでのイエズス会の布教については、Teles e Cunha, “The Portuguese Presence in the Persian Gulf,” pp. 209, 221 を参照。

¹⁷⁷ C. R. de Silva, “The Portuguese and Pearl Fishing off South India and Sri Lanka,” *South Asia*, new series, vol.1, no. 1 (March 1978), p. 17.

¹⁷⁸ “Carta 101 (September 22, 1515),” in *Cartas de Affonso de Albuquerque*, vol. 1, p. 374; 生田訳「アフォンソ・デ・アルブケルケの1515年9月22日付国王宛書簡」『アジア史(二)』、482頁。

ルシア湾の真珠の「新興希求者」である。中でも、ホルムズ長官は「ペルシア湾真珠生産圏」の集散地への赴任だったため、他の役職よりも有利に真珠を獲得することができた。

17世紀初めのフランス人ピラールは、次のように述べている。

これらの長官（筆者注：ホルムズ長官）が帰国する時、彼らはかさばる商品は何ひとつ持ち帰らない。真珠、宝石、竜涎香、麝香、金、銀、その他の希少で高価な品々のみ持ち帰る¹⁷⁹。

この記述により、ホルムズ長官などの植民地エリートが、ペルシア湾の真珠の「新興希求者」だったことが明らかになる。ピラールが挙げる商品の中にスパイスは入っていないことにも着目すべきである¹⁸⁰。実際、インド副王や総督、各地の長官などに就任したポルトガル人は、時代が下るにつれて、三年間の任期を自己の利益の追求に費やすようになった¹⁸¹。アジア世界は贈物文化の伝統があり、ポルトガル領インドの高官として赴任した人々は、アジア世界各地の国際商人から真珠や宝石付きの高価な宝飾品が贈呈されることが少なくなった。リンスホーテンは、インド副王などへの贈答品は、慣例としてイエズス会に寄付されていたが、副王ルイス・デ・アタイデの赴任以降、彼ら自身が獲得するようになったと述べている¹⁸²。

ポルトガルの植民地エリートたちは、彼らの在任中にできる限り、真珠や宝石を集め、本国に持ち持ち帰ったのである。彼らの希求形態は、本国での換金や顕示、財産としての退蔵であり、真珠をリスボンに輸送する役割を果たした。

(3) ポルトガル人赴任者

船員、兵士、一般官吏、商人など、赴任者や滞在者としてホルムズなどに来た一般身分のポルトガル人も、植民地エリート同様、ペルシア湾の真珠の「新興希求者」であった。

すでに検討したように、アルメイダの訓令では戦利品の真珠の分配や真珠の購入は認められていたが、その後も同様の訓令が出されている。インドへ派遣された艦隊の総司令官ゴンサロ・デ・セケイラ宛ての1510年6月14日付けの訓令 (*regimento*) によると、乗組員たちは二十四分の一税を払えば、宝石 (*pedraria*)、大粒真珠 (*pérolas*)、真珠 (*aljofar*)

¹⁷⁹ Pyrard, *The Voyage of Francois Pyrard of Laval*, vol. 2, p.242.

¹⁸⁰ スブラフマニヤムは、ポルトガル副王コンスタンティノ・デ・ブラガンサの帰国時、わずかな量のコショウとスパイスしか持ち帰らなかったことを告げる1562年のヴェネツィア領事の手紙などを使い、それらをポルトガルによるスパイス貿易の不振の事例としている。しかし、ピラールの言説などから、ポルトガル副王たちはスパイスよりも、真珠や宝石を持ち帰ることに熱心だったことがわかる。スブラフマニヤム（三田昌彦他訳）『接続された歴史』（名古屋大学出版会、2009年）、52~53頁を参照。

¹⁸¹ リンスホーテン（岩生他訳）『東方案内記』、306頁（第30章）。

¹⁸² リンスホーテン（岩生他訳）『東方案内記』、323~324頁（第32章）、注6。アタイデは、第10代副王（総督としては第23代）で、1568年から1571年まで在任した。

をはじめ、薬材、医薬品類、材木、アロエ、安息香、香水、布などの購入や取引を認められ、ポルトガル本国に持ち帰ることができた¹⁸³。

その後、インドへ向かう赴任者たちには、副王、総督、高級官吏ばかりでなく、下級官吏、兵士、船員、水夫などにいたるまで、役職に応じて、免税の特権が与えられるようになった。彼らには幾つかの箱が与えられ、箱に入る限り、スパイスや他の物品なども自由に持ち帰ることができた¹⁸⁴。真珠はこうした箱に入れられて、リスボンにもたらされた。インドに赴任する乗組員たちは、知り合いなどから真珠 (*aljófar*) の購入を委託されることがあり、そうして購入された真珠の多くが、小さな袋や入れ物に入れてヨーロッパに密輸された。机の中に入れて「インド航路」で運ばれることもあった¹⁸⁵。真珠は公にはならない形で、大量にリスボンに海上輸送されたのである。

このように、真珠や宝石の自由取引が認められている以上、赴任者たちは、インドに滞在中、真珠や宝石の獲得に余念がなかったはずである。彼らはペルシア湾の真珠の「新興希求者」であった。その希求形態は、植民地エリート同様、本国での換金や財産としての退蔵、顕示などであり、真珠、宝石をリスボンにもたらした。

(4) 民間ポルトガル商人

民間ポルトガル商人は、「カザド」(*casado*) と呼ばれ、ポルトガル領インドでの永住を決意し、商業活動に従事した人々である¹⁸⁶。ペルシア湾の真珠の重要な「新興希求者」であった。その主な受容形態は、真珠を彼らの財産を増やす投資目的で使用したことである。

ポルトガル国王は、真珠や宝石の自由取引をポルトガル赴任者に認めていたが、彼らがインドで積極的にその取引に従事することも奨励していた。そのことは、セケイラ宛ての訓令が発布された同じ 1510 年 6 月 14 日付の王室財務官のアルヴィト男爵に宛てた書簡からも明らかになる。この書簡は、国王の命を受けたアルヴィトがインドに渡航し、滞在する意図のある人たちに周知するために書かれたものである。それによると、インドに滞在する人たちには毎月 500 レイスと食料が支給される上、彼らのインドの滞在中は、真珠 (*aljófare*) や宝石 (*pedraria*)、あらゆる種類の布、絹、麝香、琥珀、安息香、陶器、その他、現地で入手できるいかなる商品でも、彼らの費用や他人の費用で自由に購入することが認められていた。但し、スパイス、薬材、漆、染料、インディゴは除くことになって

¹⁸³ “Regimento de Gonçalo de Sequeira, Capitão-mor de uma armada da Índia,” in *Documentos sobre os Portugueses em Moçambique*, vol. 2, pp. 470-9.

¹⁸⁴ James C. Boyajian, *Portuguese Trade in Asia under the Habsburgs, 1580-1640* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1993), pp. 38-9. 特権の箱については、第 6 章で詳しく議論する。

¹⁸⁵ Boyajian, *Portuguese Trade in Asia under the Habsburgs*, p. 48.

¹⁸⁶ *casado* は「妻帯者」の意味で、ポルトガル王室が認めた正規のポルトガル領インドの永住者のことである。彼らは兵役を免除されており、商業に従事するものが多かった。Boyajian, *Portuguese Trade in Asia under the Habsburgs*, p. 321; 岡「一六世紀『大航海』の時代とアジア」、102~105 頁。

いた。書簡は、赴任者がインドに滞在している限り、公認された商品を購入し、送付する際にかかる二十四分の一税などの税金を免除することも定めていた。さらに、書簡は、赴任者が事前に許可証を総司令官から得れば、現地商人との自由取引の他、彼らとの連携や会社の設立、船の所有も認めていた¹⁸⁷。

ポルトガルの対外拡張といえ、国家自体がインド洋交易に乗り出し、スパイス貿易を独占したことが強調されている。しかし、アルヴィト宛の書簡及びセケイラ宛での訓令を考察すると、コショウや他のスパイス以外の物品、つまり、真珠や宝石などに関しては、ポルトガル王室によって滞在者に向けて自由取引の方針が打ち出され、その事業の推進も奨励されていたことが明らかになる。こうした書簡や訓令は、ポルトガルの対外拡張史でも、真珠史でも着目されてこなかったが、民間ポルトガル商人やポルトガル人赴任者の真珠取引の実態を知る上で重要なものである¹⁸⁸。

ホルムズに暮らす民間ポルトガル商人たちは、ペルシア湾の真珠の生産には直接関与しなかった。しかし、ポルトガルによるホルムズ王国支配によって、ホルムズに集まる真珠やバハレーンで採取される真珠を、特権的、優先的に獲得した。彼らの真珠の使用形態は、そうした真珠を商品としてヨーロッパやアジアの「伝統的希求地」へ輸出し、それによって多額の利益を生み出したことであつた。16世紀初期、ホルムズ商人は、マラバル海岸経由でヴィジャヤナガル王国まで真珠を運んで利益を得ていたが、民間ポルトガル商人は、この流通パターンをゴア経由で踏襲した。16世紀半ばのゴア在住者のオルタは、ゴアからヴィジャヤナガル王国などに真珠が運ばれ、高い値がついていると述べている¹⁸⁹。

民間ポルトガル商人は、真珠獲得に重きを置くヨーロッパ人の中で、真珠を投資として財産を増やすことに専念した新しいタイプの商人であつた。16世紀を特色づける傾向である。16世紀のホルムズの人口は約5万人であつたが、1600年頃には200人の *casado* がいた。彼らは民間ポルトガル商人であつたと考えられる¹⁹⁰。

5.6 新興希求者2： ヴェネツィア人

ポルトガル人以外には、ヴェネツィア人も、ペルシア湾の真珠の「新興希求者」となつた。ポルトガルとヴェネツィアは、16世紀初期、コショウ貿易をめぐって対立していた¹⁹¹。

¹⁸⁷ “Traslado de uma carta do Barão de Alvito, Vedor da Fazenda,” in *Documentos sobre os Portugueses em Moçambique*, vol. 2, pp. 464-9. レイス (*reis*) はポルトガルの小口貨幣リアル (*real*) の複数形。インド海域世界では貨幣としてよりも、計算単位として使われた。Silva, *History of Coins and Currency in Sri Lanka*, p. 71.

¹⁸⁸ J. C. ボヤジアンは、インド航路の物品としてダイヤモンドや真珠の重要性を指摘し、ポルトガル領インドへの赴任者に与えられた特権の箱についても述べているが、ポルトガル王室が認めた真珠の自由取引については言及していない。Boyajian, *Portuguese Trade in Asia under the Habsburgs*, pp. 39, 48-51.

¹⁸⁹ Orta, *Colóquios dos simples e drogas da Índia*, vol. 2, p. 121.

¹⁹⁰ Teles e Cunha, “The Portuguese Presence in the Persian Gulf,” p. 219.

¹⁹¹ 「マラッカの支配者となる者は、ヴェネツィアの喉を押えることになる」というピレス

しかし、16世紀後半になると、ヴェネツィア人は、ポルトガル領インドのホルムズ、ゴア、マラッカに商館を置き、宝石、真珠（*peerlen*）、スパイスなどの商品を盛んに仕入れ、それをメソポタミア経由の陸路で本国に輸送するようになった¹⁹²。

イタリア人は16世紀以前から、レヴァント貿易などを通してオリエントの真珠や宝石を購入していた¹⁹³。したがって「伝統的希求者」と言えないこともない。ただ、ヴェネツィア人の新規性は、16世紀にはついにインド洋海域世界のポルトガル支配下の真珠集散地にまで進出し、そこで真珠を調達する希求者となったことである。彼らは真珠や宝石などの購入を最優先と考える商人であり、そのためにはポルトガル支配を厭わなかった¹⁹⁴。ヴェネツィア人は、「ヴェネツィアンデル」と呼ばれる高額の高額金貨を持ち込んで、真珠やダイヤモンドをヨーロッパに輸入した¹⁹⁵。

以上、「ペルシア湾真珠生産圏」の真珠の希求の状況を考察した。「伝統的希求地」としては、イラン本土、メソポタミアの中継都市、インドの西海岸やインド内陸部、カンベイなどのように、陸地を基盤とするアジアの中央集権国家や商業や手工業で栄える中継都市や港湾都市が存在し、アジア世界の各地、各国出身の宗教や民族の異なるさまざまな人々が真珠を希求していることが判明した。「伝統的希求地／希求者」による考察は、アジアにおける真珠の大きな需要とアジア世界の国際商品としての真珠の意義を明らかにした。彼らの主要な受容形態は威信財、退蔵財としての使用であり、これによって真珠は常に希求されていたことも判明した。

一方、本節は、16世紀の真珠の「新興希求者」として、ポルトガル人やヴェネツィア人が登場したことも明らかにした。ヨーロッパの王侯貴族や赴任者たちは、真珠を威信財や換金財として使用したが、民間ポルトガル商人たちは、真珠を輸出し、投資目的で使用した。彼らはアジア世界垂涎の真珠を特権的に扱う商人であった。ポルトガル海洋帝国は、「ペルシア湾真珠生産圏」を政治的・軍事的に支配して、真珠の生産体系をおさえたが、さらに優先的に真珠を扱う新たな商人層を誕生させた。アジア域内取引の真珠取引におけるポルトガルの優位性が明らかになる。

S. スブラフマニヤムは、メソポタミアに向かう国際的スパイス取引がホルムズを経由している事実を挙げ、なぜホルムズに立ち寄るのか、ホルムズに何を求めたのかという疑問

の言説は、ポルトガル人の敵対心を示している。Pires, *A suma oriental de Tomé Pires*, p.441; ピレス（生田他訳）『東方諸国記』、495頁。

¹⁹² Linschoten, *Itinerario*, vol. 3, p. 1 (chap. 92); リンスホーテン（岩生他訳）『東方案内記』、566~567頁。

¹⁹³ Donkin, *Beyond Price*, pp. 254-5.

¹⁹⁴ インド洋海域世界におけるヴェネツィア人のダイヤモンド取引については、Boyajian, *Portuguese Trade in Asia under the Habsburgs*, pp. 49-50 を参照。

¹⁹⁵ リンスホーテン（岩生他訳）『東方案内記』、342頁（第35章）。「ヴェネツィアンデル」は約600レイスに相当する。同書343頁（注10）参照。Subrahmanyam, “Precious Metal Flows and Prices in Western and Southern Asia,” p. 192.

を呈している。彼の議論には、アジアの国際商人が真珠を求めており、ホルムズが真珠の集散地であったという認識がない¹⁹⁶。しかし、アジアの「伝統的希求地／希求者」の存在とその真珠の需要を勘案すれば、その答えは明白である。アジア世界の多種多様な商人の行動を規定したのは、スパイスの購入だけではなかったのである。

第6節 真珠の流通

本節は、真珠のコモディティ・チェーンの流通面の考察を行う。前節の議論によって、ペルシア湾の真珠は、ヨーロッパ世界だけでなく、アジア世界各地で広く希求されたことが明らかになった。真珠の流通は、一方向だけではなく、多方面に広がっていた。本論文は、真珠の流通の考察のため、「ハブ・アンド・スポーク交易」という概念を提唱している。この概念の特徴は、海域と沿岸部を含む「真珠生産圏」そのものをハブとすることである。16世紀のペルシア湾では、ホルムズが主要なハブであるが、バスラも存在し、またバハレーンなどの真珠採取地も、アジア各地の商人を集めていた。本節では、「ペルシア湾真珠生産圏」をハブとして、車輪のスポークのように広がる真珠の流通ネットワークを考察する。

真珠の流通はアジア各地の国際商人が関与し、密輸や隠匿が横行する。さらに、ホルムズからの輸出には、次に述べるように、免税措置があった。こうしたことから取引量を正確に把握するのは困難である。したがって、本節では、数量把握よりも、真珠の流通経路の実態と流通に係わった商人などを解明することを主眼とする。

6.1 流通経路1：ホルムズ・ペルシア・ルート

「ペルシア湾真珠生産圏」をハブとする第一の流通経路が、ホルムズ・ペルシア・ルートである。このルートは、「伝統的希求地」のイラン本土が真珠を購入するルートである。ペルシア湾島嶼と本土のルートは古くからあり、16世紀は主にホルムズを起点としたルートとなった。ホルムズからイラン本土へは真珠は船での輸送であったが、その後は陸路でイラン各地に運ばれた。ホルムズとイラン本土との交易は、ホルムズ商人も関わっていたが、主にペルシア商人が担っていた。先述したように、ピレスは、ホルムズにおけるペルシア商人の真珠 (*aljofar*) の買付について述べていた。16世紀末のリンスホーテンや17世紀初めのテイシェイラも、ペルシア商人がラリン銀貨、ペルシア馬、生糸、絨毯、トルコ石などをホルムズに輸出し、コショウなどの各種スパイス、宝石、真珠などを持ち帰ると述べている¹⁹⁷。

ホルムズ王国はペルシア系の王国であり、サファヴィー朝ペルシアやイランの地方政権との交易活動は活発であった。この王国は、先述してきたように、サファヴィー朝の王族や官吏をはじめ、ラール、シーラーズ、マクランなどの地方政権の支配者などに免税特権

¹⁹⁶ Subrahmanyam, *The Portuguese Empire in Asia*, p. 76.

¹⁹⁷ Linschoten, *Itinerario*, vol. 1, p. 35 (chap. 6); リンスホーテン (岩生他訳) 『東方案内記』、120頁; Teixeira, *The Travels of Pedro Teixeira*, p. 252.

を与えていた¹⁹⁸。ペルシア商人たちは、こうした支配者たちの免税特権を利用して、ホルムズから「伝統的希求地」のイラン各地に真珠を運んだ。すでに検討したように、このルートは真珠などとの交換に大量のラリン銀貨が流入するルートであった。

6.2 流通経路 2：ホルムズ・バスラ・メソポタミア・ルート

第二の流通経路が、ホルムズ・バスラ・メソポタミア・ルートである。ホルムズを通さず、ペルシア湾の各採取地からバスラ経由でメソポタミアに向かうルートもあった。実際、バスラは、ホルムズの他、バハレーン、カティーフなどとの活発な交易活動があった¹⁹⁹。このメソポタミア・ルートはペルシア湾内の海上ルートとメソポタミア内陸部の隊商ルートが合わさったルートである。ポルトガル来航以前、メソポタミア・ルートは、同地が政情不安の上、アデン・紅海ルートの盛況により十分活用されていなかったが、アレppoとバスラが 16 世紀前半にオスマン・トルコの支配下に入り、1564 年にポルトガルとオスマン・トルコとの間で和平協定が成立すると、安定した隊商ルートとなった²⁰⁰。以来、活況を呈するようになった。

バスラやアレppoなどは、都市自体が、真珠を大量に集める「伝統的希求地」であったが、真珠をさらに遠方の希求地に送る中継都市の役割があった。それゆえ、メソポタミア・ルートの向かう先は幾つかあった。第一に、バスラ、バグダード、アレppo、トリポリなどの中継都市を通り、地中海世界、ヴェネツィア、ヨーロッパへと向かう流通経路である。第二は、ホルムズやバスラからメソポタミアを経て、トルコへ向かう流通経路であり、第三はカフカス地方に向かう流通経路である²⁰¹。また、バスラからペルシア方面に向かう流通経路もあった。

この流通経路では、メソポタミアや地中海世界、アジア各地、ヨーロッパなどから来た多くの国際商人が従事していた。アラブ商人、ホルムズ商人、ペルシア商人をはじめ、トルコ商人、アルメニア商人、ユダヤ商人、ヴェネツィア商人なども係わっていた。彼らは、ホルムズでスパイスや宝石などを購入し、それらを陸上輸送でそれぞれの故国や居留地に運んでいた²⁰²。

メソポタミア世界では真珠の取引は、金や銀との交換が一般的であった。それゆえ、メソポタミア・ルートは、隊商の往来で栄える中継都市の商人やその背後に続くトルコやカ

¹⁹⁸ Barros, *Segunda decada da Asia*, livro 10, cap. 7, fol. 235v; バロス (生田他訳) 『アジア史 (二)』、416 頁。

¹⁹⁹ Teixeira, *The Travels of Pedro Teixeira*, p. 29.

²⁰⁰ アレppoは 1516 年、バスラは 1546 年、オスマン・トルコの支配に入った。Teles e Cunha, “The Portuguese Presence in the Persian Gulf,” p. 221.

²⁰¹ Linschoten, *Itinerario*, vol. 1, pp. 35-6 (chap. 6); リンスホーテン (岩生他訳) 『東方案内記』、120~121 頁; Subrahmanyam, *The Portuguese Empire in Asia*, p. 76.

²⁰² Linschoten, *Itinerario*, vol. 1, p. 35 (chap. 6); リンスホーテン (岩生他訳) 『東方案内記』、120 頁。

フカス地方、ヨーロッパなどの商人たちから金、銀を引き出すことになった²⁰³。リンスホーテンは、ポルトガル領インドにはヴェネツィアやトルコの高額金貨が入ってきていることを述べていたが、それらはメソポタミア・ルート経由でもたらされたものであった²⁰⁴。バスラやアレppoなどの中継都市は、金や銀、銅が潤沢な都市であった²⁰⁵。ペルシア湾の真珠は、メソポタミア・ルートを通して多額の金、銀を引き出したのである。

6.3 流通経路3：ホルムズ・ゴア・ルート

「ペルシア湾真珠生産圏」をハブとする第三の流通経路が、ホルムズ・ゴア・ルートである。これは、ホルムズとポルトガル領インドの総督府ゴアというポルトガルの二大重要都市を結ぶルートであり、ペルシア湾岸世界とインド世界を結ぶ主要ルートである。真珠の流通経路としては16世紀に大きく発展した。

ゴアはもともとインド西海岸にあったビージャプル王国の外港で、馬交易が盛んな港町であった。1510年にアルブケルケが征服し、1530年にはポルトガル領インドの首都となった。以来、ホルムズ・ゴア・ルートは、ポルトガル領植民地政府の船や民間ポルトガル商人の船が有利に利用できるルートとなった。このルートは、もともと馬交易のルートとして名高かった。ポルトガル時代になっても、同様に、このルートを使ってアラビアやペルシアの馬がゴアに輸出されていた。ポルトガル政府は、一定数以上の馬の輸送には免税措置を採っていたため、真珠やラリン銀貨、他の物産は、馬を運ぶ船で運ばれていたと推定できる²⁰⁶。

ポルトガル海洋帝国の支配下でホルムズやゴアが発展すると、このルートはペルシア湾の真珠やラリン銀貨の輸送で重要性を増していった²⁰⁷。17世紀初めのピラールは、次のように述べている。

ホルムズからゴアに向かう商品は、まず良質の真珠がある。それらは、ホルムズより先のアラビアの海岸方面のバハレーンと呼ばれるペルシア湾の島の漁場で採取される。それらは東インド世界で発見される真珠のどれよりも、最良で、もっとも大きく、もっともきれいな真珠である。この漁場は大量の真珠を生み出しているので、「オリエ

²⁰³ Subrahmanyam, “Precious Metal Flows and Prices in Western and Southern Asia,” p. 192; Floor, *The Persian Gulf*, pp. 63-4.

²⁰⁴ リンスホーテン（岩生他訳）『東方案内記』、342頁（35章）。

²⁰⁵ 17世紀初め、バスラは銀貨と銅貨を鑄造しており、アレppoは金貨と銀貨を鑄造していた。Teixeira, *The Travels of Pedro Teixeira*, pp. 30, 115.

²⁰⁶ Cesare Federici [Caesar Fredericke], “The Voyage and travell of M. Caesar Fredericke,” in *The Principal Navigations, Voyages, Traffiques & Discoveries of the English Nation*, ed. Richard Hakluyt (New York: AMS Press, 1965), vol. 5, p.373; M. N. Pearson, *The Portuguese in India*, p. 50.

²⁰⁷ Linschoten, *Itinerario*, vol. 1, p. 35 (chap. 6); リンスホーテン（岩生他訳）『東方案内記』、120頁。

「シタールパール」の漁場という名前が与えられている。ふたつ目に挙げられるのが、ラリンと呼ばれる大量の銀貨であり、世界でもっとも良質の銀貨である。ホルムズのラリンと呼ばれている²⁰⁸。

ピラールはさらに、ホルムズからゴアに向かう巨大で強力なポルトガル船がオランダ船に狙われた時のエピソードも語っている。その際、ポルトガル人は、海がなぎで、オランダ船が攻撃を控えている間を見計らい、金、ラリン銀貨、大量のオリエンタルパールなど、船でもっとも貴重なものすべてを運び出したという²⁰⁹。真珠とラリン銀貨、さらに金も、ホルムズ・ゴア・ルートを通じてゴアに運ばれていた。すでに検討したように、ホルムズ・ゴア・ルートとは、真珠だけでなく、ホルムズという真珠集散地がサファヴィー朝ペルシアなどの「伝統的希求地」から引き出した銀や金をゴアに運ぶルートでもあった。ゴアには、ポルトガル人副王や総督、赴任者や民間ポルトガル商人、アジアの国際商人が数多く暮らしており、真珠の大きな需要があった。この都市自体が16世紀に真珠の「新興希求地」として発展していた。

一方、ホルムズ・ゴア・ルートは、ゴアを経由して、ヨーロッパやインド内陸部にまで続いていた。ヨーロッパへと続くルートは、ポルトガル人赴任者たちがゴアからリスボンに真珠を持ち帰るルートであった。ホルムズ・ゴア・インド内陸部ルートは、もともとホルムズ商人が関与していたが、16世紀になると、民間ポルトガル商人たちが参入するようになり、「伝統的希求地」のヴィジャヤナガル王国やムスリム諸王国に真珠を輸送した。

ポルトガル来航以前、ペルシア湾の真珠のインドへの玄関口になっていたのが、カリカットやコーチン、クイロンなどのマラバールの港湾都市であった²¹⁰。しかし、ホルムズ・ゴア・ルートの盛況によって、こうした港湾都市を結ぶルートはすたれ、カリカットやコーチンなどは真珠集散地としての機能も失われていった。一方、ゴアは、カリカットなどに代わって真珠の取引が盛んな集散地となり、「ペルシア湾真珠生産圏」の「上位集散地」となった。さらに、ゴアは、マンナール湾の真珠や世界各地の真珠を集める大市場として成長していくが、これについては、第5章と第6章で検討する。

16世紀におけるホルムズ・ゴア・ルートの重要性は、ポルトガル対外拡張史の先行研究では言及されてこなかった²¹¹。しかし、真珠史の観点から考察すると、このルートは、「ペルシア湾真珠生産圏」と真珠の「上位集散地」を結ぶルートであり、真珠をゴアに集め、各地に輸送する重要ルートであったことがわかる。このルートでは、ラリン銀貨も運ばれた。ポルトガル海洋帝国は、彼らの二大都市を結ぶホルムズ・ゴア・ルートを、富が運ば

²⁰⁸ Pyrard, *The Voyage of Francois Pyrard of Laval*, vol. 2, p. 239.

²⁰⁹ Pyrard, p. 261.

²¹⁰ Pires, *A suma oriental de Tomé Pires*, p. 149; ピレス（生田他訳）『東方諸国記』、72頁。カリカットなどのマラバール海岸の港町については、第5章で詳しく検討する。

²¹¹ J. オービンは、1520年のゴアからホルムズへの航路を考察している。Jean Aubin, “Un voyage de Goa à Ormuz en 1520,” *Modern Asian Studies*, vol. 22, no. 3 (1988): 417-32.

れ、多大な利益がもたらされる交易ルートに作り上げたのである。

6.4 流通経路4：ホルムズ・カンベイ・ルート

「ペルシア湾真珠生産圏」をハブとする四つ目の流通経路が、ホルムズ・カンベイ・ルートである。カンベイは、ペルシア湾の真珠の「伝統的希求地」であると同時に、真珠の「加工集散地」でもあった。したがって、カンベイはホルムズの真珠の重要な輸出先であった。カンベイで加工された真珠は、アジア各地に輸出されていた。

ポルトガル来航以前、ホルムズとカンベイは活発な交易関係があり、ホルムズ商人やグジャラート王国のイスラーム海上商人たちがその交易を担っていた²¹²。ピレスは「カンベイは二本の腕を伸ばし、右手でアデンを握り、もう一方の手でマラッカを握っている」という名高い言葉を残したが、アデン、マラッカだけでなく、ホルムズにも強い影響力を持っていた²¹³。

このルートは16世紀半ばまでは繁栄していたが、16世紀末から17世紀初めになると、衰退に向かったようである。リンスホーテンやピラール、テイシェイラなど、16世紀後半から17世紀初めのヨーロッパの記録者たちは、ホルムズとカンベイの交易についてはほとんど述べていない。その要因はふたつ推測できる。第一に、ポルトガルの台頭を嫌ったグジャラート王国のイスラーム海上商人がホルムズを避けるようになったためである²¹⁴。第二の要因は、真珠の大集散地となったゴアの台頭に帰することができる。16世紀、ゴアが真珠の大集散地になっていったことで、カンベイはゴアとの取引だけで十分な量の真珠を調達できるようになり、ホルムズよりゴアとの結びつきを深めたからだと推測できる。

6.5 流通経路5：ホルムズ・ヨーロッパ・ルート

「ペルシア湾真珠生産圏」をハブとする第五の流通経路は、「新興希求地」ヨーロッパへ向かうルートである。ヨーロッパ・ルートにはふたつの流通経路があった。第一に、ホルムズ・ゴア・ルートによってゴアに到達した後、リスボンに送られ、ヨーロッパ各地に到るルートである。このルートは、ポルトガル赴任者たちや民間ポルトガル商人が関与する遠隔地交易のルートであった。ペルシア湾の真珠は、ゴア経由の海上輸送でヨーロッパに入っていた。第二のヨーロッパ・ルートが、メソポタミア・ルートである。これは、ヴェネツィア商人などが、メソポタミアの陸上輸送を使うことで、ホルムズからヴェネツィアに真珠を運び、ヨーロッパに出荷するルートである。

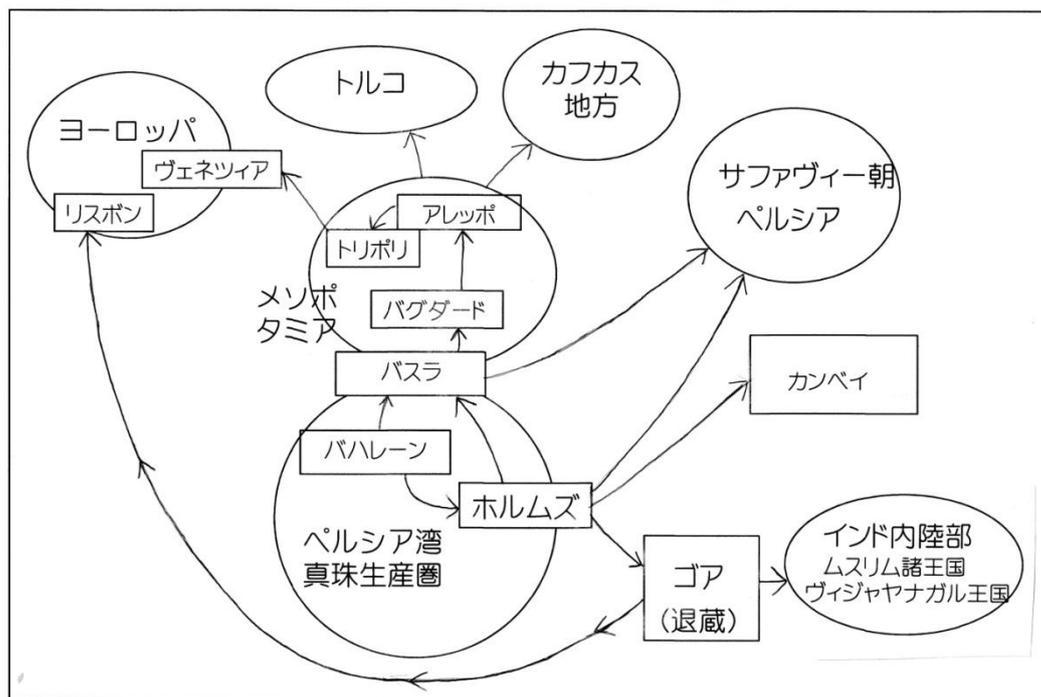
²¹² バロス（生田他訳）『アジア史（一）』、125~131頁；ピアスン（生田訳）『ポルトガルとインド』、176頁；Teles e Cunha, “The Portuguese Presence in the Persian Gulf,” p. 218.

²¹³ Pires, *A suma oriental de Tomé Pires*, p. 199; ピレス（生田他訳）『東方諸国記』、114頁。

²¹⁴ 16世紀後半のグジャラートと紅海の交易の活況については、Subrahmanyam, “Precious Metal Flows and Prices in Western and Southern Asia,” p. 197; Floor, *The Persian Gulf*, pp. 61-2 を参照。

以上、ペルシア湾の真珠の流通を「ハブ・アンド・スポーク交易」の概念で考察した。16世紀のペルシア湾の真珠のネットワークは、「真珠生産圏」をハブとして、アジア世界の各方面、ヨーロッパ世界に広がっているのが明らかになった。図1は、ペルシア湾の真珠の「ハブ・アンド・スポーク交易」をまとめたものである。

図1 ペルシア湾の真珠の「ハブ・アンド・スポーク交易」



注： 図は、真珠の取引量ではなく、流通の方向を示すものである。

ペルシア湾の真珠の「ハブ・アンド・スポーク交易」では、海上輸送もあれば、陸上輸送もある。伝統的なアジアの諸王国や諸都市を結ぶアジア域内交易もあれば、ポルトガル領インドの主要都市を結ぶアジア域内交易もある。ヨーロッパへとつながる遠隔地交易もあった。まさに真珠交易は異文化間交易であり、トランスリージョナルな特徴をもつことがわかる。

アジア各地の商人やヨーロッパの商人が「ペルシア湾真珠生産圏」に集まり、異文化間交易が行われたのは、そこが大量の真珠が採取され、商人が納得した量を確保できるアコヤ系真珠の産地だったからである。ペルシア湾のアコヤ系真珠は、産出量の多さによって、アジア世界の各方面、ヨーロッパ世界を接続させる国際商品であった。アコヤ系真珠の採れる海域・地域、すなわちホルムズを中心とする「ペルシア湾真珠生産圏」は、広域商業圏の中核としての機能があったのである。

さらに、真珠の流通面の考察によって、「ペルシア湾真珠生産圏」を支配しているポルト

ガル海洋帝国が、車輪のハブとスポークのように、アジア世界の各地、ヨーロッパ世界にまで広がる真珠の国際的流通網の中心にいたことも明らかになった。ポルトガルはその商業ネットワークのすべてを掌握している訳ではなかったが、きわめて有利な立場にいた。真珠の流通ネットワークは、国際商人が多額の金、銀を持ち込むネットワークでもあった。ポルトガル海洋帝国は、真珠を主体に金、銀が流れ込む流通網の中心におり、多額の利益を得たのである。

本節は、16世紀における真珠交易の恒常性と変化も明らかにした。イラン本土やメソポタミア、インド内陸部など、16世紀においても真珠の「伝統的希求地」は健在で、アジア世界における真珠の大きな需要を創出していた。こうした「伝統的希求地」を結ぶ真珠の流通経路は不変であった。その一方で、ポルトガル勢力の登場は、アジア域内交易の従来の真珠交易パターンを変化させた。ホルムズ・ゴア・ルートの繁栄によって、ホルムズとカリカットの交易はすたれ、ホルムズ・カンベイ・ルートも次第に衰退した。最大の変化は、ホルムズを主要なハブとする伝統的な真珠の流通網の中心にポルトガル勢力が位置するようになったことである。本節の考察は、インド洋海域世界におけるポルトガルの活動成果は、スパイス交易や「インド航路」で運んだ物品だけで判断できないことを示し、真珠の流通の観点ではポルトガルの優越性が明らかになることを検証した。

第7節 先行研究の通説の再考

本章での一連の考察は、16世紀のポルトガル対外拡張史における四つの通説に再考を迫ることになる。

第一に、インド洋海域世界におけるポルトガルの対外拡張の実態についての過小評価である。I. ウォーラーステインは、ポルトガルの軍事的優位は海上についてしか成立しておらず、アジア内陸部に浸透しなかった、アジアの人々はポルトガル人との接触によって何ひとつ本質的な変化を被らなかつたと述べている²¹⁵。こうした見解には、海域とは富が生まれる場所であり、その富を獲得するための水産業が実施される場所であるという認識はない。宝石の産地は枯渇する場合があるが、真珠の採れる海域は真珠を生み出し続けることができる。本章ではアルブケルケの対外拡張の意図などを分析してきたが、それによって16世紀のポルトガル人は、ペルシア湾や紅海などのアコヤ系真珠 (*aljofer*) が採れる海域の経済的重要性を認識しており、その政治的・軍事的支配を目論んで、その支配を実現したことが明らかになった。アジアの人々にとっては、彼らが伝統的に貴重視してきた真珠の採れる海域がヨーロッパ勢力に奪われたことを意味した。ポルトガル海洋帝国は、海域の地政学的重要性を熟知して、海域支配を実現した帝国だったのである。

第二に、ポルトガルの商業活動についての過小評価である。A. ダス・グプタは、インドの海洋交易は、ポルトガルの影響ぐらいではほとんど変化しなかつたと述べている²¹⁶。M. N.

²¹⁵ ウォーラーステイン (川北訳) 『近代世界システム 1』、376頁。

²¹⁶ Das Gupta, "Indian Merchants and the Trade in the Indian Ocean," p. 427.

ピアスは、ポルトガルは貧しく、コショウは十分獲得できず、アジア世界での存在感は大きくなかった、南米の銀を得るまでアジア市場には参入できなかった、と主張している²¹⁷。ネウイットも、ポルトガルは売る物がなく、アジア域内交易では脇役に過ぎなかったと述べ、ポルトガルの二義的役割を強調している²¹⁸。こうした過小評価の議論の問題点は、ポルトガルがアジア世界で求めた唯一の商品が、コショウと他のスパイスであったと考えていることである。また、コショウ貿易については、ポルトガルが「インド航路」で運んだスパイスの総量やその割合から彼らの活動が評価され、総額では十分議論されていない。本章で考察してきたように、ポルトガル人赴任者や民間ポルトガル商人が希求した商品はスパイスだけではなく、真珠や宝石などもあった。それらは国王の独占ではなく、自由取引が許された商品であった。16世紀のポルトガル海洋帝国は、アコヤ系真珠の豊饒な産地である「ペルシア湾真珠生産圏」——とりわけ真珠集散地のホルムズ——を掌握することで、早くから真珠を入手していたのである。コショウの獲得量だけで、ポルトガルによるアジア物産の購入が失敗に終わったということとはできない。

本章は、真珠がアジア世界で広く希求され、金銀と換金可能であったという事実を解明してきたが、ポルトガルの商業活動の過小評価の議論は、そうした事実を認識していない。真珠史からの考察では、ポルトガル海洋帝国による「ペルシア湾真珠生産圏」支配とは、彼らがアジア世界垂涎の商品の生産・流通に介入し、大きな存在感を示したことを意味していた。真珠を求めるアジアの国際商人たちは、金銀を持参して、ポルトガル傘下のホルムズに蝟集した。この点において、ポルトガルは売る物がなく、アジア市場に参加できなかったという議論は成り立たない。むしろポルトガルは、アジア各地に、車輪のスポークのように広がる真珠の流通ネットワークの中心にいたのである。真珠を看過して、ポルトガルの商業活動を過小評価することはできない。

ポルトガル対外拡張史における第三の通説は、真珠の集散地ホルムズの役割についての過小評価である。スブラフマニヤムやフロア、M. B. ヴォソウギなどの先行研究は、ホルムズから大量の銀がインドに流れていることに着目し、ホルムズはスパイスの輸入によって輸入超過に陥っており、収支を合わせるために銀をインドに輸出したと解釈してきた²¹⁹。こうした議論には問題点がある。まず、なぜ関税の高い不毛の島であるホルムズにインドへ輸出するほどの大量の銀が集まっていたのかを十分考察していない。言い換えれば、真珠の集散地は、銀や金を集める機能があったという点を勘案していない。さらに、ホルムズに豊富に流入する銀——とりわけペルシアのラリン銀貨——は、それらを「商品」または基軸通貨として購入した商人たちによってインドに輸出され、彼らの利益を増やしていた

²¹⁷ Pearson, *The Portuguese in India*, pp. 40-9.

²¹⁸ Newitt, *A History of Portuguese Overseas Expansion*, pp. 260-2.

²¹⁹ Boxer, *The Portuguese Seaborne Empire*, p. 41; Subrahmanyam, "Precious Metal Flows and Prices in Western and Southern Asia," p. 191; Floor, *The Persian Gulf*, pp. 63-4; Vosoughi, "The Kings of Hormuz," pp. 98-9. 西アジアからインドへの銀の流出は、フランク（山下訳）『リオリエント』、173~174頁も参照。

という事実を見落としている。ホルムズからの銀の流出を貿易赤字の観点だけから見るのは適切ではない。むしろ、ホルムズの役割はイラン本土からラリン銀貨を引き出し、インド洋海域世界に広く流通させ、ラリン銀貨の基軸通貨化に寄与していたことである。

第四の通説は、アメリカ銀の輸出を増加させた17世紀のヨーロッパ人の商業取引を評価する一方、ポルトガルの活動を相対的に低く見るものである。K. N. チョードリーは、アメリカの銀鉱山の発見がなければ、ヨーロッパとアジアとの交易は維持されることはできなかったと述べている²²⁰。フランクは、さらに声高であり、ヨーロッパが世界市場へ参加できたのは、アメリカの貨幣を新しく、継続的に使用できるようになったこと以外にほとんど理由がないと強調している²²¹。スブラフマニヤムは、16世紀のポルトガルが「インド航路」でアジアに運んだ銀は多くはなく、その経済的重要性は低かったと結論づけている²²²。こうした研究は、16世紀末のインド洋海域世界ではアメリカ銀貨は品質が悪いため評価されておらず、スパイス購入のためにはラリン銀貨に変更する必要があったというリンスホーテンの報告に着目していない。また、ポルトガルは、スパイス購入に欠かせないラリン銀貨を真珠の集散地ホルムズ支配を通して早くから獲得していたことも理解していない。

ヨーロッパからのアメリカ銀貨の輸出の急増は1622年以降に顕著になった。先行研究は、この傾向について、オランダやイギリスの東インド会社がアメリカ銀貨をもってアジア市場に参入し、コショウや他のスパイスの輸入を増やしてきたと議論してきた²²³。これらの議論の問題点は、1622年の歴史的意義を見ていないことである。この年は、サファヴィー朝ペルシアがポルトガルからホルムズを奪還した年である。以来、ホルムズがポルトガルの手に戻ることはなかった。筆者は、1622年以降、アメリカ銀貨の輸出が急増した背景は、ポルトガルがラリン銀貨の流入口であったホルムズを失い、銀の枯渇が進む一方で、オランダやイギリスの東インド会社は、金、銀が流入する真珠集散地を支配していなかったため、アジア世界と取引を行うには、アメリカ銀貨が特に必要になったからだと考える。アメリカ銀貨の大量輸出の考察は、「真珠生産圏」を支配することでラリン銀貨を獲得していた16世紀のポルトガル海洋帝国と、「真珠生産圏」を支配せず、決済手段を持たなかった17世紀前半のオランダやイギリス勢力とを明確に区別してなされるべきである。アメリカ銀貨の輸入量だけで、アジア域内取引におけるヨーロッパの商業活動の成果を評価することはできない。

ポルトガル対外拡張史やインド洋海域史などの先行研究は、アジア世界におけるポルトガルの役割を否定的に考える。しかし、真珠という換金商品の存在、アジアの中央集権国家から金、銀を引き出す真珠の集散地の機能を勘案すると、「ペルシア湾真珠生産圏」の海域、採取地、ホルムズという集散地を支配したポルトガルの優位が判明する。ポルトガル

²²⁰ Chaudhuri, “European Trade with India,” p. 393.

²²¹ フランク（山下訳）『リオリエント』、129頁、161~163頁、246~247頁、313~316頁。

²²² Subrahmanyam, “Precious Metal Flows and Prices in Western and Southern Asia,” p. 197.

²²³ Subrahmanyam, p. 197.

海洋帝国は「ペルシア湾真珠生産圏」支配によって、真珠ばかりでなく、金、銀という富も手中にしたのである。16世紀のポルトガルの対外拡張に関する過少評価は改める必要がある。

小括

本章では、アコヤ系真珠の数少ない大産地のひとつであるペルシア湾とその湾岸世界に焦点を当て、ポルトガルの対外拡張の動機と目的、収益、さらに真珠のコモディティ・チェーンの生産、希求、流通の実態を考察した。

第1節では、16世紀初期のペルシア湾岸世界では、真珠の漁場、バハレーンやジュルファルなどの主要な真珠の採取地、ホルムズという真珠集散地が、経済的・政治的・軍事的に結びついて、ひとつの広大な「真珠生産圏」を形成していたことを解明した。ポルトガル語の一次史料で使われる *aljofar* という語が、主にアコヤ系真珠を指していることも確認した。

第2節では、16世紀初期のポルトガル人にとって、真珠の入手こそが航海の動機のひとつであり、真珠ゆえのヨーロッパの対外拡張があったことを明らかにした。さらに、初期ポルトガル人の「ペルシア湾真珠生産圏」における軍事行動の目的には、真珠漁場の支配と真珠採取業の掌握の意図があったことも論証した。つまり、ポルトガルの対外拡張には、富の源泉としての海域支配という構想があり、「真珠生産圏」には地政学的重要性があったことがわかる。真珠ゆえの海域支配の構想があったのである。

第3節では、ポルトガル海洋帝国が「ペルシア湾真珠生産圏」を政治的・軍事的に支配することで、引き出した富や利益の形を検討した。本節では真珠の集散地ホルムズの機能を考察したが、これによって、ポルトガル海洋帝国は真珠を入手しただけでなく、金や銀、とりわけペルシアのラリン銀貨も獲得したことを解明した。ポルトガルの「ペルシア湾真珠生産圏」の支配は、真珠だけでなく、金、銀も得られるメリットがあった。

第4節では、ペルシア湾の真珠の生産の実態を考察した。「ペルシア湾真珠生産圏」ではアラブ系・ペルシア系の商人たちが、前金で潜水労働者を囲い込み、「債務隷属制真珠採取業」を発達させていたことを明らかにした。また、潜水労働者にはアラブ人だけでなく、奴隷化されたアフリカ人もいたことを解説した。「債務隷属制真珠採取業」は、ポルトガル人の真珠採取業への新規参入を阻んだ要因のひとつであった。

第5節と第6節では、真珠のコモディティ・チェーンの希求・流通面を分析した。本論文は、コモディティ・チェーン分析にあたり、真珠の「伝統的希求地／伝統的希求者」、「新興希求地／新興希求者」、真珠の「ハブ・アンド・スポーク交易」の概念を提唱しているが、多種多様な国際商人が関与するアジア世界の真珠の希求面、流通面の分析には、それらの概念はきわめて有効であった。実際、これらの概念を使うことで、真珠はヨーロッパばかりか、アジア世界においても大きな需要がある国際商品で、その流通は、車輪のスポークのように、アジア各地と接続する流通網を構築していたことが判明した。真珠の取引は異

文化間交易であり、地域的広がりをもつトランスリージョナルなものであったことも明らかになった。希求面、流通面の考察によって、ポルトガル海洋帝国がペルシア湾の真珠の国際商業取引の流通の中心にいたことが判明したのである。民間ポルトガル商人は、真珠をアジアの「伝統的希求者」に輸出し、投資として使用した新しいタイプのヨーロッパ商人であった。

第 7 節で検討したように、先行研究では、ポルトガル過小評価論が繰り返されてきた。しかし、ポルトガルの対外拡張の考察に、真珠という換金商品の重要性及び真珠の採れる海域の地政学的重要性を加えて勘案すると、ポルトガルの活動の大きさ、その優位性が明らかになる。ペルシア湾の真珠の考察は、従来のポルトガルの対外活動の過小評価論に再考を迫るのである。

第5章 マンナール湾真珠生産圏

——ポルトガルの官・軍・宗教共同体による水産業

はじめに

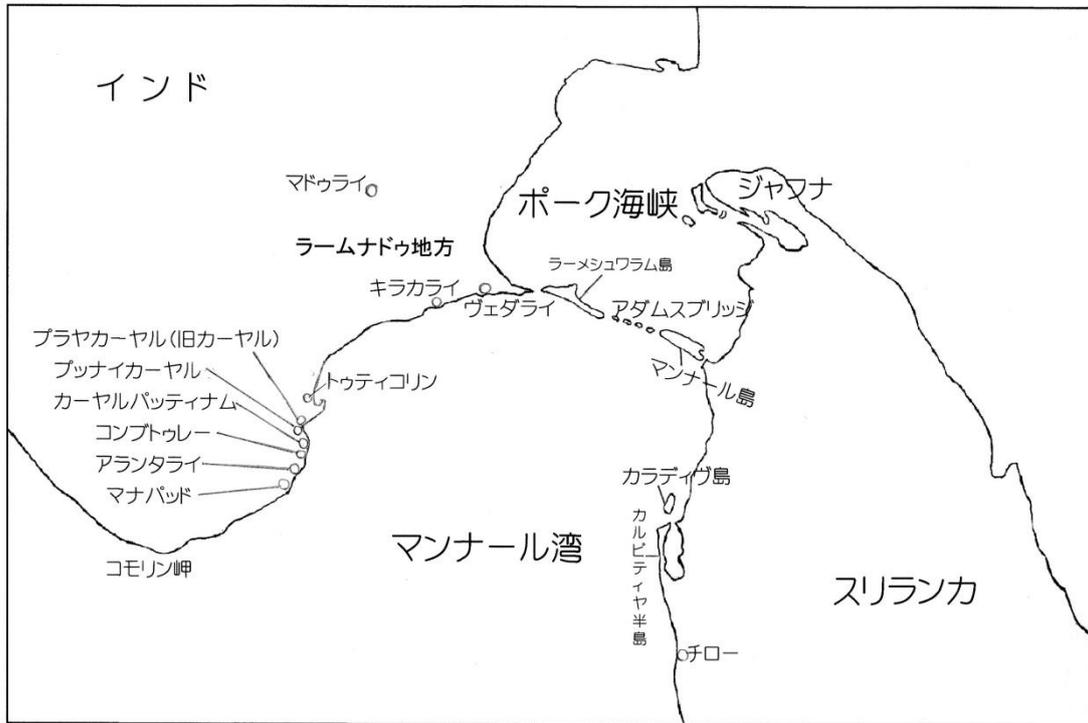
インドのタミルナドゥ南海岸は、ポルトガルの政治勢力が、早くも1520年代にその進出を本格化させた地域であった¹。その後、イエズス会による布教活動も進められ、マンナール湾沿岸部は、16世紀を通じ、政治的にも、宗教的にもポルトガル領インドの支配下に置かれた地域となった。マンナール湾は、ペルシア湾と並ぶ、古来名高いアコヤ系真珠の大産地である。

本章の目的は、なぜ16世紀のポルトガルの政治勢力及び宗教勢力はマンナール湾岸世界に進出していったのか、なぜこれらの海域や湾岸世界が彼らにとって重要だったのか、彼らはマンナール湾岸世界からどのように富を引き出したのかを検討することである。さらにマンナール湾の真珠は、16世紀のインド・スリランカ世界に何をもたらし、何をどう変えたのかも考察する。本章では、まずポルトガル来航以前にマンナール湾では「真珠生産圏」が形成されていたかを検証し、ポルトガルの政治勢力・宗教勢力による「マンナール湾真珠生産圏」への進出経緯、彼らの富の引き出し方を考察する。その後、コモディティ・チェーン分析によって、真珠採取業の生産、希求、流通の各側面を解明する。とりわけ、本章では真珠の生産を担う潜水夫の民族性、イエズス会の彼らへの布教の目的、ポルトガルの政治・宗教勢力による水産業への関与、真珠の希求と流通における国際性と民族性などを考察する。

16世紀のポルトガルのインドとスリランカへの進出については、これまで一国史研究や地域史研究によって別々に議論されてきた。しかし、インド側のマンナール湾岸も、スリランカ側のマンナール湾岸も、マンナール湾が育む水産資源である真珠を享受してきたという点では、共通の特徴をもっているはずである。ただ、そうした共通性を認識した歴史叙述はこれまでなされてこなかった。本章は、マンナール湾とその沿岸部を地域的一帯とする広域俯瞰、及び真珠のコモディティ・チェーン分析を行うことで、ポルトガルの政治・

¹本論文では、インド半島最南端のコモリン岬から北東方向に伸び、ラーメシュワラム島の海域に達する沿岸部を「タミルナドゥ南海岸」と呼ぶ。タミルナドゥの南海岸は、19世紀には「マドゥライ海岸」(*Coast of Madura*)と呼ばれており、その他、海岸南部を指す場合は *Tinnevelly Coast*、海岸北部では *Ramnad Coast* という呼称が使われていた。こうした呼称については、James Steuart, *An Account of the Pearl Fisheries of Ceylon* (Cotta: Church Mission Press, 1843), map; J. H. Nelson, *The Madura Country: A Manual Complied by Order of the Madras Government* (1868; New Delhi: Asian Educational Services, 1989), p. 154 を参照。ただ、今日では固有名詞は存在しないようで、タミルナドゥ(州)の南海岸といった表現が使われる。後述するマンナール湾の真珠史研究では、「タミル海岸」という呼称が使われる場合もあるが、本論文では「タミルナドゥ南海岸」という表現を用いる。なお、タミルナドゥ南海岸より北部に位置し、ポーク海峡に面するインド東海岸も19世紀には「マドゥライ海岸」と呼ばれる場合もあったが、今日では「コロマンデル海岸」と呼ばれている。

地図1 環マンナール湾沿岸部



宗教勢力によるインド・スリランカへの進出の実態、キリスト教布教の目的、及び海域利用の在り方を解明し、従来の研究で見落とされてきた 16 世紀のマンナール湾世界の歴史を再構築する。

0.1 先行研究

マンナール湾の真珠採取については、18 世紀末にイギリス植民地政府がセイロン島を支配下に置き、島の北西海岸で実施してきたため、「セイロン島の真珠採り」として世界的に知られている。しかし、ポルトガル時代における真珠採取の実態はまだ十分解明されておらず、主にマンナール湾のインド側の真珠史を扱った研究書や論文が幾つかあるに過ぎない。そうした中、ポルトガル時代のインドとスリランカの真珠史を論じているのが、C. R. デ・シルヴァ（以下、シルヴァと表記）の“The Portuguese and Pearl Fishing off South India and Sri Lanka”である²。S. アルナチャラムの *The History of the Pearl Fishery of the Tamil Coast* や S. スブラフマニヤムの “Noble Harvest From the Sea: Managing the Pearl Fishery of Mannar, 1500-1925” などは、何世紀にもわたるインド側の真珠史の考察であり、その中でポルトガル時代も考察されている。S. J. スティーヴンの *Portuguese*

² C. R. de Silva, “The Portuguese and Pearl Fishing off South India and Sri Lanka,” *South Asia*, new series, vol.1, no. 1 (March 1978), pp. 14-28.

in the Tamil Coast はポルトガルのタミルナドゥ南海岸への対外進出の研究で、その第2章の“Commercial Activities of the Portuguese in the Pearl Fishery Coast”は、ポルトガルと真珠の関係を考察している。M. P. M. ヴィンクの研究は、オランダ時代のタミルナドゥ南海岸の真珠採取に言及している³。一方、R. A. ドンキンの *Beyond Price* は、ポルトガル時代のマンナール湾の真珠採取についてはほとんど議論していない⁴。

こうした先行研究の問題点は五つある。第一に、他の海域の真珠史研究と同様、真珠の生態系への理解が不十分なことである。また、ポルトガル語の一次史料に登場する *aljofar* についても関心がなく、ほとんど議論していないか、*seed pearls* と解釈するかのどちらかである。たとえば、スブラフマニヤムの論考は、マンナール湾の真珠貝の学名を *Margaritifera vulgaris* としているが、この学名は今日では使用されていない。また、真珠の生成を「刺激による作用」(*process of irritation*)、真珠貝を「定住性の生物」(*sedentary animals*) と解説するなど、事実誤認が少なくない⁵。*aljofar* については言及しないまま、議論を進めている。

第二に、シルヴァの研究を除くと、インド側の一国史研究、地域史研究となっていることである。真珠史研究は、海を囲む湾岸部の人々が、国境とはかかわりなく、海の富を享受してきた歴史の検証である。したがって、マンナール湾の真珠史研究では、インド側の検証だけでは不十分であり、環マンナール湾岸部における歴史的展開を俯瞰的に考察する必要がある。こうした一国史研究の制約により、先行研究では、アコヤ真珠貝が生息するマンナール湾の沿岸部では、真珠の漁場とその採取地、集散地が密接に係わって、「真珠生産圏」を形成していたのではないかという問いは提起されてこなかった。陸地に依拠する議論のため、ポルトガルの海域支配という視点も抜けてきた。

第三に、マンナール湾の真珠採り潜水夫の分析、彼らとイエズス会との関係の分析が不十分なことである。真珠採取の長い伝統のあるマンナール湾では、真珠採りの潜水を専門にするカースト集団が誕生した。先行研究では、タミル系真珠採りカーストのパラヴァスのみに関心が置かれ、他のタミル系真珠採りカーストであるカレアスやラッバイの存在や

³ S. Arunachalam, *The History of the Pearl Fishery of the Tamil Coast* (Annamalai Nagar: Annamalai University, 1952); Sanjay Subrahmanyam, “Noble Harvest From the Sea: Managing the Pearl Fishery of Mannar, 1500-1925,” in *Institutions and Economic Change in South Asia*, ed. Burton Stein and Sanjay Subrahmanyam (Oxford: Oxford University Press, 1996), pp. 134-172; S. Jeyaseela Stephen, “Commercial Activities of the Portuguese in the Pearl Fishery Coast,” in *Portuguese in the Tamil Coast* (Pondicherry: Navajothi, 1998), pp. 60-91; Markus P. M. Vink, *Encounters on the Opposite Coast: The Dutch East India Company and the Nayaka State of Madurai in the Seventeenth Century* (Leiden: Brill, 2016), pp. 230-40.

⁴ R. A. Donkin, *Beyond Price: Pearls and Pearl-Fishing* (Philadelphia: American Philosophical Society, 1998).

⁵ Subrahmanyam, “Noble Harvest From the Sea,” pp. 136-7. ヴィンクはスブラフマニヤムを踏襲し、同じ事実誤認を繰り返している。Vink, *Encounters on the Opposite Coast*, p. 230.

真珠採り潜水夫の民族性の問題はほとんど議論されていない⁶。イエズス会は、パラヴァスやカレアスを囲い込むように布教したが、先行研究はその事実を簡単に述べるだけである。なぜイエズス会は真珠採りカーストを集中的な布教の対象にしたのか、そのためにどのような手段を採ったのかという点については、まだ十分検討されていない。

第四に、先行研究では、真珠の希求や流通は十分考察されていないことである。

さらに第五に、ポルトガル時代の真珠採取についての否定的な見解である。先行研究によると、ポルトガル時代の真珠採取は、多額の利益を生み出したわけではなく、真珠採取の既存のシステムを変えた訳でもなかった。ポルトガルによる真珠採り潜水夫のローマ・カトリックへの改宗の社会的・文化的影響は大きかったが、経済構造に与えたポルトガルの影響は限定的であったと主張されてきた⁷。

南インド史やスリランカ史などの歴史研究においても、マンナール湾の真珠の意義は看過されてきた⁸。これまでの歴史研究は一国史的研究が主流だったため、両国の間にあるマンナール湾を舞台にした真珠採取業は考察の対象から抜けることになった。そればかりか、16世紀の真珠史において重要な意味をもつマンナール島やジャフナ半島についても、スリランカ史では辺境扱いで、十分考察されていない⁹。

タミルナドゥ南海岸におけるフランシスコ・ザビエルをはじめとするイエズス会の布教に関しては、G.シュールハンマーなどによって詳細な研究がなされてきた¹⁰。イエズス会が真珠採りカースト、パラヴァスを改宗させたことはよく知られた事実であり、インド・キリスト教史やポルトガル対外拡張史などの多くの研究書や論文が言及している¹¹。ただ、こ

⁶ パラヴァスとカレアス、ラッバイについては、後述する。

⁷ Silva, “The Portuguese and Pearl Fishing,” p. 28; Subrahmanyam, “Noble Harvest From the Sea,” p. 171.

⁸ 南アジアの歴史については、辛島昇編『南アジア史』（山川出版社、2004年）；辛島昇編『南アジア史（3）——南インド』（山川出版社、2007年）を参照。スリランカ史の歴史については、次を参照。H. C. Ray ed., *History of Ceylon: From the Earliest Times to 1505* (Colombo: Ceylon University Press, 1960); K. M. de Silva, *History of Sri Lanka* (Oxford: Oxford University, 1981); K. M. de Silva, ed., *History of Sri Lanka: From c 1500 to c 1800* (Peradeniya, Sri Lanka: The University of Peradeniya, 1995).

⁹ その一例が次の研究である。Zoltán Biedermann, *The Portuguese in Sri Lanka and South India: Studies in the History of Diplomacy, Empire and Trade, 1500-1650* (Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 2014).

¹⁰ Georg Schurhammer and Josef Wicki, eds., *Epistolae S. Francisci Xavierii* (Rome: Monumenta Historica Societatis Iesu, 1944-5), 2 vols.; Georg Schurhammer, *Francis Xavier: His Life, his Times*, trans. M. Joseph Costelloe, 4 vols. (Rome: Jesuit Historical Institute, 1973-82).

¹¹ Stephen Neill, *A History of Christianity in India: The Beginnings to AD 1707* (Cambridge: Cambridge University Press, 1984); Robert Eric Frykenberg, *Christianity in India: From Beginnings to the Present* (Oxford: Oxford University Press, 2008); Stephen, “Evangelisation (*sic*) by the Padroado Missionaries,” in *Portuguese in the Tamil Coast*, pp. 276-323; Markus P. M. Vink, “Between the Devil and the Deep Blue Sea: The Christian Paravas: A ‘Client Community,’” in *Seventeenth-Century Southeast India*, *Itinerario*, vol. 26, no. 2 (July 2002), pp. 64-98; Malyn Newitt, *A History of*

うした研究では、その事実は述べているが、なぜイエズス会がそれほどまでにパラヴァスに固執したのか、なぜポルトガル長官と対立するほど排他的な布教であったのかということとは十分検討していない。カレアスへの布教については、抜けていることが多い。

一方、日本では教会関係者の河野純徳によって、ザビエル書簡の翻訳やシュールハンマーの研究書の翻訳が進められ、岸野久や高橋裕史などの研究者によって、ザビエル研究やイエズス会研究が行われてきた。高橋は、16世紀後半のイエズス会の東インド巡察使、アレッサンドロ・ヴァリニャーノの報告書の翻訳も手がけている¹²。日本の研究においても、イエズス会によるパラヴァス固執の理由やカレアスについては十分議論されていない。

日本語の研究の問題点のひとつは、ポルトガル語やスペイン語などの一部の単語が正確に訳されていないことである。たとえば、タミルナドゥ南海岸は、16世紀の一次史料では、*Costa da pescaria* や *la Pescaria* などと記されるが、これは「漁夫海岸」と訳されることが多い¹³。しかし、「漁夫」は *pescador* である。*Pescaria* は「漁場」または「漁をすること」という意味であるが、これまで本論文で検証してきたように、16世紀には特に「真珠の漁場」または「真珠採取」の意味で使われてきた。ヴァリニャーノの報告書には、“*los chrystianos de la Pescaría, que se llaman así por la pescaría que tienen de aljófár y perlas*” (ペスカリアのキリスト教徒は、このように呼ばれる、というのは、彼らには真珠 (*aljófár*) と大粒真珠 (*perlas*) が採れるペスカリアがあるからである) という一文がある¹⁴。したがって、*Costa da pescaria* や *la Pescaria* は「(真珠) 漁場海岸」または「(真珠) 採取海岸」と訳すべきである。本章では「ペスカリア海岸」と表記する。

Costa da pescaria や *La Pescaria* を「漁夫海岸」と訳すもうひとつの問題点は、真珠採取の重要性を曇らせてしまうことである。たとえば、「ザビエルは漁夫海岸の漁夫を改宗し

Portuguese Overseas Expansion, 1400-1668 (London: Loutledge, 2005), p. 114

¹²シュールハンマー／ヴィッキ編 (河野純徳訳注) 『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』(平凡社、1985年)；河野純徳『聖フランシスコ・ザビエル全生涯』(平凡社、1988年)；岸野久『ザビエルと日本——キリシタン開教期の研究』(吉川弘文館、1998年)；岸野久『ザビエルと東アジア——パイオニアとしての任務と軌跡』(吉川弘文館、2015年)；高橋裕史『一六世紀イエズス会インド管区の経済構造に関する研究』(本人による報告書、2003年、2005年、2006年)；高橋裕史『イエズス会の世界戦略』(講談社、2006年)；アレッサンドロ・ヴァリニャーノ (高橋裕史訳) 『東インド巡察記』(平凡社、2005年)。

¹³ 河野訳『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』や河野『聖フランシスコ・ザビエル全生涯』、岸野『ザビエルと日本』や『ザビエルと東アジア』などで「漁夫海岸」と訳されている。Neill, *A History of Christianity in India* や Frykenberg, *Christianity in India* でも、*Fisher Coast* と訳されている。

¹⁴ Alessandro Valignano, “Sumario de las cosas que pertenecen a la India Oriental y al gobierno de ella,” in *Documenta Indica*, ed. S. J. Josef Wicki (Rome: Institutum Historicum Societatis Iesu, 1975), vol. 13, pp.182-3. 高橋は、本論文引用の一文を「彼ら(漁夫のキリスト教徒)が漁夫と呼ばれているのは、小粒真珠と真珠を採取しているからである」と訳しているが、*pescaria* を「漁夫」と訳するのは問題がある。また、高橋は「小粒真珠 (*aljófár*)」は「巻貝採取と螺鈿真珠」(ママ)を指すと述べているが(132頁注1)、こうした解釈も表現も適切ではない。

た」と解釈するか、「ザビエルは真珠漁場海岸の真珠採りの漁夫を改宗した」と解釈するかで、おのずと意味が違ってくる。一次史料を正しく解釈し、また、ザビエルやイエズス会の布教地がどのような地理的特性を持っていたのかを認識して、マンナール湾岸での布教を見ていく必要がある。

このようにマンナール湾岸の歴史研究では、真珠への無関心とともに、一国史研究による限界が如実に分れた分野となった。インドとスリランカ間の海域の経済性、湾岸世界で暮らす人々の生業、民族性、宗教などに関心が払われることはなかったのである。

0.2 本章の研究手法と史料

本章では、インドとスリランカ間の海域とその沿岸部を一帯としてとらえることで、ポルトガル政治勢力と宗教勢力のこの地域への進出の意図や本質が明らかになると考える。この章で特に着目するのが、潜水夫や真珠商の民族性、彼らが信奉する宗教の違いである。第3章、第4章同様、本章においても真珠の生態系的事実を取り入れ、*aljofar* を正しく解釈することで、議論を進める。また、真珠のコモディティ・チェーンの生産、希求、流通の側面を検討することで、水産業実施のためのイエズス会の役割と海域支配の意味を明らかにし、主に商業の観点から語られてきたポルトガルの活動の再解釈を行う。

本章で使用する史料は、16世紀・17世紀のヨーロッパ人による書簡や報告書などである。16世紀初めのドゥアルテ・バルボザの旅行記やガルシア・ダ・オルタの *Coloquios dos Simples e Drogas da India* 『インドの薬草と薬物についての対話』など、これまで使用してきた史料も少なくない¹⁵。一方、この章で新たに使用する史料は、イエズス会関連文書である。具体的にはザビエルの書簡やヴァリニャーノの東インドに関する報告書などである¹⁶。これらの史料は、マンナール湾真珠史研究では十分活用されていない。これらを原文で解読することで、ペスカリア海岸の実態や真珠採取におけるイエズス会の役割や戦略などを明らかにできると考えられる。

本章では、ポルトガルの行政文書も参照する。1582年の *Livro das cidades, e fortalezas que a coroa de Portugal tem nas partes da Índia, e das capitánias, e mais cargos que nelas ha, e da importância delles* (『ポルトガル王室がインドの各地に所有している各都市、各要塞、及びそれらの長官職、及びその他の官職、及びそれらの経費に関する報告書』、以下『ポルトガル王室の各都市、各要塞に関する報告書』と表記) である¹⁷。この史料は、

¹⁵ Duarte Barbosa, *Livro do que viu e ouviu no oriente* (Lisbon: Publicações Alfa, 1989); Duarte Barbosa, *The Book of Duarte Barbosa: An Account of the Countries Bordering on the Indian Ocean and their Inhabitants*, trans. the Royal Academy of Sciences at Lisbon and ed. Mansel Longworth Dames, 2 vols. (1918-1921; Nendeln: Kraus Reprint, 1967); Garcia da Orta, *Colóquios dos simples e drogas da Índia* (1895; Lisbon: Imprensa Nacional-Casa da Moeda, 1987), vol. 2.

¹⁶ Schurhammer and Wicki, eds., *Epistolae Xaverii*, 2 vols.; Valignano, “Sumario,” pp. 134-319.

¹⁷ “Livro das cidades, e fortalezas que a coroa de Portugal tem nas partes da Índia, e das

本論文第 4 章でホルムズ海峡に配備されたポルトガル艦隊の考察で使用したが、マンナール湾の真珠採取及び同湾におけるポルトガルの海域支配についても重要な情報を与えてくれる。さらに、本章では財務官シモン・ボテリョの 1554 年の報告書やインド副王らによって出された *Regimento pera a fortaleza de manar* 「マンナール要塞行政規定書」なども使用する¹⁸。これらの史料は、ポルトガル史研究では名高い史料で、一部のマンナール湾真珠史研究でも参照されているが、史料の誤訳も散見され、十分参照されたとは言い難い。本章では真珠の生態系の観点から、正確な解釈を試みる。

さらに、本章では、マンナール湾の真珠史研究が参照していない 16 世紀のスペイン人聖職者フアン・ゴンサーレス・デ・メンドーサの *Historia de las cosas mas notables, ritos y costumbres del Gran Reyno de la China* (邦訳名『シナ大王国誌』) やポルトガル人イエズス会聖職者ジョアン・ロドリゲスによる 17 世紀初めの *Historia da igreja do Japão* (邦訳名『日本教会史』) などの一次史料にも目を配る¹⁹。ポルトガル来航以前のマンナール湾岸の考察では、欧米人研究者がほとんど参照しない漢籍なども使用することで、真珠の流通や希求について新たな知見を加えたい。

0.3 本章の構成

- 第 1 節： 16 世紀初期の「マンナール湾真珠生産圏」
- 第 2 節： ポルトガルの「マンナール湾真珠生産圏」への進出
- 第 3 節： 「マンナール湾真珠生産圏」の真珠の生産
- 第 4 節： 真珠の希求地、希求者
- 第 5 節： 真珠の流通

第 1 節 16 世紀初期の「マンナール湾真珠生産圏」

本節では、マンナール湾における真珠貝の分布及び 16 世紀初期の環マンナール湾岸の真珠の採取地、集散地の状況を明らかにし、ポルトガル来航以前に「真珠生産圏」が形成されていたのかどうかを検討する。その際、真珠採取地や集散地を支配した政治勢力やその歴史的経緯、潜水夫や集散地で活躍した商人などについても考察し、真珠の生産や流通を

capitanias, e mais cargos que nelas ha, e da importância delles,” ed. Francisco Paulo Mendes da Luz, *Stvdia*, vol. 6 (July, 1960), pp. 1-107. この報告書については、第 4 章 3 節を参照。

¹⁸ Simão Botelho, “O tombo do estado da Índia,” in *Subsídios para a história da Índia Portuguesa*, ed. Rodrigo José de Lima Felner (1868; Nendeln: Kraus Reprint, 1976), pp. 41-259; Panduronga S. S. Pissurlencar ed., *Regimentos das fortalezas da Índia* (Bastorá: Rangel, 1951); Tikiri Abeyasinghe, *A Study of Portuguese Regimentos on Sri Lanka at the Goa Archives* (Colombo: The Department of National Archives, 1974).

¹⁹ フワン・ゴンサーレス・デ・メンドーサ (長南実・矢沢利彦訳) 『シナ大王国誌』 (岩波書店、1965 年) ; ジョアン・ロドリゲス、(佐野泰彦他訳) 『日本教会史』全 2 巻 (岩波書店、1967 年、1970 年)。

担う主要な集団についても解明する。マンナール湾真珠史の先行研究では「真珠生産圏」という概念は見られない。また、マンナール湾の真珠採取の特徴は、民族性や宗教の違いが大きな意味を持つが、先行研究は、そうした点については十分関心を示してこなかった。したがって、一国史を超えた形で環マンナール湾岸部の真珠採取地や集散地における真珠採り潜水夫や商人の民族性や宗教を解明していくのは、本論文が初めてである。

1.1 真珠の漁場

インドとスリランカの間にあるマンナール湾は、インド洋海域世界において、ペルシア湾と並び称される真珠の産地である。ピンクターダ属のアコヤ真珠貝 (*Pinctada fucata/martensii/radiata/imbricata* sp.) が優占種として大量に生息していた。アコヤ真珠貝は今日でも生息している²⁰。この湾のアコヤ系真珠は2 グレーン (直径 4.18 ミリ) 以下の真珠が主流であり、10 グレーン (直径 7.15 ミリメートル) 以上の真珠も採れることがあったが、きわめて稀であった。色は銀白色が一般的であった²¹。

マンナール湾では、アコヤ真珠貝の群生地は、真珠床 (*paar*、英語で *pearl bank*) と呼ばれた²²。セイロン島のイギリス植民地政府がマンナール湾の真珠採取を実施していた 19 世紀半ばに出された *An Account of the Pearl Fisheries of Ceylon* という報告書には、“Chart Shewing the Positions of the Pearl Banks of Ceylon and Tuticorin”と題された海図が添付されている (地図 2)²³。

海図によると、マンナール湾には二大真珠床が存在した。ひとつは「トゥティコリン真珠床」と呼ばれるもので、タンブラパルニ河口のデルタ地帯とトゥティコリンを中心に南北に伸びるインド側沿岸部の近海に帯状に広がる真珠床である。もうひとつの真珠床は、マンナール島南西沖からセイロン島西岸のチローの西方沖にかけて帯状に広がる真珠床である。海図では「真珠床」とだけ記されているが、本論文では「セイロン島西岸真珠床」と呼ぶことにする。さらに海図によると、これらの二大真珠床の他に、トゥティコリンより南方に位置するマナパッドの近海、トゥティコリンより北方のラームナドゥ地方 (タミルナドゥ南海岸北部) の近海、アダムスブリッジ帯の海域などにも真珠床が広がっていることがわかる²⁴。

つまり、マンナール湾の真珠床の分布の傾向は、タミルナドゥ南海岸では地先の海に集中しているが、マンナール島からセイロン島西岸では沿岸部からかなり離れた沖合に広がっていることである。マンナール湾は水深が浅いことで知られている。タミルナドゥ南海

²⁰ 白井祥平『真珠・真珠貝世界図鑑』(海洋企画、1994年)、28~29頁。

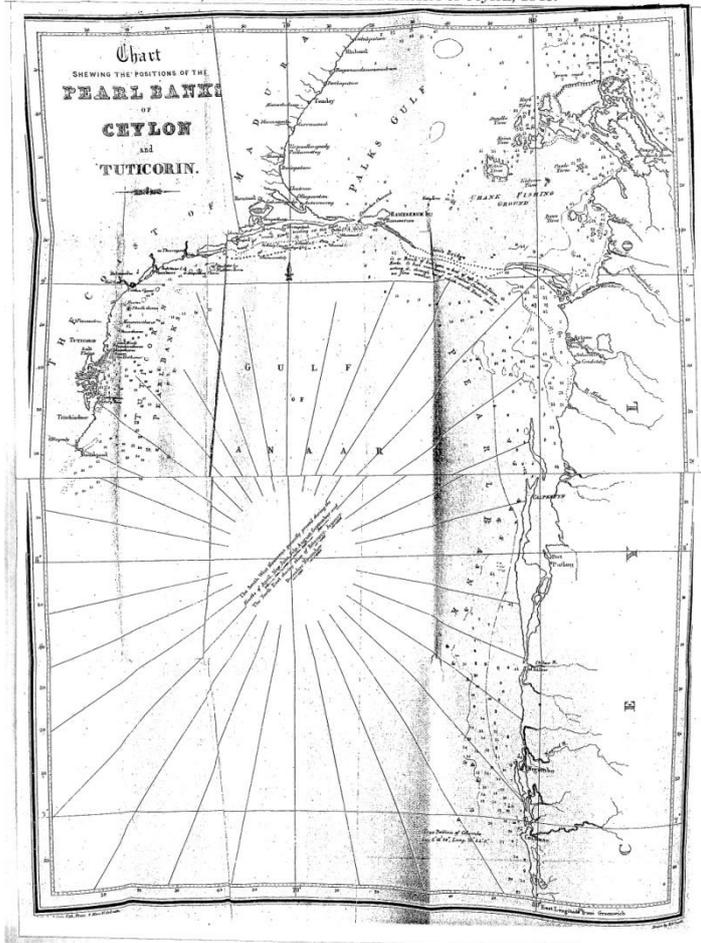
²¹ George Frederick Kunz and Charles Hugh Stevenson, *The Book of the Pearl: Its History, Art, Science and Industry* (1908; New York: Dover Publications, 1993), p. 124.

²² W. A. Herdman, *Report to the Government of Ceylon on the Pearl Oyster Fisheries of the Gulf of Mannar* (London: The Royal Society, 1903), vol. 1, p. 5.

²³ “Chart Shewing the Positions of the Pearl Banks of Ceylon and Tuticorin,” in Steuart, *An Account of the Pearl Fisheries of Ceylon*.

²⁴ “Chart Shewing the Positions of the Pearl Banks of Ceylon and Tuticorin.”

地図2 “Chart Shewing the Positions of the Pearl Banks of Ceylon and Tuticorin”
James Stuart, *An Account of the Pearl Fisheries of Ceylon*, 1843.



岸の近海はとりわけ浅く、2ファゾムから4ファゾム程度である²⁵。マンナール島近海では3ファゾムから5ファゾム程度であるが、セイロン島西海岸の沖合は水深が深くなり、9ファゾムや10ファゾム以上の海域も少なくなかった²⁶。

マンナール湾にアコヤ真珠貝が生息することによって、インド側でも、スリランカ側でも、環マンナール湾岸では早くから真珠採取業が人々の生業となってきた。この真珠貝を採取するために環マンナール湾岸部では潜水漁撈文化が発展し、採れた真珠は交易品として輸出された。インドの真珠、セイロンの真珠と称されたマンナール湾のアコヤ系真珠は、コショウと並ぶインド世界の特産品であり、古代ローマ世界にも知られていた²⁷。

マンナール湾以北のポーク海峡にもアコヤ真珠貝が生息していたが、この海域はむしろチャンク貝と呼ばれるホラ貝の採取場となってきた²⁸。チャンク貝からも真珠が採れたが、

²⁵ 1 ファゾム (fathom) は水深測定の単位で、約 1.8 メートル。

²⁶ “Chart Shewing the Positions of the Pearl Banks of Ceylon and Tuticorin.”

²⁷ Donkin, *Beyond Price*, pp. 152-191; 山田篤美『真珠の世界史』(中央公論新社、2013年)、53~63頁。

²⁸ “Chart Shewing the Positions of the Pearl Banks of Ceylon and Tuticorin.”

この貝は貝殻や貝の身の方が重要であった。

マンナール湾はインドとスリランカの間にある海域であり、この海域を通ればインド西海岸とコロマンデル海岸の交通や運輸に便利であったが、水深が浅く、座礁の危険が高いため、主要な交易航路にはならなかった。輸送や物流の場ではなく、海が生み出す海産資源によって人類に利用されてきた海域であった。

1.2 真珠採取地

(1) カーヤル

インドのタミルナドゥ南海岸の海域には、先述したように、真珠床が広がっている。それゆえ、この沿岸部では各地で真珠採取が実施されてきた。そうした中、すでに1世紀には真珠採取地として知られていたのが、タンブラパルニ河口の科尔カイという港町で、パーンディヤ朝下の真珠採取の中心地になってきた。しかし、河口の堆積作用によって科尔カイは内陸部となり、新たにカーヤルという港町が河口北岸に作られた。以後、カーヤルがタミルナドゥ南海岸を代表する真珠採取地となった²⁹。

パーンディヤ朝下で潜水漁撈の真珠採取を担ってきたのが、*Parava*、*Parawa*、*Paravan*、*Paravar*、*Parathar*、*Parathavar* などと呼ばれるタミル系カーストである。本論文では複数形で「パラヴァス」と呼ぶ³⁰。彼らはパーンディヤ王に直属し、王に貢納することで、王の庇護の下、独占的に真珠採取を行っていた。キリスト教布教史では、彼らは下層のカーストと見なされているが、19世紀のS. C. チッティの研究によると、パラヴァスは、タミル系の漁撈民カーストの中で最上位に位置した。彼らの主要な仕事は潜水による漁業であり、真珠をはじめ、チャンク貝、珊瑚なども採取していた。彼らは船乗りでもあり、サメや海ガメ、カニなども捕獲する漁民でもあった。19世紀には織物の売買も手掛けていた³¹。しかし、16世紀のパラヴァスの職業を特色づけるのは、潜水による真珠採取である。

マナパッドからカーヤルの間のタミルナドゥ南海岸では、パラヴァス以外にもうひとつのタミル系真珠採りカースト、カレアスが、少数ながら存在した。今日、彼らは *Karaiya*、*Karaiyān*、*Karaiyar* として知られている。16世紀のポルトガル語文献では *Carreás* や *Caroás* と呼ばれている。本論文では複数形で「カレアス」と呼ぶ。カレアスは、パラヴァスの下位集団であると考えられる研究者もいるが、シュールハンマーは、パラヴァスとは異なる

²⁹ Donkin, *Beyond Price*, pp. 157-8.

³⁰ パラヴァスについては、次の文献を参照。Simon Casie Chitty, "Remarks on the Origin and History of the Parawas," *The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, vol. 4, no. 1 (1837), pp. 130-4; Edgar Thurston, *Castes and Tribes of Southern India* (1855-1935; Delhi: Cosmo, 1975), s. v. "Paravan," vol. 6, pp. 140-55; S. B. Kaufmann, "A Christian Caste in Hindu Society: Religious Leadership and Social Conflict among the Paravas of Southern Tamilnadu," *Modern Asian Studies*, vol. 15, no. 2 (1981), pp. 203-34; Gyanendra Yadav, *Encyclopaedia of Indian Castes, Races, and Tribes* (New Delhi: Anmol, 2009), s. v. "Paravas," vol. 4, pp. 1108-15.

³¹ Chitty, "Remarks on the Origin and History of the Parawas," pp. 130-4.

るカーストであると主張している³²。

パラヴァスやカレアスが集めた真珠を購入し、真珠商、宝石商として活躍していたのが、*Chetti*、*Chetty*、*Chettiar* などと呼ばれるタミル系ヒンドゥー教徒の商人だった。本論文では「チェッティ」または「チェッティ商人」と呼ぶ。彼らは数字に強いことで有名である。16世紀のチェッティはコロマンデル出身の人々として知られており、商業や交易に従事していた。真珠や宝石の取引は、スパイス同様に、彼らの得意分野であった。彼らの中には船を所有する者もいたが、行商人としての活動もよく知られていた³³。

タミルナドゥ南海岸では、13世紀末のパーンディヤ朝末期になると、真珠交易と馬交易を行うペルシア湾のキーシュ島出身のイスラーム商人が、カーヤルや他の地域に進出し、定住するようになった。キーシュ商人はペルシア湾の真珠の生産・流通を独占する真珠商でもあったので、この時期、タミルナドゥ南海岸の多くの真珠が彼らによって購入され、ペルシア湾方面に輸送された³⁴。

14世紀初めのパーンディヤ朝滅亡後、この地域は強力な国家権力が存在しない政治的空白地域となった。しかし、ペルシア湾のイスラーム勢力はカーヤルなどを拠点に居住し続けた。イスラーム教は次第にタミルナドゥ南海岸に浸透し、ヒンドゥー教からの改宗者も増え、アラブ系・ペルシア系イスラーム教徒と土地のヒンドゥー女性との結婚による子供も増加した。彼らは、タミル語を話すムスリムとなり、ひとつの民族集団を形成した。彼らは真珠採り潜水夫や海上商人、機織り人であることが多かった。タミル系ムスリムの真珠採り潜水夫は、ラッバイ (*Labbai*) として知られている³⁵。一方、タミル系のムスリム海

³² カレアスについては、次の文献を参照。Thurston, *Castes and Tribes of Southern India*, s. v. “*Karaiyān*,” vol. 3, p. 250; Sebastião Rodolfo Dalgado, *Glossário Luso-Asiático* (1919-21; New Delhi: Asian Educational Services, 1988), s. v. “*Carreás, caroás*,” vol. 1, p. 216; Schurhammer, *Francis Xavier*, vol. 2, pp. 297-8.

³³ 16世紀における真珠商、宝石商としてのチェッティについて詳しく述べているのは、バルボザの紀行文である。Barbosa, *Livro do que viu e ouviu no oriente*, pp. 110-1, 128-30; Barbosa, *The Book of Duarte Barbosa*, pp. 70-3, 123, 125-6 を参照。チェッティについては、次の文献も参照。Thurston, *Castes and Tribes of Southern India*, s. v. “*Chetti*,” vol. 2, pp. 91-7; Henry Yule and A. C. Burnell, *Hobson-Jobson: A Glossary of Colloquial Anglo-Indian Words and Phrases, and of Kindred Terms, Etymological, Historical, Geographical and Discursive* (1886; London: John Murray, 1903), s. v. “*Chetty*”; Yadav, *Encyclopaedia of Indian Castes, Races, and Tribes*, s. v. “*Chettiar*,” vol. 2, pp. 566-8. 近代のチェッティの役割については、水島司「グローバルエコノミーの形成とアジア」秋田茂編『アジアからみたグローバルヒストリー——「長期の18世紀」から「東アジアの経済的再興」へ』（ミネルヴァ書房、2013年）、63~81頁；水島司「19世紀アジアの農業開発の評価をめぐって」秋田茂編『「大分岐」を超えて』（ミネルヴァ書房、2018年）、137~178頁。

³⁴ キーシュ商人の進出については、家島彦一「キーシュの発展と商業の独占」『海が創る文明——インド洋海域世界の歴史』（朝日新聞社、1993年）、147~173頁を参照。

³⁵ ラッバイについては、次の文献を参照。Thurston, *Castes and Tribes of Southern India*, s. v. “*Labbai*,” vol. 4, pp. 198-205; Kunz and Stevenson, *The Book of the Pearl*, p. 113; *The Encyclopaedia of Islam*, new ed., s. v. “*Labbai*,” by M. Mines; Yadav, *Encyclopaedia*

上商人は、マラッカーヤル (*Marakkāyar*) と呼ばれている。マラッカーヤルは、今日においても、自分たちはアラブ海上商人の子孫であると主張しており、宝石業者や真珠業者、密輸入として知られている³⁶。16世紀初めのタミルナドゥ南海岸では、タミル系ムスリムの民族集団が優位に立ち、真珠採取や真珠取引を主導するようになっていた。

16世紀初めのポルトガル人バルボザは、次のように述べている。

カーヤルと呼ばれる市があり、コウラン王に属している。イスラーム教徒と異教徒が暮らしているが、彼らはすべて途方もない大商人である。カーヤルには良港がある。マラバル、コロマンデル、ベンガルから、毎年多くの船が寄港し、多くの地域から来たあらゆる種類の商品が取引される。この市のチェッティ商人は、多くの宝石と真珠 (*aljôfar*) を所有する途方もない大人物であるが、それは「真珠の漁場」 (*pescaria deste aljôfar*) がカーヤル王 (コウラン王のこと) に属しているからである。この市にはひとりのイスラーム教徒がいる。彼は大変豊かで、尊敬されており、真珠税 (*renda do aljôfar*) の徴収を長期にわたって委託されている。彼は大変豊かで、権力があるため、土地の人々すべてが彼を王同様に崇めている……真珠を採取する人は一週間、自分のために採取するが、金曜日は船の所有者のために採取する。シーズンの終わりには一週間すべて、このイスラーム教徒のために採取する。したがって、彼は大量の真珠 (*aljôfar*) を所持している³⁷。

このバルボザの記述は、16世紀初めのタミルナドゥ南海岸の真珠採取の状況についてさまざまな情報を伝えている。コウランとはマラバル海岸のクイロンのことである。カーヤルがコウラン王に属し、真珠税が徴収されていたとあるので、カーヤルも、その真珠の漁場もクイロン勢力の支配下に置かれていたことがわかる。クイロン勢力はヒンドゥー系のため、チェッティ商人も真珠を扱うことができた。その一方で、バルボザは、コウラン王から委託されたムスリム支配者が、真珠税の徴収にあたっていると述べており、マラバル海岸のヒンドゥー支配者及びタミルナドゥ南海岸を拠点とするイスラーム支配者が連携して、カーヤルの真珠採取からそれぞれ利益を得ていたことがわかる。さらに、バルボザは、真珠を採取する人は、一週間は彼ら自身のために真珠を採取するが、金曜日は船の

of Indian Castes, Races, and Tribes, s. v. "Labbay," vol. 3, pp. 886-7 今日、ラッバイという語は、南インドのタミル語を話すムスリムを総称する広義の語として使われる場合もあるが、一般にラッバイと呼ばれる人々は、農業には従事せず、主に都会に住む商人や貿易従事者であることが多い。19世紀から20世紀初め、タミル系ムスリムの真珠採り潜水夫は「ラッバイ」と呼ばれていた。

³⁶ マラッカーヤルについては、次を参照。Thurston, *Castes and Tribes of Southern India*, s. v. "*Marakkāyar*," vol. 5, pp. 1-5; *The Encyclopaedia of Islam*, new ed., s. v. "Labbai," by M. Mines. マラッカーヤルは広義のラッバイに含まれる。

³⁷ Barbosa, *Livro do que viu e ouviu no oriente*, pp. 128-9; Barbosa, *The Book of Duarte Barbosa*, vol. 2, pp. 124-6.

所有者のために採取すると述べている。金曜日が重要な意味をもっており、船主や真珠採り潜水夫がイスラーム教徒であることがわかる。潜水夫はラッバイである。バルボザの記述から、16世紀初め、カーヤルの真珠採取は実質的にはイスラーム勢力が牛耳っていたことも読み取れる。

一方、古くから真珠採取を担ってきたパラヴァスは、イスラーム勢力の隆盛で優良な真珠漁場から締め出され、不利な立場に置かれるようになっていた。それでもマナパッドからカーヤルに到る沿岸部には、真珠採取を生業とするパラヴァスの漁村が点在していた。一般のパラヴァスは魚網と筏舟を持っており、富裕なパラヴァスは大型の船を所有していた³⁸。

このように、タミルナドゥ南海岸の真珠の産地では、ポルトガル来航以前に、ヒンドゥー教徒の真珠採り潜水夫、イスラーム教徒の真珠採り潜水夫、真珠採取を牛耳るムスリム支配者が存在した。宗教的混在が進み、彼らの利害が対立するようになっていたが、潜水夫はすべてタミル系民族であったことに着目する必要がある。

(2) キラカライ

タミルナドゥ南海岸のもうひとつの名高い真珠採取地が、キラカライである。キラカライは、タミルナドゥ南海岸北部のラームナドゥ地方に属し、その東にはヴェダライやラーメシュワラム島があり、アダムスブリッジに続いていく。キラカライ付近の海域はカーヤルよりも海が浅く、真珠床に恵まれていた。

バルボザは、キラカライについては、コウラン王に属し、土地出身の多くのイスラーム教徒がいると述べているだけである。キラカライもマラバール海岸のクイロン勢力に属していたことがわかるが、真珠採取については語っていない³⁹。しかし、16世紀半ばのポルトガル人財務官ボテリョは、この地の真珠採取について語っており、キラカライでは一年に一回、真珠採取が行われる、(ポルトガル来航以前の)キラカライの真珠採取では、漁夫たちは土地の支配者に 74000~75000 ファナンの真珠採取税 (*a renda da pescaria do aljofre*) を支払っていたと述べている⁴⁰。この地の真珠採取を担っていたのは、ラッバイであった。ただ、キラカライやヴェダライなどのラームナドゥ地方にはカレアス・カーストのヒンドゥー教徒の真珠採り潜水夫も存在していた⁴¹。

³⁸ Schurhammer, *Francis Xavier*, vol. 2, p. 396.

³⁹ Barbosa, *Livro do que viu e ouviu no oriente*, pp. 127-8; Barbosa, *The Book of Duarte Barbosa*, vol.2, pp. 120-2.

⁴⁰ Botelho, "O tombo do estado da Índia," pp. 244-6. ファナンは、ポルトガル来航以前からインド世界で流通していた小口金貨。1 ファナンの価値は一定ではなく、10~30 レイス程度。タミル地方では1 ファナンは30 レイスだった。G. P. S. H. de Silva, *History of Coins and Currency in Sri Lanka* (Colombo: Central Bank of Sri Lanka, 2000), p. 78.

⁴¹ Schurhammer, *Francis Xavier*, vol. 2, p. 348.

(3) ラーメシュワラム島

タミルナドゥ南海岸の北東の先が、ヒンドゥー教の聖地として名高いラーメシュワラム島である。この島にはセトゥパティ (*Sethupathi*) と呼ばれるタミル系ヒンドゥー教徒の支配者がいて、カレアスを使役して真珠採取を行っていた⁴²。

(4) アダムスブリッジとマンナール島

ラーメシュワラム島の西方にはアダムスブリッジと呼ばれる小島や岩礁地帯が橋のように連なる一帯があり、その先がマンナール島である。アダムスブリッジとマンナール島付近の海域は豊饒な真珠床に恵まれていた。16世紀初め、これらの地域・海域を支配していたのが、セイロン島北部を拠点とするタミル系のジャフナ王国だった。当時はサンキリ 1世の治世であった⁴³。

ジャフナ王国はアールヤ・チャクラヴァルッティの王国とも呼ばれている。13世紀末にパーンディヤ王国の大臣だったアールヤ・チャクラヴァルッティがスリランカ北部に進出し、ジャフナで支配権を確立した。彼はインド・タミル系の人々の移住を促進したため、王国の住民の多くはタミル系ヒンドゥー教徒となった。この王国はスリランカ北部のマンナール湾やポーク海峡を彼らの領海とする海洋国家でもあった⁴⁴。

ジャフナ王国は、14世紀前半、イブン・バトゥータの訪問を受けたことで有名である。イブン・バトゥータは『大旅行記』の中で、アールヤ・チャクラヴァルッティの王国には真珠採取地があり、多くの真珠が採れ、家臣たちが真珠を選別していたと述べている。さらにバトゥータは、アールヤ・チャクラヴァルッティが高価な真珠を数個見せてくれ、彼がこれほどの真珠は見たことがないと応えると、満足してそれらの真珠をくれたという話を伝えている⁴⁵。ジャフナ王国は真珠採取を国家的事業とする王国だったことがわかる。

こうした真珠採取を担っていたのが、タミル系ヒンドゥー教徒であった。彼らは、16世紀のポルトガル語文献では、カレアスと呼ばれている⁴⁶。タミルナドゥ南海岸のカレアスと同じカーストである。シンハラ人については、当時の状況は定かではないが、20世紀初め

⁴² Nelson, *The Madura Country*, p. 154; Arunachalam, *The History of the Pearl Fishery*, pp. 113-4; Schurhammer, *Francis Xavier*, vol. 2, p. 348.

⁴³ Schurhammer, *Francis Xavier*, vol. 2, p. 372.

⁴⁴ ジャフナ王国については次を参照。C. Rasanayagam, *Ancient Jaffna: Being a Research into the History of Jaffna from Very Early Times to the Portug[u]ese Period* (1926; New Delhi: Asian Educational Services, 1984); Tikiri Abeyasinghe, *Jaffna under the Portuguese* (1986; Pannipitiya, Sri Lanka: Stamford Lake, 2005); C. R. de Silva and S. Pathmanathan, "The Kingdom of Jaffna up to 1620," in *History of Sri Lanka: From c 1500 to c 1800*, ed. K. M. de Silva (Peradeniya: University of Peradeniya, 1995), vol. 2, pp. 105-21; Chandra R. de Silva, ed., *Portuguese Encounters with Sri Lanka and the Maldives: Translated Texts from the Age of the Discoveries* (Farnham: Ashgate, 2009), pp. xviii, 109-51.

⁴⁵ イブン・バトゥータ (家島彦一訳) 『大旅行記 (6)』 (平凡社、2001年)、284頁。

⁴⁶ Schurhammer, *Francis Xavier*, vol. 2, p. 460.

には真珠採取の潜水作業にはほとんど参加しない民族として知られていた⁴⁷。

ジャフナ王国の歴史的意義は、13世紀末のこの王国の設立によって、タミルナドゥ南海岸からラーメシュワラム島、アダムスブリッジを経てマンナール島に到る環マンナール湾岸部をタミル系の人々が占めるようになったことである。すなわち、これらの沿岸部における真珠採取は、環マンナール湾岸に広く分布するタミル系の人々が独占したのである。宗教的にはヒンドゥー教徒のパラヴァスやカレアス、イスラーム教徒のラッバイが混在し、それらの集団の間で対立が起こっていたが、タミル系潜水夫の独占に変わりはない。タミル系の人々こそが、マンナール湾が生み出す真珠という水産資源を享受してきた民族であった。

(5) セイロン島西岸北部

セイロン島西岸北部は、19世紀のイギリス時代において、セイロン島の真珠採取地として有名になる地域である。しかし、16世紀には人はほとんど住んでおらず、まだ開発されていなかったと考えられる。18世紀初めのオランダ人、フランソワ・ファレンタインは、この沿岸部のアリッポにはオランダ軍が真珠床を監視するために駐屯しているが、不健康な土地で、多くの人々が死亡するため、4カ月ごとに人員を入れ替えていると述べている⁴⁸。マンナール湾の真珠採取は、時代が経つにつれて、近海から沖合、浅い海から深い海へと移っていった経緯がある。18世紀のファレンタインの時代には、沖合の豊饒な真珠床に向かうため、居住に適さない沿岸部も真珠採取の基地として防衛する必要があった。16世紀はマンナール島沿岸部の漁場が豊饒だったため、セイロン島西海岸は利用されておらず、荒蕪地のまま残されていたと推定できる。

(6) セイロン島西岸中腹

カラディヴ島 (*Karadive Island*)、カルピティヤ半島 (*Kalpitiya Peninsula*) やチローがあるセイロン島西海岸中腹は、シンハラ系のコーッテ王国の版図である。これらの島や半島の沖合には「セイロン島西岸真珠床」が広がっているが、浜辺から遠く、海が深いため、簡単には真珠が採取できない海域・地域であった。16世紀初頭の状況は不明であるが、カラティヴ島は、16世紀半ばにはキラカライと並ぶ真珠の大規模採取の基地のひとつであり、ポルトガル植民地政府が真珠採取税 (*a renda da pescaria do aljofre*) を集めていた⁴⁹。カルピティヤ半島、チローの沖合では、16世紀半ばにはコーッテ王が差配する真珠採取が、大規模採取の時期を外して、行われていた⁵⁰。

16世紀初期のポルトガル人ピレスは、セイロンは真珠 (*alJofar*) をコロマンデル海岸か

⁴⁷ Kunz and Stevenson, *The Book of the Pearl*, p. 109.

⁴⁸ François Valentijn, *François Valentijn's Description of Ceylon*, trans and ed. Sinnappah Arasaratnam (London: Hakluyt Society, 1978), p. 126.

⁴⁹ Botelho, "O tombo do estado da Índia," p. 244.

⁵⁰ Silva, ed., *Portuguese Encounters with Sri Lanka and the Maldives*, pp. 55-6.

ら持ち帰っていると伝えており、シンハラ系の王国はむしろ真珠の希求者として機能していた⁵¹。

1.3 真珠集散地

(1) カーヤル

ポルトガル来航以前、カーヤルは真珠採取地であったが、同時に集散地でもあった。パーンディヤ朝時代、カーヤルはこの王朝の外港で、その真珠はパーンディヤ朝の首都マドゥライに運ばれており、カーヤルとタミルナドゥ内陸部との結びつきは歴史的に深かった。

カーヤルは他のインド地域との係わりも深かった。バルボザが、カーヤルにはマラバール、コロマンデル、ベンガルの船が来ると述べていたように、カーヤルとマラバール海岸の諸港湾都市との交易は活発であった。また、カーヤルは、東インドのコロマンデル海岸やベンガル地方とも係わりが深かった。コロマンデル海岸の港は、旧チョーラ朝の版図があったインド内陸部の外港になっていたため、カーヤルの真珠はコロマンデル海岸の港に運ばれた後、陸路や水運でインド内陸部にもたらされていた。こうしたインド内陸部への真珠の輸送を主に陸路で行っていたのが、チェッティ商人で、海上輸送を行っていたのが、マラッカーヤルだった。

(2) クイロン、カリカット

マンナール湾の真珠のもうひとつの集散地が、クイロン、コーチン、カリカットなどのマラバール海岸の諸港湾都市である。マラバールの港市はカーヤルなどから真珠を調達していたので、これらの港市は、カーヤルの真珠の「上位集散地」として機能していた。

15世紀半ばの鄭和の遠征に随行した費信の『星槎勝覧』は「古里国」(カリカット)の条で「有珊瑚珍珠乳香木香金箔之類皆由別国」と述べ、真珠が他国から来るカリカットの特産品であったことを伝えている。『星槎勝覧』は「小唄喃国」(クイロン)の条においても、カリカットの条と同様に、この国には真珠があるが、他国より来ると述べている⁵²。16世紀初め、カリカットはマラバール海岸随一の港町として繁栄しており、真珠の商いも盛んだった⁵³。クイロンも、バルボザが述べていたように、その王がカーヤルとキラカライのムスリム首長を服属させ、真珠採取権を主張していたので、真珠集散地となっていた。

マラバール海岸にカーヤルから真珠を運んでいたのが、イスラーム海上商人だった。タミルナドゥ南海岸では、マラッカーヤルが活躍し、彼らがカーヤルからマラバール海岸な

⁵¹ Tomé Pires, *A suma oriental de Tomé Pires* (Coimbra: Imprensa de Coimbra, 1978), p. 358; トメ・ピレス (生田滋他訳) 『東方諸国記』 (岩波書店、1966年)、186頁。

⁵² 費信 (馮承鈞校注) 『星槎勝覧校注』 (北京、中華書局、1954年)、34頁、31~32頁。

⁵³ 16世紀初めの他のポルトガル文献も、カリカットでの真珠の商いについて伝えている。Rodrigo José de Lima Felner, ed. “Lembranças das cousas da Índia em 1525,” in *Subsídios para a história da Índia Portuguesa* (1868; Nendeln: Kraus Reprint, 1976), pp. 32-3.

どへの真珠の海上輸送を担っていたと推測できる。一方、マラバール海岸にはマーッピラ (*Māppila*) と呼ばれる海上商人や航海者が存在した。マーッピラは、インドにきたアラブ系・ペルシア系ムスリム海上商人とヒンドゥー教徒の女性との子孫であり、マラヤーラム語を話すイスラーム教徒のことである。彼らは、タミルナドゥ南海岸のマラッカーヤルに対応する⁵⁴。マーッピラは、インド洋海域世界で活動し、多額の財産を蓄えていた。彼らはアラビア海の海上交易活動で名高いが、マンナール湾の海上交易にも従事していた。マンナール湾は、水深が浅いため国際海上交通の主要ルートではなかったが、マーッピラは平底船を使うことで浅い海に対応し、マラバール海岸とコロマンデル海岸を結ぶ海上交易を牛耳っていた⁵⁵。ポルトガル勢力がマンナール湾湾岸世界へ進出するようになると、それにもっとも強く抵抗したのは彼らであった。ポルトガル人から「マラバーリー海賊」と呼ばれるようになる。

カリカットやコーチンなどの真珠集散地で、真珠の小売商として活動していたのが、チェッティであった。鄭和遠征時の別の記録である馬歡の『瀛涯勝覧』は「柯枝国」(コーチン)の条や「古里国」の条で、チェッティを「哲地」と呼び、彼らはその地で財産を持ち、もっぱら宝石、真珠、香薬の類を買い集めていることを伝えている。さらに『瀛涯勝覧』は、哲地は「中国宝石船」(中国の派遣船隊)や他の異国船の客が来るのを待っており、真珠はしばしば重さを決めて売却すると述べている⁵⁶。チェッティはコロマンデル出身であるが、15世紀には一部のチェッティがマラバール海岸に進出していたことがわかる。バルボザも、マラバール地方のチェッティのほとんどが宝石、真珠 (*aljófár*)、珊瑚、金、銀、地金などを扱う大商人で、自分たちに割り当てられた街路に沿って邸宅を構えていること、彼らは両替商や高利貸しでもあること、チェッティがコロマンデル出身のため、マラバールでは外国人扱いであることを伝えている⁵⁷。『瀛涯勝覧』とバルボザの記録から、チェッティが自分たちの店を構える小売りの真珠商や宝石商であったことが明らかになる。

供給量の少ない真珠の購入は簡単ではないが、真珠の小売商の存在は金銀などで真珠が購入できることを示している。マンナール湾の真珠は、金銀を持参して、カリカットなどに集まる国際商人によって購入され、アジア世界各地に運ばれていた。『星槎勝覧』は「柯枝国」の条や「古里国」の条で、中国人が金、銀、緞子、青花白磁器などを用いて交易し

⁵⁴ マーッピラについては、次の文献を参照。Thurston, *Castes and Tribes of Southern India*, s. v. “Māppila,” vol. 4, pp. 455-501; Yule and Burnell, *Hobson-Jobson*, s. v. “Moplah”; *The Encyclopaedia of Islam*, new ed., s. v. “Mappila,” by R. E. Miller; 辛島昇編『南アジア史』(山川出版社、2004年)、195~196頁、255頁。

⁵⁵ Pires, *A suma oriental de Tomé Pires*, pp. 183-4; ピレス(生田他訳)『東方諸国記』、168頁; Barbosa, *Livro do que viu e ouviu no oriente*, pp.110-1; Barbosa, *The Book of Duarte Barbosa*, vol. 2, pp. 70-3.

⁵⁶ 馬歡(馮承鈞校注)『瀛涯勝覧校注』(北京、中華書局、1955年)、41頁、47頁。

⁵⁷ Barbosa, *Livro do que viu e ouviu no oriente*, pp.110-1; Barbosa, *The Book of Duarte Barbosa*, vol. 2, pp. 70-3.

ていたことを伝えている⁵⁸。

カリカットやクイロンは、カーヤルから真珠を輸送するイスラーム海上商人と真珠の小売商であるヒンドゥー教徒の存在によって、マンナール湾の真珠の「上位集散地」になっていたのである。マラバールの真珠の流通は、マラヤーラム語、タミル語を話すドラヴィダ民族によって担われていた。

以上、ポルトガル来航前のマンナール湾岸世界の状況を概観した。

バルボザ、ボテリョなどは、マンナール湾で採れる真珠を *aljofar* と呼んでおり、*aljofar* はアコヤ系真珠であることが、本章でも確認できる。

マンナール湾には「トゥティコリン真珠床」と「セイロン島西岸真珠床」という二大真珠床があり、その沿岸部の各地では真珠採取が行われ、カーヤルを主要な集散地とする「マンナール湾真珠生産圏」が形成されていることが明らかになった。「マンナール湾真珠生産圏」は、マラバール海岸の港湾都市という「上位集散地」を持っていることも判明した。

本節では、マンナール湾岸の潜水夫や商人の民族性や宗教についても分析していったが、それによって、真珠の生産において潜水労働力となったのは、タミル系ヒンドゥー教徒のパラヴァスとカレアスの他に、ラッバイと呼ばれるタミル系ムスリム潜水夫であり、潜水夫たちには宗教的違いはあったが、いずれもタミル系の人々が担っていたことが明らかになった。一方、真珠の流通においても優勢だったのはタミル系の人々であったことが判明した。チェッティ商人は、タミルナドゥ南海岸やコロマンデル海岸ばかりでなく、マラバール海岸にも進出して、真珠取引を牛耳っていた。海上輸送では、タミル系ムスリムの海上商人マラッカーヤルや、マラヤーラム系ムスリムの海上商人マーッピラが活躍した。

マンナール湾の真珠は、これから見ていくように、インドを中心にアジア世界で広く希求されている国際商品であった。しかし、生産や流通分野では、民族性が強く出る傾向があった。真珠の潜水作業はタミル系の人々の独壇場であり、流通はタミル系・マラヤーラム系のドラヴィダ民族によって牛耳られていた。本節の考察によって、マンナール湾の真珠の生産、流通は、宗教的違いよりも民族性が重要な要素であったことが明らかになった。

第2節 ポルトガルの「マンナール湾真珠生産圏」への進出

本節では、16世紀のポルトガル政治勢力・宗教勢力の「マンナール湾真珠生産圏」への進出経緯を考察する。政治勢力が真珠を求めてタミルナドゥ南海岸へ進出した経緯は、真珠史の先行研究で考察され、研究成果も蓄積されている。ただ、こうした研究では、ポルトガル勢力の進出が「マンナール湾真珠生産圏」への進出だったという認識がなく、スリランカ側への進出の考察は不十分である。宗教勢力の進出については、イエズス会によるパラヴァス潜水夫への布教に言及することはあっても、イエズス会とパラヴァスの特異な関係やカレアスへの布教については議論していない。一方、ザビエル研究やインド・キリ

⁵⁸ 費信『星槎勝覧校注』、32~34頁。

スト教史研究では、「ペスカリア海岸」が「漁夫海岸」と訳されてきたことからわかるように、イエズス会の布教地が真珠の産地であったことは認識されず、マンナール島布教も看過されてきた。つまり、真珠史の先行研究でも、インド・キリスト教史の先行研究でも、その研究は部分的であり、環マンナール湾岸の歴史を広域で俯瞰するものではない。

よって本節では、ポルトガルの「マンナール湾真珠生産圏」への政治的・宗教的進出の経緯及び彼らと真珠採り潜水夫との関係性に着目しながら、この「真珠生産圏」がポルトガルにとってどのような意味があったのかを明らかにする。具体的には、三つの側面で検討する。まず、ザビエル到来以前のタミルナドゥ南海岸におけるポルトガル人の政治的・宗教的進出を概観する。次に、ザビエル布教を嚆矢とするイエズス会のタミルナドゥ南海岸への進出傾向を分析する。さらに、1560年のポルトガルによるマンナール島領有後の彼らの行動について考察する。真珠史の先行研究では、ザビエル書簡やヴァリニャーノの東インド報告書は参照されておらず、シュールハンマーの研究書も十分活用されていない。本節は、こうした文献を使うことで、従来の研究が見落とししてきたポルトガルの進出経緯とその意図を明らかにする。

2.1 タミルナドゥ南海岸へのポルトガル政治勢力の進出

初期ポルトガル人による「マンナール湾真珠生産圏」への関心は、当初から真珠の存在と結びついていた。第4章で見たように、バスコ・ダ・ガマの航海の目的のひとつは真珠の獲得であった。1498年、ガマはカリカットに上陸したが、そのカリカットは「マンナール湾真珠生産圏」の真珠集散地であった。ガマたちがカリカットでチェッティなどの真珠商から真珠を購入したのか、あるいはできなかったのかは、残された文献からは定かでない。しかし、ガマの一行はこの時、カーヤルにはムスリムの王がいて、たくさんの真珠 (*muitas pérolas*) があるという情報はつかんでいた⁵⁹。

1520年以降、ポルトガル勢力は、カーヤル付近のタミルナドゥ南海岸に進出するようになった。1520年、ジョアン・フローレスというポルトガル人がこの地の長官と商館長に任命され、タミルナドゥ南海岸は「ペスカリア海岸」(*Costa da pescaria*) または「ペスカリア」と呼ばれるようになった。ポルトガル人の認識ではこの地はポルトガルの行政区域となったが、その実態は、ペスカリア長官がコロマンデル海岸の拠点からペスカリア海岸を担当するものであった⁶⁰。

1520年代半ばになると、ペスカリア長官が、十数名の兵士とともにカーヤルに滞在するようになった。ポルトガル人は、キラカライやヴェダライにも進出し、ポルトガル人隊長とその兵士が駐屯した。ヴェダライには小さな要塞も建設された。ヴェダライはラーメシ

⁵⁹ Álvaro Velho, *Roteiro da primeira viagem de Vasco da Gama (1497-1499)*, ed. A. Fontoura da Costa (Lisbon: Agência-Geral do Ultramar, 1969), p. 87.

⁶⁰ ポルトガル政治勢力のタミルナドゥ南海岸への進出は、次の文献を参照。Arunachalam, *The History of the Pearl Fishery*, pp. 87-117; Silva, "The Portuguese and Pearl Fishing," pp. 14-28; Stephen, *Portuguese in the Tamil Coast*, pp. 60-91.

ユワラム島に近いこと、ポルトガル勢力が、この聖地へ向かうヒンドゥー教徒の巡礼者のボートから一定額を徴収することができた。この時期のポルトガル人は、ペスカリア海岸では真珠採取が実施されること、巡礼を含む人の往来や交易なども活発であることを知っていて、そうした現地の経済活動からさまざまな貢納金を引き出せると考えていた⁶¹。

ポルトガル人がカーヤルやキラカライに駐屯し始めると、当初、ムスリムたちは協力的だった。イスラーム支配者たちはお互いに反目しており、ポルトガル人を味方につけて、勢力を拡大したいという意図があった。しかし、ポルトガル人がイスラーム支配者たちに貢納金を要求し、真珠採取時には、コーチンから派遣されたポルトガル艦隊が現れて、真珠採取船や潜水夫などから金銭を徴収し始めると、彼らはポルトガル勢力の排斥を試みるようになった⁶²。とりわけムスリム海上商人のマラッカーヤルの反発は激しかった。彼らはカリカットの支配者のザモリンと連携して襲撃を開始した。1528年にはフローレスをはじめとするカーヤル駐在のポルトガル人 20 人が、カリカットの援軍によって虐殺されるという事件が発生し、両者の抗争は激化した。カリカットは、その後も、タミルナドゥ南海岸のイスラーム勢力に加勢し続けた⁶³。

カリカットのこうした動きに、ポルトガル勢力排斥のためにヒンドゥー教徒の支配者とムスリム海上商人が連携していた構図を見るが、このことは、彼らの真珠ビジネスの利害が一致していたことを示している。真珠集散地カリカットとマラッカーヤルによる海上交易は真珠の流通で結ばれていた。

1530 年代には、真珠採取カースト、パラヴァスの人々が集団でキリスト教に改宗した。当時、パラヴァスは、イスラーム系潜水夫ラッバイたちが優勢になって、不利な立場に置かれていた。1535 年、ムスリムによるパラヴァス女性への暴行事件が発生し、イスラーム勢力への反発が高まった。カリカットのチェッティで、ポルトガルで受洗したジョアン・ダ・クルスが、パラヴァスにポルトガルの保護下に入ることを提案した。まずパラヴァスの代表者たちがコーチンに行き、ミゲル・ヴァスというフランシスコ会司教総代理から洗礼を受けた。1536 年から 1537 年にかけて教区司祭たちがタミルナドゥ南海岸に派遣され、カーヤルやその他の地点においてパラヴァスの集団改宗が進められた。17 世紀の一次史料や先行研究は、これによって、パラヴァスの人々 2 万人以上がキリスト教に改宗したと考えている⁶⁴。

この集団改宗が、パラヴァスにとって意味があったことは、ザビエルの書簡が語る次のエピソードから見ることができる。1538 年のヴェダライの戦いは、後にインド総督になる

⁶¹ Stephen, *Portuguese in the Tamil Coast*, pp. 62-72.

⁶² Arunachalam, *The History of the Pearl Fishery*, pp. 90-1; Silva, “The Portuguese and Pearl Fishing,” pp. 17-22; Stephen, *Portuguese in the Tamil Coast*, pp. 62-72.

⁶³ Stephen, *Portuguese in the Tamil Coast*, pp. 64-5.

⁶⁴ ロドリゲス (池上他訳) 『日本教会史 (下)』、269 頁; Arunachalam, *The History of the Pearl Fishery*, p. 92; Silva, “The Portuguese and Pearl Fishing,” p. 20; 岸野 『ザビエルと日本』、39~42 頁。

アフォンソ・マルティン・デ・ソウザ率いるポルトガル艦隊が、イスラーム勢力に圧勝するという戦闘であったが、この時、ソウザはイスラーム教徒が所有する漁船をことごとく奪って、元の所有者だったキリスト教信者に返却した。漁船を所有していなかった貧しい人にはイスラーム教徒の船を与えたという⁶⁵。このエピソードは真珠史の先行研究は参照していないが、このザビエル書簡の検討によって、ポルトガル人司令官が、パラヴァスに真珠の生産手段である船を与えるために尽力していたことがわかる。パラヴァスは改宗した甲斐があったが、ポルトガル植民地政府にとっても、彼らに船を与えることは、利益にならなっていたことを示している。

タミルナドゥ南海岸へのポルトガルの進出とパラヴァスの改宗は、この地の都市形成と宗教的住み分けにも影響を及ぼした。ポルトガル勢力とパラヴァスとの連携によって、この地のイスラーム勢力とキリスト教勢力との抗争は激化した。ポルトガルのペスカリア長官たちは、安全な場所を求め、タンブラパルニ川北岸に位置するカーヤルから、その南岸に拠点を移し、さらにカーヤルの北方のトゥティコリンに移した。以後、トゥティコリンに行政府が置かれ、ポルトガル人官吏や駐屯兵、ポルトガル商人なども暮らすようになった。当初のカーヤルはプラヤカーヤル (*Playakaya*) と呼ばれ、タンブラパルニ川南岸の新カーヤルはプンナイカーヤル (*Punnaikaya*) と呼ばれるようになった⁶⁶。一方、カーヤル在住のムスリム勢力も、カーヤルを離れ、プンナイカーヤルよりもさらに南方の地に移住し、その地はカーヤルパッティナム (*Kayalpattinam*) と呼ばれるようになった。カーヤルパッティナムは、タミルナドゥ南海岸におけるムスリム勢力の拠点となり、多くのラッバイやマラッカーヤルが暮らすようになった⁶⁷。ポルトガルのタミルナドゥ南海岸進出で、プラヤカーヤル、プンナイカーヤル、カーヤルパッティナムというカーヤルと係わる三つの地名が誕生し、従来のヒンドゥー教徒とムスリムの住み分けに、キリスト教徒が加わったのである⁶⁸。これらの地名は、カーヤルという真珠採取地がそれぞれの宗教勢力にとって重要であったことを示している。

パラヴァスは、キリスト教徒になったことで、税が課せられるようになった。ポルトガル人財務官ボテリョの報告書によると、キラカライの真珠漁場では、もともと漁夫たちが土地の支配者に真珠採取時の税を払っていたが、ポルトガルが進出すると、数隻のポルトガル船が漁夫を保護し、ポルトガル人長官が彼らから 7 万 5000 ファナンを受けとり、それ

⁶⁵ “Epistola 19 (October 28, 1542),” in *Epistolae Xavierii*, vol. 1, p. 150; 河野訳『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』、106 頁。ザビエル書簡が伝えるこのエピソードは、インド総督府エリートたちの真珠採取への関心を知る上で重要である。

⁶⁶ Stephen, *Portuguese in the Tamil Coast*, pp. 65, 72.

⁶⁷ Stephen, p. 65.

⁶⁸ マルコ・ポーロの翻訳者たちは、ポーロが語るカーヤルを *Kayalpattinam* に比定してきた（最新の例では高田英樹訳『世界の記——「東方見聞録」対校訳』（名古屋大学出版会、2013 年）、490 頁（注 1）が挙げられる）。しかし、*Kayalpattinam* は 16 世紀に成立した町であり、ポーロの時代には存在しない。正しくはカーヤルの後身の *Playakaya* である。タミルナドゥ南海岸の歴史展開の認識は、一次史料の地名比定の観点からも重要である。

をコーチンの商館に送るようになった⁶⁹。ボテリョの情報だけでは判断が難しいが、キラカライに出向き、真珠漁を行ったのは、カレアスではなく、パラヴァスだったと考えられる。当時、ポルトガル勢力によるカレアスへの布教はそれほど進んでいなかったからである⁷⁰。真珠採取時の税は、その後、6万ファナンになり、1554年頃には3万2000ファナンに引き下げられた。ボテリョは、インド副王のアフォンソ・デ・ノローニャがキリスト教徒の漁夫に「好意を示すため」(*por favorecer*)、徴税額を3万2000ファナンに引き下げたと述べている⁷¹。

このノローニャの事例及び先述のヴェダライの戦いの司令官のソウザがパラヴァスに漁船を与えた事例は、先行研究は参照していないが、これらによって、ポルトガル領インドのエリートたちが、パラヴァスの福利厚生に気遣い、彼らの歓心を得ようとしていたことが明らかになった。

ポルトガル国王も、パラヴァスの置かれている状況の改善に関心を示していた。彼は、ゴアの総督にパラヴァスを助けるための必要な出費は国庫から支出することを認め、パラヴァスたちに手紙も送っている。パラヴァスには真珠採取時以外にも定額税が課されていたが、そうした税も、真珠採取が実施された時にのみ支払われるようになった⁷²。パラヴァスは、キリスト教徒に改宗すると、ポルトガル姓の名字を使うことが許され、ドンという称号の使用も認められていた。これもパラヴァス厚遇の証であった⁷³。

このように、ポルトガル国王やインド総督たちが、パラヴァスの厚生に気を遣ったのは、パラヴァスが代替のきかない真珠生産の労働者であり、彼らを正しく扱うことで、真珠や金銭が入手できることを知っていたからだと考えられる。潜水は、幼少期から訓練された人しかできない高度な技術だった。筆者は、ポルトガル国王やインド総督たちは、ペスカリア長官たちがパラヴァスを締め上げ、真珠や金銭を搾取しがちなことを理解しており、長官たちの横暴を抑え、パラヴァスが採取する真珠を自分たちのものにするために、パラヴァスの真珠採取の環境を整え、彼らを厚遇する必要があると考えた。実際、ポルトガル国王は、長官たちに委ねていた真珠採取時におけるパラヴァスへの徴税を、1546年以降、

⁶⁹ Botelho, “O tombo do estado da Índia,” pp. 244. ボテリョは「カーヤルの漁場」について述べていない。「キラカライの漁場」の項目の前ページは空白になっており、そのページに書かれていた可能性もある。V. M. ゴディーニョはボテリョが述べる「キラカライの漁場の収入」を、ペスカリア海岸全体の真珠採取の収入と見なしているが、カーヤル付近の海域で行われた真珠採取やその収入も考察すべきである。Vitorino Magalhães Godinho, *Les finances de L'état Portugais des Indes Orientales (1517-1635)* (Paris: Fundação Calouste Gulbenkian, Centro Cultural Português, 1982), pp. 110-1 を参照。

⁷⁰ 後述するように、キラカライなどのカレアスへの改宗は16世紀後半に進められた。

⁷¹ Botelho, “O tombo do estado da Índia,” p. 245; Schurhammer, *Francis Xavier*, vol. 2, p. 319; Stephen, *Portuguese in the Tamil Coast*, p. 72.

⁷² Silva, “The Portuguese and Pearl Fishing,” p. 21; Stephen, *Portuguese in the Tamil Coast*, pp. 72-3.

⁷³ Chitty, “Remarks on the Origin and History of the Parawas,” p. 132.

国王の艦隊が行うように変更した⁷⁴。真珠獲得という観点では、ポルトガル国王及びインド総督たちとペスカリア長官たちの利害は対立していたのである。

2.2 タミルナドゥ南海岸における宗教勢力の進出

(1) ザビエルのタミルナドゥ南海岸での布教

1530年代のタミルナドゥ南海岸におけるパラヴァスの集団改宗は、パラヴァスにとってはポルトガルの庇護を得るという政治的な意図があり、ポルトガル側から見れば、真珠採りカーストに真珠採取を行わせ、真珠や金銭を徴収するという経済的目的があった。それゆえ、パラヴァスにはキリスト教徒としての教理教育が施されておらず、名目だけの改宗だった。ポルトガル人長官たちによる搾取や抑圧もあり、ヒンドゥー教に戻る人々も少なくなかった。こうした状況を改善するために、ポルトガル国王から派遣されたのが、フランシスコ・ザビエルであった。

ザビエルのタミルナドゥ南海岸での主要な布教は、1542年から1544年にかけて二回に分けて実施された。彼の布教活動は、後世の人々によって称揚され、ペスカリア海岸での布教として喧伝されてきた。ザビエル研究者の岸野久は、「漁夫海岸」はコモリン岬からラーメシュワラムまでの東海岸であると説明し、ザビエルによって「漁夫海岸布教」が行われたことを語っている⁷⁵。こうした表現によって、ザビエルの布教は、タミルナドゥ南海岸の端から端まで面的広がりをもって行われたというイメージが定着している。しかし、これから明らかになるように、彼の布教は必ずしもそうしたものではなかった。

一方、真珠史の先行研究では、ザビエルがパラヴァスに布教したことは言及されるが、それが具体的にどういうもので、どのような意味があったのかは深く分析していない。ここでは真珠史の先行研究が使用してこなかったザビエルの書簡などを使いながら、彼の布教の実態を見ておきたい。

まずザビエルの布教には、ポルトガル国王の全面的な支援があったことを理解しておく必要がある。ザビエルは一介の宣教師というよりも、ポルトガル国王の要請を受けたローマ教皇によって広範な権限を与えられ、インドに派遣された宣教師だった。岸野は、ザビエルはローマ教皇よりもポルトガル国王との結びつきが強かったことを指摘している⁷⁶。国王がザビエルに与えたローマ教皇の1540年7月27日付けの小勅書では、現地人改宗者の信仰の強化が優先された課題になっている⁷⁷。これによって、ザビエルの主要な目的は、キリスト教徒になったはずのパラヴァスという真珠採取カーストの人々を再び改宗し、彼らに強固な信仰心を持たせることであったことが明らかになる。さらにパラヴァスの再編はザビエルの課題であると同時に、ポルトガル国王の強い意向であったこともわかる。ポル

⁷⁴ “Epistola 75 (January 20, 1549),” in *Epistolae Xavierii*, vol. 2, p.50, note 2.

⁷⁵ 岸野『ザビエルと日本』、39~44頁。

⁷⁶ 岸野『ザビエルと東アジア』、35頁。

⁷⁷ 岸野『ザビエルと東アジア』、23~35頁。

トガル国王がパラヴァスの厚生に関心をもっていたことは、すでに見たとおりである。

ザビエルは 1542 年 10 月から 1543 年 9 月までの期間、1544 年 2 月から 1544 年 11 月頃まで二回にわたって主にタミルナドゥ南海岸に滞在し、布教活動を行った。布教時期の現存する 1542 年時の書簡としては、1542 年 10 月 28 日付トゥティコリン発の書簡のスペイン語写本が 1 通存在するだけである⁷⁸。それによると、ザビエルはタミルナドゥ南海岸の途中で下船して布教を開始し、トゥティコリンまで歩きながら、キリスト教徒のいる土地 (*lugares*) を回っていった。異教徒の地で洗礼を施すこともあった。ザビエルは、キリスト教徒は、すべて海に張りついて、「海の富」 (*las riquezas del mar*) だけで暮らす漁夫であり、インド総督となったソウザの尽力で、彼らが船を所有するようになったことを記している。上陸地は書簡では定かでないが、マナパッドと考えられている⁷⁹。また、*lugares* という語の使用により、キリスト教徒のいる土地は、小さな漁村だったことが推定できる。

ザビエルの 1543 年時の書簡は知られていない。1544 年時の書簡は、ローマのイエズス会員に宛てた 1 月 15 日付コーチン発の書簡とザビエルの助祭だったフランシスコ・マンシラスに宛てた 25 通の書簡が知られている⁸⁰。1 月 15 日付コーチン発の書簡はスペイン語写本として残っており、トゥティコリンを中心とした布教活動報告となっている。コモリン岬とトゥティコリン以外には具体的な地名は述べられていない。ただ、ザビエルは「私が回っているこの海岸には、30 のキリスト教徒の地 (*lugares*) がある」と述べている⁸¹。

マンシラス宛ての 25 通の書簡は 1544 年 2 月 23 日から 12 月 18 日までで、ほぼ 10 カ月にわたって出されたものである。その内 14 通が、ザビエルがマナパッドからプンナイカーヤルに出した書簡となっている。マナパッド以外には、トゥティコリン、プンナイカーヤル、アランタライからそれぞれ 2 通発信されており、その他 4 通がマナパッドとプンナイカーヤルの間の土地からの発信で、最後の 1 通がコーチンからの発信である。マンシラスへの書簡の宛先としては、23 通がプンナイカーヤル宛てで、それ以外にはマナパッドとトゥティコリンに向けて 1 通ずつが発信されている。

1545 年以降、ザビエルがタミルナドゥ南海岸で書いたものとしては、1548 年 2 月付けの訓話がある⁸²。これもマナパッドで記されている。

書簡の発信地は、彼の居場所を明確に示す。マンシラス宛ての書簡の発信地を見る限り、1544 年 2 月以降のタミルナドゥ南海岸におけるザビエルの第二回目の布教の活動拠点は、マナパッドを中心に、プンナイカーヤルやトゥティコリンなど、マナパッドからトゥティ

⁷⁸ “Epistola 19 (October 28, 1542),” in *Epistolae Xavierii*, vol. 1, pp. 146-51; 河野訳『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』、104~108 頁。

⁷⁹ Schurhammer, *Francis Xavier*, vol. 2, pp. 293-4.

⁸⁰ “Epistolae 20-45,” in *Epistolae Xavierii*, vol. 1, pp. 152-248; 河野訳、109~177 頁。これらの書簡では、マナパッド (*Manappad*) を *Manapar*、プンナイカーヤルは *Punicale* と表記されている。マンシラスの書簡は 1746 年のポルトガル語写本として残っている。

⁸¹ “Epistola 20 (January 15, 1544),” in *Epistolae Xavierii*, vol. 1, p. 168; 河野訳、115 頁。

⁸² “Epistola 64 (February, 1548),” in *Epistolae Xavierii*, vol. 1, pp. 426-35; 河野訳、304~311 頁。

コリンの間の集落になっていることが明らかになる。ザビエルは、1544年1月15日の書簡で、彼が布教して回っている村は30村と述べていたが、マナパッドからトゥティコリンまでの間に点在する30程度の漁村を回るのがザビエルの第二回目の布教活動であったことがうかがえる。シュールハンマーは、ザビエルが実際に布教したパラヴァスの村は、22村だったと主張している⁸³。一方、マンシラスは、25通の書簡の内、23通をプンナイカーヤルで受け取っており、ザビエル時の布教ではこの地も重要であったことがわかる。つまり、ザビエルの書簡の発信地などから勘案すると、ザビエル以降の聖職者たちが「漁夫海岸」と呼ぶコモリン岬からラーメシュワラムまでの沿岸部を、ザビエル自身が端から端まで面的広がりをもって布教に邁進した訳ではなかったことが示唆される⁸⁴。

真珠史の視点で見た場合、マナパッドからプンナイカーヤルを経て、トゥティコリンに到る沿岸部は真珠の産地である。その近海にはマンナール湾の二大アコヤ系真珠床のひとつ、「トゥティコリン真珠床」があり、パーンディヤ朝の時代から真珠が採取されてきた。プンナイカーヤルはタンブラパルニ河口にあり、古来名高い真珠の産地カーヤルの分身ともいえる真珠採取地である。イエズス会東インド巡察使のヴァリニャーノは、先述したように、「ペスカリア」では真珠 (*aljófár*) と大粒真珠 (*perlas*) が採れると語っており、イエズス会はこの地では真珠が採れることを知っていた。後にザビエルの後を継いでペスカリア海岸を管轄するようになったエンリケ・エンリケスは、マナパッド以南のパラヴァスのほとんどは漁業で生計を立てているが、マナパッド以北のパラヴァスは、ほとんどすべてが真珠採取が生業であると述べている⁸⁵。

従来の歴史研究は、どこが真珠の採取地かという海域の特性についての視点を持ってこなかった。しかし、そうした視点を取り入れ、現存するザビエル書簡から勘案すると、彼のタミルナドゥ南海岸での布教——少なくとも2回目の布教——は、主にアコヤ系真珠の伝統的採取地でなされていたことが明らかになる。したがって、ザビエルの布教とは、真珠採取地で真珠採りを行うキリスト教徒のパラヴァスに再びキリスト教への強い信仰を抱かせることであったことが判明する。

ザビエルがタミルナドゥ南海岸で新たに布教したカレアスも真珠採りを行っていた。マナパッドとプンナイカーヤルの間には、コンブトゥレー (*Kombuturē*) という村があり、そこに暮らすカレアスは真珠採りや貝を燃やすことを専業とするカーストとして知られていた。ザビエルは彼らの布教にも成功し、新たなキリスト教徒を誕生させた⁸⁶。タミルナドゥ南海岸には他にもさまざまなカースト集団がいたが、ザビエルが対象としたのは、主にパラヴァスとカレアスであった。ザビエルの宗教活動とは、インドの名高い真珠採取の海岸で真珠採りカーストに布教するものだったのである。

⁸³ Schurhammer, *Francis Xavier*, vol. 2, p. 321.

⁸⁴ ザビエルは、1544年12月にマラバル海岸のマクアと呼ばれる漁夫1万人に洗礼を授けたことが知られているが、本論文では議論しない。

⁸⁵ Schurhammer, *Francis Xavier*, vol. 2, p. 313, note 235.

⁸⁶ Schurhammer, vol. 2, pp. 297-8, 347.

(2) ザビエルと真珠採り潜水夫

ザビエルは、真珠採りカーストと具体的にどのように係わったのだろうか。

ザビエルが残した書簡からは、彼自身が真珠採取の現場に直接行ったかどうかは明らかではない⁸⁷。ただ、彼の書簡を分析すると、ザビエルが真珠採取に関心を持っていたことがわかる。

ザビエルがプンナイカーヤルのマンシラスに宛てた 1544 年 11 月 10 日付の書簡は、トゥティコリンの島々での「真珠貝採取」を希望するトゥティコリンの信者には、よい時期を外さないで行かせ、ザビエルの命令に従わない者は真珠貝採取から排除すべきと命じており、「不従順な人たち、言い換えれば、背教者たちが『我々の海の収穫物』(*fruito de nosso mar*) を享受することは、私の意に反します」とも述べている⁸⁸。この書簡の内容から、ザビエルが真珠貝採取——すなわち真珠採取——の実施と潜水夫管理に関心をもっていたことがわかる。また、ザビエルはマンナール湾を「我々の海」と呼んでおり、彼がマンナール湾を、海から利益を引き出せるポルトガルの海域と見なしていたことが明らかになる。さらに、その海域での真珠採取では、彼に従う従順なキリスト教徒だけに独占させようとする排他的な姿勢を取っていたことも判明する。

ザビエルとパラヴァスの関係性を特徴づけるのが、ザビエルによるパラヴァスへの慈愛に満ちた信頼関係の醸成である。1544 年 3 月 27 日付のマンシラス宛てのザビエル書簡は、真珠採取 (*pescaria*) から戻ってきた男たちのなかに病人がいれば、彼を訪れ、子どもに福音書を読ませ、「多大な愛情で」(*com muito amor*) 接するように述べ、さらに「彼らから愛されるように努力なさい」(*fazei obra em que delles sejais amado*) と命じている⁸⁹。“*amor*、*amar*” は人や神への愛情を示す際に使われるポルトガル語の名詞、動詞であり、ザビエルはそうした語彙を使って、真珠採り潜水夫に慈愛を注ぎ、彼らの愛情を得よう命じている。

1548 年 2 月のペスカリア海岸とトラバンコール海岸のイエズス会聖職者へ向けた訓話では、ザビエルは「あなたがたはこの地の人びとから愛されるように精一杯努力なさい。なぜなら彼らから愛されていれば、嫌悪されているよりもずっと大きな成果を上げられるでしょう」と述べている。訓話の最後にも「あなたがたに強く頼みたいことは、あなたがたが布教する所、滞在する所で愛されるようにしてもらいたいことです……なぜなら、この方法 (*esta maneira*) で、先述したように、大きな成果を上げられるからです」と繰り返している⁹⁰。ザビエルは、ここでも *amar* という言葉を使って、土地の人から愛情を獲得

⁸⁷ シュールハンマーは、ザビエルは真珠採取の現場に行ったと考えている。Schurhammer, vol. 2, p. 318, note 283.

⁸⁸ “Epistola 44 (November 10, 1544),” in *Epistolae Xavierii*, pp. 240-3; 河野訳『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』、171~172 頁。「真珠貝採取」の原文は *pescar chanquo*。 *chanquo* (チャング貝) はホラ貝であるが、文脈から二枚貝の真珠貝だった可能性もある。

⁸⁹ “Epistola 24 (March 27, 1544),” in *Epistolae Xavierii*, p. 196; 河野訳、131 頁。

⁹⁰ “Epistola 64 (February 1548),” in *Epistolae Xavierii*, pp. 433-5; 河野訳、309~310 頁。

するよう命じている。彼はそれを *maneira* と呼んでいるので、温情主義による信頼関係構築は、明らかにザビエルの布教の戦略であったことがわかる。

19世紀の研究は、ザビエルとパラヴァスの信頼関係の構築を“*great kindness*”というキーワードで表した⁹¹。しかし、S. ネイルや岸野など、今日のインド・キリスト教史研究やザビエル研究では両者の関係性は議論の対象にはなっていない。ザビエルの布教の成功は、精力的な活動や現地の言葉を使った教理教育の実施、子どもへの布教などによるとされてきたが、真珠採り潜水夫への意図的な温情主義という戦略もあったのである。

真珠採りカーストに対する温情主義は、同時代の新世界の真珠採取と比較すると、時代の要請だったことがわかる。1540年代初めは、「南米カリブ海真珠生産圏」において、真珠採取で酷使された多くの先住民が命を落とした時期であった。ドミニコ会聖職者のラス・カサスが、その事実をスペイン宮廷で声高に批判していた時期でもある。ラス・カサス以外にもスペイン領アメリカの先住民の扱いについて改善を求める声は強かった⁹²。真珠採取における先住民の強制的な投入を禁止した「インディアス新法」は、1542年11月に発布されているので、ザビエルがインドに向けて出航した後になる。しかし、ポルトガル王室は、スペイン王室におけるこうした動きを知っていたはずである。ポルトガル国王が恐れたのは、インドの現地勢力よりもむしろパラヴァスを搾取しようとする現地のポルトガル人たちの欲にまみれた行動であった。そのため、彼らの行動を監視し、パラヴァスの安寧を保障し、国王自身が真珠を得る道筋を作る必要があった。先述したように、ポルトガル国王とペスカリア長官たちの利害は一致していなかった。ザビエルは国王の意向を理解し、国王から強大な権限を与えられてインドへ派遣され、パラヴァスの病人のケアや温情主義という戦略を使うことで、パラヴァスの絶対的帰依を勝ち取り、彼らを強固なキリスト教徒に再編し、さらに現地ポルトガル人の抑圧からも守ったのである。ポルトガルによるインド洋海域世界の真珠採り潜水夫の扱いとスペインによるカリブ海の真珠採り潜水夫の扱いは対照的であった。真珠史から見た場合、ザビエルの温情主義による布教は、イエズス会とポルトガル国王に忠誠を誓う真珠採りの生産者集団を、インドに作ることに大いに寄与したことになる。

(3) ザビエル後のペスカリア海岸

ザビエルが去った後のペスカリア海岸におけるキリスト教徒の管理と保護は、イエズス会聖職者エンリケ・エンリケスに委ねられた。彼はタミル語を習得した最初のヨーロッパ人であり、キリスト教の教義のタミル語翻訳やタミル語辞書の編纂などにも従事した。彼は1600年に死亡するまで、50年以上にわたって、上長としてペスカリア海岸で活躍し、

1746年のポルトガル語写本による。

⁹¹ Chitty, “Remarks on the Origin and History of the Parawas,” p. 132; Thurston, *Castes and Tribes of Southern India*, s. v. “Paravan,” vol. 6, pp. 145-6.

⁹² 染田秀藤『ラス・カサス伝——新世界征服の審問者』(岩波書店、1990年)、177~182頁、194~198頁。

パラヴァスのキリスト教への信奉を支えることになった⁹³。

ザビエルはラームナドゥ地方の布教にも関心を持っており、弟子を派遣したり、情報を集めていたが、この地方への布教を本格的に進めたのは、エンリケスと彼以前の上長だったアントニオ・クリミナリだった。彼らの時代に、キラカライ、ヴェダライ、ラーメシュワラムなどで布教が実施された。対象になったのは、この地方の真珠採りカースト、カレアスであった⁹⁴。ただ、ラームナドゥ地方は地理的にマドゥライに近いので、真珠採取時にはマドゥライのナーヤカの騎馬兵によるカレアス拉致が相次いだ。カレアスはマドゥライのナーヤカやイスラーム教徒のために真珠採取を強要され、そのままヒンドゥー教へ戻る者も少なくなかった。こうしたことで、キリスト教への布教活動は、プンナイカーヤル付近ほどの成果を出せなかった⁹⁵。ただ、そのプンナイカーヤルも、マドゥライのナーヤカ勢力が伸長し、パラヴァスの拉致を繰り返したため、イエズス会は1570年までに、拠点をトゥティコリンに移している⁹⁶。

ヴァリニャーノは1570年代のペスカリア布教区の状況について、コモリン岬からマンナール島に到るペスカリア海岸一帯は、「ナイケ」と呼ばれる非常に権勢のある異教徒の領主に属しているが、沿岸部には大小30ほどの村落があり、1~2のイスラーム教徒の村落を除き、すべてキリスト教徒の漁夫が暮らす村落となっていることを報告している。さらに彼は、我々はこの海岸の各地におよそ30の教会を所有しており、4万~5万人のキリスト教徒がいるだろうと述べている⁹⁷。ヴァリニャーノの報告は、ナーヤカ政権の登場やイスラーム教徒の村の存在など、布教活動にとって不都合な部分にも言及しており、イエズス会の業績を誇示するのではなく、客観的に書いていることがわかる。それゆえ、ヴァリニャーノが述べる信者の数も、多少の誇張はあるかもしれないが、おおむね当時の実態を示していると推定できる。

エンリケス時代のペスカリア海岸でのイエズス会の布教には、三つの特徴がある。

第一に、イエズス会と真珠採りカーストとの関係は良好だったことである。ヴァリニャーノは、彼らすべてが、司祭たちに親愛の情を抱き、従順であると述べており、ザビエル

⁹³ 岸野『ザビエルと日本』、38~59頁。

⁹⁴ Schurhammer, *Francis Xavier*, vol. 2, pp. 347-8; Stephen, *Portuguese in the Tamil Coast*, pp. 276-288; Vink, "Between the Devil and the Deep Blue Sea," pp. 68-72.

⁹⁵ Stephen, *Portuguese in the Tamil Coast*, pp.68-72. ナーヤカは、ヴィジャヤナガル王国の地方統治のため、王国から送りこまれた武将であるが、16世紀になると、次第に封建領主的権力を確立するようになった。マドゥライなどのナーヤカが有力であった。

⁹⁶ Valignano, "Sumario," pp. 184-5; ヴァリニャーノ、『東インド巡察記』、129~130頁；Stephen, *Portuguese in the Tamil Coast*, p. 77.

⁹⁷ Valignano, pp. 182-3; ヴァリニャーノ、127頁。オランダ東インド会社の記録によると、1665年には、タミルナドゥ南海岸の17村のパラヴァスの人口は1万8000人から2万人程度で、さらにトゥティコリン、マナパッド、プンナイカーヤルには1万人が住んでいた。Vink, "Between the Devil and the Deep Blue Sea," pp. 68-9を参照。17世紀で3万程度の人口があったことを勘案すると、16世紀には4~5万人いたとするヴァリニャーノの報告は、誇張はあるにせよ、それほど不自然な数字ではない。

が始めた温情主義は続いていたことが確認できる⁹⁸。パラヴァスやカレアスにとってもキリスト教に改宗し、ポルトガルと強い信頼関係で結ばれることは、さまざまな現世利益を得られることを意味していた。真珠採取は海底での作業のため、溺れたり、大魚にかまれたりする危険が少なくない。負傷が相次ぐ真珠採りの人々にとって、イエズス会による病氣治癒の知識はまぎれもなく現世利益であった。さらに重要なのは、こうしたイエズス会の庇護によって、パラヴァスたちが経済的な恩恵を受けたことである。ヴァリニャーノは彼の報告書の中で、真珠採取のおかげでこの地の人々は金持ちである、教会をより豊かに、飾り立ててくれる、支配者から虐待されることがほとんどないと語っている⁹⁹。イエズス会聖職者の中には、国王への税の廃止を要望する際に、漁民は貧しく、抑圧された集団であると報告する者もいたが、ヴァリニャーノの記述はパラヴァスの富裕さを伝えている¹⁰⁰。パラヴァスが、南インドの政治勢力に拉致され、抑圧されていたのは、潜水ができる彼らがいなければ真珠採取は実現できなかったからである。彼ら自身が現地の政治勢力によって狙われてきたが、ポルトガルという庇護を得ることで、安寧を得ることができたのだった。

第二に、イエズス会は、ペスカリア海岸のキリスト教徒の集落を彼らの排他的布教区にし、パラヴァスやカレアスの人々を囲い込んだことである。イエズス会は、現地ポルトガル長官や官吏たちによる真珠採り潜水夫の搾取を阻止する必要もあった。いかなるポルトガル人もペスカリア海岸に1年以上住むことが禁止され、イエズス会から問題があると指摘された人物は追放された。エンリケスは、ペスカリア長官のことを「キリストの十字架の敵」と呼び、彼らと激しく対立した。イエズス会はフランシスコ会の布教にも異議を唱えている。こうした排他的な行動により、ポルトガル人官吏たちの反感を買い、イエズス会は1605年から1621年までペスカリア海岸から追放されることになった¹⁰¹。

第三に、ペスカリア海岸におけるイエズス会の布教は、沿岸部に暮らすパラヴァス信者とカレアス信者の維持にだけに留まっており、教勢をインド内陸部の農業地帯に拡大しようとしなかったことである。ヴァリニャーノは、「(ペスカリア海岸では)我がイエズス会員たちはキリスト教徒を保持し、教理教育を施しているだけである。その理由は、ペスカリア海岸の住民全員が既にキリスト教徒であり、内陸にいる異教徒たちは高貴なカーストに属していて、未だに扉を開いてはくれないからである。このため、ペスカリア海岸では異教徒の改宗が行われていないのである」(高橋裕史訳)と述べている¹⁰²。イエズス会

⁹⁸ Valignano, "Sumario," p. 183; ヴァリニャーノ (高橋訳) 『東インド巡察記』、128頁。

⁹⁹ Valignano, p. 183; ヴァリニャーノ (高橋訳)、128頁。

¹⁰⁰ Silva, "The Portuguese and Pearl Fishing," p. 22. S. B. カウフマンは、南インドの農業社会は、一般に貧しく、階層的であることが強調されてきたが、その沿岸部に暮らすパラヴァスは、コロニアル時代には海上交易において重要な仲介者であり、起業家であった、沿岸部は漁業と繁栄する国際商業の地域であったと主張している。Kaufmann, "A Christian Caste in Hindu Society," p. 205.

¹⁰¹ Silva, p. 22; Vink, "Between the Devil and the Deep Blue Sea," pp. 70-1.

¹⁰² Valignano, "Sumario," p. 183; ヴァリニャーノ (高橋訳) 『東インド巡察記』、127~128

の布教方針は現状維持であった。このことは、イエズス会が農業カーストの布教には関心がなく、パラヴァスとカレアスを維持しておけば、ペスカリア布教の目的は達成されていたことを示している。

以上、タミルナドゥ南海岸における宗教勢力の進出の経緯とその特徴を考察した。本節の考察によって、ザビエルのインドでの布教活動は、主にマンナール湾の「トゥティコリン真珠床」が近海にあるマナパッドからトゥティコリンの間の沿岸部でなされており、具体的には、ヒンドゥー教徒の広大な領地に飛び地のように 30 程度存在するキリスト教化した真珠採りカーストの漁村が対象だったことが明らかになった。さらに、ザビエルの布教方法のひとつには、温情主義という戦略があり、それによって真珠採り潜水夫のパラヴァスは強固な信仰心をもったキリスト教徒の集団に再編され、別の真珠採りカーストのカレアスの改宗も行われたことが判明した。ザビエル以後のイエズス会の活動は、パラヴァスとカレアスの維持・管理に終始し、教勢をインド内陸部の農業地帯には拡大しなかったことも解明された。つまり、16 世紀のタミルナドゥ南海岸におけるイエズス会の布教は、インド社会の底辺で抑圧された貧しい異教徒をできるだけ多く改宗するという純粋な宗教目的ではなく、すでに改宗した真珠採り潜水夫の強固なカトリック集団への再編と新たな真珠採りカーストの改宗であり、その維持・管理だったことが明らかになった。

つまり、「マンナール湾真珠生産圏」におけるインド側での宗教勢力の進出は、真珠の産地における真珠採り潜水夫を対象にした布教だったのである。イエズス会は真珠採りカーストの絶対的帰依を勝ち取ったが、それは真珠史の観点では、真珠採取に欠かせない潜水労働者をイエズス会に忠実な集団に仕立て上げたことを意味していた。

2.3 マンナール島への宗教的・政治的進出

次に、スリランカ側のマンナール島におけるポルトガルの対外進出の経緯を見ておきたい。ポルトガル勢力のマンナール島への進出は真珠史の先行研究ではシルヴァを除いてほとんど考察されておらず、ポルトガルの対外拡張史の先行研究などでも簡単に言及されるに過ぎない¹⁰³。ここではそうした先行研究がほとんど使用していないザビエル書簡やヴァリニャーノの東インド報告を参照し、また T. アベヤシンゲの先行研究も参照しながら、ポルトガルの宗教勢力・政治勢力の進出経緯を見ていきたい。

ペスカリア海岸はポルトガルの政治勢力が先に進出したが、マンナール島への進出はザビエル率いる宗教勢力によって開始されることになった。16 世紀初め、同島はタミル系ジャフナ王国のサンキリ 1 世の支配下にあった。この島の沖合には「マンナール湾真珠生産圏」の二大真珠床のひとつがあり、島には真珠採取を担うタミル系カレアス・カーストが暮らしていた。

頁 ; Stephen, *Portuguese in the Tamil Coast*, p. 289.

¹⁰³ Silva, “The Portuguese and Pearl Fishing off South India and Sri Lanka,” pp. 22-3.

1544年8月頃、ザビエルは彼の配下の宣教師にジャフナ王国領のカレアスの布教を命じた。宣教師の名前は明らかではないが、その布教活動は成果が出て、多くのカレアスの改宗が実現した。しかし、このことに激怒したサンキリが、キリスト教への改宗者600人を虐殺した。この事件を知ったザビエルは、インド総督にジャフナ制圧のための大艦隊の派遣を依頼し、総督も了承した。しかし、ちょうどその頃、ポルトガル国王の船がジャフナ沖で座礁し、その積荷がジャフナ王国に没収されるという事件が発生した。サンキリとの積荷返還交渉の方が先決となり、ザビエルの求める軍事行動は延期となった。ザビエルは、事態が思うように進まないことに失望し、本人はインドを離れ、マカッサルに向かう決心をした。これによってマンナール島の布教はしばらく途絶えることになった¹⁰⁴。

マンナール島での布教は改宗者が大量虐殺され、失敗に終わったが、この事例は、スリランカ北部の真珠の採取地に最初に進出したのは政治勢力ではなく、ザビエル指揮下の宗教勢力であったことを示している。マンナール島は、マンナール湾の「セイロン島西岸真珠床」での真珠採取の基地となる場所で、ここでもイエズス会の布教の対象は、真珠採取カースト、カレアスだった。

1560年、ポルトガルはマンナール島の領有に成功した。同年10月、ポルトガル副王コンスタンティノ・デ・バラガンサはジャフナ王国へ艦隊を派遣した。激闘の後、両者はポルトガルに有利な条件で和平条約を締結することになり、ジャフナ王国は存続が許されたが、マンナール島はポルトガルに割譲されたのだった¹⁰⁵。1619年にはジャフナ王国もポルトガルに併合されることになる¹⁰⁶。

マンナール島の領有によって、この島には要塞が建てられ、150人を擁するポルトガル駐屯軍が滞在した¹⁰⁷。マンナール島長官職が置かれ、この島がマンナール湾岸世界におけるポルトガルの政治勢力の拠点となった。これまでペスカリア海岸は、トゥティコリンに拠点を置くペスカリア長官によって管轄されていたが、以後、マンナール島長官がペスカリア海岸も管轄するようになった¹⁰⁸。当時のポルトガル文献のセイロンの項目にはマンナール島は入っておらず、マンナール島とペスカリア海岸は、セイロンとは異なるポルトガルの行政区だった¹⁰⁹。

ポルトガルによるマンナール島の領有の後、エンリケスの率先でイエズス会も進出し、同島のカレアス・カーストへの布教が行われると同時に、タミルナドゥ南海岸からのパラ

¹⁰⁴ マンナール島のカレアスへの布教、信者の大虐殺、ザビエルによるジャフナへの艦隊派遣依頼などは、次のザビエル書簡で明らかになる。“Epistola 30 (June 16, 1544),” “Epistola 36 (August 29, 1544),” and “Epistola 48 (January 27, 1545),” in *Epistolae Xavierii*, vol. 1, pp. 208, 220, 274-5; 河野訳『聖フランシスコ・ザビエル書簡集』、143頁、154頁、191頁。Schurhammer, *Francis Xavier*, vol. 2, pp. 460, 471-3, 483-4, 551-5 も参照。

¹⁰⁵ Abeyasinghe, *Jaffna under the Portuguese*, pp. 1-5.

¹⁰⁶ Abeyasinghe, p. 14.

¹⁰⁷ Schurhammer, *Francis Xavier*, vol. 2, p. 303, note 143.

¹⁰⁸ Valignano, “Sumario,” pp. 183; ヴァリニャーノ（高橋訳）『東インド巡察記』、128頁。

¹⁰⁹ Abeyasinghe, *Jaffna under the Portuguese*, p. 7.

ヴァスとカレアスの移住も実施された。これによってマンナール島には、パラヴァスとカレアスそれぞれのキリスト教徒のタミル系真珠採り集団が誕生したが、1563年に疫病が蔓延し、パラヴァスはインドの故国へ帰国した。しかし、インドから来たカレアスの方は島に残った。16世紀後半、マンナール島にはふたつのキリスト教徒のカレアス・カーストの村が存在することになった。ひとつはマンナール島住民のカレアスの村であり、もうひとつはインド本土からの移住民の村であった。両方で2500人以上の信者が存在した。イエズス会では、ペスカリア海岸の方が上位に位置しており、マンナール島はペスカリア海岸の上長に服属した¹¹⁰。

以上、ザビエル書簡やヴァリニャーノの報告記録などを中心に、マンナール島へのポルトガルの宗教勢力・政治勢力の進出経緯を明らかにした。マンナール湾でのイエズス会の布教は、タミルナドゥ南海岸同様、真珠採取の基地となる島での真珠採りカーストを対象にしたものだった。一国史を超えた広域俯瞰で宗教勢力の進出を考察すると、イエズス会の布教は、インド側でもスリランカ側でも名高い真珠採取地で行われ、布教の対象者はインド側でもスリランカ側でも真珠採取カーストだったことが明らかになり、イエズス会の布教の共通性が明確になる。一方、ポルトガルの政治勢力の進出については、マンナール島長官が、ペスカリア海岸も管轄区域として支配した。つまり、ポルトガルはインド側とスリランカ側に拠点を持ったことで、その間の海域もポルトガルの版図と見なせるようになった。マンナール島領有の歴史的意義は、ポルトガル勢力が、海上交通よりも真珠採取で利用されてきた海域の制海権を主張できるようになったことだった。ポルトガル海洋帝国は「マンナール湾真珠生産圏」に進出し、全域ではなかったが、真珠の産地とその海域支配を確立し、真珠採りのプレーヤーとなる潜水夫を改宗したことが明らかになった。

¹¹⁰ Valignano, “Sumario,” pp.185-6; ヴァリニャーノ (高橋訳)『東インド巡察記』、130~131頁。Schurhammer, *Francis Xavier*, vol. 2, p. 303, note 143; Arunachalam, *The History of the Pearl Fishery*, p. 112; Frykenberg, *Christianity in India*, pp. 138, 146. 16世紀におけるマンナール島のカレアスの改宗とインド本土のカレアスのマンナール島への移住は、スリランカ史では看過されている。カレアスは、今日、タミルナドゥ南海岸やスリランカに住むタミル系漁民カースト *Karaiyar* のことである。スリランカには、シンハラ系のカラーワ *Karāva* と呼ばれる漁民カーストもいる。彼らについては、高桑史子「漁民？ 商人？——スリランカのカラーワ・カースト」秋道智彌編『海人の世界』(同文館、1998年)293~316頁を参照。高桑は、カラーワの中には、タミル語を母語とし、今世紀初頭までポルトガル系の姓を名乗っていたシンハラ化したカトリック・カラーワがセイロン島西岸に住んでいると述べているが、彼らとタミル系の *Karaiyar* 及び真珠採取との関係性は考察していない。しかし、筆者は、シンハラ化したカトリック・カラーワの起源については、ポルトガル時代の文献でカレアスと呼ばれたタミル系真珠採りカーストの観点からも考察すべきであると考えている。川島耕司『スリランカと民族——シンハラ・ナショナリズムの形成とマイノリティ集団』(明石書店、2006年)や野崎明「スリランカにおける民族問題に関する社会経済学的研究——インド・タミル人問題を中心に」『東北学院大学経済学論集』第167号(2008年3月)、101~134頁でも、スリランカ・タミルの起源と真珠採取の関係は言及されていない。

17世紀半ばになると、オランダ東インド会社が、ジャフナやマンナール島、タミルナドゥ南海岸のトゥティコリンなどを狙うようになった。1658年、オランダはトゥティコリンとマンナール島を征服し、ポルトガルによるそれらの地域の支配は終了した。オランダ勢力は、カトリック教徒のパラヴァスとカレアスをプロテスタントに改宗させようと尽力した。しかし、彼らのローマ・カトリックへの信仰心は強く、プロテスタント化への試みは失敗した。パラヴァスとカレアスは、オランダ時代においても彼らの信仰を維持し続け、今日まで続くローマ・カトリック集団になった¹¹¹。ザビエルをはじめとするイエズス会は、タミル系の真珠採りカーストをゆるぎないカトリック信者にしたのである。

2.4 現地の宗教勢力の存続

イエズス会は「マンナール湾真珠生産圏」へ進出したが、彼らがペスカリア海岸と呼んだタミル系キリスト教徒の布教区は、30程度の漁村に過ぎなかった。それゆえ、タミルナドゥ南海岸では、他の宗教勢力はキリスト教徒に一扫されることなく、それぞれ村落を作り、その勢力を維持することができた。ヴァリニャーノ自身もペスカリア海岸にはイスラーム教徒の村落があることを伝えている。代表的なイスラーム教徒の真珠採取の村落がカーヤルパッティナムとキラカライである¹¹²。

カーヤルパッティナムは、先述したように、ポルトガルの伸長を嫌ったカーヤル在住のラッバイやマラッカーヤルが移住して作った村である。以後、真珠採取の時期には多くのラッバイを送り出す基地となった。

一方、キラカライは、タミルナドゥ南海岸北部の代表的な真珠採取地で、真珠の大規模採取が実施される所でもあった。ポルトガル来航以前からムスリム支配者が存在し、数多くのラッバイやカレアスが真珠採取の潜水労働を担っていた。16世紀になると、ポルトガルの政治勢力とイエズス会が進出したが、それほど成果を出すことができず、町自体はムスリム勢力の拠点であり続けた。その後の詳細は定かではないが、ポルトガルはキラカライに一定の影響力を行使していたことが推定できる。1597年のポルトガルの「マンナール要塞行政規定書」によると、キラカライの住民は毎年、5カラット（直径9.01ミリ）の真珠2個と2カラット（直径6.64ミリ）の真珠2個をポルトガルに貢納することになっていた¹¹³。真珠を貢納していたのは、カレアスだったと考えられる。

¹¹¹ オランダ勢力のプロテスタント化の失敗については、S. Arasaratnam, “XVI: Oratorians and Predikants: The Catholic Church in Ceylon under Dutch Rule” and “XVII: Reverend Philippus Baldaeus: His Pastoral Work in Ceylon 1656-1665,” in *Ceylon and the Dutch, 1600-1800: External Influences and Internal Change in Early Modern Sri Lanka* (Aldershot: Variorum, 1996), pp. 216-22, 27-37; Vink, “Between the Devil and the Deep Blue Sea,” pp. 77-80 を参照。S. アラサラトナムは、ポルトガル時代に生まれたスリランカ北部のカトリック教徒の多くが、真珠採りカーストであることばかりか、漁夫であることもほとんど議論していない。

¹¹² Vink, *Encounters on the Opposite Coast*, p. 237.

¹¹³ “Segundo regimento da fortz. de manar,” in *Regimentos das fortalezas da India*, pp.

キラカライの北方のヴェダライには、ポルトガルによって小さな要塞が建てられ、イエズス会による布教も進められた。しかし、16世紀半ば、ヴィジャヤナガル軍の侵攻によって、要塞は破壊され、宣教師も殺された。こうして、ヴィジャヤナガル王国がヴェダライを奪回し、以後ヴェダライ以北の海岸は、ヒンドゥー勢力の支配下に置かれるようになった¹¹⁴。

ラーメシュワラム島については、ポルトガル勢力はヒンドゥー教徒の巡礼者から金銭を徴収しようとしたが、島自体はキリスト教の影響を受けることなく、ヒンドゥー教の聖地であり続けた。16世紀の真珠採取の状況は明らかではないが、17世紀にはこの島やタミルナドゥ南海岸北部を支配するセトゥパティやヒンドゥー寺院などが、ヒンドゥー教徒の潜水夫を所有して、真珠採取を行っていた¹¹⁵。

以上、「マンナール湾真珠生産圏」におけるポルトガルの進出を考察した。広域俯瞰で分析すると、ポルトガルの政治勢力も宗教勢力の「マンナール湾真珠生産圏」への進出は、真珠の産地における真珠採りカーストのパラヴァスとカレアスを対象にしたものだったこと、マンナール島支配によってポルトガルはその海域も版図としたことが判明した。パラヴァスの改宗と福利厚生については、イエズス会だけではなく、ポルトガル国王、インド総督も強い関心を示すポルトガル海洋帝国の戦略だったことが明らかになった。その背後にあったのは、ポルトガルが有利にマンナール湾の真珠を獲得できるシステムを作ることであった。

「南米カリブ海真珠生産圏」、「ペルシア湾真珠生産圏」同様に、「マンナール湾真珠生産圏」においても真珠ゆえの対外拡張が起こったが、マンナール湾では宗教勢力の役割が大きかった。ポルトガル来航以前のタミルナドゥ南海岸では、真珠をめぐるヒンドゥー教徒とイスラーム教徒との混在が見られていたが、さらにキリスト教徒が加わって、この地域の宗教的多様性に拍車をかけたことも明らかになった。ポルトガル勢力は、マンナール島への移住政策も実施した。マンナール湾の真珠が、「マンナール湾真珠生産圏」にもたらした政治的・社会的・宗教的な影響は大きかったのである。

第3節 「マンナール湾真珠生産圏」の真珠の生産

本節では、ポルトガルの政治勢力・宗教勢力が、「マンナール湾真珠生産圏」支配によって、どのように利益を引き出したのかを、真珠の生産面に着目することで考察する。

ここで注意しなければならないのは、マンナール湾の真珠採取には、マンナール湾岸の津々浦々で行われた真珠採取と季節性の大規模採取というふたつのパターンがあったことである。津々浦々の真珠採取について、16世紀の一次史料は詳しい情報を残していない。

485-6; Silva, "The Portuguese and Pearl Fishing," p. 26.

¹¹⁴ Stephen, *Portuguese in the Tamil Coast*, p. 71.

¹¹⁵ Nelson, *The Madura Country*, p. 154; Arunachalam, *The History of the Pearl Fishery*, pp. 113-4.

しかし、地先の海に真珠床があれば、真珠採取が実施されていたと考えるのが自然である。実際、エンリケスは、真珠採取はこれまでプンナイカーヤルで行われてきたが、今ではトゥティコリンでも実施され、繁栄していると述べている¹¹⁶。「トゥティコリン真珠床」が近海に広がるタミルナドゥ南海岸のプンナイカーヤルやトゥティコリン、キラカライなどの真珠採取地では、マンナール島領有以後も、大規模採取と時期を少しずらし、その前後で真珠採取が実施されていたと推測できる¹¹⁷。

一方、真珠の大規模採取は、16世紀前半はキラカライやカラディヴ島で実施されてきたが、ポルトガルのマンナール島領有後は、この島が大規模採取の中心地になった。「セイロン島西岸真珠床」は、沿岸部から離れた外洋にあるため、真珠の大規模採取は季節風が途絶え、海面が穏やかになる3月から4月頃に実施され、9月から10月頃にも行われることがあった。このように真珠の大規模採取は、一定の時期に行われる季節性漁業であったが、年によっては実施されない場合もあった。

真珠史の先行研究では、マンナール湾の大規模採取は早くから着目されており、16世紀後半のイタリア人旅行家チェーザレ・フェデリチが記した真珠採取の描写はよく引用される。また、一部の研究は、1582年の『ポルトガル王室の各都市、各要塞に関する報告書』や「マンナール要塞行政規定書」、17世紀初めのポルトガル人ペドロ・テイシェイラの記述なども参照してきた。ただ、先行研究では、これらの一次史料の訳が正確ではない上に、これらの史料が述べるポルトガル植民地政府やポルトガル艦隊の役割はほとんど考察されていない。また、大規模採取の定額税 (*renda*) だけに主要な関心が払われ、その他の収益や津々浦々の真珠採取の実態は看過されてきた。本節では、マンナール湾の真珠採取に係わる16世紀の一次史料を正確に読み直し、オルタやヴァリニャーノの史料も参照することで、先行研究が明らかにしてこなかったポルトガルの宗教勢力・政治勢力が関与した真珠採取業という水産業の実態を明らかにし、彼らの利益の引き出し方を考察する。

3.1 潜水労働者を監督したイエズス会

イエズス会が布教したパラヴァスとカレアスは、海から富を引き出す真珠生産の労働者である。同時に、彼ら自身が船の所有者であることも多く、個人事業者のような側面もあったと考えられる。当時、潜水は特殊技能だったので、パラヴァスとカレアスは代替のきかない労働力であった。タミルナドゥ南海岸の政治支配者にとっては、パラヴァスとカレアス自身が真珠採取の生産手段であった。それゆえ、真珠採り潜水夫は周辺諸勢力の争奪の的となってきた。第2節では、イエズス会はパラヴァスやカレアスを強固なカトリック集団に再編し、彼らの囲い込みに成功したことを明らかにしたが、そのことは、イエズス会が真珠採取の労働力を独占管理するようになったことを意味していた。

¹¹⁶ Stephen, *Portuguese in the Tamil Coast*, p. 77.

¹¹⁷ セイロン島でも、大規模採取と時期をずらした津々浦々の真珠採取の実施が報告されている。Silva, ed., *Portuguese Encounters with Sri Lanka and the Maldives*, pp. 55-6.

16 世紀半ばにゴアに在住していたオルタは『インドの薬草と薬物についての対話』の中で、真珠 (*aljófar*) はコモリン岬とセイロン島の間で採れる、この漁場 (*pescaria*) は国王陛下のものであると述べた後、「(この漁場は) 依然として多く (の *aljófar*) を生み出すことができるが、それはそこで働く 5 万人以上のキリスト教徒の信仰への情熱が費やされているからだ」と続けている。オルタはさらに、このキリスト教世界 (*crístandade*) は、司教総代理のミゲル・ヴァスによって作られ、フランシスコ師 (ザビエル) によって促進されたと説明し、「今日、このキリスト教世界はイエズス会の神父たちと助修士たち (*irmãos*) によって見守られ、庇護されている」と述べている¹¹⁸。オルタの記述から、真珠の生産はパラヴァスなどのキリスト教徒が精力的に行い、彼らの管理はイエズス会が行っていることがわかる。17 世紀初めのテイシェイラも、真珠採取ではイエズス会がすべて牛耳っていると述べている。こうした記述によって、イエズス会が真珠採取の潜水労働者を独占管理していたことが明らかになる¹¹⁹。また、当時の人々は、マンナール湾で真珠が採れるのは、イエズス会聖職者たちの布教の成果として、彼らの活動を高く評価していたこともわかる。

現地のポルトガル人官吏も、真珠採取の潜水労働力管理には、イエズス会が欠かせないことを認識していた。16 世紀末、セイロン島南西海岸に位置するカルピティヤとチローの海域では小規模な真珠採取が行われていたが、ポルトガル植民地政府はさらに開発の余地があると見ていた。ジョルジェ・フロリン・デ・アルメイダというポルトガルの会計官は、1599 年の報告書で、「我々はここで真珠採取を行うべきである。そのためには、イエズス会を通して他の海岸に暮らす人々の協力を得なければならない。ここでは彼らが大変必要とされている」と提言している¹²⁰。セイロン島の主要民族のシンハラ人は真珠採り潜水を担ってきた主要な民族ではなかった。この記述によって、真珠採取業を発展させるには、タミルナドゥ南海岸やマンナール島に暮らすタミル系の潜水夫たちが欠かせず、その潜水夫を説得し、真珠採取に動員するにはイエズス会の協力が不可欠であったこともわかる。

イエズス会が囲い込んできたパラヴァスとカレアスは、主要な真珠採り潜水夫であり、オルタやアルメイダの記述から、イエズス会の宗教活動には、真珠採り潜水夫の改宗と維持だけでなく、真珠採取という水産業の現場での潜水労働者管理という側面があったことが判明する。第 2 節で明らかにしたように、イエズス会は彼らの絶対的帰依を勝ち取っていたので、その潜水労働者はイエズス会に忠実な集団だった。

3.2 イエズス会が得た利益

なぜイエズス会は、これほど真珠採り潜水夫の管理に熱心だったのだろうか。

その理由のひとつが、真珠の獲得である。イエズス会は海外布教を特徴とするが、その

¹¹⁸ Orta, *Colóquios dos simples e drogas da Índia*, vol. 2, p. 120.

¹¹⁹ Teixeira, ed. and trans., “A Short Narrative of the Origin of the Kingdom of Harmuz,” in *The Travels of Pedro Teixeira*, trans. William F. Sinclair, with further notes by Donald Ferguson (1902; Nendeln: Kraus Reprint, 1967), p. 178.

¹²⁰ Silva ed., *Portuguese Encounters with Sri Lanka and the Maldives*, p. 43.

根拠となったのが、『新約聖書』「マタイ伝」や「マルコ伝」にある弟子たちの派遣を命じる一節である。イエズス会聖職者は「マタイ伝」や「マルコ伝」の章句には親しんでおり、ザビエル自身も書簡の中で、繰り返しそれらの章句を引用している。「マタイ伝」13章45-46節には、次のような章句がある。

また、天の国は次のようにたとえられる。商人が良い真珠を探している。高価な真珠の一つを見つけると、出かけて行って持ち物をすっかり売り払い、それを買う。(新共同訳) 121

このたとえば、全財産を投げ出しても、一個の真珠は手に入れるべきだとも解釈できる。『聖書』に真珠を得る説話が含まれていることを勘案すれば、イエズス会聖職者たちが、真珠に対し強い執着をもったとしても不思議ではない。マンナール湾の海域から真珠を獲得することは、イエズス会聖職者にとって神の教えの実行でもあった。真珠はロザリオや十字架などに使うことができた。

16世紀末、日本で活躍したイエズス会聖職者のジョアン・ロドリゲスは『日本教会史』の中で、アジアは、人々の尊重するあらゆる貴重なものを産出すると述べ、具体的には「最良で最も貴重な真珠」をその一例に挙げている¹²²。イエズス会聖職者たちは、真珠の希少性や価値を知っていたのである。したがって、真珠の採取地における布教は彼らにとって魅力的で、宗教的な情熱だけでなく、真珠獲得という物質的な利益もあった。

イエズス会は、1570年代になると、これまでポルトガル国王がパラヴァスに課していた十分の一税の免除を推し進め、彼らから直接喜捨を受けるようになった。十分の一税とは教会税とも呼ばれ、キリスト教徒に課せられる税である。ポルトガル国王は「国王教会保護権」(*padroado real*)によって、教会に援助を行うためにこの税を徴収していた¹²³。たとえば、1558年にはペドロ・ロペスという人物(おそらくパラヴァスのキリスト教徒)から十分の一税として真珠が徴収されている。十分の一税は、大粒真珠(*pearls*)6オンス分の5パーセントと、真珠(*seed pearls*)6オンス分の八分の一で、それぞれ6クルザドの価値があった。同年、プナイイカーヤルからも十分の一税として、真珠(*seed pearls*)3オンス分の八分の一が納められており、5クルザドの価値があった¹²⁴。こうした十分の一税は、1560年代までは、おそらく個別または地域別に取りたてられた。

しかし、1570年代になると、十分の一税は免除されるようになり、代わりにパラヴァスの代表者が一括で、真珠採取から上がる一定の収益をイエズス会に納めるようになった¹²⁵。

121 この章句の真珠には、*margaritēs*の語が使われている。Donkin, *Beyond Price*, p. 91.

122 ロドリゲス(池上他訳)『日本教会史(上)』、77頁。

123 「国王教会保護権」については、ヘルマン・テュヒレ他(上智大学中世思想研究所訳)『キリスト教史5——信仰分裂の時代』(平凡社、1997年)、36~38頁を参照。

124 Stephen, *Portuguese in the Tamil Coast*, p. 76. 1オンスは、28.75グラム。

125 高橋『一六世紀イエズス会インド管区の経済構造に関する研究』、123~124頁; Silva,

ヴァリニャーノは、ペスカリア海岸の布教区では、真珠 (*aljofar*) の採取時期になると、キリスト教徒 (パラヴァス) の中心人物たちが、地域社会の経費に充てるため「莫大な額の金銭」を集め、その中から司祭の人数に応じて毎年 1000 から 1200 クルザド前後を与えてくれると述べている¹²⁶。一方、マンナール島ではキリスト教徒たちから 200 スクード近くが貢がれた¹²⁷。つまり、1570 年代以降、国王への十分の一税を中止する代わりにイエズス会が一定の喜捨を受け取るシステムになったのである。これらの喜捨は金貨での寄進だったと推測できるが、十分の一税が真珠の物納だったことを考慮すれば、イエズス会も相当量の真珠を受け取っていたことが推定できる。

ヴァリニャーノは、ペスカリア海岸の人々は、真珠採取のおかげで豊かであり、教会を一層豪華に美しく飾りたててくれると述べ、「このキリスト教世界 (*cristiandad*) が、我々がインド世界にもつ最上のものである」と語っている¹²⁸。ペスカリア海岸が「最上」(*la mejor*) と見なされたのは、イエズス会の宗教的・精神的達成があったと同時に、真珠や金貨の入手という経済的・物質的な利益も大きかったことを示している。

1560 年以降、真珠の大規模採取がマンナール島沖で実施されるようになった。イエズス会はそうした大規模採取からも利益を引き出した。16 世紀末のオランダ人、ヤン・ハイヘン・フォン・リンスホーテンの *Itinerario* (邦訳名『東方案内記』) は、大規模採取の状況を詳しく述べている。彼の記述については後述するが、イエズス会の箇所について見ておくと、採れた真珠の四分の一はイエズス会聖職者に配分される、なぜなら彼らはかの地で修院を経営し、初めてその地にキリスト教の信仰をもたらしたからであると記されている¹²⁹。イエズス会聖職者たちは、パラヴァスらの喜捨で真珠を獲得していたが、大規模採取の生産現場でも生産量の四分の一の真珠を入手していたのである。

以上、イエズス会の真珠採り潜水夫管理の意図を考察した。イエズス会は、キリスト教徒となった真珠採り潜水夫の維持・管理を行うことで、金銭だけでなく、真珠獲得という物質的利益も得ていたことが明らかになった。「マンナール湾真珠生産圏」でのイエズス会の宗教活動は、真珠採り潜水夫の維持管理を特徴とするが、その根底には経済的な利益があった。真珠のための宗教活動があったのである。

3.3 真珠の大規模採取の実態

マンナール湾の真珠採取の特徴は、1 年に 1 回か 2 回、季節風のやむ時期に沖合で行われ

“The Portuguese and Pearl Fishing,” p. 22.

¹²⁶ Valignano, “Sumario,” p.184; ヴァリニャーノ (高橋訳) 『東インド巡察記』、128~129 頁。

¹²⁷ 高橋『一六世紀イエズス会インド管区の経済構造に関する研究』、124~125 頁 (注 73)。

¹²⁸ Valignano, “Sumario,” p. 183; ヴァリニャーノ (高橋訳) 『東インド巡察記』、128 頁。

¹²⁹ Jan Huygen van Linschoten, *Itinerario: Voyage ofte schipvaert van Jan Huygen van Linschoten naer Oost ofte Portugaels Indien 1579-1592*, ed. H. Kern (The Hague: Martinus Nijhoff, 1955-7), vol. 2, p. 162 (chap. 84); リンスホーテン (岩生成一他訳) 『東方案内記』 (平凡社、1968 年)、541~542 頁。

る大規模採取が存在したことである。こうした大規模採取は、*pescaria grande* と呼ばれており、ポルトガルのマンナール島領有以後、大規模採取は「セイロン島西岸真珠床」のある海域で実施された¹³⁰。16世紀後半のイタリア人旅行家フェデリチは彼の紀行文で大規模採取の状況を語っている。抄訳すると、次のとおりである。

真珠採取は3月か4月に始まり、50日間続く。優秀な潜水夫による事前調査によって真珠貝の豊饒な海域が毎年選ばれ、その海域に面した場所に村ができ、家やバザールや店が立ち並ぶ。村は真珠採取の時期だけ存在する。漁夫はすべてキリスト教徒で、ポルトガル国王とイエズス会に一定額を払って真珠採取を行う。漁夫が真珠採取を行っている時、武装した3~4隻のフスタ船が彼らを海賊から守るために巡航する。真珠採取は小帆船が3~4隻の船団になって行い、一隻の船には7~8人が乗船している。朝、数多くの船がいつせいで出航し、15から18ファザムの深さの海域に達すると、そこで錘石とロープを使って潜水した後、夕方に帰港する。採取した真珠貝は一山、一山ごとに積み上げていき、真珠漁が終わり、貝の身も腐って真珠を取り出しやすくなった時に、潜水夫たちが車座になって貝を剥き、真珠を探す¹³¹。

以上が、フェデリチが語る大規模採取の様子である。彼の報告は、これ以外にも、取り出された真珠はチェッティ商人が分類すること、真珠採取の村には現金を持ったあらゆる国の商人が集まり、数日間で真珠を買い上げることも伝えている¹³²。

一方、『ポルトガル王室の各都市、各要塞に関する報告書』には、「マンナール島と真珠採取」(*Ilha de Manar e pescaria do aljofar*) という項目があり、真珠の大規模採取について述べている¹³³。この報告書は、インド本土とセイロン島の間海峡では、「真珠とオリエント産大粒真珠の大規模採取」(*grande pescaria de Aljofar e perolas Orientaes*) が行われ、非常に称揚されていること、真珠採取はふたつのモンスーンの間実施されることなどを述べている。さらに、異教徒(ヒンドゥー教徒)、イスラーム教徒、キリスト教徒に限らず、多種多様でおびただしい数の民族が真珠採取のために集まること、大粒真珠と真珠

¹³⁰ “Livro das cidades, e fortalezas,” fol. 52 r.

¹³¹ Cesare Federici [Caesar Frederickel], “The Voyage and Travell of M. Caesar Fredericke,” in *The Principal Navigations, Voyages, Traffiques & Discoveries of the English Nation*, ed. Richard Hakluyt (New York: AMS Press, 1965), vol. 5, pp. 395-6. 1590年に出版されたヴェネツィアの宝石商ガスパロ・バルビのオリエント世界の旅行記には、フェデリチのマンナール湾の真珠採りの光景の記述ときわめてよく似た記述がある。R. カーターはこの記述をペルシア湾の記述とし、ペルシア湾の真珠採取ではイエズス会に税を払ったと解説しているが、適切ではない。バルビの記述の英訳及びカーターの解説は、Robert Carter, *Sea of Pearls: Seven Thousand Years of the Industry that Shaped the Gulf* (London: Arabian, 2012), pp. 78-9 を参照。

¹³² Federici, pp. 395-6.

¹³³ “Livro das cidades, e fortalezas,” fol. 52 r. この箇所では「真珠採取」の意味で使われている。

を購入したい人々が蝟集すること、人々はマンナールと呼ばれる小さな島で過ごすことなどを伝えている¹³⁴。

フェデリチと『ポルトガル王室の各都市、各要塞に関する報告書』を参照すると、マンナール湾の大規模真珠採取は、特定の時期に突如村ができ、宗教、民族を超えて数多くの真珠採り潜水夫や商人を集める季節性の一大イベントであったことが判明する。季節性事業による膨大な人の移動と集客効果、宗教的・民族的多様性こそが、マンナール湾の大規模真珠採取の特徴であった。

フェデリチは、武装した3~4隻のフスタ船がキリスト教徒の漁夫を海賊から守るために巡航すると述べているが、これはポルトガルが関与している真珠採取では漁夫はキリスト教徒であったと解釈すべきである。フスタ船は、両舷に櫂をつけ、大砲を備えた小型帆船である。大規模採取の時期は風にあたるため、櫂走できる軍船が使われたことがわかる。

フェデリチが語る真珠採取の情景は、軍船の護衛を除くと、19世紀に数多く報告されたセイロン島の真珠採取の状況とほとんど同じであり、人類が海に潜って営む真珠採取は基本的に変化しないことを示している¹³⁵。マンナール湾の真珠採取の特徴は、毎日、日帰りの沿岸漁業を繰り返すことであり、そのため真珠採取の基地が必要で、一過性の村ができた。19世紀には真珠採取船は深夜にいつせいに航したが、16世紀は朝に航しているの、19世紀よりは近距離の沖で真珠採取が行われていたことがわかる。19世紀に真珠採取を差配していたのはイギリス植民地政府であったが、フェデリチの記録によると、ポルトガルの植民地官吏が熟練の潜水夫の意見を聞きながら、真珠貝の豊饒な海域を選定し、真珠採取村の設立などを決めていたと考えられる。フェデリチは真珠採取村の場所については語っていないが、『ポルトガル王室の各都市、各要塞の報告書』の記述から、16世紀後半には一過性の真珠採取村はマンナール島沿岸部に置かれたことがわかる。

フェデリチも『ポルトガル王室の各都市、各要塞の報告書』も、船舶数、潜水夫や商人などの人数などについては述べていない。しかし、リンスホーテンは『東方案内記』の中で、セイロン島とコモリン岬の間では、毎年、多くの真珠が採取される、少なくとも3000人から4000人を超える潜水夫がいる、彼らは真珠採取だけで暮らし、生活を維持している、毎年、多くの人が溺れたり、サメに食われたりすると述べている¹³⁶。テイシェイラが翻訳・編集した「ホルムズ王統史抄訳」は、マンナール湾の大規模採取には400隻から500隻の船が集まり、漁夫の他、商人や（ポルトガル人）官吏、民間の代理人など5万人から6万人ぐらいが集まったと記している¹³⁷。フェデリチによると、一隻の船には7~8人が乗船し

¹³⁴ “Livro das cidades, e fortalezas,” fol. 52 r.

¹³⁵ 19世紀のイギリスによるマンナール湾の真珠採取の状況は、山田『真珠の世界史』、108~114頁を参照。

¹³⁶ Linschoten, *Itinerario*, vol. 2, p. 161 (chap. 84); リンスホーテン（岩生他訳）『東方案内記』、539頁。

¹³⁷ Teixeira, ed. and trans., “A Short Narrative of the Origin of the Kingdom of Harmuz,” pp. 177-9. ティシェイラは1隻の船には60人から90人が乗船していたと述べているが、

ていたので、真珠採取船が 400 隻から 500 隻操業していたとすると、潜水夫は 2800 人から 4000 人程度いたことになる。フェデリチ、リンスホーテン、「ホルムズ王統史抄訳」が述べている数字は整合性がある。

「ホルムズ王統史抄訳」によると、大規模採取期の一過性の村には 5 万から 6 万人が集まったので、潜水夫たちの 10 倍以上の商人や他の人々が来ていたことがわかる。こうした人々には真珠商ばかりでなく、食料品や雑貨を売る小売商、その他の商人、大道芸人、見物客なども含まれていた。17 世紀のジョアン・リベイロによれば、商人たちは「金や銀の延棒、精錬した金や銀」(*ouro, prata em barras e lavrada*)をはじめ、宝石、琥珀、香水、絨毯など、あらゆる商品を持参していた¹³⁸。大規模採取の大量の真珠が金や銀で購入され、物々交換されたことが明らかになる。1 個か 2 個真珠を所持している売り手もここに来れば、簡単に真珠を換金することができた。サイレント・バーゲニングによる相対取引で莫大な金銀が動いた。「ホルムズ王統史抄訳」は、大規模採取地における真珠の取引は毎年「黄金 150 万以上」だったと述べている¹³⁹。こうした 16 世紀・17 世紀の記録から、真珠の大規模採取とその取引は、ヒトの移動を促進し、真珠が金や銀などで取引される巨大な経済活動であったことがわかる。

3.4 ポルトガル艦隊の出動と排他的漁業権の確立

次に、マンナール湾の真珠の大規模採取時におけるポルトガル植民地政府とポルトガル艦隊の役割について見ておきたい。真珠の大規模採取は、キリスト教徒の潜水夫だけでなく、マンナール湾沿岸部各地に暮らす宗教の異なるタミル系真珠採り潜水夫が蝟集した。それゆえ、彼らの間で海域利用の争いがあった。さらに、大規模採取の時期にはパラヴァスなどの潜水夫を拉致しようとするインドの現地政治勢力や海上商人の動きも活発化した。パラヴァスは代替のきかない潜水労働力であり、陸地ではマドゥライのナーヤカ勢力などに狙われ、海上ではマーッピラなどがパラヴァスの拉致を盛んに試みた。こうした状況に対処するため、ポルトガルには軍事活動が必要であった。

フェデリチの報告によると、真珠採取期には武装した 3~4 隻のポルトガルのフスタ船が、キリスト教徒の漁夫たちを海賊から守るために巡航していた。『ポルトガル王室の各都市、各要塞の報告書』は、ポルトガル植民地政府はマンナール島長官を置き、その沿岸部と真珠採取 (*pescaria*) を「キリスト教徒に有利になるよう」(*em favor dos Christaões*) 防衛するために、「国王の費用で」(*a custa da fazenda Real*)、8 隻の櫂付きのナヴィオの艦隊を

フェデリチの報告と照らしても、すべてがそのような大型船ではないはずである。大型船はアラブ系船主の船の可能性が高い。

¹³⁸ João Ribeiro, *Fatalidade histórica da ilha de Ceilão* (Lisbon: Publicações Alfa, 1989), p. 56.

¹³⁹ Teixeira, ed. and trans., “A Short Narrative of the Origin of the Kingdom of Harmuz,” p. 179. テイシェイラは、「黄金 150 万以上」の貨幣単位を述べていないが、クルザドまたはパルダウドと考えられる。

配備している、と述べている¹⁴⁰。『ポルトガル王室の各都市、各要塞の報告書』が述べる櫂付きのナヴィオは、フスタ船であり、フェデリチの時代から船の数が 8 隻に増えていることがわかる。ポルトガル人は、櫂走できる軍船で艦隊を編成し、キリスト教徒のパラヴァスやカレアスを護衛し、排他的に彼らに真珠採取を行わせていたことがわかる。16 世紀末のリンスホーテンも、セイロン島とコモリン岬の間では多くの真珠が採れるため、ポルトガル国王は真珠採取を監視する長官を兵士とともに配備していると記し、17 世紀半ばのフランス人宝石商ジャン・バプティス・タベルニエは、真珠採取の時期はマラバリー勢力が武装した船で現れ、漁夫の拉致を試みるため、ポルトガルは彼らを保護していたと述べている¹⁴¹。

こうした一連の記述から、真珠の大規模採取とは、ポルトガルの植民地政府が資金を拠出してポルトガル艦隊を編成し、その艦隊に潜水夫を保護し、真珠採取を防衛させる国家的事業の水産業であったことが判明する。つまり、ポルトガル植民地政府は、軍事力を背景に優良な真珠漁場をキリスト教徒に独占させるという排他的漁業権を主張したのである。真珠漁場のある海域は、現代の海洋法で規定される「排他的経済水域」であった。ただ、その海域支配は恒常的なものではなく、真珠の大規模採取の時期に限られていたことに留意すべきである。

一方、大規模採取の時期に現れるイスラーム教徒やヒンドゥー教徒の潜水夫や真珠採取船については、ポルトガル植民地政府は彼らすべてを排斥することはできなかった。したがって、後述するように、彼らには真珠採取税を課し、真珠採取自体は認める方針を採っていた。

以上、見てきたように、マンナール湾における真珠の大規模採取は、ポルトガル植民地政府やマンナール島長官、ポルトガル艦隊が関与する水産事業であり、「官・軍共同体事業」であったことが判明する。真珠採取の労働力であるパラヴァスやカレアスの潜水夫たちは、イエズス会の管理下にあった。したがって、ポルトガルの大規模真珠採取は労働者管理も含めると、「官・軍・宗教共同体による水産業」であったことが明らかになる。マンナール湾の真珠は、国家と海軍、宗教の関与によって、キリスト教徒となった現地潜水夫たちを労働力とする生産体制で採取されていたのである。ポルトガル海洋帝国にとって、海域とは海底から富を引き出すための場であった。マンナール湾における真珠の大規模採取は、海上交通の舞台としてのみ海域を見てきたインド洋海域史研究に、新たな視点をもたらすのである。

¹⁴⁰ “Livro das cidades, e fortalezas,” fol. 52 v.

¹⁴¹ Linschoten, *Itinerario*, vol. 2, p. 161 (chap. 84); リンスホーテン (岩生他訳) 『東方案内記』、539 頁 ; Jean-Baptiste Tavernier, *Travels in India*, trans. V. Ball (1676; Lahore: Al-Biruni, 1976), vol. 2, pp. 118-9.

3.5 真珠の大規模採取とポルトガル人の収益

真珠の大規模採取は、海から富を大量に引き出す最前線だった。この真珠の生産現場には、ポルトガル植民地政府の官吏、マンナール島長官、ポルトガル艦隊の兵士、イエズス会の聖職者なども赴いていた。ポルトガル海洋帝国としては真珠を集めるのが課題であったが、彼ら自身は国王から与えられる一定額の給料だけで満足し、真珠という富が集められている生産現場からは何の利益も引き出さなかったのだろうか。これについて考察しておきたい。

1582年の「マンナール要塞行政規定書」によると、真珠の「大規模採取」(*pescaria grande*)と「小規模採取」(*pescaria pequena*)から得られる「大粒真珠の定額税」(*renda do Aljofar grande*)は、64000ファナンであった。その内6万ファナンが、こうした真珠採取からの税であり、残りの4000ファナンが、パラヴァスとカレアス、及びその代表がイエズス会を通して商務官に納めた税であった¹⁴²。この規定書からは6万ファナンがどのように徴収されたのか詳細は不明で、これらの定額税が、貨幣で支払われたのか、真珠で支払われたのかも定かではない。ただ、64000ファナンは真珠採取時の税であり、*renda do Aljofar grande*と呼ばれていることから、大粒のアコヤ系真珠で支払われた可能性も高い。パラヴァスやカレアスに課せられた4000ファナンは、真珠採取の許可税だったと考えられる。

一方、16世紀末のリンスホーテンは、次のような記述をしている。

一日の真珠採取が終われば、漁夫たち全員が集合し、長官、兵士、補助役、国王の監視者などの前で、その日、集めた真珠 (i. e. 真珠貝) を (船から) 取り出し、幾つかの山に分けていく、最初の一山は国王、次の一山は長官と兵士ら、三番目はイエズス会聖職者ら、そして最後の一山は潜水夫らに与えられた、この分配は多大な正義と公正をもって実施された¹⁴³。

リンスホーテンの記述は、マンナール湾真珠史の先行研究やポルトガルの対外拡張史の研究では、アルナチャラムやゴディーニョの研究を除くと、重要視されていない¹⁴⁴。しかし、フェデリチは採取した真珠貝は、一山ごとに山積みになされ、列になるよう並べていくと述べていた。また、19世紀のイギリス時代の真珠採取でも、採取した真珠貝を一山一山並べていき、それを三等分あるいは四等分する方式で植民地政府と潜水夫の取り分が決め

¹⁴² “Regimento pera a fortz. de manar pello Conde Dom fr. Mascarenhas,” in *Regimentos das fortalezas da India*, p. 359. 「小規模採取」という言葉は、9月から10月に行われる真珠の大規模採取に使われることがある。

¹⁴³ Linschoten, *Itinerario*, vol. 2, pp. 161-2 (chap. 84); リンスホーテン (岩生他訳) 『東方案内記』、541~542頁。リンスホーテンは真珠 (*perolen*) としているが、ここでは真珠貝と解釈すべきである。

¹⁴⁴ Arunachalam, *The History of the Pearl Fishery*, pp. 106-8; Godinho, *Les finances de L'état Portugais des Indes Orientales*, p. 110.

られていた¹⁴⁵。こうしたことを勘案すると、リンスホーテンの語る真珠貝の分配方法は信憑性があると考えられる。つまり、少なくとも16世紀末には、パラヴァスたちが採取してきた真珠貝は、一日ごとに所有者を明確にして四等分され、その後、天日干しされて真珠が取り出され、シーズンの終わりには国王、指揮官と兵士ら、イエズス会聖職者、潜水夫たちがそれぞれ真珠を獲得したのである。国王用とされた真珠の一山が、本当に国王の収入になったかどうかは定かではない。真珠採取にはインド総督も深く関わっていたが、リンスホーテンは彼の取り分について述べていない。したがって、国王用という名目で分けられた真珠貝の山をインド総督が得ていた可能性もある。1582年の「マンナール要塞行政規定書」によると、大規模採取からの *renda do Aljofar grande* は6万ファンナだったので、この金額が、国王用に取り分けられた真珠の総額を示している可能性もある。

いずれにせよ、ポルトガル人官吏や兵士たちは、イエズス会聖職者同様、生産現場に赴き、真珠採取に係わることで、真珠という現物を獲得した。彼らが入手した真珠は、ポルトガル本国に持ち帰ることもできたが、大規模採取に蝟集するアジア各地の商人たちに売却し、換金することもできた。リンスホーテンとフェデリチの記述を検討すれば、「官・軍・宗教共同体」で実施されるマンナール湾の真珠の大規模採取では、そのそれぞれの関係者が一定量の真珠を「公正」に得られるシステムがあり、彼らを潤したことが判明する。

真珠史の先行研究は、こうした真珠の大規模採取から得られたさまざまな収益を考察してこなかった。ポルトガル国王への *renda* は物納を含め、さまざまな形態があるが、先行研究は一次史料に断片的に現れる *renda* やその税額の数字を真珠採取からの収入すべてと見なしてきた¹⁴⁶。しかし、生産現場の真珠獲得の状況をよく見れば、ひとつの *renda* の税額だけが、真珠採取の収入すべてでないことがわかる。ポルトガル領インドの多くの関係者が、さまざまな形で真珠採取から利益を得たことを看過してはならない。

3.6 大規模真珠採取によるその他の収入

真珠の大規模採取は、宗教や民族を超えて多くの潜水夫や商人、見物客を集める季節行事であり、一大イベントである。ポルトガルのインド植民地政府は、人が集まる一大イベントからさらなる収入を得るため、さまざまな税を考案した。「マンナール要塞行政規定書」を参照すると、次のような税が明らかになる。

まず、イスラーム教徒とヒンドゥー教徒の潜水夫を対象にした人頭税である。ポルトガル艦隊は最良の漁場をキリスト教徒の潜水夫のために排他的に確保していたが、キリスト教徒以外の潜水夫たちの参入を阻止することはできなかった。タミルナドゥ南海岸のカーヤルパッティナムやキラカライには、ラッバイと呼ばれるタミル系ムスリムの潜水夫が数多く暮らしていた。また、ラーメシュワラム近郊にはヒンドゥー教徒の潜水夫も存在した。

¹⁴⁵ イギリス時代の真珠の分配については、山田『真珠の世界史』、110~111頁を参照。

¹⁴⁶ そうした例は、スブラフマニヤムの研究に見ることができる。Subrahmanyam, “Noble Harvest From the Sea,” pp. 143-4.

ポルトガル植民地政府は艦隊による軍事力を背景に、彼らからも人頭税を徴収した。まず、真珠採取船の船主が、何人のイスラーム教徒 (*mouro*) の潜水夫または何人のヒンドゥー教徒 (*gentio*) の潜水夫が乗っているかを申告した。これらの数は登録され、3人の高位の官吏が確認した。イスラーム教徒の潜水夫には一人当たり 5 パルダウ、ヒンドゥー教徒の潜水夫には一人当たり 2 パルダウが課せられ、真珠採取の終了後に、その金額が徴収された¹⁴⁷。リンスホーテンは、マンナール湾の真珠採取には 3000 人から 4000 人を超える潜水夫が従事することを述べていた。おそらくその何割かがムスリムやヒンドゥー教徒の潜水夫であり、人頭税だけでもかなりの収入になったことがうかがえる。

「マンナール要塞行政規定書」によると、ポルトガル植民地政府は、*renda do aripo* という税も考案していた。*aripo* とは「ふるいにかける」という意味で、「落ち穂拾い税」とでも呼ぶべき税である。これは、採取した真珠貝を積み上げ、天日干ししていた囲いから真珠貝を取り出した時、こぼれた真珠を拾うための許可を得る登録税であった。「落ち穂拾い税」は競売によって事業者が決められた¹⁴⁸。

さらに *renda de bolça* (取引税) や *renda de boticas do bazaar* (出店税) も存在した。大規模採取地には多くの真珠商やさまざまな商人たちが蝟集したが、*renda de bolça* は真珠採取地で取引するために商人たちが払う税である。大規模採取地では多くの人々に食糧などを供給するバザールの設置が不可欠であったが、*renda de boticas do bazaar* はそのバザールに出店するための税であった¹⁴⁹。

真珠の大規模採取から利益を引き出そうとしたのは、ポルトガル人だけではなかった。真珠獲得の権利を強く主張していたのが、マドゥライのナーヤカであった。16 世紀後半になると、マドゥライのナーヤカ政権が、パラヴァスの集落を除くタミルナドゥ南海岸の大部分を支配下に置くようになり、ポルトガルも彼の主張に配慮せざるを得なくなった。テイシェイラは、マドゥライのナーヤカが大規模採取における一日分の収穫を得ていたと述べている¹⁵⁰。この一日分の真珠貝がどのような潜水夫が採取したものかは定かではない。

マドゥライのナーヤカは、大規模真珠採取後の真珠取引にも関与した。大規模採取が終了すると、その後の真珠取引はトゥティコリンに移動した。テイシェイラによると、ナーヤカはトゥティコリンに *pataré* という取引所を作り、彼が任命した仲買人を派遣し、真珠取引に課税した。真珠の売り手からは 4 パーセントの取引税を徴収するが、買い手には課

¹⁴⁷ “Segundo regimento da fortz. de manar,” in *Regimentos das fortalezas da India*, pp. 483-4; Abeyasinghe, *A Study of Portuguese Regimentos on Sri Lanka at the Goa Archives*, pp. 5, 7; Silva, “The Portuguese and Pearl Fishing,” p. 26. シルヴァは *mouro* を「非キリスト教徒 (non-Christian)」、*gentio* を「キリスト教徒」と訳しているが、*mouro* は「イスラーム教徒」、*gentio* は「異教徒」、すなわち「ヒンドゥー教徒」と訳するのが適切である。

¹⁴⁸ “Segundo regimento da fortz. de manar,” in *Regimentos das fortalezas da India*, p. 479; Abeyasinghe, *A Study of Portuguese Regimentos*, p. 5.

¹⁴⁹ Abeyasinghe, *A Study of Portuguese Regimentos*, p. 5.

¹⁵⁰ Teixeira, ed. and trans., “A Short Narrative of the Origin of the Kingdom of Harmuz,” p. 178.

税しなかった。*pataré* 以外でなされる密輸も少なくなかった¹⁵¹。そもそも真珠の取引は、サイレント・バーゲニングで実施されるものである。

マドゥライのナーヤカばかりでなく、環マンナール湾岸部の他の政治勢力にとってもマンナール湾の真珠権益は彼らの重要な関心事であった。『ポルトガル王室の各都市、各要塞の報告書』は、セイロン王やジャフナ王も真珠採取権を主張していると述べている¹⁵²。

真珠の大規模採取は、インド世界、インド洋海域世界の多くの人々を招来し、海から高価な真珠が水揚げされる伝統的な季節行事である。マンナール湾岸の現地の政治勢力はそのことを理解しており、彼らも富の分配に与りたかった。そうした中、もっとも優位な立場にいたのは、タミルナドゥ南海岸とマンナール島間の海域を支配したポルトガル海洋帝国で、彼らは真珠の生産現場からさまざまな利益を引き出したのである。

3.7 新たな真珠集散地の誕生

「マンナール湾真珠生産圏」の生産面での考察では、真珠集散地の状況も見ておく必要がある。16世紀に新たな真珠集散地となったのが、トゥティコリンとゴアであった。どちらもポルトガル勢力の拠点として大きく発展した町である。

すでに検討したように、マンナール湾の大規模採取地では、マンナール島などの無人の海岸地帯に突如、真珠採取の集落が出現する。真珠採取期はそこが真珠の取引地になるが、真珠採取が終了すると、その後の真珠取引はおもにトゥティコリンで実施された。真珠の大規模採取は3月から4月に実施され、その取引は7月から9月、時には10月まで続けられた¹⁵³。さらにトゥティコリンには、大規模採取時の真珠ばかりでなく、タミルナドゥ南海岸の津々浦々で採取されている真珠も持ち込まれた。ポルトガル来航以前はカーヤルが真珠集散地であったが、16世紀はトゥティコリンが「マンナール湾真珠生産圏」の真珠の集散地になった。トゥティコリンの台頭の要因は、その地先の海域には「トゥティコリン真珠床」が広がる真珠採取地だった上、16世紀前半からポルトガルの行政府が置かれ、後半になるとイエズス会の拠点も移され、ポルトガルの政治・宗教的中心地となったからである。また、トゥティコリンは、マンナール島よりも、インド内陸部への真珠の輸送が便利だったからである。

インド西海岸のゴアも16世紀の新たなマンナール湾の真珠集散地として登場した。「マンナール湾真珠生産圏」は伝統的にインド西海岸に真珠の集散地を持ってきたが、16世紀にポルトガル海洋帝国がマンナール湾の制海権を掌握すると、その総督府のゴアが真珠集散地としての機能を持つようになった。ゴアはトゥティコリンからも真珠を集める「上位集散地」であった。ゴアがペルシア湾の真珠も集める「上位集散地」であったことは、すでに第4章で明らかにした。さらにゴアは、世界各地の名高い真珠の産地から真珠を集め

¹⁵¹ Teixeira, p. 179.

¹⁵² “Livro das cidades, e fortalezas,” fol. 52 v.

¹⁵³ Teixeira, ed. and trans., “A Short Narrative of the Origin of the Kingdom of Harmuz,” p. 179.

る「グローバル市場」に発展していくが、それについては、第 6 章で詳しく検討する。ゴアが真珠の大市場として発展した最大の理由のひとつは、ゴアがポルトガル海洋帝国の政治的・経済的・宗教的中心地だったからである。

こうして「マンナール湾真珠生産圏」では、ポルトガルの政治的・軍事的・宗教的優位を背景に、トゥティコリンとゴアという新たな真珠集散地が誕生し、真珠の漁場や大規模採取地や津々浦々の採取地から大量の真珠を集めるようになった。

ポルトガル来航以前、「マンナール湾真珠生産圏」の集散地として繁栄していたクイロンやカリカットは、16 世紀になると、その機能を失い、さらに港湾都市としての活況もなくなり、衰退していった。16 世紀後半のフェデリチは、コウラン（クイロン）にはポルトガル王が小さい要塞を置いている、異教徒の王がいて、小規模な取引が行われている、コショウも少しは輸出されている、と述べている¹⁵⁴。カリカットに関しては、リンスホーテンは、この町は没落して、昔日の賑わいと名声は失われ、今日では全マラバールでもっとも弱小になったと述べている¹⁵⁵。カリカットのザモリン勢力やムスリム勢力は、ポルトガルのタミルナドゥ南海岸進出に激しく抵抗し、マンナール湾の真珠の大規模採取期にはパラヴァスの拉致を試みてきた。そうした行為は、彼らの経済的繁栄がコショウ取引だけでなく、真珠取引にも拠っていたことを示している。しかし、彼らの努力は奏功せず、ポルトガルの台頭によって、マンナール湾の真珠を集める機能は次第に失われていった。ただ、タミルナドゥ南海岸にはカーヤルパッティナムやキラカライなどのムスリム系真珠採取の町があることから、ムスリム・ネットワークによる真珠の流通は存続していた可能性がある。ポルトガル海洋帝国の「マンナール湾真珠生産圏」支配は、真珠の集散地の変遷にも大きな影響を及ぼしたのである。

以上、本節では 16 世紀の紀行文や公式報告書の内容を分析することで「マンナール湾真珠生産圏」における真珠生産の実態について考察した。本論で明らかになったのは、次の五点である。第一に、イエズス会は、パラヴァスとカレアスを彼らに忠実なキリスト教徒の集団に仕立て上げたが、それによってイエズス会の活動には潜水労働者管理という仕事加わり、彼ら自身も真珠の獲得という経済的利益を得たことである。イエズス会の経済的活動は歴史学で関心の高いテーマのひとつであり、彼らが交易活動や不動産投資に力を入れてきたことが明らかにされてきた¹⁵⁶。しかし、本節は、イエズス会の経済活動には水産業の労働者管理があり、真珠獲得という物質的・経済的利益を得ていたことも解明した。本節の考察によって、イエズス会には真珠ゆえの宗教活動があったことが明らかになった。

本節が解明した第二の点は、マンナール湾における真珠の大規模採取時には、ポルトガ

¹⁵⁴ Federici [Fredericke], “The Voyage and Travell of M. Caesar Fredericke,” p. 395.

¹⁵⁵ リンスホーテン（岩生他訳）『東方案内記』、144 頁（第 11 章）。

¹⁵⁶ 高瀬弘一郎『キリシタン時代の研究』（岩波書店、1977 年）；高瀬弘一郎『キリシタン時代の外交と貿易』（八木書店、2002 年）；高橋『一六世紀イエズス会インド管区の経済構造に関する研究』；高橋『イエズス会の世界戦略』を参照。

ル植民地政府、ポルトガル艦隊、さらにイエズス会も加わった「官・軍・宗教共同体」が真珠採取に関与し、豊饒な漁場の排他的漁業権を主張することで、真珠獲得を目指したことである。国家、海軍、宗教の連携による水産業の実施という事実は、本論文で初めて明らかにされた。インド洋海域史研究をはじめ多くの歴史学の領域では、ポルトガルの軍事力による海上交通支配に関心が集まってきたが、本論は、16世紀には真珠ゆえに国家、海軍、宗教が連携する水産業が存在したこと、ポルトガル艦隊の役割には、現地のキリスト教徒潜水夫保護と排他的漁場権の保障があったことを論証した。

第三に、ポルトガル植民地政府は、多くの人を招来する季節行事的な真珠の大規模採取を牛耳ることで、ここにやってくるイスラーム教徒やヒンドゥー教徒の潜水夫、船主、商人たちにもさまざまな税を課し、多くの利益を得たことである。

第四に、本論は、環マンナール湾の政治勢力が真珠採取の富の分配に熱心であることも明らかにした。近代世界システム論の研究では、南アジア諸国の大半は大量の農業余剰の効果的な利用に関心を寄せていたために、海上貿易に対する関心は低かったというのが定説になっている¹⁵⁷。しかし、本論文によるマンナール湾の真珠の大規模採取の考察では、沿岸部の政治勢力は、海が生み出す真珠という富の重要性を認識しており、それを獲得するために、権利を主張し、潜水夫を拉致し、真珠採取へさまざまな形で関与していたことが明らかになった。南アジアの富は、農作物だけではなかったことが判明した。

第五に、ポルトガルの「マンナール湾真珠生産圏」支配によって、新たな真珠集散地のトゥティコリンとゴアが誕生し、従来のクイロンやカリカットは次第に凋落したことを明らかにした。

マンナール湾の真珠採取は、17世紀半ばにポルトガル時代が終わると、オランダによって支配されることになり、19世紀にはイギリスが牛耳ることになる。スブラフマニヤムは、マンナール湾の真珠史研究で、国家が真珠採取を管理したのはイギリス時代からだと主張し、オランダ時代からイギリス時代の真珠採取の変化を、*company* から *state* へという形で議論している。ポルトガル時代については、真珠採取の収益やパラヴァスへのイエズス会の布教などを簡単に述べるだけである¹⁵⁸。しかし、本章の検証によって、すでにポルトガル時代に軍事力を伴った国家の関与があったことが判明した。すでに16世紀にポルトガル海洋帝国は、「官・軍・宗教共同体」の水産業を実施していたのである。

第4節 真珠の希求地、希求者

本節では16世紀におけるマンナール湾の真珠の希求地、希求者について検討する。マン

¹⁵⁷ A. Das Gupta, "Indian Merchants and the Trade in the Indian Ocean," in *The Cambridge Economic History of India*, ed. T. Raychaudhuri and Irfan Habib (Cambridge: Cambridge University Press, 1982), vol. 1, pp. 421-2; R. パラット他 (原田太津男訳)「南アジアの編入と周辺化——一六〇〇—一九五〇年」イマニュエル・ウォーラステイン責任編集『世界システム論の方法』(藤原書店、2002年)、160~161頁。

¹⁵⁸ Subrahmanyam, "Noble Harvest From the Sea," pp. 153-69.

ナール湾真珠史の先行研究では、真珠の希求や流通は議論されていない。本論文では「伝統的希求地／希求者」、「新興希求地／希求者」という概念を使って、マンナール湾の真珠の希求の実態を考察する。「新興希求者」については、第4章の「ペルシア湾真珠生産圏」で分析した内容と重なる部分が多いので、まず「新興希求者」を簡単に検討し、その後、「伝統的希求地」、「伝統的希求者」を考察する。

4.1 新興希求地／希求者

16世紀の「マンナール湾真珠生産圏」を代表する真珠の「新興希求地」はゴアである。ゴアは「マンナール湾真珠生産圏」の真珠の「上位集散地」でもあった。ゴアには多くのポルトガル人が暮らしていたが、彼らは「ペルシア湾真珠生産圏」同様、「マンナール湾真珠生産圏」の「新興希求者」でもあった。

ポルトガル人には、(1) 国王や王族、貴族などをはじめとする本国のポルトガル人、(2) インド副王や総督、ペスカリア長官やマンナール島長官などのポルトガル人長官、高級官吏などの植民地エリート、(3) 兵士、船員、一般官吏、商人など、赴任者や滞在者として来た一般身分のポルトガル人、(4) ポルトガル領インドでの永住を決意した民間ポルトガル商人、(5) イエズス会などの宗教関係者が含まれる。さらに、ヴェネツィア人など、ポルトガル人以外のヨーロッパ人も、マンナール湾の真珠の「新興希求者」だった。

ポルトガル国王が、インド洋海域世界の真珠の希求者だったことは、第4章で検討した。マンナール湾の真珠史研究で見えてくるのは、ポルトガル国王は最高権力者でありながら、遠いインドの真珠採り潜水夫の福利厚生に気を遣っていたことである。国王自身が、真珠を獲得するには、潜水夫の協力が欠かせないことを理解していたのである。インド副王や総督などの植民地エリートも、ポルトガル国王と同様であった。すでに検討したように、後にインド総督になるソウザが、1538年のヴェダライの戦いの後、イスラーム教徒が所有する漁船を奪って、パラヴァスに与えたことは、示唆的である。ポルトガル領インドの植民地エリートたちも、マンナール湾の真珠の「新興希求者」であった。

兵士、船員、一般官吏、商人など、赴任者や滞在者として来た一般身分のポルトガル人も真珠の「新興希求者」になった。実際、マンナール湾の真珠は、大規模採取期には長官や兵士たちにも分配されていた。

民間ポルトガル商人は、真珠を輸出品など、投資目的で利用した人々である。彼らはトゥティコリンにも居住していたが、主要な居住先はゴアであった。民間ポルトガル商人の真珠の輸出については、第6章で改めて検討する。

マンナール湾の真珠の「新興希求者」として特筆すべき集団が、キリスト教聖職者である。聖書が真珠を重視する以上、イエズス会ばかりでなく、他の宗派も真珠の獲得に高い関心を示していた。17世紀初めのフランス人旅行者のフランソワ・ピラールは、「ゴアにあるすべての教会と修院は壮麗に作られている、真珠と宝石をちりばめた金製銀製の聖遺物

品がもっとも豪華に備え付けられ、飾られている」と述べている¹⁵⁹。真珠は、祭祀用の道具や置物、キリストの磔刑像の他、聖職者の儀式用の豪華な衣服などを飾り、個人用の十字架やロザリオなどにも使われた。彼らの希求形態は、退蔵であるが、個人的な投資目的で真珠を集める聖職者も少なくなかったと考えられる。

このように、ポルトガル人の真珠の希求形態は、その立場によってさまざまであったが、16世紀の「マンナール湾真珠生産圏」は新たな希求者を得たのである。

4.2 伝統的希求地1： インド全土

マンナール湾の真珠の「伝統的希求地」は、インド全土である。タミルナドゥ南海岸はアコヤ系真珠の採取地であるが、それ以外のインドの地域は、窓貝真珠などの海産真珠や淡水産真珠など、二級品の真珠が採れるに過ぎなかった。ただ、そうした真珠が採れるがゆえに、インドの人々は、丸く、強い光沢をもつアコヤ系真珠の価値を熟知しており、マンナール湾の真珠に強い憧れと執着があった。タミルナドゥ南海岸を除くほとんどすべてのインドの地域が、真珠の「伝統的希求地」であった。

紀元前からインド東南部を支配してきたパーンディヤ朝は、コルカイとその後身のカーヤルを中心に真珠採取を行い、マンナール湾の真珠をこの王国の重要な輸出品としてきた歴史がある。ただ、彼ら自身もマンナール湾の真珠の希求者であった。首都マドゥライには大量の真珠がもたらされていた。良質で大粒の真珠は、国外への持ち出し禁止で、パーンディヤ王に献上する決まりになっていた¹⁶⁰。16世紀後半になると、マドゥライを拠点とするナーヤカ政権が誕生し、タミルナドゥ南海岸部の大半を支配するようになったが、先述したように、このナーヤカの真珠獲得の意欲は強く、典型的な「伝統的希求者」となっていた。

16世紀のインド内陸部のデカン地方では、第4章で見たように、ヴィジャヤナガル王国が真珠の輸入を国是としていた。この王国の北方にはムスリムの諸王国が存在しており、さらにその北部ではムガル帝国が強大化しつつあった。ムガル帝国では倉庫に真珠が蓄えられていたことが報告されている¹⁶¹。インド内陸部の諸王国も、真珠の「伝統的希求者」であった。

ベンガル地方やカンベイにも、ムスリム政権が誕生していたが、こうした地域もマンナール湾の真珠の「伝統的希求地」であった¹⁶²。フェデリチは、大規模採取が終わり、天日干しにしていた真珠貝から真珠が取り出されると、真珠のエキスパートのチェッティ商人

¹⁵⁹ François Pyrard, *The Voyage of Francois Pyrard of Laval, to the East Indies, the Maldives, the Moluccas and Brazil*, trans. Albert Gray (1888; New York: Cambridge University Press, 2010), vol. 2, pp. 61-2.

¹⁶⁰ ポーロ他 (高田訳) 『世界の記』、445頁、451頁。この情報はフランク・イタリア語版とセラダ手稿本に掲載されている。

¹⁶¹ Pyrard, *The Voyage of Francois Pyrard of Laval*, vol. 2, p. 251.

¹⁶² Donkin, *Beyond Price*, p. 167.

が、真珠を四つに分類したと述べている。彼によると、最良の丸い真珠は「ポルトガルのアイア (*aia*)」と呼ばれ、ポルトガル人が購入した。二番目に良質の真珠は「ベンガルのアイア」、三番目の真珠は「カナラのアイア」、品質が一番悪い真珠は「カンベイのアイア」と呼ばれた¹⁶³。カナラは、デカン地方のことである¹⁶⁴。フェデリチが語る分類表現により、マンナール湾の真珠は、ポルトガルやデカン地方の需要だけでなく、ベンガル地方やカンベイにおいても大きな需要があったことがわかる。ベンガルはチャンク貝を使った螺鈿制作が盛んであり、真珠の加工も行われていたと推定できる¹⁶⁵。カンベイは真珠の「加工集散地」である。ベンガルやカンベイで制作された真珠製品は、インド各地で希求された。

マンナール湾の真珠は、その地理的近さからインド全土に知られており、インド全土が真珠の「伝統的希求地」だった。真珠の加工地でもあったベンガルやカンベイでは真珠は再輸出されていたが、それ以外のインドの多くの地域では、真珠は持ち出し禁止の財宝として退蔵された。インド世界は、乾いた大地が水を吸収するように真珠を欲する希求地であり、真珠は慢性的に供給不足であった。こうした希求の分析によって、インド全土がいかに深くマンナール湾の真珠と係わってきたかがわかる。「マンナール湾真珠生産圏」では真珠の希求においてインドという民族性がきわめて強く出る特徴があった。

4.3 伝統的希求地 2： 中国

中国もマンナール湾の真珠の「伝統的希求地」である。中国では淡水産真珠とトンキン湾の合浦や海南島の海域でアコヤ系真珠が採取されていたが、それだけでは真珠の供給は十分ではなかった。むしろ、中国の諸王朝は淡水産真珠の受容の伝統があるために、インドの諸王朝同様、強い光沢を放つインド洋海域世界のピンクターダ属の海産真珠の獲得に関心を示し続けていた。宋代の「互市舶法」では、中国では金、銀、銅銭、絹、瓷器などを輸出して、その見返りに香薬、犀角、象牙、珊瑚、真珠、瑪瑙等を輸入することが定められていた¹⁶⁶。インドの商人も中国の需要を理解しており、真珠を積極的に輸出していた。マルコ・ポーロは、泉州の港にはインドの船が多くの商品や高額品、高い価値の宝石、多くの「厚みのある良質な真珠」 (*perles e groses e bonnes*) を積んで寄港してくると述べている¹⁶⁷。また福州の港にもインドの船が数多く寄港し、真珠や貴石の取引が盛んである

¹⁶³ *The English Voyages*, ed. Hakluyt, vol. 5, pp. 395-6. 「アイア」については、文脈から真珠の品質を示す表現だと思われるが、詳細は明らかではない。

¹⁶⁴ カナラ地方については、ジョアン・デ・パロス (生田滋他訳) 『アジア史 (一)』 (岩波書店、1980年)、403~404頁；リンスホーテン (岩生他訳) 『東方案内記』、356~359頁 (第38章) を参照。

¹⁶⁵ ベンガルの螺鈿制作は、Orta, *Colóquios dos simples e drogas da Índia*, vol. 2, pp. 123-4 を参照。

¹⁶⁶ 中嶋敏編『宋史食貨志譯註 (六)』 (東洋文庫、2006年)、漢文 88~90頁 (卷一百八十六食貨下八)、訳文 413~415頁。

¹⁶⁷ ポーロ (高田訳) 『世界の記』、389頁、391頁、661頁。この内容は、フランク・イタリア語版とセラダ手稿本にある。原文はフランク・イタリア語版による。

ことを伝えている¹⁶⁸。

このように、中国はマンナール湾の真珠を伝統的に輸入してきたが、16世紀においても同様であった。16世紀のスペイン人聖職者メンドーサは『シナ大王国誌』の中で「マナール（マンナール）はチナ国とは別の国で、ここからチナ国に大量の真珠が送られている」（長南実他訳）と述べている¹⁶⁹。マンナールの真珠は、中国に向かっていたのである。中国への真珠の輸出はこれまでアジア商人が担ってきたが、16世紀の「マンナール湾真珠生産圏」の真珠の生産はポルトガルが支配していたため、民間ポルトガル商人も積極的に中国に真珠を輸出したと推定できる。

後の時代になるが、18世紀前半の中国において、中国皇帝が海外産の真珠を欲し、西洋人との交易でそれを得ようとしていたことがわかる上諭が残っている。乾隆帝が広東の税関に宛てた1747年9月12日の上諭では、今回の進貢物は平常のものであるので、今後は上等な真珠（上好的珠子）や宮中に少ない西洋のガラス器・琺瑯器などを幾つか買い求め、（平常のものを買って国費を）浪費しないようにとの指示がなされている¹⁷⁰。この上諭の内容によっても、中国が真珠の「伝統的希求者」であること、真珠はヨーロッパ人の中国への輸出品になっていたことが明らかになる。

以上、真珠の「新興希求者」、「伝統的希求地」、「伝統的希求者」を検討した。インド洋海域史やポルトガルの対外拡張史、さらにグローバル経済史研究の領域の通説は、すでに第4章で検討したように、ヨーロッパは、アジアのスパイス、絹、陶磁器といった商品に対抗できる商品を持ち合せておらず、アジアに対して唯一提供できたのが銀であったというものである¹⁷¹。しかし、ポルトガル植民地政府は「官・軍・宗教共同体」でマンナール湾の真珠の生産を行っていた。その真珠は、アジアを中心に形成されたポルトガル海洋帝国の代表的な物産であった。16世紀のポルトガルは、インド世界や中国世界で大きな需要のある商品の生産に関与していたのである。銀のみをヨーロッパが提供できる商品とする先行研究の議論は、見直す必要がある。

第5節 真珠の流通

本節では、「ハブ・アンド・スポーク交易」の概念を使って、マンナール湾の真珠の流通を考察する。16世紀の「マンナール湾真珠生産圏」ではトゥティコリンとゴアが主要な集

¹⁶⁸ ポーロ（高田訳）『世界の記』、384頁、388頁。フランク・イタリア語版とラムージオ版に記されている。

¹⁶⁹ メンドーサ（長南実他訳）『シナ大王国誌』、559頁。

¹⁷⁰ 藤原敬士『商人たちの広州——一七五〇年代の英清貿易』（東京大学出版会、2017年）90頁、104頁（注14）。

¹⁷¹ アンドレ・グンダー・フランク（山下範久訳）『リオリエント——アジア時代のグローバル・エコノミー』（藤原書店、2000年）、129頁、161~163頁、246~247頁、313~316頁；デニス・フリン（秋田茂・西村雄志編）『グローバル化と銀』（山川出版社、2010年）、51頁。

散地で、ゴアはトゥティコリンの「上位集散地」でもあった。また、真珠の大規模採取時の真珠採取地も多く、商人を集める集散地であった。ただ、アジア各地の真珠商の中には、辺鄙な場所にある大規模採取地に行くよりもトゥティコリンやゴアでの真珠の調達を好む者も少なくなかった。大規模採取地の真珠の流通とトゥティコリンの真珠の流通は同じ傾向にあるため、ここではトゥティコリンを中心として、真珠の流通を検討する。ゴアの流通については、第6章で検討する。

5.1 トゥティコリン・ゴア・ルート

トゥティコリンは、真珠の採取地であると同時に集散地で、ゴアはトゥティコリンの「上位集散地」でもあった。それゆえ、トゥティコリン・ゴア・ルートは、マンナール湾の多くの真珠が送られるもっとも主要なルートであった。

民間ポルトガル商人をはじめ、ポルトガル人官吏や兵士、イエズス会聖職者が、トゥティコリンや大規模採取地で獲得した真珠はまずゴアに送られた。真珠はゴアで留まり、退蔵される場合とゴアからさらに各地に輸送される場合があった。輸送先には、ヨーロッパやインド内陸部、ホルムズ、カンベイ、中国などがあり、他の多くの地域とも結びついていた。先述したように、ゴアにおける真珠の流通は第6章で検討する。

5.2 トゥティコリンからインド全土

タミルナドゥ南海岸を除くインド全土は、真珠の「伝統的希求地」である。それゆえ、トゥティコリンをハブとする真珠の流通網は、陸上輸送や海上輸送によってインド各地、各方面と結ばれていた。主要なルートは、(1) 陸路によるインド内陸部ルート、(2) コロマンデル海岸・インド内陸部ルート、(3) ベンガル・ルートなどである。

陸路によるインド内陸部ルートは、真珠をマドゥライなどのタミルナドゥ内陸部に運ぶルートである。マドゥライは、パーンディヤ朝の首都だった都市で、この王朝の外港だったカーヤルとは結びつきが強く、もともと真珠の重要な希求地だった。16世紀後半になると、マドゥライには真珠獲得に熱心なナーヤカ政権が誕生したため、陸路によるトゥティコリン・マドゥライ・ルートは一層重要性を増すことになった。

コロマンデル海岸・インド内陸部ルートとは、トゥティコリンからコロマンデル海岸の港までは海上ルートであるが、そこから先は陸路で旧パーンディヤ朝や旧チョーラ朝の版図だったタミルナドゥ州やアンドラ・プラデシュ州のインド内陸部に到るルートである。こうしたルートで真珠はヴィジャヤナガル王国の版図にも運ばれていた。コロマンデル海岸の主要な港にはネガパタンやプリカットなどがあった。

トゥティコリン・ベンガル・ルートでは、真珠は主に海上ルートで運ばれた。ベンガルは真珠の希求地であると同時に、「加工集散地」でもあった。一方、カンベイは、ベンガルと並ぶ真珠の「加工集散地」で、ポルトガル来航以前はカーヤルとの交易があったが、16世紀にゴアが台頭すると、トゥティコリンよりもゴアとの関係を深めるようになった。

一方、16世紀に停滞していたのが、マラバル・ルートである。ポルトガル来航以前、カリカットやクイロンなどのマラバル海岸の港湾都市は、「マンナール湾真珠生産圏」の真珠の「上位集散地」で、カーヤルなどのタミルナドゥ南海岸と強固な真珠の流通ネットワークを形成していた。しかし、カリカットのザモリンやマラバルのムスリム海上商人マーッピラは、ポルトガルの「マンナール湾真珠生産圏」支配に強く反発し、トゥティコリン・マラバル・ルートはあまり発展しなかった。マンナール湾の真珠は、インド西海岸のゴアに向かったのである。

このように、「マンナール湾真珠生産圏」の真珠の流通ネットワークは、トゥティコリンをハブとして、陸路や海路でインド各地へと広がっていた。その大きな傾向は、国際的というよりも、インド各地と強い結びつきがあり、インドという民族性が強く出る特徴があった。まさにインドの大きな真珠需要を反映していた。こうした真珠の流通を担った代表的な商人は、タミルナドゥ南海岸を拠点とする真珠商チェッティだった。彼らはもともとコロマンデル海岸出身であり、旧パーンディヤ朝や旧チョーラ朝の版図だったインド内陸部への真珠の輸送や取引を担っていたと推測できる¹⁷²。チェッティ以外には、インドの各地から来た現地商人も、トゥティコリンで真珠を購入し、真珠を出身地にもたらした。

5.3 ムスリム・ネットワーク

ヨーロッパの一次史料からは見えてこない真珠交易のムスリム・ネットワークについても考察しておく必要がある。先述してきたように、16世紀のタミルナドゥ南海岸では真珠採り潜水夫の集落すべてがポルトガルの傘下に入った訳ではなかった。ムスリム系真珠採り集落のカーヤルパッティナムとキラカライなどが存在し、ムスリム系潜水夫のラッバイやムスリム系海上商人マラッカーヤルが暮らしていた。カリカットなどのあるマラバル海岸は、ポルトガルに敵対するマーッピラ海上商人の拠点であった。こうした海上商人によって、マンナール湾の真珠は、アデンなどの、ポルトガル支配に属さない主要な都市に供給されていたと考えられる。アデンは、16世紀中葉、オスマン・トルコの支配下に入った。もともと紅海の伝統的な真珠集散地であり、メッカやメディナなどのヒジャーズ地方、カイロやアレクサンドリアのエジプトなどを真珠の輸出先としていた。したがって、ラッバイが採取したマンナール湾の真珠は、イスラーム・ネットワークにより、ヒジャーズ地方やエジプト方面、さらにオスマン・トルコに向かったと考えられる。

以上、マンナール湾の真珠の流通ネットワークを、「ハブ・アンド・スポーク交易」の概念を使って考察した。16世紀の真珠の流通の大きな変化は、ポルトガル人たちのトゥティコリン・ゴア・ルートが大きく発展したことであった。これまで西インドとの真珠交易は、イスラーム海上商人が牛耳るマラバル・ルートが主流であったが、ポルトガル支配下の

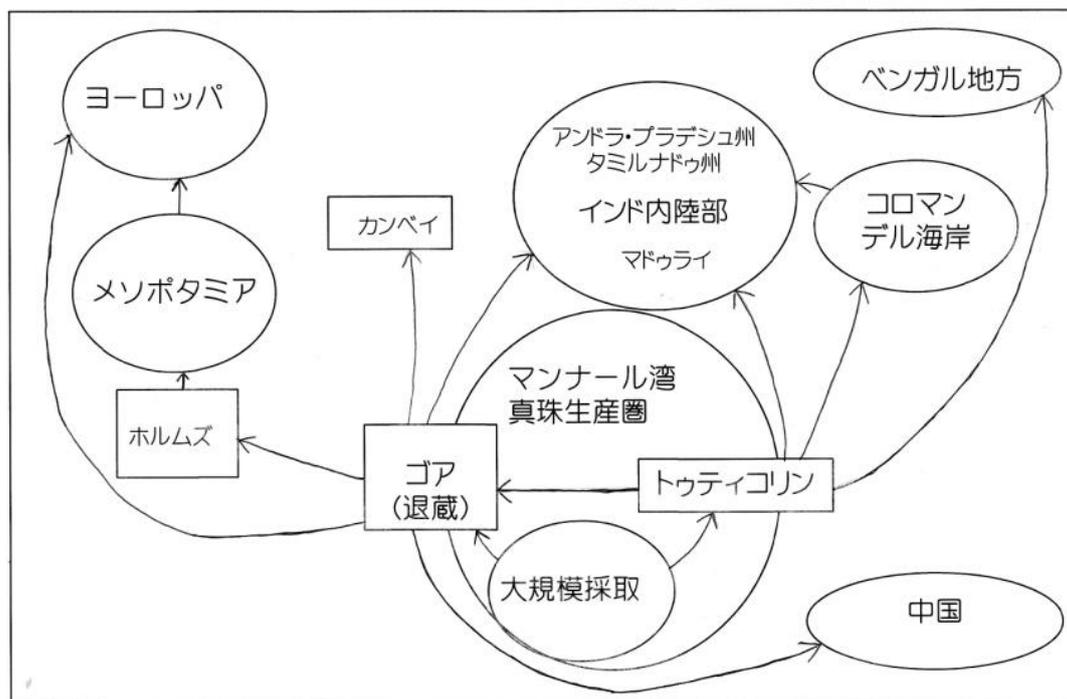
¹⁷² 20世紀初め、チェッティはタミルナドゥ南海岸で活躍する代表的真珠商であった。Kunz and Stevenson, *The Book of the Pearl*, pp. 121-2.

トゥティコリンとゴアを結ぶ流通ルートがそれらに取って代わった。

ただ、マンナール湾の真珠の流通はむしろ継続性、伝統性を示していた。16世紀においてインド各地の「伝統的希求地」は存続しており、マンナール湾の真珠は陸上輸送や海上輸送でそうした地域に運ばれた。真珠の流通では、チェッティ商人の存在が大きかった。「マンナール湾真珠生産圏」における真珠の生産はタミル人の独壇場だったが、真珠の流通でもタミル系のチェッティ商人などが優勢であり、マンナール湾の真珠の生産及び流通では民族性が際立っていたことが明らかになった。こうした現地商人が担う真珠の流通は、ポルトガル来航以前も、来航以後も続く伝統的なアジア域内交易であった。ただ、ポルトガル人は「マンナール湾真珠生産圏」を政治的・軍事的・宗教的に支配することで、民族性の強い真珠の生産・流通に参入することに成功し、アジア域内交易の真珠取引の中心に位置するようになり、大きな存在感を示したのである。

以下の図1は、マンナール湾の真珠の「ハブ・アンド・スポーク交易」の概要である。

図1 マンナール湾の真珠の「ハブ・アンド・スポーク交易」



注： 図は、真珠の取引量ではなく、流通の方向を示すものである。

小括

本章では、アコヤ系真珠の大産地のひとつであるマンナール湾とその湾岸世界に焦点を当て、ポルトガルの進出の経緯とその特徴、及び真珠の生産、希求、流通を分析した。

第1節では、16世紀初頭のマンナール湾岸世界には「真珠生産圏」が形成されていたこ

とを明らかにした。また、ポルトガル語一次史料の *aljofar* は、その文脈から勘案して、主にアコヤ系真珠を指していることが、本章でも確認できた。「マンナール湾真珠生産圏」の特徴として、真珠の潜水作業はヒンドゥー教徒、イスラーム教徒にかかわらず、タミル系潜水夫の独壇場になっており、タミル系民族の民族性がきわめて強いことが判明した。

第2節と第3節では、一国史を超えた広域俯瞰でポルトガルの進出経緯を検討し、彼らに関与した真珠採取業の実態を解明した。その結果、ポルトガルの政治勢力も、宗教勢力も、二大真珠床に近いマンナール湾岸の真珠採取地に沿うように進出し、真珠採り潜水夫をその支配の対象にしてきたことを明らかにした。16世紀のポルトガルの「マンナール湾真珠生産圏」への進出は、真珠ゆえの対外拡張であった。さらに、本論の考察は、「マンナール湾真珠生産圏」でのイエズス会の宗教活動は、社会の底辺で為政者の抑圧にあえぐ異教徒を人道的な動機から改宗していくというよりも、すでにキリスト教徒になっていた真珠取り潜水夫を信仰心の強い信者に再編し、彼らを維持・管理することが目的だったことを論証した。イエズス会は温情主義という方策によって潜水夫の絶対的帰依を勝ち取ったが、それはイエズス会、ひいてはポルトガル勢力が、彼らに協力的な真珠採取の潜水労働力を確保できたことを意味しており、イエズス会も真珠獲得という経済的な利益を得た。本論の考察は、真珠ゆえの宗教活動があったことを明らかにした。実際、真珠の産地へのイエズス会の進出は、この地の宗教的混在を一層促進することになった。一方、政治勢力にとってのマンナール島支配とは、インド本土とスリランカの間の実珠の採れる海域を彼らの版図と見なせることを意味していた。本節では、マンナール湾の実珠の大規模採取は、潜水夫の活動に加え、ポルトガル植民地政府、ポルトガル艦隊、イエズス会が関与する「官・軍・宗教共同体」によって実施される水産業であったことを論証した。このことは、海域を海上交通の場として議論してきたインド洋海域史に、海とは真珠という富を引き出す場であり、16世紀のポルトガル勢力は、国家、艦隊、宗教が一体となって真珠の生産に係わったという新たな事実を加えることになる。「マンナール湾真珠生産圏」は、ポルトガルの政治勢力にとっても、宗教勢力にとっても、真珠が採れる海域として経済的重要性、地政学的重要性があったのである。

第4節と第5節では、マンナール湾の実珠の希求と流通を考察し、16世紀にはトゥティコリン、ゴア、ポルトガル勢力が「新興希求地／希求者」として登場し、トゥティコリン・ゴア・ルートが重要性を増したことを示した。その一方、インド全土における真珠の希求と流通は、伝統性、民族性が強く、マラバール海岸の諸港湾都市の凋落を除いては、16世紀においてもその希求や流通形態は大きな変化はなかったことを明らかにした。そのことは、ポルトガル勢力は「マンナール湾真珠生産圏」を政治的・軍事的・宗教的に支配したことで、真珠のアジア域内交易で大きな存在感を示したことを明確にするのである。

これまでマンナール湾真珠史の先行研究は、ポルトガル勢力は、社会的・宗教的影響を除くと、マンナール湾の実珠採取に大きな変化をもたらさなかったと否定的な見解を示してきた。しかし、広域俯瞰とコモディティ・チェーン分析を取り入れると、ポルトガル勢

力は「マンナール湾真珠生産圏」支配及び「官・軍・宗教共同体」によって水産業に係わり、アジア垂涎の物産である真珠を獲得し、さらにその真珠ネットワークの中心にいたことが解明され、アジアにおけるポルトガルの存在意義に光を当てることになる。

第6章 16世紀のゴア——真珠の「グローバル市場」

はじめに

これまで本論文の第3章から第5章では、それぞれ「南米カリブ海真珠生産圏」、「ペルシア湾真珠生産圏」、「マンナール湾真珠生産圏」におけるヨーロッパの対外拡張の実態、真珠の生産、希求、流通の状況を考察してきた。その結果、スペイン帝国も、ポルトガル海洋帝国も、これらの「真珠生産圏」を支配下に置くことで、アコヤ系真珠を獲得したことが明らかになった。では、こうした「真珠生産圏」の集散地からさらにアコヤ系真珠を集める「上位集散地」は、16世紀に存在したのだろうか。その集散地は、世界と接続する真珠の「グローバル市場」と見なすことができるだろうか。

今日、「グローバル化」、「グローバル経済」、「グローバル商品」という概念を使って、諸地域がいかにつながり、いかに一体化したかを解明する歴史研究は、グローバルヒストリーやグローバル経済史の領域などの歴史学の大きな潮流である¹。ただ、そうした研究領域では、ガレオン貿易が始まった1571年以降あるいは17世紀以降に関心が集中しており、16世紀の研究はそれほど多くない²。また、こうした研究領域では、ひとつの商品の消費先への移動によるグローバル化のテーマに注目が集まっている³。その一方で、世界各地の産地からグローバルに商品を調達する市場の存在には関心が向けられてこなかった。

本章は、16世紀のポルトガル領インドの総督府だったゴアの真珠市場に焦点を当てることで、世界各地の産地からひとつの商品を集める「グローバル市場」の形成という、商品の拡散とは異なるグローバルな経済発展を考察する。また、この市場におけるバニヤン商人などの商人層を分析することで、グローバル化に寄与したアジアの商人の存在についても検討する⁴。さらに、バニヤン以外のゴアの真珠商やゴアを起点とする真珠の流通を考察することで、「グローバル市場」ゴアの歴史的意義を明らかにする。

1 「グローバル化」やグローバル経済の研究としては、アンドレ・グンダー・フランク（山下範久訳）『リオリエント——アジア時代のグローバル・エコノミー』（藤原書店、2000年、原著1998年）；デニス・フリン（秋田茂・西村雄志編）『グローバル化と銀』（山川出版社、2010年）；Van de Vries, “The Limits of Globalization in the Early Modern World,” *The Economic History Review*, new series, vol. 63, no. 3 (August 2010), pp. 710-33; 秋田茂編『アジアからみたグローバルヒストリー——「長期の18世紀」から「東アジアの経済的再興」へ』（ミネルヴァ書房、2013年）；ポメラント、ケネス／スティーヴン・トピック（福田邦夫・吉田敦訳）『グローバル経済の誕生——貿易が作り変えたこの世界』（筑摩書房、2013年）；島田竜登「史上初のグローバル・カンパニーとしてのオランダ東インド会社」羽田正編『グローバル・ヒストリーの可能性』（山川出版社、2017年）、287~303頁；秋田茂編『グローバル化の世界史』（ミネルヴァ書房、2019年）を参照。

2 D. フリンは、「旧世界」がガレオン貿易によってアメリカ大陸とつながった1571年をグローバル化の始まりと見なしている。フリン（秋田他編）『グローバル化と銀』、31~67頁。

3 ジョージ・ブライアン・スーザ（岡田雅志訳）「近世におけるグローバル商品と交易」秋田編『アジアからみたグローバルヒストリー』、118~147頁。

4 バニヤン商人については、第二節で検討する。

0.1 先行研究

真珠史の先行研究では、南米真珠史研究でも、ペルシア湾やマンナール湾の真珠史研究でも、真珠市場ゴアはほとんど取り上げられてこなかった。R. A. ドンキンは、17 世紀中葉のフランス人宝石商ジャン・バプティス・タヴェルニエの一節を抜粋し、ゴアには、ペルシア湾の真珠とマンナール湾の真珠がもたらされ、大きな真珠取引があったと述べているが、タヴェルニエの語るアメリカの真珠については言及していない⁵。R. カーターもタヴェルニエを参照し、ホルムズの真珠の目的地はゴアであったと述べているに過ぎない⁶。マンナール湾の真珠史研究ではその関心は真珠の生産に向けられているため、真珠の流通で重要な意味をもつゴア市場は議論されていない。それゆえ、真珠市場ゴアの歴史的意義を検討するのは、本論文が初となる。

インド洋海域史や南アジア史では、16 世紀におけるインド洋海域世界の商人に関する研究は盛んである。ただ、そうした研究の多くは、真珠商・宝石商として特質づけられる商人層がいることを認識していない。本論文は、16 世紀に台頭した真珠商・宝石商の代表がバニヤン商人であると考えている。しかし、グジャラート商人研究で著名な M. N. ピアスンの *Merchants and Rulers in Gujarat* (邦訳名『ポルトガルとインド——中世グジャラートの商人と支配者』) では、バニヤン商人が真珠商・宝石商であることは看過されている⁷。

I. ハビーブの“Merchant Communities in Pre-Colonial India” は、宝石商のバニヤン商人を考察しているが、彼が考察したバニヤン商人がたまたま宝石を扱っていたという認識で、バニヤン商人の顕著な職業が宝石業であるという理解はない⁸。しかし、真珠と宝石はアジア世界を代表する商品であり、真珠商や宝石商、それらの売買を重視する商人たちは数多く存在した。彼らの商業活動を考察する必要がある。

0.2 本章の研究手法と史料

本章は、世界各地の産地からひとつの商品を集める「グローバル化」に着目し、ゴア市場を取り上げる。これまでの章と同様に、本章でも、真珠の生態系的事実を取り入れ、*aljofar* を正しく解釈することで、議論を進める。本章で扱う一次史料の分析では、真珠の生態系的理解と *aljofar* の解釈が特に重要である。

本章で使用する主要な史料が、16 世紀のゴア在住者のガルシア・ダ・オルタのポルトガル語文献 *Colóquios dos simples e drogas da Índia* 『インドの薬草と薬物についての対話』

⁵ R. A. Donkin, *Beyond Price: Pearls and Pearl-Fishing* (Philadelphia: American Philosophical Society, 1998), p. 167.

⁶ Robert Carter, *Sea of Pearls: Seven Thousand Years of the Industry that Shaped the Gulf* (London: Arabian, 2012), p. 83.

⁷ M. N. ピアスン (生田滋訳) 『ポルトガルとインド——中世グジャラートの商人と支配者』 (岩波書店、1984 年、原著 1976 年)。

⁸ Irfan Habib, “Merchant Communities in Pre-Colonial India,” in *The Rise of Merchant Empires: Long-Distance Trade in the Early Modern World, 1350-1750*, ed. James D. Tracy (Cambridge: Cambridge University Press, 1990), pp. 371-99.

である⁹。この史料はすでに本論文で使用してきたが、当時の世界各地の真珠情報やゴア市場のグローバル性を理解する上でも重要な文献である。先行研究はこうした内容には着目してこなかった¹⁰。オルタの文献では *aljofar* と *perolas* が頻繁に登場するため、真珠に関する情報を得るには、ポルトガル語原文での解釈が不可欠である。第 2 章でも述べたように、オルタは 1534 年以來、30 年以上ゴアに暮らした医師であり、医薬や宝石を扱う貿易商でもあり、船舶所有者であった。オルタはヴィジャヤナガル王国やベンガルをはじめ、インド各地をひろく旅行して、さまざまな情報や植物、薬物を集める博物学者でもあった¹¹。したがって、オルタが語る真珠情報は、彼が真珠や宝石を売買する貿易商としての実体験から得られた信用できる内容である。

オルタ以外にも、16 世紀初めのトメ・ピレスやドゥアルテ・バルボザ、16 世紀末のヤン・ハイヘン・フォン・リンスホーテン、17 世紀初めのフランス人旅行者フランソワ・ピラールやタヴェルニエなどによる地誌や旅行記など、すでに本論文で使用してきた一次史料を使用する¹²。これらの史料は、どの内容に着目し、どう理解するかによって、16 世紀の真珠世界についての新たな解釈を可能にするものである。

0.3 本章の構成

第 1 節： 世界の真珠を集める「グローバル市場」

第 2 節： 真珠の「グローバル市場」の成立要因

第 3 節： ゴアの真珠商たち

第 4 節： ゴア起点の真珠の流通

⁹ Garcia da Orta, *Colóquios dos simples e drogas da Índia* (1895; Lisbon: Imprensa Nacional-Casa da Moeda, 1987); Garcia da Orta, *Colloquies on the Simples and Drugs of India*, ed. and trans. Clements Markham (London: Henry Sotheran, 1913). オルタと彼の著作に関する研究論集は、Palmira Fontes da Costa ed. *Medicine, Trade and Empire: Garcia de Orta's Colloquies on the Simples and Drugs of India (1563) in Context* (Farnham: Ashgate, 2015) を参照。この研究論集は、ゴアにおけるオルタの位置づけや彼の著作の特徴、インドの薬草などの考察が中心で、真珠や真珠市場ゴアについては考察されていない。C. マーカムの英訳本を参照している論考も少なくない。

¹⁰ Donkin, *Beyond Price*, pp. 27, 37, 110, 154, 260, 282, 302.

¹¹ 岩生成一他「解説」『東方案内記』（岩波書店、1968 年）、36 頁。

¹² Tomé Pires, *A suma oriental de Tomé Pires* (Coimbra: Imprensa de Coimbra, 1978); トメ・ピレス (生田滋他訳)『東方諸国記』（岩波書店、1966 年）; Duarte Barbosa, *Livro do que viu e ouviu no oriente* (Lisbon: Publicações Alfa, 1989); Duarte Barbosa, *The Book of Duarte Barbosa: An Account of the Countries Bordering on the Indian Ocean and their Inhabitants*, trans. the Royal Academy of Sciences at Lisbon and ed. Mansel Longworth Dames (1918-1921; Nendeln: Kraus Reprint, 1967); リンスホーテン (岩生成一他訳)『東方案内記』（平凡社、1968 年）; François Pyrard, *The Voyage of Francois Pyrard of Laval, to the East Indies, the Maldives, the Moluccas and Brazil*, trans. Albert Gray, vol. 2 (1888; New York: Cambridge University Press, 2010); Jean-Baptiste Tavernier, *Travels in India*, trans. V. Ball, 2 vols. (Lahore: Al-Biruni, 1976).

第1節 世界の真珠を集める「グローバル市場」

本論文は「南米カリブ海真珠生産圏」、「ペルシア湾真珠生産圏」、「マンナール湾真珠生産圏」を「三大真珠生産圏」と呼び、本節では16世紀のゴアが、これらの「三大真珠生産圏」から真珠を集める「上位集散地」であり、「グローバル市場」であったことを検討する。なお、本論文は「グローバル市場」を「新世界を含む地球規模の流通やヒトの移動によって、世界各地の産地からひとつの商品が集まる市場」と定義する¹³。

ポルトガル来航以前、インド洋海域世界の真珠集散地として機能していたのは、マラバール海岸の港市国家のカリカットやコーチン、クイロンなどであった。中でもカリカットは、おそらく当時最大の真珠市場として繁栄していた。しかし、16世紀になると、ポルトガルとの抗争によって凋落していった。カリカットに代わって、新たな真珠集散地となったのがゴアである。オルタの記述を中心に分析することで、ゴアに集まるさまざまな真珠について見ていきたい。

1.1 ゴアの真珠に関するオルタの記述

オルタは、1563年にゴアで上梓した『インドの薬草と薬物についての対話』の「対話 35 : *margarita*、すなわち *aljofar* について、及びチャング貝について」という見出しの章の中で、世界各地の真珠について説明している¹⁴。オルタの記述は、想像上の人物であるスペイン人のルアノとオルタとの対話形式となっている。要約すると、次のとおりである。なお、ここでは原文のニュアンスを残すため、*aljofar* と *perolas* は日本語には訳さず、そのまま使用した¹⁵。また、第5章ですでに引用した箇所も出てくるが、省かずに訳出した。

まずオルタは、*aljofar* に関して、それらの多くはバハレーン、カティーフ、ジュルファール、カマラーンで採れると説明している。他に *aljofar* が採れるところはあるか、というルアノの問いに、オルタは、(*aljofar* は)「数が多く、より厚みがある」と特徴を述べ、コモリン岬とセイロンの間で採れること、この漁場 (*pescaria*) は、(ポルトガル) 国王陛下のものであること、この漁場が依然として多く (の *aljofar*) を生み出すことができるのは、

¹³ 「グローバル化」の定義とその問題点については、フリン (秋田他編) 『グローバル化と銀』、20~21 頁、de Vries, “The Limits of Globalization,” pp. 710-5; 羽田正『グローバル化と世界史』(東京大学出版会、2018 年)、15~24 頁; 秋田茂「グローバル化の世界史」秋田編『グローバル化の世界史』、1~17 頁を参照。「国際化」の定義については、羽田、20 頁を参照。本論文では、「グローバル」とは、「新世界を加えた地球規模でのヒトやモノの動きやその状態」を指し、「国際的」、「国際性」とは、政治的、経済的、商業的分野などにおいて国家と国家、あるいは国民と国民との交流が進み、宗教や言語の違い、民族性が認識されている状態を指す。

¹⁴ Orta, *Colóquios dos simples e drogas da Índia*, vol. 2, pp. 119-24.

¹⁵ 序章でも述べたように、この書物の英訳者の C. マーカムは、*aljofar* に対応する英語として、“*pearls*”、“*seed pearls*”、“*aljofar*”という三つの語を使っている。Clements Markham, ed. and trans., *Colloquies on the Simples and Drugs of India* (London: Henry Sotheran and co., 1913), pp. 296-300. オルタの真珠記事は *aljofar* と *perolas* を区別して読まないで理解するのが難しい。

そこで働く 5 万人以上のキリスト教徒の信仰への情熱が費やされているからであること、このキリスト教世界 (*crisandade*) は、司教総代理のミゲル・ヴァスとフランシスコ師 (ザビエル) のおかげであり、今日、イエズス会の神父たちと助修士たちによって見守られ、庇護されていること、この *aljofar* は「より細かく、中には良質で、厚みのあるものもあるが、バハレーンやジュルファルのものほどの厚みはないことなどを語っている。さらに、オルタは、ボルネオには「大変肉厚であるが、それほど形のよくないもの」があり、同様に、中国にも「形のよくない」ものがある、と述べている。オルタは、ルアノの国王 (スペイン国王) が領有する大地や島々からヨーロッパに来るものについては、どれくらいの量が来るのだろうか、あなたの方が詳しいだろうと問いかけている。また、ペルーの著述者たちが、*perolas verdes* (緑の大粒真珠) があると語っても、自分は間違いとは思わないと述べ、その種類では他にも多くのものがあると語っている。オルタの問いに対し、ルアノは、先述の大地から多くの非常にすぐれた *aljofar* が来ること、商務官の彼の兄弟が、ここ (ゴア) で売るために運び、二回ほど財産を倍にしたと語っている。この後、オルタは、(ポルトガル領インドの) *aljofar* とインディアスの *perolas* を比較しており、ここ (ポルトガル領インド) から上がる *aljofar* は、「厚みがあり、丸く、まったく完璧である」と述べ、インディアスから来るものは、バロック (*barrocos*) であり、「形がゆがみ、丸くなく、死んだ色をしている」と語っている¹⁶。

このオルタの記述から、ゴアには、ポルトガルが支配したペルシア湾の真珠やマンナール湾の真珠だけでなく、ボルネオ、中国、インディアス (スペイン領アメリカ) からの真珠も来ていたことがわかる。オルタの語る真珠の多くは、当時、ゴアに集められていた真珠である。以下、それぞれの真珠について考察する。

1.2 ゴアに集まる真珠

(1) ペルシア湾の真珠

オルタは、バハレーン、カティーフ、ジュルファル、カマラーンの *aljofar* に言及している。バハレーン、カティーフ、ジュルファルは、「ペルシア湾真珠生産圏」の名高い真珠採取地で、カマラーン島は、ポルトガルが支配下に置いていた紅海の島である。これらの地点で採取できる真珠の多くは、アコヤ系真珠貝 (*Pinctada fucata/martensii/radiata/imbricata* sp.) の真珠であるが、クロチョウガイ (*Pinctada margaritifera*) の真珠が混ざっていた可能性もある。ただ、オルタは *aljofar* という語を使っていることから、多くのアコヤ系真珠がゴアに運ばれていたことが明らかになる。また、カマラーン島のアコヤ系真珠もゴアに来ていたことがわかる。

第 4 章で明らかにしたように、ゴアは「ペルシア湾真珠生産圏」のアコヤ系真珠の「上位集散地」であった。ピラールは、ホルムズからゴアに運ばれる商品の筆頭として、バハ

¹⁶ Orta, vol. 2, pp. 119-121. オルタの記述では *aljofar* や *perolas* は省略されていることが多いので、どちらを指しているのか、その文脈から考察する必要がある。

レーンやアラビア側のペルシア湾岸で採れる真珠を挙げていた¹⁷。オルタの記述によって、ペルシア湾からゴアへのアコヤ系真珠の動きが確認できる。

(2) マンナール湾の真珠

オルタの述べる、コモリン岬とセイロンの間で採取される *aljofar* は、ほとんどがアコヤ系真珠と推定できる。ゴアは「マンナール湾真珠生産圏」の真珠の集散地であり、「上位集散地」であり、マンナール湾の真珠との結びつきは強かった。

(3) ボルネオの真珠

オルタは、「大変肉厚であるが、それほど形のよくない」ボルネオの真珠があると述べている。オルタは真珠の語彙を示していないが、文脈から *aljofar* として言及されていることがわかる。

インドネシアやフィリピンなどの東南アジアの海域には、世界最大の真珠貝で、アコヤ真珠貝と同じピンクターダ属に属するシロチョウガイ (*Pinctada maxima*) が生息している。この真珠貝の真珠層は、分厚くなめらかで、美しい銀白色をしているため、螺鈿細工や工芸品、アクセサリーの製作に使われてきた。貝殻自体が目的で採取されてきた貝である。こうした真珠貝からごくまれに数センチはあるような大粒真珠や貝付き真珠が採れることがあり、それらは、往々にして、いびつな形をしていた。シロチョウガイの真珠は銀白色や金色が特徴的である¹⁸。真珠の大きさから考えると *perolas* に分類されてもいいが、真珠の色や光沢などから *aljofar* と見なされたのかもしれない。シロチョウガイの大粒真珠は数年に一度採れるか採れないかの偶然の産物だったため、東南アジアの海域では真珠採取業は中断があったり、続かないことが多かった¹⁹。この真珠の生産や流通の詳細な説明は今後の課題である。オルタの語るボルネオの真珠は、こうしたシロチョウガイの真珠であり、マラッカなどに集められ、ゴアに運ばれていたと推定できる。

(4) 中国の真珠

ゴアには「形のよくない」中国の真珠ももたらされていた。オルタはここでも真珠の語彙を記していないが、文脈から判断して *aljofar* である。

中国はもともとマンナール湾の真珠の「伝統的希求地」であり、民間のポルトガル商人が真珠を中国に輸出していることは、第 5 章で検討した。その中国による真珠の輸出とい

¹⁷ Pyrard, *The Voyage of Francois Pyrard of Laval*, vol. 2, p. 239.

¹⁸ シロチョウガイとその真珠については、白井祥平『真珠・真珠貝世界図鑑』（海洋企画、1994年）10~11頁、22~25頁を参照。東南アジア島嶼部の真珠貝と真珠の種類、今日の真珠養殖業の歴史については、George Frederick Kunz and Charles Hugh Stevenson, *The Book of the Pearl: Its History, Art, Science and Industry* (1908; New York: Dover Publications, 1993), pp. 212-21; 山田篤美『真珠の世界史——富と野望の五千年』（中央公論社、2013年）243~247頁、256~257頁を参照。

¹⁹ モルガ（神吉敬三他訳）『フィリピン諸島誌』（岩波書店、1966年）、325頁。

うオルタの言説は、理解するのが難しいが、実は中国は真珠の輸出国でもあった。

中国の華南地方からベトナム北部の海岸が面するトンキン湾は、アコヤ真珠貝 (*Pinctada fucata/martensii/radiata/imbricata* sp.) が大量に生息する海域で、「アコヤ系真珠五大産地」のひとつである。中国側では合浦や海南島が真珠の採取地として知られている。アコヤ真珠貝以外には、クロチョウガイやシロチョウガイも生息していたが、量はそれほど多くはなかった²⁰。合浦や海南島の海域で真珠採取の潜水労働を担っていたのは、^{たんみん}蟹民と呼ばれる船上居住者だった。合浦の真珠採取は、明王朝の官吏の厳しい監視下に置かれており、採取される真珠は官吏によって徴収されていた²¹。

16世紀半ばにトンキン湾を訪れたメンデス・ピントは、この海域の真珠税について語っている。彼によると、5カラット（直径9.01ミリ）以上の大粒真珠 (*perolas*) は三分の二を中国皇帝が徴収し、それ以下の大粒真珠は半分、真珠 (*aljofre*) は三分の一を徴収した²²。多くの真珠が皇帝用に徴収されていたが、それでも一定量は、蟹民の手元に残っており、こうした真珠が輸出に向けられたと考えられる。

16世紀初めのトメ・ピレスは、海南島で真珠 (*alJofar, aljofar*) が採取されていることを伝えており、ポルトガル人は早い段階で中国のアコヤ系真珠を知っていた²³。16世紀初めにマラッカで捕らえられたポルトガル人たちが書いた書簡には、中国人が真珠 (*aljofar*) をもって、マラッカに交易に来ていることが記されている²⁴。

17世紀初めのポルトガル人旅行者ペドロ・テイシェイラは、中国には *topo* と呼ばれるいびつな真珠があり、ポルトガル人はそれらをインドに輸出することで、莫大な財産を何度も築いたと述べている²⁵。*topo* 真珠の詳細は不明であるが、ポルトガル語の *topo* は英語の

²⁰ 中国の真珠については、Paul C. Southgate and John S. Lucas, *The Pearl Oyster* (Amsterdam: Elsevier, 2008), pp. 26-7 を参照。古代中国の真珠採取業については、Edward H. Schafer, “The Pearl Fisheries of HO-P’U,” *Journal of the American Oriental Society*, vol. 72, no. 4 (1952), pp. 155-68; Edward H. Schafer, *Shore of Pearls* (Berkeley: University of California Press, 197); Donkin, *Beyond Price*, pp. 198-203 を参照。

²¹ 蟹民は一生を船上で過ごす人々で、採貝を含む漁撈活動に従事した。蟹民については、小川博「中国史上の蟹——蟹（蛋）についての諸学説の沿革について（1～5）」『海事史研究』第12～17号（1969～1971年）、15～38頁；123～157頁；67～78頁；86～101頁；82～88頁を参照。

²² Fernão Mendes Pinto, *Peregrinação/ Fernão Mendes Pinto* (Lisbon: Nacional-Casa da Moeda, 1988), pp. 121-3; メンデス・ピント（岡村多希子訳）『東洋遍歴記（1）』（平凡社、1979年）、140～143頁を参照。

²³ Pires, *A suma oriental de Tomé Pires*, pp. 360-1, 366; ピレス（生田他訳）『東方諸国記』、238頁、244頁。

²⁴ 生田滋訳「ルイ・デ・アラウジョおよび彼とともに捕らえられた人々がマラカからアフォンソ・デ・アルブケルケにあてた一五一〇年二月六日付書簡」バロス（生田滋他訳）『アジア史（二）』（岩波書店、1981年）、435～436頁。T’ien-tsê Chang, *Sino-Portuguese Trade from 1514 to 1644: A Synthesis of Portuguese and Chinese Sources* (Leyden: E. J. Brill, 1969), p. 36 も参照。

²⁵ Teixeira, ed. and trans., “A Short Narrative of the Origin of the Kingdom of Harmuz,” in *The Travels of Pedro Teixeira*, trans. William F. Sinclair, with further notes by

top であり、今日、「トップ」(*top*) と呼ばれる真珠は、丸い形状に出っ張りの付いた真珠のことである。*topo* もそうした真珠だと推測できる²⁶。

中国では、長江下流域の河川や湖沼、四川地方の河川などで淡水産真珠が採取されていた。カラスガイ (*Cristaria plicata*) やヒレイケチョウガイ (*Hyriopsis cumingii*) が、中国を代表する淡水産真珠貝である。淡水産真珠は一般に品質がよくないが、カラスガイの真珠は皺が多く、特に品質が悪かった。こうした真珠も輸出に回されていた可能性もある²⁷。ただ、当時のポルトガル人の間では海南島の *aljofar* がよく知られていたので、オルタが *aljofar* の解説で言及した中国の真珠は、海産のアコヤ系真珠と考えるのが適切である。

つまり、オルタの言う「形がよくない」中国の真珠は、海南島や合浦の蜃民が真珠税を納めた後に残った真珠の中の二級品のアコヤ系真珠であり、その中には *topo* 真珠なども含まれていたと推定できる。ポルトガル商人が、この海域の良質アコヤ系真珠を入手していたかどうかは定かではないが、ある程度は購入できていたのではないだろうか。それだけでなく、ポルトガル商人は、中国の二級の真珠にも商機を見出し、それをゴアに運ぶことで、利益を得ていた。ポルトガル人が、海南島まで赴き、蜃民たちから直接真珠を仕入れたのか、あるいはマラッカ、広州、マカオなどで中国の真珠を入手していたのかは、定かでない。おそらく、そのどれも可能性がある。中国方面に向かったポルトガル人は、マラッカに寄港したため、中国の真珠はマラッカを経由して、ゴアに運ばれた。

(5) スペイン領の大地や島々の真珠

オルタは、スペイン領の大地や島々の真珠がヨーロッパに來ていると述べている。真珠の語彙は省かれているが、文脈から *aljofar* として言及されていることがわかる。

スペイン領の大地や島々の真珠は、クバグア島やマルガリータ島、ベラ岬などの「南米カリブ海真珠生産圏」のアコヤ系真珠 (*Pinctada fucata/martensii/radiata/imbricata* sp.) と推定できる。スペインはパナマ湾も支配下に置いていたが、オルタは、パナマの真珠については後述しているので、ここの *aljofar* は、南米カリブ海の真珠である。

オルタの記述によると、スペイン人のルアノの兄弟が、スペイン領から來た *aljofar* をゴアに運び、二回ほど財産を倍にしたことがあった。この話から、カリブ海のアコヤ系真珠は、大々的な輸出ではなかったが、目端の利くスペインの商務官や商人などによって、頻繁にゴアまで輸送されていたことがわかる。インド世界に向かうポルトガル人商人や商務官も同じことを行っていたはずである。

Donald Ferguson (1902; Nendeln: Kraus Reprint, 1967), p. 179.

²⁶ 御木本真珠島編集『真珠博物館』(御木本真珠島、1990年)、59頁。ドンキンは並み以上の球形真珠とし、M. A. ウォルシュはドレス・ピンと述べている。Donkin, *Beyond Price*, p. 302; Molly A. Warsh, *American Baroque: Pearls and the Nature of Empire, 1492-1700* (Chapel Hill, University of North Carolina Press, 2018), p. 98, note 27.

²⁷ 中国の淡水産真珠の種類については、Donkin, *Beyond Price*, pp. 195-8; Neil H.

Landman et al., *Pearls: A Natural History* (New York: Harry N. Abrams, 2001), p. 39 を参照。

17世紀前半のペルシア宮廷へのスペイン使節団大使のガルシア・デ・シルバ・イ・フィゲロアは、パリア半島の海岸沖、クバグア、サンタ・マルタ、マルガリータ近くで大量の真珠が採取されていること、それらの真珠は白いため、ヨーロッパの女性に珍重されているが、光沢や透明感ではペルシア湾の真珠に劣っていること、アジアの王侯貴族は真珠を大変珍重しており、ヨーロッパよりも高い値をつけるため、ヨーロッパの多くの人々が真珠をペルシアやインド全土で売るために渡航してくること、(ヨーロッパの)商人たちはそうした真珠で相当な利益を得ていることを伝えている²⁸。シルバ・イ・フィゲロアが語る真珠は、その採取地と色から南米カリブ海で採取されるアコヤ系真珠である。17世紀初めにもカリブ海の真珠は、ヨーロッパ経由でインド洋海域世界までもたらされていた。

こうしたシルバ・イ・フィゲロアの記述からも、オルタの語るスペイン領の大地や島々の *aljofar* がクバグア島やマルガリータ島のアコヤ系真珠であることが確認できる。オルタの記述を分析すると、新大陸のアコヤ系真珠は、すでに1563年にはゴアにもたらされていたことが判明するのである。

(6) ペルーの緑の大粒真珠

オルタは、ペルーの *perolas verdes* (緑色の大粒真珠) についても語っている。緑色の真珠を生み出す中南米の典型的な真珠貝としては、クジャクアワビ (*Haliotis fulgens*) とマベの一種 (*Pteria sterna*) がある。クジャクアワビはカリフォルニア半島の海域を中心に太平洋の海域に広く生息し、緑や黒緑の真珠を生み出すが、円形真珠は少なく、貝付き真珠や牙状の真珠が多かった。中南米のマベはカリフォルニア半島からペルー南部の太平洋の海域に生息し、緑がかった真珠や虹色の真珠を生み出すが、多くの場合、貝付き真珠であった²⁹。オルタの記述によると、彼自身は、緑の真珠は見えないようであるが、その存在は知っていた。16世紀半ば、きわめて珍しい中南米の真珠の情報もゴアに届いていたのである。

(7) 新世界のバロック真珠

オルタは、インディアスから来るもの (*perolas*) は、バロック真珠であると述べている。バロック真珠は「形がゆがみ、丸くなく、死んだ色をしている」と形容されており、明らかにパナマクロチョウガイ (*Pinctada mazatlanica*) の真珠の特徴を示している。すでに16世紀中葉に、ゴアは、太平洋のバロック真珠も集めていた。

²⁸ García de Silva y Figueroa, *The Commentaries of D. García de Silva y Figueroa on his Embassy to Shah 'Abbās I of Persia on behalf of Philip III, King of Spain*, trans. Jeffrey S. Turley (Leiden: Brill, 2017), p. 626.

²⁹ 中南米のマベ系真珠とクジャクアワビについては、Landman et al., *Pearls*, pp. 29, 33, 37 を参照。

1.3 真珠市場ゴアの成立

以上、オルタの記述に記されたゴアに集まる真珠を、真珠の種類も勘案しながら、検討した。本論文は第4章と第5章で、ゴアは「ペルシア湾真珠生産圏」及び「マンナール湾真珠生産圏」のアコヤ系真珠の「上位集散地」であることを示してきたが、その事実がオルタの記述によっても裏付けられた。オルタの記述により「南米カリブ海真珠生産圏」のアコヤ系真珠もゴアに流入していたことが明らかになった。つまり、ゴアは、16世紀にヨーロッパ勢力が支配するようになった「三大生産圏」からアコヤ系真珠を集める「上位集散地」であったことが判明する。

さらに、オルタの記述から、ゴアには、紅海カマラーン島のアコヤ系真珠、アラビア半島海域のクロチョウ真珠、トンキン湾のアコヤ系真珠、東南アジア海域のシロチョウ真珠、太平洋のパナマクロチョウガイのバロック真珠なども集まっていたことが明らかになった。真珠の生態系で見た場合、これらの海域は、商業的に利用価値のもっとも高い海産真珠を生み出すピンクターダ属の真珠貝の主要な生息地である。本論文は「グローバル市場」を「新世界を含む地球規模の流通やヒトの移動によって、世界各地の産地からひとつの商品が集まる市場」と定義したが、ゴアは、「三大真珠生産圏」のペルシア湾、マンナール湾、カリブ海の真珠を集めるだけでなく、紅海、中国や東南アジアの海域、中南米側の太平洋など、世界の主要な産地からも真珠を調達している市場であった。オルタの記述の分析によって、ゴアは、真珠の「グローバル市場」であったことが明らかになった。真珠市場ゴアの分析は、ひとつの商品をグローバルに集約する市場の形成という、商品の拡散とは異なる経済発展があり、経済のグローバル化がすでに始まっていた事例を示すのである。

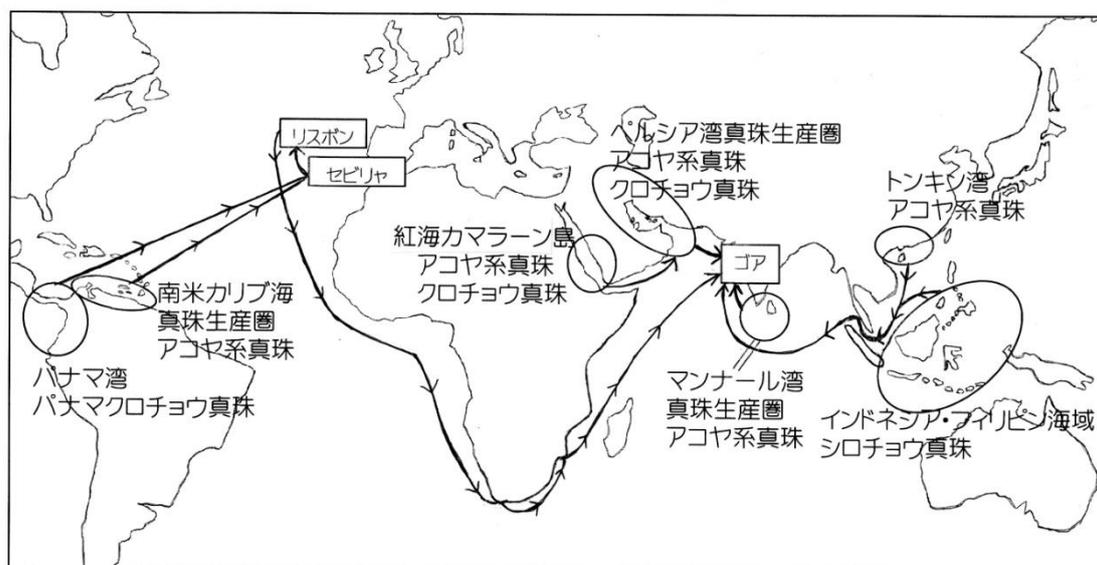
アメリカの真珠を調達するアジアの真珠市場の誕生は、世界初の出来事であった。16世紀半ば、ゴアほどヨーロッパやアメリカと結びついたアジアの真珠集散地は見当たらないからである。オルタの本が書かれた1563年は、ガレオン貿易が始まる以前の時期である。したがってゴアに来ていた南米カリブ海のアコヤ系真珠やパナマのバロック真珠は、大西洋回りでスペインに到達した後、喜望峰を回って、インドに到達したことになる。すでに16世紀半ばに真珠はアメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、アジアを地球規模で移動する「グローバル商品」であり、ゴアは三つの大陸を接続させる「グローバル市場」でもあった。次ページの表1と地図1は、ここで分析したゴアに集まる真珠の産地と種類をまとめたものである。

オルタ以後のゴア市場について述べておくと、1571年にガレオン貿易の拠点となるマニラが設立されると、ゴアには、マニラに集積された真珠も運ばれるようになった。17世紀前半のアントニオ・ボカロの *O livro das plantas de todas as fortalezas, cidades e povoações do estado da Índia Oriental* (『東インド領のすべての要塞・都市・町の地図に関する報告書』) には、マニラからゴアに帰還する船がオランダ船の襲撃に会うと、ポルトガル人は船を座礁させるなどして、金、ルビーなどの宝石、真珠(アルジョフレス)、麝香

表1 ゴアに集まる真珠の地域・海域と真珠の種類

地域	生産圏・海域	真珠の種類 (推定)	備考
西アジア	ペルシア湾真珠生産圏 紅海 (カマラーン島沖)	アコヤ系真珠 クロチョウ真珠	紅海の真珠はホルムズ経由
南アジア	マンナール湾真珠生産圏	アコヤ系真珠	
東南アジア	インドネシア・フィリピン 海域 (ボルネオ沖)	シロチョウ真珠	マラッカ経由
東アジア	トンキン湾 (海南島と合浦)	アコヤ系真珠	マラッカ経由
南アメリカ	南米カリブ海真珠生産圏	アコヤ系真珠	ヨーロッパ経由
中央アメリカ	太平洋 (パナマ湾)	パナマクロチョウ真珠	ヨーロッパ経由
中央・南アメリカ	太平洋	アワビ真珠 マベ真珠	情報が届く

地図1 グローバル市場ゴアと世界の真珠の産地



を死守することが記されている³⁰。ガレオン貿易では、真珠はマニラからメキシコに流れていた³¹。したがって、ゴアに集まるマニラの真珠は、新世界の真珠ではなく、東南アジア海

³⁰ 高瀬弘一郎『モンスーン文書と日本——十七世紀ポルトガル公文書集』(八木書店、2006年)、66頁。

³¹ マニラに集まる中国や東南アジアの真珠は、ガレオン貿易でメキシコにも輸出されていた。Donkin, *Beyond Price*, p. 333-4; James C. Boyajian, *Portuguese Trade in Asia under the Habsburgs, 1580-1640* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1993), pp. 76-80; 李惠薰「マニラ・ガレオン貿易における中国人の登場とその役割——フィリピンにお

域のシロチョウ真珠や海南島や合浦のアコヤ系真珠などであったと推定できる。これらの真珠はマラッカ経由ですでにゴアに来ていたが、17世紀になると、ゴアは、マニラからもこうした真珠を調達する「グローバル市場」となった。17世紀半ばのフランス人宝石商タヴェルニエは、ゴアは、ペルシア湾、マンナール湾、アメリカの真珠を集めるばかりでなく、他の地域では評価されていない真珠までもたらされる大市場であると語っている³²。こうした記述からも、ゴアが真珠の「グローバル市場」として発展したことが確認できる。

第2節 真珠の「グローバル市場」の成立要因

では、なぜゴアは真珠の「グローバル市場」として発展したのだろうか。以下に述べる六つの要因が相互に影響しあった結果であると考えられる。

2.1 ポルトガルの「ペルシア湾真珠生産圏」及び「マンナール湾真珠生産圏」の支配

ゴアが真珠の「グローバル市場」となった最大の理由は、ポルトガル海洋帝国が、アコヤ系真珠五大産地のふたつである「ペルシア湾真珠生産圏」及び「マンナール湾真珠生産圏」を支配したことであった。「ペルシア湾真珠生産圏」では、ポルトガルはホルムズとバハレーンの政治的・軍事的支配によって真珠を獲得し、「マンナール湾真珠生産圏」ではポルトガル勢力の「官・軍・宗教共同体」が真珠採取に介入し、真珠を入手した。ペルシア湾とマンナール湾の真珠は、ポルトガル領インド総督府のゴアに送られ、ゴアはアコヤ系真珠の「上位集散地」となった。

アコヤ系真珠は、あらゆる真珠の中で出現する割合がもっとも高く、小さいながらも丸く光沢のある良質の真珠である。真珠は支配者への献上品にもなったが、産出量が多いため、商業的に流通し、商人も十分購入が可能であった。この真珠の存在によって、ゴアは真珠取引が活発となり、さらに世界各地の真珠が次々ともたらされる集散地として発展し、「グローバル市場」に成長したのである。

真珠の生産体系では、真珠の漁場や真珠採取地は、海域の状況や地理的条件が決定要因であるため、人為的な要因では変化しない。一方、真珠の集散地は、真珠生産圏の海域を支配した政権の政治力や軍事力によって決定され、その首都になることが多い。ひとつの政治勢力が誕生すれば、彼らはその首都に真珠を集め、さらに首都のもつ政治的・経済的・商業的機能により、真珠取引は一層活発になるからである。16世紀のゴアの事例は、まさにこれに当てはまる。真珠の「グローバル市場」ゴアの誕生は、インド洋海域世界に覇権を打ち立て、アコヤ系真珠の「二大真珠生産圏」を掌握したポルトガル海上帝国による政治的・軍事的成果だったのである。

ける中国系メステイソの生成を中心に」『三田商学研究』第58巻2号（2015年6月）、189頁を参照。

³² Tavernier, *Travels in India*, vol. 2, pp. 121-2.

2.2 スペインの「南米カリブ海真珠生産圏」支配

真珠市場ゴアのグローバル化の第二の要因は、スペイン帝国がアコヤ系真珠の「南米カリブ海真珠生産圏」を支配し、さらにクロチョウ真珠採取地のパナマ湾島嶼部やパナマ地峡などの中央アメリカも植民化したことにより、大量のスペイン領アメリカの真珠が大西洋交易を経て、セビリャに輸送され、さらにヨーロッパに輸送されるようになったからである。これまで真珠はヨーロッパの王侯貴族による独占状態となっており、円形やドロップ型などの大粒真珠は彼らへの献上品であったが、数量の多いアコヤ系真珠や二級品のバロック真珠などは、商人や市民階級なども獲得できるものになった。

ヨーロッパでの真珠の需要は大きかったが、ポルトガル人をはじめ、一部のヨーロッパ人は、アジアとの交流が進むにつれて、真珠はヨーロッパよりもアジアの方が高値が付くことを理解するようになった。彼らは、ヨーロッパにはアジアで売れる商品があることに気がついたのである。こうしてセビリャに到達した新世界の真珠は、ポルトガル領インドへの赴任者や渡航者、商人、旅行者などによって、リスボン経由でさらにゴアまで運ばれることになった。1580年以降、スペイン王がポルトガルの王位を兼ねる同君連合の時代となり、スペインからポルトガルへの真珠の輸送も活発化し、さらにポルトガル領インドに真珠を持ち込むスペイン人も増加したことが推定できる。

オルタやシルバ・イ・フィゲロアが語っているように、新世界の真珠のインド洋海域世界への輸送はひとつの潮流であり、ゴアは、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、アジアを移動した真珠が集まる「グローバル市場」になったのである。

2.3 民間ポルトガル商人の活躍

第三の要因が、民間ポルトガル商人の活躍である。インド洋海域世界での永住を決意した16世紀の民間ポルトガル商人がポルトガル領インドの域外に出て、「非公式帝国」と呼ばれる商活動や居住の場を作ったことはよく知られている³³。

民間ポルトガル商人は、ペルシア湾やマンナール湾のアコヤ系真珠も商品として扱った。彼らは海上商人であり、真珠の卸商であった。アコヤ系真珠は生産量が多かったため、民間ポルトガル商人に多くの商機を与えることになった。彼らはアコヤ系真珠だけではなく、ボルネオのシロチョウ真珠や中国の *topo* 真珠、新世界の真珠なども扱っていた。一部のヨーロッパの人はアジアでの真珠の高値に気づき、ポルトガル領インドに南米の真珠を持ち込んでいたが、アメリカの真珠のアジアへの輸入には民間ポルトガル人も関わっていた可能性がある。実際、アジアの真珠の希求者の嗜好を熟知し、その取引を実践していたのが、

³³ 民間ポルトガル商人の東南アジアや中国への進出については、George Bryan Souza, *The Survival of Empire: Portuguese Trade and Society in China and the South China Sea, 1630-1754* (Cambridge: Cambridge University Press, 1987); Malyn Newitt, *A History of Portuguese Overseas Expansion, 1400-1668* (London: Routledge, 2005), pp. 190-1; 平山篤子『スペイン帝国と中華帝国の邂逅——十六・十七世紀のマニラ』(法政大学出版会、2012年)、27頁、39~46頁を参照。

民間ポルトガル商人だった。オルタの『インドの薬草と薬物についての対話』には、地域による真珠の嗜好の違いを利用して真珠取引で儲ける方法が記されている。

オルタは「(インディアスのバロック真珠は) スペインよりもインドの方が概して高値がつく。スペイン人にとって、(真珠が) 丸いか、丸くないか、生き生きとした色か、死んだ色か、よい形をしているか、そうでないかは、決定的な違いがあるからである」と述べ、スペインとインドの嗜好の差を語っている。その一例として、インドでは10の価値がつく完璧な形の *perola* でも、スペインでは2か1の価値しかないと言っている³⁴。この *perola* は、おそらくパナマクロチョウ真珠のことで、形が完璧であっても、鉛色や黒色だったり、光沢がなく、死んだ色をしていたら、スペインでは低評価になるということを、オルタは述べていると考えられる。

一方、オルタは、ヴィジャヤナガル王国の真珠の嗜好についても語っている。彼は、「デカンのふたつの王国」(ヴィジャヤナガル王国とビージャプル王国) はゴアから地理的には近くないため(真珠への希求が強く)、ヴィジャヤナガルでは、完璧なものには10の価値がつくが、不完全なものでも5か4の価値がつく、と述べている。さらにオルタは、ここ(ゴア)で仕入れを倍にし、あちら(ヴィジャヤナガル)にインドに集まる *aljofar* を運ぶと、あなたの兄弟(ルアノの兄弟)は金を稼ぐことができる、と主張している³⁵。

オルタがここで述べる *aljofar* は、ペルシア湾やマンナール湾の *aljofar* をはじめ、ルアノの兄弟が持参していた新世界の *aljofar*、新世界のパナマクロチョウガイの *perola* など、ゴアに集まるさまざまな真珠を総称して、*aljofar* と表現したと考えられる。ヴィジャヤナガルでは、真珠の好みがうるさくない上、どんな真珠にも高値をつけるため、真珠さえ運んだら、利益を得られると、オルタは語っている。

このようにオルタの記述を検討すると、彼が、真珠の種類、スペイン市場とアジア市場の嗜好と価格の違いなどの地域間格差を認識し、それを利用して儲ける方法を披露していることがわかる。こうした世界の真珠市場の動向の把握は、真珠や宝石を扱う貿易商としてのオルタ自身が実践しており、当時の民間ポルトガル商人たちも行っていた行動だったことが推定できる。ポルトガル領インドの首都ゴアのような政治・経済・商業の中心地で、「インド航路」の発着点だった大都市では、ポルトガル人とアジアの人々との交流も盛んであった。オルタの記述を分析すると、ゴアの民間ポルトガル商人は、真珠の嗜好の地域間格差を理解し、希求する地域に適した真珠を輸出することで利益を得る「グローバル思考」を培っていたことが判明する。

真珠は、ヨーロッパ本国の人々にとっては財産であり、威信財であった。しかし、民間

³⁴ Orta, *Colóquios dos simples e drogas da Índia*, vol. 2, p. 121.

³⁵ Orta, vol. 2, p. 121. 「デカンのふたつの王国」の原文は *dos Canaras*。筆者は、ゴアの位置関係からヴィジャヤナガル王国とビージャプル王国と考える。カナラについては、リンスホーテン(岩生他訳)『東方案内記』、356~359頁(第38章)を参照。オルタは、ゴアとインド内陸部は地理的に近くないと述べているが、次節で検討する真珠の「ハブ・アンド・スポーク交易」を勘案すると、地理的には近いと言える。

ポルトガル商人にとっては、多くの場合、利益を得、資産を増やすための投資の対象であった。彼らは世界の海域から真珠を調達し、希求者の嗜好に応じて最適に販売するため、地球規模での真珠の売買戦略を練り、「グローバル思考」を培うことで、「グローバル市場」ゴアの発展に貢献したのである。

2.4 バニヤン商人による真珠の小売業の発展

真珠の「グローバル市場」ゴアの発展要因の第四は、バニヤン商人による真珠の小売業である。バニヤン商人とは、グジャラート地方出身の非イスラーム教徒の現地商人である。16世紀から19世紀のヨーロッパ文献では *Vaneane*、*Baneane*、*Banian*、*Banyan* などと記され、日本語では「ヴァニア」、「バニヤ」、「バニアン」などと記される³⁶。本論文では「バニヤン」の呼称を使い、「バニヤン商人」と表記する。

南アジア史の研究書や用語辞書では、バニヤン商人について、「ヒンドゥー教徒の商人やジャイナ教徒の商人」というようにふたつの宗教を並列して解説したり、あるいは、ヒンドゥー教徒の商人を主体とし、その中にジャイナ教徒の商人が交じっていたと解説する傾向がある³⁷。そうした中、ハビーブは、グジャラートやラージャスタンのバニヤン商人は多くの場合、ジャイナ教を信奉していたと論じている³⁸。16世紀初期のピレスやバルボザなどによるポルトガル語文献は、バニヤン商人のアリやハエも殺さない徹底した不殺生の行為や菜食主義について言及している³⁹。こうしたことを勘案すれば、ハビーブが主張したように、バニヤン商人の多くはジャイナ教徒であり、その中にヒンドゥー教徒も存在していたと考えるべきである。

バニヤン商人の考察で注意しなければならないのは、グジャラート商人との関係である。広義に解釈すれば、グジャラート商人は、グジャラート地方出身の商人、あるいは16世紀中葉まで存在したグジャラート・スルタン王国出身の商人になる⁴⁰。この解釈ではバニヤン

³⁶ バニヤン商人についての解説は、次を参照。Henry Yule and A. C. Burnell, *Hobson-Jobson: A Glossary of Colloquial Anglo-Indian Words and Phrases, and of Kindred Terms, Etymological, Historical, Geographical and Discursive* (1886; London: John Murray, 1903), s. v. "Banyan"; Sebastião Rodolfo Dalgado, *Glossário Luso-Asiático* (1919-21; New Delhi: Asian Educational Services, 1988), s. v. "vaneane." 16世紀・17世紀のバニヤン商人に関する研究については、次を参照。ピアスン(生田訳)『ポルトガルとインド』、40~43頁; 長島弘「ムガル帝国下のバニヤ商人——スーラト市の場合」『東洋史研究』第40巻4号(1982年)、85~118頁; Irfan Habib, "Merchant Communities in Pre-Colonial India," pp. 371-99. 「ヴァニア」には商人カーストの意味があるが、本論文では慣例に従い、「バニヤン商人」とする。

³⁷ 顕著な例が、Yule and Burnell, *Hobson-Jobson*, s. v. "Banyan" である。

³⁸ Habib, "Merchant Communities in Pre-Colonial India," p. 380.

³⁹ Pires, *A suma oriental de Tomé Pires*, pp. 195-6; ピレス『東方諸国記』、108頁; Barbosa, *Livro do que viu e ouviu no oriente*, pp. 34-6; Barbosa, *The Book of Duarte Barbosa*, vol. 1, pp. 110-4.

⁴⁰ グジャラート王国については次の文献を参照。M. S. Commissariat, "A Brief History of the Gujarat Saltanat," *The Journal of the Bombay Branch of the Royal Asiatic Society*,

商人もグジャラート商人と見なすことができる。実際、バルボザは、カンベイの異教徒の商人は、カリカットなどではグジャラート人 (*guzarate*) と呼ばれると述べている⁴¹。

しかし、グジャラート地方では 11 世紀以降、ボーラやホージャと呼ばれるイスラーム商人のコミュニティが形成されていた⁴²。15 世紀初めにグジャラート・スルタン王国が成立すると、この王国のイスラーム商人たちは船を所有し、インド洋海域世界の各地に進出し、海上交易を牛耳る強力な商人集団となっていった。彼らもグジャラート商人と呼ばれる⁴³。これから検討するバニヤン商人は、陸地を拠点とする小売商や職人の側面があり、イスラーム教徒の海上商人とはその性格が異なっている。したがって、「グジャラート商人」というひとつの範疇で、バニヤン商人とムスリム商人を扱うことはできない。16 世紀の一次史料では「グジャラート商人」という呼称はよく登場するが、著者によってその定義や使用方法がさまざまである。それゆえ、史料中の「グジャラート商人」がイスラーム商人か、あるいは現地ジャイナ教徒のバニヤン商人を指すのかを、テキストからわかる範囲で区別する必要がある⁴⁴。

16 世紀のバニヤン商人は、イスラーム系のグジャラート海上商人と異なり、ポルトガル支配を忌避することなく、むしろ積極的にゴアをはじめとするポルトガル領インドの各地に進出していった。もともとバニヤン商人は、穀物を扱う商人であり、金貸しを行う金融業者としても知られていた⁴⁵。16 世紀初めのピレスやバルボザは、バニヤン商人に言及しているが、彼らが真珠商や宝石商だとは述べていない。ピレスやバルボザが真珠商、宝石商と呼んだのは、チェッティ商人であった⁴⁶。しかし、16 世紀後半になると、バニヤン商人は、ポルトガル領インドで真珠商、宝石商となっていた。

16 世紀末のリンスホーテンは *Itinerario* (邦訳名『東方案内記』) の中で、ゴアのある通

vol. 25 (1917-21; Nendeln: Kraus Reprint, 1969), pp. 82-133, 246-321; *Encyclopaedia of Islam*, new ed., s. v. "Gudjarāt," by J. Burton-Page.

⁴¹ Barbosa, *Livro do que viu e ouviu no oriente*, p. 111; Barbosa, *The Book of Duarte Barbosa*, vol. 2, p. 73.

⁴² 辛島昇編『南アジア史』(山川出版社、2004年)、194頁、255頁。

⁴³ バロスの『アジア史』によると、1507年にアルブケルケがホルムズを攻略した際、強力な大型船を港に停泊させていたのは、カンベイのイスラーム教徒たちであり、また、1511年にアルブケルケがマラッカを占領した際にも、その地の商取引を牛耳っていたのは、イスラーム教徒のグジャラート人だった。バロス『アジア史(一)』第2部第3章及び『アジア史(二)』第6部第1章～第3章を参照。

⁴⁴ ピアスンは、グジャラートのイスラーム商人とバニヤン商人を区別せず、両者を「グジャラート商人」として議論している。ピアスンの主張は、最初の段階でポルトガルの支配に抵抗したグジャラート商人が、その後はその支配に屈服し、受け入れていったというものである。ポルトガル支配に抵抗したのは、グジャラート・スルタン王国のイスラーム海上商人であり、ポルトガル支配を受け入れたのは、この王国の被支配者だったバニヤン商人などである。宗教や生業、商売の在り方が異なるイスラーム海上商人とバニヤン商人を「グジャラート商人」という同じ範疇に入れ、その行動を一般化するのは無理がある。ピアスン(生田訳)『ポルトガルとインド』、153頁、175頁を参照。

⁴⁵ Habib, "Merchant Communities in Pre-Colonial India," p. 380.

⁴⁶ チェッティについては、第3節で考察する。

りではカンベイ出身のバニヤン商人の店が軒を連ねており、そこではカンベイの各種物産やあらゆる種類の宝石、真珠、珊瑚などが店頭で売られていると述べている⁴⁷。17世紀初めのピラールはその旅行記で、バニヤンほど真珠と宝石について詳しい人は世界にはいないと語り、ゴアにいる金細工師、宝石細工師、より優れた工芸品を作っている職人は、すべてカンベイ出身のバニヤンかブラフマンであり、彼らは彼ら自身の店が並ぶ通りを幾つももっていると記している⁴⁸。

こうした記述によって、バニヤン商人は、すでに16世紀にはポルトガル領インドの首都ゴアに進出し、真珠・宝石取引やその加工に積極的に係わり、小売り販売も行う真珠商、宝石商になったことが明らかになる。彼らは陸地を拠点にする商人であり、みずから船を操って、真珠の輸送で利益を得る海上商人ではなかった⁴⁹。バニヤン商人は、インド洋海域世界においてポルトガルの支配体制が拡大し、ゴアが真珠・宝石の集散地として発展し始めると、それを奇貨として急成長した商人であった⁵⁰。

真珠は需要に比べて供給量が圧倒的に少ないため、供給者が優位な立場にある商品である。それゆえ、初対面の客にとって真珠の購入は容易ではない。しかし、小売商の存在は、多くの人に真珠購入の機会を提供する。ゴアでは、真珠の小売商であるバニヤン商人が成長したため、真珠の調達が容易になり、世界各地の真珠商や宝石商が、金銀地金をもってゴアに蝟集するようになった。また、贈答文化を伝統とするアジア世界では、各地の諸王国や政治勢力の支配者、家臣、代理人などが、真珠や宝石の装身具、宝飾品、調度などを求めていたが、バニヤン商人の小売はそうした品々を提供した。

購買者だけでなく、真珠の売手にとっても、小売商の存在は重要である。密輸や隠匿、あるいは偶然などによって見事な真珠を取得した人が、換金のために密かに訪れるところが、小売商である。彼らの真珠取引は、サイレント・バーゲニングが一般であり、現金払いで即決される。それゆえ、真珠・宝石の小売商は、金銀地金などの莫大な資金を常時用意しており、彼らの存在は、真珠と宝石の換金性の高さを支える役割があった。バニヤン

⁴⁷ リンスホーテン（岩生他訳）『東方案内記』、331頁。

⁴⁸ Pyrard, *The Voyage of Francois Pyrard of Laval*, vol. 2, p. 250. ブラフマンはバラモンのことで、ヒンドゥー教の司祭階級であるが、商人も存在した。マルコ・ポーロは、グジャラートのバラモン商人が、真珠を買うためにカーヤルに來航していたことを伝えている。マルコ・ポーロ他（高田英樹訳）『世界の記——「東方見聞録」対校訳』（名古屋大学出版会、2013年）、474頁、478頁。この情報は、フランク・イタリア語版とセラダ手稿本に掲載されている。

⁴⁹ リンスホーテンは、バニヤン商人が、ポルトガル船に乗ることや、ダイヤモンドを仕入れるために陸路でインド内陸部に行くことを述べている。リンスホーテン（岩生他訳）『東方案内記』、354頁（第37章）、545頁（第85章）。

⁵⁰ ピアスンは、「グジャラート商人」は、恐怖からポルトガル支配に屈服したと述べ、軟弱なグジャラート商人像を描き出した。ポルトガル支配を受け入れたのは、バニヤン商人であったが、彼らは、ゴアの真珠・宝石市場の成長を好機ととらえ、積極的に進出した商人であり、恐怖からポルトガル支配を受け入れたとは言い難い。ピアスンが描く軟弱な商人像は改める必要がある。ピアスン（生田訳）『ポルトガルとインド』、153頁、175頁を参照。

商人が真珠商、宝石商であり、同時に金貸しや資本家であることは、相乗効果があった⁵¹。実際、彼らは16世紀、17世紀を通じ、大資本家として成長していった⁵²。バニヤン商人は19世紀から20世紀初めになると、ペルシア湾の真珠採取業などにも出資し、真珠採取船を所有する大商人、大資本家となっていた。ただ、真珠業では彼ら自身は船長や海上商人ではなく、船長や潜水夫を債務奴隷にして、真珠を獲得するのを目的とする、陸地拠点の資本家であった⁵³。

このように、バニヤン商人による真珠の加工業・小売業の発展は、世界各地の真珠商、宝石商、真珠の売手、真珠を欲するアジア諸王国の家臣や代理人などをゴアに集め、ゴアを真珠の「グローバル市場」としてさらに大きく発展させることに寄与したのである。16世紀の真珠によるグローバル化の要因には、バニヤン商人というアジア商人の存在があった。真珠を求める世界各地の商人たちは、金銀地金以外に自国のさまざまな物品を携えてきたため、ゴアでは商取引が活発化し、国際交易港としても成長した。

2.5 「伝統的希求地／希求者」の存在と地理的近接

ゴアを真珠の「グローバル市場」に成長させた第五の要因は、アジア世界の真珠の「伝統的希求地／希求者」の存在及びそうした希求地とゴアの地理的近さである。ゴアの後背地としては、ヴィジャヤナガル王国など、農業を基盤とする豊かな王国が存在した。彼らは真珠の「伝統的希求者」であり、真珠の輸入を国是とし、その購入のためには金銀を惜しまない人々であった。こうしたインドにおける「伝統的希求地」と陸路でつながる地理的近さが、ヴェネツィアなどのヨーロッパの真珠の集散地をおさえ、ゴアを、ヨーロッパとアジア世界が接続する真珠の「グローバル市場」として発展させることになった。

2.6 宝石市場としての発展

第六の要因は、ゴアの宝石市場としての発展である。もともと南アジアは、ルビー、サファイヤ、トパーズ、キャッツアイなどさまざまな宝石が採れる土地である。とりわけ、ダイヤモンドは、ボルネオ島を除くと、ほぼインドの独占状態で、ゴールコンダ王国、ビージャプル王国、ヴィジャヤナガル王国などがあるデカン内陸部が主要な産地となっていた。南インドの諸王国の首都は、概して真珠や宝石の取引が活発であるが、一定以上の大

⁵¹ バニヤン商人は密輸に係わっていることで名高かった。Anthony Disney, “Smugglers and Smuggling in the Western Half of the Estado da India in the Late Sixteenth and Early Seventeenth Centuries,” *Indica*, vol. 26 (1989), p. 66.

⁵² ピアスン『ポルトガルとインド』、170~171頁、183頁。

⁵³ Kunz and Stevenson, *The Book of the Pearl*, pp. 89-90, 98. ペルシア湾における債務奴隷制水産業については、本稿第3章を参照。鈴木英明の「ネットワークのなかの港町とそこにおける所謂「バニヤン」商人——一九世紀ザンジバルにおけるカッチー・バティヤー商人の活動」『東洋史研究』第71巻4号（2013年）、794~766頁は、19世紀のバニヤン商人の多角的活動を扱っているが、彼らが19世紀に傑出した真珠採取業の資本家だったことは言及していない。

きさの真珠や宝石は持ち出し禁止となっており、国王が一定の価格で買い上げるようになっていた。

一方、ゴアでは宝石の売買は自由であり、ダイヤモンドなどの大粒の宝石は、アジアの一般的相場より高値で取引されたため、多くの宝石が密かにゴアにもたらされることになった。タヴェルニエは、アジアの王や身分の高い貴族たちは、真珠にヨーロッパの人々より高い金額を払うが、ダイヤモンドに関してはその限りではないと述べている⁵⁴。つまり、ゴアは、アジア世界におけるダイヤモンドの相対的低評価及びヨーロッパのダイヤモンド需要によって、アジアで持ち出しが禁止されていた大粒のダイヤモンドも集める市場になったのである。真珠ばかりでなく、ダイヤモンドが入手できるゴア市場は、世界各地の真珠商、宝石商にとって魅力的な市場であり、多くの商人を招来することになった。ゴアの真珠の「グローバル市場」としての発展、ダイヤモンドなどの宝石市場としての発展は、相乗効果があった。

以上、六つの要因を検討した。ポルトガル海洋帝国とスペイン帝国によるアコヤ系真珠の「三大生産圏」支配の確立、真珠の嗜好の地域間格差を認識し、「グローバル思考」を培った民間ポルトガル商人、真珠の小売商としてのバニヤン商人の成長、アジア世界における真珠の「伝統的希求地／希求者」の存在とその地理的近さ、ダイヤモンドなどの宝石取引の発展などの要因が相互に関連し、ヨーロッパとアジア世界の商取引が進むことで、16世紀のゴアは、真珠の「グローバル市場」として大きく発展したのである。

第3節 ゴアの真珠商たち

前節では、民間ポルトガル商人やバニヤン商人たちが、真珠の「グローバル市場」ゴアの発展に大きな役割を果たしたことを明らかにした。では、彼ら以外に、どのような商人たちがゴアに集まり、真珠取引を実行したのだろうか。

真珠は世界各地で希求されるため、真珠の集散地は、本質的に国際色豊かな都市となる。リンスホーテンは、ゴアで活動している商人として、アラブ商人、ペルシア商人、アルメニア商人、ユダヤ商人、カンベイやデカン出身の商人、ベンガル、ミャンマー、タイ、マラッカ、ジャワ、モルッカからの商人、中国商人、さらにヴェネツィア商人などに言及している⁵⁵。民族や宗教の異なる多種多様の商人がゴアで商取引をしていることがわかり、ゴアの国際性が明らかになる。こうした国際性は、真珠・宝石取引だけによるものではなか

⁵⁴ Tavernier, *Travels in India*, vol. 2, p. 113. 民間ポルトガル商人がダイヤモンドを扱ったことについては、Boyajian, *Portuguese Trade in Asia under the Habsburgs*, pp. 38-40; Newitt, *A History of Portuguese Overseas Expansion*, p. 195 を参照。

⁵⁵ リンスホーテン(岩生他訳)『東方案内記』、277頁(第28章)、326頁(第33章)、566~567頁(第92章)。1560年以降、ゴアではキリスト教徒に対しての異端審問が実施され、宗教的不寛容が見られたが、その一方で、ゴアは宗教の異なる他民族の人々を招来する国際都市であったことが、リンスホーテンの記述から明らかになる。

ったが、真珠や宝石取引がひとつの要因であったと見なすことはできる。

本節では、こうした国際商人の中から、グジャラートのイスラーム海上商人、アルメニア商人、ユダヤ商人、さらにヴェネツィア商人などに着目し、真珠の「グローバル市場」ゴアで活動した商人について考察する。

3.1 グジャラートのイスラーム海上商人

グジャラートの海上イスラーム商人は、16世紀前半、ポルトガルの影響力が及ぶようになった地域から立ち去っていった人々である。ポルトガル来航以前、彼らはインド洋海域世界の各地に進出し、流通や運輸などの海運業で大きな存在感を示し、真珠の輸送も積極的に手掛けていた。16世紀になって、ポルトガル艦隊がインド洋海域世界に登場し、その勢力圏を拡大し始めると、彼らはポルトガル支配を忌避し、かつて居住していたカリカットやマラッカから引き上げ、アチェなどの新興のイスラーム国などにその取引の基盤を移していった⁵⁶。しかし、16世紀後半になると、彼らの一部は、ゴア・カンベイ・ルートを担う海上商人となり、ゴアでの取引にも従事していたと推定できる。

すでに第4章で見たように、グジャラート地方の港町カンベイは、アジアを代表する真珠の加工集散地であった。ポルトガル来航以前から、現地のジャイナ教徒やヒンドゥー教徒たちが、真珠をはじめ、宝石、金、銀、珊瑚、象牙などを使った装身具、宝飾品、調度品を制作していた。カンベイでは、模造真珠も作られていた。そのことは、当時から真珠の需要が大きい一方、真珠は供給不足だったことを示している⁵⁷。

真珠や宝石をカンベイに供給していたのが、カリカットなどのマラバール海岸の諸港湾都市、ホルムズ、アデン、マラッカなどの真珠の集散地で、グジャラートのイスラーム海上商人がその輸送を担っていた。しかし、カリカットが凋落し、代わってゴアが真珠の大市場として発展していくと、カンベイは真珠や宝石の調達先としてゴアとの結びつきを強化するようになった。

ピラールによると、1年に2～3回、300隻から400隻のカンベイの船が、船団となってゴアを訪れた。船団の姿が見えると、ゴアの町では歓声が上がったという。カンベイの船団がもたらす商品は、インディゴ、宝石製品、小麦、絹や綿織物、螺鈿をはじめ、象牙、金、銀、宝石を使ったキャビネットなどであり、ゴアの住民で利益を得ない人は、ほとんどいなかった⁵⁸。ピラールは、真珠については述べていないが、真珠の加工集散地としてのカンベイの機能とゴアの真珠の集散地の機能を勘案すると、カンベイの船団は、ゴアで大量に真珠を購入する一方、ゴアに真珠製品をもたらしていたと推定できる。

この船団には、多くのカンベイ在住のバニヤン商人も乗船していたが、船の運航を担っ

⁵⁶ Pires, *A suma oriental de Tomé Pires*, p. 202 ; ピレス (生田訳) 『東方諸国記』、116 頁 ; ピアスン (生田訳) 『ポルトガルとインド』、165 頁。

⁵⁷ Barbosa, *Livro do que viu e ouviu no oriente*, p. 46; Barbosa, *The Book of Duarte Barbosa*, vol.1, p. 142.

⁵⁸ Pyrard, *The Voyage of Francois Pyrard of Laval*, vol. 2, pp. 245-50.

ていたのは、イスラーム教徒のグジャラート商人だった。16世紀、17世紀を通じ、海運を担っていたのは、イスラーム教徒だったからである⁵⁹。一部のイスラーム系グジャラート商人は、ポルトガルとの共存の道を選ぶようになり、ゴアでの真珠取引やその輸送に従事するようになった。彼らのバニヤン商人への協力、ポルトガル支配体制の受け入れは、ゴアでの商取引の莫大な利益のためであった。

3.2 アルメニア商人とユダヤ商人

アルメニア商人とユダヤ商人は、交易離散共同体 (*trade diaspora*) の商人と呼ばれ、研究者の注目を集めてきたが、彼らが真珠や宝石を積極的に扱う商人や職人であることは従来の研究では十分検討されてこなかった⁶⁰。しかし、交易離散共同体の商人は土地に依拠することができないため、高価な上、嵩張らない真珠や宝石に特化するのむしろ当然である。実際、中世のアルメニア商人は、真珠、宝石、絹を扱っていたことが知られている⁶¹。16世紀において、ホルムズのアルメニア人は、様々な宝石類やスパイスを扱う商人だったので、ゴアのアルメニア人も同様だったと推定できる⁶²。ユダヤ人についても、中世以来、真珠商、真珠加工業者として名高かったことを勘案すれば、ゴアに暮らすユダヤ人の中には真珠商や真珠加工業者がいたと推定できる⁶³。実際、ユダヤ系ポルトガル人のオルタは、宝石や真珠を扱う貿易商でもあった。ただ、16世紀はアルメニア人も、ユダヤ人も、真珠取引においては、バニヤン商人ほど傑出した存在ではなかった。

3.3 ヴェネツィア商人

ゴアやホルムズなどのポルトガル領インド内で真珠を扱ったヨーロッパ商人が、ヴェネツィア商人である。ヴェネツィア人とポルトガル人は、16世紀初め、コショウ貿易をめぐる対立していたが、16世紀後半になると、ヴェネツィア人はポルトガル領インドで活動するようになっていた⁶⁴。リンスホーテンによると、ヴェネツィア人は、ゴアの他、ホルム

⁵⁹ ピアスン (生田訳) 『ポルトガルとインド』、166頁。

⁶⁰ アルメニア商人については、フィリップ・D・カーティン (田村愛理他訳) 「十七世紀の陸上交易——ヨーロッパ—東アジア間のアルメニア人商人」『異文化間交易の世界史』(NTT出版、2002年、原著1984年)、249~281頁; Sebouh David Aslanian, *From the Indian Ocean to the Mediterranean: The Global Trade Networks of Armenian Merchants from New Julfa* (Berkeley: University of California Press, 2011); 玉木俊明「アルメニア人から見た産業革命」『世界史を「移民」で読み解く』(NHK出版、2019年)、144~157頁を参照。

⁶¹ B. C. Colless, "The Traders of the Pearl: The Mercantile and Missionary Activities of Persian and Armenian Christians in South East-Asia," *Abr-Nahrain*, vol. 9 (1969-1970), pp. 17-38; vol. 10 (1970-1971), pp. 114-7; Donkin, *Beyond Price*, p. 138.

⁶² リンスホーテン (岩生他訳) 『東方案内記』、120頁 (第6章)。

⁶³ Teixeira, *The Travels of Pedro Teixeira*, p. 116. 真珠商、真珠加工業者としてのユダヤ人については、Donkin, *Beyond Price*, pp. 129, 132, 137-8, 250を参照。

⁶⁴ 第4章で見たように、マラッカの支配者となる者はヴェネツィアの喉に手をかけることになるというピレスの言説は、16世紀初めのポルトガル人の敵対心を示している。Pires, *A*

ズやマラッカに代理店をもち、宝石や真珠、スパイスを買い集めていた。彼らはこうした物産を買うために「ヴェネツィアンデル」と呼ばれる高額の金貨を持ち込んでいた⁶⁵。

3.4 ポルトガル領インド域外の真珠商

ポルトガル領インド域外の真珠商についても考察しておく。ポルトガル来航以前、カリカットなどのマラバル海岸で真珠商・宝石商として活躍していたチェッティ商人やイスラーム海上商人のマーッピラは、カリカットが真珠・宝石集散地の機能を失うと、真珠や宝石の入手が難しくなって、次第に困難な状況に置かれていった。特にマーッピラはポルトガルの海洋支配に反旗を翻し続け、マンナール湾の真珠の大規模採取時にはパラヴァスの拉致を繰り返し、ポルトガル人から「マラバーリー海賊」と呼ばれていた⁶⁶。つまり、ポルトガルの「マンナール湾真珠生産圏」支配の確立及び真珠集散地としてのカリカットの衰退を契機として、マーッピラの海上交易やチェッティの真珠商としての活動は低下していったと考えられる。ただ、タミルナドゥ南海岸にはイスラーム系真珠採取地のキラカライやカーヤルパッティナムなどが存在しており、この地のイスラーム海上商人マラッカーヤルとの連携などによってポルトガルのシステム外の真珠の流通ネットワークが維持・形成されていたことが考えられる⁶⁷。カリカットもこうしたネットワークと結ばれており、マーッピラやマラバルのチェッティは真珠に係わる商人として一定の活動を維持していた可能性もある。あるいは、ポルトガルと新たに協力関係を築いたり、他業種に転身することで、活路を見出していったマーッピラやチェッティも存在したと考えられる⁶⁸。

他方、タミルナドゥ南海岸で活動するチェッティは、マンナール湾の真珠採取に関与し続け、真珠をインド内陸部に輸送する役割を果たしていた⁶⁹。タミルナドゥ南海岸のチェッティとマラバル海岸のチェッティとの間にどのような交流や関係があったのは、当時の文献からは定かではない。18世紀・19世紀になると、チェッティは東南アジアでの農業開発に資金提供するインド人金融コミュニティに成長していく⁷⁰。

suma oriental de Tomé Pires, p. 441; ピレス (生田他訳) 『東方諸国記』、495 頁を参照。

⁶⁵ リンスホーテン (岩生他訳) 『東方案内記』、342 頁 (第 35 章)、566 頁 (第 92 章)。「ヴェネツィアンデル」は約 600 レイスに相当する。同書 343 頁 (注 10) 参照。

⁶⁶ マーッピラについては、第 5 章 1 節を参照。

⁶⁷ マラッカーヤルについては、第 5 章 1~2 節、5 節を参照。

⁶⁸ ピラールは、ポルトガル海軍と行動を共にするマラバルのチェッティの商船があると伝えており、ポルトガルと協調関係に入ったマラバルのチェッティの存在を示唆している。Pyrard, *The Voyage of Francois Pyrard of Laval*, vol. 2, pp. 117-8.

⁶⁹ チェッティについては、第 5 章 1 節、3 節、5 節を参照。A. ディズニーは、チェッティはポルトガルのシステムの外で商取引をしたと述べている。しかし、タミルナドゥ南海岸のチェッティは、マンナール湾の真珠採取では大きな役割を果たしていた。彼らの真珠取引は 20 世紀初めにおいても顕著であった。Disney, "Smugglers and Smuggling," p. 66 及び Kunz and Stevenson, *The Book of the Pearl*, pp. 109, 121-2 を参照。

⁷⁰ 水島司「グローバルエコノミーの形成とアジア」秋田編『アジアからみたグローバルヒストリー』、63~81 頁及び水島司「19 世紀アジアの農業開発の評価をめぐって」秋田茂編『大

以上、ゴアを拠点に活躍する真珠商やポルトガル支配の域外で活動する真珠商について考察した。真珠の「グローバル市場」ゴアは、世界各地の真珠商・宝石商を招聘していたが、そうした商人層には、かつてポルトガル海洋帝国の対外拡張に抵抗していたグジャラートのイスラーム海上商人やヴェネツィア商人も含まれていた。真珠商は真珠を獲得してこそ、商売が成立する。彼らは、真珠という限られた産地が生み出す商品の入荷のためには、ポルトガルのアジア支配を受け入れ、ゴアにも積極的に進出していったのである。真珠の調達の在り方は、真珠の生産と流通を支配する国家とどう向き合うかという商人の政治的・宗教的信条や商業上の判断が大いに関連していたことを示している。ゴアにはアジアの諸地域から多くの商人が来るようになったが、それによってヨーロッパ世界とアジア世界の交流は一層進み、ゴア市場のグローバル化に寄与したのである。

第4節 ゴア起点の「ハブ・アンド・スポーク交易」

「グローバル市場」ゴアは、世界各地から集めた真珠をどこに輸出し、どのように世界と接続したのだろうか。本節では、真珠の流通の考察のためゴア起点の「ハブ・アンド・スポーク交易」を考察する。第3章から第5章では、それぞれの真珠生産圏からの「ハブ・アンド・スポーク交易」を検討した。内容が重なるところもあるが、ここではゴアを起点にする真珠の流通ネットワークを考察する。

4.1 流通経路1 ゴア・リスボン・ルート

ゴア・リスボン・ルートは「インド航路」と呼ばれ、ポルトガルの遠隔地交易の主要ルートであった。このルートは、ポルトガル植民地政府が税として徴収した真珠や赴任者たちが個人的に獲得した真珠がリスボンに運ばれていくルートであった。

第4章で見たように、ピラールは、インド総督やホルムズ長官が帰任する時は、嵩高な商品は持ち帰らず、唯一持ち帰るのは、真珠、宝石、竜涎香、麝香、金、銀などの高価な物品であると述べていた⁷¹。リンスホーテンも同様のことを述べている⁷²。さらに、第4章では、ポルトガル領インドの赴任者には、二十四分の一税を払えば、真珠や宝石の自由取引が認められていたことを明らかにした。1515年以降は、赴任者たちには、役職に応じて交易特権の箱が与えられ、箱に入る限り、自費で購入した物品は持ち帰れるようになった⁷³。

リンスホーテンも、ポルトガル領インドに向かう乗組員たちには、運賃、関税のかからない一定の大きさの箱がひとつ与えられ、その箱に入る物品はポルトガルへの持ち込みが許されていたと述べており、この制度が続いていたことがわかる。さらにリンスホーテンは、かつては箱の荷物は寛容に処理されていたが、(同君連合以後) 検査が強化されて、コ

分岐を超えて』(ミネルヴァ書房、2018年)、137~178頁。

⁷¹ Pyrrard, *The Voyage of Francois Pyrrard of Laval*, vol. 2, p. 242.

⁷² リンスホーテン(岩生他訳)『東方案内記』、323~325頁(第32章)。

⁷³ Boyajian, *Portuguese Trade in Asia under the Habsburgs*, p. 39.

ショウなどの禁制品は没収され、箱の荷物が 10 万レイスを超えると、その超過分には税金が課され、苦情が相次いでいたと述べている⁷⁴。

このエピソードは、乗組員たちがインドから 10 万レイス以上の物品を持ち帰っていたことを示している。リンスホーテンによると、当時の下級兵士の 3 カ月分の給料は、7 パルダウであった⁷⁵。1 パルダウを 300 レイスとすると、1 か月分の給料は 700 レイスとなる。10 万レイスは、約 143 カ月分の給料の額となる。3 年間の任期の給料の約 4 倍近い金額の物品が、1 個の箱の中に入っていたことになる。コショウなどは禁制品だったので、自由取引が認められていた高価な真珠や宝石が箱に入れられ、リスボンにもたらされたのである。真珠は、ヨーロッパ本国にいる人たちがインドへの赴任者にその購入を委託する品でもあった。この場合、赴任者たちは、インドで購入した真珠を机などに隠して持ち帰った⁷⁶。

このように、ゴア・リスボン・ルートは、16 世紀に発展した遠隔地交易のルートであり、アジアの多くの真珠をヨーロッパに運んだのである。

4.2 流通経路 2 ゴア・ホルムズ・ルート

ゴア・ホルムズ・ルートは、ポルトガル領インドの主要都市を結ぶアジア域内交易のルートである。第 4 章では、ホルムズ・ゴア・ルートによって大量のペルシア湾の真珠がゴアにもたらされていることを明らかにしたが、真珠はゴアからホルムズにも向かっていた。こうした輸送を手掛けたのが、ゴアに蝟集しているアラブ商人、ペルシア商人、トルコ商人、アルメニア商人、ヴェネツィア商人など、世界各地の商人たちであった⁷⁷。ゴアでは世界各地の真珠をはじめ、ダイヤモンドやルビーなどの宝石も購入できたため、商人たちがゴアに渡航する意味はあった。

ホルムズは「ペルシア湾真珠生産圏」の真珠集散地であり、サファヴィー朝ペルシアやメソポタミアに流通網を伸ばしていた。メソポタミアへのルートは、さらにトルコやカフカス地方、サファヴィー朝ペルシア北部、それにヨーロッパに続いていた。

リンスホーテンは、ホルムズとゴアでは非常に大掛かりな真珠取引があることを述べている⁷⁸。ポルトガル領インドの二大主要都市を結ぶゴア・ホルムズ・ルートは、ポルトガルが発展させたアジア域内交易ルートであった。この交易ルートでは、真珠は双方向に動いたのである。

4.3 流通経路 3 ゴアでの退蔵

16 世紀にはゴア自体が真珠の希求先になり、多くの真珠が退蔵された。真珠の退蔵に大

⁷⁴ リンスホーテン（岩生他訳）『東方案内記』、83 頁（第 3 章）、637~638 頁（第 93 章）。

⁷⁵ リンスホーテン（岩生他訳）『東方案内記』、295 頁（第 29 章）。

⁷⁶ Boyajian, *Portuguese Trade in Asia under the Habsburgs*, p. 48.

⁷⁷ リンスホーテンは、ゴアで暮らす多くの外国人について言及している。リンスホーテン（岩生他訳）『東方案内記』、326 頁（第 33 章）。

⁷⁸ リンスホーテン（岩生他訳）『東方案内記』、539 頁（第 84 章）。

きな役割を果たしたのが、キリスト教聖職者やその関係者である。ゴアには司教座大聖堂が設立され、多くの聖職者が暮らし、フランシスコ会、イエズス会などの諸修道会も進出した。キリスト教の祭祀用の道具などに多くの真珠や宝石が使われてきたことは、すでに第3章や第5章で見てきたとおりである。

また、ゴアには、真珠を扱う民間ポルトガル商人、バニヤン商人、その他、多くの真珠商、宝石商などが暮らしていた。真珠商は、常に膨大な真珠の在庫をもっている。一方、競売などを専業とする民間ポルトガル人たちは、彼ら自身や妻を真珠や宝石の装身具で豪華に飾ることに余念がなかった⁷⁹。こうした人々の存在によって、ゴア自体が真珠の一大「新興希求地」になったのである。

4.4 流通経路4 ゴア・カンベイ・ルート

ゴアは、カンベイにも真珠の流通網を伸ばしていた。16世紀、カンベイは、真珠の調達先としてゴアとの関係を強化し、ゴア・カンベイ・ルートを発達させたことは、すでに検討した。ムガル帝国の港町で、カンベイと同じグジャラート地方のスーラトも、ゴアとの交易を発達させた⁸⁰。カンベイやスーラトは、ゴアで調達した真珠を使った宝飾品などを、ムガル帝国の内陸部の諸都市や他の地域に輸出する役割があった。

ゴア・カンベイ・ルートは、伝統的なアジアの「加工集散地」とヨーロッパ傘下の新興の真珠の集散地が結びついたアジア域内交易の事例である。

4.5 流通経路5 ゴア・インド内陸部・ルート

ゴアは、もともとムスリム五王国のひとつであるビージャプル王国の外港だった。そのために、同王国をはじめ、他のムスリム王国やヴィジャヤナガル王国などのインド内陸部の諸王国とゴアを結ぶ交易は、早くから発達していた。交易ルートは陸路であり、河川を使う場合もあった。すでに検討したように、ヴィジャヤナガル王国は、二級品の真珠でも高値を払う熱烈な真珠の「伝統的希求者」であった。民間ポルトガル商人は、そのことを理解しており、陸上ルートでゴアに集まる真珠を輸送した。彼らは海上商人であったが、このルートには積極的に関与していた⁸¹。

ヴィジャヤナガル王国やビージャプル王国、ゴールコンダ王国はその領域内でダイヤモンドが採れることで名高い。また、ヴィジャヤナガル王国は多大な金を保有していたことも知られている⁸²。ゴア・インド内陸部・ルートは、民間ポルトガル商人が真珠を輸出することで、インド内陸部の諸王国からダイヤモンドや金を引き出し、多大な利益を得たルートであった。

⁷⁹ リンスホーテン（岩生他訳）『東方案内記』、289頁（第29章）、309頁（第31章）。

⁸⁰ Pyrard, *The Voyage of Francois Pyrard of Laval*, vol. 2, p. 245.

⁸¹ Disney, “Smugglers and Smuggling,” p. 59.

⁸² ゴンサーレス・デ・メンドーサ（長南実他訳）『シナ大王国誌』（岩波書店、1965年）、581~583頁。

4.6 流通経路6 ゴア・マラッカ・中国ルート

第5章では、マンナール湾の真珠が中国に運ばれていることを明らかにした。この輸送を担ったのが、民間ポルトガル商人である。おそらく彼らはマラッカなどを拠点に、マカオや広州まで行き、中国に真珠を輸出した。その対価として、中国から絹や陶磁器、金などを入手した。中国は、伝統的に真珠の購入に金、銀を使用していたが、16世紀は中国における銀の需要が大きかったため、金が用いられたと考えられる。事実、16世紀半ばから17世紀半ばにかけて、ヨーロッパは中国における銀対金の交換比率を利用して、かなりの分量の金を引き出していたことが知られている⁸³。真珠も中国からの金の獲得に貢献したことが推定できる。

民間ポルトガル商人は、中国やボルネオの二級品の真珠をゴアにもたらしていた商人でもある。マカオや広州への真珠の輸出と、中国やボルネオからの真珠の輸入を、同じ商人が担っていたかどうかは定かではない。商人にはそれぞれ得意分野があり、彼ら独自の収益の方法があるので、別の商人だった可能性が高い。いずれにせよ、民間ポルトガル商人が築き上げた「非公式帝国」では、真珠は重要な交易品であった。

4.7 流通経路7 ゴアに蝟集する各地の商人ルート

ゴアをハブとする真珠の流通で、忘れてはならないのは、ゴアに蝟集する世界各地の真珠商や商人が故国に真珠をもたらすルートである。商人の出身地によっては、ゴアとの真珠取引は、面と面との交易による交易圏の形成というほど大きなものではなかった場合もある。しかし、真珠の取引は、世界の諸地域から来た国際商人によって実施され、車輪のスポークのように世界各地に向けて放射状に拡がり、一筋の流通網によって幾つもの世界各地の希求地と結びつくものであった。まさに「ハブ・アンド・スポーク交易」のネットワークが存在したのである。

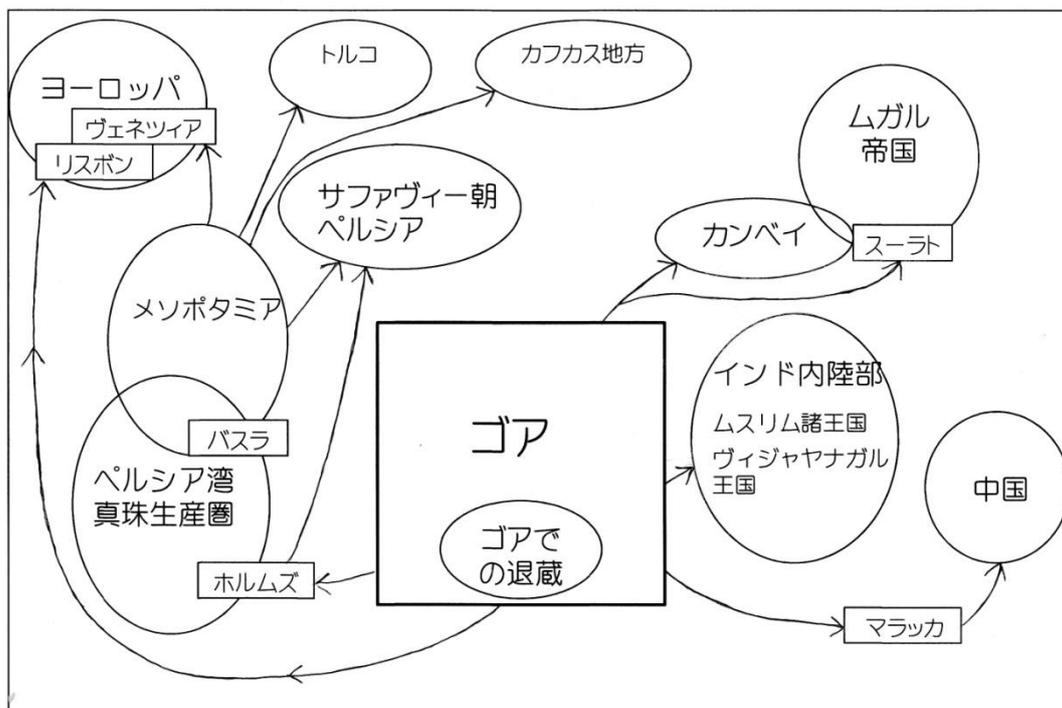
以上、ゴアを起点とする真珠の「ハブ・アンド・スポーク交易」を考察した(図1)。ゴアから出る流通ネットワークは、リスボン、ホルムズ、メソポタミア、ヴェネツィア、カンベイ、スーラト、インド内陸部、中国をはじめ、世界各地と接続していた。その交易形態は、遠隔地交易とアジア域内交易があり、海上輸送もあれば、陸上輸送もあった。さらに、ゴア自体での退蔵もあった。係わる商人も、民間ポルトガル商人だけでなく、バニヤン商人、グジャラートのイスラーム商人、アラブ商人、ペルシア商人、ヴェネツィア商人など、民族性豊かな様々な商人が存在した。16世紀の真珠の取引は、地球規模で真珠を集める「グローバル市場」ゴアを中心に、多くの国際商人が参加し、ヨーロッパや西アジア、東アジアなどの世界各地へと真珠を拡散させ、流通網を広げていた。

「ペルシア湾真珠生産圏」の集散地ホルムズも、真珠の「ハブ・アンド・スポーク交易」でアジア世界やヨーロッパ世界と結びついていたが、ゴアは新世界やアジア各地の多様な

⁸³ フリン(秋田他編)『グローバル化と銀』、44頁。

真珠も集め、ヨーロッパへの遠隔地交易も含めた真珠交易を擁する「グローバル市場」だったのである。

図1 ゴア起点の真珠の「ハブ・アンド・スポーク交易」



注： 図は、真珠の取引量ではなく、流通の方向を示すものである。

小括

本章では、ポルトガル海洋帝国が成立させたゴアという真珠市場に着目し、真珠の調達、商人層、ゴア起点の真珠の流通を検討した。本章の分析により判明したことは、ゴアは、アコヤ系真珠の「三大真珠生産圏」の「上位集散地」となり、さらに地球規模で多種多様の真珠を集め、アメリカ、ヨーロッパ、アジアと接続する「グローバル市場」になったことである。この考察によって、商品の世界的拡散の分析が主流であるグローバル経済史の研究に、世界各地の産地からひとつの商品を集約する、ある意味で逆方向の「グローバル市場」の誕生という経済発展の事例を加えることになった。アジア世界における真珠の「グローバル市場」の成立は、史上初の出来事であり、真珠は、ガレオン貿易開始以前から、アメリカ、ヨーロッパ、アジアを移動した「グローバル商品」であった。本章は、民間ポルトガル商人は、真珠の嗜好の違いを地球規模で分析する「グローバル思考」を培っていたことも明らかにした。

ゴアが真珠の「グローバル市場」として発展した第一の要因は、イベリア半島の二大帝国によるアコヤ系真珠の「三大真珠生産圏」支配の確立である。彼らが「南米カリブ海真珠生産圏」、「ペルシア湾真珠生産圏」、「マンナール湾真珠生産圏」を支配することで、真

珠の商取引にもっとも適したアコヤ系真珠を手中にしたからである。

第二の要因がゴアを拠点とする真珠商の成長である。民間ポルトガル商人やグジャラートのバニヤン商人、アジア各地の商人たちがゴア市場の成長に大きく寄与した。16世紀、真珠の大市場はカリカットからゴアへと移り、アジアの真珠商はチェッティやマーッピラからバニヤン商人へと変化した。本章の考察は、特にバニヤン商人が、ポルトガル支配を奇貨とすることで、真珠商としての地歩を固め、真珠の小売りを行うことで、世界各地の商人たちを招来し、ゴア市場のグローバル化に貢献したことを明らかにした。

第三の要因が、アジア世界における「伝統的希求地／希求者」の存在とゴアの地理的近さである。真珠市場の発展にはその需要先となる希求地が必要であるが、豊かなアジアの諸王朝や諸地域における旺盛な真珠需要は、ゴアに世界各地から多くの真珠を集めるきっかけとなり、ゴア市場のグローバル化を促進することになった。

つまり、アジア世界における真珠の「グローバル市場」の成立は、ポルトガル海洋帝国の「二大真珠生産圏」支配及びスペイン帝国の「南米カリブ海真珠生産圏」支配、民間ポルトガル商人の活躍の他、バニヤン商人の台頭やアジア各地の商人の来訪、アジア世界における「伝統的希求地希求者」の存在などの要因が相互に関連することで実現したものであった。ゴアにはアジアの各地から真珠を求める商人が集まり、その流通網はゴアをハブとしてアジア各地に車輪のスポークのように拡がっていた。こうしてヨーロッパとアジアの関係や交流が活発化し、ゴアは真珠の流通の中心に位置するようになったのである。

これまで本論文が繰り返し指摘してきたように、ポルトガルの対外拡張史やインド洋海域史、近代世界システム論、グローバル経済史などの研究では、アジア世界におけるポルトガル人の役割が過小評価されてきた。I. ウォーラーステインは、ポルトガルの植民地体制は、南アジアの商業に何ひとつ新しい要素をもたらさなかったというJ. C. ファン・レールの言説を引用し、ポルトガルの影響力の低さを主張しているが、A. フランクも、同じレールの言葉を追認し、ポルトガルの優位性を否定している⁸⁴。

こうした通説に対し、本論文は、換金性の高い真珠という商品の特性、「ペルシア湾真珠生産圏」及び「マンナール湾真珠生産圏」におけるポルトガル支配の確立、アジア世界における真珠の「伝統的希求地／希求者」の存在、「ペルシア湾真珠生産圏」及び「マンナール湾真珠生産圏」をハブとする真珠の流通の拡がりなど、真珠のコモディティ・チェーンの生産、希求、流通面の考察を行うことによって異を唱えてきた。

さらに本章では、ゴアという真珠市場を考察したが、そこから見えてきたのは、インド洋海域世界の真珠取引におけるポルトガル海洋帝国の役割の大きさである。ポルトガルは政治的・軍事的・経済的・宗教的な活動を相互に関連させることでアコヤ系真珠の「二大真珠生産圏」の支配を実現したが、それは「グローバル市場」ゴアの発展につながってい

⁸⁴ I. ウォーラーステイン (川北稔訳)『近代世界システム 1——農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立』(名古屋大学出版会、2013年、原著1974年)、375頁；フランク (山下訳)『リオリエント』、313~314頁。

った。これまで伝統的に真珠を扱ってきたアジア各地の真珠商たちは、アコヤ系真珠をはじめとする多種多様の真珠の入手のためには、ポルトガル支配を認め、ゴアに出向く必要があった。ゴアにはアジアの多くの商人が集まり、バニヤン商人やアジアの「伝統的希求地／希求者」の存在によって、真珠取引は活発化し、アメリカの真珠まで集めるアジアにおける史上初の「グローバル市場」となった。この点において、ポルトガルの植民地体制はアジアの商業を変えなかったという見解は修正されなければならない。真珠の「グローバル市場」ゴアの考察は、アジア世界におけるポルトガルの活動の過小評価の通説に再考を迫るのである。

補論 16 世紀末の真珠の価格

はじめに

本論文は、これまでスペイン帝国とポルトガル海洋帝国が「南米カリブ海真珠生産圏」、
「ペルシア湾真珠生産圏」及び「マンナール湾真珠生産圏」を支配することで、ヨーロッ
パ人が多くの真珠を手にしたことを明らかにしてきた。真珠は輸入量が増えたことによっ
て、その価格は下がったのだろうか。ここでは、16 世紀末の真珠の価格について補足して
おく。

真珠史の先行研究では、M. A. ウォルシュが、新世界の真珠の発見とヨーロッパへの真
珠の大量流入は、ヨーロッパの身分体系をひっくり返し、16 世紀末には真珠はそれほど重
要ではなくなったと主張している¹。彼女の議論は、真珠が大衆化したという 16 世紀の叙述
者たちの言説を、当時の時代背景を考えずに、参照したことにより導かれたもので、16 世
紀末の真珠の価格の分析による議論ではない²。

したがって、ここでは、E. L. サンスの研究の参照、16 世紀末のヤン・ハイヘン・フォ
ン・リンスホーテンの記述の分析などによって、真珠の価格を明らかにし、第 3 章で検討
したアメリカゴ・ヴェスプッチの述べる 1499 年から 1500 年時の価格と比較する³。こうした
真珠の価格の検討は、真珠史研究ではいまだかつて存在しない。

¹ Molly A. Warsh, *American Baroque: Pearls and the Nature of Empire, 1492-1700* (Chapel Hill, University of North Carolina Press, 2018), p. 81

² M. A. ウォルシュは、スペインでは大量の真珠が短期間に流入したので、いまや男も女も、
豊かな者も貧しい者も、大粒真珠 (*perlas*) と真珠 (*aljófar*) をつけているというフランシ
スコ・ロペス・デ・ゴマラの記述や黒人女性も真珠を所有しているというホセ・デ・アコ
スタの記述を参照し、南米からスペインに運ばれた大量の真珠が大衆化を促し、真珠の希
少性が失われたと主張している。ゴマラの記述は、ベネズエラやコロンビア、パナマなど
の沿岸部で真珠の狂騒が起こり、「物々交換」で略奪された真珠も数多くもたらされていた
16 世紀前半の話であり、一過性の現象を指している。一方、アコスタの記述は、16 世紀後
半のスペイン領アメリカの話であるが、当時のアメリカでも真珠は大いに希求されていた。
彼らの言説の時代や背景を考えず、貧しい者や黒人女性が真珠を所有しているという記述
だけで、真珠を過小評価することはできない。Francisco López de Gómara, *Historia
general de las Indias*, (Madrid: Espasa-Calpe, 1941), vol. 2, pp. 206-7 (chap. 198); ゴマ
ラ (清水憲男訳) 『拡がりゆく視圏 (*Historia general de las Indias* の抄訳)』、260 頁; José
de Acosta, *Historia natural y moral de las Indias*, (Mexico: Fondo de Cultura Económica,
1962), pp. 168-9 (cap. 15); アコスタ (増田義郎訳注) 『新大陸自然文化史 (上)』、363~365
頁を参照。

³ Eufemio Lorenzo Sanz, *Commercio de España con América en la época de Felipe II: La
navegación, los tesoros y las perlas*, vol. 2 (Valladolid: Servicio de Publicaciones de la
Diputación Provincial de Valladolid, 1980); Jan Huygen van Linschoten, *Itinerario:
Voyage ofte schipvaert van Jan Huygen van Linschoten naer Oost ofte Portugaels
Indien 1579-1592*, ed. H. Kern, 3 vols. (The Hague: Martinus Nijhoff, 1955-7), vol. 2, p.
183 (chap. 91); リンスホーテン (岩成成一他訳) 『東方案内記』 (岩波書店、1968 年)。大
航海時代黎明期の真珠の価格については、第 3 章 2 節を参照。

第1節 16世紀末の真珠の価格

天然真珠時代のヨーロッパの真珠の価格の算定法として、「ベース法」と呼ばれるものがある。この算定法は、20世紀初めの欧米で採用されていたが、リンスホーテンの記述から、すでに16世紀後半にも真珠やダイヤモンドなどの宝石の価格の算定で使われていたことがわかる⁴。「ベース法」とは、事前に基準となる真珠の重量単位と基準となる真珠の価格を決めておき、真珠の重量が増えるごとに、価格は重量単位の自乗数を適用していく算定法である⁵。たとえば、1カラット（0.2グラム）を基準の単位とし、その価格を1ドゥカドとすると、2カラットの真珠は4ドゥカド、3カラットの真珠は9ドゥカドとなる。基準となる真珠の価格を2ドゥカドとすると、2カラットの真珠は8ドゥカド、3カラットの真珠は18ドゥカドとなる。つまり、真珠の重量が、0.2グラム増えるごとに、その価格は累進的に跳ね上がることになる。当時の天然真珠のネックレスは、個々の真珠の重量がまったく同じではなかった。したがって、ネックレスの価格は、それぞれの真珠の価格を重量からベース法で計算し、それらを合算して算定した。このベース法を理解した上で、16世紀後半の真珠の価格を検討してみたい。

サンスは、1580年頃のマルガリータ島におけるさまざまな真珠の価格について言及している⁶。それによると、真珠は34に分類され、その多くがオンス（28.75g）やマルコ（230g）の単位で売られ、それぞれ価格がつけられた。そうした中、1個ごと価格がつけられたのが、「球形真珠」*perlas redondas* と呼ばれる真珠である。1カラット（直径5.23ミリ）の球形真珠の価格は2.17ドゥカドで、2カラット（直径6.64ミリ）の球形真珠は6ドゥカドである。さらに、球形真珠が6カラット（直径9.71ミリ）になると、200ドゥカドとなり、7~8カラット（直径10ミリ台）は、400ドゥカドである。マルガリータ島では、真珠の重量が増えると、ベース法の算出方法よりも、さらに値段が上がっていることがわかる。さらに真珠の大きさから、パナマクロチョウ真珠なども入っていたことがわかる。これらは真珠の産地での価格であり、ヨーロッパでの価格はさらに高くなる。

一方、リンスホーテンは、1596年に上梓した地誌の中で、ひびや皺がなく、球形で、色合いと光沢が完璧な1カラットの真珠（*peerle*）は、1ドゥカドの値段であると述べている⁷。文脈から見て、この1ドゥカドはヨーロッパでの価格と推定される。

本論文は第3章「南米カリブ海真珠生産圏」で、1499年から1500年の大航海時代黎明期にベネズエラのカリブ海沿岸部に航海したヴェスプッチが得た真珠の価格について検討した。その考察において、ヴェスプッチが鈴1個との交換で入手した157個の真珠は1000ドゥカドの価値があったこと、真珠1個に換算すると、6.37ドゥカドの価値になることを

⁴ 久米武夫『新宝石学』（風間書房、1972年）、682~684頁；リンスホーテン（岩生他訳）『東方案内記』、554~557頁（第88章）、565頁（第91章）。

⁵ リンスホーテン（岩生他訳）『東方案内記』、556頁（第88章）。

⁶ Sanz, *Comercio de España con América*, p. 24.

⁷ Linschoten, *Itinerario*, vol. 2, p. 183 (chap. 91); リンスホーテン（岩生他訳）『東方案内記』、565頁。

明らかにした。真珠は、ヴェスプッチがベネズエラで取得していることから、その多くはアコヤ系真珠であり、大きさは、一級品の真珠となる直径 5~6 ミリ台と推測した⁸。カラットで言えば、1 カラットから 2 カラットに相当する。

これからヴェスプッチが得た真珠の価格と、1580 年代及び 1596 年時の真珠の価格を比較するが、ヴェスプッチの真珠は 1 カラットまたは 2 カラットとして考える。それらの真珠はそれぞれ 1 個 6.37 ドゥカドとする。これが大航海黎明期の真珠の価格である。一方、サンスの研究では、1580 年代には 1 カラットの球形真珠は 2.17 ドゥカド、2 カラットだと 6 ドゥカドである。ヴェスプッチ時代と 1580 年代では、1 カラットの真珠は価格が約 66 パーセント下落しているが、2 カラットの真珠では、約 6 パーセントの下落で、大航海時代黎明期とほとんど同じである。

一方、1596 年のリンスホーテンの地誌によると、1 カラットの真珠が 1 ドゥカドであった。ベース法を適用すると、2 カラットは最低 4 ドゥカドの価格となる。ヴェスプッチの真珠の価格と比較すると、1 カラットの真珠の価格は約 84 パーセントの下落であるが、2 カラットでは約 37 パーセントの下落である。

この下落率を、どう解釈すればいいだろうか。16 世紀は、新世界からも、インド洋海域世界からも大量の真珠がヨーロッパに輸入されていた時代であった。インフレ率は考慮していないが、真珠の供給量が明らかに増加したことを勘案しても、真珠の価格は——その重量にもよるが——劇的には下落しなかったと推定できる。100 年経っても、真珠の価格がそれほど変わらなかったという事実に着目すべきである。

真珠の高い価値が維持されていたことは、兵士の賃金から見ても明らかになる。第 6 章で検討したように、リンスホーテンによると、ポルトガル領インドに赴任するポルトガルの下級兵士の月給は 700 レイスであった。1 ドゥカドを 400 レイスとし、ドゥカドに換算すると、兵士の月給は 1.75 ドゥカドとなる⁹。1 カラットの真珠がふたつあれば、下級兵士の 1 か月分の給料を上回ることになる。真珠の価格を検討すれば、16 世紀末においても人々が高価な真珠を追い求める時代は、終わっていなかったことが明らかになる。

第 2 節 真珠の価格維持の要因

16 世紀、真珠は供給量が増加したのに、価格はなぜ下がらなかったのだろうか。主に三つの要因が考えられる。第一の要因は、真珠は顕示や退蔵で使われたからである。ヨーロッパの王侯貴族は、真珠を権力と富の象徴として使用していたため、真珠の希求熱が収まることはなかった。エリザベス 1 世の真珠コレクションに模造真珠が入っていたことは、真珠がまだまだ供給不足であったことを物語っている¹⁰。キリスト教関係者や教会そのものも、

⁸ 第 3 章 2 節を参照。

⁹ 1 ドゥカドは普通 360 レイスで計算するが、リンスホーテンは 1 ドゥカドを 400 レイスとしている。リンスホーテン（岩生他訳）『東方案内記』、83 頁（第 3 章）を参照。

¹⁰ Janet Arnold, *Queen Elizabeth's Wardrobe Unlock'd* (Leeds: Maney, 1988), p. 191.

真珠の重要な退蔵先であった。さらに、アジアには真珠を求めてやまない「伝統的希求地」や「伝統的希求者」が存在した。アジア世界では膨大な量の真珠が退蔵されており、真珠は恒常的に品薄であった。

第二の要因は、ヴェネツィアなどヨーロッパの一部の地域における真珠の希求者層の拡大である。南米カリブ海の真珠の大量流入を契機として、ヨーロッパでは真珠の希求者層が王侯貴族や特権的な商人貴族層ばかりでなく、都市の上流階級やエリート層、富裕な市民階級にまで拡がり、真珠の需要が高まっていた。こうした希求者層の拡大は、1599年のヴェネツィアの真珠に関する法令の内容から明らかになる。この法令は真珠使用制限令として知られている。法令によると、貴族であろうと、市民であろうと、ヴェネツィア総督一家を除くあらゆる女性は、結婚日から15年間しか真珠の着用が認められなかった。15年が過ぎると、真珠の着用は禁止され、違反すると、200ドゥカトの罰金だった。真珠使用制限令は1609年にも再び公布されており、この時には真珠の着用期間が10年と短くなり、罰則規定が強化された¹¹。真珠使用制限令は、その後も公布されているので、効果を出せなかったと言われている¹²。一方、こうした一連の法令から、ヴェネツィア総督一家などの支配者が、真珠の普及を阻止し、真珠をいまだに彼らの独占にする意図があったことがわかり、支配者側の真珠への執着も衰えていなかったことも明らかになる。こうした真珠使用制限令をはじめ、真珠や金、銀の使用を禁止する奢侈禁止令は、16世紀のドイツのアウクスブルク、フランス、イギリスなどでも出されているが、スペインやポルトガルの状況は定かではない¹³。

第三の要因が、真珠が本質的に供給量の少ない奢侈品であったからである。確かに16世紀は真珠の生産量や輸入量が増えたが、ヨーロッパ各地の一般大衆にまで広く普及した訳ではなかった。ヴェネツィアなどの真珠の普及とその制限は、ヨーロッパの真珠集散地における先端的な動きであり、ヨーロッパの多くの地域では、真珠はいまだに入手がままならない高根の花であった。

このように、威信財や退蔵財としての真珠の受容形態、一部の地域における真珠の希求者層の拡がり、その一方で多くの地域における真珠の恒常的供給不足などによって、16世紀のヨーロッパでは真珠の価格が維持されたのである。

16世紀は、スペイン帝国とポルトガル海洋帝国というヨーロッパ勢力が、新世界とインド洋海域世界のアコヤ系真珠の「三大生産圏」を支配下に置き、ヨーロッパ人が大量の真珠を享受した史上初の時代であった。真珠の供給量は大幅に増加したが、その一方で需要はさらに高まり、真珠の価格は維持されていた。コショウのように消費によって消滅しない真珠は、換金や転売が繰り返され、加工によって付加価値がつけられ、価格はさらに高

¹¹ Kunz and Stevenson, *The Book of the Pearl*, pp. 26-7.

¹² Kunz and Stevenson, p. 28.

¹³ Kunz and Stevenson, pp. 25-8; 川北稔『洒落者たちのイギリス史——騎士の国から紳士の国へ』(平凡社、1986年)、9~95頁。奢侈禁止令は、16世紀以前からフランスやイギリス、ドイツで出されていた。

騰し、ヨーロッパ各地の王侯貴族や富裕層、都市のエリート層などの最終希求者に運ばれた。大航海時代黎明期と 16 世紀末の真珠の価格を検討すると、真珠の生産者、スペイン領アメリカやポルトガル領インドへの赴任者、真珠の輸出業者や輸送業者、真珠の卸商や小売商、真珠・宝石職人、キリスト教聖職者、さらに奴隷商や海賊まで、真珠の入手や取引に係わったヨーロッパ人は、いずれも多大な利益を得たことが明らかになる。

終章 比較史的考察、16 世紀における真珠の意義

はじめに

本論文は、南米カリブ海、ペルシア湾、マンナール湾というアコヤ系真珠の三大産地である海域とその湾岸世界に焦点を当てることで、なぜスペイン勢力とポルトガル勢力は真珠の大産地に進出していったのか、なぜこれらの産地やその真珠は彼らにとって重要だったのか、彼らはそうした海域・地域からどのように富を引き出したのかを検討した。さらに、これまで看過されてきた真珠という物品の取引及び真珠採取業という水産業の実施を 16 世紀史に加えることで、真珠は 16 世紀世界に何をもたらし、何をどう変えたのかを考察した。

本論文は、こうした問いに答えるために、海域と湾岸世界を一带と見る広域俯瞰及びコモディティ・チェーン分析という手法を取り入れた。広域俯瞰では「真珠生産圏」という概念を提唱し、一国史を超えた海域・地域におけるヨーロッパの対外拡張の歴史的展開を検証した。真珠のコモディティ・チェーン分析では、生産面、希求面、流通面をそれぞれ検討した。さらに、本論文は 16 世紀の真珠市場ゴアに着目し、その特徴を考察した。

具体的には、本論文は五つの研究課題を設定した。第一に、南米カリブ海、ペルシア湾、マンナール湾という三つの海域における「真珠生産圏」の具体的な認識及び「真珠生産圏」へのスペイン勢力、ポルトガル勢力の進出経緯とその理由の解明である。第二に、真珠のコモディティ・チェーンの生産面における生産者、潜水労働者、海域支配の実態究明である。第三に、真珠の希求面の分析で、「伝統的希求地／希求者」、「新興希求地／希求者」、「加工集散地」、「上位集散地」の具体的な検証とその歴史的意義の検討である。第四の研究課題は、「ハブ・アンド・スポーク交易」という概念の使用による真珠の流通ネットワークの解明と流通を担う商人層の考察である。第五に、ゴアという真珠市場のグローバル性とゴアを拠点とする真珠商の分析である。

これらの課題を論じるために、本論文は次の二点を議論の前提とすべく、それぞれ第 1 章、第 2 章で整理・分析した。第 1 章で論じたのは、真珠及び真珠貝の生態学的考察である。本論文は、南米カリブ海、ペルシア湾、マンナール湾に生息する優占種の真珠貝はアコヤ真珠貝という同種の真珠貝であるという最新の生態学・水産学的知見を取り入れている。地球上にはアコヤ真珠貝の大産地と見なせる海域は五つほどしかなかったが、南米カリブ海、ペルシア湾、マンナール湾はその内の三つの海域であった。こうした生態系的知見によると、これらの海域には同じ貝が生息し、同じ真珠が採れるという共通性が明確になる。この知見に基づき、第 1 章ではアコヤ系真珠の大きさとその出現率を検証した。本論文は、欧米の研究が参照してこなかった日本人のアコヤガイ調査報告などを中心に分析し、(1) 商業的に利用されてきたアコヤ系真珠の平均的な大きさは、直径 3 ミリから 6 ミリ台であること、(2) 直径 5 ミリの真珠の出現率は、0.015 パーセントであること、(3) 真珠は小さくなるほど、出現率が上昇し、かなりの量が採取できることを解明した。こうし

たことを踏まえ、本論文は、(1) アコヤ系真珠は、生産量の多さから真珠採取業を成立させ、商人の流通網で運ばれる商品であること、(2) それゆえ、真珠のコモディティ・チェーン分析の対象とするのにもっとも適した海産真珠であることを明らかにした。また、1カラット（直径 5.23 ミリ）の真珠を、一級品のアコヤ系真珠の標準的な大きさとするにしました。クロチョウ真珠は、アコヤ系真珠とともに、古来、人類に珍重されてきたが、良質な大粒真珠は献上用の真珠となり、商人が扱う真珠ではないことも明らかにした。

次に本論文が議論の前提としたのが、16 世紀のスペイン語とポルトガル語で使われた *aljófar* という単語が、「普通の」真珠を指すということである。第 2 章は、このことの正当性を解明した。さらに、本論文は、*aljófar* が、多くの場合、アコヤ系真珠を指すことも明らかにし、第 3 章以降の各「真珠生産圏」の考察の中で、その事実を確認していった。真珠史を含む歴史学や欧米の言語学では、*aljófar* を *seed pearls* と訳するのが一般的である。それゆえ、*aljófar* を「真珠」と見なした真珠史はこれまで叙述されてこず、本論文が初めてであった。*aljófar* を「普通の」真珠と解釈することは、16 世紀の一次史料の判読に役立つ、16 世紀の真珠世界を正確に構築することが可能となった。

本論文は、上記二点の前提に基づき、第 3 章から第 5 章にかけて、南米カリブ海、ペルシア湾、マンナール湾とその沿岸部を主体とする「三大真珠生産圏」をそれぞれ考察していった。本章は、各章の検討で明らかになった歴史的事実やその結論を比較しながら、総括する。その後、16 世紀史の再検討を行いたい。

第 1 節 比較史的考察

1.1 「真珠生産圏」におけるスペイン・ポルトガルの対外拡張

本論文の第一の課題は、南米カリブ海世界、ペルシア湾世界、マンナール湾世界では、16 世紀前後に真珠漁場、採取地、集散地が経済的に結びつく「真珠生産圏」が形成されていたか否かを検討することであった。本論文は、アコヤ真珠貝の分布状況と真珠採取地や集散地を特定することで、それぞれの海域で、「南米カリブ海真珠生産圏」、「ペルシア湾真珠生産圏」、「マンナール湾真珠生産圏」が形成されていたことを解明した。

次に本論文は、これらの「真珠生産圏」へのヨーロッパ勢力の進出経緯とその動機や理由を考察した。まず本論文は、真珠は古代ギリシア・ローマ時代からヨーロッパ人が憧れ続けたオリエント世界の特産品であり、大航海時代黎明期、きわめて高価だったことを明らかにした。各章の分析により、本論文は、「三大真珠生産圏」では、(1) 真珠獲得というヨーロッパ人の致富衝動が、対外進出の大きな動機となったという共通性があること、(2) その致富衝動が、略奪、征服、入植、水産業の実施をうながし、さらに潜水夫への布教を一層進めたことを解明した。本論文の検討によって、真珠ゆえの征服、真珠ゆえの入植、真珠の獲得という水産業、真珠獲得のための宗教活動という歴史的事象があったことが判明したのである。16 世紀の「地理上の発見」は、ヨーロッパ人による「真珠生産圏」の発見でもあった。16 世紀における重要な物品は、金とスパイスばかりでなかったのである。

真珠の採れる海域はいろいろあるが、とりわけ南米カリブ海、ペルシア湾、マンナール湾の「三大真珠生産圏」でヨーロッパ勢力の対外拡張が深化したのは、「三大真珠生産圏」ではアコヤ真珠貝の存在によって、真珠採取が行われ、真珠採取と集散地が経済的に結びつき、真珠を介した商業活動が活発で、真珠の受容の文化が根づいていたからである。本論文は、真珠の採れる海域及びその沿岸部は、地政学的重要性があったことを明らかにし、その地政学的重要性は、アコヤ系真珠の出現率の高さに起因することも指摘した。

本論文は、ヨーロッパ勢力の陸地への進出、その陸地が生み出す貴金属やコショウなどの農作物の獲得を中心に構築されてきた16世紀の歴史像に、真珠の獲得及びその海域の政治的・軍事的・経済的支配の実現が、ヨーロッパの対外進出の大きな動機となった事実を加えることになった。

1.2 真珠の生産面の分析

本論文は、16世紀の「南米カリブ海真珠生産圏」、「ペルシア湾真珠生産圏」、「マンナール湾真珠生産圏」における真珠採取業の生産面の実態を考察した。以下は、本論文が明らかにし、議論した内容の総括である。

(1) 生産者

「南米カリブ海真珠生産圏」ではスペイン人入植者が真珠採取という水産業の新たな生産者になった。真珠採取業の初期投資は、製糖業よりもはるかに少なく済み、スペイン人生産者自身が真珠採取で富を得ることができた。16世紀は、スペイン人個人事業者が営む、経済的に成功した水産業が存在したのである。

一方、「ペルシア湾真珠生産圏」では、アラブ系・ペルシア系の商人、船主、個人事業者などが真珠採取の生産者であり、「マンナール湾真珠生産圏」ではタミル系の商人や船を所有する漁民などが真珠採取の生産者であった。彼らは伝統的に地先の海で採れる真珠という水産資源を享受してきた民族であり、排他性、民族性が強かった。それゆえ、ポルトガル人が生産者、事業者として真珠採取業に参入するのは難しかったし、彼ら自身もその意図はなかった。

(2) 潜水労働者

真珠採取という労働は、潜水という特殊技能を必要とするため、代替がきかず、特定の民族によって担われてきた。「南米カリブ海真珠生産圏」では、先住民奴隷と奴隷化されたアフリカ人が徴発され、真珠採取業は、初期の「先住民奴隷制水産業」から「黒人奴隷制水産業」へと変化した。「ペルシア湾真珠生産圏」で潜水作業を担ったのは、主にアラブ人で、奴隷化されたアフリカ人も投入された。この地の真珠採取業は「債務隷属制水産業」であった。「マンナール湾真珠生産圏」でも潜水夫は民族性が強く、ヒンドゥー教、イスラーム教、キリスト教と宗教が異なっても、また、インド側、スリランカ側と地域が異なっ

でも、タミル系民族の独壇場であった。マンナール湾では自営の潜水夫も少なくなく、自立性が高かった。

潜水労働力の分析で着目すべきは、こうした潜水夫たちは、16世紀のヨーロッパの対外拡張によって甚大な社会的・宗教的影響を受けたことである。「南米カリブ海真珠生産圏」では、バハマ諸島の先住民が真珠採りに投入されて絶滅した。本論文は、ラス・カサスの *Historia de las Indias* 『インディアス史』のスペイン語原文に基づき、彼の語彙、修辞を分析したが、それにより、この書物が述べるバハマ諸島の先住民の絶滅は事実と見なせることを論証した。

一方、「マンナール湾真珠生産圏」では、イエズス会が、タミル系のパラヴァスとカレアスというヒンドゥー教徒の伝統的な潜水夫に集中的に布教して、強固なカトリック集団を作り上げた。本論文は、ザビエル書簡やヴァリニャーノのイエズス会報告書などを分析することで、先行研究が看過してきたカレアスという真珠採り潜水夫の存在を明らかにし、さらに、(1) ザビエルが先鞭をつけたインドにおけるイエズス会の布教は、インド社会の底辺の貧しい異教徒の魂の救済ではなく、すでに改宗していた真珠採り潜水夫を絶対的帰依を示すカトリック集団に再編し、囲い込んだこと、(2) 布教の戦略には温情主義があったこと、(3) イエズス会は、ポルトガルに従順な潜水労働力を作り上げたこと、(4) イエズス会自身は、生産者ではなかったが、真珠生産の監督者の立場であったことを解明した。イエズス会の温情主義は、「南米カリブ海真珠生産圏」における過酷な潜水労働によるバハマ諸島の先住民絶滅と対極を成す歴史的事実である。ポルトガルはペルシア湾ではアラブ系・ペルシア系商人たちが築き上げた「債務隷属制水産業」のシステムにより、潜水夫を直接支配できなかったが、マンナール湾では、潜水労働者の直接支配に成功したのである。

(3) 海域支配

真珠の生産の考察において欠かせないのが、真珠の採れる海域やその漁場支配の在り方についてである。「南米カリブ海真珠生産圏」では、先住民人口が激減したため、カリブ海は「スペイン人の海」となり、スペイン人事業者は、カリブ海における真珠採取を享受することができた。一方、「ペルシア湾真珠生産圏」及び「マンナール湾真珠生産圏」における真珠採取は、ポルトガル植民地政府の関与と軍事力による海上覇権で特質づけられる。本論文は、「真珠生産圏」という広域の概念で俯瞰することで、ポルトガルによる真珠集散地ホルムズの属国化及び真珠採取地バハレーンの間接支配の関連性を示唆し、ポルトガル人自身は生産者にはならなかったが、「真珠生産圏」の支配によって、真珠を獲得するシステムを構築していたことを解明した。一方、「マンナール湾真珠生産圏」の真珠の大規模採取期には、ポルトガルは、ポルトガル艦隊を派遣して豊饒な真珠漁場をキリスト教潜水夫のために確保する軍事行動を取っており、ポルトガルが関与する真珠採取業は、「官・軍・宗教共同体」で実施されたことを論証した。

以上、本論文は、真珠のコモディティ・チェーンの生産面の考察から、(1) スペイン帝

国とポルトガル海洋帝国にとっては、海は海上交通や物資輸送の場だけでなく、水産資源獲得の場でもあったこと、(2) 重商主義時代として知られる 16 世紀に、国家、軍隊、宗教が関与する水産業があったこと、(3) その水産業は現地の人々に甚大な社会的・宗教的影響を与えたこと、(4) ヨーロッパ人はその水産業から多大な利益を得たことを論証した。ヨーロッパ人が真珠採取業という水産業から利益を得ることができたのは、その海域の真珠貝がアコヤ真珠貝であったからという事実も忘れてはならない。真珠採取業は、16 世紀のスペイン、ポルトガルの帝國的な発展を支えた重要な産業となったのである。次ページの表 1 は「三大生産圏」における生産面の総括である。

1.3 真珠の希求面の分析

本論文は、「三大真珠生産圏」の真珠の希求の実態について考察した。

「ペルシア湾真珠生産圏」及び「マンナール湾真珠生産圏」には、生産量の多いアコヤ系真珠を享受してきた「伝統的希求地」、「伝統的希求者」が存在した。本論文は、バスラやバグダード、アレppoなどの中継都市があるメソポタミア、イラン本土、タミルナドゥ州やデカン高原などのインド内陸部、中国などが、16 世紀においても真珠の「伝統的希求地」であったことを明らかにした。真珠の受容形態は、主に顕示と退蔵である。グジャラート地方やベンガル地方は、「伝統的希求地」であると同時に、真珠の「加工集散地」であった。

16 世紀には真珠の「新興希求者」が現れた。ヨーロッパ各国の王侯貴族や富裕な商人階級、都市の上流階級やエリート層などである。スペイン領アメリカやポルトガル領インドでは、植民地特権階級や富裕層、官吏、兵士、乗組員などの赴任者たち、スペイン人またはポルトガル人入植者や商人たち、さらにキリスト教聖職者などが、16 世紀の真珠の「新興希求者」となった。特にゴアへの真珠の集中は目覚ましく、ゴア自体が「新興希求地」として成長した。民間ポルトガル商人を除く彼らの受容形態は、威信財や資産としての退蔵、あるいは換金である。

こうした真珠の希求の分析によって、次の四つの事実が判明した。

第一に、真珠はもともと多くの需要があるアジアの国際商品であったが、さらに 16 世紀にはアジアの「伝統的希求地／希求者」の存在によって、アメリカ、ヨーロッパ、アジアを接続させる「グローバル商品」になったことである。カリブ海のアコヤ系真珠は、ガレオン貿易が開始される以前の 16 世紀半ばにはすでにゴアに届いていた。

第二に、アジアの「伝統的希求地／希求者」は、真珠の対価として金貨や銀貨、金地金などで支払ったため、ポルトガル植民地政府やポルトガル商人は「真珠生産圏」支配によって、真珠だけでなく、金、銀を獲得したことである。特に、彼らが真珠の集散地ホルムズ支配を通してサファヴィー朝ペルシアから獲得したラリン銀貨は重要であった。この銀貨はインド洋海域世界において、スパイス購入には欠かせない銀貨であったが、彼らは早くからそれを得ていたのである。

表1 アコヤ系真珠「三大生産圏」の生産面の比較

真珠生産圏	生産者	潜水労働力	海域支配	真珠採取地と集散地
南米カリブ海真珠生産圏	<p>1. サンドドミンゴやサンフアンの植民地エリートが派遣したマジョルドモ</p> <p>2. 個人事業者のスペイン人入植者（カノエーロ）</p> <p>特徴 スペイン王室の強い意向による事業成立 スペイン植民地政府の厳しい監視</p>	<p>1. 先住民奴隷</p> <p>2. アフリカ人奴隷</p> <p>3. 自由身分の先住民</p> <p>特徴 先住民奴隷制水産業から黒人奴隷制水産業へ</p>	<p>スペイン帝国による海域支配</p>	<p>真珠採取地 クバグア島、マルガリータ島、クマナ、ベラ岬、リオデラアチャ</p> <p>集散地 初期：サントドミンゴ、サンフアン その後、集散地は形成されず</p>
ペルシア湾真珠生産圏	<p>1. アラブ人商人、船長</p> <p>2. ペルシア人商人、船長</p> <p>特徴 アラブ人・ペルシア人商人などによる真珠採取業の独占 ポルトガル人は真珠採取業に参入せず</p>	<p>1. アラブ人</p> <p>2. アフリカ人奴隷</p> <p>特徴 アラブ・ペルシア商人による債務隷属制水産業</p>	<p>ポルトガルの海上覇権の確立 ホルムズ王国の属国化及びホルムズによるバハレーンの間接支配</p>	<p>真珠採取地 バハレーン島、ジュールファル、カテイーフ、ペルシア湾島嶼、カマラーン（紅海）</p> <p>真珠集散地 ホルムズ、バスラ</p>
マンナール湾真珠生産圏	<p>タミル系キリスト教徒の潜水夫のパラヴァスとカレアス、</p> <p>特徴 イエズス会による潜水労働力の管理、官・軍・宗教共同体による真珠採取の実施 ムスリム及びヒन्दゥー教徒の生産者も存在</p>	<p>1. パラヴァス</p> <p>2. カレアス</p> <p>3. ラッバイ（タミル系ムスリム）</p> <p>4. タミル系ヒन्दゥー教徒の潜水夫</p> <p>特徴 タミル系民族による潜水業の独占</p>	<p>ポルトガル海洋帝国による海域支配 ポルトガル艦隊による漁場の独占と潜水民の護衛</p>	<p>真珠採取地 トゥティコリン、プンナイカーヤルなどのタミルナドゥ南海岸、マンナール島</p> <p>真珠集散地 トゥティコリン、ゴア</p>

第三に、真珠を投資目的に利用した民間ポルトガル商人の誕生である。彼らはペルシア湾やマンナール湾の真珠をアジアの「伝統的希求地／希求者」に輸出することで、多額の富を築くことに成功した。アジア世界では、真珠の受容は主に顕示と退蔵だったため、真珠は恒常的に供給不足であった。それゆえ、民間ポルトガル商人は、アジア域内交易にお

いて真珠の供給者として優位な立場に立ったのである。

第四に、アジアの「伝統的希求者」たちにとっては、ポルトガルの「真珠生産圏」支配とは、彼らが古来、称揚してきたもっとも重要なアコヤ系真珠の大産地を、二カ所とも、ポルトガル海洋帝国に奪われたことを意味したことである。アジアの希求者たちがアコヤ系真珠を獲得するには、ポルトガル傘下の真珠集散地であるゴアやホルムズに行く必要があり、あるいはポルトガル商人やゴアやホルムズを拠点にするアジアの商人たちに頼る必要があった。16世紀史の通説は、ポルトガル人たちは、新世界の銀を得るまで売るものがなかったというものである。しかし、本論文が示した真珠の希求面の考察によって、ポルトガル商人たちが、アジア垂涎の真珠を得、ラリン銀貨を得ていた事実が明らかになった。真珠を扱うポルトガル商人の強みが浮かび上がる。その源泉は、ポルトガル勢力が、もっとも豊饒なアコヤ系真珠の「二大真珠生産圏」を支配したことによるものだったのである。

表2 16世紀の主要な真珠の「伝統的希求地」と希求形態

伝統的希求地	王朝、都市	支払い	希求の形態、特徴
メソポタミア	バスラ、バクダード、アレップなど	金、銀	顕示、退蔵、加工、中継
イラン本土	サファヴィー朝ペルシア	銀（ラリン銀貨）	顕示、退蔵
インド内陸部	ヴィジャヤナガル王国 ムスリム系諸王国	金	顕示、退蔵
中国	明朝	金	顕示、退蔵
グジャラート地方	カンベイ	各種物産	加工、保有、顕示
ベンガル地方	ベンガル・スルタン王国		加工、顕示、退蔵

表3 真珠の「新興希求者」と希求形態

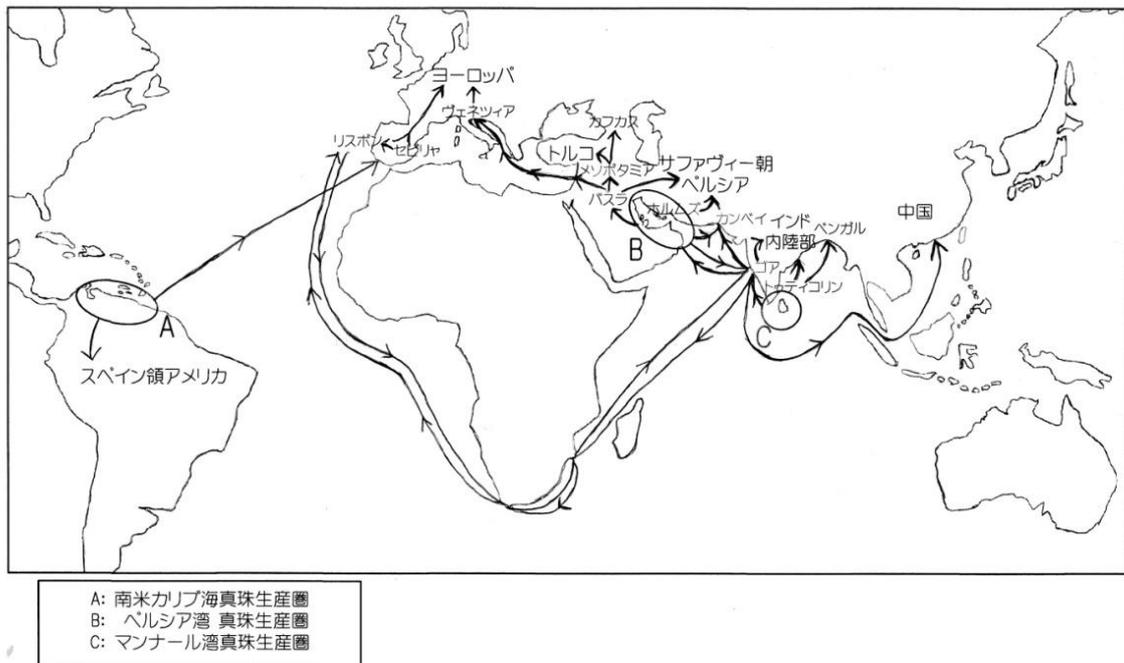
新興希求者の分類	希求形態
ヨーロッパの王侯貴族、富裕な商人	顕示、退蔵
ヨーロッパの都市の上流階級、エリート層	顕示、退蔵
ポルトガル領インドへの赴任者たち（副王、総督、長官、官吏、乗組員、兵士など、特にゴアやホルムズ在住者）	換金による資産形成、顕示、退蔵
民間ポルトガル商人（主にゴア在住）	真珠を投資目的に使用、輸出による資産形成、換金、顕示
キリスト教聖職者	退蔵
スペイン領アメリカの真珠採取業者	輸出による資産形成、換金
スペイン領アメリカの特権階級、富裕層	顕示、退蔵

1.4 真珠の流通の分析

本論文は「ハブ・アンド・スポーク交易」の概念を使い、真珠のコモディティ・チェーンの流通の実態を考察した。流通とは、真珠の生産地と希求地を結ぶネットワークである。

「南米カリブ海真珠生産圏」の真珠の主要な希求地・希求者はヨーロッパであるため、真珠の流通は直線的であった。その一部はインド世界にまで達していた。一方、「ペルシア湾真珠生産圏」及び「マンナール湾真珠生産圏」は、アジア世界の各地に多種多様な「伝統的希求地／希求者」を擁していた。本論文の流通の分析は、(1) 16世紀の「ペルシア湾真珠生産圏」の真珠の流通網は国際性が特徴であり、主にホルムズを中心に、メソポタミアの各中継都市、イラン本土、インド内陸部、グジャラート地方などの「伝統的希求地」と結びついており、さらにメソポタミアを超えてトルコ、カフカス地方、ヴェネツィアにまで広がっていること、(2) 「ペルシア湾真珠生産圏」の新興希求地としてインド西海岸のゴアが「上位集散地」として登場する一方、カリカットなどのマラバール地方との流通は停滞したこと、(3) 16世紀の「マンナール湾真珠生産圏」の真珠の流通の特徴は、インド全土での需要という民族性が強いことで、トゥティコリンとゴアを中心にインド各地と結びついていたこと、(4) 「マンナール湾真珠生産圏」は真珠の流通で中国とも結びついていたこと、(5) 「ペルシア湾真珠生産圏」及び「マンナール湾真珠生産圏」はゴアを経由してリスボンと接続していることを明らかにした。

地図1 16世紀の三大真珠生産圏のハブ・アンド・スポーク交易



そうした真珠の流通の形態は多種多様であった。海上輸送もあれば、陸上輸送もあり、その両方による輸送もある。ヨーロッパと南米大陸を結ぶ大西洋交易、「インド航路」による遠隔地交易、ホルムズとゴアというポルトガル領インドの主要都市間交易、イラン本土、メソポタミア、トルコ、マラッカ、中国に向かうアジア域内交易、インド内陸部交易などがあり、「真珠生産圏」と「加工集散地」のカンベイなどを結ぶ双方向の真珠輸送もある。まさに真珠の流通は異文化間交易であり、トランスリージョナルなものであった。ただ、そうした真珠の流通は、「結節点」となる各港市や中継都市を縦横無尽に結ぶランダムなネットワークではなく、「真珠生産圏」をハブとして、車輪のスポークのように放射状に広がるものであった。16世紀の意義は、ヨーロッパ勢力支配下のアコヤ系真珠「三大生産圏」がハブとなり、アメリカ、ヨーロッパ、アジア世界を接続させる真珠のネットワークが生まれたことであった。地図1は、16世紀の真珠の流通ネットワークを示したものである。

では、こうした真珠の取引を担ったのは、どういう商人だったのか。

ヨーロッパ商人では、セビリャ商人や南米カリブ海の真珠採取業者やその代理人、民間ポルトガル商人、ヴェネツィア商人などが活躍した。「ペルシア湾真珠生産圏」では、ホルムズ、バハレーン、ササン朝ペルシア、メソポタミア、オスマン・トルコなどを出身とするアラブ系、ペルシア系、さらにトルコ系の商人が活躍し、アルメニア商人やユダヤ商人も真珠取引に従事した。一方、「マンナール湾真珠生産圏」においてはインド各地の商人が関わったが、特に優勢だったのが、タミルナドゥ南海岸を拠点にするタミル系商人チェッティであった。「ペルシア湾真珠生産圏」の流通を担う商人層はその多国籍性によって特質づけられる一方、「マンナール湾真珠生産圏」では、タミル系商人を中心とするインド各地の商人の関与という民族性が際立つ傾向がある。16世紀の流通の大きな変化は、「真珠生産圏」から真珠を集めるゴアという「上位集散地」が誕生したことであり、そのゴアでは新たにジャイナ教徒のバニヤン商人が真珠取引で台頭したことである。こうした商人たちは、ポルトガル支配を受け入れたアジアの商人であった。彼らは真珠という供給量の少ない商品を購入するには、ポルトガル傘下の真珠の集散地ホルムズ、トゥティコリン、ゴアなどに行く必要があった。

イスラーム海上商人のマラッカーヤルやマーッピラ、マラバール海岸を拠点にするチェッティも伝統的な真珠商であったが、彼らはポルトガル支配に抵抗し続けた勢力となった¹。彼らは真珠の入手が困難になり、次第に凋落していったが、カーヤルパッティナムやキラカライなどの真珠採取地を拠点とするムスリム・ネットワークを形成し、そこで活路を見出した可能性もある。しかし、そうしたネットワークは、ヨーロッパが作り上げた「三大真珠生産圏」をハブとする真珠の巨大なネットワークの前には、補完的な役割しかもたなかった。

¹ 本論文第5章で指摘したように、16世紀の真珠史の考察ではマラバール海岸のチェッティとタミルナドゥ南海岸のチェッティを区別する必要がある。これらのチェッティの交流や関係性については、まだ十分解明されていない。

16 世紀史に関するさまざまな研究は、ポルトガル人の役割は二義的であり、アジア域内交易に参加できなかったことを強調してきた。しかし、真珠の流通面から考察すると、ポルトガル傘下の真珠集散地は、多国籍の商人層が担うトランスリージョナルで異文化間の真珠交易の中心であり、ポルトガル人はその中心に君臨していたことがわかる。真珠の流通面の分析からもポルトガルの優位性が明らかになる。ポルトガルの過小評価論は見直す必要がある。

表 4 16 世紀の真珠商、真珠の流通網など

商人	真珠の流通網、交易の形態など
スペイン商人、特にセビリャ商人	大西洋交易
南米カリブ海の真珠採取業者	大西洋交易
ポルトガル領インドへの赴任者たち	インド航路
民間ポルトガル商人	アジア域内交易、インド航路
ヴェネツィア商人	メソポタミア経由の陸上輸送
アラブ系・ペルシア系のイスラーム商人	ホルムズの真珠を出身地に運ぶ
チェッティ (タミルナドゥ南海岸)	インド内陸部への真珠の陸上輸送
マラッカーヤル	ポルトガル領インドの域外で活動
バニヤン商人	ゴアやカンベイに在住 ポルトガル支配を受け入れることで、真珠の小売業者、加工業者として成長
イスラーム海上商人 (グジャラート商人)	カリカット、マラッカなどから立ち去る 一部はカンベイ・ゴア・ルートに従事
チェッティ (マラバール海岸)	ポルトガル領インドの域外で活動 (?)
マーッピラ (マラバール海岸)	ポルトガル領インドの域外で活動 マラバール海賊と呼ばれる

1.5 真珠の「グローバル市場」ゴアの分析

本論文は、ガルシア・ダ・オルタの *Colóquios dos simples e drogas da Índia* 『インドの薬草と薬物についての対話』の記述を分析することで、16 世紀に真珠の集散地となったゴアについて考察した。

それにより、(1) ゴアは「ペルシア湾真珠生産圏」と「マンナール湾真珠生産圏」のアコヤ系真珠を集める「上位集散地」であること、(2) ゴアは「南米カリブ海真珠生産圏」のアコヤ系真珠をはじめ、太平洋パナマ湾のバロック真珠、ボルネオや中国の真珠までも集める「グローバル市場」であること、(3) ゴア在住のポルトガル商人は、アジア世界の各地における真珠の嗜好や価格差を理解して、真珠の輸出入を行う「グローバル思考」を培っていたことが判明した。

グローバル経済史の研究領域では、商品の拡散に関心が集まってきたが、ゴアの真珠市場の考察は、16世紀には世界的規模でひとつの商品を集約する「グローバル市場」が誕生したことを明らかにした。本論文は、真珠の流通の「グローバル化」は、ポルトガル海洋帝国とスペイン帝国のアコヤ系真珠の「真珠生産圏」支配とポルトガル商人たちの活躍、ポルトガル支配の真珠市場に蝟集したアジアの商人たちの存在、真珠の「伝統的希求者」としてのアジアの国家の役割が相互に関連した帰結であったことを解明したのである。

本論文は、16世紀末のヨーロッパの真珠の価格も分析し、価格は供給量の増加の割にはそれほど下がっていないことを明らかにした。ゴア市場の登場で真珠取引は活発化し、消耗品でない真珠はアジア世界でも、ヨーロッパ世界でも換金や転売が繰り返された。真珠はその取引に係わった多くの商人、多くの関係者を豊かにしたのである。

第2節 16世紀における真珠の意義

前節の一連の考察によって本論文が明らかにしたのは、16世紀における真珠という商品の重要性及び真珠——アコヤ系真珠——の採れる海域・湾岸部の地政学的重要性であった。さらに本論文は、ヨーロッパ人による「真珠生産圏」支配及び真珠採取業という水産業への関与が、16世紀世界に与えたさまざまな政治的・経済的・社会的な影響とその歴史的意義を解明してきた。以下、その内容を総括する。

2.1 政治的影響

16世紀は、ヨーロッパ勢力が、地球上に五つしかないアコヤ系真珠の大産地の内、三つの大産地に進出していった時代であった。本論文は、その大産地がそれぞれ「真珠生産圏」を形成していることを明らかにし、これらの地域・海域におけるヨーロッパの対外拡張は、「南米カリブ海真珠生産圏」、「ペルシア湾真珠生産圏」、「マンナール湾真珠生産圏」支配であったことを解明した。

「三大真珠生産圏」の状況を長期的俯瞰で見ると、16世紀だけがヨーロッパ支配が実現した世紀だったことがわかる。17世紀になると、「ペルシア湾真珠生産圏」はポルトガル支配を脱し、サファヴィー朝ペルシアに属するようになった。19世紀になると、南米諸国は独立し、「南米カリブ海真珠生産圏」もスペイン帝国の手を離れた。「マンナール湾真珠生産圏」だけが、ポルトガルからオランダ、イギリスへと引き継がれ、ヨーロッパ支配を受け続けた。17世紀・18世紀のオランダ東インド会社は「マンナール湾真珠生産圏」支配を実現したが、彼らに協力的なプロテスタントの潜水労働者を作ることには失敗した。また、会社が扱う商品が奢侈品からインド綿布や中国茶などに变化したこともあり、次第に真珠採取業への関心をなくしていった。一方、17世紀のイギリス東インド会社は、真珠というアジア世界垂涎の商品なしにアジア域内交易に乗り出さなければならなかった。アジアの商品購入のために大量の銀を持ち込んだのは、17世紀以降のオランダとイギリスの東インド会社だった。

翻って 16 世紀を考えると、この時代は、イベリア半島の二大帝国であるスペインとポルトガルが、アコヤ系真珠の「三大真珠生産圏」を政治的・軍事的に掌握し、真珠の生産体系や流通体系に関与することで、アジアでは金銀で購入される真珠という換金商品を優先的かつ特権的に獲得した最初で最後の世紀だったことが判明する。長期的俯瞰は、16 世紀という世紀の特異性を明確にする。

アジアの「伝統的希求者」たちから見れば、彼らが何百年、あるいは数千年にわたって享受し、彼らの垂涎の的であり続けたアコヤ系真珠のもっとも豊饒なふたつの海が、16 世紀になると、突如、ポルトガル海洋帝国に奪われ、彼らの牛耳る海域となったのである。それゆえ、アジアの人々の間で激しい抵抗や襲撃が起こったことは、すでに本論文で論じてきた。本論文は、インド洋海域世界の「二大真珠生産圏」及び「南米カリブ海真珠生産圏」支配は、16 世紀のポルトガル海洋帝国とスペイン帝国のイベリア勢力だけが成し遂げた政治的・軍事的成果であったことを明らかにした。

16 世紀史——とりわけ初期の 16 世紀史——は、ヨーロッパ人による金やスパイスの獲得を中心として叙述されてきたが、本論文の考察は、真珠の獲得及びその産地支配は、ヒトの移動、入植活動、現地勢力に対する政治的征服と支配、海域支配の大きな要因となり、真珠が誘因した歴史があったことを示すのである。

2.2 経済的影響

本論文の考察は、ヨーロッパ人による真珠採取業という水産業の経済活動が、16 世紀に実施されていたことを明らかにした。特に「南米カリブ海真珠生産圏」では、真珠採取業は製糖業に比べて初期投資が少なくてすむことを論証し、多くのスペイン人真珠採取業者を生んだことを明らかにした。彼らの生産活動は税収獲得のため国家の厳しい監視下に置かれたが、真珠という高額商品が海から採れることで、スペイン王室も、採取業者自身も豊かになったのである。一方、インド洋海域世界ではポルトガル人は生産者にはならなかったが、本論文は、「ペルシア湾真珠生産圏」ではポルトガル海洋帝国は、現地勢力に対する政治的支配及び海域の軍事的支配を通して真珠採取業から利益を得、「マンナール湾真珠生産圏」では「官・軍・宗教共同体」を形成して、真珠採取業に積極的に関与し、関係者を利したことを論証した。16 世紀とは、アコヤ系真珠というアジア垂涎の換金商品をヨーロッパ勢力が独占的に生産、または生産に関与した時代であった。本論文は、16 世紀のヨーロッパ人の経済活動には、商品の交換を繰り返す商業、金銀を採掘する鉱山業、砂糖栽培などの農業だけでなく、国家、海軍、宗教と結びついた水産業があり、海からの富の創出があったことを解明したのである。

さらに、本論文は、16 世紀のポルトガル勢力が現地の商人層に与えた影響も考察した。ポルトガル海洋帝国による「ペルシア湾真珠生産圏」及び「マンナール湾真珠生産圏」支配は、アコヤ系真珠の流通体系を変化させ、ゴアという「上位集散地」を生み出した。こうした状況を奇貨として台頭したのが、ジャイナ教徒のバニヤン商人であった。本論文は、

これまでマンナール湾の真珠の生産と流通は、宗教にかかわらず主にタミル人の独壇場であったが、バニヤン商人はポルトガル支配を受け入れることで、タミル人の独占状態を破り、真珠商として急成長したことを解明した。彼らは近代インドの民族資本家である。今日の真珠・宝石産業でもジャイナ教徒の商人の存在感は大きい。16世紀のポルトガル支配は彼らの真珠商・宝石商としての発展の大きな契機となったのである。

2.3 社会的・宗教的影響

本論文は、ヨーロッパ勢力による16世紀の真珠生産が、現地社会にもたらした社会的・宗教的影響の大きさも明らかにした。その影響をもっとも強く受けたのは、真珠採り潜水夫であった。本論文は、ラス・カサスの『インディアス史』の言説を分析することで、「南米カリブ海真珠生産圏」では、バハマ諸島の先住民絶滅という真珠による人口動態の変化があったことを論証した。南米カリブ海の真珠採取業は、16世紀前半に「先住民奴隷制水産業」から「黒人奴隷制水産業」へと移行し、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカを接続させる黒人奴隷貿易を行った。真珠はトランスリージョナルなヒトの移動をもたらし、三角貿易によるグローバル化を推進した。一方、「ペルシア湾真珠生産圏」では、現地商人や事業者たちによる「債務隷属性水産業」が形成されており、ポルトガル勢力は潜水夫の生活に大きな影響を及ぼすことはなかった。しかし、「マンナール湾真珠生産圏」では、潜水夫への社会的・宗教的影響は大きかった。本論文は、イエズス会勢力は、ポルトガル国王や総督府と協力しながらタミル系ヒンドゥー教徒の潜水夫パラヴァスとカレアスを強固なカトリック集団に編成し、その布教の特色には温情主義があったことを論証した。イエズス会の温情主義は、過酷な潜水労働で死滅した新世界の先住民の事例と対照的である。16世紀に改宗したパラヴァスやカレアスは、その後もローマ・カトリックに絶対的帰依を示し続けた。タミルナドゥ南海岸やスリランカ北西部におけるタミル系カトリック教徒の存在は、今日のタミル民族問題、宗教問題となっている。真珠が現地社会に与えた宗教的影響は甚大であった。

南米史やグローバルヒストリーの領域には、疫病がカリブ海の先住民を「絶滅」または「激滅」させたと主張する研究がある。疫病は先住民人口を激滅させたとしても、はたして「絶滅」させるだろうか。先住民絶滅の大きな要因となったのは、むしろ人為的な要因である。その一因がエンコミエンダ制であったが、本論文は、さらに海の底での真珠採取の労働も一因であったことを明らかにした。本論文は、16世紀の新世界の人口動態の大きな変化の要因として真珠採取業の過酷な潜水作業を加えることになった。

2.4 16世紀のグローバル化

本論文は、スペイン帝国及びポルトガル海洋帝国の「三大真珠生産圏」への進出が、16世紀のグローバル化を促進させたことを明らかにした。南米カリブ海やパナマの真珠は、正規の交易ではなかったものの、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカを移動し、アジアにま

で運ばれる「グローバル商品」となり、ゴアは、アメリカの真珠を含め、世界各地の産地から多種多様の真珠を集める「グローバル市場」に発展した。本論文は、同じ範疇の商品を一カ所に集約する「グローバル市場」の形成という経済発展があったことを解明した。

グローバル化の要因のひとつは、ポルトガル海洋帝国とスペイン帝国によるアコヤ系真珠の「三大真珠生産圏」支配であったが、アジアの諸王朝や諸地域の旺盛な真珠需要が背景にあったことを忘れてはならない。また、現地インドのバニヤン商人の台頭やアジア各地から来る真珠商たちの存在も「グローバル化」を促進した。つまり、16世紀の真珠によるグローバル化とは、イベリア半島の二大帝国とその商人、アジアの諸王朝と現地商人というヨーロッパの国家と商人、アジアの国家と商人の相互連関、相互依存によって実現した歴史的事象だったのである。

16世紀の真珠は、生産量や流通量は確かに増えたが、本質的に供給量の少ない奢侈品であり、一般大衆に広く普及した訳ではなかった。したがって、真珠によるグローバル化は、生産や流通に係わった一部の人々によるグローバル化であったことも忘れてはならない。しかし、真珠に係わるヨーロッパ商人、アジア商人、それに伝統的希求者のアジアの諸国家も、真珠を通して、世界の真珠の特徴及び真珠の流通や希求の実態を地球規模で把握するようになり、その世界一体化の認識の中で真珠の最適な調達、輸送、購入を行い、それぞれ利益を引き出し、ヨーロッパとアジアの緊密な連関及び相互依存の真珠取引を加速させたことは事実であった。真珠は16世紀のグローバル化を促進する中心的商品のひとつだったのである。

アコヤ系真珠は、標準の大きさが直径3ミリから6ミリ台の小さな生体物である。しかし、その生体物は丸く、光沢が強く、虹色に輝き、市場価値は高かった。それにもかかわらず、真珠は歴史学のあらゆる領域で看過されてきた。しかし、16世紀における真珠の価値及び真珠の採れる海域の地政学的重要性を理解し、広域俯瞰と真珠のコモディティ・チェーン分析でヨーロッパの対外拡張を考察すると、スペイン帝国とポルトガル海洋帝国によるアコヤ系真珠の「三大生産圏」支配は、大量の真珠獲得によるヨーロッパ人の致富の実現、真珠ゆえの対外拡張と入植活動、真珠採取業という水産業の成立、真珠による新世界の先住民の絶滅とアフリカ人奴隷貿易の実施、アジア域内交易の真珠取引におけるヨーロッパ人の相対的優位、真珠ゆえの現地潜水夫のキリスト教化、アジアの現地商人とアジアの諸王朝との相互連関の中で実現した真珠のグローバル市場の誕生など、さまざまな側面で政治的・経済的・社会的・宗教的变化をもたらしたことが明らかになった。

実際、16世紀とは、ヨーロッパ勢力が、アコヤ系真珠の「三大生産圏」を支配下に置くことで、富を引き出した最初で最後の時代であり、アジア域内交易で切り札となる真珠を得ていた特異な時代であった。海域の支配と真珠の獲得は、16世紀のイベリア半島の二大帝国だけが成し遂げた政治的・軍事的・経済的・宗教的成果だったのである。

16世紀の南米カリブ海、ペルシア湾、マンナール湾を対象にした真珠史研究は、概して

16世紀の真珠の意義に否定的であった。16世紀に急増したカリブ海の真珠によって真珠の希少性が失われる一方、ポルトガルによるマンナール湾の真珠採取は新規性がないと過小評価されてきた。また、ポルトガル対外拡張史や近代世界システム論、グローバル経済史などのさまざまな歴史学の領域では、16世紀のヨーロッパの影響の相対化や従来の西洋中心主義的史観による圧倒的優位の見直しが広範に行われるようになった。

しかし、本論文の考察は、真珠及びその採取業が16世紀に与えた政治的・経済的・社会的・宗教的影響をさまざまな側面で解明した。また、ヨーロッパ勢力とアジアの諸国家、アジアの現地商人の相互連関、相互依存によって実現した16世紀のグローバル化の存在も明らかにした。歴史学に真珠を加えると、ヨーロッパのイベリア半島の二大帝国が果たした歴史的役割の再評価を迫るとともに、従来の16世紀像の見直しも迫ることになる。真珠——アコヤ系真珠——が動かした大航海時代の歴史があったのである。

参考文献

欧文一次史料

- Acosta, José de. *Historia natural y moral de las Indias*. Mexico City: Fondo de Cultura Económica, 1962 (増田義郎訳『新大陸自然文化史』全2巻、岩波書店、1966年).
- Albuquerque, Afonso de. *Cartas de Affonso de Albuquerque*. Edited by Raymundo António de Bulhão Pato. 7 vols. 1884-1935; Nendeln: Kraus Reprint, 1976.
- Arrianus, Flavius. *Arrian, with an English Translation*. Translated by E. Iliff Robson. 2 vols. London: William Heinemann, 1958-61 (大牟田章訳注『アレクサンドロス東征記およびインド誌(本文篇)及び(註釈篇)』、東海大学出版会、1996年).
- Athenaeus. *The Deipnosophists, with an English Translation*. Translated by Charles Burton Gulick. 7 vols. 1927-41; Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1957-67 (柳沼重剛訳『食卓の賢人たち』全5巻、京都大学学術出版会、1997~2004年).
- Barbosa, Duarte. *Livro do que viu e ouviu no oriente*. Lisbon: Publicações Alfa, 1989.
—*The Book of Duarte Barbosa: An Account of the Countries Bordering on the Indian Ocean and their Inhabitants*. Translated by the Royal Academy of Sciences at Lisbon and edited by Mansel Longworth Dames. 2 vols. 1918-1921; Nendeln: Kraus Reprint, 1967.
- Barros, João de. *Segunda decada da Asia de João de Barros*. Lisbon, 1628.
<https://books.google.co.jp/books?id=eP4p3irF76EC&pg=PA229-IA1&dq=barros+segund+decada&hl=ja&sa=X&ved=0ahUKEwjQ5M3e3IXqAhXI62EKHfXNDxYQ6AEIKTAA#v=onepage&q=barros%20segund%20decada&f=false> (2019年9月19日閲覧)
(生田滋他訳『アジア史』全2巻、岩波書店、1980~1981年).
- Benzoni, Girolamo. *History of the New World*. Translated and edited by W. H. Smyth. 1857; New York: Burt Franklin, 1970.
- Botelho, Simão. “O tombo do estado da Índia.” In *Subsidios para a historia da Índia portugueza*, edited by Rodrigo José de Lima Felner, pp. 43-259. 1868; Nendeln: Kraus Reprint, 1976.
- Carletti, Francesco. *My Voyage around the World, by Francesco Carletti: A 16 Century Florentine Merchant*. Translated by Herbert Weinstock. New York: Pantheon Books, 1964.
- Colección de documentos inéditos de América y Oceanía*. 42 vols. Edited by Joaquín Francisco Pacheco et al. Madrid, 1864-84.
- Colección de documentos inéditos de ultramar*. 25 vols. Edited by la Real Academia de la Historia. Madrid, 1885-1932.

- Colección de documentos para la historia de México*. 2 vols. Edited by Joaquín García Icazbalceta. 1858-1866; Mexico City: Editorial Porrúa, 1971.
- Cordiner, James. *A Description of Ceylon*. 2 vols. London: Longman, 1807.
- Cuneo, Michele. “Relación de Michele Cuneo, a Geronimo Annari.” In *Colección documental del descubrimiento (1470-1506)*, edited by Juan Péres de Tudela et al., vol. 2, pp. 853-69. Madrid: Real Academia de la Historia, 1994 (青木康征編訳「ジェロラモ (ママ) ・アナリに宛てたミケーレ・デ・クネオの書簡」『完訳コロンブス航海誌』平凡社、1993年、347~375頁).
- Documentos sobre os Portugueses em Moçambique e na África Central, 1497-1840*. Edited by National Archives of Rhodesia and Nyasaland, and Centro de Estudos Históricos Ultramarinos. 9 vols. Lisbon: National Archives of Rhodesia and Nyasaland, and Centro de Estudos Históricos Ultramarinos, 1962-1989.
- Enciso, Martín Fernández de. *Summa de geographia*. Bogota: Banco Popular, 1974.
- Federici, Cesare [Fredericke, Caesar]. “The Voyage and Travell of M. Cæsar Fredericke, Merchant of Venice, into the East India, and beyond the Indies.” In *The Principal Navigations, Voyages, Traffiques & Discoveries of the English Nation*, edited by Richard Hakluyt, vol. 5, pp. 365-449. 1903-05; New York: AMS Press, 1965.
- Felner, Rodrigo José de Lima, ed. “Lembranças das cousas da Índia em 1525.” In *Subsidios para a historia da India portugueza*. 1868; Nendeln: Kraus Reprint, 1976.
- Fitch, Ralph. “The Voyage of M. Ralph Fitch, Merchant of London.” In *The Principal Navigations, Voyages, Traffiques & Discoveries of the English Nation*, edited by Richard Hakluyt, vol. 5, pp. 465-505. 1903-5; New York: AMS Press, 1965.
- Gómara, Francisco López de. *Historia general de las Indias*. 2 vols. Madrid: Espasa-Calpe, 1941 (抄訳：清水憲男訳『拡がりゆく視圏』岩波書店、1995年).
- Herrera y Tordesillas, Antonio de. *The General History of the Vast Continent and Islands of America*. Translated by John Stevens. 6 vols. 1740; New York: AMS Press, 1973.
- Ibn Mājid, Ahmad. *Arab Navigation in the Indian Ocean before the Coming of the Portuguese: Being a Translation of Kitāb al-Fawā'id fī uṣūl al-baḥr wa'l-qawā'id of Ahmad b. Mājid al-Najdī*. Translated by G. R. Tibbetts. 1971; London: Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, 1981.
- Las Casas, Bartolomé de. *Obras Completas*. Edited by Paulino Castañeda et al. 14 vols. Madrid: Alianza, 1988-98.
- Obras Completas 3-5: Historia de las Indias*. 3 vols. (ラス・カサス (長南実訳)『インディアス史』全5巻、岩波書店、1981~92年).
- “Brevisima relación de la destrucción de las Indias.” In *Obras Completas 10:*

- Tratados de 1552* (染田秀藤訳『インディアスの破壊についての簡潔な報告』岩波書店、1976年；石原保徳訳『インディアス破壊を弾劾する簡略なる陳述』現代企画室、1987年).
- “Memorial de Remedios para Las Indias (1518),” “Memorial de Remedios para Tierra Firme,” and “Petición al Gran Canciller acerca de la Capitulación de Tierra Firme.” In *Obras Completas 13: Cartas, Memoriales*.
- Linschoten, Jan Huygen van. *Itinerario: Voyage ofte schipvaert van Jan Huygen van Linschoten naer Oost ofte Portugaels Indien 1579-1592*. Edited by H. Kern. 3 vols. The Hague: Martinus Nijhoff, 1955-7 (リンスホーテン(岩生成一他訳)『東方案内記』岩波書店、1968年).
- The Voyage of John Huyghen van Linschoten to the East Indies*. Edited by Arthur Coke Burnell and P. A. Tiele. 2 vols. 1935; New Delhi: Munshiram Manoharlal, 1997.
- “Livro das cidades, e fortalezas que a coroa de Portugal tem nas partes da Índia, e das capitánias, e mais cargos que nelas ha, e da importância delles.” Edited by Francisco Paulo Mendes da Luz. *Stvdia*, vol. 6 (July, 1960).
- Nunes, Antonio. “O livro dos pesos, medidas e moedas.” In *Subsidios para a historia da India portugueza*, edited by Rodrigo José de Lima Felner. 1868; Nendeln: Kraus Reprint, 1976.
- Orta, Garcia da. *Colóquios dos simples e drogas da Índia*. Edited by Conde de Ficalho. 2 vols. 1891; Lisbon: Imprensa Nacional-Casa da Moeda, 1987.
- Colloquies on the Simples and Drugs of India*. Edited and translated by Clements Markham. London: Henry Sotheran, 1913.
- Oviedo y Valdés, Gonzalo Fernández de. *Historia general y natural de las Indias*. Edited by Juan Pérez de Tudela Busco. 5 vols. Madrid: Ediciones Atlas, 1959 (抄訳：染田秀藤・篠原愛人訳『カリブ海植民者の眼差し』岩波書店、1994年).
- Pinto, Fernão Mendes. *Peregrinação/ Fernão Mendes Pinto*. Lisbon: Nacional-Casa da Moeda, 1988 (岡田多希子訳『東洋遍歴記』全3巻、平凡社、1979~1980年).
- Pires, Tomé. *A suma oriental de Tomé Pires*. Coimbra: Imprensa de Coimbra, 1978 (生田滋他訳注『東方諸国記』岩波書店、1966年).
- The Suma Oriental of Tomé Pires: An Account of the East, from the Red Sea to Japan*. Edited by Armando Cortesão. 2 vols. 1944; Nendeln: Kraus Reprint, 1967.
- Pissurlencar, Panduronga S. S., ed. *Regimentos das fortalezas da India*. Bastorá: Rangel, 1951.
- Plinius [Pliny]. *Natural History, with an English Translation*. Translated by H. Rackham et al. 10 vols. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1950-63.

- Pyrard, Francois. *The Voyage of Francois Pyrard of Laval, to the East Indies, the Maldives, the Moluccas and Brazil*. Translated by Albert Gray. 3 vols. 1888; New York: Cambridge University Press, 2010.
- Recopilacion de leyes de los reynos de las Indias*. 3 vols. 1681; Madrid, 1791.
https://books.googleusercontent.com/books/content?req=AKW5QafZ_30Fc-NB8pciDkdp9-ebjHPgmVPn2qhO2BwgJzneAUtrcD8Ei8f58fAC0_VRXjimneG753pppyKRtofvu2Tem6sV_il0WJSi07Y7g0oF9B5ehy8xGZzeVBJoFkpGv7hOmKgpUHTpvW0FfsmEFFmKrUjBwfrZgw4OW36HWcWa5KLBnORNKum4_zYZhJ4oAlpJxoIejiwnh23IVRRd71TBTfZFsrDVSnc8GDjwc3XXBGL-CL4NcMirQ9FKUsknRIYCOqkFmVPeIAM3rCy3Vsg8yIg__x3QuZjeZmlDISyF-xk5c (2019年4月28日閲覧)
- Ribeiro, João. *Fatalidade histórica da ilha de Ceilão*. Lisbon: Publicações Alfa, 1989.
 — *The Historic Tragedy of the Island of Ceilão*. Translated by P. E. Pieris. 1909; Colombo: Colombo Apothecaries, 1925.
- Silva y Figueroa, García de. *The Commentaries of D. García de Silva y Figueroa on his Embassy to Shah ‘Abbās I of Persia on behalf of Philip III, King of Spain*. Translated by Jeffrey S. Turley and edited by Jeffrey S. Turley and George Bryan Souza. Leiden: Brill, 2017.
- Tavernier, Jean-Baptiste. *Travels in India*. Translated by V. Ball. 2 vols. Lahore: Al-Biruni, 1976.
- Teixeira, Pedro. *The Travels of Pedro Teixeira: With his "Kings of Harmuz," and Extracts from his "Kings of Persia."* Translated and annotated by William F. Sinclair, with further notes and an introduction by Donald Ferguson. 1902; Nendeln: Kraus Reprint, 1967.
- Tīfāshī, Aḥmad ibn Yūsuf al-. *Arab Roots of Gemology: Ahmad ibn Yusuf Al Tifaschi's Best Thoughts on the Best of Stones*. Edited and translated by Samar Najm Abul Huda. Lanham: Scarecrow Press, 1998.
- Valentijn, François. *François Valentijn's Description of Ceylon*. Translated and edited by Sinnappah Arasaratnam. London: Hakluyt Society, 1978.
- Valignano, Alessandro. "Sumario de las cosas que pertenecen a la India Oriental y al gobierno de ella." In *Documenta Indica*, edited by S. J. Josef Wicki, vol. 13, pp. 134-319. Rome: Institutum Historicum Societatis Iesu, 1975 (高橋裕史訳『東インド巡察記』平凡社、2005年).
- Varthema, Lodovico de. *The Travels of Ludovico di Varthema in Egypt, Syria, Arabia Deserta and Arabia Felix, in Persia, India, and Ethiopia, A.D. 1503 to 1508*. Translated by John Winter Jones and edited by George Percy Badger. London: Hakluyt Society, 1863.

- Velho, Álvaro. *Roteiro da primeira viagem de Vasco da Gama (1497-1499)*. Edited by A. Fontoura da Costa. Lisbon: Agência-Geral do Ultramar, 1969 (野々山ミナコ訳「ドン・ヴェスコ・ダ・ガマのインド航海記」『航海の記録』岩波書店、1965年、345~436頁).
- Vespucci, Amerigo. “Cartas de Americo Vespuccio.” In *Colección documental del descubrimiento (1470-1506)*, edited by Juan Péres de Tudela et al., vol. 3, pp. 1920-58. Madrid: Real Academia de la Historia, 1994 (篠原愛人訳「史料紹介 アメリゴ・ヴェスプッチの私信 (その1~3)」『撰大人文学』第15~17号 (2007~2009年)、137~158頁、215~235頁、129~149頁).
- Xavier, Francisco [Xavierii, Francisci]. *Epistolae S. Francisci Xavierii*. Edited by Georg Schurhammer and Josef Wicki. 2 vols. Rome: Monumenta Historica Societatis Iesu, 1944-1945 (河野純徳訳注『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』平凡社、1985年).

漢籍一次史料

- 費信 (馮承鈞校注) 『星槎勝覽校注』北京、中華書局、1954年。
 馬歡 (馮承鈞校注) 『瀛涯勝覽校注』北京、中華書局、1955年。
 中嶋敏編『宋史食貨志譯註 (六)』東洋文庫、2006年。

邦訳一次史料

- アブー・ザイド・アルハサン他 (藤本勝次訳注) 『シナ・インド物語』関西大学出版・広報部、1976年。
 — (家島彦一訳注) 『中国とインドの諸情報 1—第一の書』; 『中国とインドの諸情報 2—第二の書』平凡社、2007年。
 イブン・バットゥータ (イブン・ジュザイイ編・家島彦一訳注) 『大旅行記』全8巻、平凡社、1996~2002年。
 ヴェスプッチ、アメリゴ (長南実訳) 「アメリゴ・ヴェスプッチの書簡集」『航海の記録』岩波書店、1965年、249~338頁。
 クルス、ガスパール・ダ (日埜博司訳) 『十六世紀華南事物誌』明石書店、1987年。
 コロン (コロンブス) (林屋永吉訳) 『コロンブス航海誌』岩波書店、1977年。
 — (林屋永吉訳) 「クリストーバル・コロンの四回の航海」『航海の記録』岩波書店、1965年、43~247頁。
 — (青木康征編訳) 『完訳コロンブス航海誌』平凡社、1993年。
 蔀勇造訳『エリュトラ海案内記』全2巻、平凡社、2016年。
 シャルダン、ジャン (佐々木康之他訳) 『ペルシア紀行』岩波書店、1993年。
 — (岡田直次訳注) 『ペルシア見聞記』平凡社、1997年。
 パイス、ドミンゴス／フェルナン・ヌーネス (浜口乃二雄訳) 「ヴィジャヤナガル王国誌」

- (浜口乃二雄他訳)『ムガル帝国誌・ヴィジャヤナガル王国誌』岩波書店、1984年。
- ハクルート(越智武臣訳)「西方植民論」越智武臣他訳『イギリスの航海と植民(二)』岩波書店、1985年、3~229頁。
- バーブル(ザヒールッ・ディーン・ムハンマド・バーブル)(間野英二訳注)『バーブル・ナーマ——バーブル・ナーマの研究3 訳注』松香堂、1998年。
- ブズルク・イブン・シャフリヤール(藤本勝次他訳)『インドの不思議』関西大学出版・広報部、1978年。
- (家島彦一訳注)『インドの驚異譚—10世紀(海のアジア)の説話集』全2巻、平凡社、2011年。
- フンボルト、アレクサンダー・フォン(大野英二郎・荒木善太訳)『新大陸赤道地方紀行』全3巻、岩波書店、2001~2003年。
- ポーロ、マルコ／ルスティケッロ・ダ・ピーサ(高田英樹訳)『世界の記——「東方見聞録」対校訳』名古屋大学出版会、2013年。
- メンドーサ、ファン・ゴンサーレス・デ(長南実・矢沢利彦訳)『シナ大王国誌』岩波書店、1965年。
- モルガ(神吉敬三他訳)『フィリピン諸島誌』岩波書店、1966年。
- モンセラテ(清水廣一郎訳)「ムガル帝国誌」(浜口乃二雄他訳)『ムガル帝国誌・ヴィジャヤナガル王国誌』岩波書店、1984年。
- ロドリゲス、ジョアン(佐野泰彦他訳)『日本教会史』全2巻、岩波書店、1967年、1970年。

欧文研究文献

- Abeyasinghe, Tikiri. *Jaffna under the Portuguese*. 1986; Pannipitiya, Sri Lanka: Stamford Lake, 2005.
- A Study of Portuguese Regimentos on Sri Lanka at the Goa Archives*. Colombo: The Department of National Archives, 1974.
- Ahmed, Ibrahim Khalil. “The Role of Bahrain in Mohammad Ali’s Attempts to Establish a Unified Arab Nation.” In *Bahrain through the Ages: The History*, edited by Abdullah bin Khalid al-Khalifa and Michael Rice, pp. 1-12. London: Kegan Paul International, 1993.
- Aiyangar, S. Krishnaswami. *South India and Her Muhammadan Invaders*. London: Oxford University Press, 1921.
- Allaire, Louis. “Archaeology of the Caribbean Region.” In *The Cambridge History of the Native Peoples of the Americas*, edited by Frank Salomon and Stuart B. Schwartz, vol. 3, part 1, pp. 668-733. New York: Cambridge University Press, 1999.
- Anani, Ahmad al-. “The Portuguese in Bahrain and its Environs during the 16th and

- 17th Centuries.” In *Bahrain through the Ages: The History*, edited by Abdullah bin Khalid al-Khalifa and Michael Rice, pp.31-61. London: Kegan Paul International, 1993.
- Arasaratnam, S. *Ceylon and the Dutch, 1600-1800: External Influences and Internal Change in Early Modern Sri Lanka*. Aldershot: Variorum, 1996.
- Arnold, Janet. *Queen Elizabeth’s Wardrobe Unlock’d*. Leeds: Maney, 1988.
- Arunachalam, S. *The History of the Pearl Fishery of the Tamil Coast*. Annamalai Nagar: Annamalai University, 1952.
- Aslanian, Sebouh David. *From the Indian Ocean to the Mediterranean: The Global Trade Networks of Armenian Merchants from New Julfa*. Berkeley: University of California Press, 2011.
- Aubin, Jean. “Le royaume d’Ormuz au début du XVI^e siècle.” In *Mare Luso-Indicum*, vol. 2, pp. 77-179. Genève: Librairie Droz, 1973.
- “Titolo das remdas que remde a Ylha d’Oromuz.” In *Mare Luso-Indicum*, vol. 2, pp. 217-32.
- “Un voyage de Goa à Ormuz en 1520.” *Modern Asian Studies*, vol. 22, no. 3 (1988), pp. 417-32.
- Bari, Hubert, and David Lam. *Pearls*. Milano: Skira, 2009.
- Bayly, C. A., and Sanjay Subrahmanyam. “Portfolio Capitalists and the Political Economy of Early Modern India.” *The Indian Economic and Social History Review*, vol. 25, no. 4 (1988), pp. 401-24.
- Belgrave, C. D. “The Portuguese in the Bahrain Islands, 1521-1602.” *Journal of the Royal Central Asian Society*, vol. 22, no. 4 (1935), pp. 617-630.
- Biedermann, Zoltán. *The Portuguese in Sri Lanka and South India: Studies in the History of Diplomacy, Empire and Trade, 1500-1650*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 2014.
- Bin Khalid al-Khalifa, Abdulla, and Michael Rice eds., *Bahrain through the Ages: The History*. London: Kegan Paul International, 1993.
- Borucki, Alex, et al. “Atlantic History and the Slave Trade to Spanish America.” *The American Historical Review*, vol. 120, no. 2 (April 2015), pp. 433-61.
- Boxer, C. R. *The Portuguese Seaborne Empire: 1415-1825*. London: Hutchinson, 1969.
- Boyajian, James C. *Portuguese Trade in Asia under the Habsburgs, 1580-1640*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1993.
- Busharb, Ahmed. “The Contribution of Portuguese Sources and Documents in Recording the History of Bahrain in the First Half of the Sixteenth Century.” In *Bahrain through the Ages: The History*, edited by Abdullah bin Khalid al-Khalifa

- and Michael Rice, pp. 144-154. London: Kegan Paul International, 1993.
- Caldwell, R. *A History of Tinnevely*, 1881; New Delhi: Asian Educational Services, 1982.
- Carter, Robert. "The History and Prehistory of Pearling in the Persian Gulf." *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, vol. 48, part 2 (2005), pp. 139-209.
- *Sea of Pearls: Seven Thousand Years of the Industry that Shaped the Gulf*. London: Arabian, 2012.
- "Pearl Fishing, Migration, and Globalization in the Persian Gulf, Eighteenth to Twentieth Centuries." In *Pearls, People, and Power: Pearling and Indian Ocean Worlds*, edited by Pedro Machado et al., pp. 232-62. Athens: Ohio University Press, 2019.
- Casale, Giancarlo. *The Ottoman Age of Exploration*. Oxford: Oxford University Press, 2010.
- Cervigón, Fernando. *La Perla*. Pampatar: Fondo Editorial Fondene, 1997.
- *Las perlas en la historia de Venezuela*. Caracas: Fundación Museo del Mar, 1998.
- Chadour-Sampson, Beatriz, and Hubert Bari. *Pearls*. London: V&A Publishing, 2013.
- Chang, T'ien-tsê. *Sino-Portuguese Trade from 1514 to 1644: A Synthesis of Portuguese and Chinese Sources*. Leiden: E. J. Brill, 1969.
- Chaudhuri, K. N. *The Trading World of Asia and the English East Indian Company, 1660-1760*. Cambridge: Cambridge University Press, 1978.
- "European Trade with India." In *The Cambridge Economic History of India*, edited by T. Raychaudhuri and Irfan Habib, vol. 1, pp. 382-407. Cambridge: Cambridge University Press, 1982.
- *Trade and Civilisation in the Indian Ocean*. Cambridge: Cambridge University Press, 1985.
- Chitty, Simon Casie. "Remarks on the Origin and History of the Parawas." *The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, vol. 4, no. 1 (1837), pp. 130-4.
- Clarence-Smith, William G. "The Pearl Commodity Chain, Early Nineteenth Century to the End of the Second World War: Trade, Processing, and Consumption." In *Pearls, People, and Power: Pearling and Indian Ocean Worlds*, edited by Pedro Machado et al., pp. 31-54. Athens: Ohio University Press, 2019.
- Colless, B. C. "The Traders of the Pearl: The Mercantile and Missionary Activities of Persian and Armenian Christians in South East-Asia." *Abr-Nahrain*, vol. 9 (1969-1970), pp. 17-38; vol. 10 (1970-1971), pp. 102-21.
- Commissariat, M. S. "A Brief History of the Gujarat Saltanat." *The Journal of the*

- Bombay Branch of the Royal Asiatic Society*, vol. 25 (1917-21), pp. 82-133, 246-321. Nendeln: Kraus Reprint, 1969.
- Costa, Palmira Fontes da, ed. *Medicine, Trade and Empire: Garcia de Orta's Colloquies on the Simples and Drugs of India (1563) in Context*. Farnham: Ashgate, 2015.
- Crosby, Alfred W. *The Columbian Exchange: Biological and Cultural Consequences of 1492*. Westport: Greenwood Press, 1972.
- Dalgado, Sebastião Rodolfo. *Glossário Luso-Asiático*. 2 vols. 1919-21; New Delhi: Asian Educational Services, 1988.
- Das Gupta, Ashin. "Indian Merchants and the Trade in the Indian Ocean." In *The Cambridge Economic History of India*, edited by T. Raychaudhuri and Irfan Habib, vol. 1, pp. 407-33. Cambridge: Cambridge University Press, 1982.
- *The World of the Indian Ocean Merchant, 1500-1800, Collected Essays of Ashin Das Gupta*. Oxford: Oxford University Press, 2001.
- Dawson, Kevin. "Enslaved Swimmers and Divers in the Atlantic World." *The Journal of American History*, vol. 92 (2006), pp. 1327-55.
- de Vries, Van. "The Limits of Globalization in the Early Modern World." *The Economic History Review*, new series, vol. 63, no. 3 (August 2010), pp. 710-33.
- Diffie, Bailey W., and George D. Winius. *Foundations of the Portuguese Empire 1415-1580*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1977.
- Disney, A. R. *Twilight of the Pepper Empire: Portuguese Trade in Southwest India in the Early Seventeenth Century*. 1978; New Delhi: Manohar, 2010.
- "Smugglers and Smuggling in the Western Half of the Estado da India in the Late Sixteenth and Early Seventeenth Centuries." *Indica*, vol. 26 (1989), pp. 57-75.
- Domínguez Compañy, Francisco. "Municipal Organization of the Rancherías of Pearls." *The Americas*, vol. 21, no. 1 (July 1964), pp. 58-68.
- Domínguez-Torres, Mónica. "Pearl Fishing in the Caribbean: Early Images of Slavery and Forced Migration in the Americas." In *African Diaspora in the Cultures of Latin America, the Caribbean, and the United States*, edited by Persephone Braham, pp. 73-82. Newark: University of Delaware, 2015.
- Donkin, R. A. *Beyond Price: Pearls and Pearl-Fishing*. Philadelphia: American Philosophical Society, 1998.
- Ferguson, Donald. "The Bahrein Pearl Fisheries." *Journal of the Society of Arts* (March 1901), pp. 314-5.
- Fernandes, Agnelo Paulo. "The Portuguese Cartazes System and the 'Magumbayas' on Pearl Fishing in the Gulf." *Liwa*, vol. 1, no. 1 (June 2009), pp. 12-24. <https://www.na.ae/en/Images/LIWA01.pdf> (2019年4月27日閲覧)

- Fernández, Manuel Giménez. *Bartolomé de Las Casas*. 2 vols. Sevilla: Escuela de Estudios Hispanoamericanos, 1953-60.
- Floor, Willem. "A Report on Pearl Fishing in the Persian Gulf in 1757." *Persica*, vol. 10 (1982), pp. 209-22.
- "The Bahrain Project of 1754." *Persica*, vol. 11 (1984), pp. 129-48.
- *The Persian Gulf: A Political and Economic History of Five Port Cities 1500-1730*. Washington, D.C.: Mage Publishers, 2006.
- Floor, Willem, and Farhad Hakimzadeh. *The Hispano-Portuguese Empire and its Contacts with Safavid Persia, the Kingdom of Hormuz and Yarubid Oman from 1498-1720*. Lovanii: Peeters, 2007.
- Frykenberg, Robert Eric. *Christianity in India: From Beginnings to the Present*. Oxford: Oxford University Press, 2008.
- Galtsoff, Paul S. *The Pearl Fishery of Venezuela*. Washington D. C.: United States Department of the Interior, 1950.
- Godinho, Vitorino Magalhães. *Les finances de L'état Portugais des Indes Orientales (1517-1635)*. Paris: Fundação Calouste Gulbenkian, Centro Cultural Português, 1982.
- Gommans, Jos. "Continuity and Change in the Indian Ocean Basin." In *The Cambridge World History, vol. 4: The Construction of a Global World, 1400-1800 CE*, edited by Jerry H. Bentley et al., pp. 182-209. Cambridge: Cambridge University Press, 2015.
- Habib, Irfan. "Merchant Communities in Pre-Colonial India." In *The Rise of Merchant Empires: Long-Distance Trade in the Early Modern World, 1350-1750*, edited by James D. Tracy, pp. 371-99. Cambridge: Cambridge University Press, 1990.
- Herdman, W. A. *Report to the Government of Ceylon on the Pearl Oyster Fisheries of the Gulf of Manaar*. 5 vols. London: The Royal Society, 1903-1906.
- Hopper, Matthew S. "Enslaved Africans and the Globalization of Arabian Gulf Pearling." In *Pearls, People, and Power: Pearling and Indian Ocean Worlds*, edited by Pedro Machado et al., pp. 263-80. Athens: Ohio University Press, 2019.
- Kaufmann, S. B. "A Christian Caste in Hindu Society: Religious Leadership and Social Conflict among the Paravas of Southern Tamilnadu." *Modern Asian Studies*, vol. 15, no. 2 (1981), pp. 203-234.
- Kline, Harvey F. *Historical Dictionary of Colombia*. The Scarecrow Press: Lanham, 2012.
- Kunz, George Frederick, and Charles Hugh Stevenson. *The Book of the Pearl: Its History, Art, Science, and Industry*. 1908; New York: Dover Publications, 2001.
- Landman, Neil H., et al. *Pearls: A Natural History*. New York: Harry N. Abrams, 2001.

- Lockhart, James, and Stuart B. Schwartz. *Early Latin America: A History of Colonial Spanish America and Brazil*. New York: Cambridge University Press, 1983.
- Lorimer, J. G. *Gazetteer of the Persian Gulf, 'Omān, and Central Arabia*. 6 vols. 1908-15; Farnborough: Gregg, 1970.
- Machado, José Pedro. *Dicionário etimológico da língua portuguesa*. Lisbon: Livros Horizonte, 1977.
- Mackenzie Jr., C. L., et al. "History of the Atlantic Pearl-Oyster, *Pinctata (sic) Imbricata*, Industry in Venezuela and Colombia, with Biological and Ecological Observations." *Marine Fisheries Review*, vol. 65, no. 1 (January 2003), pp. 1-20.
<https://www.researchgate.net/publication/280015683>. (2019年4月28日閲覧)
- Macleod, Murdo J. "Spain and America: The Atlantic Trade, 1492-1720." In *The Cambridge History of Latin America*, edited by Leslie Bethell, vol. 1, pp. 341-88. Cambridge: Cambridge University Press, 1984.
- Mahroof, M. M. M. "Pearls in Sri Lankan History." *South Asian Studies*, no. 8 (1992), pp. 109-114.
- Monroy, Eduardo Barrera. "Los esclavos de las perlas: Voces y rostros indígenas en la Granjería de Perlas del Cabo de la Vela (1540-1570)." *Boletín cultural y bibliográfico*, vol. 34, no. 61 (2002), pp. 3-33.
https://publicaciones.banrepcultural.org/index.php/boletin_cultural/article/view/1098 (2019年4月27日閲覧)
- Mosk, S. A. "Spanish Pearl-Fishing Operations on the Pearl Coast in the Sixteenth Century." *Hispanic American Historical Review*, vol. 18 (1938), pp. 392-400.
- Muñoz, Manuel Luengo. "Noticias sobre la fundación de la ciudad de Nuestra Señora Santa María de los Remedios del Cabo de la Vela." *Anuario de Estudios Americanos*, vol. 6 (1949), pp. 755-97.
- "Inventos para acrecentar la obtención de perlas en America, durante el siglo XVI." *Anuario de Estudios Americanos*, vol. 9 (1952), pp. 51-72.
- Natesan, S. "The Northern Kingdom." In *History of Ceylon: From the Earliest Times to 1505*, edited by Ray, H. C., vol. 1, part 2, pp. 691-702. Colombo: Ceylon University Press, 1960.
- Neill, Stephen. *A History of Christianity in India: The Beginnings to AD 1707*. Cambridge: Cambridge University Press, 1984.
- Nelson, J. H. *The Madura Country: A Manual Compiled by Order of the Madras Government*. 1868; New Delhi: Asian Educational Services, 1989.
- Newitt, Malyn. *A History of Portuguese Overseas Expansion, 1400-1668*. London: Routledge, 2005.

- Ostroff, Samuel M. "An Uncertain Venture: Pearling Labor and Imperial Political Economy in South India and Sri Lanka, ca. 1790-1840." In *Pearls, People, and Power: Pearling and Indian Ocean Worlds*, edited by Pedro Machado et al., pp. 85-117. Athens: Ohio University Press, 2019.
- Otte, Enrique. *Las perlas del Caribe: Nueva Cádiz de Cubagua*. Caracas: Fundación John Boulton, 1977.
- Pearson, M. N. *The Portuguese in India*. Cambridge: Cambridge University Press, 1987.
- Pearson, M. N., ed. *Spices in the Indian Ocean World*. Variorum: Aldershot, 1996.
- Phillips, Jr., William D. "Slavery in the Atlantic Islands and the Early Modern Spanish Atlantic World." In *The Cambridge World History of Slavery*, edited by David Eltis and Stanley L. Engerman, vol. 3, pp. 325-49. Cambridge: Cambridge University Press, 2011.
- Pieris, P. E. *Ceylon: The Portuguese Era, being a History of the Island for the Period 1505-1658*. 2 vols. 1913-4; Dehiwala, Sri Lanka: Tisara Prakasakayo, 1983.
- Potts, D. T. *The Arabian Gulf in Antiquity*. 2 vols. Oxford: Clarendon Press, 1990.
- Prakash, Om. *Bullion for Goods: European and Indian merchants in the Indian Ocean Trade, 1500-1800*. New Delhi: Manohar, 2004.
- Rasanayagam, C. *Ancient Jaffna: Being a Research into the History of Jaffna from Very Early Times to the Portug[u]ese Period*. 1926; New Delhi: Asian Educational Services, 1984.
- Ratekin, M. "The Early Sugar Industry in Espanola." *Hispanic American Historical Review*, vol. 34 (1954), pp. 1-19.
- Ray, H. C. ed. *History of Ceylon: From the Earliest Times to 1505*. Colombo: Ceylon University Press, 1960.
- Romero, Aldemaro. "Death and Taxes: The Case of the Depletion of Pearl Oyster Beds in Sixteenth-Century Venezuela." *Conservation Biology*, vol. 17, no. 4 (August 2003), pp. 1013-23.
- Romero, Aldemaro, et al. "Cubagua's Pearl-Oyster Beds: The First Depletion of a Natural Resource Caused by Europeans in the American Continent." *Journal of Political Ecology*, vol. 6 (1999), pp. 57-78.
- Saco, José Antonio. *Historia de la esclavitud de los Indios en el Nuevo Mundo*. 2 vols. 1932; Habana: Editorial Alfa, 1945.
- Sanz, Eufemio Lorenzo. *Commercio de España con América en la época de Felipe II: La navegación, los tesoros y las perlas*, vol. 2. Valladolid: Servicio de Publicaciones de la Diputación Provincial de Valladolid, 1980.
- Sauer, Carl Ortwin. *The Early Spanish Main*. 1966; New York: Cambridge University

- Press, 2008.
- Schafer, Edward H. "The Pearl Fisheries of HO-P'U." *Journal of the American Oriental Society*, vol. 72, no. 4 (1952), pp. 155-68.
- *Shore of Pearls*. Berkeley: University of California Press, 1970.
- Schörle, Katia. "Pearls, Power, and Profit: Mercantile Networks and Economic Considerations of the Pearl Trade in the Roman Empire." In *Across the Ocean: Nine Essays on Indo-Mediterranean Trade*, edited by Federico de Romanis and Marco Maiuro, pp. 43-54. Brill: Leiden, 2015.
- Schurhammer, Georg. *Francis Xavier: His Life, his Times*. Translated by M. Joseph Costelloe. 4 vols. Rome: Jesuit Historical Institute, 1973-82.
- Serjeant, R. B. *The Portuguese off the South Arabian Coast*. Oxford: The Clarendon Press, 1963.
- Sewell, Robert. *A Forgotten Empire (Vijayanagar)*. 1900; Shannon: Irish University Press, 1972.
- Sheriff, Abdul. "The Persian Gulf and the Swahili Coast: A History of Acculturation over the Longue Durée." In *The Persian Gulf in History*, edited by Lawrence G. Potter, pp. 173-188. New York: Palgrave Macmillan, 2009.
- Silva, C. R. de. "The Portuguese and Pearl Fishing off South India and Sri Lanka." *South Asia, new series*, vol. 1, no. 1 (March 1978), pp. 14-28.
- Silva, Chandra R. de., ed. *Portuguese Encounters with Sri Lanka and the Maldives: Translated Texts from the Age of the Discoveries*. Farnham: Ashgate, 2009.
- Silva, C. R. de, and S. Pathmanathan. "The Kingdom of Jaffna up to 1620." In *History of Sri Lanka: From c 1500 to c 1800*, edited by K. M. de Silva, pp. 105-21. Peradeniya, Sri Lanka: University of Peradeniya, 1995.
- Silva, G. P. S. H. de. *History of Coins and Currency in Sri Lanka*. Colombo: Central Bank of Sri Lanka, 2000.
- Silva, K. M. de. *History of Sri Lanka*. Oxford: Oxford University Press, 1981.
- Silva, K. M. de., ed. *History of Sri Lanka: From c 1500 to c 1800*. Peradeniya, Sri Lanka: University of Peradeniya, 1995.
- Southgate, Paul C., and John S. Lucas. *The Pearl Oyster*. Amsterdam: Elsevier, 2008.
- Souza, George Bryan. *The Survival of Empire : Portuguese Trade and Society in China and the South China Sea, 1630-1754*. Cambridge: Cambridge University Press, 1986.
- "Opium and the Company: Maritime Trade and Imperial Finances on Java, 1684-1796." *Modern Asian Studies*, vol. 43, no. 1 (2009), pp. 113-33.
- *Portuguese, Dutch and Chinese in Maritime Asia, c.1585-1800*. Farnham: Ashgate,

- 2014.
- “Hinterlands, Commodity Chains, and Circuits in Early Modern Asian History: Sugar in Qing China and Tokugawa Japan.” In *Hinterlands and Commodities: Place, Space, Time and the Political Economic Development of Asia over the Long Eighteenth Century*, edited by Tsukasa Mizushima et al., pp. 15-47. Leiden: Brill, 2015.
- Steensgaard, Niels. *Carracks, Caravans and Companies: The Structural Crisis in the European-Asian Trade in the Early 17th Century*. Lund: Studentlitteratur, 1973.
- Stein, Burton. “South India” and “Vijayanagara c. 1350-1564.” In *The Cambridge Economic History of India*, edited by T. Raychaudhuri and Irfan Habib, vol. I, pp. 14-42, 102-24. Cambridge: Cambridge University Press, 1982.
- Steingass, F. *Comprehensive Persian-English Dictionary*. n. d.; New Delhi: Munshiram Manoharlal, 2000.
- Stephen, S. Jeyaseela. *Portuguese in the Tamil Coast*. Pondicherry: Navajothi, 1998.
- Steuart, James. *An Account of the Pearl Fisheries of Ceylon*. Cotta: Church Mission Press, 1843.
- Strack, Elisabeth. *Pearls*. Stuttgart: Rühle-Diebener-Verlag, 2006.
- Straka, Tomás, et al. *Historical Dictionary of Venezuela*. 3rd ed. Lanham: Rowman & Littlefield, 2018.
- Subrahmanyam, Sanjay. *The Political Economy of Commerce: Southern India, 1500-1650*. Cambridge: Cambridge University Press, 1990.
- *The Portuguese Empire in Asia, 1500-1700: A Political and Economic History*. London: Longman, 1993.
- “Precious Metal Flows and Prices in Western and Southern Asia, 1100-1700: Some Comparative and Conjunctural Aspects.” In *Money and the Market in India 1100-1700*, edited by Sanjay Subrahmanyam, pp. 186-218. Bombay: Oxford University Press, 1994.
- “Noble Harvest From the Sea: Managing the Pearl Fishery of Mannar, 1500-1925.” In *Institutions and Economic Change in South Asia*, edited by Burton Stein and Sanjay Subrahmanyam, pp. 134-172. Oxford: Oxford University Press, 1996.
- Suzuki, Hideaki. *Slave Trade Profiteers in the Western Indian Ocean: Suppression and Resistance in the Nineteenth Century*. New York: Palgrave, 2017.
- Teles e Cunha, João. “The Portuguese Presence in the Persian Gulf.” In *The Persian Gulf in History*, edited by Lawrence G. Potter, pp. 207-234. New York: Palgrave Macmillan, 2009.
- Thornton, John. “The Slave Trade and the African Diaspora.” In *The Cambridge World*

- History: The Construction of a Global World, 1400-1800 CE*, edited by Jerry H. Bentley et al., vol. 6, pp. 135-159. Cambridge: Cambridge University Press, 2015.
- Thurston, Edgar. *Caste and Tribes of Southern India*. 7 vols. 1909; Delhi: Cosmo Publications, 1975.
- Topic, Steven C., and Allen Wells. "Commodity Chains in a Global Economy." In *A World Connecting, 1870-1945*, edited by Emily S. Rosenberg. Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard University Press, 2012.
- Topic, Steven C., et al., eds. *From Silver to Cocaine: Latin American Commodity Chains and the Building of the World Economy, 1500-2000*. Durham: Duke University Press, 2006.
- Vine, Peter. *Pearls in Arabian Waters*. London: Immel, 1986.
- Vink, Markus P. M. "Between the Devil and the Deep Blue Sea: The Christian Paravas: A 'Client Community' in Seventeenth-Century Southeast India." *Itinerario*, vol. 26, no. 2 (July 2002), pp. 64-98.
- *Encounters on the Opposite Coast: The Dutch East India Company and the Nayaka State of Madurai in the Seventeenth Century*. Leiden: Brill, 2016.
- Vosoughi, Mohammad Bagher. "The Kings of Hormuz: From the Beginning until the Arrival of the Portuguese." In *The Persian Gulf in History*, edited by Lawrence G. Potter, pp. 89-104. New York: Palgrave Macmillan, 2009.
- Yadav, Gyanendra. *Encyclopaedia of Indian Castes, Races and Tribes*. 5 vols. New Delhi: Anmol Publications, 2009.
- Yule, Henry, and A. C. Burnell, *Hobson-Jobson: A Glossary of Colloquial Anglo-Indian Words and Phrases, and of Kindred Terms, Etymological, Historical, Geographical and Discursive*. 1886; London: John Murray, 1903.
- Wada, Katsuhiko T., and Ilya Tëmkin. "Taxonomy and Phylogeny." In *The Pearl Oyster*, edited by Paul C. Southgate and John S. Lucas, pp. 37-75. Amsterdam: Elsevier, 2008.
- Wagner, Henry Raup. *The Life and Writings of Bartolomé de las Casas*. Albuquerque: University of New Mexico Press, 1967.
- Wake, C. H. H. "The Changing Pattern of Europe's Pepper and Spice Imports, ca 1400-1700." *The Journal of European Economic History*, vol. 8 (1979), pp. 361-403.
- Warsh, Molly A. "Enslaved Pearl Divers in the Sixteenth Century Caribbean." *Slavery and Abolition*, vol. 31, no. 3 (September 2010), pp. 345-362.
- "A Political Ecology in the Early Spanish Caribbean." *William and Mary Quarterly*, 3rd series, vol. 71 (2014), pp. 517-48.
- *American Baroque: Pearls and the Nature of Empire, 1492-1700*. Chapel Hill,

University of North Carolina Press, 2018.

Whitehead, Neil L. "The Crises and Transformations of Invaded Societies: The Caribbean (1492-1580)." In *The Cambridge History of the Native Peoples of the Americas*, edited by Frank Salomon and Stuart B. Schwartz, vol. 3, part 1, pp. 864-903. New York: Cambridge University Press, 1999.

Wilson, Arnold T. *The Persian Gulf: An Historical Sketch from the Earliest Times to the Beginning of the Twentieth Century*. 1928; London: George Allen & Unwin, 1954.

邦文研究文献

青木康征『南米ポトシ銀山』中央公論新社、2000年。

青野和彦「ラス・カサスのベネズエラ植民計画の理念——2つの『覚書』における「共同体」(comunidad)の目標の検討を通して」『沖縄キリスト教短期大学紀要』第40号(2012年)、51~64頁。

——「ラス・カサスの平和的布教観の形成——ベネズエラ渡航からドミニコ会修練期までを中心に」『キリスト教史学』第67号(2013年)、52~73頁。

秋田茂「グローバルヒストリーの挑戦と西洋史研究」『パブリックヒストリー』第5号(2008年)、34~42頁。

秋田茂編『アジアからみたグローバルヒストリー——「長期の18世紀」から「東アジアの経済的再興」へ』ミネルヴァ書房、2013年。

——『「大分岐」を超えて』ミネルヴァ書房、2018年。

——『グローバル化の世界史』ミネルヴァ書房、2019年。

秋田茂・桃木至朗編『グローバルヒストリーと帝国』大阪大学出版会、2013年。

秋道智彌編『海人の世界』同文館、1998年。

アブー＝ルゴド、J. L. (佐藤次高他訳)『ヨーロッパ覇権以前』全2巻、岩波書店、2001年。

アメリカ自然史博物館およびフィールド博物館企画『「パール」展』図録、国立科学博物館、2005~2006年。

生田滋「大航海時代の東アジア」榎一雄編『西欧文明と東アジア』平凡社、1971年、19~144頁。

——「ポルトガルの初代インド副王ドン＝フランシスコ＝デ＝アルメイダの行動について」山本達郎博士古稀記念論叢編集委員会編『東南アジア・インドの社会と文化(上)』山川出版社、1980年、85~117頁。

——「インド洋貿易圏におけるポルトガルの活動とその影響」生田滋・岡倉登志編『ヨーロッパ世界の拡張——東西貿易から植民地支配へ』世界思想社、2001年、1~50頁。

池ノ上宏『アラビアの真珠採り』イケテック、1987年。

池本幸三他『近代世界と奴隷制——大西洋システムの中で』人文書院、1995年。

- 石原保徳『インディアスの発見——ラス・カサスを読む』田畑書店、1980年。
- 「新しい世界記述の誕生——一六世紀・大西洋圏からのメッセージ」西川長夫他編『ラテンアメリカからの問いかけ——ラス・カサス、植民地支配からグローバリゼーションまで』人文書院、2000年、42~74頁。
- ウィリアムズ、E. (川北稔訳)『コロンブスからカストロまで——カリブ海域史、1492-1969』全2巻、岩波書店、2000年(原著1970年)。
- ウォーラーズテイン、I. (川北稔訳)『近代世界システム』全4巻、名古屋大学出版会、2013年(原著1974年)。
- 岡美穂子『商人と宣教師——南蛮貿易の世界』東京大学出版会、2010年。
- 「一六世紀『大航海』の時代とアジア」秋田茂編『グローバル化の世界史』ミネルヴァ書房、2019年、71~119頁。
- 小川博「中国史上の蚕——蚕(蛋)についての諸学説の沿革について(1~5)」『海事史研究』第12~17号(1969~1971年)、15~38頁; 123~157頁; 67~78頁; 86~101頁; 82~88頁。
- 奥谷喬司・和田克彦「アコヤガイの学名——現状と論評」『ちりぼたん(日本貝類学会研究連絡誌)』第40巻2号(2010年3月)、90~94頁。
- 奥谷喬司編『日本近海産貝類図鑑』東海大学出版会、2000年。
- カーティン、フィリップ(田中愛理他訳)『異文化間交易の世界史』N T T出版、2002年(原著1984年)。
- 鏑木余三男「真珠介移植試験報告第二回試験」農商務省農務局『水産調査報告』第1巻(1893年)、77~80頁。
- 辛島昇編『南アジア史(新版世界各国史)』山川出版社、2004年。
- 『世界歴史大系 南アジア史(3)』山川出版社、2007年。
- 川北稔『洒落者たちのイギリス史——騎士の国から紳士の国へ』平凡社、1986年。
- 『砂糖の世界史』岩波書店、1996年。
- 『世界システム論講義——ヨーロッパと近代世界』筑摩書房、2016年。
- 川島耕司『スリランカと民族——シンハラ・ナショナリズムの形成とマイノリティ集団』明石書店、2006年。
- 岸野久『ザビエルと日本——キリシタン開教期の研究』吉川弘文館、1998年。
- 『ザビエルと東アジア——パイオニアとしての任務と軌跡』吉川弘文館、2015年。
- ギブソン、チャールズ(染田秀藤訳)『イスパノアメリカ——植民地時代』平凡社、1981年(原著1966年)。
- 国本伊代『(改訂新版)概説ラテンアメリカ史』新評論、2001年(初版1992年)。
- 久米武夫『新宝石学』風間書房、1972年。
- 栗山保之『海と共にある歴史——イエメン海上交流史の研究』中央大学出版部、2012年。
- クロスビー、A. F. (佐々木昭夫訳)『ヨーロッパ帝国主義の謎——エコロジーから見た10~

- 20世紀』岩波書店、1998年（原著1986年）。
- クロスリー、パミラ・カイル（佐藤彰一訳）『グローバル・ヒストリーとは何か』岩波書店、2012年（原著2008年）。
- 河野純徳『聖フランシスコ・ザビエル全生涯』平凡社、2000年。
- 小松博監修『真珠事典—真珠、その知られざる小宇宙』織研新聞社、2015年。
- 佐々木達夫「ペルシア湾と砂漠を結ぶ港町」歴史学研究会編『港町と海域世界』青木書店、2005年、269~296頁。
- 重松伸司「補注 ヴィジャヤナガル時代の職人・商人集団」他、モンセラテ／ドミンゴス・パイイス／フェルナン・ヌーネス（浜口乃二雄他訳）『ムガル帝国誌・ヴィジャヤナガル王国誌』岩波書店、1984年、411~424頁。
- 篠原愛人「史料紹介 アメリゴ・ヴェスプッチの私信（その1~3）」『撰大人文学』第15~17号（2007~2009年）、137~158頁、215~235頁、129~149頁。
- 「アメリゴ・ヴェスプッチの公刊書簡に関する一考察」『撰大人文学』第18号（2010年）、1~25頁。
- 島田竜登「史上初のグローバル・カンパニーとしてのオランダ東インド会社」羽田正編『グローバル・ヒストリーの可能性』、山川出版社、2017年、287~303頁。
- 白井祥平『真珠・真珠貝世界図鑑』海洋企画、1994年。
- 『貝（III）』法政大学出版局、1997年。
- 真珠博物館『真珠博物館—人と真珠—そのかわり方を考える』（博物館図録）御木本真珠島、1990年。
- スーザ、ジョージ・ブライアン（岡田雅志訳）「近世におけるグローバル商品と交易」秋田茂編『アジアからみたグローバルヒストリー—「長期の18世紀」から「東アジアの経済的再興」へ』ミネルヴァ書房、2013年、118~147頁。
- 鈴木英明「ネットワークのなかの港町とそこにおける所謂「バニヤン」商人—一九世紀ザンジバルにおけるカッチー・バティヤー商人の活動」『東洋史研究』第71巻4号（2013年）、794~766頁。
- スブラフマニヤム（三田昌彦他訳）『接続された歴史』名古屋大学出版会、2009年。
- 関哲行・立石博高編『大航海の時代—スペインと新大陸』同文館、1998年。
- 染田秀藤『ラス・カサス伝—新世界征服の審問者』岩波書店、1990年。
- 染田秀藤・篠原愛人監修・大阪外国語大学ラテンアメリカ史研究会『ラテンアメリカの歴史—史料から読み解く植民地時代』世界思想社、2005年。
- ソラーノ、フランシスコ・デ（篠原愛人訳）「スペイン人コンキスタドール—その特徴」関哲行・立石博高編『大航海の時代—スペインと新大陸』、237~265頁。
- ダイヤモンド、ジャレド（倉骨彰訳）『銃・病原菌・鉄—1万3000年にわたる謎』全2巻、草思社、2000年（原著1997年）。
- 高瀬弘一郎『キリシタン時代の研究』岩波書店、1977年。

- 『キリシタン時代の貿易と外交』 八木書店、2002年。
- 『モンsoon文書と日本——十七世紀ポルトガル公文書集』 八木書店、2006年。
- 高橋裕史『一六世紀イエズス会インド管区の経済構造に関する研究』 本人による報告書、2003年、2005年、2006年。
- 『イエズス会の世界戦略』 講談社、2006年。
- 田辺悟『日本蛮人伝説の研究』 法政大学出版会、1990年。
- 『近世日本蛮人伝説の研究』 慶友社、1998年。
- 玉木俊明『拡大するヨーロッパ世界 1415-1914』 知泉書館、2018年。
- 『世界史を「移民」で読み解く』 NHK出版、2019年。
- テュヒレ、ヘルマン他（上智大学中世思想研究所訳）『キリスト教史 5——信仰分裂の時代』 平凡社、1997年。
- 長島弘「一六世紀インド海上貿易の構造——主要貿易品の分析を中心として」『東洋史研究』 第35巻2号（1976年）、174~210頁。
- 「ムガル帝国下のバニヤ商人——スーラト市の場合」『東洋史研究』 第40巻4号（1982年）、707~740頁。
- 「インド洋とインド商人」『世界歴史 14 イスラーム・環インド洋世界』 岩波書店、2000年、141~165頁。
- 野崎明「スリランカにおける民族問題に関する社会経済学的研究——インド・タミル人問題を中心に」『東北学院大学経済学論集』 第167号（2008年3月）、101~134頁。
- パーク、ルイス（立石博高訳）「16世紀におけるセビーリャ貴族と新世界貿易」 関哲行・立石博高編『大航海の時代——スペインと新大陸』 同文館、1998年、133~166頁。
- 羽田正『東インド会社とアジアの海』 講談社、2007年。
- 『グローバル化と世界史』 東京大学出版会、2018年。
- 羽田正編『地域史と世界史』 ミネルヴァ書房、2016年。
- 『グローバル・ヒストリーの可能性』 山川出版社、2017年。
- パラット、ラヴィ他（原田太津男訳）「南アジアの編入と周辺化——一六〇〇—一九五〇年」 イマニュエル・ウォーラーstein責任編集（山田鋭夫他訳）『世界システム論の方法』、藤原書店、2002年、155~190頁。
- バリ、ユベール（赤松蔚日本語版監修）『パール——海の宝石』（兵庫県立美術館図録） ブックエンド、2012年。
- バンガート、ウィリアム（上智大学中世思想研究所訳）『イエズス会の歴史（上）』 中央公論新社、2018年（原著1972年）。
- ハンケ、ルイス（染田秀藤訳）『スペインの新大陸征服』 平凡社、1979年（原著1949年）。
- ピアソン、M. N.（生田滋訳）『ポルトガルとインド——中世グジャラートの商人と支配者』 岩波書店、1984年（原著1976年）。
- 平山篤子『スペイン帝国と中華帝国の邂逅——十六・十七世紀のマニラ』 法政大学出版会、2012年。

- 深見純生「宋時代の海域東南アジア」桃木至朗編『海域アジア史研究入門』岩波書店、2008年)、30~39頁。
- 藤原敬士『商人たちの広州——一七五〇年の英清貿易』東京大学出版会、2017年。
- フランク、アンドレ・グンダー(山下範久訳)『リオリエント——アジア時代のグローバル・エコノミー』藤原書店、2000年(原著1998年)。
- フリン、デニス(秋田茂・西村雄志編)『グローバル化と銀』山川出版社、2010年。
- ブローデル、フェルナン(浜名優美訳)『地中海』全5巻、藤原書店、1991~1995年。
- ベルグレイヴ、チャールズ D.(二海志摩訳)『ペルシア湾の真珠——近代バーレーンの人と文化』雄山閣、2006年(原著1960年)。
- 保坂修司「真珠の海——石油以前のペルシア湾(1・2)」『イスラム科学研究』第4号(2008年)、第6号(2010年)。
- ホプキンス、T. K./I. ウォーラーステイン(原田太津男訳)「一八〇〇年以前の世界——経済における商品連鎖」イマニュエル・ウォーラーステイン責任編集(山田鋭夫他訳)『世界システム論の方法』、藤原書店、2002年。137~154頁。
- ポメラント、ケネス/スティーヴン・トピック(福田邦夫・吉田敦訳)『グローバル経済の誕生——貿易が作り変えたこの世界』筑摩書房、2013年。
- マクニール、W. H.(佐々木昭夫訳)『疫病と世界史』新潮社、1985年(原著1976年)。
- 正岡哲治・小林敬典「アコヤガイ属の系統および適応放散過程の推定——真珠貝はどこから来てどこへ行くのか」猿渡敏郎編『泳ぐDNA』東海大学出版会、2007年。
- 増田義郎『新世界のユートピア』中央公論社、1989年。
- 松井佳一『真珠の事典』北隆館、1965年。
- 松月清郎『真珠の博物誌』研成社、2002年。
- 「特別企画 日本の真珠」アメリカ自然史博物館およびフィールド博物館企画『「パール」展』図録、国立科学博物館、2005~2006年、153~185頁。
- 松本宣郎他編『キリスト教の歴史』全2巻、山川出版社、2009年。
- 松森奈津子『野蛮から秩序へ』名古屋大学出版会、2009年。
- マン=ロト、マリアンヌ(染田秀藤訳)『イスパノアメリカの征服』白水社、1984年(原著1983年)。
- 水島司『グローバル・ヒストリー入門』山川出版社、2010年。
- 「グローバルエコノミーの形成とアジア」秋田茂編『アジアからみたグローバルヒストリー——「長期の18世紀」から「東アジアの経済的再興」へ』ミネルヴァ書房、2013年、63~81頁。
- 「19世紀アジアの農業開発の評価をめぐって」秋田茂編『「大分岐」を超えて』ミネルヴァ書房、2018年、137~178頁。
- 水島司編『アジア経済史研究入門』名古屋大学出版会、2015年。
- 宮田絵津子『マニラ・ガレオン貿易——陶磁器の太平洋貿易圏』慶應義塾大学出版会、2017

- 年。
- ミンツ、シドニー W. (川北稔・和田光弘訳) 『甘さと権力——砂糖が語る近代史』 平凡社、1988年 (原著 1985年)。
- メジャフェ、R. (清水透訳) 『ラテンアメリカと奴隷制』 岩波書店、1979年 (原著 1973年)。
- 桃木至朗編 『海域アジア史研究入門』 岩波書店、2008年。
- 森隆行 『現代物流の基礎 (第3版)』 同文館、2018年。
- 森安達也 『キリスト教史 III——東方キリスト教』 山川出版社、1978年。
- 諸田實 『フッガー家の時代』 有斐閣、1998年。
- モンテロ、ギリエルモ・モロン (ラテン・アメリカ協会) 『ベネズエラ史概説』 ラテン・アメリカ協会、1993年。
- 家島彦一 『海が創る文明——インド洋海域世界の歴史』 朝日新聞社、1993年。
- 『海域から見た歴史——インド洋と地中海を結ぶ交流史』 名古屋大学出版会、2006年。
- 山田篤美 『^{エルドラド}黄金郷伝説——スペインとイギリスの探険帝国主義』 中央公論新社、2008年。
- 「新世界の真珠の歴史的考察——オリエントに代わる真珠の産地の発見と都市形成のメカニズム」 『第三回全球都市全史研究会報告書』 総合地球環境学研究所、2010年。
- 『真珠の世界史——富と野望の五千年』 中央公論新社、2013年。
- 山本由方 「真珠介移植試験報告第一回試験」 農商務省農務局 『水産調査報告』 第1巻 (1893年)、53~76頁。
- 李惠薫 「マニラ・ガレオン貿易における中国人の登場とその役割——フィリピンにおける中国系メスティーソの生成を中心に」 『三田商学研究』 第58巻2号 (2015年6月)、179~197頁。
- リード、アンソニー (平野秀秋・田中優子訳) 『大航海時代の東アジア』 全2巻、法政大学出版局、1997年、2002年。
- 和田浩爾 『真珠の科学——真珠のできる仕組みと見分け方』 真珠新聞社、1999年。